

# 柏北部東地区 埋蔵文化財発掘調査報告書 6

— 柏市富士見遺跡 —  
縄文時代以降編 1

平成26年3月

独立行政法人 都市再生機構

公益財団法人 千葉県教育振興財団

# 柏北部東地区 埋蔵文化財発掘調査報告書 6

かしわ ふじみ  
— 柏市富士見遺跡 —  
縄文時代以降編 1



## 序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告書第728集として、独立行政法人都市再生機構の柏北部東地区土地区画整理事業に伴って実施した柏市富士見遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、隣接する駒形遺跡と同様、縄文時代前期に営まれた貝塚を伴う集落跡が発見され、今回報告する地区では僅かに時期をずらして3か所の集落が営まれたことがわかり、この地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願ってやみません。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成 26 年 3 月

公益財団法人 千葉県教育振興財団  
理 事 長 錦 織 總 夫

## 凡 例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による柏北東地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県柏市小青田字立山、小青田字富士見、船戸字富士見ほかに所在する富士見遺跡（遺跡コード217-026）である。このうち富士見遺跡A～C地区の縄文時代の成果について掲載した。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の期間、担当者などについては第1章に記載した。
- 5 本書の執筆分担は下記の通りである。

第1章、第2章第1節～第3節（遺物）、第2章第4節1・2、第3章第1節・第2節 主任上席文化財主事 大野康男

第2章第1節～第3節（遺構） 主任上席文化財主事 倉内郁子

第2章第4節3、第3章第3節 上席文化財主事 橋本勝雄

編集は大野と主任上席文化財主事 山口典子が行った。

なお、貝類・魚類の同定は小宮 孟が行い、整理作業にあたり池谷信之（沼津市教育委員会）、領塚正浩（市立市川考古博物館）、鈴木素行（（公財）ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社）各氏の御指導、御協力を得た。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構および柏市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 第1図に国土地理院1/25,000地形図「流山」（NI-54-25-1-2）・「守谷」（NI-54-25-1-1）を合成・縮小して使用した。
- 8 図版1の遺跡周辺航空写真は、京業測量株式会社による昭和48年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した座標は日本測地系に基づく平面直角座標（国家標準直角座標第Ⅱ系）で、図面の方位はすべて座標北である。
- 10 整理作業にあたり遺構番号を振りなおし、調査時の遺構番号との対照表を第2表に示した。
- 11 遺物に付した番号は、平面図・写真図版に共通して使用した。土器は遺構ごとの通し番号、そのほかは土製品・石製品類、貝刃（第107図）、石器類（第108図～第121図）でそれぞれ通し番号を付している。主要な遺物の出土位置は平面図・断面図に示した。図中では土器は「・」、石器をはじめとする土器以外の遺物は「□」で示し、土製品に「D」、石製品・玉類に「T」、石器に「S」をそれぞれの番号に冠して土器と区別した。

縄文時代の織維土器は、土器断面に「・」を付した。



# 本文目次

序文  
凡例

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査・整理の方法と概要	5
第2節	遺跡の位置と環境	9
1	遺跡の位置と地理的環境	9
2	周辺の遺跡	9
第3節	富士見遺跡の縄文時代概要	12
1	概観	12
2	縄文土器の分類	12
第2章	縄文時代の遺構と遺物	14
第1節	A地区の遺構と遺物	14
1	竪穴住居	14
2	陥穴	55
3	土坑	57
4	遺構外出土縄文土器	61
第2節	B地区の遺構と遺物	66
1	竪穴住居	66
2	陥穴	96
3	土坑	96
4	遺構外出土縄文土器	107
第3節	C地区の遺構と遺物	115
1	竪穴住居	115
2	陥穴	173
3	土坑	177
4	その他の遺構	183
5	遺構外出土縄文土器	192
第4節	その他の遺物	201
1	土製品・石製品類	201
2	貝刃	202
3	石器	205

第3章 まとめ	236
第1節 富士見遺跡の縄文時代前期の集落について	236
1 集落の概観	236
2 花積下層式期の集落	237
3 黒浜式期の集落	238
第2節 軽石製品について	238
1 概要	238
2 特徴	238
3 類例	239
4 用途について	239
第3節 縄文時代の石器	241
報告書抄録	巻末

## 挿 図 目 次

第1図 富士見遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第22図 SI-010(1)	41
第2図 柏北部東地区遺跡群位置図	3	第23図 SI-010(2)	42
第3図 グリッド分割図	5	第24図 SI-010(3)、SI-011、SI-014	44
第4図 調査地点と上層確認トレンチ設定図	6	第25図 SI-015(1)	46
第5図 富士見遺跡全体図	11	第26図 SI-015(2)	47
第6図 A地区遺構分布図	13	第27図 SI-016、SI-017	49
第7図 SI-001(1)	15	第28図 SI-018(1)	51
第8図 SI-001(2)	16	第29図 SI-018(2)	52
第9図 SI-002(1)	19	第30図 SI-019、SI-020	56
第10図 SI-002(2)	20	第31図 A地区縄文時代土坑(1)	58
第11図 SI-002(3)	21	第32図 A地区縄文時代土坑(2)	60
第12図 SI-003(1)	23	第33図 A地区縄文時代土坑(3)	61
第13図 SI-003(2)	24	第34図 A地区遺構外出土縄文土器(1)	63
第14図 SI-004	28	第35図 A地区遺構外出土縄文土器(2)	64
第15図 SI-005	29	第36図 B地区遺構分布図	65
第16図 SI-006	31	第37図 SI-021	67
第17図 SI-007(1)、SI-013	32	第38図 SI-022	68
第18図 SI-007(2)	33	第39図 SI-023	70
第19図 SI-008、SI-012(1)	35	第40図 SI-024	71
第20図 SI-012(2)	36	第41図 SI-025(1)	75
第21図 SI-009	38	第42図 SI-025(2)	76

第43图	SI-025 (3)	77	第79图	SI-056 (2)	147
第44图	SI-026 (1)、SI-027 (1)	80	第80图	SI-057	149
第45图	SI-026 (2)、SI-027 (2)、 SI-028、SI-029	82	第81图	SI-058	151
第46图	SI-030 (1)	84	第82图	SI-059、SI-060、SI-061	153
第47图	SI-030 (2)	85	第83图	SI-062	154
第48图	SI-031、SI-032	86	第84图	SI-063、SI-064	156
第49图	SI-033	88	第85图	SI-065 (1)	158
第50图	SI-034、SI-035、SI-036	90	第86图	SI-065 (2)	159
第51图	SI-037	92	第87图	SI-066、SI-067 (1)、SI-068、 SI-070 (1)	162
第52图	SI-038	94	第88图	SI-067 (2)、SI-070 (2)	163
第53图	SI-039、SI-040	95	第89图	SI-070 (3)、SI-069、SI-071	166
第54图	B地区縄文時代土坑 (1)	97	第90图	SI-072	167
第55图	B地区縄文時代土坑 (2)	99	第91图	SI-073	169
第56图	B地区縄文時代土坑 (3)	101	第92图	SI-074、SI-075、SI-076、SI-077、 SI-078、SI-079	172
第57图	B地区縄文時代土坑 (4)	104	第93图	SI-080 (1)	174
第58图	B地区縄文時代土坑 (5)	106	第94图	SI-080 (2)	175
第59图	B地区遺構外出土縄文土器 (1)	108	第95图	C地区縄文時代土坑 (1)	176
第60图	B地区遺構外出土縄文土器 (2)	110	第96图	C地区縄文時代土坑 (2)	179
第61图	B地区遺構外出土縄文土器 (3)	112	第97图	C地区縄文時代土坑 (3)	182
第62图	C地区遺構分布图	114	第98图	C地区縄文時代土坑 (4)	184
第63图	SI-041 (1)	116	第99图	C地区縄文時代土坑 (5)	185
第64图	SI-041 (2)、SI-042 (1)	118	第100图	SX-001、SX-002	186
第65图	SI-042 (2)	119	第101图	C地区貝層分布	187
第66图	SI-043	122	第102图	SX-003	188
第67图	SI-044、SI-045	125	第103图	C地区遺構外出土縄文土器 (1)	194
第68图	SI-046	127	第104图	C地区遺構外出土縄文土器 (2)	196
第69图	SI-047、SI-048	129	第105图	C地区遺構外出土縄文土器 (3)	198
第70图	SI-049 (1)	131	第106图	C地区遺構外出土縄文土器 (4)	199
第71图	SI-049 (2)	132	第107图	土製品・石製品類、貝刃	203
第72图	SI-050	134	第108图	縄文時代石器 (1)	209
第73图	SI-051 (1)	136	第109图	縄文時代石器 (2)	210
第74图	SI-051 (2)、SI-052 (1)	137	第110图	縄文時代石器 (3)	212
第75图	SI-052 (2)	139	第111图	縄文時代石器 (4)	214
第76图	SI-053 (1)	141	第112图	縄文時代石器 (5)	215
第77图	SI-053 (2)	142	第113图	縄文時代石器 (6)	217
第78图	SI-054、SI-055、SI-056 (1)	146			

第114図	縄文時代石器 (7)	218	第122図	富士見遺跡時期別遺構分布 (縄文時代)	236
第115図	縄文時代石器 (8)	219	第123図	富士見遺跡周辺の縄文時代前期遺構分布	237
第116図	縄文時代石器 (9)	220	第124図	軽石製品の擦り面	239
第117図	縄文時代石器 (10)	221	第125図	軽石製品	239
第118図	縄文時代石器 (11)	223	第126図	軽石製摩擦具の類例	240
第119図	縄文時代石器 (12)	224			
第120図	縄文時代石器 (13)	225			
第121図	縄文時代石器 (14)	226			

## 表 目 次

第1表	富士見遺跡発掘調査歴 (第1地点～第50地点)	4	第5表	魚類遺存体同定結果	191
第2表	富士見遺跡A～C地区遺構一覧 (縄文時代)	7	第6表	土製品・石器種類計測表	204
第3表	周辺の主な遺跡 (縄文時代)	10	第7表	縄文時代石器遺構別器種組成表	206
第4表	貝類同定結果	189	第8表	縄文時代石器石材別器種組成表	208
			第9表	縄文時代石器属性表	228
			第10表	軽石製摩擦具出土例	240

## 図 版 目 次

図版1	遺跡周辺航空写真		図版16	土坑 (4)	
図版2	竪穴住居 (1)		図版17	土坑 (5)	
図版3	竪穴住居 (2)		図版18	土坑 (6)	
図版4	竪穴住居 (3)		図版19	土坑 (7)	
図版5	竪穴住居 (4)		図版20	土坑 (8)	
図版6	竪穴住居 (5)		図版21	縄文土器 (1)	
図版7	竪穴住居 (6)		図版22	縄文土器 (2)	
図版8	竪穴住居 (7)		図版23	縄文土器 (3)	
図版9	竪穴住居 (8)		図版24	縄文土器 (4)	
図版10	竪穴住居 (9)		図版25	縄文土器 (5)	
図版11	竪穴住居 (10)		図版26	縄文土器 (6)	
図版12	竪穴住居 (11)		図版27	縄文土器 (7)	
図版13	土坑 (1)		図版28	縄文土器 (8)	
図版14	土坑 (2)		図版29	縄文土器 (9)	
図版15	土坑 (3)		図版30	縄文土器 (10)	

- 図版31 縄文土器 (11)
- 図版32 縄文土器 (12)
- 図版33 縄文土器 (13)
- 図版34 縄文土器 (14)
- 図版35 縄文土器 (15)
- 図版36 縄文土器 (16)
- 図版37 縄文土器 (17)
- 図版38 縄文土器 (18)
- 図版39 縄文土器 (19)
- 図版40 縄文土器 (20)
- 図版41 縄文土器 (21)
- 図版42 縄文土器 (22)
- 図版43 縄文土器 (23)
- 図版44 縄文土器 (24)
- 図版45 縄文土器 (25)
- 図版46 縄文土器 (26)
- 図版47 縄文土器 (27)
- 図版48 縄文土器 (28)
- 図版49 縄文土器 (29)
- 図版50 縄文土器 (30)
- 図版51 縄文土器 (31)
- 図版52 縄文土器 (32)
- 図版53 縄文土器 (33)
- 図版54 縄文土器 (34)
- 図版55 縄文土器 (35)
- 図版56 縄文土器 (36)
- 図版57 縄文土器 (37)
- 図版58 縄文土器 (38)
- 図版59 縄文土器 (39)
- 図版60 縄文土器 (40)
- 図版61 縄文土器 (41)
- 図版62 縄文土器 (42)
- 図版63 縄文土器 (43)
- 図版64 縄文土器 (44)
- 図版65 縄文土器 (45)
- 図版66 縄文土器 (46)
- 図版67 縄文土器 (47)
- 図版68 縄文土器 (48)
- 図版69 縄文土器 (49)
- 図版70 縄文土器 (50)
- 図版71 縄文土器 (51)
- 図版72 縄文土器 (52)
- 図版73 縄文土器 (53)
- 図版74 縄文土器 (54)
- 図版75 縄文土器 (55)
- 図版76 縄文土器 (56)
- 図版77 縄文土器 (57)
- 図版78 縄文土器 (58)
- 図版79 縄文土器 (59)
- 図版80 土製品・石製品類、貝刃
- 図版81 縄文時代石器 (1)
- 図版82 縄文時代石器 (2)
- 図版83 縄文時代石器 (3)
- 図版84 縄文時代石器 (4)
- 図版85 縄文時代石器 (5)
- 図版86 縄文時代石器 (6)
- 図版87 縄文時代石器 (7)
- 図版88 縄文時代石器 (8)
- 図版89 縄文時代石器 (9)

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要（第1～5図、第1・2表）

### 1 調査の経緯と経過

独立行政法人都市再生機構は、常磐新線（つくばエクスプレス）建設に関連して「柏北部東地区土地区画整理事業」を計画した。柏市北部に位置する事業予定地内には富士見遺跡のほか花前Ⅰ遺跡・花前Ⅱ遺跡・花前Ⅲ遺跡・矢船Ⅰ遺跡・矢船Ⅱ遺跡・館林Ⅱ遺跡・駒形遺跡・大松遺跡・原畑遺跡・小山台遺跡・寺下前遺跡・宮前遺跡・八反目台遺跡の14遺跡（以下、柏北部東遺跡群とする）が所在し、千葉県教育委員会とその取り扱いについて協議した結果、現状換地等により現状保存が可能な部分を除き記録保存の措置を講ずることとし、公益財団法人千葉県教育振興財団が委託を受けて発掘調査を実施することとなった。

事業に伴い、柏北部東遺跡群のうち原畑遺跡、駒形遺跡、大松遺跡について平成24年度までに5冊の発掘調査報告書を刊行している。今回報告するのは富士見遺跡の調査成果の一部で、第6冊目の報告書となる。

富士見遺跡では、平成12年度から平成24年度までで56地点にわたって発掘調査が行われ、縄文時代の遺構・遺物を中心に旧石器時代、古墳時代、中世～近世の遺構・遺物が多数検出された。整理作業は平成17年度から行われ、平成22年度に行われた第50地点までの上層の発掘調査の成果がその対象となった。

第50地点までの調査期間および担当者を第1表に示した。また整理の期間・担当者は下記のとおりである。

#### 平成17年度

期 間 平成17年4月1日～平成18年3月31日

調査研究部長 矢戸三男

調査課長 加藤修司

担当職員 上席研究員 横山 仁

内 容 水洗、注記、記録整理の一部

#### 平成18年度

期 間 平成18年4月1日～平成19年3月31日

調査研究部長 矢戸三男

西部調査事務所長 田坂 浩

担当職員 上席研究員 横山 仁

内 容 水洗、注記、分類・記録整理の一部

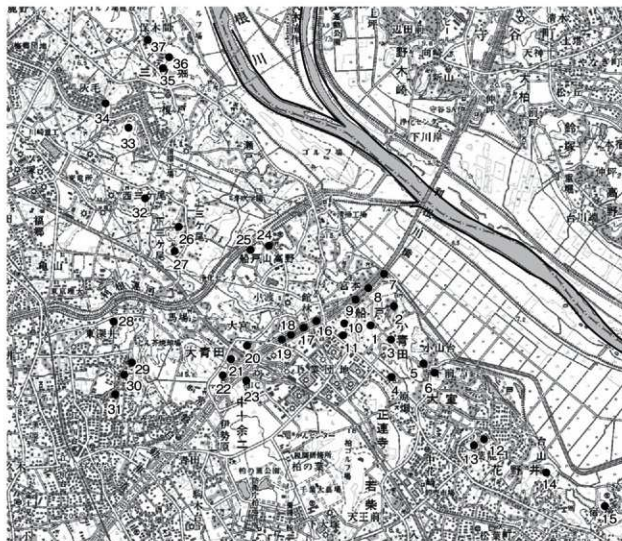
#### 平成19年度

期 間 平成19年4月1日～平成20年3月31日

調査研究部長 矢戸三男

整理課長 高田 博

担当職員 上席研究員 今泉 潔 西山太郎



第1図 富士見遺跡の位置と周辺の遺跡

番号は第3表に対応 (1/50,000)

内 容 分類の一部から実測・拓本の一部

平成22年度

期 間 平成22年4月1日～平成23年3月31日

調査研究部長 及川淳一

整理課長 高田 博

担当職員 上席研究員 西山太郎

内 容 実測・拓本の一部から実測・拓本・トレースの一部

平成24年度

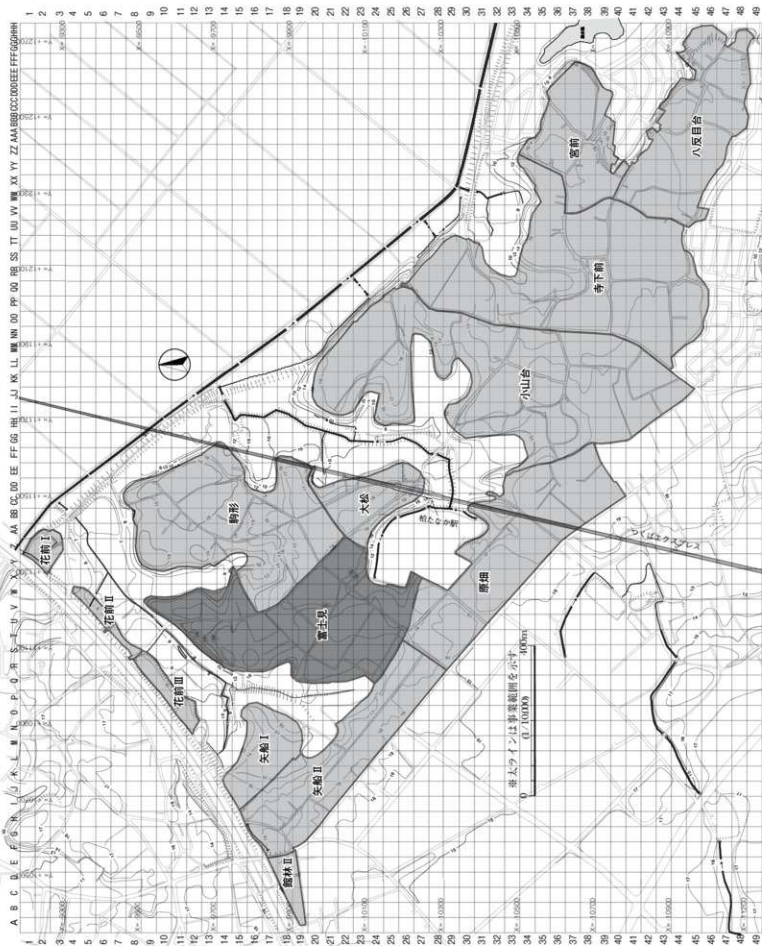
期 間 平成24年4月1日～平成24年12月31日

調査研究部長 関口達彦

整理課長 高田 博

担当職員 主任上席文化財主事 大野康男 倉内郁子

内 容 実測・拓本・トレースの一部から実測・拓本・トレース・挿図作成、原稿執筆の一部



第2図 柏北部東地区遺跡群位置図



第1表 富士見遺跡発掘調査歴(第1地点~第50地点)

調査年度	調査地点	調査期間	調査研究部長	所長(課長)	担当者	所在地	確認調査面積㎡		本調査面積㎡		本巻掲載		
							上層	下層	上層	下層			
平成12年度	1	13.08.09-13.03.29	沼津 豊	茂川淳一	横山 仁 中道義一	栢市小若田字山158-114小	5,542	600	324	3,408	108	○	
平成13年度	2	13.09.05-13.10.31	佐久間善	相坂 浩	渡藤由雄	栢市船戸字富士見137114小	2,620	322	104	0	0		
平成14年度	3	15.03.17-15.03.27	森本 勝	相坂 浩	船生一夫	栢市小若田字山230-114小	1,850	185	74	740	0	○	
	4	15.05.12-15.07.08				鴨田吉司	栢市小若田字山229-114小	3,006	340	120	1,840	0	○
平成15年度	5	15.07.09-15.10.31				鴨田吉司	栢市小若田字山191-114小	11,371	1,310	236	6,655	0	一部
	6	15.12.15-16.02.17	森本 勝	相坂 浩		鴨田吉司 織田貞則	栢市小若田字山18024小	8,114	546	256	1,930	0	○
	7	16.01.26-16.03.26				木下圭司	栢市小若田字山19233小	6,341	634	128	794	0	一部
	8	16.02.18-16.02.27				鴨田吉司 織田貞則 藤合幸雄	栢市小若田字山145番地14小	5,487	540	0	0	0	○
平成16年度	8	16.04.06-16.06.15				藤合幸雄	栢市小若田字山145番地14小	5,487	0	220	1,020	1,044	
	9	16.04.06-16.04.28				藤合幸雄	栢市船戸字富士見130214小	4,105	433	124	0	0	
	10	16.04.14-16.06.30				川島利通 鴨田吉司 船田 誠	栢市小若田字山139-114小	6,319	720	208	200	1,673	○
	11	16.06.17-16.10.15				鴨田吉司 岡田光広	栢市小若田字山157114小	6,567	1,717	280	1,477	792	○
	12	16.09.09-16.09.17				藤合幸雄	栢市小若田字山233-114小	241	241	8	0	0	×
	13	16.09.21-16.12.22	矢戸三男	相坂 浩		岡田光広	栢市小若田字山133-714小	4,137	410	132	1,400	540	○
	14	16.10.08-16.11.30				藤合幸雄	栢市小若田字山233-114小	1,714	265	72	900	0	○
	15	16.11.01-16.11.26				岡田光広	栢市小若田字山191-514小	466	466	20	496	0	○
	16	16.12.06-16.12.17				藤合幸雄	栢市小若田字山130-214小	963	400	34	0	0	○
	17	17.01.13-17.03.29				岡田光広	栢市小若田字山228-114小	2,648	264	104	2,100	0	○
	18	17.02.14-17.02.21				岡田光広	栢市小若田字山156	68	12	4	0	0	×
	19	17.03.03-17.03.15				岡田光広	栢市小若田字山193地先	200	200	8	0	0	○
	20	17.03.14-17.03.18				岡田光広	栢市小若田字山156	47	47	4	0	0	×
21	17.03.23-17.03.25				岡田光広	栢市小若田字山130-1	121	121	4	0	0	×	
平成17年度	22	17.06.01-17.06.09			中道義一	栢市小若田字山156地先	272	272	8	0	0		
	23	17.06.19-17.09.30			上屋壽一郎 岡田光広 中道義一	栢市船戸字富士見1396-114小	10,407	1,040	248	2,067	728		
	24	17.07.01-17.07.20	矢戸三男	相坂 浩	上屋壽一郎	栢市小若田字山15624小	467	467	20	0	0		
	25	17.08.03-17.11.30			上屋壽一郎 津松信隆	栢市小若田字山土見130-114小	1,929	250	90	1,040	0	○	
	26	17.11.01-18.01.25			上屋壽一郎	栢市船戸字富士見1336-1	1,708	177	72	1,768	0		
平成18年度	27	18.02.07-18.02.24			岡田光広	栢市船戸字富士見130-114小	548	548	64	0	0	○	
	28	18.03.01-18.03.27			津松信隆	栢市船戸字富士見1383-114小	2,082	269	96	0	0		
	29	18.05.01-18.05.19			渡藤高弘	栢市小若田字山133-3地	424	424	16	300	0	○	
	30	18.06.05-18.06.16			渡藤高弘	栢市小若田字山108地	810	810	16	308	0		
	31	18.07.18-18.08.16	矢戸三男	相坂 浩	南宮隆太郎 岡田光広	栢市小若田字山147地先	392	392	20	0	0		
	32	18.08.17-18.10.31			岡田光広	栢市船戸字富士見1363-814小	5,307	1,150	188	2,340	0		
	33	18.12.21-18.12.25			渡藤高弘	栢市船戸字富士見1335	36	36	4	0	0		
	34	19.03.05-19.03.14			岡田光広	栢市小若田字山171-114小	289	73	12	0	0		
平成19年度	35	19.06.21-19.07.06			岡田光広	栢市小若田字山105	311	311	28	0	0		
	36	19.07.23-19.08.03			池田大助 岡田光広	栢市小若田字山101	172	172	8	0	0		
	37	19.08.06-19.09.25			岡田光広	栢市小若田字山21524小	2,291	274	80	529	0		
	38	19.08.21-19.09.13	矢戸三男	茂川淳一	船生一夫 川藤聖文	栢市小若田字山191-114小	486	486	24	486	0	○	
	39	19.09.26-19.10.03			岡田光広	栢市船戸字富士見1336-214小	453	453	16	0	0		
	40	19.11.01-19.11.16			岡藤聖文	栢市小若田字山180番地14小	2,000	460	4	0	0		
	41	19.12.25-20.02.28			岡田光広	栢市船戸字富士見138214小	3,033	626	100	1,440	80		
平成20年度	42	20.02.13-20.03.27			石倉英治 岡田光広	栢市船戸字富士見1338-114小	4,060	528	76	417	0		
	43	20.03.11-20.03.18			船生一夫	栢市小若田字山191-1024小	427	427	16	0	0		
	42	20.04.06-20.04.23			岡田光広	栢市船戸字富士見1338-114小	4,060	0	0	579	0		
	44	20.04.24-20.06.18			岡田光広	栢市船戸字富士見1385-114小	3,040	360	96	670	0		
	45	20.08.19-20.10.10	大塚正義	茂川淳一	岡田光広	栢市船戸字富士見130714小	3,021	1,140	100	840	0		
	46	20.09.24-20.11.10			津松信隆	栢市船戸字富士見134824小	1,571	457	64	0	0		
平成21年度	47	20.11.11-20.12.19			津松信隆	栢市船戸字富士見1361	1,259	518	88	695	170		
	48	21.03.16-21.03.27			西野雅人	栢市船戸字富士見1354-2	515	515	16	0	0		
	49	21.12.22-22.01.21	茂川淳一	橋本勝雄	津松信隆	栢市船戸字富士見1386-1地先14小	2,762	293	88	482	0		
平成22年度	50	23.01.20-23.02.04	茂川淳一	橋本勝雄	関川 亮	栢市小若田字山206-114小	471	176	8	80	0		

平成25年度

期 間 平成25年7月1日～平成26年3月31日

調査研究部長 伊藤智樹

整理課長 今泉 潔

担当職員 主任・首席文化財主事 山口典子

内 容 実測の一部から報告書印刷・刊行

## 2 調査・整理の方法と概要

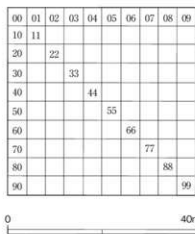
発掘調査の開始に当たり、粕北部東地区の調査対象区域全体に公共座標（旧座標 国家標準直角座標第Ⅸ系）を基準とした方眼網を設定した。方眼は40m×40mの区画を大グリッドとし、さらにその大グリッド内を4m×4mに分割し、100個の小グリッドに細分した。大グリッドは西から東へA、B、C、・・・、北から南へ1、2、3、・・・と記号を付け、両者を組み合わせてA1、B2、・・・と呼称した。小グリッドは北西隅を起点として西から東へ00、01、02、・・・、北から南へ00、10、20、・・・と番号を付け、南東隅が99となる（第3図）。これを大グリッドの名称と組み合わせ、例えばY19-24のように表記し、遺構・遺物の位置はこの方眼網に基づいて記録した。富士見遺跡は東西がQ～Z、南北が8～27の南北に長い範囲にあたる。

発掘調査はまず上層の確認調査・本調査を行い、続けて下層の確認調査・本調査を実施した。

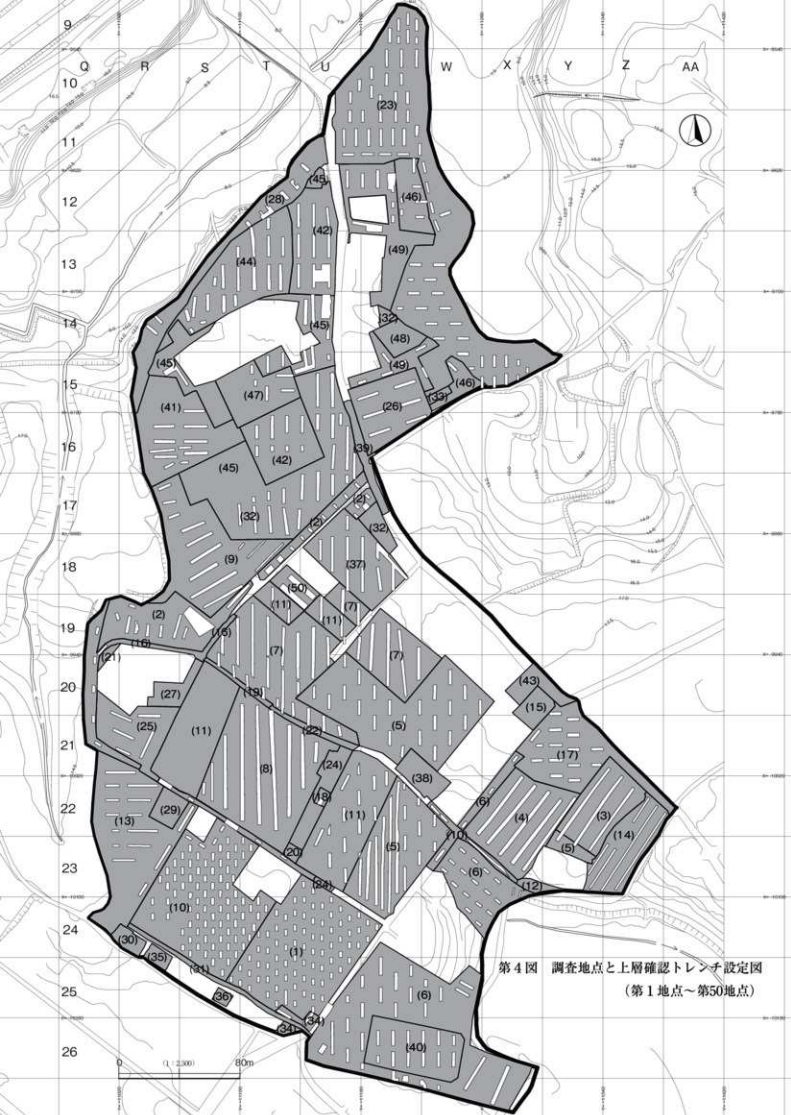
上層の調査は対象面積の10%を原則にトレンチを設定し、確認調査を行って遺構および遺物の分布状況を調査した上で、本調査範囲を決定して本調査を実施した。遺構の調査は表土除去後、覆土の土層観察用のベルトを設定して掘り下げ、土層断面図や平面図などの記録を作成した。上層の本調査終了後、調査対象面積の2%を原則にグリッドを設定して下層の確認調査を実施した。その結果、一定の石器の分布を認めたものについては、本調査範囲を決定して本調査を実施し、発掘調査を完了した。

上層本調査にあたっては、調査地点ごとに遺構番号を付した。遺構番号は遺構の種類ごとの通し番号とし、堅穴住居にSI、土坑等にSK、溝状遺構や野馬堀などにはSD、その他の遺構（遺物集中地点や地点貝塚など）にはSXを付すことを原則とし、調査地点名と組み合わせで表記した。たとえば第1地点の堅穴住居001は（1）SI-001、第2地点の土坑002は（2）SK-002のように表記される。遺構番号は、調査地点ごとに番号を付したため、整理作業の段階で通しの遺構番号に振りなおした。この際、同一遺構を隣接する地点で別々に調査したため、それぞれに遺構番号を付す場合があり、これらは一つの遺構番号に改めた。遺物の注記は調査時の遺構番号で行っている。新旧の遺構番号の対照は、第2表の遺構一覧を参照されたい。

検出された上層遺構のほとんどが縄文時代の遺構であったため、縄文時代の集落を単位として、遺跡全体を南から北へA～Eの5地区に区分し、地区単位で整理し、報告することにした。本書で報告するのは、富士見遺跡第1地点から第50地点までのA～C地区に位置する縄文時代遺構についてである。A～C地区においては縄文時代以外の時期の遺構が少ないこと、溝状遺構や野馬堀をはじめとする遺構は、台地全体に展開することから、これらについてはD・E地区の遺構とあ



第3図 グリッド分割図



第4図 調査地点と上層確認トレンチ設定図  
(第1地点～第50地点)

第2表 富士見遺跡A～C地区遺構一覧(縄文時代)

地区	遺構番号	地点	旧番号	種別	備考	地区	遺構番号	地点	旧番号	種別	備考
A	SI-001	(1)	SI-001	竪穴住居		C	SI-053	(5)	SI-005	竪穴住居	
A	SI-002	(1)	SI-002	竪穴住居		C	SI-054	(5)	SI-006	竪穴住居	
A	SI-003	(1)	SI-003	竪穴住居		C	SI-055	(5)	SI-007	竪穴住居	
A	SI-004	(1)	SI-004	竪穴住居		C	SI-056	(5)	SI-008	竪穴住居	
A	SI-005	(1)	SI-005	竪穴住居		C	SI-057	(5)	SI-012	竪穴住居	
A	SI-006	(1)	SI-006	竪穴住居		C	SI-058	(7)	SI-001	竪穴住居	
A	SI-007	(1)	SI-007	竪穴住居		C	SI-059	(14)	SI-001	竪穴住居	
A	SI-008	(1)	SI-008	竪穴住居		C	SI-060	(14)	SI-002	竪穴住居	
A	SI-009	(1)	SI-009	竪穴住居		C	SI-061	(14)	SI-003	竪穴住居	
A	SI-010	(1)	SI-010	竪穴住居		C	SI-062	(14)	SI-004	竪穴住居	
A	SI-011	(1)	SI-011	竪穴住居		C	SI-063	(14)	SI-005	竪穴住居	
A	SI-012	(1)	SI-012	竪穴住居		C	SI-064	(14)	SI-006	竪穴住居	
A	SI-013	(1)	SI-013	竪穴住居		C	SI-065	(14)	SI-007	竪穴住居	
A	SI-014	(1)	SI-014	竪穴住居		C	SI-066	(14)	SI-008	竪穴住居	
A	SI-015	(5)	SI-009	竪穴住居		C	SI-067	(14)	SI-009	竪穴住居	
A	SI-016	(5)	SI-010	竪穴住居		C	SI-068	(14)	SI-010	竪穴住居	
A	SI-017	(5)	SI-011	竪穴住居		C	SI-069	(14)	SI-011	竪穴住居	
A	SI-018	(6)	SI-001	竪穴住居		C	SI-070	(14)	SI-013	竪穴住居	
A	SI-019	(6)	SI-002	竪穴住居		C	SI-071	(15)	SI-001	竪穴住居	
A	SI-020	(11)	SI-001	竪穴住居		C	SI-072	(17)	SI-001	竪穴住居	
B	SI-021	(8)	SI-001	竪穴住居		C	SI-073	(17)	SI-002	竪穴住居	
B	SI-022	(8)	SI-002	竪穴住居	(11) SI-002と同	C	SI-074	(17)	SI-006	竪穴住居	
B	SI-023	(8)	SI-003	竪穴住居	(11) SI-005と同	C	SI-075	(17)	SI-007B	竪穴住居	
B	SI-024	(10)	SI-001	竪穴住居		C	SI-076	(17)	SI-008	竪穴住居	
B	SI-025	(10)	SI-002	竪穴住居		C	SI-077	(17)	SI-009	竪穴住居	
B	SI-026	(11)	SI-003A	竪穴住居		C	SI-078	(17)	SI-010	竪穴住居	
B	SI-027	(11)	SI-003B	竪穴住居		C	SI-079	(17)	SI-011	竪穴住居	
B	SI-028	(11)	SI-004	竪穴住居		C	SI-080	(38)	SI-001	竪穴住居	
B	SI-029	(13)	SI-001	竪穴住居		A	SK-001	(1)	SK-001	土塊	
B	SI-030	(13)	SI-002	竪穴住居	(29) SI-001と同	A	SK-002	(1)	SK-002	土塊	
B	SI-031	(13)	SI-003	竪穴住居		A	SK-003	(1)	SK-003	土塊	
B	SI-032	(13)	SI-004	竪穴住居		A	SK-004	(1)	SK-005	土塊	
B	SI-033	(25)	SI-001	竪穴住居		A	SK-005	(1)	SK-006	土塊	
B	SI-034	(25)	SI-002	竪穴住居		A	SK-006	(1)	SK-007	土塊	
B	SI-035	(25)	SI-003	竪穴住居		A	SK-007	(1)	SK-008	土塊	
B	SI-036	(25)	SI-004	竪穴住居		A	SK-008	(1)	SK-009	土塊	
B	SI-037	(25)	SI-005	竪穴住居		A	SK-009	(1)	SK-010	土塊	
B	SI-038	(25)	SI-006	竪穴住居		A	SK-010	(1)	SK-011	土塊	
B	SI-039	(25)	SI-007	竪穴住居		A	SK-011	(1)	SK-012	土塊	
B	SI-040	(25)	SI-008	竪穴住居		A	SK-012	(1)	SK-013	土塊	
C	SI-041	(3)	SI-001	竪穴住居		A	SK-013	(1)	SK-014	土塊	
C	SI-042	(3)	SI-002	竪穴住居		A	SK-014	(1)	SK-015	土塊	
C	SI-043	(3)	SI-003	竪穴住居	(14) SI-012と同	B	SK-015	(11)	SK-002	土塊	
C	SI-044	(4)	SI-001	竪穴住居	(17) SI-005と同	B	SK-016	(11)	SK-003	土塊	
C	SI-045	(4)	SI-002	竪穴住居		B	SK-017	(11)	SK-004	土塊	
C	SI-046	(4)	SI-003	竪穴住居		B	SK-018	(11)	SK-005	土塊	
C	SI-047	(4)	SI-004	竪穴住居		B	SK-019	(11)	SK-006	土塊	
C	SI-048	(4)	SI-005	竪穴住居		B	SK-020	(11)	SK-007	土塊	
C	SI-049	(5)	SI-001	竪穴住居	(11) SI-001と同	B	SK-021	(11)	SK-008	土塊	
C	SI-050	(5)	SI-002	竪穴住居		B	SK-022	(11)	SK-009	土塊	
C	SI-051	(5)	SI-003	竪穴住居		B	SK-023	(11)	SK-010	土塊	
C	SI-052	(5)	SI-004	竪穴住居		B	SK-024	(11)	SK-011	土塊	

地区	道構番号	地点	旧番号	種別	備考
B	SK-025	(11)	SK-012	土坑	
B	SK-026	(11)	SK-013	土坑	
B	SK-027	(11)	SK-014	土坑	
B	SK-028	(11)	SK-017	土坑	
B	SK-029	(11)	SK-018	土坑	
B	SK-030	(11)	SK-019	土坑	
B	SK-031	(11)	SK-020	土坑	
B	SK-032	(13)	SK-001	土坑	
B	SK-033	(13)	SK-002	土坑	
B	SK-034	(13)	SK-003	土坑	
B	SK-035	(13)	SK-004	土坑	
B	SK-036	(13)	SK-005	土坑	
B	SK-037	(13)	SK-006	土坑	
B	SK-038	(13)	SK-007	土坑	
B	SK-039	(13)	SK-008	土坑	
B	SK-040	(13)	SK-009	土坑	(13) SI-005と同
B	SK-041	(16)	SK-001	土坑	
B	SK-042	(19)	SK-001	土坑	
B	SK-043	(25)	SK-001	土坑	
B	SK-044	(25)	SK-002	土坑	
B	SK-045	(25)	SK-003	土坑	
B	SK-046	(25)	SK-004a	土坑	
B	SK-047	(25)	SK-004b	土坑	
B	SK-048	(25)	SK-005	土坑	
B	SK-049	(25)	SK-006	土坑	
B	SK-050	(8)	SK-002	土坑	(11) SK-021と同
B	SK-051	(27)	SK-001	土坑	
B	SK-052	(29)	SK-001	土坑	
B	SK-053	(27)	SK-002	土坑	
B	SK-054	(29)	SK-002	土坑	
B	SK-055	(29)	SK-003	土坑	
B	SK-056	(29)	SK-004	土坑	
B	SK-057	(27)	SK-003	土坑	
C	SK-058	(3)	SK-001	土坑	
C	SK-059	(3)	SK-002	土坑	
C	SK-060	(4)	SK-001	土坑	
C	SK-061	(5)	SK-005	土坑	
C	SK-062	(5)	SK-006	土坑	
C	SK-063	(5)	SK-007	土坑	
C	SK-064	(5)	SK-008	土坑	
C	SK-065	(5)	SK-009	土坑	
C	SK-066	(14)	SK-001	土坑	
C	SK-067	(14)	SK-002	土坑	
C	SK-068	(15)	SK-002	土坑	
C	SK-069	(15)	SK-005	土坑	
C	SK-070	(17)	SK-001	土坑	
C	SK-071	(17)	SK-002	土坑	
C	SK-072	(17)	SK-004A	土坑	
C	SK-073	(17)	SK-004B	土坑	
C	SK-074	(17)	SK-005	土坑	
C	SK-075	(17)	SK-006	土坑	
C	SK-076	(17)	SK-007	土坑	
C	SK-077	(17)	SK-008	土坑	

地区	道構番号	地点	旧番号	種別	備考
C	SK-078	(17)	SK-009	土坑	
C	SK-079	(17)	SK-010	土坑	
C	SK-080	(17)	SK-011	土坑	
C	SK-081	(17)	SK-012	土坑	
C	SK-082	(17)	SK-014	土坑	
C	SK-083	(17)	SK-016	土坑	
C	SK-084	(17)	SK-017	土坑	
C	SK-085	(17)	SK-018A	土坑	
C	SK-086	(17)	SK-018B	土坑	
C	SK-087	(17)	SK-019	土坑	
A	SK-088	(1)	SK-004	陥穴	
A	SK-089	(1)	SK-016	陥穴	
A	SK-090	(6)	SK-005	陥穴	
A	SK-091	(11)	SK-022	陥穴	
B	SK-092	(8)	SK-001	陥穴	
B	SK-093	(11)	SK-001	陥穴	
C	SK-094	(5)	SK-001	陥穴	
C	SK-095	(5)	SK-002	陥穴	
C	SK-096	(5)	SK-003	陥穴	
C	SK-097	(5)	SK-004	陥穴	
C	SK-098	(15)	SK-003	陥穴	
C	SK-099	(15)	SK-001	陥穴	
C	SK-100	(38)	SK-001	陥穴	
C	SX-001	(4)	SX-001	土器集中	
C	SX-002	(4)	SX-002	土器集中	
C	SX-003	(3)	SX-001	地点具塚	(4) SX-003と同
B	欠番	(11)	SI-002	竪穴住居	SI-022と同
B	欠番	(11)	SI-005	竪穴住居	SI-023と同
B	欠番	(11)	SI-006	欠番	シミ
B	欠番	(13)	SI-005	土坑	SK-040と同
B	欠番	(13)	SI-006	欠番	
C	欠番	(14)	SI-012	竪穴住居	SI-043と同
C	欠番	(17)	SI-003	欠番	風倒木
C	欠番	(17)	SI-004	欠番	風倒木
C	欠番	(17)	SI-005	竪穴住居	SI-044と同
C	欠番	(17)	SI-007	欠番	シミ
C	欠番	(17)	SI-012	竪穴住居	駒形SI-036と同
B	欠番	(29)	SI-001	竪穴住居	SI-030と同
B	欠番	(11)	SK-015	欠番	
B	欠番	(11)	SK-016	欠番	
B	欠番	(11)	SK-021	土坑	SK-050と同
C	欠番	(15)	SK-004A	欠番	シミ
C	欠番	(15)	SK-004B	欠番	シミ
C	欠番	(17)	SK-003	欠番	新しい
C	欠番	(17)	SK-013	欠番	風倒木
C	欠番	(17)	SK-015	欠番	
C	欠番	(4)	SX-003	地点具塚	SX-003と同
B	(18)				道構・遺物なし
B	(20)				道構・遺物なし
B	(21)				道構・遺物なし
B	(22)				道構・遺物なし
C	(12)				道構・遺物なし

わせて報告することにした。ただし、A～C地区に位置する溝状遺構などから出土した縄文時代の遺物については、遺構外出土遺物として本書で報告し、これらについては、注記と同じ旧遺構番号を出土位置として使用している。

遺構番号は前述のとおり、調査時と異なった番号を付しているが、遺構内の柱穴等の施設については極力調査時に付した番号を使用した。また、遺構内出土の土器の説明は遺構とともに記述したが、出土点数の少ない土器以外の土製品・石製品類、石器などは、集落内での傾向が把握しやすいよう種類ごとにまとめて第2章第4節で説明した。このほか貝類・魚類の同定結果は、第4・5表にまとめた。

本書で報告するのは、縄文時代竪穴住居80軒（A地区20軒、B地区20軒、C地区40軒）、陥穴13基（A地区4基、B地区2基、C地区7基）、縄文時代土坑87基（A地区14基、B地区43基、C地区30基）のほか、C地区で検出した縄文土器集中地点2か所と同じくC地区で確認した地点貝塚1か所である。

## 第2節 遺跡の位置と環境（第1・2図、図版1、第3表）

### 1 遺跡の位置と地理的環境

千葉県北部に展開する下総台地は、広範な関東平野の一部を形成しており、富士見遺跡が所在する台地はその北西部にあたる柏市北部に位置する。この下総台地北西部は、現在の利根川・江戸川水城を介して埼玉・茨城両県に接し、あたかも関東平野の中央部近くまで貫入するかのような位置にある。台地には大小河川やその支流によって開析された幾多の谷地形が入り込み複雑な地形を呈し、広大な平坦面を幾つかの台地に区分する。下総台地南東部は標高130m以上と最も高く、その付近では接する上総丘陵の標高を一部凌駕するものの、北西部に向かい漸次低平となり、遺跡近隣の県北西端では標高10m前後となる。

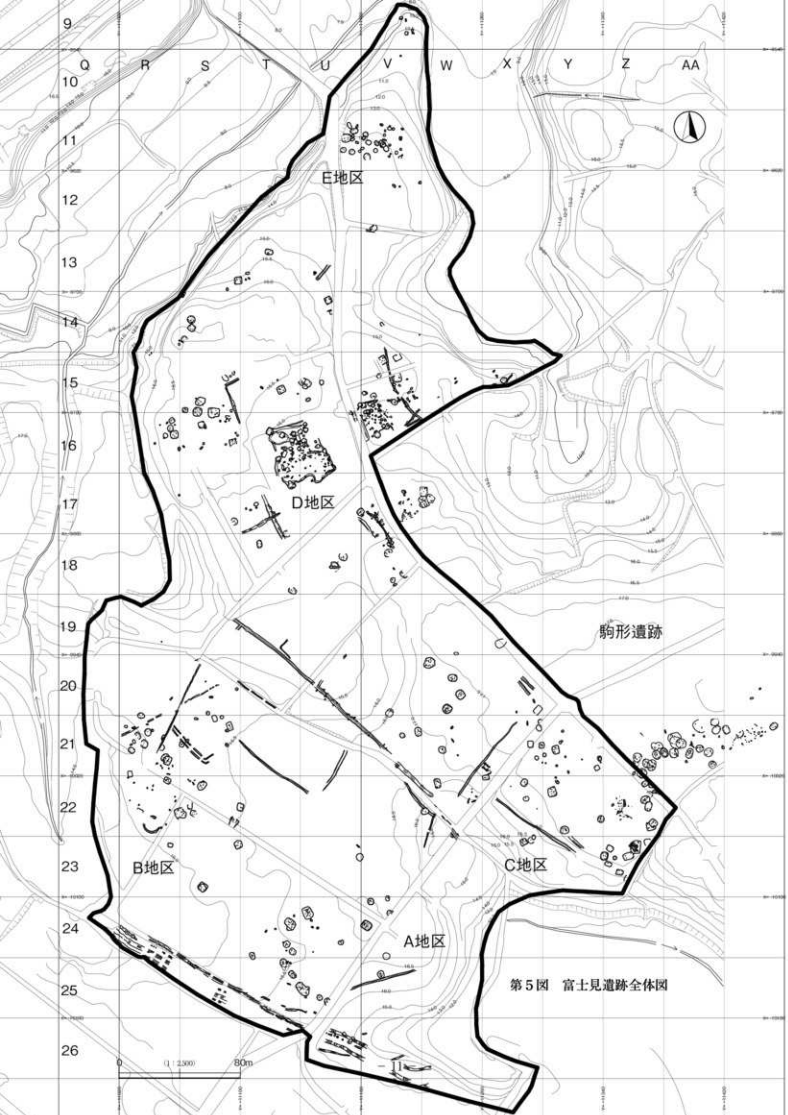
富士見遺跡周辺の台地は標高13m～18mを測り、沖積層からなる低地との比高は最大でも8mを超えることはない。この台地は現在、利根川から南西方向に湾入する二つの支谷に挟まれた地形を呈す。周辺一帯は江戸期の利根川東遷以前、小貝川に合流していた古常陸川の水系にあったといえ、古鬼怒湾に属する古常陸川湾奥部の柏・我孫子低地の北西端に面している。いわゆる縄文海進の盛期には、付近の古常陸川谷に谷奥干潟が形成されていたと考えられている。胸形遺跡・大松遺跡を含めた台地は南西部を基部とし、柏・我孫子低地に向かって北東側に半島状に突出しており、富士見遺跡はこの台地の北西部を占めている。大松遺跡と連続する東側と、胸形遺跡と分別される北側にはさらに小支谷が湾入している。

### 2 周辺の遺跡

時代別概要については、『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書1』、本遺跡の主要な時期である縄文時代前期を主とした概要については、『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2』『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書3』でそれぞれ既述しているため、ここでは簡単に記述する。

富士見遺跡を含む事業地内の14遺跡は、古鬼怒湾区古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地（以下、柏・我孫子低地とする）の水系に属している。隣接する胸形遺跡では縄文時代早期縄島古式期を主体とする集落跡が検出されたが、本遺跡では僅かに炉穴が検出された程度である。本遺跡で主体となる縄文時代前期黒浜式期の遺構・遺物を検出した柏・我孫子低地に属する近隣の遺跡は、原畑遺跡、胸形遺跡、大松遺跡、小山台遺跡、花前Ⅰ遺跡、花前Ⅱ遺跡、矢船Ⅰ遺跡、矢船Ⅱ遺跡をあげることができる。原畑遺跡は刷毛目状沈線を施す土器（SI-011）、環付末端縄文を施す土器（SI-005）が出土するなど、黒浜式の中でも古い様相を残す時期の集落である。胸形遺跡では花積下層式期から浮島・興津式期までの各型式の土器が





第5図 富士見遺跡全体図



出土しており、前期初頭から後半までの広い時期で集落が営まれている。大松遺跡の中心は縄文時代中期の集落だが、駒形遺跡・富士見遺跡と隣接する遺跡北西寄りには黒浜式期を中心に関山Ⅱ式期から諸磯・浮島式期の集落が営まれ、古常陸川から湧入する二つの小文谷に囲まれた台地は、早期後半から前期後半まで連続と集落が営まれたと想像できる。

#### 参考文献

- (財)千葉県教育振興財団 2008「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書1-大松遺跡-旧石器時代編」  
 (財)千葉県教育振興財団 2009「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2-柏市駒形遺跡-縄文時代以降編1」  
 (財)千葉県教育振興財団 2011「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書3-柏市原畑遺跡-縄文時代以降編1」  
 (財)千葉県教育振興財団 2011「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4-柏市大松遺跡-縄文時代以降編1」  
 (公財)千葉県教育振興財団 2013「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書5-柏市駒形遺跡-縄文時代以降編2」

### 第3節 富士見遺跡の縄文時代概要

#### 1 概観

富士見遺跡は縄文時代の遺構を主体としており、集落のまとまりからA～Eの5地区に区分することができる。各地区とも縄文時代前期前半の黒浜式期が集落の中心となり、花積下層式期から興津式期まで時期による盛衰はあるものの、縄文時代前期を通じて集落が営まれたことがわかっている。A～C地区で検出した80軒の竪穴住居のうち、中期と確認されたのは1軒で、これ以外は前期に営まれている。

また、柏北部東地区遺跡群では前期集落設営時期を通じて、遺構内貝層が形成されているが、富士見遺跡でも例外ではなく、今回もこの時期の貝サンプルが追加され、生産・居住様式の解明に向けたデータの集積がなされた。

#### 2 縄文土器の分類

本報告に掲載した出土土器の説明に際し、事実記載のための便宜的分類を提示する。遺構外出土土器についてはこの分類順で説明した。今回の調査では早期撚糸文土器から後期後葉まで断続的に出土しているが、主体は黒浜式を中心とした前期前半の土器である。なお、今回の報告では出土していない土器型式もあるが、富士見遺跡D・E地区や隣接する駒形遺跡との整合性を鑑み分類として提示した。

第1群 早期の土器	第3群 中期の土器
1類 撚糸文系土器	1類 五領ヶ台式
2類 沈線文系土器	2類 阿玉台式
3類 条痕文系土器	3類 勝坂式
第2群 前期の土器	4類 中峠式
1類 花積下層式	5類 加曾利E式
2類 ニツ木式	第4群 後期の土器
3類 関山式	1類 称名寺式
4類 黒浜式	2類 堀之内式
5類 浮島式・興津式・前期末縄文土器	3類 加曾利B式・曾谷式
6類 諸磯式・十三菩提式	4類 安行式



第6图 A地区遺構分布图

## 第2章 縄文時代の遺構と遺物

### 第1節 A地区の遺構と遺物（第6図）

A地区は遺跡の南西部に位置し、原畑遺跡と矢船Ⅱ遺跡に隣接する。第1地点・第5地点・第6地点・第40地点にあたり、大グリッドT24・25、U23～26、V23～26の範囲が該当する。この地区は古常陸川谷から貫入する小支谷の東に面した標高15m～17m前後の台地縁辺部に当たる。検出された遺構は、竪穴住居20軒、陥穴4基、土坑14基である。

竪穴住居19軒は、直径60mの環状に分布し、1軒が北側に離れて位置する。土坑も竪穴住居周辺に分布する。

#### 1 竪穴住居

##### SI-001（第7・8図、図版2・21・31）

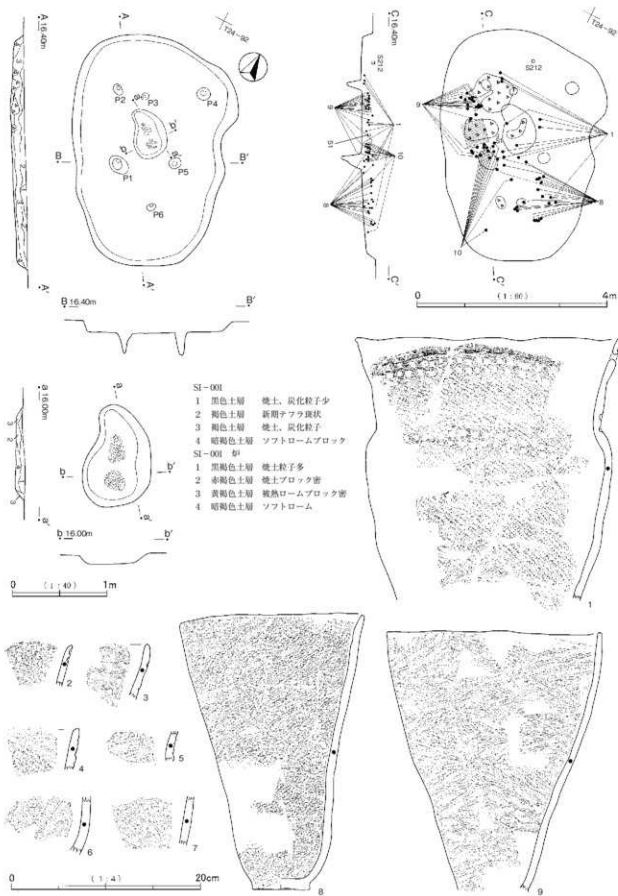
T25-02付近に位置する。平面形は4.86m×3.20mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.24mを測る。床面は中央に向けて緩やかに低くなり、また壁際の高さは南側が僅かに高い。炉は中央から北寄りにあり、規模は1.04m×0.68mで、床面から0.10m窪んでいる。火床部は2か所に分かれ、どちらも焼土が堆積して、被熱痕跡が顕著である。柱穴と思われるピットは6基検出され、床面からの深さは、北側のP2～P4は0.26m～0.29m、P1、P5は0.45m、0.50m、P6は0.16mである。床面直上に4か所的小ブロックに分かれた貝層を検出した。厚さは0.22mを測る。このうち炉西側の貝ブロック0.5m四方をコラムサンプルとして上面から0.1mの厚さで4層採取している（第4表）。この量はブロックの50%強を占め、ハマグリを主体としたものであった。

遺物は多く出土したが、壁周辺や炉付近からの出土が少ない傾向にある。8～10はほぼ完形に復元できた。

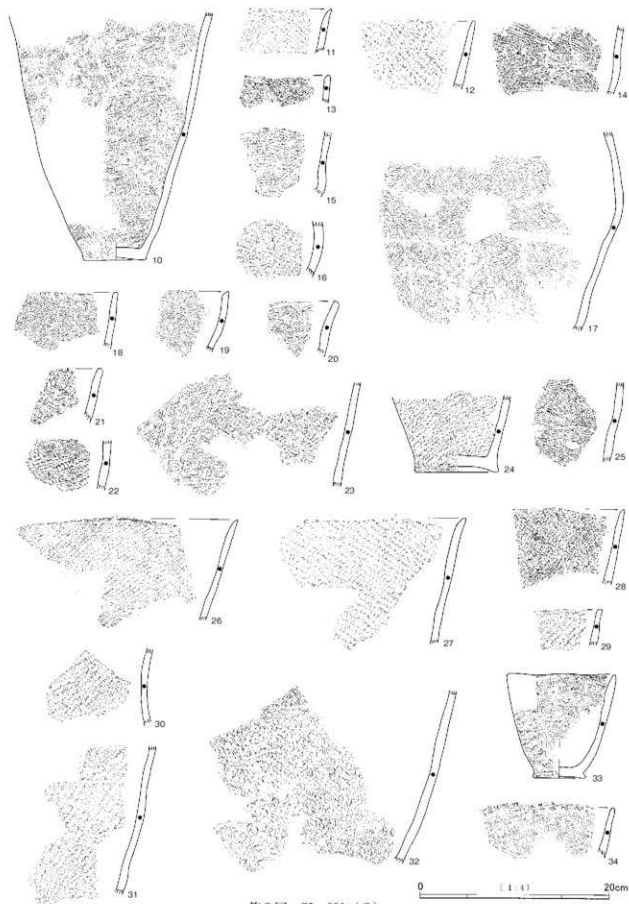
1～3は器面に連続刺突文が施されているものである。1は胴部上位が大きくくびれる土器で、推定口径28.4cm、現存高27cmを測る。口縁部は緩く波状を呈するが、器面の凹凸も多く、単位のある波状口縁であったかは不明である。口唇部は上から強くナダられ、口唇部が外側に粘土紐状に突出し、端部を平坦に調整する。口縁部およびくびれ部に各2条の連続刺突文を巡らせ、口縁部は附加条1種L+L1本を、胴部は単節RLの縄文を施している。内面には粗い横方向の調整痕が残されている。胎土への繊維の混入は中程度である。2は波状を呈する口縁部の破片で、口縁部に沿って2条の連続刺突文が巡らされる。地文は単節RLの縄文で、内面は丁寧に磨かれている。3も口縁部の破片で、現存部には3条の連続刺突文が確認できる。器面には横方向の粗い調整痕が残されている。繊維の混入は中程度である。

4・5は半截竹管の結節沈線が施されるもので、4は口縁部の破片である。いずれも破片のため文様構成は不明だが、斜行する結節沈線が認められることから、口縁部文様帯を飾るものと考えられる。6・7は斜格子文を密に施すものである。沈線の間隔が2種あり、狭いものは半截竹管とみられる。いずれも繊維の混入は中程度である。

8・9・11～24は附加条縄文が施され、それ以外の施文がないものである。8はほぼ完形に復元できた。口径19.5cm、底径6.0cm、器高29.0cmを測る胴長の土器である。口唇部の調整は雑で、5mmまでの幅で不規



第7図 SI-001 (1)



第8圖 SI-001 (2)

則に上下する。外面は横方向の粗い調整の上に軸は不明だが附加条1種L2本を全面に施している。底部は突出するが外面に施文はなく、丁寧に磨かれている。胴部下半は被熱のためか、赤化している。繊維の混入は中程度である。9は底部を欠損するが、それ以外はほぼ完形に復元できた。口径22.7cm、現存底径7.6cm、現存高27.3cmを測る。口縁部は不規則に上下し、口唇は薄く仕上げられ、最終的に横方向に丁寧な調整を施し、端部を平坦に調整する。外面は全面に附加条1種L+L2本を施し、菱形の効果を出している。菱形文様は図正面に上下3段合計7か所に描出されるものの、他の面では図正面の斜交施文を踏襲し、菱形とはならない。内面は比較的丁寧に横方向に磨かれている。繊維の混入は中程度である。

11~24は破片資料である。施文は破片の部位により、斜行、羽状、菱形の様相がみられる。

11~15は附加条1種、16は附加条2種でL2本を附加した縄文である。このうち11~13は口縁部の破片で、11・12は同一個体の可能性がある。口縁部は不規則に上下し、口唇部は薄く仕上げられている。施文は外面端部まで及び、口唇部は内側から横方向に調整されている。なお、11は施文変換点にミミズ腫れ状の隆起があるが、これは貼り付けによるものである。14~17は胴部の破片で、14・15は底部に近い位置である。16は施文変換点に細く粘土の隆起がみられる。17は胴部に膨らみをもつ器形で、現存部分に菱形効果の施文がみられる。

18~20・24は附加条1種、21~23は附加条2種でR2本を附加する。このうち18~20は口縁部の破片で、口唇部は18・19が内側から、20・21は端部を調整して仕上げている。22・23は胴部破片、24は底部破片である。24は若干上げ底となり、外面は磨いている。25はR1本を附加する。

10・26~32は縄文のみが施されている土器である。10は口縁部を欠損するが、現存高26.1cm、底径6.5cmを測る。器面は凹凸があり、粘土組接合部を横方向に強くナデた上に、無節Rの縄文を全面に施している。底部は中央が窪み外面を磨いている。26~29は口縁部の破片で、口縁は微妙に上下する。口唇部はいずれも薄く仕上げられ、27は端部を磨いている。また、26は端部まで縄文を施しておらず、幅1cm程度の無文帯となる。30~32は胴部の破片で、粗い縄文が施されている。なお、26・28~30が単節LR、27・31・32は同RLである。

33・34は無文の土器で、33は全体の60%が遺存し、口径11.3cm、底径5.3cm、器高11.0cmの小型の土器である。外面は横方向の調整が観察でき、底部は被熱のためか脆弱である。34は33と同一個体の可能性もあるが、現存部分の口径は33より小さいとみられる。

図示した土器はすべて黒浜式で、いずれも多めに繊維を混入し、附加条縄文のみを施す土器の割合が高い。土器以外にコラムサンプル中から貝刃1点（第107図44）、覆土中から石礫1点（第108図1）と側面調整礫2点（第118図211・212）を出土した。

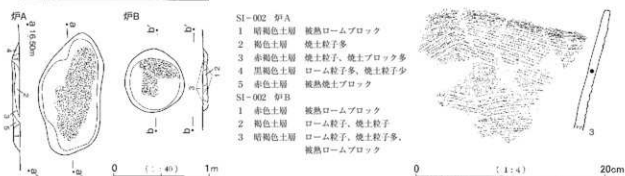
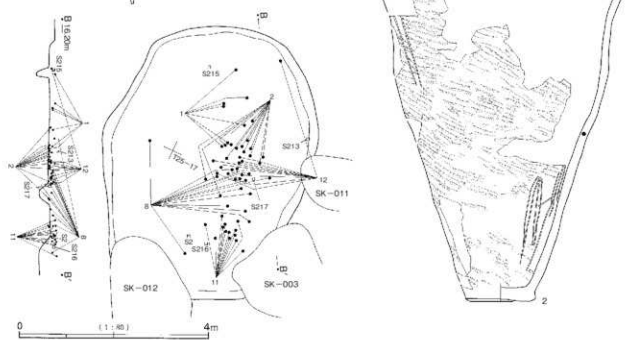
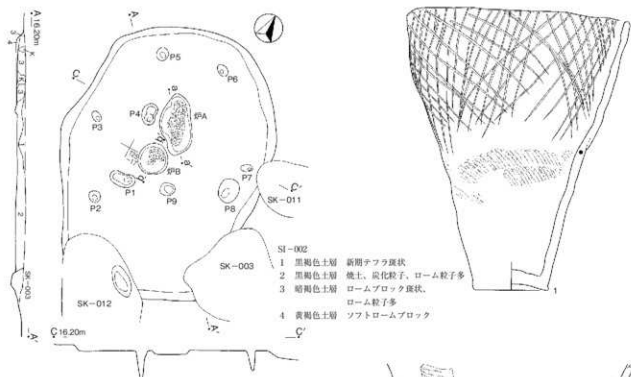
SI-002（第9~11図、図版2・21・22・31~33）

T25-17付近に位置する。平面形は5.80m×4.35mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.19mを測る。縄文時代の土坑SK-003、SK-011、SK-012と重複している。土層断面の観察から新旧関係は（IH）SI-002→（新）SK-003であるが、SK-011、SK-012との新旧関係は確認できなかった。炉は作り替えたためか、近接して住居北寄りに2か所設けられている。規模は北側の炉Aが1.30m×0.65m、南側の炉Bは0.63m×0.60mを測る。どちらにも被熱痕跡が認められるが、使用頻度は炉Aの方が高いと思われる。柱穴と思われるピットは10基検出された。炉の周辺に3基あり、そのほかは平面形に沿った配置となる。床面からの深さは、炉の南側では0.86m~1.48mと深く、北側では0.31m~0.64mの範囲に収束する。

遺物はかなり多く出土しているが、西壁寄りには少ない傾向にある。特に集中するのは2基の炉の東側からP2・P8の南側にかけてで、完形もしくは全体が推定できるところまで復元できた1・2・8・11は、大部分がこの範囲から出土している。

1～7は沈線、平行沈線、半截竹管による施文がある土器である。1はほぼ完形に復元できたもので、口径23.6cm、底径7.8cm、器高29.8cmを測る。底部から直線的に立ち上がり、口縁部が内湾気味に開く深鉢形を呈し、器面に凹凸がある。口縁部は微妙に上下しており、口唇端部を平坦に調整する。外面上半は斜交沈線を口縁直下から施すが、右上から左下方向に細かく沈線を全周に施したのち、左上から右下へ沈線を粗雑に加えている。胴部中位には無節Lの縄文が施されているが、相対する両側に限られ、全周していない。器面は上半を横方向に調整し、縄文施文部分の上を横方向に磨いている。底部は上げ底となり、やはり磨かれている。繊維を中程度含む。2は口縁部および胴部の70%程度を欠損し、底径7.4cm、現存高33.0cmを測る。地文は無節Lの縄文であるが、胴部上半および胴部下半の一部に雑な平行沈線を垂下させている。内面は口縁部近くを横方向に、胴部中位以下を縦方向に調整している。胎土への繊維の混入は中程度である。3は口縁部の破片で、波状を呈する。施文は波頂部を基点とした斜行平行沈線を密に施し、口縁下に菱形の効果を描出している。口唇部は端部を平坦に調整する。胎土への繊維の混入は中程度である。4は胴部上半が40%程度遺存している。現存部分は円筒状に立ち上がり、口縁部と胴部中位の径に大きな違いがない。推定口径22.0cm、現存高17.0cmを測る。口唇部の調整は雑で、現存部左側は薄く内面から仕上げられるが、右側は外側へ肥厚している。器面は地文に無節Lの縄文を不規則に施文した上に、規則性なく斜行沈線を施している。胎土への繊維の混入は多い。5は胴部破片で、外面には半截竹管による斜交沈線が施され、現存部だけを見ると鋸歯状にみえる。胎土への繊維の混入は中程度である。6は口縁部破片で、現存部分から小型の土器と考えられる。口縁部は不規則に小さく上下し、器面の凹凸も多い。器厚は0.5mm前後と比較的薄く、胎土への繊維の混入も少ない。器面は口縁直下から雑な斜格子文を施し、地文は部分的に附加条縄文が施されている。7は口縁部の破片で、口縁に沿って竹管による連続刺突文が施されている。

8～40は地文となる縄文のみが施されているものである。8は全体の50%程度の遺存で、底部は欠損している。口径24.4cm、現存高32.6cmを測り、底部近くですままるが、胴部は比較的まっすぐに開く土器である。口縁部は不規則に上下し、器面も凹凸がある。口唇部は内側から調整され、薄く仕上げられている。器面は口縁部から底部まで全面に附加条1種L+R2本/R+L2本を羽状に施し、横帯施文を意識したのか、縦に7段の構成となる。施文の変換点に粘土の隆起や粘土紐の貼付はみられないが、数か所で縦方向の調整が認められる。内面は横方向に粗く磨かれている。胎土への繊維の混入は中程度である。9は全体の20%程度の遺存で、底部は欠損している。口径13.0cm、現存高13.0cmの小型の土器である。口縁部は端部を調整するが、不規則に上下し、器面の凹凸も目立つ。器面は口縁部から底部近くまで施文方向を変えているが、8のような整った羽状とはなっていない。内面は横方向に粗く磨く。胎土への繊維の混入は多い。10は口縁部下が緩くくびれる土器で、推定口径22.2cmである。口唇部は端部をしっかりと平坦に調整し、端部を連続して上方から押圧している。器面は附加条1種R+R2本/L+L2本を羽状に施し、遺存部には菱形の効果を描出している。また、施文変換点の一部に縦方向の粘土隆起が認められる。内面は横方向に粗く磨き、繊維の混入は中程度である。11は口縁部の50%程度と底部を欠損している。底部からほぼ直線的に開く土器で、口径22.4cm、現存高26.6cmを測る。口縁部は不規則に上下するが、4単位の緩い波

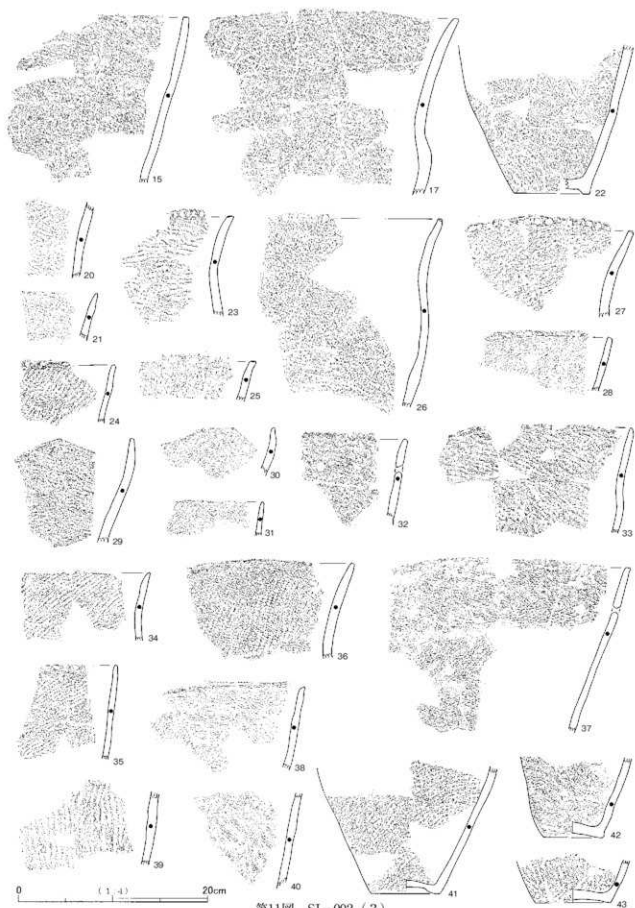


第9図 SI-002 (1)





第10圖 SI-002 (2)



第11圖 SI-002 (3)

状となる。器面には粗い附加条縄文を全面に、まばらに施している。内面は器面の状態が悪く、調整は不明である。胎土には繊維を中程度含む。12は全体の40%が遺存している。口縁部下でくびれる土器で、推定口径34.7cm、現存高36.5cm、推定底径12.5cmと、底径の割に口径が大きい。口縁部は不規則に上下し、端部を平坦に調整する。器面は附加条1種R+R1本を施すが、底部近くに単節RLの縄文を1段施している。内面は横方向に磨いている。胎土は繊維を多く含む。13は口縁部の30%程度が遺存している。推定口径28.0cmを測り、朝顔形となる。口唇部は工具で刻み、外面は斜位に粗い無節Lの縄文を施す。内面は口縁部が横方向、それ以下を縦方向に調整している。胎土への繊維の混入は中程度である。

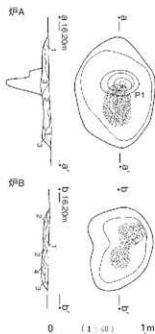
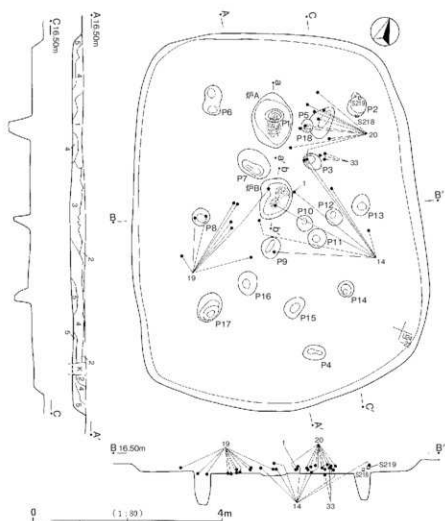
14~16は器面に斜位の粗い縄文をまばらに施すものである。14は口縁部から底部直上まで、全周の約20%が遺存している。口唇部は連続して押圧され、粘土が外面に押されている。内面は上半を横方向、下半を縦方向に磨いている。15・16も口縁部の破片である。胎土への繊維の混入は中程度である。

17~43は破片である。このうち17~22は網目状燃糸文を施す。22は底部の破片で、底径8.0cmを測る。底部は上げ底となり、底部にも施文されているようだが、遺存度が低く詳細は不明である。繊維の混入は少ない。23~28は口縁部の破片で、口唇部に装飾がある。23は口縁部が外反し、端部を平坦に調整し工具で刻む。外面は無節Lの縄文を施し、繊維の混入も比較的多い。24~28は工具により口唇部を押圧するもので、24は内側からの調整で端部を薄く仕上げているが、そのほかは端部を平坦に調整し、25は外側へ肥厚する。外面は28が燃糸文Lを羽状に施文するが、他の破片は現存部分をみる限り同一方向への施文である。繊維の混入は少ない。29~38も口縁部の破片であるが、口唇部に装飾のないものである。29・30は口縁部が整った波状となるもので、29は明瞭に頂部を有する。外面には斜行する附加条縄文が施され、繊維の混入は多い。31・34は口縁部を内側から調整し、薄く仕上げたものである。31は附加条1種R+R2、34は無節Rの縄文を斜位に施す。32・33・35・36は口唇部を丸く収めるものである。このうち32・35は幅の違いはあるものの、口縁部に無文帯を巡らせている。また35は単節LRの縄文を施した後に、縦方向に長さ9mmの細い粘土紐を貼り付けている。33は無節Rを、36は単節LRの縄文を施し、33は繊維の混入が多い。37・38は口唇部を平坦に調整するものである。ともに附加条1種R+R2本/L+L2本を不規則な羽状に施している。また、37は縄文施文後に横方向の調整を行い、口縁部に無文帯を作る。繊維の混入は中程度である。39・40は胴部破片である。39は無節Rを斜位に、40は燃糸文Lを羽状に施す。41~43は底部である。深淺あるが、いずれも上げ底となり、底径は41が6.9cm、42が6.6cm、43が7.8cmを測る。底部外面への施文はなく、粗く磨かれている。胴部外面は41に細かい格子状の施文がみられ、磨りのない原体による施文かと思われる。42は縄文施文のようであるが、器面の状態が悪く十分に観察できない。また、現存部分に爪によるものと思われる刺突が横方向に並んで認められる。43は無節Rの縄文を羽状に施している。いずれも繊維の混入は中程度である。

出土土器は黒浜式に比定でき、1~3のように沈線施文の土器がみられる。土器以外に石蕨1点(第108図2)、側面調整礫5点(第118図213~217)を出土した。

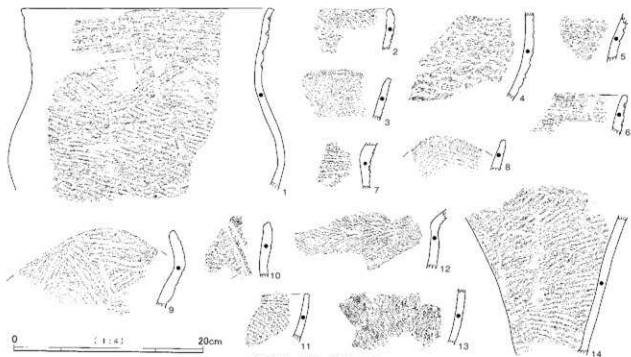
SI-003(第12・13図、図版2・22・33・34)

U24-021付近に位置する。平面形は8.00m×6.15mの隅丸長方形で、確認面からの深さは0.27mを測る。炉は2か所に設けられている。北寄りの炉Aは規模が1.15m×0.85m、中央の炉Bは0.77m×0.65mを測る。いずれにも被熱痕跡が認められる。炉Aの下に床面から0.49mの深さのP1が確認されたことから、炉の作り替えと柱の建て替えが考えられる。柱穴と思われるピットは炉の周辺を中心に17基検出された。P2、

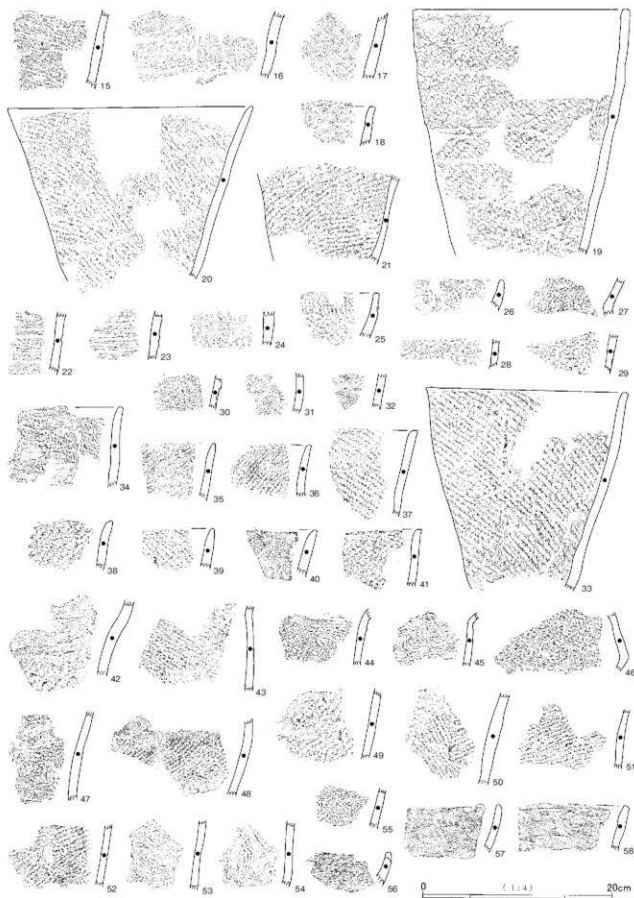


SI-003

- 1 黒褐色土層 新期ナツク様状、ローム粒子多、炭化粒子、焼土粒子
  - 2 黒褐色土層 新期ナツク様状
  - 3 黒褐色土層 焼土粒子多
  - 4 暗褐色土層 ロームブロック
  - 5 暗褐色土層 軟質ロームブロック多
- SI-003 伊
- 1 黒褐色土層
  - 2 暗褐色土層 焼土粒子少
  - 3 赤褐色土層 焼土ブロック多
  - 4 黒褐色土層 焼土粒子多、  
焼熟ロームブロック



第12図 SI-003 (1)



第13圖 SI-003 (2)

P6、P14、P17が対角線上に位置し、そのほかはP4を除いてその内側に位置する。北側隅のP2が床面から深さ1.11mを測り、これ以外は深さ0.27m～0.74mの範囲に収束する。

遺物は多く出土し、住居北西隅寄りでは少ない傾向にある。また、径がわかる程度に復元できた14・20・33は炉Bの周辺から北東隅にかけて出土している。

1～9は半載竹管等により平行沈線、コンパス文、結節沈線、連続刺突文を描くものである。1は胴部が丸みを帯び、口縁部下でくびれる土器で、推定口径26.7cmを測る。口唇部は端部を平坦に調整する。口縁上部は半載竹管を使用した結節沈線で鋸歯状文を横位展開させる。口縁に沿って3条の結節沈線を巡らせ、3条1単位で工具を上から内、外、内と使い分けている。その下には、同一工具で2条一組の鋸歯状文を描く。口縁部は横方向の調整が観察でき、地文は施されない。胴部は環行縄文を横帯施文風に施し、施文変換点に粘土が押し出されている。内面は横方向の調整が観察でき、口縁部は磨かれている。繊維の混入は多い。

2～5はコンパス文あるいは小波状文を描くものである。2・3は口縁部破片で、いずれも支点をもたず波状に施文している。2は口縁部が若干内湾し、波状を呈するようである。コンパス文の上下に円形竹管文を巡らせ、地文に単節RLの縄文を施す。3は地文がなく、現存部位で2条のコンパス文を巡らせている。繊維の混入は2が中程度、3は少ない。4・5は胴部破片で、振れ幅の少ない小波状文を横位に複数条巡らせている。4は施文間隔の広い部分に波状文と斜交する沈線を規則的に施す。繊維の混入は4が中程度、5は少ない。

6・7は半載竹管による平行沈線と円形竹管文が施される土器で、6は口縁部、7は胴部の破片である。同一個体の可能性が高く、色調、胎土が酷似している。器面は円形竹管文と平行沈線を交互に巡らせるが、7の屈曲部下は斜行する平行沈線が観察でき、円形竹管文と平行沈線で口縁部文様帯を構成するものと考えられる。繊維の混入はともに少ない。8～11は口縁部の破片で、口縁部に平行沈線による加飾があるものである。8は波状口縁となり、口唇部は内側から調整される。口縁部は幅13mm程度の縦位沈線帯を巡らせ、その下位に波頂部を頂点とした半載竹管による沈線を施す。遺存部位が少ないため、全体の構成は不明だが、大型菱形文を構成する可能性もある。繊維の混入は少なく、内面は横方向に磨いている。9・10は同一個体と考えられるもので、口縁部は内湾し、破片下端が屈曲部にあたる。口縁部は波状を呈し、口唇部は丸く取られる。外面は2条1単位の平行沈線を斜行させ、内面は横方向に磨いている。繊維の混入は中程度である。11も口縁部の破片で、内湾している。外面は半載竹管による沈線を2条巡らせ、その下位に附加条1種RL+R2本を施す。胎土は繊維の混入が少なく、白色の鉱物粒子を多く含んでいる。

12～18・22～24は沈線が施されるものである。12は口縁部下位の屈曲部で、外面は太い単沈線を斜交させ、菱形の効果を出している。繊維の混入は中程度である。13・15は斜格子文を施し、13の沈線はかなり細い。15は地文に無節Rの縄文を施す。繊維の混入は、13が少なく、15は多い。14・16～18も雑な斜格子文を描く。14は胴部下半が遺存しており、現存高14.5cmを測る。器面は無節Rの縄文を全面に施した後に、かなり細い平行沈線を縦位および斜位に施すが、規則性はみられない。内面は現存部中位から器面の荒れが顕著である。繊維の混入は中程度である。16～18は単沈線を縦位および斜位に施す。17は整った格子状に沈線を斜交させるが、16・18に規則性はみられない。18は口縁部破片で、口唇端部を平坦に調整する。17の繊維の混入は少ないが、ほかは中程度である。22・23は胴部破片で、半載竹管を使った沈線を密に横走させている。繊維の混入はともに少ない。24も胴部破片で、平行沈線をコンパス文風に蛇行させ、縦位

に施す。繊維の混入は少ない。

25～27は横位に結節沈線を施すものである。25・26は口縁部で、口縁に平行して2条の細かい結節沈線を巡らす。結節沈線以下は縄文が施される。口唇部はともに丸く取められ、繊維の混入は中程度である。27は屈曲部の破片で、屈曲部に沈線を巡らす。表現は結節沈線風であるが、半截竹管を使用した沈線を巡らせた後に、同一工具を刺突している。地文は単節RLの縄文である。胎土は11と似ており、繊維の混入が少なく白色の鉱物粒子を多く含んでいる。

28～30は竹管の連続刺突文が施されるもので、いずれも胴部破片である。28・29は横方向に、30は縦方向に連続して刺突し、30は連続した押し引きから結節沈線としてもよいかもかもしれない。28・29は繊維の混入が少なく、30は中程度である。

31・32は放射肋がある二枚貝を使用した施文を行っている。31は縦位の貝殻腹縁文、32は貝殻背圧痕を施す。32の背圧痕はハイガイとみられる。繊維の混入は中程度である。

19～21・33～55は縄文のみが施文される土器である。19は底部を欠損するが、全体の30%程度が遺存している。推定口径23.0cm、現存高25.8cmを測り、あまり大きく開かない器形である。口縁部は不規則に上下し、口唇部も緩い角をもち、僅かに外側へ肥厚する。胴部中位には上からかぶせた粘土の境界線が明瞭に残る。器面は粗い単節LRの縄文を一方に施す。内面は器壁が荒れて調整は観察できない。外面下部は被熱のためか、赤化している。繊維の混入は多い。20も底部を欠損するが、全体の40%程度が遺存している。推定口径25.8cm、現存高18.2cmを測り、直線的に開く土器である。口唇部は内側からの調整で薄く仕上げる。外面は口縁部直下から無節Lの縄文を一方に施す。繊維の混入は中程度である。21は胴部下半の破片で、底部直上まで遺存している。現存下端部の推定径は11.1cmを測る。外面は無節Rの縄文を一方に施し、内面は縦方向に磨いている。繊維の混入は中程度である。33も底部を欠損するが、全体の40%程度が遺存している。推定口径21.3cm、現存高21.1cm、現存下端径10.4cmを測る。口縁部は不規則に上下するが、口唇部を平坦に調整し、断面は緩い角頭状となる。外面は口縁直下から底部に至るまで無節Lの縄文を施し、現存部分に2か所の細い粘土隆起が認められ、その位置は90°となる。内面は器面の荒れが著しく調整は観察できない。胎土中の繊維の混入は少なめであるが、砂粒を多く含んでいる。

34～41は口縁部の破片である。34・36・37・39は口唇部を上から平坦に調整する。器面は34が無節L、36が無節R、37・39が単節RLを施す。また、39は縦位に細く粘土が盛り上がるが、縄文施文後に貼り付けたものである。繊維の混入は34が多く、ほかは中程度である。35・40は口唇部を内側から調整し、薄く仕上げている。器面は35が無節R、40が附加条縄文を施す。繊維の混入は中程度である。38・41は口唇部を丸く取める。38は低く波状を呈する口縁部である。器面は38が単節LR、41は附加条1種LR+L1本である。繊維の混入は中程度である。

42～55は胴部破片である。このうち42～45は屈曲がみられ、くびれ部分の破片と思われる。器面は42・43が無節L、44・45が燃糸文Rを施すが、42はくびれ部から上に地文の施文がない。繊維の混入は中程度である。46も屈曲がある胴部破片であるが、45までのものとは異なり、外側に後ができるほど強く屈曲するものである。胴部中位がきつく張る器形となろう。器面は無節Lの縄文を施し、繊維の混入は中程度である。47は無節L、48～52は単節LRの縄文を施し、50は羽状縄文とする。また、49・50は僅かに縦方向の粘土の押し出しがみられるが、49は縄文施文後の貼り付けである。53～55は附加条縄文または燃糸文である。53には軸となる無節Rの縄文が観察できるが、他の2点は軸が不明である。53は繊維の混入が少な

いが、ほかは中程度から多く混入する。

56～58は無文の口縁部破片である。56・57は内湾気味の口縁部で、小さな山形の波状口縁となる。内外面とも横方向に丁寧に磨かれる。58は口唇端部を平坦に調整する。内外面とも横方向の調整が観察でき、調整や質感が42と酷似する。同一個体の可能性も高く、その場合口縁部に幅5cm程度の無文帯を巡らすこととなる。

出土土器は黒浜式に比定でき、横位展開する口縁部文様帯をもつ土器が含まれる。このほか土製円板1点(第107図1)、破片のため図示していないが緑色岩製磨製石斧1点、またP2付近から側面調整礫2点(第118図218・219)が出土している。

#### SI-004 (第14図、図版2・22・34・35・80)

T24-88付近に位置する。平面形は4.75m×4.50mの不整形円で、確認面からの深さは0.16mを測る。炉は中央と南西寄りの2か所に検出された。中央の炉Aは規模が0.50m×0.48mで、被熱痕跡が顕著である。南西寄りの炉Bは0.36m×0.26mを測り、覆土に焼土粒子を多量に含むが被熱痕跡は明瞭ではない。床面からの深さも炉Aが0.10mであるのに対し、炉Bは僅かに浅む程度である。柱穴と思われるピットは炉Aの周辺に4基検出された。深さは0.17m～0.59mの範囲に収束する。

遺物はさほど多くなく壁際を除いて散在し、1が炉周辺からまとまって出土した。

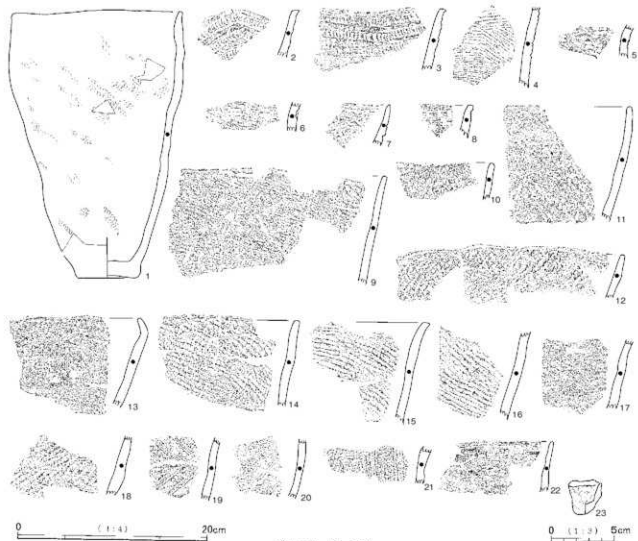
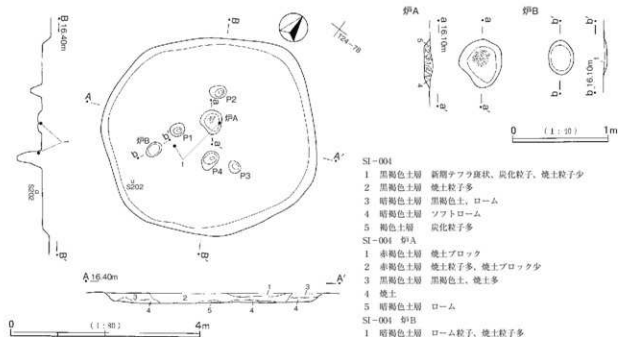
1は完形に復元でき、口径17.7cm、底径6.1cm、器高28.3cmを測る。器面に凹凸があり、底部から高さ11cm前後と20cm前後の2か所が緩く膨らみ、口縁部は内傾気味となる。口縁部は不規則な上下があるが、口唇部は丸く収める。器面は口縁から胴部中位まで横方向の調整が観察でき、単節RLの縄文がまばらにみられる。口縁部の幅約3cmが胴部より丁寧な調整で、明確に無文帯として認識できる。底部に施文はなく、胴部下半は被熱のためか赤化している。繊維の混入は多い。

2～8は竹管等による加飾があるものである。2・3は口縁部破片で、大きく山形となる波状口縁である。器面は現存部分で口縁に沿った3条の平行沈線内に連続爪形文を施す。内面から口唇部にかけて丁寧に磨く。繊維の混入は中程度である。4は胴部破片で、平行沈線を斜行させる。現存部分だけでは明言できないが、菱形の構成となる可能性がある。5・6は胴部くびれ部の破片で、器面には2個一対の刺突文が施される。ともに繊維の混入は中程度である。7・8は口縁部破片で、ともに半截竹管の押し引きによる結節沈線を施文している。7には斜行する沈線も認められ、ともに口縁部文様帯を構成するものとみられる。施文は強い刺突という方が適当かもしれない。口唇部は7が内側からの調整で薄く仕上げられ、8は口唇部を平坦に調整する。繊維の混入は中程度である。

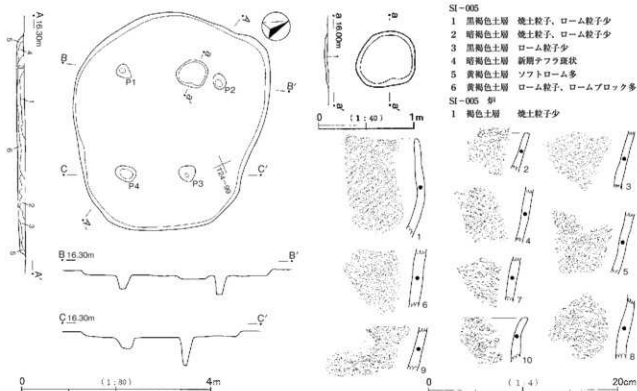
9～20は縄文のみが施されているものである。このうち、9～15は口縁部の破片である。口縁部は不規則に上下し、13は端部が屈曲し内傾する。口唇部は10を除いて端部を平坦に調整し、断面角頭状もしくはそれに近い形状に整える。また、12は口唇部外面にまで調整が及び、あたかも沈線を引いたかようになる。器面は10・12が無節Rの縄文、ほかは無節Lの縄文を施すが、9・11・13は条間隔が広く附加条縄文かと思われる。繊維の混入は12・13が多く、ほかは中程度である。なお、14～16は同一個体とみられる。16～20は胴部の破片で、16・17は無節L、18は無節Rの縄文、19・20は軸の縄は不明だがL3本/R3本を交互に施す。繊維の混入は18が多く、16・17は中程度、20は少ない。

21は胴部くびれ部の破片で、縦位に燃糸文Rを施す。22は口縁部破片で、比較的小型の土器である。施文はなく、外面は横方向に調整し、内面は横方向に磨いている。ともに繊維の混入は中程度である。





第14図 SI-001



第15図 SI-005

23はミニチュアの土器で、粘土塊に指を差し入れ、指頭で成形しただけのものである。内外面とも凹凸が激しく、全体が指と同じ方向に歪んでいる。底部内面に爪の痕跡はみられないが、口縁部内面に指紋とみられるしわが残る。胎土に繊維は含まれていない。

図示した土器は黒浜式に比定でき、2・3にみるように連続爪形文を施す土器が含まれる。このほか、南壁際の床面から石皿1点(第116図202)が出土している。

#### SI-005 (第15図、図版2・35)

T24-98付近に位置する。平面形は4.84m×4.40mの不整形で、確認面からの深さは0.11mを測る。炉は北寄りにあり、規模は0.63m×0.60mを測る。明瞭な焼土の堆積はなく、被熱痕跡も僅かに認められる程度である。柱穴と思われるピットは4基で、平面形に沿って均等に配置されている。深さは0.22m~0.60mの範囲に収束する。

遺物は少なく、図示できたのもすべて破片である。1~5は無節Rの縄文を施すもので、2・4・5は羽状縄文となる。1・2は口縁部破片で、2は口唇部を平坦に調整する。また、工具による2本一組の刻みを口唇頂部と外側に交互に施す。4・5は繊維の混入が少ないが、ほかは中程度である。6は無節Lの縄文が施される。7は直前段合摺りか。8~10は沈線施文である。8は口縁部で、口唇部を平坦に調整する。7は繊維の混入がかなり少ないが、8~10は多い。

図示した土器は黒浜式に比定できる。

#### SI-006 (第16図、図版2・22・35)

T25-39付近に位置する。平面形は5.65m×3.50mの不整形長楕円形で、確認面からの深さは0.16mを測る。炉は住居中央に2か所検出された。炉Aは規模が0.55m×0.30mで、被熱痕跡が顕著に認められる。炉Bは0.43m×0.42mを測り、被熱痕跡はあまり明瞭ではない。掘り込みは床面から約0.10mで、中央に床面

からの深さ約0.40mのピットを検出した。柱穴と思われるピットは15基検出された。深さが0.39m～0.62mと0.72m～1.00mの2グループに分けられ、炉を挟んだ長軸方向にP2-P12を結ぶ軸線と、P3-P9を結ぶ軸線が想定できる。炉の位置と柱穴の分布から柱の付け替えが行われたと考えられる。なお、覆土には、堆積が進んだ段階で人為的に埋め戻された様子がみられる。

遺物は南側半分に集中し、特にP13から南西隅にかけて多く出土している。ほぼ完形または全形が推定できる1・2もこの範囲から出土した。

1は口縁部および底部を欠損し、胴部も全周の20%程度が遺存する。胴部中に膨らみをもち、口縁部下でくびれる深鉢形土器である。現存部分の最大径は推定で28.4cm、現存高29.0cmを測る。器面は向きを変えて軸不明+R2本の附加条縄文を施し、菱形の効果を出している。また、膨らみ部を境にして上下で施文原体が異なり、上位より下位に太い原体を附加している。内面は上半が横方向、下半が縦方向に磨かれる。繊維の混入は中程度である。2は口縁部を50%程度欠損するが、ほぼ完形に復元できた。口径20.8cm、底径7.0cm、器高23.7cmを測る。口縁部は緩く外反し、口唇部に連続して工具を押しやる。器面は若干凹凸があり、口縁部から底部に至るまで無節Rの縄文を全面に施す。底部は僅かに上げ底となり、外面を磨いている。内面は横方向の調整が観察でき、底部近くで縦方向に変わっている。繊維の混入は中程度である。

3・4は沈線により文様を表出するもので、ともに胴部破片である。3は先端を加工した工具により葉脈文、4は平行沈線を斜行させる。ともに繊維の混入は多い。5も胴部破片であるが、上側破損部に平行して細い工具の押し引き刺突が巡る。現存部分が大きく膨らむことから、くびれ部に刺突文を巡らせたものと考えられる。刺突文以下は無節R合照りの縄文を施す。繊維の混入は多い。

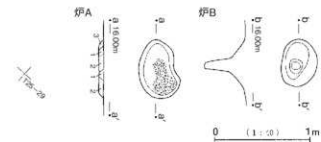
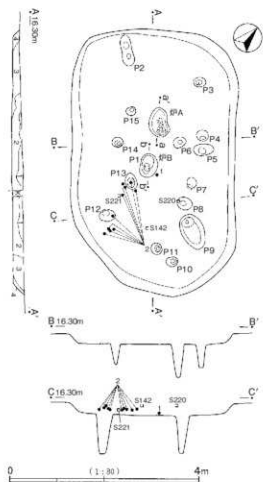
6～15は縄文のみが施されるものである。このうち6～9は口縁部の破片である。6・8は口唇部を平坦に調整し、さらに6は棒状工具を斜めに押し、小波状を呈する。9は内側から調整し、口縁部を薄く仕上げ、7は丸く収めている。10～13は胴部破片、14は底部破片である。器面は6・15が単節RLで、6は向きを変えて羽状縄文とする。7は無節L、11は無節R、10・13は附加条1種R+L2本、8・12・14は附加条1種R+R2本、9は直前段合照りRの縄文を施す。10・13は施文の向きの変更により、菱形の効果を狙ったものとみられる。9・10・12・13は繊維の混入が多く、ほかは中程度である。

図示した土器は黒浜式に比定でき、附加条縄文を施すものが多く、葉脈文が含まれる。土器以外に磨製石斧(第111図142)・敲石(第115図190)を各1点、側面調整礫(第118図220・221)2点を出土した。石器類も土器と同様南側から出土している。

#### SI-007・SI-013(第17・18図、図版2・36)

SI-007・SI-013はT24-48付近に位置し、重複関係にある堅穴住居である。土層断面図が示すように新旧関係は(旧)SI-013→(新)SI-007と考えることができる。SI-007は7.70m×5.40mの長方形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。炉は中央北寄りに2か所に検出された。炉Aは規模が0.45m×0.30m、炉Bは0.50m×0.40mを測り、被熱痕跡が認められる。柱穴と思われるピットは18基検出された。炉より北に位置するP9～P13、P20はSI-007のものと考えられるが、そのほかについては形状や深さからSI-013のピットと区別することはできない。床面からの深さは1.29mの1基を除き、いずれも0.13m～0.72mの範囲に分布する。

SI-013は北東側がSI-007と重複し、遺存状態がよくないため詳細は不明だが住居として扱った。外形は南辺が約3m、西辺が2.7m以上の方形あるいは長方形を呈すると思われ、確認面からの深さは0.22mを

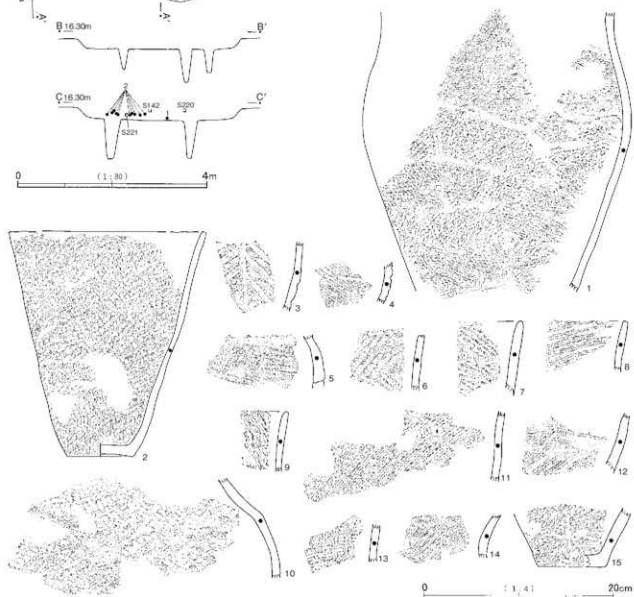


SI-006

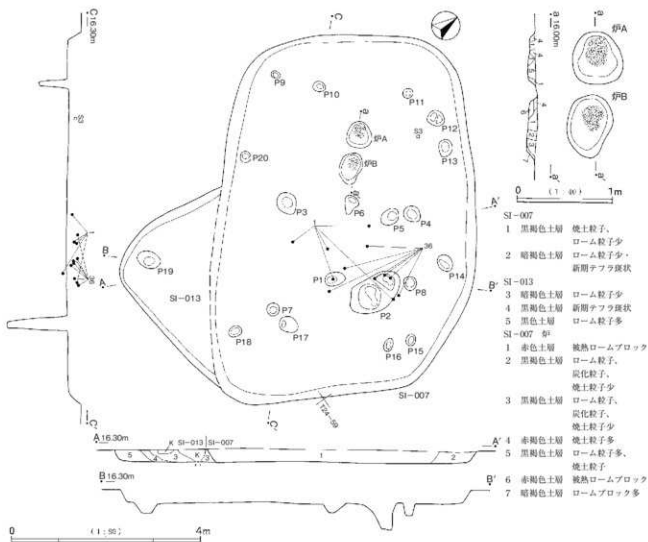
- 1 黒褐色土層 新期テフラ層状、炭化粒子、焼土粒子少  
 2 黒褐色土層 炭化粒子、焼土粒子多  
 3 暗褐色土層 ローム、新期テフラ層状、炭化粒子、焼土粒子少  
 4 暗褐色土層 ロームブロック多

SI-005 甲A

- 1 赤色土層 被熱ロームブロック  
 2 褐色土層 焼土粒子多  
 3 暗褐色土層 被熱ロームブロック多



第16図 SI-006



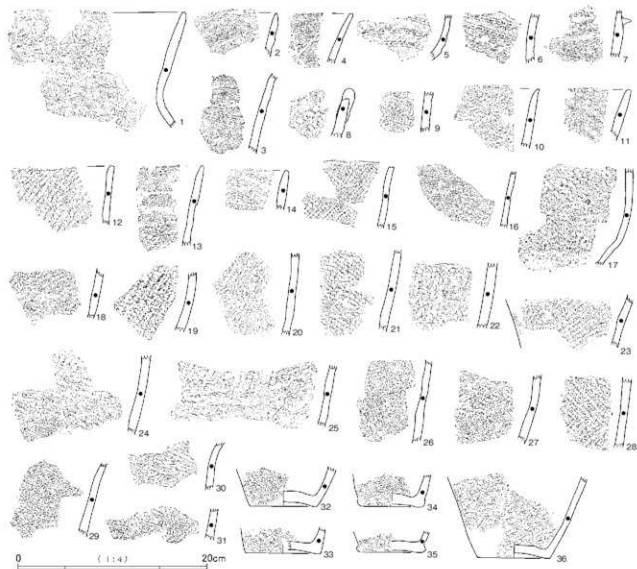
第17図 SI-007 (1)、SI-013

測る。確実に本跡のものと思われるピットは南西隅のP19で、床面からの深さは0.19mを測る。残存部分から炉は検出されなかった。

2軒の住居が重複し、出土遺物は少なく、全体をうかがえる程度に復元できた個体はない。炬東側からSI-007南隅にかけて出土数が多い。SI-013の範囲から遺物は出土していない。

**SI-007出土遺物** 1～4は沈線による施文がある土器である。1・2・4は口縁部破片で、3も口縁直下の破片である。1は朝顔形の土器である。口唇部は1が丸く、2は内側、3は頂部を調整する。器面は斜格子文を描き、1・2は細沈線、3は平行沈線、4は太沈線であるが、1は規則性がみられない。1は内面を横方向に丁寧に磨き、繊維の混入が多い。繊維の混入は3・4が中程度、2は少ない。

5～9は結節沈線が施されるものである。5～7は半載竹管を用いた結節沈線で、強く刺突している。5は3条の結節沈線を巡らせ、6はそのほかに斜行する結節沈線もみられる。ともに胴部破片であるが、5は内湾、6は外反している。7は罫状隆帯に沿って結節沈線を施し、地文に附加条1種R+R2本の向きを変えて施している。8・9は角頭状工具の押し引きで、キャタピラ文風の描出となる。ともに押し引き沈線は斜行し、8は山形の波状口縁となる。なお、9は地文に縄文が施される。繊維の混入は6が少なく、7は多い。



第18図 SI-007 (2)

10~31は縄文のみが施されるもので、10~16は口縁部破片である。10・11は口縁部内側を調整し、口唇部を薄く仕上げる。器面は口縁直下から縄文が施され、10は附加条2種RL+L 2本、11は附加条1種R+R 2本である。内面は口縁部を中心に横方向に丁寧に磨かれる。12~14は口縁部を丸く収める。器面は口縁直下から縄文が施され、12は0段多条LR、13・14は附加条縄文で14は1種L+L 1本、13はR 3本を附加する。15・16は口唇端部を平坦に調整する。16は口径10cm以下の小型の土器である。器面は口縁直下から縄文が施され、15が附加条1種LR+L 2本/RL+R 2本、16は懸糸文Lである。

17~31は胴部の破片である。図示したほとんどの破片は直線的に開いているが、17は大きく湾曲する。また湾曲部下端に粘土をかぶせた痕跡が明瞭に残り、断面図にも段となって表れている。器面は無節Lの縄文を施し、内面は横方向に磨いている。その他の破片は施文原体の違いはあるものの、縄文以外の施文はなく、30は口縁部下のくびれ部、23は底部近くの破片である。施文原体は、18・22が無節Rの縄文、19・20・23が単節LR、21がRLである。24は無節Lを羽状に施すが、現存部下半分は条間隔が広く、附加条縄文かもしれない。25~31は附加条縄文である。軸となる縄文が明瞭なのは28・30で、28は1種RL+L 2本、30は2種RL+L 2本である。その他27はR 3本、26・29・31はR 2本/L 2本を附加している。

繊維の混入はいずれも中程度であるが、19・28は少ない。

32～36は底部の破片である。底径は32・36が7.0cm、33・35が8.0cmを測る。胴部外面は縄文施文で、32が無節L、33が単節RL、36がLRである。底面は上げ底で、いずれも施文はなく、33は丁寧に磨かれている。繊維の混入は中程度もしくは少ない。

図示した土器は黒浜式に比定でき、横位展開する結節沈線文が含まれる。土器以外にはP12とP13の近くの覆土中から石鏃1点（第108図3）、また剥片類1点を出土した。

#### SI-008・SI-012（第19・20図、図版3・22・23・36～38）

SI-008とSI-012はU25-40・50付近に位置し、重複関係にある堅穴住居である。土層断面図により新旧関係は（旧）SI-008→（新）SI-012と考えることができる。しかし、床面の高さはほとんど同じで、南西側の壁の立ち上がりでも明瞭に区別がしがたい。SI-012の範囲は土層断面で確認できただけで、平面的に範囲を確定するに至らなかった。

SI-008は短軸が4.30m、長軸は5m～7mの長方形を呈すと思われる。確認面からの深さは0.23mを測る。炉は2か所に検出された。西寄りの炉Aは規模が0.80m×0.60m、中央付近の炉Bは0.85m×0.37mを測り、どちらも被熱痕跡が顕著に認められる。柱穴と思われるピットはSI-012のものも含め23基検出された。床面からの深さは1.53mのP1、0.13mのP9を除き、0.45m～1.10mの範囲に取束する。このうち確実にSI-008のものはP1～P7と思われる。

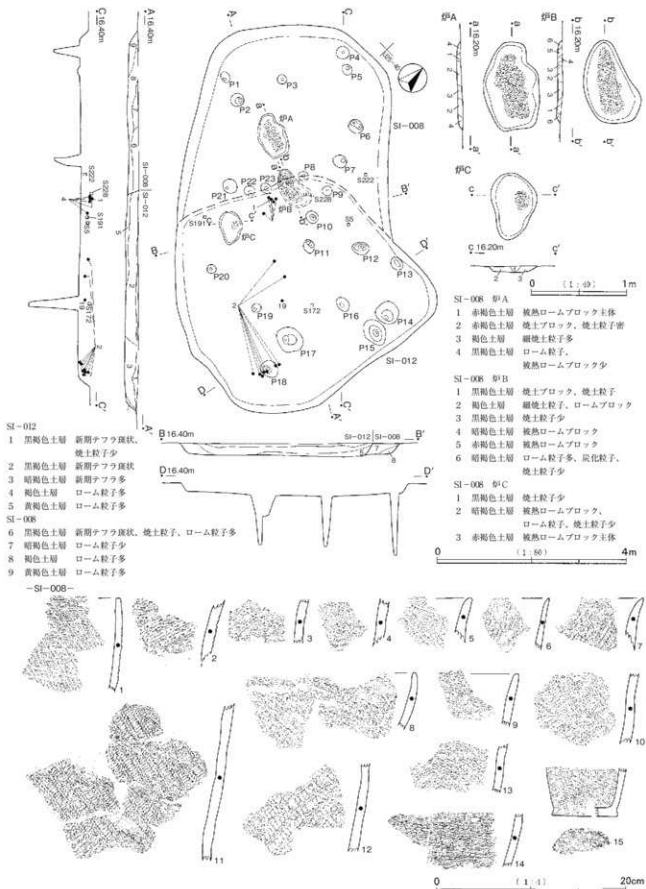
SI-012は西側がSI-008と重複するため詳細は不明であるが、遺存部分や炉の位置から南北は5.00m、東西は4.50m程度の不整形を呈すと思われる。確認面からの深さは0.22mを測る。本跡のものと思われるピットは東側の壁に沿うように並ぶP13～P15、P17、P18の5基である。深さ0.76mのP15以外は1.10m～1.30mの範囲に取束する。

SI-008出土遺物 土層断面をもとにSI-008の範囲から出土したものを図示した。遺物の量は多いが、全形がうかがえる程度に復元できるものはなく、傾向として北側の壁周辺の出土量が多い。

1は沈線で斜格子文を描くもので、口縁部の破片である。内湾気味の口縁部で、口唇部を平坦に調整する。口縁部外面も横方向の調整が観察できる。半截竹管を用いた平行沈線を密に施す。

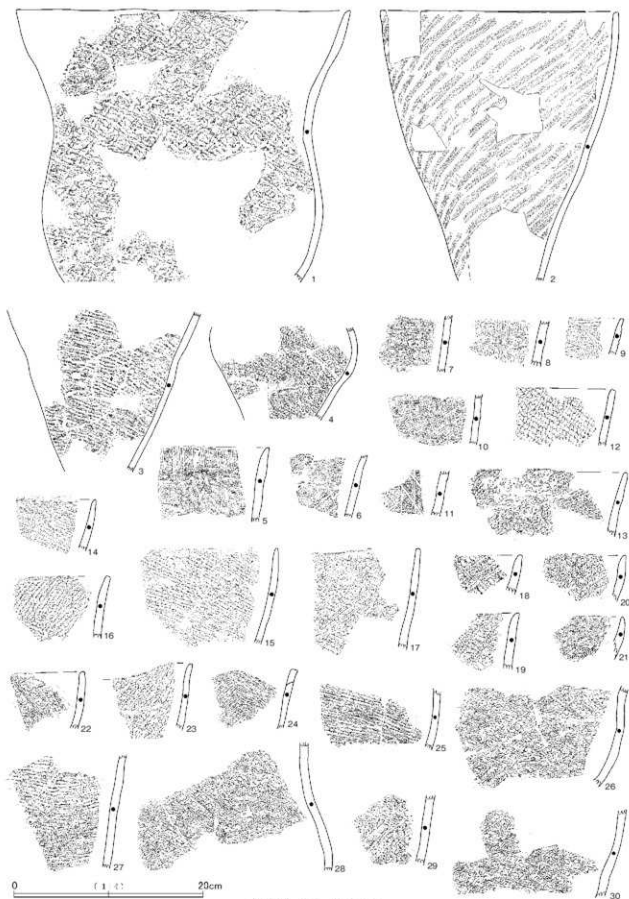
2～4は結節沈線で加飾するもので、いずれも胴部破片である。結節沈線は斜行し、口縁部文様帯を構成しているものと考えられる。内面はいずれも横方向に磨かれており、繊維の混入量は中程度である。

5～15は縄文のみが施されるもので、いずれも破片である。このうち5～9は口縁部の破片である。8が内湾気味の口縁であるが、ほかは緩く外反して開く。口唇部は6・7が内側から調整され、薄く仕上げられ、ほかは丸く収めている。器面は一方方向の縄文で、5が単節RL、ほかは附加条縄文を施す。内面は7・9が横方向に丁寧に磨かれる。繊維の混入は中程度である。10～14は胴部の破片である。12・14は内湾するが、他の破片は直線的に開いている。器面はいずれも附加条縄文が施され、10は附加条2種R+L2本/L+R2本で羽状の構成とする。11は附加条2種R+L2本を一方方向に、12も2種L+R2本を羽状の構成に、13・14は附加条1種でR2本を附加し、13は菱形の効果を出している。繊維の混入は13が少なく、14は多い。ほかは中程度である。15は底部の破片で、推定底径7.0cmを測る。下端が外側へ張り出し、底部から1cm程度を横方向に磨いている。内面は縦方向に磨き、底部外面も丁寧に磨く。器面は軸の縄が不明でR2本を附加した縄文を施し、底部外面の底板接合部付近に小さい刺突が並んでいる。繊維の混入は中程度である。



第19図 SI-008、SI-012 (1)





第20圖 SI-012 (2)

図示できた土器は少ないが黒浜式に比定できる。土器以外に敲石1点(第115図191)、北東壁近くから側面調整礫1点(第118図222)が出土している。

SI-012出土遺物 SI-008よりもSI-012が新しいことから、SI-008と推定できる範囲から出土したものを除外し、残りをSI-012の出土遺物として捉えた。傾向として、住居西側に偏って出土している。

1は口縁部から胴部の全周30%が遺存している。胴部下半に丸みをもって膨らむ朝顔形の土器で、推定口径35.5cm、現存高28.7cmを測る。口縁部は不規則に上下し、口唇部を丸く収める。口縁部に幅1cmほどの無文帯を巡らせ、燃糸文Lを全面網目状に施す。内面は横方向に磨き、繊維の混入は中程度である。

2は底部を欠損し、口径25.0cm、現存高28.4cmを測る。胴部上半が内湾気味に開き、胴部下位で急にすぼまる。口縁部は直立し、口唇部を内側から平坦に調整する。器面は附加条2種R+R2本を全面同一方向に施す。なお、胴部中位にかぶせた粘土の痕跡が全周する。繊維の混入は中程度である。

3は胴部下半が遺存し、現存高は17.0cmである。底部から直線的に開いており、器面は無節Lの縄文を一方に施す。繊維の混入は中程度である。

4は胴部中位が遺存する個体で、現存高9.8cm、最大径は推定で15.6cmを測る。胴部が丸みをもって膨らむ朝顔形の器形となると思われる。器面は附加条2種R+L2本を主に、向きを変えてR2本の附加条縄文を施すが、遺存部分のみを限り、明確な構成はうかがえない。繊維の混入は少ない。

5~11は沈線が施文されるものである。5は口縁部に縦方向の沈線を施し、それ以下は無文となる。口唇部は内側から調整し、薄く仕上げている。外面は沈線以下にまばらな縦方向の調整が観察でき、内面は横方向に磨いている。繊維の混入は中程度である。6・9~11は単沈線で斜格子文を描く。9は口縁部、6も口唇部が剥落した部位である。9~11は繊維の混入が少ないが、6は多い。7・8は半截竹管を用いた平行沈線を施し、7は格子状となる。器面の調整は雑で、ともに底部に近い部位の破片と思われる。繊維の混入は中程度である。

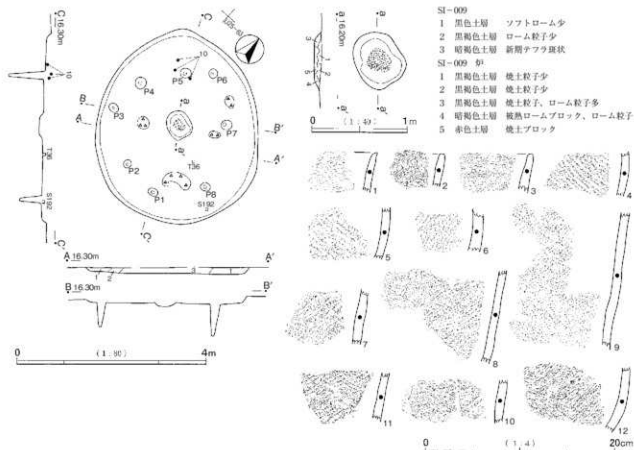
12~30は縄文のみが施されるものである。このうち12~24は口縁部の破片である。口縁部は12・13のように直線的に開くもの、16のように僅かに外反するもの、14・15・20・21のように内湾するものがある。また、17・23・24は緩やかな波状口縁となる。口唇部は14・15・20・21・23が内側から調整し薄く仕上げ、12・13・16~19・22・24は端部を平坦に調整する。施文する縄文原体はバラエティに富み、12が単節RL、13~16は無節で、16はRとLの原体を用いて羽状縄文とする。17~24は附加条縄文で、21は口縁部に幅3cm程度の無文帯を巡らす。また24は口縁波頂部を中心として左右の原体を変え、葉脈文風の効果を出している。繊維の混入量は13~15・24が多く、ほかは中程度である。

25~30は胴部破片である。口縁部破片も含め、14・15・25・27は同一個体と考えられ、無節Lの縄文を一方に施す。また、26・30も同一個体の可能性が高く、附加条2種L+R2本で、格子状の効果を出している。28・29は繊維の混入が少ないが、ほかは中程度である。

本跡出土の土器もやはり黒浜式に比定できる。本跡の範囲の覆土中から石礫1点(第108図5)、磨石類1点(第113図172)、側面調整礫1点(第118図228)と、図示していないが石皿片1点が出土した。

#### SI-009 (第21図、図版3・38)

U25-63付近に位置する。平面形は4.14m×3.47mの円形で、確認面からの深さは0.15mを測る。炉は住居中央で検出された。規模は0.60m×0.56mで、被熱痕跡が認められ、床面から底面まで0.08mである。柱穴と思われるピットは8基検出された。遺構の平面形に沿って配置され、床面からの深さは0.40m~0.76



第21図 SI-009

mの範囲に取束する。覆土下層から床面にかけて、貝ブロックを6か所検出している。規模は1か所が0.60m×0.36m、そのほかは径0.15m～0.30mを測る。貝のサンプリングは行っておらず、構成種は不明である。遺構内貝層があるが、遺物の出土量は少なく、破片12点を図示した。

1は口縁部破片で、単沈線を斜交させる。口唇部は内削ぎ気味で、繊維の混入量は中程度である。

2～12は縄文のみが施されるものである。このうち、2・3は口縁部の破片である。2は口縁部を内側から調整し、口唇部を薄く仕上げ、器面および口唇端部に無節Rの縄文を施す。繊維の混入は少ない。3は口唇部を平坦に調整する。口唇端部および内面は丁寧に磨かれ、外面は附加条1種L+R2本の向きを変えて施す。繊維の混入は中程度である。4～12は胴部の破片である。直線的に立ち上がる破片がほとんどであるが、4～6・12は内湾しており、胴部中位にあたると思われる。器面を覆う縄文も様々で、遺存部分で4・6・7を除き羽状または菱形の効果を出している。使用原体は4が無節L、5は単節RLを使った羽状縄文、6はLR、7は附加条1種R+R1本、8・9・12が附加条2種L+R2本/R+L2本、10・11が附加条2種R+L2本である。なお、7は縄文施文後に部分的に磨かれ、10は施文変換点に粘土の盛り上がりがある。繊維の混入は9・12が多く、ほかは中程度である。

図示できた遺物は多くないが、単沈線で斜格子文を描く土器が含まれ、黒浜式に比定できる。また、炉とP8の間からの滑石裂玉（第107図36）、南東壁際から敲石1点（第115図192）が出土している。

SI-010（第22～24図、図版3・22・38～40）

V24-41・51付近に位置する。平面形は6.75m×5.72mの隅丸長方形で、確認面からの深さは0.32mを測る。炉は北西壁寄りに2か所検出された。規模は北西の炉Aが0.85m×0.70m、南東の炉Bが0.62m×0.55

mを測り、どちらも被熱痕跡が認められる。柱穴と思われるピットは37基検出された。床面から0.50m以上の深さがあるP3・P6・P11・P12・P14・P27・P28が主柱穴と考えられ、そのほかにP32～P37のように南東壁際を巡るもの、P1・P2・P7・P8・P15～P17・P20・P21の炉Bの東側を囲むものがある。深さは0.29m～0.92mの範囲に分布する。

遺物の出土範囲は炉奥の北西壁付近と南東側半分に二分され、炉南側から西隅、南西壁の半分までの範囲の出土量が極端に少ない。土層断面図の観察から別遺構が重複している可能性も考えられるが、明確に断定できる根拠はない。

器形が想定できる程度に復元できたのは1～5の5点で、3・5が北西壁付近、ほかは住居中央から東隅にかけての範囲から出土した。

1は底部を欠損し、胴部の70%が遺存している。口径23.7cm、現存高20.1cmを測る。現存部分はほぼ直線に開き、口唇部を丸く収める。器面は縦方向の平行沈線を軸として平行沈線による葉脈文を描くが、不規則な構成で、縦方向の平行沈線は全周で6本を意図したようであるが、欠損部にも同間隔で施文されたことと、最低7本となる。また、縦方向の平行沈線を軸としてその左右に描かれる斜行沈線も、軸から左右に下がることを基本とするが、軸が1本増えてしまったために1か所で破たんしている。器面の状態は内外面とも悪く、繊維の混入は中程度である。

2は口縁部から胴部中位までの20%が遺存している。推定口径25.1cm、現存高19.5cmを測る。1と同様、直線的に開く器形で、口唇部は丸く収める。器面は平行沈線による葉脈文で、縦方向の平行沈線が現存部分に2か所認められる。軸となる縦方向の平行沈線から左右に下がる平行沈線を描く。器面の遺存は悪く、繊維の混入は多い。

3は底部および口縁部の50%を欠損する。口径39.9cm、現存高34.0cmを測り、朝顔形の土器である。口唇部は丸く収め、外面は口唇部から1cm程度を無文とするが、ほかは全面無節のRとLを横帯施文する。内面は器面の剥落が進み、繊維の混入も多い。

4は口縁部だけが25%遺存している。推定口径28.0cm、現存高8.2cmを測る。口縁部は内湾し、口唇部を丸く収める。外面は無節Rの縄文を施し、内面は横方向に丁寧に磨いている。繊維の混入は中程度である。

5は口縁部を大きく欠損するが、推定口径16.3cm、底径8.0cm、器高15.7cmを測る小型の土器である。底部から直立気味に立ち上がり、上部中位から膨らみ、内湾気味に口縁部にいたる。口縁部は山形の波状となり、4単位であったと考えられる。外面は全面無節Rの縄文を一方に施し、内面、口唇部、底部外面を丁寧に磨いている。繊維の混入は中程度である。

6～51は破片である。6は口唇部に集合角状突起を付し、口縁部に半截竹管を用いて露菌状となる主幹文様を配する。口縁部文様帯と胴部との区画は地文によりなされ、口縁部をRL、胴部をループ文としている。内面は横方向に磨かれ、繊維の混入は中程度である。

7～28は半截竹管あるいは単沈線により施文される土器である。7は口縁部文様帯部分の破片で、半截竹管による斜行する沈線が認められる。この部分の地文はなく菱形連繋文となろうか。8～11は口縁部に縦または斜めに沈線を施すものである。11は小破片のため何ともいえないが、8・9は口縁部に2cm～3cmの幅で斜行沈線を施す。また、沈線の向きは11が縦方向、ほかは斜め方向となる。口唇部は8・9が端部を平坦に調整するが、10・11は丸く収める。なお、8・9は斜沈線帯の下に無節Rの縄文を施す。10は縦方向の平行沈線も施されており、葉脈文が崩れたものの可能性もある。繊維の混入は8・9が多い。

12・16・17は半載竹管を用いて雑な鋸歯状文を描く。12・16は口縁部の破片で、16は口唇部を刻み、12は緩い山形の波状口縁となり、波状部下に径5mmの孔が貫通する。繊維の混入はいずれも少ない。13～15は葉脈文が描かれる。13は器面の調整が雑で、葉脈文の施文原体も角をもった方形の断面形状とみられる。14は半載竹管を使用するが、縦方向の沈線の施文は雑である。内面は縦方向の調整となることから、胴部中位以下とみられる。15は朝顔形の土器で、くびれ部に結節沈線を巡らす。くびれ部から下に半載竹管を使用して肋骨文を描くが、縦方向の沈線とその右側は通常の平行沈線、左側はかなり細かい結節沈線で描く。繊維の混入はいずれも中程度である。

18～25は単沈線、平行沈線を斜行、斜交させる。このうち、18・19は口縁部の破片である。口縁部は不規則に上下するが、口唇部を丸く取め、19には小突起を付す。また、21は口縁部下のくびれ部の破片である。19～21は平行沈線で、24・25は半載竹管で文様を描く。なお、24は斜交沈線の低位に単節RLの縄文が施される。繊維の混入は25が少ないが、ほかは中程度である。

26・28は口縁部下のくびれ部に沈線を巡らすもので、26は平行沈線、28は半載竹管使用の沈線である。上下は地文の縄文が認められるだけで、その他の施文は確認できない。なお、28は緩い波状口縁となる。

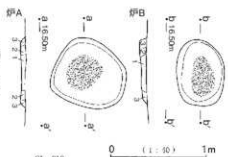
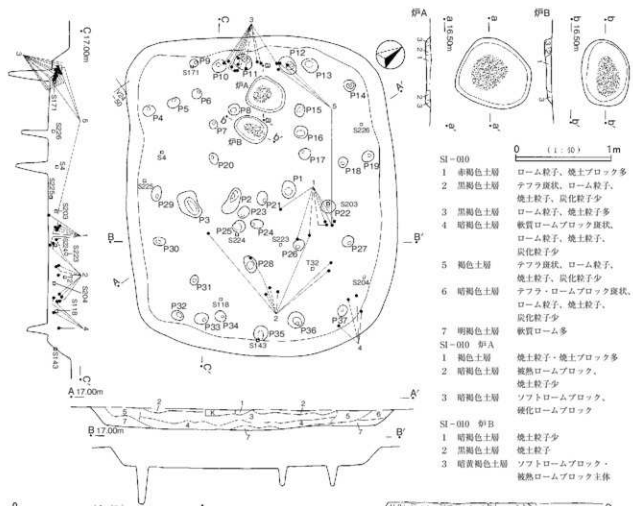
27・29～32は半載竹管による結節沈線が施される。いずれも口縁部下のくびれ部の破片であり、くびれ部に結節沈線を巡らせる。30は現存部分で3条の結節沈線が確認でき、いずれも複数条が巡らされたものとみられる。結節沈線部分は地文が施されないが、胴部は27・29・30が縄文を、31は半載竹管を用いた斜行沈線を施す。32は幅広の原体を用い、連続爪形文風の描出であり、内面は横方向に丁寧に磨かれる。繊維の混入は29が多いが、ほかは少なめである。

33・34は刺突文が施される。33は破片上端に横方向の連続刺突が2列認められ、口縁部と胴部を区画する刺突列かと思われる。刺突列以下は捻糸文が施される。34は円形刺突文が縦に並ぶ。地文は斜位の条線である。ともに繊維の混入が多い。

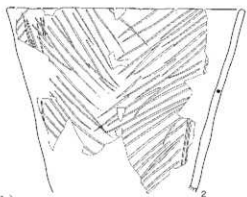
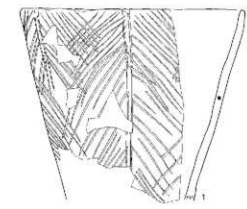
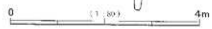
35～50は縄文のみが施されるものである。このうち35～39は口縁部の破片である。35は大きな破片で、口縁部下で緩くくびれる器形である。口唇部は外側に稜をもち、端部を僅かに内傾させる。口唇部は単節LRの縄文を施し、以下口縁部から胴部にいたるまで単節LRと環付無節Lの縄文を横帯施文する。施文変換点の一部に縦方向の粘土の盛りがみられる。繊維の混入が多く、器厚も15mm前後と厚手である。口縁部の形状は36が内湾し、39は山形の波状口縁となる。口唇部はいずれも丸く取める。施文原体は36が単節LR、38が単節RL、37・39は附加条縄文である。繊維の混入は中程度から多い。40～50は胴部の破片である。このうち42・45・47・49は胴部下半から底部に近い部位の破片で、推定径も小さく、内面に縦方向の調整・磨きが観察できる。また、45は外面下端部に横方向の調整が認められる。縄文の施文は単純なものが多く、42・45は単節RL、43は無節R、41・44・46は無節の捻糸文L、40・47は捻糸文L、また、48・50は附加条1種でL2本を附加、49は2種類の附加条縄文を用いている。繊維の混入は41・44・48が多く、45・49は少ない。

51は無文の土器の口縁部破片である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部を丸く取める。外面は斜め方向、内面は横方向に磨かれる。繊維の混入は中程度である。

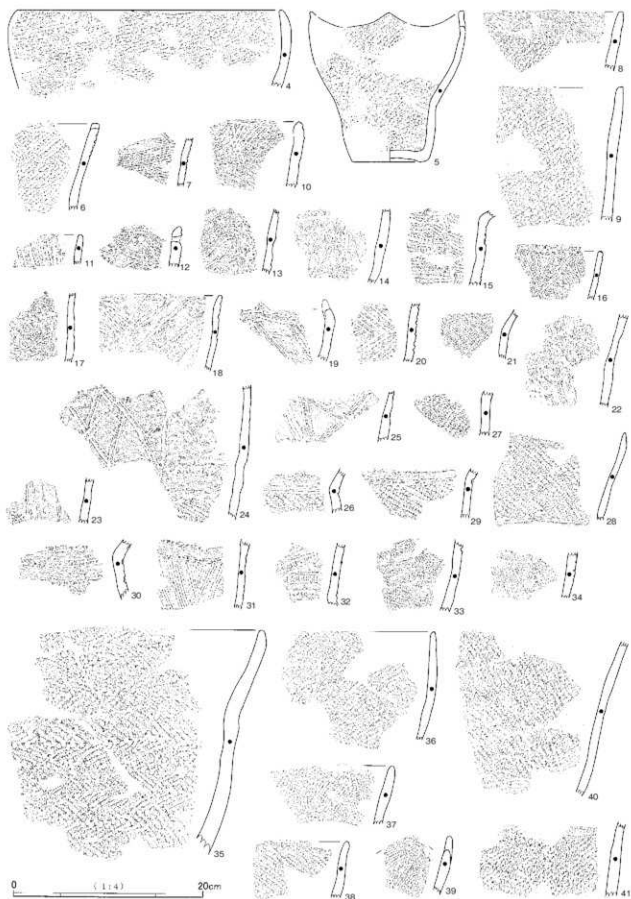
図示できた遺物は多く、1・2のような葉脈文や24の斜格子文が含まれる。また、整ったものではないが3の横帯施文の土器があり、黒浜式に比定できる。なお、6は集合角状突起が付されるなど岡山Ⅱ式に比定できる。



- 0 (1:10) 1m
- SI-010
- 1 赤褐色土層 ローム粒子、焼土ブロック多
  - 2 黒褐色土層 テフラ炭状、ローム粒子、  
焼土粒子、炭化粒子少
  - 3 黒褐色土層 ローム粒子、炭化粒子多
  - 4 暗褐色土層 軟質ロームブロック炭状、  
ローム粒子、焼土粒子、  
炭化粒子少
  - 5 褐色土層 テフラ炭状、ローム粒子、  
焼土粒子、炭化粒子少
  - 6 暗褐色土層 テフラ・ロームブロック炭状、  
ローム粒子、焼土粒子、  
炭化粒子少
  - 7 明褐色土層 軟質ローム多
- SI-010 9/A
- 1 褐色土層 焼土粒子・焼土ブロック多
  - 2 暗褐色土層 硬質ロームブロック、  
焼土粒子少
  - 3 暗褐色土層 ソフトロームブロック、  
硬化ロームブロック
- SI-010 9/B
- 1 暗褐色土層 焼土粒子少
  - 2 黒褐色土層 焼土粒子
  - 3 暗黄褐色土層 ソフトロームブロック・  
硬質ロームブロック主体



第22図 SI-010 (1)



第23圖 SI-010 (2)

土器以外の遺物の出土点数も多く、P26の東付近から完形品の滑石製球状耳飾（第107図32）が出土したほか、石鎌1点（第108図4）、石錐1点（第110図118）、磨製石斧3点（第111図143）、磨石類1点（第113図171）、敲石1点、石皿4点（第116図203・第117図204）、側面調整礫6点（第118図223～226）、軽石類3点の多種類の石器が図示できなかったものも含め20点出土した。

#### SI-011（第24図、図版3・40）

U24-76付近に位置する。平面形は3.52m×2.80mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.16mを測る。炉は住居北辺寄りに検出された。規模は0.42m×0.30mで、焼土の堆積は認められるものの、被熱痕跡はあまり明瞭ではない。柱穴と思われるピットは5基検出された。床面からの深さは0.39m～0.59mの範囲に取束する。

遺物は少なく、P1周辺に集まっている。側面調整礫（第118図227）もこの範囲から出土した。

土器は破片10点を図示した。1～7は沈線により文様を描くもので、1～4は同一個体である。口縁部の破片はないが、朝顔形の土器で、緩やかにすぼまって底部となる器形である。胴部中位から上に平行沈線を斜交させ、菱形の効果を出している。胴部下半は半截竹管を用いた斜交沈線を比較的密に施す。内面はくびれ部から約5cm下までを横方向に、それ以下を縦方向に磨いている。器厚は6mm前後と薄く仕上げられ、繊維の混入は中程度である。5～7も平行沈線を斜行させる。5・7は口縁部の破片で、口唇部はともに丸く取める。繊維の混入は多い。

8は口縁部に円形刺突文を巡らせる。口縁部は内湾気味で、口唇端部を平坦に調整する。地文は単節LRの縄文で、口唇端部から内面は丁寧に磨かれる。繊維の混入は中程度である。

9～11は縄文のみが施される破片である。9は口縁部、10はくびれ部、11は底部である。9・11は附加条縄文である。繊維の混入は中程度である。

本住居では、集合沈線で描いた菱形文が特徴的であり、いずれも黒浜式に比定できる。

#### SI-014（第24図、図版3・40）

U25-74付近に位置する。南東側は調査区境界に接し、南側半分は未調査である。確認できた範囲での規模は3.00m×4.30mで、平面形は不整楕円形を呈すと思われる。確認面からの深さは0.21mを測る。炉は住居中央に位置し、1.10m×0.50mで東西方向に長く、被熱痕跡はあまり顕著ではない。柱穴と思われるピットは調査範囲で住居の平面形に沿って5基検出され、P5が深さ0.95mであった以外は、床面からの深さが0.23m～0.39mの範囲に取束する。P4は0.70m×0.30mの楕円形を呈し、深さ0.36mを測る。

出土遺物は少なく、また全形を復元・推定できるものはない。

1は口縁部の破片で、半截竹管を使用した結節沈線で主幹文様を描く。地文は施されず、口唇部から内面にかけて丁寧に磨かれる。繊維の混入は中程度である。

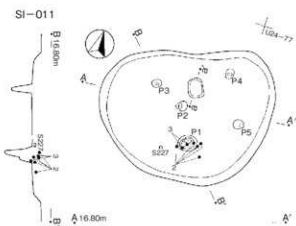
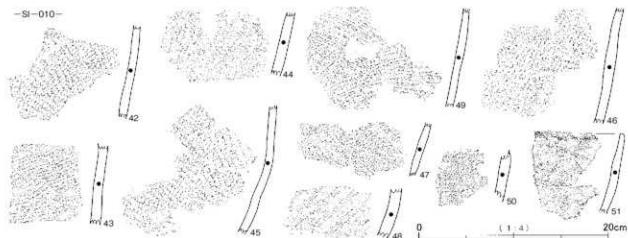
2～9は縄文のみが施されるもので、9は底部破片、ほかは胴部破片である。5は単節LR、6は無節Rの縄文であるが、ほかは附加条2種を用い、2～4は格子風の描出となる。繊維の混入は3が多く、7が少ないほかは中程度である。

図示できた遺物は少なく、地文となる縄文のみが施文された土器がほとんどであるが、いずれも黒浜式に比定できる。土器のほかに磨製石斧1点（第111図144）が出土した。

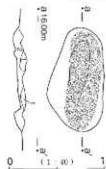
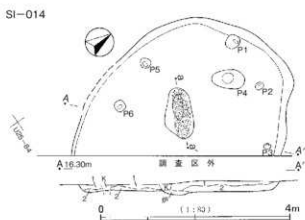
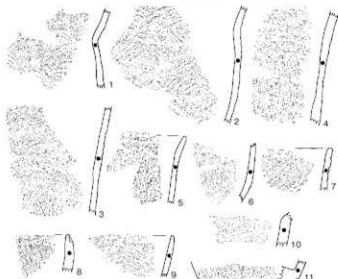
#### SI-015（第25・26図、図版3・23・40・41）

V24-01付近に位置する。平面形は直径3.50mの円形で、確認面からの深さは0.25mを測る。壁の立ち

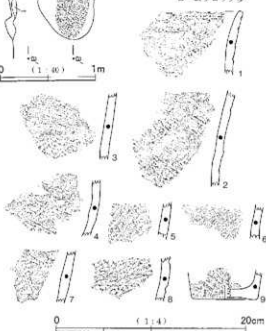




- SI-011
- 1 黒褐色土層 新開テフラ産状、焼土粒子少
  - 2 褐色土層 新開テフラ多
  - 3 黒褐色土層 新開テフラ産状
  - 4 暗褐色土層 ローム粒子少
- SI-011 中
- 1 暗褐色土層 被熱ロームブロック
  - 2 褐色土層 焼土粒子多
  - 3 黒褐色土層 焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子



- SI-014
- 1 暗褐色土層 ローム粒子少
  - 2 明褐色土層 ローム粒子多
- SI-014 中
- 1 赤褐色土層 被熱ロームブロック多
  - 2 褐色土層 焼土粒子少、ロームブロック多



第24図 SI-010 (3)、SI-011、SI-014

上がりは全体的に比較的緩やかで、壁際に三角堆積もみられる。炉は住居中央より北西に寄った位置にあり、規模は0.46m×0.34mを測る。被熱痕跡が認められ、底面周囲で顕著である。柱穴は炉を中心に半径0.80mの範囲に4基が検出された。床面からの深さは0.36m～0.40mとほぼ同じである。

住居の規模に比して遺物の量は多く、炉の周辺から住居中央にかけて集中して出土している。器形が復元できた個体も6点と多い。側面調整際2点（第118図229・第119図230）は、住居北西壁と南東壁近くからそれぞれ出土している。

1は胴部上半から口縁部にかけて約40%が遺存し、推定口径23.3cm、現存高18.2cmを測る。全体の整形は雑で、器面の凹凸も多く、口縁部も不規則に上下する。口唇部の形状も一様ではなく、端部を平坦に調整する部分と、内側から調整して薄く仕上げる部分がある。口縁部外面は約9cmの幅で粗い斜格子文を巡らせる。斜交沈線は、縦方向の沈線を施した後に斜め方向の沈線を施す。胴部以下は無節Rの縄文を一方方向に施す。繊維の混入は多い。

2は口縁部の20%程度が遺存し、推定口径21.1cm、現存高14.5cmを測る。比較的直線的に開く器形で、口縁部は不規則に上下する。遺存状況が悪く、施文も不鮮明であるが、口縁部に斜行沈線を施し、胴部は無節の縄文を地文とする。繊維の混入が多い。

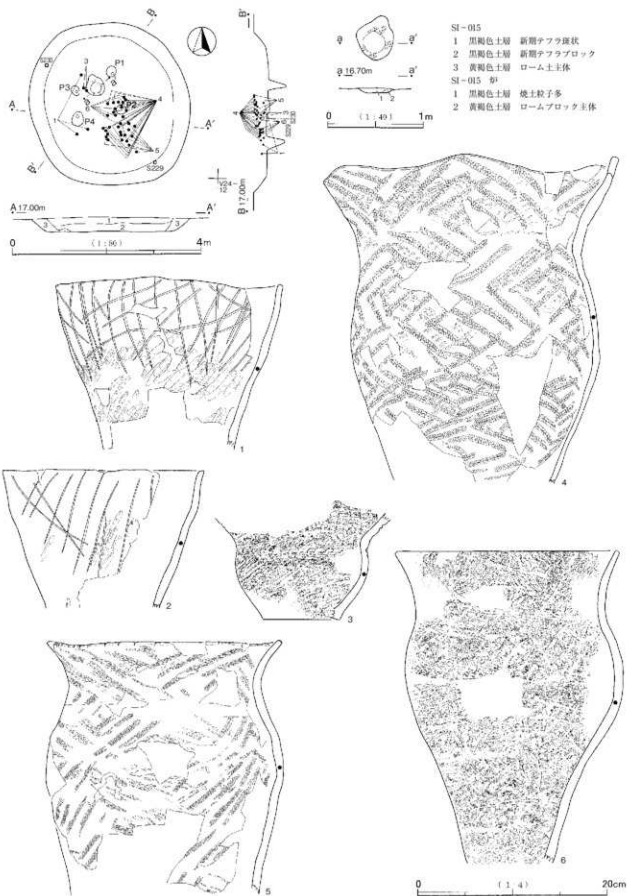
3は口縁部を欠損し、胴部30%が遺存する。底径8.0cm、現存高11.3cmを測り、文様構成から口縁部に近い位置まで残っていると思われる。口縁部は大きく開き、文様帯途中でくびれ、胴部は丸みを帯びる。結節沈線は現存部分で3条を巡らせ、くびれ部を挟む下から2条の間を斜め方向の結節沈線で埋める。胴部は無節Rの縄文を一方方向に施す。口縁部内面は横方向に磨かれていたようだが、器壁の状況が悪く、詳細は不明である。繊維の混入は中程度である。

4は胴部下半から底部を欠損し、口径29cm、現存高34.4cmを測る。朝顔形の土器で、口縁部は6単位の波状口縁となるが、等間隔ではない。口唇部は端部を平坦に調整する。外面は全面に附加条2種L+R2本/R+L2本を施し、部分的に菱形の効果が表れている。内面は横方向に磨かれ、繊維の混入は少ない。

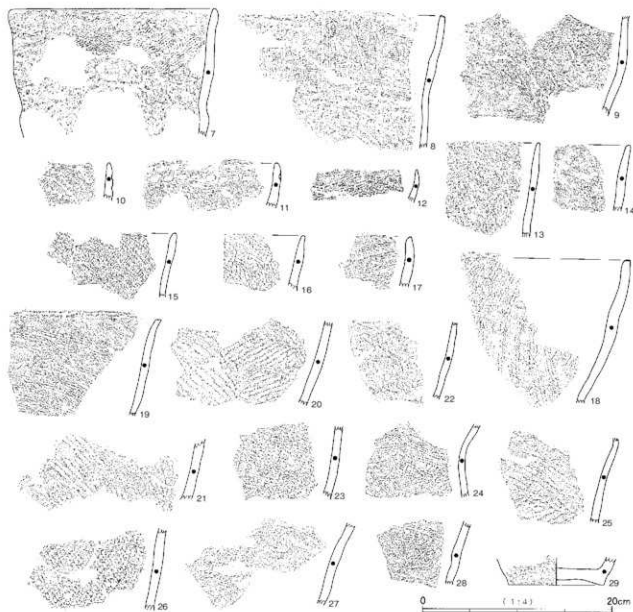
5は胴部下半から口縁部の40%が遺存し、推定口径24.1cm、現存高26cmを測る。朝顔形の土器で、胴部最大径が口径とほぼ同じとなる。口唇部は端部を平坦に調整し、あまり装飾的ではない刻みを不規則に施す。口縁部および胴部外面は附加条2種LR+R3本の向きを変えて施すが、整った構成とはならない。くびれ部と胴部下位は横方向の調整で縄文を消している。内面は丁寧な磨かれ、繊維の混入は多い。

6は底部および胴部の50%が欠損する。推定口径23.7cm、現存高31.7cm、現存底部径9.3cmを測る。朝顔形の器形である。口唇部は丸く収め、端部に工具による押圧を施す。外面は全面に無節Rの縄文が施されるが、条間隔が広い部分があり、附加条縄文かと思われる。口縁部内面は横方向、底部近くは縦方向の調整のみみられるが、器壁の状態が悪く詳細は不明である。繊維の混入は中程度である。

7は口縁部の40%が遺存し、推定口径21.7cm、現存高13.5cmを測る。口縁部はほぼ直立し、そのまま胴部へつながる。口唇部の調整は雑で、端部に工具を連続して押圧する。また、意識したものかどうかはわからないが、貝殻背圧痕が僅かに残る。口縁部下端部に約7cmの幅で意図的にかぶせた粘土の痕跡を残す。口縁部外面は横方向の調整が明瞭で、地文としてハイガイを用いた貝殻背圧痕が施される。8は口縁部に貝殻背圧痕を地文として縦方向の沈線が施され、器面の調整や貝殻背圧痕の状況から同一個体の可能性が高く、部分的に沈線を施したものであろう。胴部はまばらに無節Lの縄文を施す。器面の調整、縄文の施文から9も同一個体の可能性が高い。内面はいずれの破片も横方向に磨かれ、9には縦方向の磨きも追加



第25図 SI-015 (1)



第26図 SI-015 (2)

されている。繊維の混入は多い。

10～12は口縁部に竹管等による加飾がある。いずれも内湾気味の口縁部破片で、10・12は波状口縁となる。10は緩やかにカーブする斜め方向の平行沈線と連続刺突文、11は口縁部に2段の連続刺突文が巡らされる。10の地文の有無はわからないが、11には無節Lの縄文が施される。12は口縁部に3段の結節沈線が施され、その下位は附加条1種L+L2本である。内面にはいずれも横方向の調整が観察でき、12は丁寧に磨かれる。繊維の混入は中程度である。

13～29は縄文のみが施されるものである。このうち13～19は口縁部の破片である。口縁部の形状には外反気味の14・19、直線的な13・15・16、内湾気味の17・18がある。口唇部は13・14・18が端部に工具を連続して押し、17は内外面からの調整で尖頭状に、15・19は端部を平坦に調整するが、15は口唇端部の調整後に再度内外面の調整を行い、凹状となる。外面は13・14に無節Lの縄文が施されるが、ほかは附加条縄文である。軸となる縄文が明瞭に観察できるのは15だけで、2種R+L2本である。その他附加される

縄は17がL 2本、18がR 2本、19はL 2本である。繊維の混入は中程度で、18が多い。

20～28は胴部破片である。24は口縁部下のくびれ部、21・27は底部に近い部位である。また、22は施文、調整等から13と同一個体とみられる。20・21・25は無節の縄文で、20・25は撚り方向の異なる原体で羽状としている。26は単節LR、または附加条縄文で、27は同一方向の施文であるが、24・28は施文方向を細かく変えて装飾的効果を出している。繊維の混入は21・22が多く、ほかは中程度である。29は底部破片で、底径10cmを測る。胴部外面は無節Lの縄文が施され、底部は上げ底となる。繊維の混入は多い。

図示できた遺物は多く、斜格子文、縦沈線文が含まれる。また、地文の縄文は附加条を使用したものが多く、黒浜式に比定できる。

#### SI-016 (第27図、図版3・23・41)

V24-04付近に位置する。平面形は3.36m×2.80mの隅丸方形で、確認面からの深さは0.09mと浅い。床面はソフトローム中にあり、硬化面も認められない。炉は北東隅に寄った位置にあり、規模は1.18m×0.68mと長軸方向に長い。底面中央部に被熱痕跡が認められるが、あまり顕著なものではない。炉の南に接してP1が検出された。床面からの深さは0.34mである。他にピットは検出されなかった。

遺物は少なく、6点が図示できた。1は炉の南側から出土した。

1～3は結節沈線で加飾されるものである。1は口径16.5cm、現存高8.9cmを測り、胴部下半を欠損する。口縁部は緩やかに外反し、口唇部を丸く収める。外面は結節沈線を巡らせ、現存部分で最大8段が確認できる。割れ口を挟んで一対の補修孔が穿たれる。内面は横方向に磨かれ、繊維の混入は中程度である。2・3は胴部破片で、2は1と同一個体の可能性がある。ともに横方向の結節沈線のみが認められ、1と同様の構成になるものと思われる。内面は横方向に磨かれ、繊維の混入は中程度である。

4は口縁部に2段の連続刺突文を施す。口唇部は端部を平坦に調整する。地文は無節Lの縄文を施し、内面は横方向に磨かれる。繊維の混入は中程度である。

5～7は縄文のみが施されるもので、いずれも胴部破片である。附加条2種R+R 1本、5はL+R 2本、7は無節Rの縄文で、5・7はくびれ部の破片である。繊維の混入は多い。

図示できた遺物は少ないが、結節沈線を巡らすものが含まれ、いずれも黒浜式に比定できる。

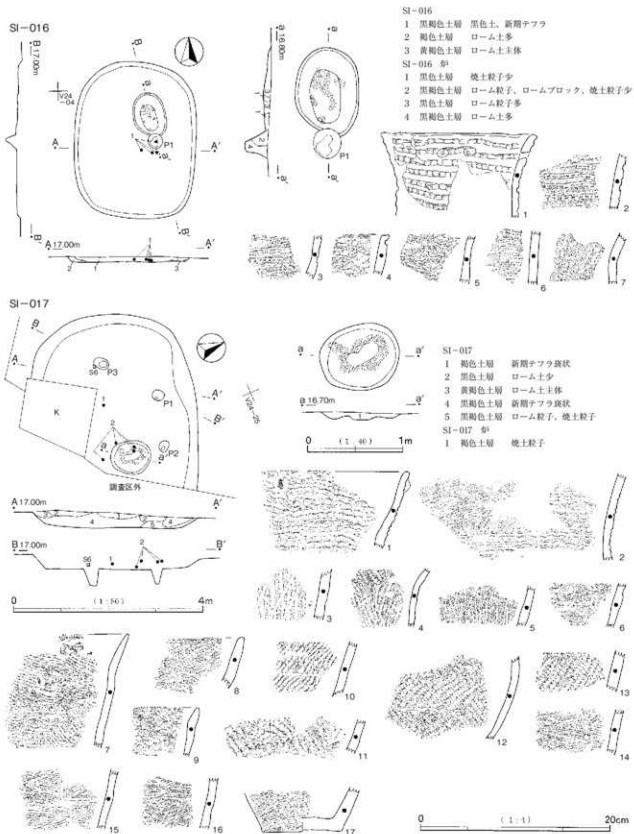
#### SI-017 (第27図、図版4・41・42)

V24-24付近に位置する。南東側から南西側にかけて調査区外に接し、住居の約半分が未調査である。調査範囲内で確認できたのは、3.40m×3.50mの範囲で、南側にも掘乱があるため平面形は確定しがたいが、楕円形を呈すと思われる。確認面からの深さは0.30mを測る。炉は調査境界付近に検出され、住居南北軸の中心より北に寄っている。規模は0.82m×0.72mで、底面にドーナツ状の被熱痕跡を認めた。柱穴と思われるピットは、現状で3基検出された。床面からの深さは0.26m～0.46mの範囲に収束する。

遺物はさほど多くはないが、炉の周辺からまとまって出土している。しかし、器形が推定できるまで復元できた個体はなく、破片17点を図示した。

1・2は竹管を使用した波状文を巡らせる。1はコンパス文の様相を残す部分があるが、同時に結節沈線の様相も現れている。1は口縁部に密に、2は附加条縄文を地文として間隔をあけて波状文を巡らせる。1は口縁部、2はくびれ部下の破片で、1には口縁部に縦の粘土紐を貼り付ける。内面はともに横方向に磨かれ、2はかなり丁寧である。繊維の混入は多い。

3～5は縦方向に沈線が施されるもので、3・4は斜交する。4は口縁部下のくびれ部で、くびれ部下



に沈線、口縁部には単節RLの縄文が施される。繊維の混入は3が少なく、4・5は多い。

6は胴部の破片で、横方向に連続する刺突文が巡らされる。繊維の混入は中程度である。

7～17は縄文のみが施されるものである。このうち7～9は口縁部の破片である。口唇部はいずれも丸く収め、7は何らかの施文があるようにみえる。外面は7が無節L、8が附加条1種軸不明+R1本であり、9はまばらに原体の節がみられる程度となる。繊維の混入はともに多い。10～16は胴部の破片である。それぞれの詳細な部位は不明だが、12は丸みをもってすばまっていくことから胴部中位、11は復元径が小さく底部に近い部位とみられる。施文される縄文は、10が無節R、11が無節L、13が単節LRで、12には結節縄文が、14～16は附加条縄文の施文方向を変えて装飾的效果を上げている。内面は14～16が横方向に磨かれ、11は炭化物が付着している。繊維の混入は11が少なく、ほかは中程度である。17は底部破片で、底径8.2cmを測る。底部外面は僅かに窪む程度で、よく磨かれる。胴部は底部に至るまで無節RRの合燃りの縄文を施す。繊維の混入は多い。

波状文や縦位沈線文を施す土器が含まれ、いずれも黒浜式に比定できる。このほか石罨1点(第108図6)を出土した。

#### SI-018 (第28・29図、図版4・23・24・42)

V25-23付近に位置する。平面形は4.90m×4.36mの不整隅丸方形で、確認面からの深さは0.12mを測る。炬は中央部北寄りの炬Aと南壁寄りの炬Bの2か所が検出された。規模は炬Aが0.88m×0.70m、炬Bが0.66m×0.37mを測る。どちらも遺存状態はよく、被熱痕跡が顕著に認められる。炬Bの西側に0.90m×0.70m、深さ0.33mのPIのほか、柱穴と思われるビット4基を検出した。柱穴は炬Aを中心に、等間隔に配置されている。床面からの深さはP4が0.37m、ほかは0.66m、0.67m、0.84mであるが、木の根が入り込んだことによるもので、本来はP4程度の深さとの調査時の所見がある。

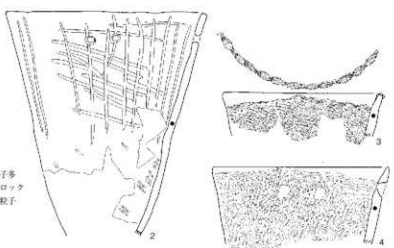
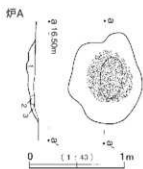
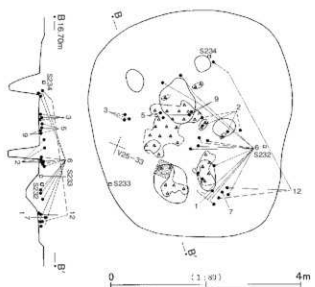
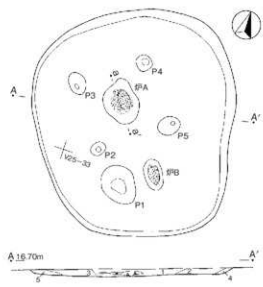
覆土中に貝が投棄されており、その範囲は炬Aより南側になる。同様に遺物の出土範囲も炬Aより南側に偏るが、貝ブロック範囲とは一致せず、炬Bの東側に最も集中する。貝ブロック範囲から出土した土器は少なく、土器の廃棄と貝の廃棄が別個であることを意味する。貝ブロックは2/3がハマグリ、1/4がオキシジミであった(第4表)。なお、器形が復元できた土器が11点と多い。

1は口径23.8cm、底径8.4cm、器高34.6cmを測り、ほぼ完形に復元できた。朝顔形の器形で、胴部上半が丸く張る。胴部最大径から底部までが長く、不安定な器形である。口唇部は丸く収め、底部は上げ底となる。外面は口縁部から底部に至るまで、全面無節Rの縄文を横帯施文するが、あまり整っておらず、食い違う部分や羽状となる部分がある。底部外面は磨かれている。繊維の混入は中程度である。

2は口径21.2cm、現存高23.7cmを測り、底部を欠損するが、ほかはほぼ完形に復元できた。胴部下半に丸みを帯び、直線的に開く器形である。口唇部は丸く収めるが不規則に上下し、意図したものかどうかはわからないが、全周のうち3cm程度の範囲に斜め方向の刻みが入る。器面の調整も雑で、外面はごく浅い斜め方向の沈線を不規則に施した後、縦方向の沈線を施す。胴部下半にはまばらに単節RLの縄文を縦に転がしている。なお、口縁部に割れ口を挟んで一対の補修孔が穿たれる。繊維の混入は比較的多く、胴部下半は被熱のためか、赤化して脆くなっている。

3は口縁部が全周の40%遺存する推定口径16.8cmの小形の土器である。口唇部は規則的に押押し、小波状となる。外面は無節Lの縄文を一方向に施す。繊維の混入は中程度である。

4も口縁部が全周の40%遺存し、推定口径18.3cm、現存高7.6cmを測る。口唇部は外側からの調整で薄く

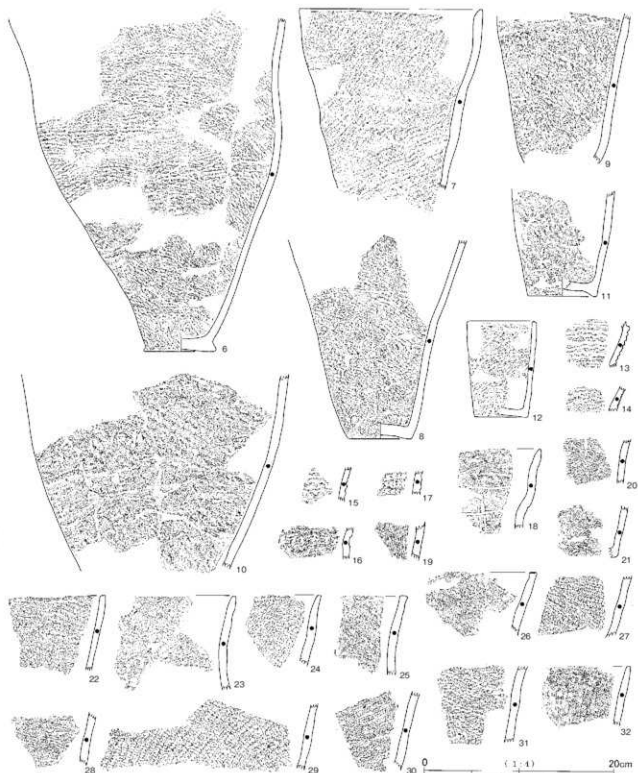


- |         |        |         |        |
|---------|--------|---------|--------|
| SI-018  | 伊      | SI-018  | 伊      |
| 1 混貝土層  | 貝・土器多  | 1 褐色土層  | 焼土粒子多  |
| 2 褐色土層  | ローム粒子少 | 2 赤褐色土層 | 焼土ブロック |
| 3 褐色土層  | ローム粒子多 | 3 褐色土層  | ローム粒子  |
| 4 黒褐色土層 | ローム粒子  |         |        |
| 5 黒褐色土層 | ローム粒子  |         |        |



第28図 SI-018 (1)





第29図 SI-018 (2)

仕上げ、断面は尖頭状となる。外面は口唇部から無節Rの縄文を施す。なお、口縁部に割れ口を挟んで一対の補修孔が穿たれる。繊維の混入は中程度である。

5は口径27.1cm、現存高28.5cmを測り、底部を欠損する。底部から直線的に開いて口縁部に至り、口唇部は端部を平坦に調整する。外面は軸不明+R2本の附加条縄文を全面に施し、口縁部から胴部下半までは同一方向、胴部下端で向きを変えた施文を行う。なお、口縁部に割れ口を挟んで一対の補修孔が穿たれ

る。繊維の混入は中程度である。

6は口縁部を欠損するが、そのほかはほぼ復元できている。底径7.6cm、現存高35.0cmを測り、現存最上部の径は28cm前後となる。口縁部がないため、底部を基準として実測すると、胴部は大きく偏った器形となる。ただし、胴部中位より上の形状はそれほど歪んだものではなく、胴部下半から底部にかかる部分が大きく歪んでいるとみられる。器厚は6mm～7mmで、土器の大きさを考えるとかなり薄く仕上げられている。外面全面に軸不明でL2本の附加条縄文を施し、口縁部は斜め方向、胴部上半は横方向、胴部下半は斜め方向といった施文意識がうかがえるが、それほど整ったものではない。底部は外側に張り出す形となり、底面が僅かに窪む。繊維の混入は中程度である。

7は口縁部から胴部中位が全周の30%遺存し、推定口径19.2cm、現存高19.0cmを測る。胴部上半から口縁部にかけて僅かに膨らむ器形で、口唇部は端部を平坦に調整する。外面は無節Rの縄文を全面一方向に施し、口縁部下8cm程度のところに、かぶせた粘土の痕跡が巡る。繊維の混入は少ない。

8は底径6.6cm、現存高21.0cmを測り、底部から胴部下半が遺存している。現存部分は直線的に開き、底部が僅かに上げ底となる器形で、外面は全面に無節Lの結節縄文を一方向に施す。底部外面は一定方向の調整痕がみられ、また、胴部下端に長さ3cm前後、幅6mm前後の縦方向の調整が5か所認められ、間隔からみて全周で6か所あったのではないかと思われる。加飾的な要素は認められず、何らかの目印として付けたとも考えられる。繊維の混入は中程度である。

9は現存部の推定最大径が13.4cm、現存高は15.5cmの胴部破片で、内面に縦方向の磨きがあることから、底部に近い部位の破片とみられる。外面は粗い無節Lの縄文が一方向に施される。繊維の混入は中程度である。

10は胴部下半の全周の40%が遺存する。現存部推定最大径は28cm前後、現存高20.4cmを測る。器面の調整はかなり雑で、小さな凹凸が多く残され、まばらに無節Lの縄文が施される。繊維の混入は中程度である。

11は底部から胴部下半にかけて全周の30%が遺存する。推定底径7.4cm、現存高11.3cmを測り、底部は上げ底となる。器面は無節Lの縄文を施し、繊維の混入は中程度である。

12は推定口径7.4cm、底径5.5cm、器高10.1cmを測る小型の土器である。底径と口径の差があまり大きくない筒状の器形で、底部は僅かに上げ底となる。口唇部は端部を平坦に調整し、口縁部外面も5mm程度の幅を無文とする。胴部は無節Rの縄文を一方向に施す。胴部内面および底部外面は磨かれる。繊維の混入は多い。

13～15は波状文を描くものである。13は破片上端で大きく屈曲する。13・15の波状文は間隔が狭いが、14はそれと比較して間延びしている。内面は13・15が横方向に丁寧に磨かれ、14は縦方向の調整がみられる。繊維の混入は少ない。

16・17は竹管を用いた結節沈線に加飾されるものである。16は口縁部下のくびれ部破片で、くびれ部に結節沈線を巡らせる。17は現存部分に3段の結節沈線が施され、地文にL摺りの縄文を施す。ともに繊維の混入は中程度である。

18は斜交沈線を施すもので、口縁部の破片である。口唇部は薄く仕上げ、断面尖頭状となる。朝顔形の土器で、縦方向の沈線を引いたのち、横方向の沈線を施す。繊維の混入は中程度である。

19～31は地文のみが施されるものである。19は縦方向の条線が施される。条線は2本一対となり、半截

竹管用の工具を用いたようだが、条間隔は1mm強と細い。繊維の混入は中程度である。

20・21はハイガイを用いた貝殻背圧痕が施される。両破片とも殻頂部は押し圧されていないが、放射肋の間隔は狭く、最も多い部分で10本の放射肋が押し圧されることから、殻長2cm～3cmの個体を用いたと推定できる。繊維の混入は中程度である。

22～31は縄文のみが施されるもので、このうち、22～26は口縁部の破片である。23・25は朝顔形の器形で、口唇部は22～24が丸く取め、25・26は端部を平坦に調整した上を棒状工具で刻んでいる。外面は22が無節R、25・26が無節L、23は軸不明でL1本、24は2種R+L2本の附加条縄文である。繊維の混入は24が中程度で、ほかは多い。27～31は胴部破片である。29が単節LR、ほかは附加条縄文で、27が附加条1種RL+L1本、ほかは軸不明でR2本の附加となる。繊維の混入は中程度である。

32は無文の土器の口縁部破片である。口唇部は製作時に伏せて置いたためか、平坦となる。外面は横方向に粗く調整した上を縦方向の調整で整える。繊維の混入は中程度である。

斜格子文や波状文を施す土器も含まれるが、地文のみの土器が多い。いずれも黒浜式に比定できる。このほかに土製品1点(第107図24)と側面調整礫6点を出土し、側面調整礫はこのうち4点を図示した(第119図231～234)。

#### SI-019 (第30図、図版4・43)

V24-94付近に位置する。平面形は直径450mmの円形で、確認面からの深さは0.07mを測る。遺存する深さが浅く、壁の立ち上がりも明瞭ではなく、浅い皿状の断面となる。炬および柱穴は検出されなかったが、堅穴住居として扱った。

住居の遺存状況がよくないこともあり、出土遺物は少ない。住居北壁周辺と南東壁周辺にまとまるが、全形を復元できる土器は出土しなかった。

1は連続刺突文で口縁部を飾るもので、直径3mm程度の工具を2本一組にして連続刺突する。口唇部に1列、口縁部は斜め方向および縦方向の刺突がある。なお地文に燃糸文が施される。口縁部は緩く外反し、内面は横方向に丁寧に磨いている。繊維の混入は多い。

2～6は平行沈線が施されるものである。2・3はともに口縁部の破片で、単節LRの縄文を地文として、平行沈線を施す。2は口唇部直下とくびれ部に平行沈線を巡らせ、3は縦方向の沈線を軸として横方向の沈線を配したものの。4は胴部破片で、単節RLの縄文を地文としてコンパス文を巡らせる。5・6は地文がなく、縦方向の沈線と斜め方向の沈線が施され、あるいは葉脈文であるかもしれない。5は口縁部、6は胴部下端の破片である。繊維の混入は2・3・5が多く、6は少ない。4は繊維とともに白色の鉱物粒子が目立つ。

7は結節沈線が施されるものである。単節LR/RLの2種類の縄文を地文として、くびれ部に結節沈線を巡らせている。繊維の混入は少ない。

8～23は縄文のみが施されるものである。このうち、8～14は口縁部の破片である。口縁部は内湾気味の8・10・12・14と外反する11・13がみられる。口唇部はいずれも丸く取められ、10・14は山形の緩い波状となる。また10は波頂部から長さ約4cm、幅1.5cmの隆帯を付する。縄文の施文は10を除いて一方向であり、8・12が単節RL、9はLRの横帯施文であるが、ループ文となる15と同一個体の可能性がある。10は単節RL/LRの羽状縄文、11・13・14は附加条1種R+R2本で、11・13は同一個体の可能性がある。内面はすべて横方向に磨かれる。繊維の混入は9・10・12が多く、13・14は中程度、8・11は少ない。15

～23は胴部の破片である。15・16・19・21・23の傾きは胴部上半とみられ、17・22は胴部下位にあたる。胴部の縄文は口縁部より多彩で、15は前述したようにループ文となる。19は無節R、16・19・20は単節RL/LRの羽状縄文で、16は環付末端LRを用いる。17・18・21・23は附加条縄文で、17・18は附加条1種LR+L1本、23は1種R+R2本で、原体の様子は11・13と酷似する。また、23は短い平行沈線を地文の補足として施す。21は附加条2種RL+r1本で、格子状の描出としている。繊維の混入は15・19・23が多く、ほかは中程度である。

葉脈文やコンパス文等沈線でモチーフを描く土器が比較的多く含まれる。いずれも黒浜式に比定できる。破片のため図示していない磨製石斧2点のほか側面調整礫1点(第119図235)を出土した。

#### SI-020 (第30図、図版4・43)

U23-39付近に位置する。平面形は5.10m×4.43mの楕円形で、確認面からの深さは0.09mと浅い。柱穴は検出されず、北西寄りの床面に僅かに焼土の堆積がみられたが、被熱痕跡がなく、炉と認定するにはいたっていない。

遺物の出土量は少なく、破片8点を図示した。

1～4は沈線が施されるものである。1は口縁部破片で、細く浅い単沈線を縦方向に施す。口唇部は端部を平坦に調整する。2～4は胴部破片で、2・3は平行沈線で振れ幅の少ない波状文を描く。4は幅が5mm程度の工具で太く浅い沈線を並走させ、沈線以外の部分が紐線のように浮き出ている。繊維の混入はいずれも中程度である。

5～8は縄文のみが施されるものである。5は口縁部破片で、口唇部は丸く収め、外面は無節Lの縄文を施す。6～8は胴部破片で、6は単節RL、7・8は結節縄文で結節部だけを施文する。繊維の混入は7が多く、5・6は中程度、8は少ない。

図示できた土器は少ないが、いずれも黒浜式に比定できる。ほかに北東壁際から側面調整礫1点(第119図236)を出土した。

## 2 陥穴

#### SK-088 (第31図、図版13)

T25-48付近に位置する。平面形は2.66m×0.70mの長楕円形で、確認面からの深さは最深部で1.01mを測る。長軸方向は等高線に平行で、断面形は東端がなだらかに立ち上がり、西端はオーバーハングする。底面は幅0.20mの溝状で、形状から縄文時代草創期後半～早期前半に類出する溝型陥穴と考えられる。

#### SK-089 (第31図、図版13)

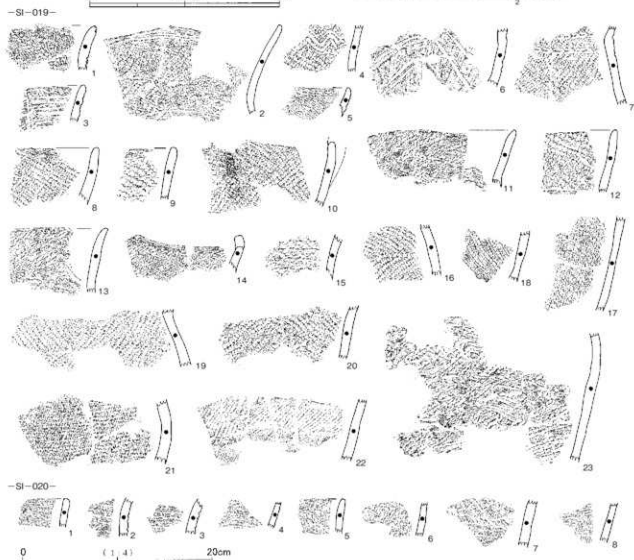
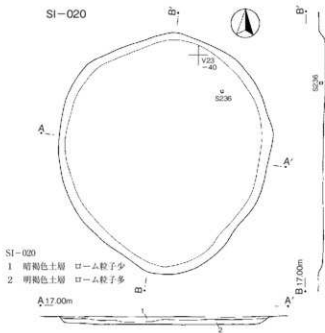
T25-77付近に位置する。平面形は2.90m×0.77mの長楕円形で、底面の幅は0.10m～0.30mである。確認面からの深さは最深部で0.96mを測る。長軸方向は等高線に平行で、断面は東端がオーバーハングする。

#### SK-090 (第31図、図版13)

V26-20付近に位置する。平面形は2.98m×0.78mの長楕円形で、底面は幅0.10mである。確認面からの深さは最深部で0.96mを測る。長軸方向は等高線に平行で、断面形は東端がオーバーハングする。

#### SK-091 (第31図、図版13)

U23-19付近に位置し、浅い谷の最奥部となる。平面形は3.04m×0.88mの長楕円形で、確認面からの深さは最深部で0.98mを測る。底面は比較的平坦で、幅は0.15mである。長軸方向は等高線に直交し、断面は西端がなだらかに立ち上がり、東端はオーバーハングする。



第30図 SI-019、SI-020

### 3 土坑

#### SK-001 (第31図、図版14・44)

T24-54付近に位置する。平面形は1.83m×1.05mの楕円形で、確認面からの深さは0.32mを測る。平面形は不整形だが、底面は平坦で、覆土に焼土粒子・炭化粒子が含まれる。

覆土中層から下層にかけて出土した2点の土器を図示した。1は口縁部の破片で、朝顔形の器形となる。施文はなく、繊維の混入は少ない。2は胴部破片で、外面に軸不明でR2本を附加した縄文が施される。繊維の混入は中程度である。

#### SK-002 (第31図、図版14・44)

T24-55付近に位置する。平面形は1.24m×1.06mの円形で、確認面からの深さは0.26mを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりもしっかりしている。

1点の破片を図示した。胴部の破片で、くびれ部とみられる。外面は附加条1種R+R3本を施す。繊維の混入は中程度である。

#### SK-003 (第32図、図版2・44)

T25-17付近に位置する。SI-002と重複関係にあるが本土坑が新しい。平面形は2.05m×1.95mの三角形に近い不整形形で、確認面からの深さは0.22mを測る。底面に径約0.50m、深さ0.22mの小ピットが検出された。SI-002と重複する部分にも0.32m×0.10m、深さ0.07mのピットがあるが、SI-002の柱穴の一つである可能性もある。

遺物は東側に集中し、いずれも覆土上層から出土している。このうち11点の破片と西壁際のやはり上層から出土した側面調整礫1点(第121図267)を図示した。

土器は竹管等による加飾があるものはなく、縄文施文と無文の土器である。1～10は縄文が施されるものである。このうち1～5は口縁部破片で、直立気味から外反気味に開く。口唇部は丸く収め、外面は無節Lの縄文を施す。また、2は緩やかな波状となり、波頂部に押圧がある。5の縄文はまばらで、口唇部は連続して押圧される。繊維の混入はいずれも多い。6～10は胴部破片で、9は破片上部に無文帯があり、口縁部に近い部位であろうか。また、6・10は丸みをもつことから胴部中位から上半、7・8は推定径が小さく、内面に縦方向の調整がみられることから底部に近い部位とみられる。6～8・10は無節Lの縄文を一方に、9は附加条縄文であろうか。繊維の混入は6・9が多く、10は中程度、7・8は少ない。

11は無文の口縁部破片で、内外面とも横方向に磨かれる。繊維の混入は中程度である。

#### SK-004 (第31図、図版14)

U24-92付近に位置する。平面形は0.61m×0.46mの楕円形で、底面北西寄りに0.35m×0.23mの楕円形のピットが穿たれて段をなす。確認面から最深部で0.37mを測る。

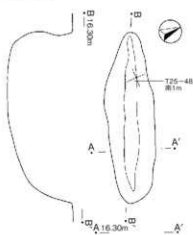
#### SK-005 (第32図、図版14)

T24-87付近に位置する。平面形は0.97m×0.77mの楕円形で、断面形は船底状だが、底面中央に0.22m×0.13mの楕円形のピットが穿たれる。確認面からの深さは最深部で0.35mを測る。

#### SK-006 (第31図、図版2)

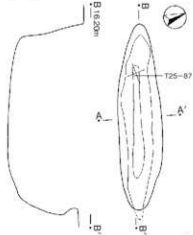
T24-77付近に位置する。東側にSI-004と重複関係にあるが新旧関係は不明で、重複部分の壁は検出できなかった。現状での規模は1.03m×0.85mであるが、長軸長は1.40mと推定され、平面形は楕円形となる。確認面からの深さは0.20mを測る。底面は平坦で、覆土に炭化粒子を含む。

SK-088



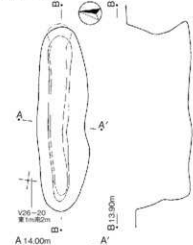
- SK-088
- 1 黒褐色土層 新期テフラ塵状、炭化粒子、焼土粒子少
  - 2 暗褐色土層 ソフトロームブロック
  - 3 暗褐色土層 ロームブロック
  - 4 暗褐色土層 ソフトロームブロック
  - 5 暗褐色土層 ロームブロック
  - 6 黒褐色土層 ローム土層

SK-089



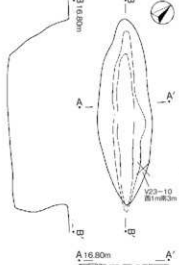
- SK-089
- 1 黒褐色土層 新期テフラ塵状
  - 2 黒褐色土層 ソフトローム粒子少
  - 3 暗褐色土層 ソフトローム粒子多
  - 4 暗褐色土層 ハードロームブロック少
  - 5 暗褐色土層 ソフトローム粒子少
  - 6 黄褐色土層 ローム土多
  - 7 暗褐色土層 ローム土多
  - 8 暗褐色土層 黒色土塵状

SK-090

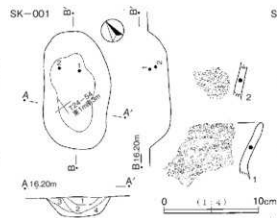


- SK-090
- 1 黒褐色土層
  - 2 黒色土層
  - 3 褐色土層
  - 4 黒褐色土層 ローム土
  - 5 黄褐色土層 ローム土主体
  - 6 黒褐色土層 硬質
  - 7 褐色土層

SK-091

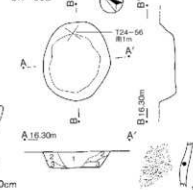


- SK-091
- 1 褐色土層 ロームアロックス少
  - 2 暗褐色土層 ローム粒子少
  - 3 明褐色土層 ロームアロックス少、ローム粒子多
  - 4 暗褐色土層 ロームアロックス少
  - 5 黄褐色土層 ロームアロックス



- SK-001
- 1 黒褐色土層 新期テフラ塵状、焼土粒子、炭化粒子多
  - 2 黒褐色土層 焼土粒子、炭化粒子少
  - 3 暗褐色土層 テフラ塵状多、焼土粒子、炭化粒子少
  - 4 黄褐色土層

SK-002



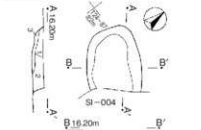
- SK-002
- 1 黒褐色土層 新期テフラ塵状、炭化粒子、焼土粒子少
  - 2 暗褐色土層 新期テフラ多
  - 3 暗褐色土層 ソフトローム多

SK-004



- SK-004
- 1 暗褐色土層
  - 2 黒褐色土層 炭化粒子少
  - 3 暗褐色土層 新期テフラ塵状
  - 4 黄褐色土層 ローム粒子多
  - 5 暗褐色土層

SK-006



- SK-006
- 1 暗褐色土層 炭化粒子、ローム粒子少
  - 2 黒褐色土層 新期テフラ塵状、炭化粒子少
  - 3 褐色土層 ローム粒子多

0 (1:60) 2m

第31図 A地区縄文時代土坑(1)

SK-007 (第32図、図版44)

T25-08付近に位置する。平面形は1.40m×1.16mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.28mを測る。底面北寄りに0.47m×0.20mの楕円形のビットがあり、最深部で確認面から0.36mを測るが、土層断面の観察から、土坑埋没後のものである。底面は凹凸があり、覆土には炭化粒子・ローム粒子が含まれている。

破片1点を図示した。無節Rの縄文を施し、繊維の混入は中程度である。

SK-008 (第32図、図版14・44)

U24-31付近に位置する。平面形は1.82m×1.30mの楕円形で、確認面からの深さは0.32mを測る。底面は平坦で、北西端部に径約0.38mの小ビットを検出した。

破片1点を図示した。器面は附加条1種R+R2本を施し、繊維の混入は中程度である。

SK-009 (第32図、図版14・44)

U24-51付近に位置する。平面形は1.64m×1.00mの楕円形で、確認面からの深さは最深部で0.40mを測る。底面は東から西に向かって緩やかに深くなり、西端に直径0.15mの浅いビットがある。

1点の破片を図示した。器面は附加条1種R+R2本を施し、繊維の混入は中程度である。

SK-010 (第32図、図版14)

U24-53付近に位置する。平面形は1.62m×1.48mの円形で、確認面からの深さは0.40mを測る。底面は皿状であるが、ビット状の浅い凹凸がある。

SK-011 (第32図、図版2・44)

T25-07付近に位置する。SI-002と重複関係にあるが新旧関係は明らかにできず、本土坑がSI-002床面から深く掘り込まれていることから平面形はうかがえるが、重複部分の壁はともに検出できなかった。平面形は1.40m×1.00mの楕円形で、確認面からの深さは0.32mを測る。

2点の破片を図示した。1は胴部下半、2はくびれ部の破片で、器面は1がR、2がLの無節縄文を施す。繊維の混入は中程度である。

SK-012 (第33図、図版2・44)

T25-17付近に位置する。SI-002と重複関係にあるが新旧関係は不明である。本跡の方がSI-002の床面より深く掘り込まれており、平面形はうかがえるが、重複部分の壁は検出できなかった。平面形は2.90m×1.45mの楕円形で、確認面からの深さは0.53mを測る。底面中央に0.80m×0.30m、深さ0.10m程度の窪みがある。

4点の土器片と覆土下層から出土した磨石類1点(第115図187)を図示した。

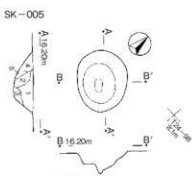
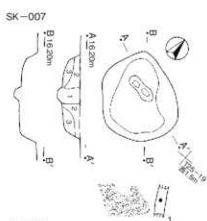
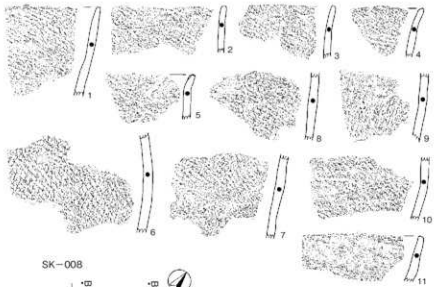
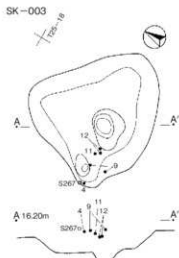
土器はいずれも胴部破片で、1は単節LR、2は無節L、3は燃糸文L、4は附加条2種R+L2本を施す。繊維の混入は2が少ないが、ほかは多い。

SK-013 (第33図、図版14・44)

T24-38付近に位置する。平面形は1.50m×1.06mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.14mを測る。底面中央に径0.46mの円形のビットがあるが、土層断面の観察では同じ位置に埋没後に掘られた痕跡が認められ、ビットの所属については明確にできなかった。

破片1点を図示した。胴部破片で器面は無節Rの縄文を施し、繊維の混入は多い。このほかに剥片類1点を出土している。

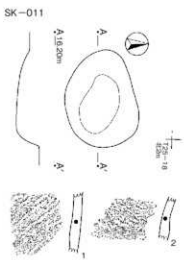
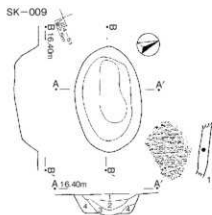




- SK-007
- 1 黒褐色土層 新期テフラ塊状、焼土粒子、炭化粒子
  - 2 暗褐色土層 ローム粒子、炭化粒子少
  - 3 褐色土層 ローム粒子多

- SK-008
- 1 黒褐色土層 新期テフラ塊状、焼土粒子、炭化粒子
  - 2 黒褐色土層 ローム粒子、炭化粒子
  - 3 黒褐色土層 ロームブロック
  - 4 暗褐色土層 ロームブロック、ローム粒子、炭化粒子
  - 5 明褐色土層 ソフトロームブロック多

- SK-005
- 1 黒褐色土層 炭化粒子少
  - 2 暗褐色土層 ローム粒子少
  - 3 黄褐色土層 ローム粒子多
  - 4 暗褐色土層 新期テフラ
  - 5 黄褐色土層 ローム粒子多



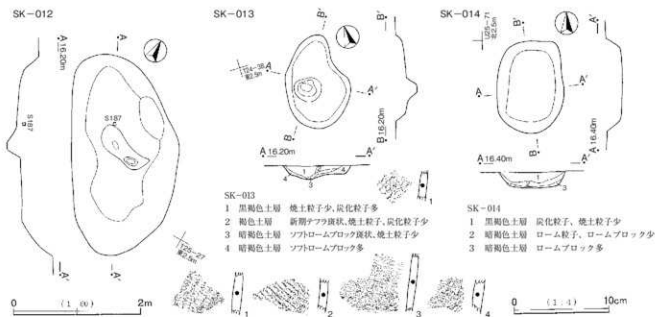
- SK-009
- 1 黒褐色土層 新期テフラ塊状多、炭化粒子、焼土粒子少
  - 2 黒褐色土層 炭化粒子、ローム粒子多
  - 3 暗褐色土層 ソフトロームブロック
  - 4 明褐色土層 ソフトローム密

- SK-010
- 1 黒褐色土層 ローム粒子、焼土粒子少
  - 2 黒褐色土層 ローム粒子、焼土粒子
  - 3 暗褐色土層 ソフトロームブロック少
  - 4 暗褐色土層 ロームブロック多
  - 5 暗褐色土層 ロームブロック多

0 1:100 2m

0 (1:4) 10cm

第32図 A地区縄文時代土坑(2)



第33図 A地区縄文時代土坑(3)

SK-014 (第33図、図版14)

U25-60付近に位置する。平面形は1.47m×1.05mの隅丸方形で、確認面からの深さは0.28mを測る。底面は平坦で、覆土に炭化粒子・焼土粒子が含まれる。

4 遺構外出土縄文土器 (第34・35、図版44・45)

第1群土器

1類 (1)

早期燃糸文系土器である。破片1点を図示した。口縁部破片で、口唇部は若干肥厚する。器面は縦方向に燃糸文しを施すが、施文は浅い。胎土は白色の鉱物粒子が目立つ。

3類 (2・3)

広義の条痕文系土器である。2は鵜ガ島台式の口縁部破片で、内剥ぎ気味の口唇部を棒状工具で内外縁両側から刻む。区画文の描線は微隆起線文と円形竹管刺突文で、区画内に円形竹管を斜めにした刺突を充填する。内面は貝殻条痕文である。繊維の混入は少ない。3は内外面とも貝殻条痕文で、外面は横方向、内面は縦方向となる。繊維の混入は中程度である。

第2群土器

4類 (4~53)

1種 竹管等を用いて刺突文、結節沈線などが施されるものである。

4・5は半截竹管を用いたコンパス文が施されるもので、ともに口縁部破片である。口縁部が僅かに内湾する朝顔形で、地文の縄文を施した上に、円形竹管刺突文、コンパス文を巡らせる。また、5には縦方向の沈線区画があり、コンパス文がかなり崩れ鋸歯状に近い。繊維の混入は多い。

6~9は連続刺突文を施すもので、8・9は押し引きとなる。いずれも口縁部から胴部上半の部位とみられ、6は口縁に沿って2段、8はくびれ部に2段、9は鋸状隆帯に沿って刺突文を巡らす。7には地文がないがほかは縄文を施し、6・8は附加条1種R+R2本、9は1種R+L2本の附加条縄文である。

繊維の混入は6が中程度、7～9は多い。

10～14は口縁部を結節沈線で加飾するものである。10・12・13は口縁部破片で、いずれも山形の波状口縁となる。10・11は同一個体で、朝顔形の器形となり、胴部に縄文が施される。口縁部の施文は太さの異なる2種類の竹管を用いており、太い竹管で主幹となる区画を描き、細い竹管を区画内部に用いる。繊維の混入はいずれも中程度である。

15～17は平行沈線で口縁部を加飾するものである。15・16は口縁部破片で、15は半円形の波状口縁となる。また、16は口縁部に縦方向の沈線を加える。沈線は16・17が半載竹管を使用し、ともに横方向から斜めに施す。繊維の混入は15が多く、ほかは中程度である。

18～24は単沈線あるいは平行沈線を縦位、斜位に施すものである。18は縦の沈線を軸として左右に斜行する沈線を配し、葉脈文風の構成となる。また、21は間隔を置いて沈線を施し、それぞれが三角形の区画風な構成となる。19・20は外反する口縁部に縦方向の沈線、胴部には附加条1種R+R2本を施す。22～24は沈線を斜交させ、格子状の構成となる。繊維の混入はいずれも多く、18・21は砂粒が目立つ。

2種 地文のみが施されるもので、25を除いて縄文を地文とする。25は胴部下位の破片で、器面は凹凸が目立ち、ハイガイを用いた貝殻背圧痕を施す。繊維の混入は多い。

26～53は縄文のみが施されるものである。このうち26～40は口縁部破片で、26～32は口唇部を平坦に調整し、33は口唇部を押し圧して小波状に、34～38は丸く取め、39・40は内面を調整して薄く仕上げる。口縁部のほとんどが直線的もしくは外反し、32は内湾している。縄文は口縁部から施文が始まり、27・29は口唇部が外側に張り出しているためか、8mm程度の幅で縄文が施されない。縄文本体は無節、単節、附加条と多種にわたるが、附加条縄文を施す30～32・36は施文方向を変え装飾的效果を出している。繊維の混入は32・38が多く、30は少ないが、ほかは中程度である。41～52は胴部破片である。44～46は内湾しており、胴部上位の破片とみられ、41は内面に縦方向の調整がみられることから、胴部下半と考えられる。41は環付末端単節LR、43は単節LR、42は無節R、44は無節L、45～47は附加条1種R+R2本で、46・47は施文方向を変えて装飾的效果を出している。48～52は附加条3種で、格子状の効果を出している。繊維の混入は51・52が多く、41～45が中程度から多め、46・47は少ない。53は口縁部下のくびれ部破片である。くびれ部に鈎状隆帯を巡らせ、隆帯頂部にも無節Rの縄文が施される。繊維の混入は多い。

### 第3群土器

#### 1類 (54・55)

2点の破片を図示した。ともに縦位の結節縄文が施されるもので、54は口唇部を斜位に刻む。胎土は砂粒が多いが、そのほかに目立った混和剤はない。五領ヶ台Ⅱ式の範範に捉えられる。

#### 2類 (56～60)

5点の破片を図示した。56・57は口縁部破片で、内側に稜を形成し端部が外側へ開く。56は口縁部文様帯に頂部を刻む隆帯が用いられ、隆帯内側に沿って連続刺突文を施す。57は口縁部文様帯の上端を連続刺突文で区画している。58～60は胴部破片で、60は口縁部文様帯の下端であろうか。58・59はともにヒダ状文と波状沈線がみられる。胎土は白色の鉱物粒子が目立ち、微細な雲母粒を僅かに含む。破片が小さく、阿玉台式ということで留めておく。

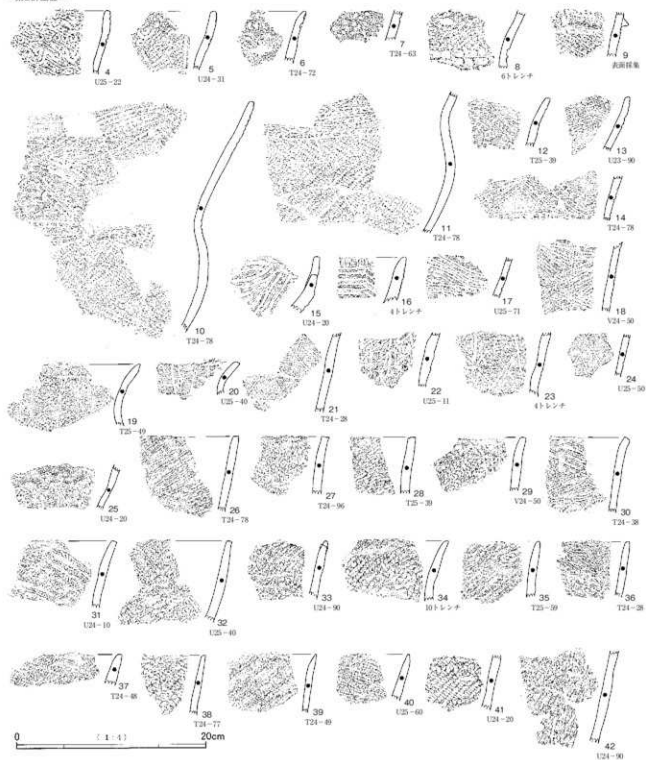
#### 5類 (61)

1点の破片を図示した。磨消帯を伴う懸垂文と、縦位施文の縄文がみられる。懸垂文の沈線は太く浅い。

—第1群土器—

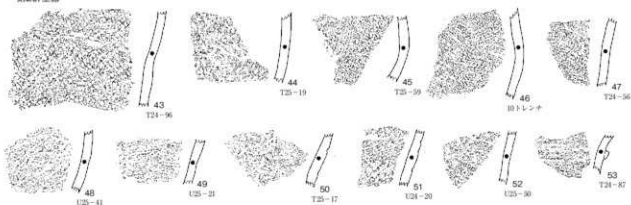


—第2群土器—

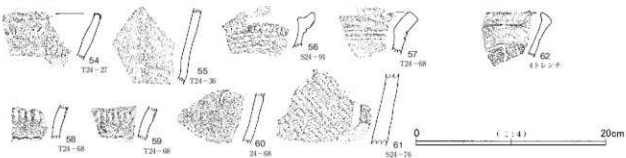


第34図 A地区遺構外出土縄文土器(1)

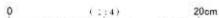
—第2群土器—



—第3群土器—



—第4群土器—



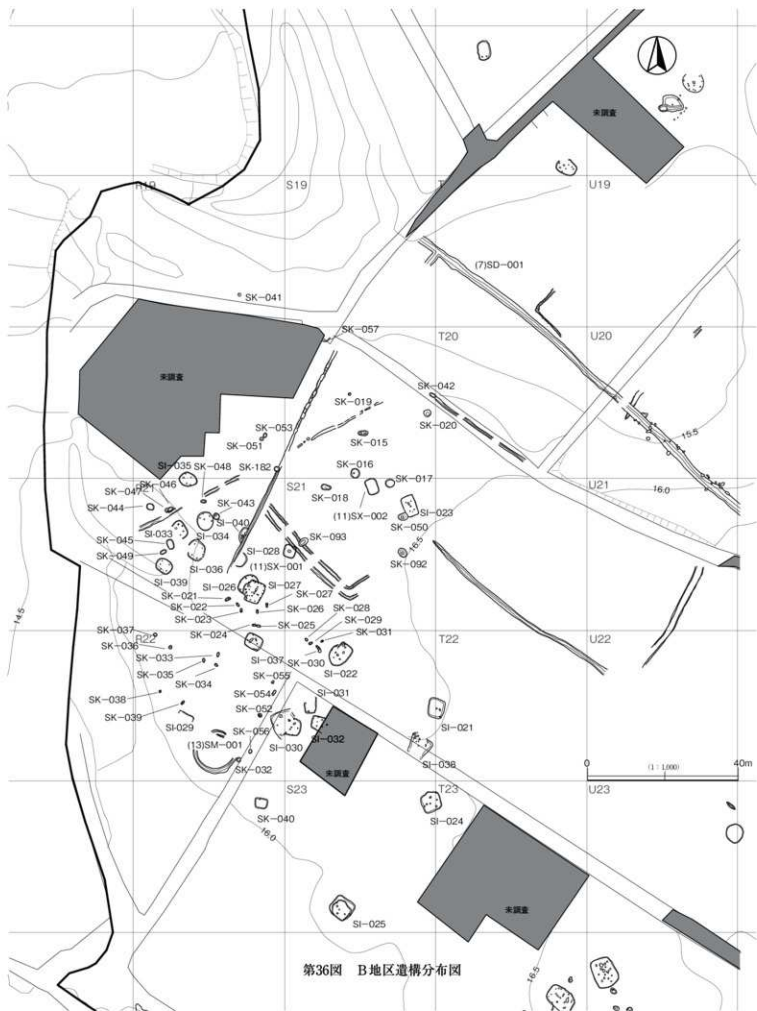
第35図 A地区遺構外出土縄文土器(2)

加曾利II～EIII式であろう。

第4群土器

I類 (62)

1点を図示した。口縁部の破片で、端部が内側に屈曲する。沈線で区画した意匠文を描き、内部に細かい単節LRの縄文を充填する。内外面とも丁寧に磨かれている。称名寺式である。



第36图 B地区遺構分布图

## 第2節 B地区の遺構と遺物 (第36図)

B地区は、遺跡の南西部にあたるA地区北西に位置し、南側は谷を挟んで矢船遺跡に接する。第2・7・8・10・11・13・16・18~22・24・25・27・29~31・34~36・40地点、大グリッドQ19~25、R19~25、S19~25、T20~23、U20~23の範囲が該当する。検出された遺構は、竪穴住居20軒、陥穴2基、土坑43基である。古常陸川谷から貫入する小支谷の標高15m~17m前後の台地縁辺部にあたり、竪穴住居、土坑とも、西側斜面に面した標高16m~17mの高さに分布する。

### 1 竪穴住居

#### SI-021 (第37図、図版4・24・46)

T22-50付近に位置する。平面形は5.16m×4.32mの隅丸方形で、確認面からの深さは0.27mを測る。坪は北壁近くに位置するが、火床部の範囲が0.23m×0.15mと小さく、掘り込みも浅い。柱穴と思われるピットは4基検出された。このうち3基は中央から東壁寄りに、1基は南東隅に位置する。床面からの深さは、P1は0.20m、P2は0.79m、P3は0.21m、P4は0.41mであり、住居中央からずれた位置にあるP2が最も深い。

出土遺物の量は少なく、1はかろうじて器形をうかがうことができる。これ以外に接合できた破片はあまりない。

1~7は竹管を用いた刺突、結節沈線、沈線が施されるものである。1は口縁部から胴部中途にかけて全周の20%が遺存する。口縁部が内湾気味に大きく開く器形で、口縁部に山形の突起が付く。突起先端は欠損しているが、遺存部分での波頂部の間隔が約8cmであるため2個一対となる可能性がある。口縁部文様帯は円形竹管刺突文で埋められ、現存部分のみを限り、口縁部に沿う1段と文様帯下端の2段が横方向に連続する。また、口縁波頂部から2列一対の縦方向の連続が認められるが、その他の部分に規則性はみられない。胴部は無節RとLを用いた羽状縄文で、一部に縦方向の細い粘土の盛り上がりがあるが、施文変換点ではなく、貼り付けによるものである。繊維の混入は中程度である。

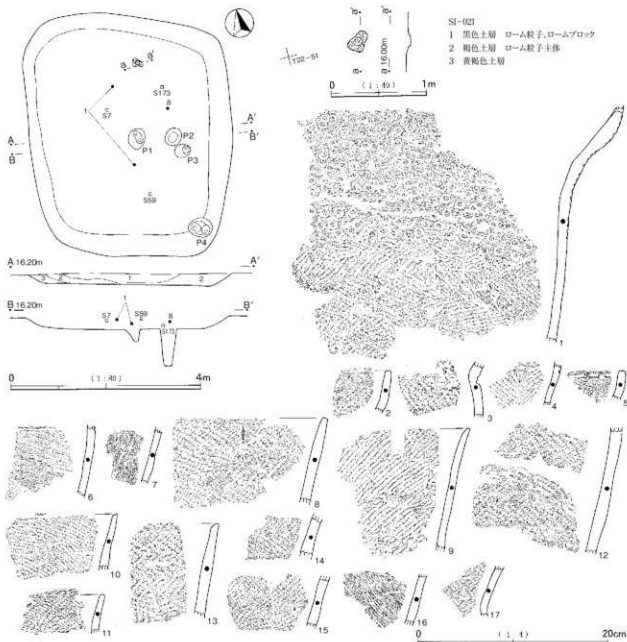
2も内湾気味の口縁部破片である。斜方向の平行沈線と不規則な刺突文が施される。3・4は横方向に連続刺突文を巡らす。刺突文以下は縄文で、4は施文変換点に低い粘土の盛り上がり認められる。5は口縁部破片で、口縁部に沿って1条の結節沈線、6は半載竹管を使用した沈線を巡らす。沈線以下は5が単節RL、6が燃糸文Lである。繊維の混入は2~4が多く5は少ない。

7は斜交沈線のみがみられるが、はっきりした格子状とはならない。繊維の混入は少ない。

8~17は縄文のみが施されるものである。このうち8~11は口縁部の破片である。口唇部は8が端部を調整し断面角頭状、10・13は内削ぎ、9・11は丸く取める。また11は口縁端部にも縄文が施される。縄文は9が無節R、10が無節Lを一方に、8・13が単節LR/RLで羽状縄文、11は単節LRを施している。また、8・9は一部に縦方向の細い粘土の貼り付けがある。繊維の混入は9・10が多くほかは中程度で、8・13は白色の鉱物粒子が目立つ。

12・14~17は胴部破片である。12は内湾気味であることから胴部中途、17は反外することから胴部上位とみられる。縄文は12が単節RL、15はLR、14は無節のR/Lで羽状に、16は燃糸文L、17は格子となる附加条縄文である。繊維の混入は12・15・17が多く、14は少ない。12は白色の鉱物粒子がかなり目立つ。

図示できた遺物は多くないが、口縁部に円形竹管刺突文を密に施す1が特徴的であり、いずれも黒浜式に比定できる。このほかすべて図示できた訳ではないが石磯1点(第108図7)、石磯未成品1点(第108



第37図 SI-021

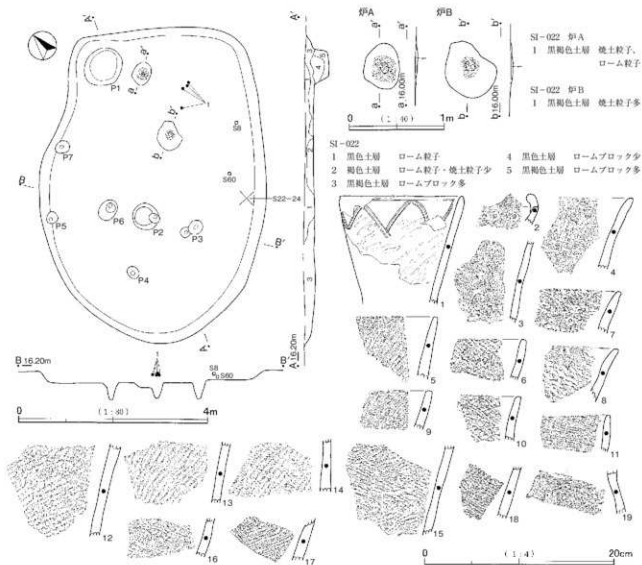
図59)、楔形石器3点、磨製石斧1点、磨石類1点(第113図173)、石皿1点、側面調整磔1点、両極剥片4点の多種類の石器を出土した。

SI-022 (第38図、図版4・24・46)

S22-13付近に位置する。平面形は6.54m×3.64mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.11mを測る。炉は北壁近くに炉A、中央より北寄りに炉Bの2か所が設けられている。規模は炉Aが0.58m×0.54m、炉Bは0.50m×0.38mを測る。どちらも被熱痕跡が認められた。柱穴と思われるピットは6基を検出した。中央部に並ぶP2、P3、P6は0.29m～0.37m、P4、P5、P7は0.16m～0.19mの深さの範囲にそれぞれ収束する。また、北隅に床面での径0.80m、深さ0.31mのP1を検出し、覆土の堆積状況から本住居に伴うものと考えられ、貯蔵穴等の用途が想定できる。

遺物の出土量は少なく、特に集中することもない。1が炉A周辺から出土している。





1は口径130cm、現存高114cmを測り、底部を欠損する。現存での最小径は6.5cm程度で、小型の深鉢形土器である。底部から直線的に開き、口唇部を丸く収める。口縁部に半載竹管を用いた波状文と横位沈線を1条巡らす。波状文は全周8単位であるが、波頂部の間隔は不揃いである。胴部は器面に凹凸があり、無節Rの縄文を施す。繊維の混入は多い。

2は口縁部破片で、口縁端部に山形の小突起が付される。器面は口縁に沿って円形竹管刺突文を巡らせ、口縁部文様帯に半載竹管でモチーフを描いている。繊維の混入は中程度である。

3は斜交する沈線が描かれる。器面は凹凸が目立ち、繊維の混入は多い。

4～18は縄文のみが施されるものである。このうち4～11は口縁部、12～18は胴部の破片である。6・9は内湾気味、これ以外は直線的に開き、口唇部は6・8・10・11が端部を平坦に調整し、4・5は内削ぎ気味、7・9は丸く収める。縄文は4・5が無節R、6は単節RL、8は無節L、9～11は附加条縄文で、9は軸不明でL2本を附加、10は2種R+L2本、11は1種R+L2本である。繊維の混入は8・10・11が多く、4～6は中程度、7・9は少ない。12～18は胴部破片で、図示したものは直線的な部位である。縄文は12・13が無節Rを一方に、14は単節LRを一方に、15～18は燃糸文もしくは附加条縄文で、15

はR 然り 2 本、16 は附加条 2 種 R + L 2 本、17 は 1 種 R + R 2 本、18 は 2 種 L + R 2 本/R + L 2 本で羽状とする。繊維の混入は13・16が多く、ほかは中程度である。

19 は地文に貝殻腹縁文を施すものである。口縁部下のくびれ部の破片で、くびれ部から下に放射肋をもつ貝殻を使った貝殻腹縁文を縦方向に施す。繊維の混入は中程度である。

図示した遺物は沈線によって加飾する土器が含まれ、いずれも黒浜式に比定できる。このほかに覆土中から土製甲板（第107図2）、石鉄1点（第108図8）、石鉄未成品1点（第108図60）のほか、図示していないが楔形石器3点、敲石1点、両極剥片4点、剥片類4点が出土している。

#### SI-023（第39図、図版4・24・47）

S21-18付近に位置する。南西隅がSK-050と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は5.57m×3.44mの長方形で、確認面からの深さは0.18mを測る。炉は中央から北寄りに検出された。規模は0.86m×0.42mで、床面から0.10mの掘り込みがあるが、炉周辺の床面が周囲より僅かに高くなっている。底面には被熱痕跡が認められた。柱穴と思われるビット4基を検出した。対角線上に並び、床面からの深さは0.21m～0.53mとばらつきがある。また、炉の南側に径0.32m、床面からの深さ0.17mのP3を検出した。深さが浅く柱穴と断定するにはいたっていない。また、P4の北側の床面直上に0.10m×0.35mの範囲で、厚さ0.12mの遺構内貝層が形成されている。サンプル採取は行っていないが、調査時の記録では小型のハマグリが主体であったようである。

遺物の出土量は少なく、P4・P5周辺からまとまって出土した。そのほかP5周辺から石鉄未成品が1点（第108図61）出土している。

1は推定口径21.4cm、現存高19.2cmを測り、口縁部が全周の50%遺存している。胴部中位から膨らみ、口縁部が僅かに内湾する深鉢形土器である。口縁部外縁に幅8mm程度の横方向の調整がみられ、口唇部は薄く仕上げられる。外面は無節Lの縄文を一方方向に施すが、現存部分ではくびれ部から下に縄文はみられない。また、現存部下端は被熱して赤色化している。繊維の混入は多い。

2は底径7.3cm、現存高10.0cmを測り、底部から胴部下半にかけて遺存している。底部は上げ底で、外面を丁寧に磨く。胴部外面は底部に至るまで単節LRと無節Rの縄文を羽状に施す。繊維の混入は中程度である。

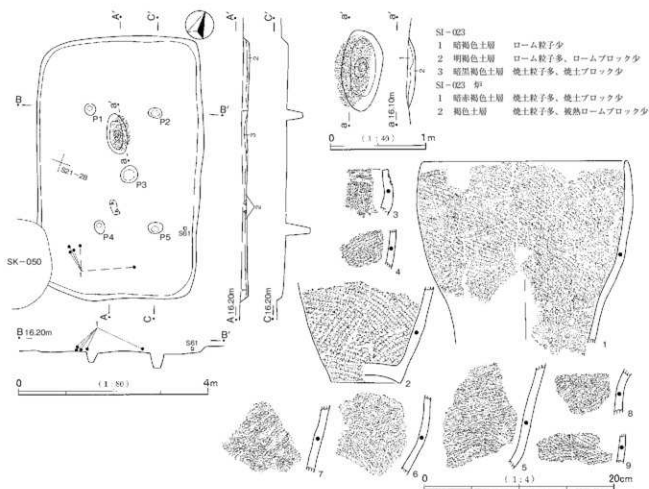
3は沈線を施すものである。僅かに内湾する口縁部破片で、口唇部は端部を平坦に調整する。外面は口縁端部に沿って2条の押し引き沈線を巡らせ、以下に格子状の斜交沈線を施す。繊維の混入は中程度である。

4～9は縄文のみが施されるものである。8はくびれ部下、9は胴部下端とみられる。縄文は4が無節R、ほかは附加条2種R+L2本で、5・7・9は施文方向変えて装飾の効果を出している。繊維の混入は8が多く、4・9は中程度、5・7は少ない。

図示できた遺物は少ないが、地文は附加条縄文を用いたものが多く、いずれも黒浜式に比定できる。

#### SI-024（第40図、図版4・5・24・47）

S23-19付近に位置する。平面形は5.32m×5.04mの方形であるが、北辺中央が半円形に約0.40m膨らんでいる。確認面からの深さは0.18mで、壁際から床面中央に向けて僅かに低くなる。炉は住居北寄りに設置される。規模は0.50m×0.42mで、床面から0.1mの深さを測る。また、炉と重複して直径0.40m、床面からの深さ0.52mのP4を検出した。ビット上面に焼土が堆積していることから炉より古いと考えられ



第39図 SI-023

る。その他柱穴と思われるピットは6基検出した。深さは0.26m～0.78mの範囲に分布する。

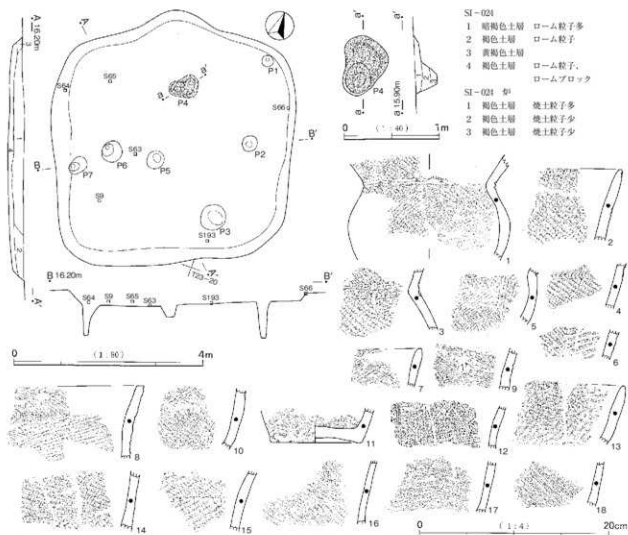
遺物の出土量は少なく、1は器形をうかがうことができるが、覆土上層からの出土である。

1は口縁部下が大きくくびれ、胴部が球形となる器形で、胴部の40%が遺存する。くびれ部に1条の間隔のあいた結節沈線を施し、口縁部および胴部には地文の縄文が施される。縄文は単節RLと無節Rを羽状に施す。胴部下半は被熱のためか、器面が剥離し赤色化している。繊維の混入は中程度である。

2は円形竹管刺突文を施す口縁部破片である。口唇部は丸く収め、口縁端部に1条、口縁端部から4.3cm下に1条の円形竹管刺突文を巡らす。地文は単節RLの縄文で、内面は横方向に丁寧に磨いている。繊維の混入は中程度である。

3・4は連続爪形文を施し、5は平行沈線のようなのだが合わせて紹介する。3は2条、4は2条以上、5は1条以上の連続爪形文、平行沈線をくびれ部に巡らせる。地文は3が単節RL/LR、4が単節RL、5は単節RLと無節Rの縄文を施す。繊維の混入は中程度であるが、4は白色の鉱物粒子が目立つ。

6～11は単沈線・平行沈線を縦方向および斜め方向に施すもので、7・8は口縁部破片、11は底部、ほかは胴部破片である。7・8の口縁部はともに外傾し、7は口唇部を丸く、8は端部を平坦に調整する。沈線のモチーフは6が葉脈文とするが、斜交する沈線で雑な格子を描く。また、11は胴部下端まで平行沈線が施されているが、9・10は下位が地文だけとなる。地文は単節RLの縄文である。繊維の混入は8～11が多く、6・7は中程度である。



第40図 SI-024

12は貝殻腹縁文を施す胴部破片である。外反する破片であるが、内面は縦方向に磨かれ、胴部中位と想定するのが妥当と思われる。外面は放射肋のある貝殻を用いた貝殻腹縁文で、5本～7本が押圧される。繊維の混入は少ない。

13～18は縄文のみが施されるものである。このうち13は口縁部破片で口唇部を丸く収める。縄文は13・14が単節RL/LRで羽状に、15は環付末端単節LR、16は単節RL、17・18は熱糸文Lである。繊維の混入は14・17が多く、13・16・18が中程度、15は少ない。

図示した遺物は葉脈文や連続爪形文で加飾したものを含み、いずれも黒浜式に比定できる。石器類も特にまとまることなく、壁際をはじめ各所に散在して出土した。遺存状態が悪く図示できなかったものも含まれるが、石鏃2点(第108図9)、石鏃未成品5点(第108図62～66)、楔形石器6点、磨製石斧1点、磨石類1点、敲石1点(第115図193)、側面調整礫1点、両極剥片6点など多種類あった。

SI-025 (第41～43図、図版5・24・25・47～49)

S23-83付近に位置する。平面形は5.82m×5.48mの方形で、その内側に南東および南西壁を共有するかたちで、4.90m×4.68mの範囲が一段低く掘り込まれ、床面の高さは外側が0.20m高い。調査時の所見では建て替えもしくは拡張とのことである。確認面からの深さは、最大値で0.59m、外側の段は0.40m前

後を測る。土層断面の観察では2層の立ち上がりが2軒の重複を予想させ、図示していないが東西方向の土層断面でも同様の立ち上がりが認められる。ただし、6層上面に貼り床は認められず、2軒の重複の可能性を指摘するとともに、炉は北西壁寄りの炉Aと、南西壁寄りの炉Bの2か所が検出された。炉の規模と深さは、炉Aが0.54m×0.48m×0.14m、炉Bは0.46m×0.44m×0.07mである。柱穴と思われるピットは、内側のプランの段に沿って3基、中央部に2基の計5基が検出された。床面からの深さは南東壁際に位置するP5の0.30mを除いて、0.54m～0.64mの範囲に収束する。

遺物の出土量は特に多いというわけではないが、多くの個体が接合できている。範囲は炉AとP4を結んだ線とその西側に偏っている。また、一括で取り上げた遺物の中に縄文時代後期初頭の土器が混在している。石器類も土器と同じ出土傾向である。43点出土し10点を図示したが、磨製石斧が15点と多い。このほかに石鏃、楔形石器、磨製石斧片がある。

1は口径19.0cm、現存高27.8cmを測り、底部を欠損する深鉢形土器である。器高がある細身な土器で、口縁部は外傾して開くが、胴部は中位が僅かに膨らむものの筒状となる。口縁部は4単位の波状で、小さな山形の突起を付す。また、波頂部に合わせて外径1.1cmの孔を4か所に配する。口縁部は端部とくびれ部に円形竹管刺突文を1条ずつ巡らせるが、上下の刺突間隔は異なり、くびれ部がより狭い間隔で刺突している。地文は単節RLの縄文の施文方向を変えて施したものである。口唇部は丸く収め、口縁部内面を横方向、胴部は縦方向に磨いている。繊維の混入は多い。

2は推定口径32.6cm、底径7.0cm、復元高36.7cmを測り、全体の60%が遺存するが、図上復元である。4単位の波状口縁で、波頂部に小突起を付す。小突起は現存1個であるが、口縁部の施文および付されている位置から、2個一対であると思われる。施文は口縁部とくびれ部に各1条の節間の広い結節沈線を巡らせ、波頂部小突起と対応する位置に縦方向2条一対で短く垂下させる。地文の縄文は単節LR/RLの羽状縄文で、口縁部から底部に至るまで全面に施されるが、口縁部と胴部では節の大きさが異なり、口唇部と胴部の施文原体を分けて使っているようだ。口唇部は端部を平坦に調整するが、丸みを帯びる部分もある。底部は若干上げ底となり、底部外面を丁寧に磨く。繊維の混入は多い。

3は口縁部と底部を欠損し、現存高7.5cm、現存最大径10.4cmを測る小型の土器である。口縁部は外へ開き、文様帯を構成していたようだが、現状では文様帯下端にあたると思われる半截竹管を用いた沈線が1条確認できるだけである。くびれ部には細かいコンパス文を巡らす。胴部は地文の縄文のみで、単節LRとRLを交互に施す。繊維の混入は中程度で、口縁部内面を横方向に丁寧に磨く。なお、くびれ部に1か所の補修孔がある。

4は推定口径28.9cm、現存高18.7cmを測り、口縁部から胴部中位にかけて全周の30%が遺存している。口縁部が内湾気味に大きく開く土器で、口縁部は平行沈線で加飾される。平行沈線は口縁部端に沿って1条を巡らし、その下にコンパス文を4条巡らす。口縁部には地文となる縄文は施されず、くびれ部から下に無節rの縄文を一方向に施す。繊維の混入は多い。

5は推定口径23.8cm、底径6.0cm、器高23.4cmを測る深鉢形土器で、全体の50%が遺存している。口唇部は丸く収め、端部を棒状工具で刻んでいる。器面は胴部中位から口縁部にかけて、横方向のえぐるような短い沈線を密に施す。しかし、横方向の連続性はほとんどみられず、縦方向の規則性もない。胴部下半は比較的幅の広い半截竹管を用いた短い沈線を上半と同様に密に施し、横方向の連続性がみられる。底部は上げ底となり、外面を磨いている。繊維の混入は多い。

6は推定口径38.5cm、現存高17.2cmを測る大型の土器で、口縁部から胴部上半にかけて全周の20%が遺存している。口唇部は摩耗し調整は不明であるが、2個一対の小突起を付し、併せて口縁部にドーナツ状の円形貼付文を付する。その他の加飾はなく、口縁部、胴部とも単節LR/RLを羽状に施す。繊維の混入は多く、器厚も最大1.4cmと厚い。

7は口径16.5cm、底径6.7cm、推定高20.4cmを測る深鉢形土器で、底部が接合せず、図上復元である。底部から直線的に立ち上がり、口縁部が外反する器形で、口縁部は不規則に上下する。器面は口縁部から底部に至るまで全面貝殻腹縁文を施すが、大きな規則性は認められず、底部付近はかなり立った斜め方向で揃えるものの、口縁部から胴部下半までかなり立った斜め方向で揃える面、横方向で揃える面、他方向に施文する面がある。施文具は放射肋のある二枚貝で、器面への押圧は最大で3.4cm、11本の放射肋が観察できる。内面は口縁部を横方向、それ以下を縦方向に磨いている。繊維の混入は中程度である。なお、口縁部から3cm下に割れ口を挟んで一対の補修孔がある。

8は口径12.0cm、底径6.0cm、器高15.4cmを測る小型の深鉢形土器で、ほぼ完形である。器面は凹凸が目立ち、口縁部も不規則に上下する。外面は口縁部から胴部下端まで続く縦方向の沈線を不等間隔で描いた後、斜め方向の沈線を上半、下半の順序で描く。底部はほぼ平坦で、外面を磨く。内面は口縁部から2cm程度を横方向、以下を縦方向に磨いている。繊維の混入は中程度である。

9～31は口縁部に文様帯を構成し、沈線、刺突文などで加飾するものである。

9～13は文様帯を縦方向に区画するものである。区画は9・11・12が沈線で、10・13は隆帯を用いる。また、9～11は区画内に地文はないが、12・13は縄文を施す。9・10ともに口縁部破片で、区画内に横方向の沈線を施す。沈線は横方向のものを含めて太い。11・12は区画に半截竹管を用いており、11は区画内にコンパス文を施し、区画下端に円形竹管刺突文を巡らす。また、縦方向区画の末端には小さい瘤状突起を付す。なお、破片下端部は屈曲し、その下位にも沈線が施される。13の隆帯区画は口唇部に付された山形の突起から連なる。縄文は12が直前段多条のLR、13は単節LRである。繊維の混入は9が少なく、12は中程度、10・11・13は多い。

14～19は刺突文で加飾するものである。14～17は口縁部破片で、16は山形の小突起を付す。14・15は先端を加工した竹管で連続刺突文、16～19は円形竹管刺突文を施す。15は斜め方向、横方向の連続刺突文があり、モチーフを描いたとみられるが、ほかに口縁部に沿って刺突文を巡らすだけで、19は規則性もみられない。16は細い鈎状の隆帯を巡らせ、円形竹管刺突文とともに縦方向に円形刺突文を垂下させる。また、16～19は地文を施し、16は燃糸文R、17・19は無節R、18は燃糸文Lである。繊維の混入は17・18が多いがほかは中程度で、19は白色の鉱物粒子が目立つ。

20～24は結節沈線が施されるもので、文様を描くのではなく区画線として描かれる。20・21・23は口縁部破片で、いずれも端部を丸く収め、21・23は内湾、20は外反している。また、21・23は口縁に沿って1条の結節沈線を巡らす。20はくびれ部に結節沈線を巡らし、20～23は節の間隔を広くとっている。いずれも地文を施し、20は燃糸文R、21は単節RLと無節R、22・24が単節LR、23は単節RLである。繊維の混入は20・22・23が多く、21は中程度、24は少ない。

25～31は口縁部文様帯に沈線でモチーフを描くものである。25～27は同一個体の可能性が高く、直線的な胴部から内湾する口縁部に続く。口唇部は棒状工具で刻み、端部の調整と押圧により内側に張り出す。文様帯の幅は約7cmで、半截竹管で弧状の沈線を描く。文様帯内に地文はないが、文様帯下端はその下位

に施す縄文を消している。胴部は単節LRの縄文の方向を変えて施文し、施文変換点に粘土の盛り上がり  
が認められる。内面は口縁部を横方向に磨き、繊維の混入は多い。28・30は口縁部破片で、ともに僅かに  
内湾し、口唇部は28が丸く、30は端部を棒状工具で刻む。30は地文に縄文を施すが、28・29・31は地文  
がみられない。施文は30が半載竹管文、ほかは平行沈線で、28はコンパス文、30は鋸歯状の斜沈線、29・  
31は横および縦の沈線の区画と、区画内の斜め方向の沈線で構成される。内面は31が横方向に丁寧に磨か  
れ、繊維の混入は28・29が多く、31は中程度、30は少ない。

32~36は斜交沈線を施すもので、32~34は口縁部、35・36は胴部破片である。施文は34が細く鋭い単沈  
線を斜行させ、32・33・35・36は浅い平行沈線で、32・33・36は縦方向の沈線を加える。35・36は器面の  
凹凸が目立つが、外面も縦方向の調整が明瞭で、内面も縦方向に丁寧に磨くことから、胴部下半とみられ  
る。繊維の混入は32・33が多く、ほかは中程度である。

37は貝殻腹縁文を施すもので、破片の傾きから胴部上半とみられる。施文は放射肋を有する二枚貝で行  
い、押圧長は2.5cm~3.0cmで、2.8cmに10本の放射肋がある。施文は横方向に連続性がみられ、段ごとに僅  
かに角度を変えている。繊維の混入は多い。

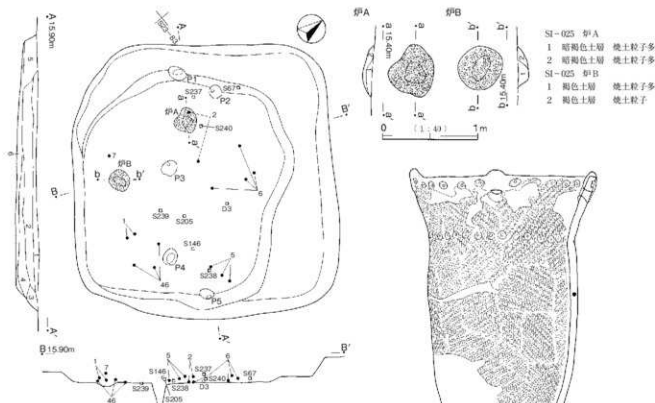
38~68は縄文のみが施されるもので、38~45は口縁部破片、46~65は胴部破片、66~68は底部である。  
38・39・41・43は内湾する口縁部、40は外反する。いずれも38・43の断面にみるように口縁部下でくびれ  
る。口唇部は45が端部を平坦に調整するが、ほかは丸く収める。図示したもののうち42だけが口縁が不規  
則に上下するが、ほかは水平に整えられている。縄文は38~40が無節lとrを羽状に、41・42・44・58は  
単節RLを一方に、43・45・55・56は単節LR/RLを羽状に施す。なお、41は施文変換点に細い紐状の粘  
土の盛り上がりが認められる。繊維の混入は42・43が多いが、ほかは中程度である。

46~65は胴部破片で、図示した破片のほとんどは斜めに開く部位であるが、56はくびれ部である。46は  
無節Lを一方に施し、施文変換点で細く紐状に粘土が盛り上がる。47・57は単節LRを一方に施すが、  
47は胴部中に意識的に施文の希薄な部分を作り、胴部下端は附加条1種LR+L1本とする。48・49は  
単節LRを一方に、50は単節LRと無節Lを羽状に、51は単節RLで施文方向を変えて羽状に、52は無節L  
の施文方向を変えて羽状に、53は太さの異なる2本の単節LRを上下に使い分け、54は無節L/Rを羽状に  
施す。59~64は撚糸文または附加条縄文で、59は附加条1種LR+R1本、60は2種R+L2本、61は2  
種L+R2本、62は2種L+R2本/R+L2本、63は1種LR+L1本、64は附加条3種LR+Lとなる。  
繊維の混入は46・47・51・52・56・60が多く、ほかは中程度で、46・49・50・52は内面を縦方向に丁寧に  
磨いている。

66~68は底部破片で、68は底径8.4cmを測る。68の底部は外面が僅かに窪み、丁寧に磨いている。3点  
とも胴部下端まで縄文を施し、66は単節LRを縦に、67は単節RL、68は軸不明でR1本を附加した縄文で  
ある。繊維の混入は66・67が少なく、68は多い。

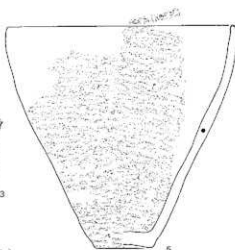
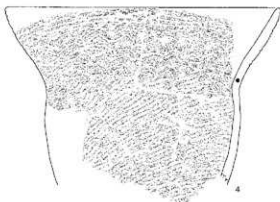
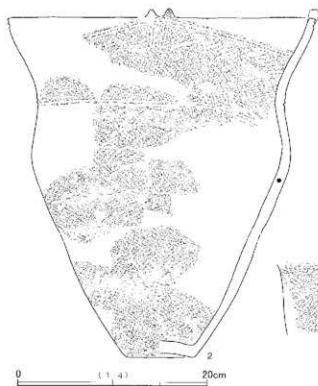
69~71は縄文時代後期初頭の土器で、7本1単位の条線を直線的に施す。69の施文は深く、70・71は浅  
いが、櫛歯状工具の間隔から同一個体とみられる。内面は69が縦方向、70・71が横方向に磨き、69がより  
下の部位とみられる。

図示した遺物のうち1~68は黒浜式に比定でき、口縁部文様帯を明確に表現するものが多く含まれてい  
る。69~71は後期初頭の土器で、出土位置の記録はないが本住居に直接伴うものではない。土器以外の出  
土遺物は、図示できなかったものも含め土製円板1点(第107図3)、石磯1点(第108図10)、石磯未成品



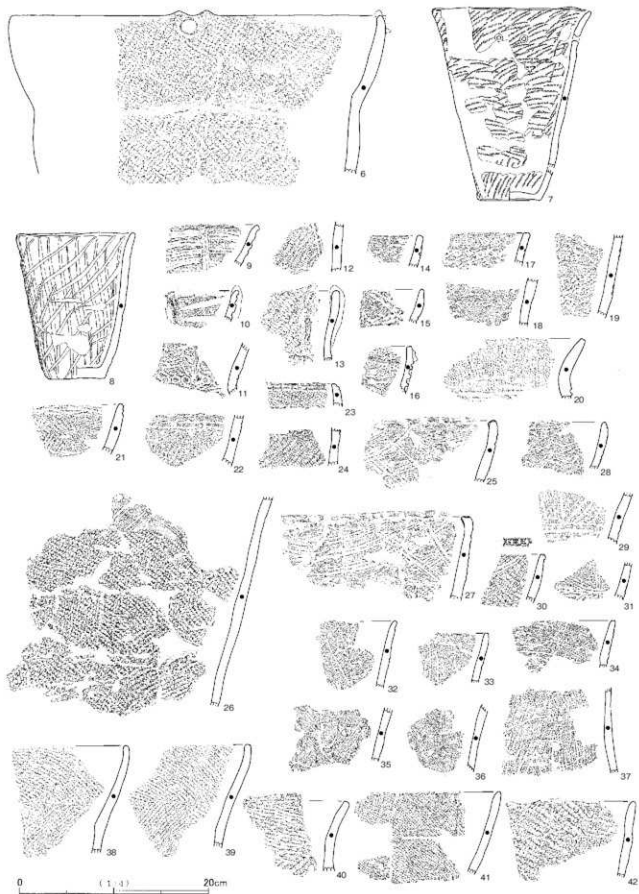
- SI-025 伊A  
 1 暗褐色土層 焼土粒子多  
 2 暗褐色土層 焼土粒子多  
 SI-025 伊B  
 1 褐色土層 焼土粒子多  
 2 褐色土層 焼土粒子

- SI-025  
 1 暗褐色土層 ローム粒子多  
 2 暗褐色土層 ローム粒子多  
 3 黄褐色土層  
 4 暗褐色土層 ローム粒子・ロームブロック少  
 5 褐色土層 ローム粒子・ロームブロック少  
 6 褐色土層 ローム粒子、炭化粒子
- 0 (1:60) 4m

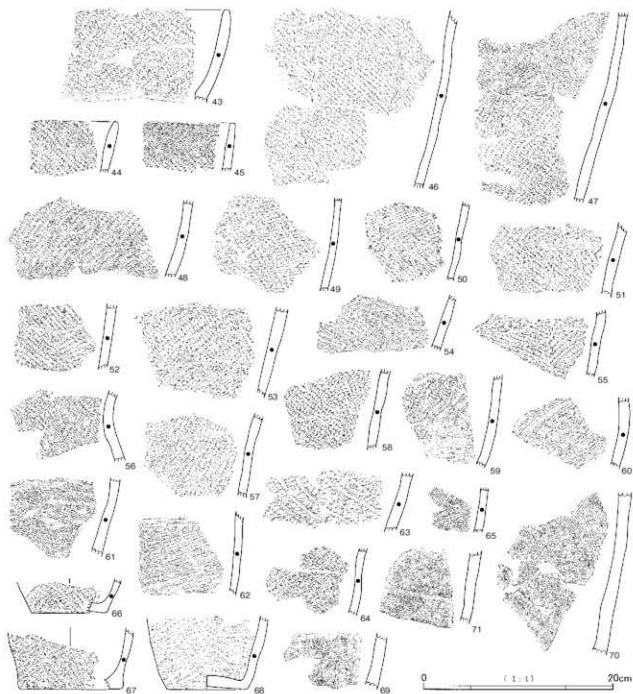


第41図 SI-025 (1)





第42圖 SI-025 (2)



第43図 SI-025 (3)

1点(第108図67)、楔形石器3点(第109図91)、磨製石斧15点(第112図145・146)、磨石類3点、敲石1点、手持ち砥石1点、石皿1点(第117図205)、側面調整礫5点(第119図237~240)、両極剥片3点、剥片類9点など多種多様であった。石器類の出土点数はB地区の竪穴住居の中でもっとも多い。

SI-026・SI-027(第44・45図、図版5・25・49・50)

R21-77・78付近に位置し、重複関係にある竪穴住居である。調査時の所見は(旧)SI-026→(新)SI-027で、土層断面の観察で1層と3層で住居を分けるものと解釈できるが、双方の床面に高低差はほとんどなく、重複部分に貼床を検出することもできず、平面的にプランを分離することはできなかった。図には土層断面および遺物の接合状況からSI-027の推定線を記した。

SI-026の平面形は5.64m×3.14mの長方形で、確認面からの深さは0.34mを測る。炉は床面中央の北寄りに検出された。規模は1.18m×0.50mを測るが、平面形状から作り替えられたものと考えられる。炉底面は床面から0.04m低く、焼土ブロックが環状に認められた。本跡に帰属すると思われる柱穴は、壁際を巡るものと、床面中央部に位置するものに大別できる。中央部に位置するP9・P12～P14・P19・P26はP26が床面からの深さが0.12cmと浅いほかは、0.52m～0.78mと比較的深く、壁際を巡るものはP4・P21を除き0.07m～0.40mの範囲に収束する。SI-027と重複する部分では、P15・P17・P23がSI-026に伴うものである可能性が高く、P24・P25についてはどちらの住居に伴うものか判断できない。住居廃絶後に遺構内貝層が形成されており、床面から浮いた状態の貝ブロック3か所を検出し、貝層1を全量採取した。貝類の同定結果は第4表のとおりである。

SI-027の平面形は長軸5.65m、短軸4.40m前後の楕円形で、確認面からの深さは0.28mを測る。炉は床面中央に検出された。規模は0.65m×0.50mで、深さは床面から僅かに低くなる程度である。柱穴と思われるピットは、炉を南北に挟むP28・P34のほかは、住居平面形に沿った配置となる。SI-026と重複する部分は西側と比較してピットが少なく、P14はSI-027に伴う可能性もある。ピットの深さは床面から0.19m～0.48mの範囲に収束する。

SI-026出土遺物 遺物の出土量はさほど多くないものの、炉周辺からその南側にかけてまとまって出土している。また、2は北壁近く、4は東壁近くから出土した。西側はSI-027に切られているため、SI-026の推定範囲のうち、縄文時代前期の土器についてのみ掲載した。

1は推定口径16.9cm、底径7.4cm、器高15.7cmを測る土器で、胴部中位から口縁部にかけて全周の60%が欠損している。胴部は直線的に開くが、口縁部は幾分上下があり、底部は上げ底となる。口唇部は内側から調整されるが、さほど薄い仕上げではない。外面は口縁部から底部に至るまで全面に無節Rの縄文を一方方向に施す。繊維の混入は中程度である。

2は1より若干大きく、推定口径16.3cm、底径4.6cm、器高18.9cmを測り、胴部中位から口縁部にかけて全周の40%を欠損する。全体に整形は雑で、口唇部は不規則に上下し、器面も凹凸が目立つ。底部は小さく、突出気味で、中央が僅かに窪む。外面は無節Rの縄文をまばらに施し、内面は口縁部を横方向、以下を縦方向に調整する。繊維の混入は多い。

3は底径11.6cm、現存高11.3cmを測り、底部から胴部下端が遺存している。底部は若干上げ底となり、外面を丁寧に磨く。胴部は下端まで附加条2種RL+L2本の向きを変えて施し、一部に菱形の効果が起している。遺存部分の状態はよいが、上端は被熱して脆弱となっている。繊維の混入は中程度である。

4は推定口径31.1cm、現存高10.7cmを測り、口縁部が全周の60%遺存している。口縁部下で緩くぐびれ、口縁部が外反する土器で、比較的大型であるものの器厚は5mm前後と薄く仕上げられている。口唇部は丸く収められるが、不規則に上下し、きれいな円を描いていない。外面は縄文のみの施文で、附加条1種R+R1本/L+L1本である。口縁部内面は横方向に磨かれ、繊維の混入は多い。

5は底径8.3cm、現存高6.9cmを測り、底部から胴部下端にかけて遺存している。底面は平坦で、底部から角度をもって胴部が立ち上がる。外面は附加条1種R+L1本/L+R1本を胴部下端まで施す。繊維の混入は中程度である。

6は底径7.0cm、現存高6.6cmを測り、底部から胴部下端にかけて遺存している。底面は平坦で、丁寧に磨いている。胴部は下端にいたるまで単節RLの縄文を一方方向に施す。繊維の混入は中程度である。

7~12は半截竹管を用いて刺突文、沈線などを施すもので、7・8は口縁部破片、9~12は胴部破片である。7~9は同一個体とみられ、口縁部に3条の連続刺突文を巡らす。刺突文以下は地文の縄文で、器面の状況がよくないため詳細は不明だが、単節LRの施文が確認できる。器厚は5mm以下と薄く仕上げている。10は外反する破片で、胴部上半から口縁部にかけての部位とみられる。施文は2条一組の結節沈線を横位展開しモチーフを描く。地文はなく、内面は横方向に丁寧に磨いている。11は緩やかな曲線的な文様構成で、施文は半截竹管での平行沈線内に連続爪形文を施したものである。12は2mm幅の細い半截竹管で縦方向に密に沈線を施す。繊維の混入はいずれも中程度である。

13~28は縄文のみが施されるもので、13~22は口縁部破片、23~28は胴部破片である。口縁部は20が内湾気味であるほかは、ほぼ直線的に開き、口唇部は13・16~18・21・22は丸く、15・19は端部を平坦に調整し、14・20は内側を調整して薄く仕上げる。縄文は附加条縄文が多く、無節や単節を使用した破片は少ない。また、13~16は菱形の効果を出して装飾性を高めている。使用される原体は、13・15・19が附加条2種R+L2本/L+R2本、14・16は附加条2種R+R2本/L+L2本、17・21は附加条1種R+L2本、18・20は附加条1種L+L2本で、22は器面の状況が悪く撚り方向は不明であるが、附加条3種の格子状の附加条縄文である。繊維の混入は中程度から多めで、22は砂粒が目立つ。

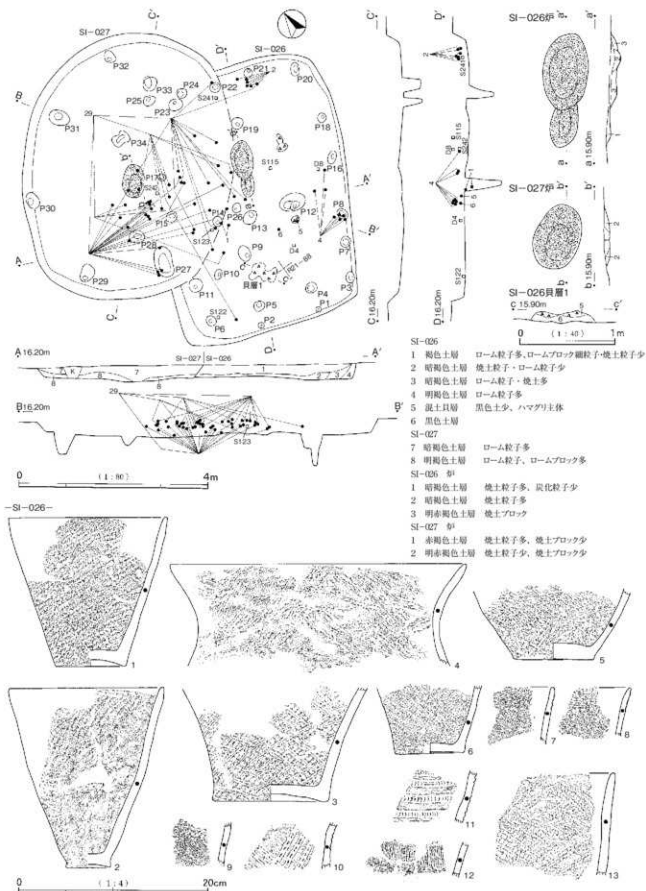
胴部破片は26が口縁部からくびれ部にかけて、28が胴部下半とみられる。23は単節LRを一方方向に、27は無節Rをまばらに、24は0段多条RL/LRを羽状に、25は附加条1種、28は附加条2種のR+L2本/L+R2本、26は附加条2種R+L2本である。繊維の混入は25・27・28が多く、ほかは中程度で、23は白色の鉱物粒子が目立つ。

SI-026出土土器には連続爪形文を施す土器も含まれるが、地文のみの土器が大半を占め、附加条縄文を用いる個体が多い。本住居は黒浜式期に比定される。

土器以外でSI-026の範囲から出土したのは、土製円板と石器類である。土製円板は5点で(第107図4~8)、胎土に繊維を含んだ黒浜式土器片を利用している。A~C地区のなかでもっともまとまって出土している。石器類には石匙1点(第110図115)のほか、二次加工ある剥片1点(第110図122)、側面調整礫2点(第119図241・242)、剥片1点がある。

SI-027出土遺物 SI-027の想定範囲から出土した縄文中期の土器を2点図示した。29は直接接合しない破片も含め、住居内の広い範囲に散っている。推定口径64cm、器高も70cm以上と想定される大型の土器であるため、これのみ縮尺1/8で掲載した。口縁部は内側に稜をもち、単位は不明であるが、緩い波状口縁となる。口縁部文様帯は下端の区画が遺存しないが、太い凹線を伴う隆帯でモチーフを描き、波頂部に合わせて窓状となる。現存部分が口縁部文様帯の半分程度と推定され、モチーフの全体的な構成は復元できない。なお、モチーフ内に単節LRの縄文を施す。胴部は大きく4段の構成となり、上から順に無文帯→窓状区画→渦巻文区画→懸垂文となる。各区画は凹線を用い、凹線を伴う隆帯で区画内にモチーフを描く。モチーフ内には口縁部同様に単節LRの縄文を施し、懸垂文内は縦方向の施文である。胎土は砂っぽい感じであるが、目立った混入物もなく、焼成も良好である。なお、胴部破片は懸垂文の上で延べ110cmほどの破片があり、全周の70%程度が揃っていることになるが、各破片の下端部はかなり磨減しており、底部のない状態で相当期間使用されたものとみられる。大木8b式の影響を受けたものである。

30は口縁部破片で、山形の波状口縁となる。口縁部文様帯は2条の沈線で区画し、区画内に単節RLの縄文を施す。胎土は砂粒が目立つ。



第44図 SI-026 (1)、SI-027 (1)

SI-027は加曾利E式期に属する。なお、二次加工ある剥片(第110図123)はSI-027と想定される範囲から出土した。

#### SI-028 (第45図、図版5・50)

R21-57付近に位置する。西側は調査区境界にかかっていたため、確認したのは全体の1/2以下であろう。平面形は円形もしくは楕円形を呈すると思われ、遺存部分は3.96m×1.54m、確認面からの深さは0.31mを測る。ピット・炉とも検出できなかったが、床面は凹凸があるものの堅緻で、覆土の状態や遺物がまとまって出土していることから、堅穴住居ととらえた。なお、第25地点の調査で残りの部分は検出できなかった。

全体の半分程度しか検出できなかったため、出土遺物は少なく、6点を図示した。1は東壁寄りの覆土中層から出土した。

1は推定口径23.6cmを測り、口縁部の30%が遺存している。口縁部は不規則に上下し、口唇部を丸く収める。外面は口縁部に幅2cm程度の無文帯を設け、以下は附加条2種RL+L2本である。また、現存部右側に2本の斜行沈線がみられ、あるいは胴部中位以下に沈線が施されていたかもしれない。繊維の混入は中程度である。

2～6は縄文のみが施されるもので、2は口縁部破片、ほかは胴部破片である。6は湾曲しているため、胴部下半とみられる。2は口唇部内側を調整して薄く仕上げ、外面は単節LRである。3～6は附加条縄文で、3は附加条1種L+R1本、4は1種R+L2本/L+R2本で羽状に、5は2種R+R2本/L+L3本である。繊維の混入は2が多く、4～6は中程度、3は少ない。

図示した土器は地文のみが施され、いずれも黒浜式に比定できる。

#### SI-029 (第45図、図版5・50)

R22-53付近に位置する。大半を攪乱により失っており、北壁を検出した。北西隅は一部を確認しただけであるが、北壁長は4.20mを測り、平面形は方形と考えられる、確認面からの深さは0.24mを測り、床面は最大幅0.20mを検出した。柱穴、炉は検出されなかった。

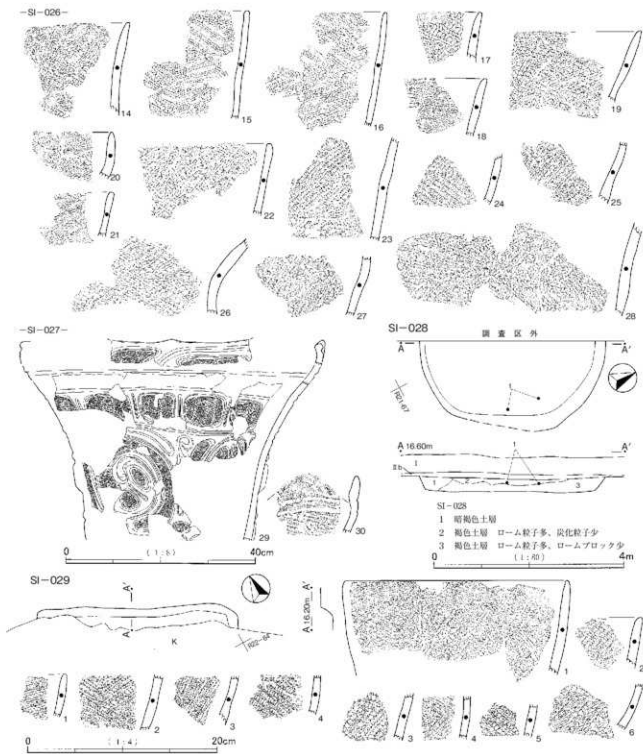
出土遺物は少なく、破片4点を図示した。

1～4はいずれも縄文のみが施されるもので、1は口縁部破片、2～4は胴部破片である。1～3は附加条縄文で、1は附加条1種L+L1本、2は附加条1種R+R2本/L+L2本、3は附加条1種R+L2本である。4は単節RLで、いずれも小さい破片のため判断できないが、2は2種類の原体を羽状に施す。繊維の混入は2が多く、ほかは中程度である。

図示できた遺物は少ないが、いずれも黒浜式に比定できる。

#### SI-030 (第46・47図、図版5・25・50・51)

R22-59からS22-60付近に位置する。第13地点と第29地点の両調査区にかかっており、第13地点側で隅丸方形とみられる平面形が確認できた。第29地点側は攪乱を受け、遺構の検出が困難だった。そのため、第29地点側は第13地点の平面形をもとに遺物の出土範囲およびピットの状況を考慮してプランを推定した。全体の規模は不明であるが、第13地点の成果を基に推定すると短軸長4.65m、長軸長7.20m前後の隅丸長方形のようである。炉は想定する北東隅に近い位置から検出された。規模は0.78m×0.72mで、床面から0.07m窪んでいる。炉の位置が偏っていることから別住居の存在も予想させるが、断定できない。柱穴と思われるピットは9基検出された。壁際から床面中央付近まで東側を中心に散在し、床面からの深さ



第45図 SI-026 (2)、SI-027 (2)、SI-028、SI-029

は0.11m~0.66mの範囲に分布する。

なお、図示していないが、P4南側に住居廃絶後の掘り込みがあったことを土層断面の観察からうかがうことができる。掘り込みは図示した土層断面図の範囲までは及んでおらず、床面にも達していない。また上面に新期テフラ層が堆積しており、住居廃絶後から新期テフラ堆積までの間に土坑などが構築された可能性がある。

出土遺物は比較的多いが、器形がうかがえる程度に復元できたものは1のみと少ない。特に目立って遺

物が集中して出土する地点はないが、跡跡周辺からの出土が多く、1はこの範囲から出土している。また、石器類は東側に集中し、楔形石器・磨製石斧・側面調整礫などが出土している。

1は口径30.8cm、現存高34.6cmを測り、全体の80%が遺存している。口縁部下で緩くくびれる深鉢形土器で、現存部最小径は12.0cmである。口縁部は波打つが、端部を平坦に調整する。器面は単節LRの縄文を全面一方向に施し、全周の約1/4の範囲の胴部中位から上に縦方向の細く鋭い沈線を施す。内面は口縁部を横方向に、胴部中位から下を縦方向に磨く。外面の胴部中位から上は暗褐色であるが、胴部下位は被熱のためか橙色となる。繊維の混入は中程度である。

2～11は沈線でモチーフを描くものである。2・3は半載竹管を用いて文様帯を区画し、縦位の沈線を軸として斜行する沈線を施す。ともに口縁部破片で、3は口唇部に山形の小突起を付す。地文はなく、2の内面は横方向に丁寧に磨く。繊維の混入は中程度である。4も同じく半載竹管を用いた直線の沈線を施すが、上下に結節沈線を伴う細い隆帯で口縁部を区画する。口唇部には山形の小突起を付し、口縁部区画隆帯へ続いている。胴部は3単位の半載竹管沈線を密に斜交させる。繊維の混入は多く、遺存状態も脆弱である。大木9a式の影響がうかがえる。5～10は沈線による波状文を施している。5・9は口縁部破片、これ以外は胴部である。11は深鉢形土器の胴部でコンパス文を施している。

12・14～17は竹管を用いた円形刺突文を施す土器である。12は口縁部下にあたる部分を円形竹管刺突文で埋めている。14は外方に開いて立ち上がる口縁部破片で、口縁に沿って円形竹管刺突文を連続して施している。15～17も連続刺突文を巡らしている。

18・19は口縁部破片で、口縁部に沿って半載竹管による沈線を巡らし、附加条縄文を施している。20も附加条縄文を地文としている。

24～28は貝殻腹縁文を施す。放射肋を有する二枚貝を用いている。

29は無文、30～44は地文に縄文を施すものである。30・31は無節、40・43・44は附加条縄文、32・34は波状口縁の波頂部に小突起を付す。

45～47は底部で、45は縄文、46は縦沈線を施し、46は無文である。

沈線施文、円形竹管刺突文の土器が多く含まれ、いずれも黒浜式に比定できる。土器以外に土製円板1点（第107図9）、石器類はすべて図示できた訳ではないが13点出土した。内訳は楔形石器3点（第109図92）、磨製石斧2点（第112図147）、側面調整礫6点（第119図243～248）、両極剥片1点、軽石類1点である。

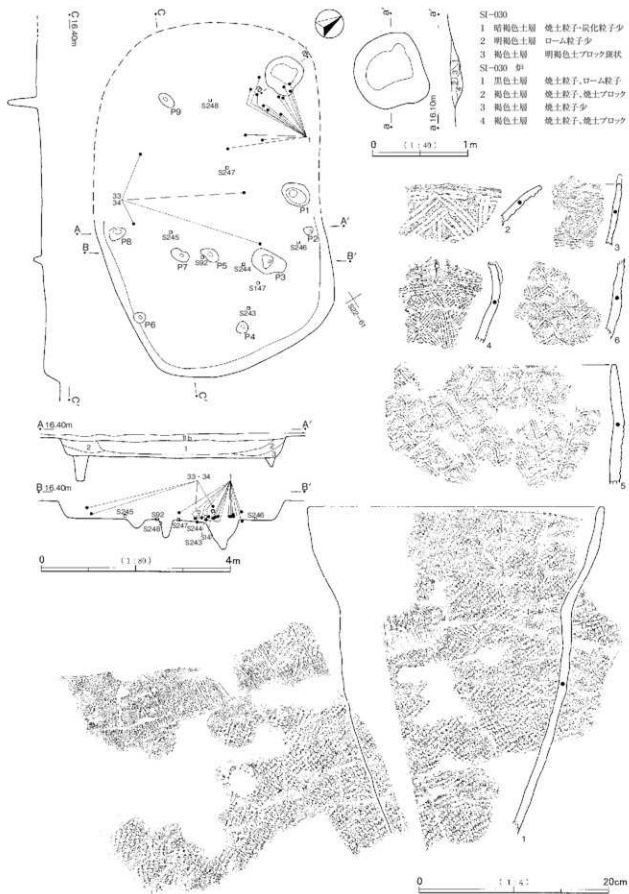
#### SI-031（第48図、図版5・52）

S22-41・51付近に位置する。北側は調査区境界に近く全体を調査していない。安全を確保した上で表土除去を行い、長軸方向で5.20mの範囲まで床面を確認することができた。平面形は長方形で、短軸長3.20mを測る。東壁が北東隅間際まで確認できていることから、長軸長は5.50m前後と推定される。確認面からの深さは0.36mと比較的遺存がよく、床面も平坦である。炬は検出されず、未調査部分に存在する可能性も低いと思われる。ピットは西壁際に検出され、床面からの深さは0.17mと浅い。また、南壁の西隅寄りの地山を掘り残した高まりは、周囲の床面より0.06m高く、出入口施設の可能性も考えられる。

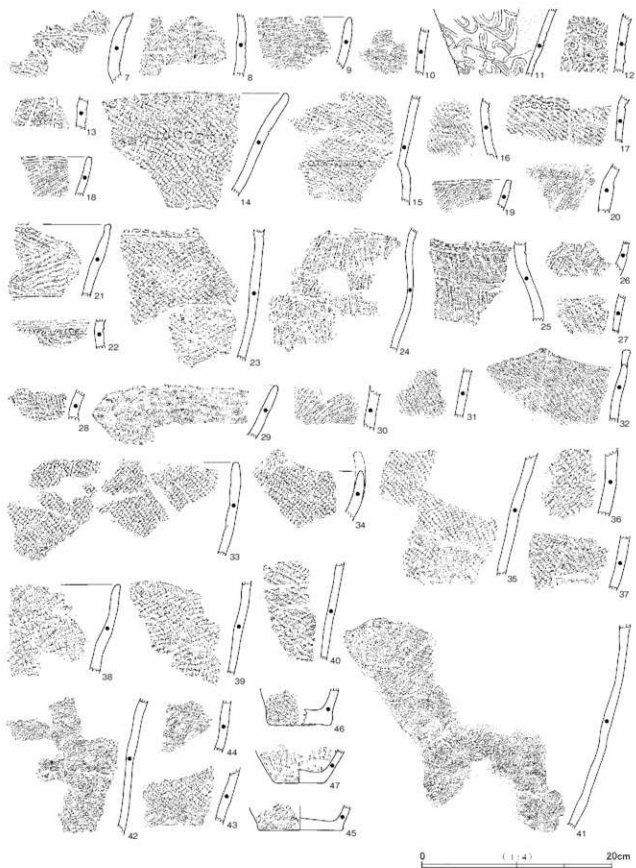
遺物の出土量は少なく、破片4点を図示した。

1は斜格子文を施すもので、沈線は太く浅い。口縁部は不規則に上下し、口唇部を内側から調整して薄く仕上げる。繊維の混入は中程度で、補修孔が穿たれている。

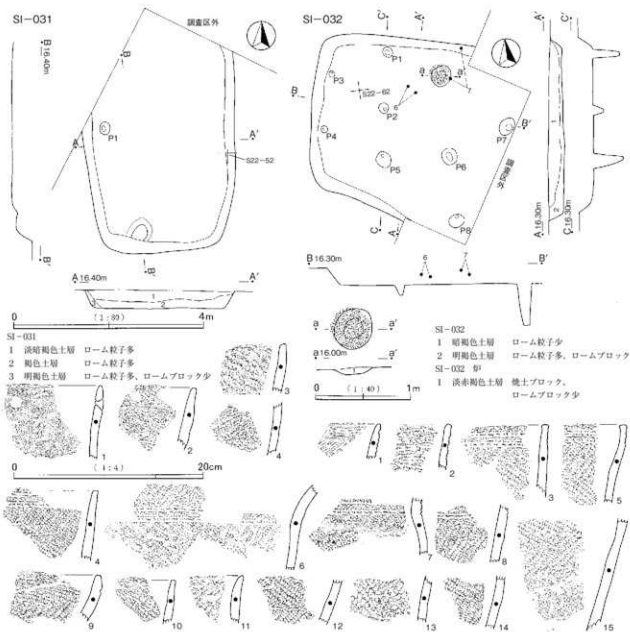




第46図 SI-030 (1)



第47図 SI-030 (2)



第48図 SI-031、SI-032

2～4は縄文のみが施されるもので、2・3は口縁部破片、4は胴部破片である。口唇部は2が丸く、3は端部を平坦に調整する。縄文は2がLとRの合い撚り、3は無節L、4は附加条2種R+L2本である。繊維の混入はいずれも中程度で、3は内面を横方向に磨く。

図示できた遺物は少ないが、いずれも黒浜式に比定できる。土器以外には図示できなかったが楔形石器・磨製石斧・剥片類各1点を出土した。

#### SI-032 (第48図、図版6・52)

S22-62付近に位置する。東側は調査区外にあたり、安全を確保した上で可能な限りの検出に努めた。しかし、東側の壁は検出できず、西壁から最大4.40mまでの床面を検出した。平面形は長方形となり、短軸は4.00m、長軸はP7が壁に接していた場合4.80m前後、炉が東西の中心にあたるとした場合5.00m前後となる。確認面からの深さは0.36mを測り、比較的遺存のよい住居である。炉は住居東西方向の中心に近い北壁寄り検出された。規模は0.43m×0.41mで、床面から0.06m窪む。火床部はあまり被熱しておらず、

覆土中に焼土ブロックが僅かに含まれる。柱穴と思われるピットは現状で8基検出された。東壁の位置が不明なため配置の詳細も不明だが、P1・P3・P4は壁に接しており、中央付近のピットと壁際のピットから構成されると思われる。床面からの深さは西壁に接するP3・P4および床面中央のP6がそれぞれ0.22m・0.26m・0.26mと浅いが、ほかは0.90m前後と深い。

遺物の出土量は少なく、炉の周辺に偏っており、6・7が出土している。破片15点を図示した。

1～8は半截竹管を使用して結節沈線、沈線を描くもので、1～5は口縁部破片、6～8は胴部破片である。1は主幹文様を結節沈線でも描くが、破片のため文様構成は不明である。内面は横方向に磨き、繊維の混入は中程度である。2は節間の広い結節沈線を口縁に沿って巡らす。口唇部は丸く収め、内面は横方向に磨く。繊維の混入は多い。3～7は施文の特徴、胎土、色調などから同一個体の可能性が高いが、3・4は直立気味に立つ口縁部であるのに対し、5は内湾気味である。また、6・7は口縁部下がくびれる器形となる。口唇部は端部を平坦に調整する。口縁部およびくびれ部に結節沈線を2条巡らすほかは、単節RL/LRを施すだけである。なお、7はかぶせた粘土の痕跡が外面に残され、内面は平滑で、繊維の混入は多い。8は半截竹管を使用した沈線が施される。地文は単節LRの縄文で、繊維の混入は中程度である。

9～15は縄文のみが施されるもので、9～11は口縁部破片、12～15は胴部破片である。9は内湾気味の口縁部、15は内面に縦方向の調整が認められることから、胴部下半以下とみられる。口唇部は9が丸く、10は内面を調整して薄く、11は端部に縄文を施す。縄文は9・11・14・15が単節LR/RL、10は附加条1種R+L2本、11・13は単節RLである。繊維の混入は9・11・13が多く、ほかは中程度である。

図示した土器は口縁部、くびれ部に結節沈線を巡らすものが含まれ、いずれも黒浜式に比定できる。

SI-033 (第49図、図版6・25・52)

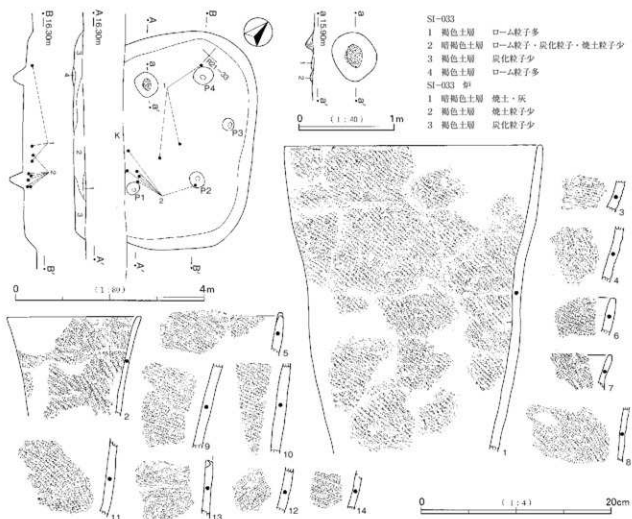
R21-33付近に位置する。南西側を攪乱により失っており、全体は明らかではないが、平面形は隅丸方形になるものとみられる。規模は全体を確認できた軸方向で4.60mを測り、これと直行する軸方向は南北それぞれの壁が内側を向きだしていることから、3.30m～4.00m程度であったと推測できる。確認面からの深さは0.27mで、壁の立ち上がりは南東側に比較して北西側が緩やかである。炉は北東壁寄りに設置され、規模は0.52m×0.46mで、ほとんど掘り込みはないが、底面中央より周辺部が低くなっている。柱穴と思われるピットは平面形に沿うように4基が検出された。床面からの深さは0.28m～0.30mとほぼ同じである。

住居の1/2強の調査であるが、南側からまともな土器が出土している。器形が復元できた1は北隅にまともだったが、同一個体の破片は住居中央からも出土している。

1は推定口径27.2cm、現存高32.1cmを測り、底部を欠損するが、胴部下端から口縁部まで60%が遺存している。図上復元で胴部中位が緩くくびれる深鉢形となる。口縁部は平坦ではなく、口唇部を丸く収める。器面は単節RLの縄文を全面一方向に施す。繊維の混入は中程度で、現存部下1/3は被熱のため脆弱となり、赤色化している。

2は推定口径14.0cm、現存高11.0cmを測る小型の土器で、7・8も同一個体である。口縁部は平坦ではなく、口唇部の調整も一様ではない。器面は単節RLの縄文を全面一方向に施す。内面は口縁部から2cmほどを横方向、以下縦方向に丁寧に磨く。繊維の混入は多いが、堅緻な焼成である。

3・4は沈線で文様を描くもので、3は単沈線を横方向、4は半截竹管を用いて縦方向に描く。ともに地文はなく、繊維の混入は中程度である。



第49図 SI-033

5～14は縄文のみが施されるもので、5～7は口縁部破片、8～14は胴部破片である。また、前述したように7・8は2と同一個体である。5の口縁部は平坦ではなく、緩やかにうねり、口唇部の調整も丁寧であるため、波状口縁となるのかもしれない。また、6は5と同一個体の可能性が高い。縄文は5～11が単節RLを一方に、12は無節R、13は附加条2種L+R 2本、14は附加条2種L+L 2本である。繊維の混入はいずれも中程度である。なお、13は補修孔が穿たれており、孔の位置が内外面で一致せず、内側を開けなおしている。

図示した土器には沈線施文のものも僅かに含まれるが、多くは地文のみのものであり、いずれも黒浜式に比定できる。土器以外に覆土中から磨製石斧1点、側面調整礫1点(第120図249)を出土した。

#### SI-034 (第50図、図版6・52)

R21-24付近に位置する。平面形は5.03m×4.20mの楕円形で、確認面からの深さは0.19mを測る。壁面の立ち上がりは緩やかで、平面的記録はないが壁近くに床面に達する攪乱が複数個所ある。床面は軟弱で、炉は検出されなかった。柱穴と思われるピットは5基を検出し、いずれも北半分に偏って分布する。床面からの深さはP3が0.52mであるのを除いて0.22m～0.29mの範囲に取束する。

出土遺物は少なく、破片8点と土製円板1点(第107図10)を図示した。

1・2は半截竹管による結節沈線で主幹文様を描くものである。1は口縁部破片で、口唇部を丸く取め

る。2は外反する断面から胴部上半とみられ、ともに内面を横方向に磨く。繊維の混入は中程度である。

3は半載竹管を用いて斜交する平行沈線を描く。繊維の混入は少ない。

4～8は縄文のみが施されるもので、5は口縁部破片、ほかは胴部破片である。4は単節RLで施文方向を変える。5～8は附加条縄文で、5は口唇部を平坦に調整する。施文原体は4～6は附加条1種L+R2本、7は附加条2種L+R2本/R+L2本を用いる。繊維の混入は6が多く、ほかは中程度である。

図示した遺物は破片のみであるが、結節沈線でモチーフを描くものが含まれ、いずれも黒浜式に比定できる。

#### SI-035 (第50図、図版6・52)

R21-03付近に位置する。平面形は4.62m×3.60mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.21mを測る。床面は平坦であるが硬化面は認められず、炉も検出されなかった。柱穴と思われるピットは、住居の平面形に沿って5基検出された。床面からの深さは0.20m～0.34mの範囲に収束する。

出土遺物は少なく、破片を5点図示した。いずれも縄文のみが施されるもので、1は無節L、2は附加条2種R+L2本/L+R2本、3は附加条1種R+R2本、4が附加条1種LR+L1本、5は附加条2種LR+R1本である。繊維の混入は1が多く、ほかは中程度である。

図示した遺物はいずれも黒浜式に比定できる。

#### SI-036 (第50図、図版6・7・53)

R21-44付近に位置する。撓乱や道路側溝により西壁および南東隅を失うが、平面形は長軸5.58m、短軸4.50mの楕円形である。確認面からの深さは0.30mを測り、床面は平坦である。炉は検出できず、柱穴と思われるピットは、住居の平面形に沿って5基検出された。床面からの深さは0.15m～0.34mの範囲に収束する。

出土遺物は少なく、破片8点を図示した。

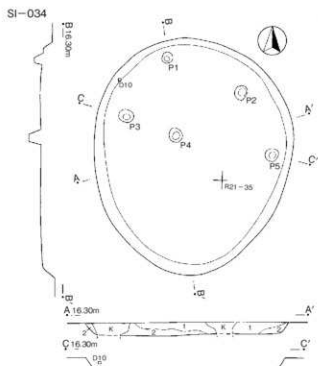
1・2は沈線で文様を描出するもので、1は口縁部破片、2は胴部破片である。1の口唇部は丸く取め、内面を横方向に磨く。沈線はともに半載竹管を用い、1は口縁部に幅4cmほどの短沈線帯を巡らせ、それ以下に菱形を意識した斜行沈線を施す。2は粗い斜格子文となろう。繊維の混入はともに中程度である。

3～8は縄文のみが施されるもので、7は口縁部破片、8は底部破片で、ほかは胴部破片である。施文原体は3が無節L、4・8が無節R、5は単節LRと0段多条単節RLを羽状に、6は附加条2種R+L2本/R+R2本、7は附加条2種L+R2本である。繊維の混入はいずれも中程度で、5は白色の鉱物粒子が若干含まれる。

図示した遺物は粗雑な斜格子文を含み、いずれも黒浜式に比定できる。このほかに図示できなかったが石皿1点、剥片類2点を出土した。

#### SI-037 (第51図、図版7・26・53)

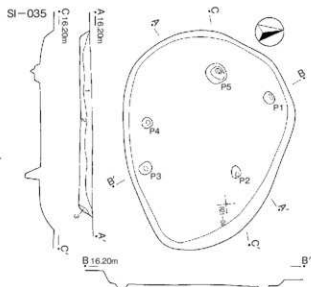
R22-07付近に位置する。南側は調査区外となるため、安全が確保できる範囲での調査となり、南壁は床面からの立ち上がりを確認できたが、遺構確認面まで広げることができなかった。平面形は4.72m×3.84mの隅丸方形で、確認面からの深さは0.42mを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。床面はほぼ平坦で、壁近くでは緩やかに高くなる。また、炉を中心として住居長軸方向に床の硬化面が広がっている。炉は中央西寄りに2か所を検出した。規模は炉Aが0.60m×0.45m、炉Bが0.28m×0.24mで、炉Aに隣接するP6の覆土上部からも焼土が検出され、炉を作り替えた可能性をうかがわせる。柱穴と考えられるピットは



- SI-034
- 1 褐色土層 炭化粒子少
  - 2 褐色土層 ローム粒子多、炭化粒子少

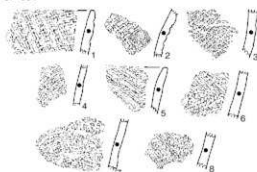


- SI-036
- 1 暗褐色土層 ローム粒子・炭化粒子少
  - 2 褐色土層 炭化粒子
  - 3 褐色土層 ローム粒子多、炭化粒子少
  - 4 暗褐色土層 ローム粒子多、炭化粒子少

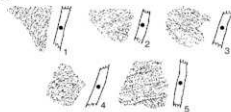


- SI-035
- 1 暗褐色土層 炭化粒子・焼土粒子少
  - 2 褐色土層 ローム粒子多、炭化粒子少
  - 3 暗褐色土層 ローム粒子多、炭化粒子・焼土粒子少

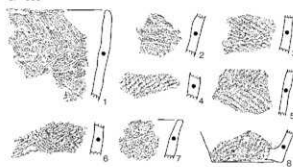
-SI-034-



-SI-035-



-SI-036-



0 (1:80) 4m

0 (1:80) 20cm

第50図 SI-034、SI-035、SI-036

5か所検出されており、床面からの深さは0.32m～0.92mの範囲に分布する。

出土遺物はさほど多くないが、1は器形が復元でき、住居の広い範囲に散在している。このほかはP2周辺に土器が集中している。

1～4は結節沈線を横位展開させ、口縁部にモチーフを描くもので、1～3は同一個体である。口縁部は大きな波状となり、1条の鈎状隆帯で区画して口縁部文様帯を形成する。結節沈線は口縁部および鈎状隆帯の上下にも各1条が配される。鈎状隆帯の下は2cmほどの幅で粗い横方向の調整痕を残し、それ以下に無節Lの縄文を一方に施す。口唇部は端部を平坦に調整する。繊維の混入は中程度である。4は口縁部破片で、口縁に沿って2条以上の結節沈線を巡らす。口唇部は丸く収め、内面は横方向に磨かれる。繊維の混入は中程度である。

5・6は連続爪形文を施すもので、5は口縁部破片、6は胴部破片である。5は口縁部に沿って2条の連続爪形文を巡らす。上下同じ位置で途切れており、右側端部を逆向きで刺突する。ともに地文に縄文を施し、5は単節LR、6は附加条1種R+L1本である。繊維の混入は少ない。

7～9は沈線を施すもので、7・8は葉脈文、9は斜行沈線である。7・8ともに胴部下半の破片とみられ、外面に縦方向の調整が観察できる。9は口縁部破片で、口唇部を丸く収める。繊維の混入は中程度である。

10～21は縄文のみが施されるもので、12・18・21は胴部破片、ほかは口縁部破片である。10～12は同一個体とみられ、胴部上半に無節rの縄文を施す。口縁部は外傾し不規則に上下し、口唇部を丸く収める。11・12にみるように、胴部中位以下が無文となり、11は破片下端で内側へ屈曲する。また、縄文が施されない部分は器面の調整が粗く、凹凸が目立つ。繊維の混入は中程度である。16～18も口縁部は不規則に波打ち、口唇部は端部を平坦に調整する。縄文は附加条2種R+L1本を一方に施す。繊維の混入は少ない。19・20も同一個体で、おそらく口径20cm以下の小型の土器と思われる。器厚も5mm前後と薄く、口唇部はさらに薄く仕上げられる。外面はまばらに縄文がみられ、附加条縄文であろう。繊維の混入は多い。その他の破片は、13が無節Rを一方に、14が単節RL/LR、15は附加条2種R+R2本を一方に、21は附加条2種R+L2本/L+R2本で菱形の効果を出している。なお、口唇部は13が丸く収め、14・15は端部を平坦に調整する。繊維の混入は13が少なく、ほかは中程度である。

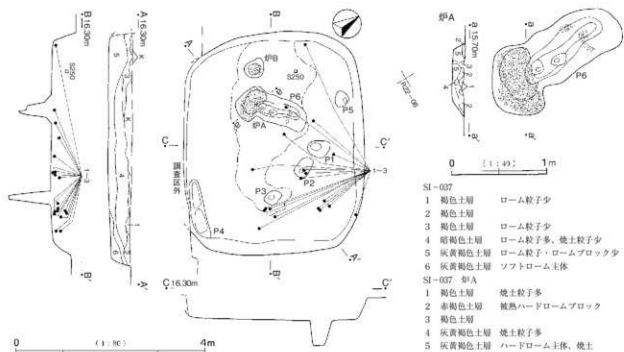
22～24は覆土上層から出土したもので、前期末の土器である。口縁部は緩く外反し、口唇部は端部を平坦に調整する。外面は単節RLの結節縄文を一方に施す。胎土は砂っぽい感じとなり、繊維は含まれない。

くびれ部に鈎状隆帯を巡らす土器が含まれ、破片ながら葉脈文等地文以外に加飾される土器が多い。いずれも黒蒸式に比定できる。土器以外に土製円板1点(第107図22)と石器類が出土した。石器類の内訳は楔形石器1点、敲石1点、側面調整礫3点(第120図250)で、ほかに赤色顔料に使用することが可能な2.1cm×1.6cmのベンガラが出土した。

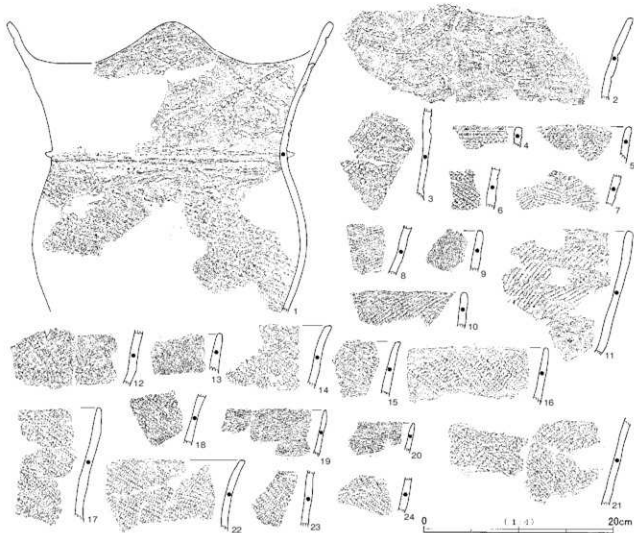
SI-038 (第52図、図版7・26・53・54)

S22-78・79付近に位置する。北東側は大きく攪乱を受け、南西側は道路により壊され、調査できたのは5.80m×4.30mの範囲である。北東壁は検出できていないが、東および北隅が確認でき、平面形は隅丸方形とみられる。確認面からの深さは0.29mで、壁は緩やかに立ち上がる。全体が明らかとなっているわけではないが、炉は床面中央ではなく、北隅に寄っていると思われる位置に検出された。規模は0.50m×0.40mで、床面から0.10m掘り込み、焼土が堆積していた。柱穴と思われるピットは11基が記録されているが、





- SI-037
- 1 褐色土層 ローム粒子少
  - 2 褐色土層
  - 3 褐色土層 ローム粒子少
  - 4 暗褐色土層 ローム粒子多、焼土粒子少
  - 5 灰黄褐色土層 ローム粒子・ロームブロック少
  - 6 灰黄褐色土層 ソフトローム主体
- SI-037 和A
- 1 褐色土層 焼土粒子多
  - 2 赤褐色土層 焼熟ハードロームブロック
  - 3 褐色土層
  - 4 灰黄褐色土層 焼土粒子多
  - 5 灰黄褐色土層 ハードローム主体、焼土



第51図 SI-037

北隅付近のP8～P11は不整形で木の根等の可能性がある。P1～P7は床面からの深さが0.15m～0.37mの範囲に分布する。なお、壁を結んだ線を長軸とする範囲に床の硬化面が確認でき、図示した。

住居の遺存状態は悪いものの出土遺物は少ない。中央と右周辺に集中する傾向がみられ、1は住居中央から、10は北隅から出土している。

1は口径27.5cm、現存高20.0cmを測り、胴部下半を欠損している。口縁部が僅かに膨らむ深鉢形土器で、現存部下端は被熱して赤色化し、脆弱になっている。口縁部は不規則に上下し、口唇部は内側を調整して薄く仕上げる。器面の調整は粗く、かなり凹凸が目立ち、縄文の施文にもむらがある。施文自体は無節Lで、全面一方向の施文である。内面には横方向の調整痕が明瞭に残されるが、やはり凹凸が目立つ。繊維の混入は多い。

2～7は結節沈線、沈線が施されるもので、2・3は口縁部破片、4～7は胴部破片である。2・3は同一個体で、内湾する口縁部に山形の小突起を付す。口縁に沿って1条の結節沈線を巡らせ、小突起部分から半截竹管を用いた斜め方向の沈線がある。結節沈線以下は単節RLの縄文を一方向に施す。内面は横方向に磨き、繊維の混入は中程度である。4は沈線で曲線的なモチーフを描く。沈線以下は単節LRの縄文である。5・6は横方向に平行沈線を密に施す。7は縦方向の単沈線で、底部に近い部位とみられる。繊維の混入は4・7が多く、ほかは中程度である。

8～21は縄文のみが施されるもので、8・15～18は口縁部破片、ほかは胴部破片である。10は内傾し、11はくびれ部であることから胴部上半、14は内湾気味にすばまることから胴部下半の破片とみられる。口縁部は8が緩やかな山形の波状口縁で、8・15・17は内側を調整して口唇部を薄く、18は端部を平坦に調整し、16は丸く収める。施文自体は8が無節Rの結束縄文、9は単節LRで施文方向を変えて羽状に、10・11は環付末端単節LRを一方向に、12は無節Rの結束縄文、13は無節L、14は無節R、15は附加条2種R+L3本/L+R3本、16は附加条2種L+R1本、17～19は附加条1種L+R1本、20は軸不明で、R2本を附加する。繊維の混入は12～14・17が多く、19は少ない。ほかは中程度である。21は底部破片で、底面が僅かに窪む。施文はなく、繊維の混入は多い。

沈線施文の土器も含まれるが、地文のみのものが多く、黒浜式に比定できる。土器以外に図示できなかったが磨石類1点のほか両極剥片3点、剥片類1点を出土した。

#### SI-039 (第53図、図版7・54)

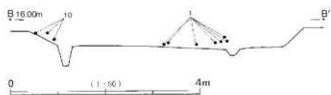
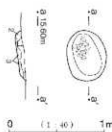
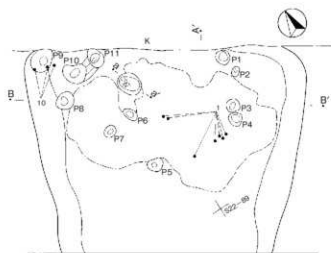
R21-52付近に位置する。平面形は4.34m×3.84mの楕円形で、確認面からの深さは0.26mを測る。床面は凹凸があり、南側のP3からP4にかけての範囲が僅かに高い。今は検出できず、柱穴と思われるピットは、住居の平面形に沿って5基検出された。床面からの深さは0.24m～0.47mの範囲に収束する。

出土遺物は少なく、破片7点を図示した。1は葉脈文、2は連続爪形文を施し、2の内面は丁寧に磨かれる。繊維の混入はともに中程度である。

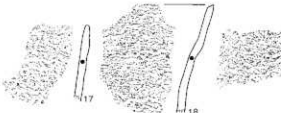
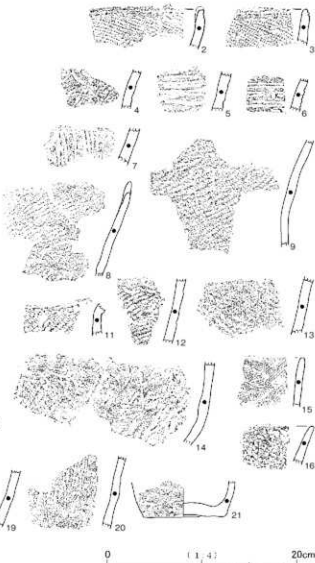
3は貝殻腹線文を施すもので、口縁部破片である。放射肋を有する二枚貝を用いており、押圧の長さは4cmほどで、その間に10～11本の放射肋が確認できる。繊維の混入は多く、器面の状態は不良である。

4～7は縄文のみが施されるもので、4は口縁部破片、ほかは胴部破片である。4は口唇部を平坦に調整する。施文自体はいずれも附加条縄文で、4が附加条1種R+L2本、5は附加条1種R+R2本、6・7は附加条1種R+L2本である。繊維の混入はいずれも中程度である。

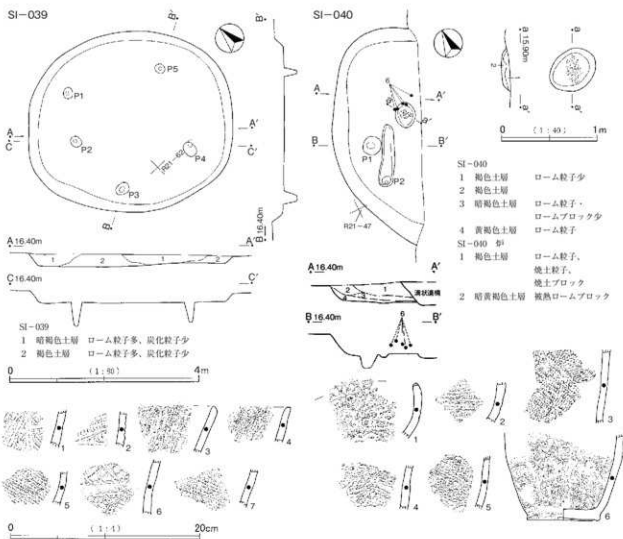
図示できた遺物は少ないものの、葉脈文や連続爪形文を施す土器が含まれ、黒浜式に比定できる。



- SI-038
- 1 黄褐色土層 ロームブロック少
  - 2 褐色土層
  - 3 暗灰褐色土層 ローム粒子
  - 4 暗褐色土層 ローム粒子少
- SI-038 中
- 1 暗褐色土層 焼土粒子多、ローム粒子少
  - 2 暗褐色土層 ローム粒子少
  - 3 褐色土層 焼土粒子、ロームブロック



第52図 SI-038



第53図 SI-039、SI-040

SI-040 (第53図、図版8・26・54)

R21-37付近に位置する。第11地点と第25地点の調査区にまたがる。第11地点側は近世以降の溝状遺構により破壊されて、調査できたのは4.57m×1.90mの範囲である。平面形は不整楕円形とみられ、確認面からの深さは0.32mを測る。炉は床面中央で検出され、規模は0.50m×0.44m、床面から0.10mの掘り込みがある。炉の覆土は焼土粒子・被熱したロームブロックで、底面にも被熱痕跡が認められた。ピットは2基検出した。P1の床面からの深さは0.28mで、柱穴と思われる。P2の直径は0.25mで、長さ1.32mの溝状の掘り込みを伴っている。床面からの深さは0.38mである。

出土遺物は少なく、6は炉周辺から出土した。

1は円形竹管刺突文でモチーフを描くもので、口縁部破片である。口縁部は内湾し、緩やかな波状となる。口唇部は規則的に棒状工具で刻む。2は半截竹管で沈線を施す。

3～5は縄文のみが施されるもので、3は単節RLを一方方向に、4・5は附加条2種R+R2本である。

6は底径7.6cm、現存高9.0cmを測る底部である。僅かに上げ底となり、胴部外面に放射肋を有する二枚貝を用いた貝殻腹縁文を施す。底部から6cm付近を境として上下で貝殻を使い分けている。下段は押圧長1.2cm前後で、その間に4～5本の放射肋が認められ、上段の押圧長はほぼ同じであるが、その間に3本

の放射肋が認められる。繊維の混入はいずれも中程度である。

図示できた遺物は少ないが、円形竹管刺突文を施す土器が含まれ、黒浜式に比定できる。

## 2 陥穴

### SK-092 (第54図、図版13・54)

S21-47付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は2.60m×2.00m、確認面からの深さは最深度で2.40mを測る。断面形は短軸方向ではV字形に近く、長軸方向は下部ですぼまる。底面は幅0.23mと広く、底面から0.55mの高さまでロームブロックを混入した有機質土が堆積する。長軸方向はN-20°-Wを指す。

土器片を2点図示した。1は胴部破片で、外面は附加条2種L+L1本を施す。2は底部破片で、施文は不明である。ともに繊維の混入は中程度で、黒浜式土器である。覆土中の一括遺物のため、遺構の時期を判断する資料にはならない。

### SK-093 (第54図、図版13)

S21-41付近に位置する。近世以降の溝状遺構により上部に攪乱を受け、確認面での規模は確定できないが、平面形は楕円形で、長軸長が推定2.77m、短軸長が1.70m、確認面からの深さは最深度が2.38mで、底面の幅は0.60mと広い。短軸断面はV字形であるが、長軸断面は北東端部が途中から大きく開く。長軸方向はN-47°-Eを指し、SK-092と90°向きを異にする。

遺物は覆土中から僅かに土器片が出土しているが、図示できるものはない。

## 3 土坑

### SK-015 (第54図、図版15・54)

S20-75付近に位置する。平面形は2.64m×1.26mの楕円形で、確認面からの深さは0.29mを測る。長軸方向の両端部にピットがあり、東端のP1は0.60m×0.45m、底面からの深さ0.34m、西端のP2は0.80m×0.58m、底面からの深さは0.54mである。覆土中から土器片が僅かに出土し、2点を図示した。

2点とも胴部破片で、縄文のみが施される。1は附加条2種L+R2本/R+L2本、2は附加条1種L+L2本である。繊維の混入は少ない。黒浜式に比定できるが、細片であり遺構の時期決定の資料とするのは難しい。

### SK-016 (第54図、図版15)

S20-94付近に位置する。平面形は円形で、規模は2.50m×2.35m、確認面からの深さは0.13mを測る。底面は平坦で、中心より西寄りに直径0.36m、底面からの深さ0.15mのピットがある。覆土中から蛇紋岩製玉1点(第107図39)が出土した。土器の出土はなく明確な時期を決定できないが、覆土はSK-017に似ており、縄文時代の所屬と考えた。

### SK-017 (第55図、図版15・54)

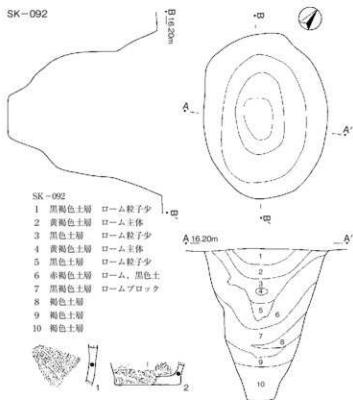
S21-07付近に位置する。平面形は2.36m×2.16mの円形で、確認面からの深さは0.20mを測る。底面は平坦で、覆土はSK-016と似ている。覆土上層から出土した土器を3点図示した。

1は口縁部破片で、口唇部を丸く収める。外面は浅い単沈線で斜格子文を描く。2・3は縄文のみが施文されるもので、2は附加条2種L+R2本、3は附加条1種L+R2本/R+L2本である。繊維の混入はいずれも中程度である。いずれも黒浜式に比定できる。

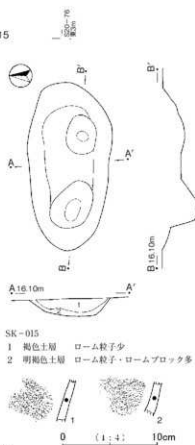
### SK-018 (第55図、図版15・54)

S21-02付近に位置する。平面形は楕円形で、底面は中央のピットに向かってなだらかに低くなる。規

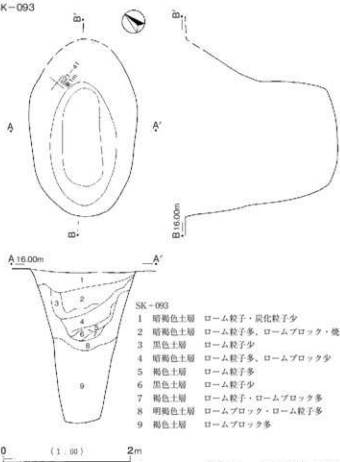
SK-092



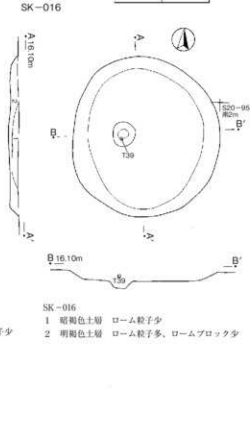
SK-015



SK-093



SK-016



第54図 B地区縄文時代土坑(1)

模は2.68m×1.40m、確認面からの深さは0.60mで、底面中央に0.47m×0.20mのピットがある。

覆土中から出土した土器片を3点図示した。1は口縁部破片で、口縁部に沈線で区画した幅4cm程度の無文帯が巡る。口唇部は丸く取める。2・3は胴部破片で、斜行する条線文を施す。後期称名寺式土器とみられ、破片ではあるが当該遺構も同時期の可能性が高い。

#### SK-019 (第55図、図版15・54)

S20-44付近に位置する。下層の確認調査中に検出され、立ち上りの一部を検出できなかった。平面形は円形で、直径0.70m、確認面からの深さは0.29mを測る。底面は平坦で、ピットとするには規模が大きく、土坑として扱った。

覆土中から出土した土器片を2点図示した。ともに胴部破片で、縄文のみが施文される。1は単節RL、2は無節Rである。繊維の混入は中程度である。ともに黒浜式に比定できる。

#### SK-020 (第55図)

S20-59付近に位置する。平面形は円形で、直径1.90m、確認面からの深さは0.41mである。上層から板碑片を出土したが混入品と考えられ、ほかに出土した遺物はなかったが、覆土の状態から縄文時代の土坑と判断した。

#### SK-021 (第55図、図版15)

R21-86付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は1.60m×0.70m、確認面からの深さは0.48mを測る。長軸東端に0.62m×0.37mのピットが検出された。形状は早期条痕文期のが穴に似るが、焼土の堆積や被熱痕跡はみられない。同様の土坑はR21～S22にかけて点在している。覆土中から土器片が僅かに出土したが、図示できるものはない。

#### SK-022 (第55図、図版15)

R21-86付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は1.10m×0.54m、確認面からの深さは0.18mを測る。長軸北端にピットがあり、底面から0.36mの深さがある。覆土にはローム粒子を多く含み、遺物は出土しなかった。

#### SK-023 (第55図、図版15)

R21-87付近に位置する。平面形は1.02m×0.50mの楕円形で、確認面からの深さは0.30mを測る。長軸方向南端にピットがあり、底面から0.17mの深さがある。覆土は中層以下でローム粒子の混入が多く、覆土中から僅かに土器が出土したが、図示できるものはない。

#### SK-024 (第55図、図版16)

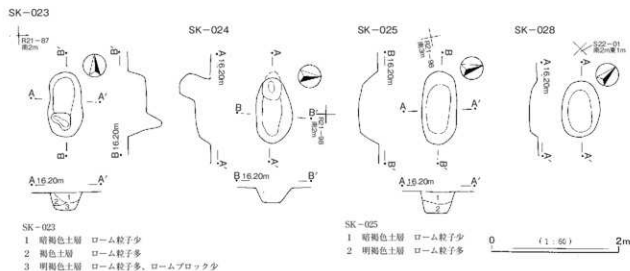
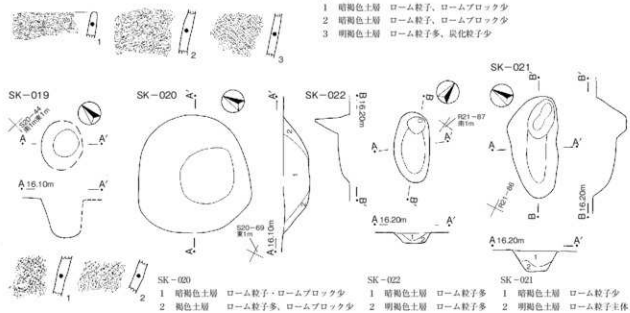
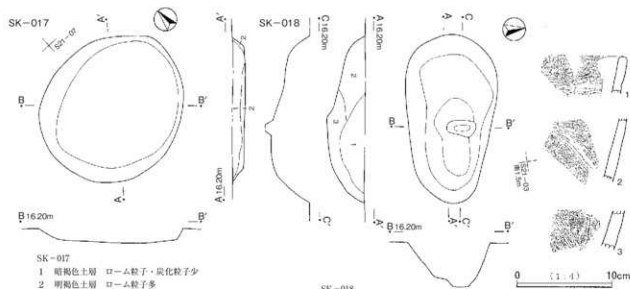
R21-98付近に位置する。平面形は1.02m×0.56mの楕円形で、確認面からの深さは0.23mを測る。長軸西端がオーバーハングし、斜めに掘り込まれるピットがある。底面から0.22mの深さである。出土遺物はない。

#### SK-025 (第55図、図版16)

R21-98付近に位置し、長軸方向は若干ずれるがSK-024の東側に隣接する。平面形は1.16m×0.54mの楕円形で、確認面からの深さは0.30mを測る。出土遺物はない。

#### SK-026 (第56図、図版15)

R21-88付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は0.98m×0.52m、確認面からの深さは0.32mを測る。長軸北端にピットがあり、底面から0.10mの深さである。覆土中から僅かに土器片が出土したが図示できるものはない。



第55図 B地区縄文時代土坑(2)



SK-027 (第56図、図版15)

R21-88付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は1.12m×0.40m、確認面からの深さは0.28mを測る。長軸北端にビットがあり、底面から0.20mの深さがある。出土遺物はない。

SK-028 (第55図、図版16)

S22-01付近に位置する。隣接するSK-027とは長軸方向を約80°北へ振る。平面形は楕円形で、規模は0.88m×0.60m、確認面からの深さは0.14mを測る。覆土中から僅かに土器片が出土したが、図示できるものはない。

SK-029 (第56図、図版16)

S22-01付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は1.06m×0.48m、確認面からの深さは0.26mを測る。底面は長軸方向西へ向かって低くなり、西端にビットがある。ビットは底面から0.17mの深さがある。出土遺物はない。

SK-030 (第56図、図版16・54)

S22-12付近に位置する。A～Cの3基の土坑が重複したもので、全体では2.08m×0.62mの規模となる。それぞれの新旧関係は不明である。Aは楕円形で、長軸北西端部にビットがある。現存規模は0.68m×0.52m、確認面からの深さは0.26m、ビットは底面から0.17mの深さがある。Bは楕円形で、長軸北西端部にビットがある。現存規模は0.68m×0.60m、確認面からの深さは0.44mで、Aの底面より0.18m低い。ビットは直径0.20m、底面から0.14mの深さがある。Cは円形の土坑で、南東側の壁が袋状となる。規模は直径0.90m、確認面からの深さは0.63mで、Bの底面より0.18m低い。

覆土中から僅かに土器片が出土しているが、出土位置の記録はない。このうち2点を図示した。ともに胴部破片で、縄文のみが施文される。1は単節RL、2は無節Rで、繊維の混入は中程度である。どちらも黒浜式に比定できる。

SK-031 (第56図、図版16)

S22-02付近に位置する。平面形は楕円形で、長軸北東端部にビットがある。規模は0.76m×0.46m、確認面からの深さは0.15mを測る。長軸方向はSK-029とほぼ同じであるが、ビットの位置は逆となる。ビットは直径0.28m、底面から0.30mの深さがある。出土遺物はない。

SK-032 (第56図)

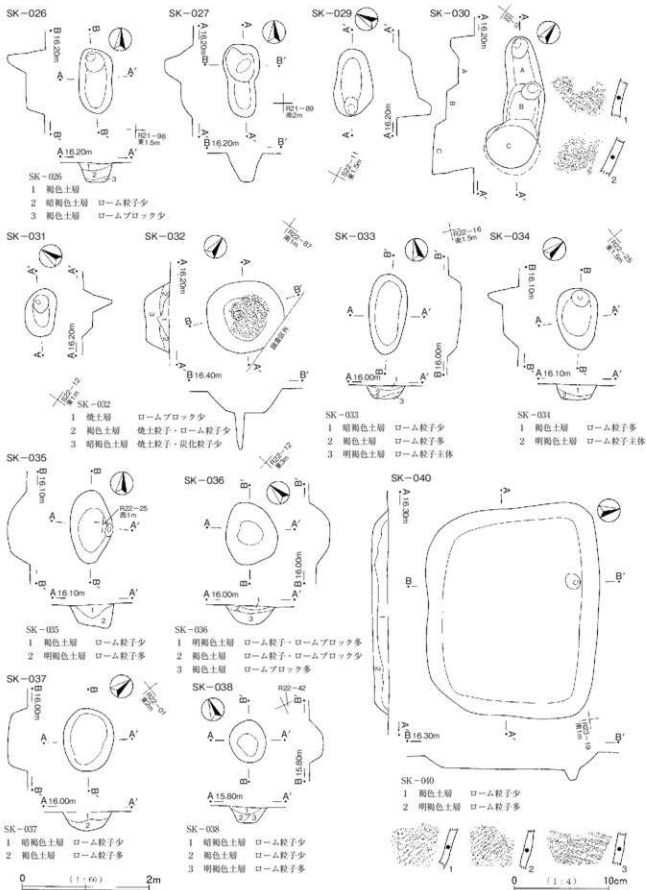
R22-87付近に位置する。東側の一部が検出できなかったが、平面形は円形で、規模は直径1.21m、確認面からの深さは0.40mを測る。底面中央にビットがあり、直径0.13m、底面から0.70mの深さを測る。覆土上層に焼土が厚さ約0.10m堆積しているが、被熱痕跡は認められない。出土遺物がなく時期の特定が困難であるが、一応縄文時代の土坑に含めて報告した。

SK-033 (第56図、図版16)

R22-15付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は1.26m×0.60m、確認面からの深さは0.20mを測り、底面は平坦である。覆土中から土器片が僅かに出土したが、図示できるものはない。

SK-034 (第56図、図版16)

R22-25付近に位置し、SK-033の南約2mにあたる。平面形は0.98m×0.64mの楕円形で、長軸方向北西端部にビットがある。確認面からの深さは0.26mを測る。ビットは直径0.20m、底面から0.24mの深さがある。出土遺物は覆土中から礫片が1点出土しただけである。



第56図 B地区縄文時代土坑(3)

SK-035 (第56図)

R22-24付近に位置する。平面形は楕円形で、短軸東端部にピットがある。規模は1.14m×0.68m、確認面からの深さは0.40mを測る。長軸方向の断面は船底状となる。ピットは0.26m×0.16mの楕円形で、東側の壁にかかっており、底面から0.10mの深さがある。出土遺物はない。

SK-036 (第56図、図版16)

R22-12付近に位置する。平面形は円形を呈し、規模は0.94m×0.84m、確認面からの深さは0.28mを測る。覆土上層にロームブロックを多く含み、埋め戻しの可能性をうかがわせる。覆土中から僅かに土器片が出土したが、図示できるものはない。

SK-037 (第56図、図版16)

R22-01付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は1.00m×0.80m、確認面からの深さは0.30mを測る。底面は長軸方向南へ向かって下がり、短軸方向断面は船底状である。出土遺物はない。

SK-038 (第56図)

R22-41付近に位置する。平面形は円形で、規模は0.66m×0.58m、確認面からの深さは0.26mを測る。底面はほぼ平坦で、覆土下層にローム粒子を多く含む。出土遺物はない。

SK-039 (第57図、図版16)

R22-43付近に位置する。楕円形の土坑内に2基のピットがあり、全体の規模は1.18m×0.54m、確認面からの深さは0.18mを測る。P1は直径0.48m、底面からの深さ0.08m、P2は直径0.44m、底面から0.29mの深さを測る。出土遺物はなく、縄文時代の土坑ではない可能性もある。

SK-040 (第56図、図版16・54)

R23-18付近に位置する。竪穴住居として調査したが、規模が小さい点、炬が設けられていないことから土坑として報告する。平面形は隅丸方形で、規模は3.30m×2.68m、確認面からの深さは0.26mを測る。底面はほぼ平坦で、覆土下層にローム粒子を多く含み、覆土の状況からも縄文時代の遺構として捉えられる。北壁の中央より西側に、直径0.20mで底面からの深さが0.16mのピットがある。

覆土中から僅かに土器片が出土しており、そのうちの3点を図示した。いずれも胴部破片で、縄文のみが施される。1・2は無節Rの縄文で、1は施文変換点で細く粘土が盛り上がる。3は附加条2種R+L2本である。繊維の混入は中程度である。図示しなかった土器片も含め、黒浜式に比定できる。土器以外に図示していないが剥片類1点を出土している。

SK-041 (第57図、図版17・54)

R19-77付近に位置する。下層確認調査中に検出されたため、壁の一部を検出できなかった。平面形は円形と思われ、規模は直径0.70m、確認面からの深さは0.66mを測る。底面から僅かに浮いた位置に貝が投棄されるが、断面は塊状であり単純な投棄ではなかったとみられる。貝層のサンプルは採取していないが、調査時の所見からハマグリを主体としてカキ・オキシジミ・ウミナガが混っていたようである。

図示した遺物8点のうち、2・3・6は貝層中もしくは貝層と同レベルから出土している。8は諸磯a式であるが、一括で取り上げた遺物であり、本遺構の時期判断の材料とはならない。

1・2は半截竹管を用いて沈線、結節沈線を描くものである。1は口縁部破片で、口縁に沿ってコンバス文を巡らせ、地文に単節LRの縄文を施す。口唇部は丸く収める。2は口縁部下のくびれ部の破片で、破片上端に1条の結節沈線が残っている。胴部は単節LRの縄文を施す。繊維の混入はともに中程度であ

る。

3～7は縄文のみが施されるもので、4～6が口縁部破片、3・7は胴部破片である。口唇部はいずれも丸く収め、施文原体は3・4が単節RL、5は附加条1種R+R1本、6は附加条2種L+L1本、7は捻糸Rである。繊維の混入は多く、4は補修孔が1か所穿たれる。

8は大きな波状となる口縁部の破片で、口縁部は内湾している。器面は単節RLの縄文を地文として施した後、半截竹管を用いてモチーフを描く。また、波頂間に円形文を縦に並べる。胎土に繊維は含まれず、内面は横方向に磨いている。8を除き黒浜式に比定できる。

#### SK-042 (第57図、図版17)

S20-49付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は1.84m×0.90m、確認面からの深さは0.36mを測る。出土遺物はない。

#### SK-043 (第57図、図版17)

R21-25付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は1.84m×1.60m、確認面からの深さは0.56mを測る。底面北寄りに緩やかに窪むピットがあり、直径0.74m、底面から0.34mの深さがある。覆土にローム粒子、ロームブロックを多く含み、底面は中心に向かい下がっている。覆土中から僅かに土器片が出土したが、図示できるものはない。

#### SK-044 (第57図、図版17)

R21-11付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は2.10m×1.70m、確認面からの深さは0.40mを測る。底面は平坦で、覆土も比較的まとった堆積である。覆土中から僅かに土器片が出土したが、図示できるものはない。

#### SK-045 (第57図、図版17・54)

R21-42付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は2.68m×1.76m、確認面からの深さは0.30mを測る。底面は平坦で、覆土にローム粒子を多く含む。

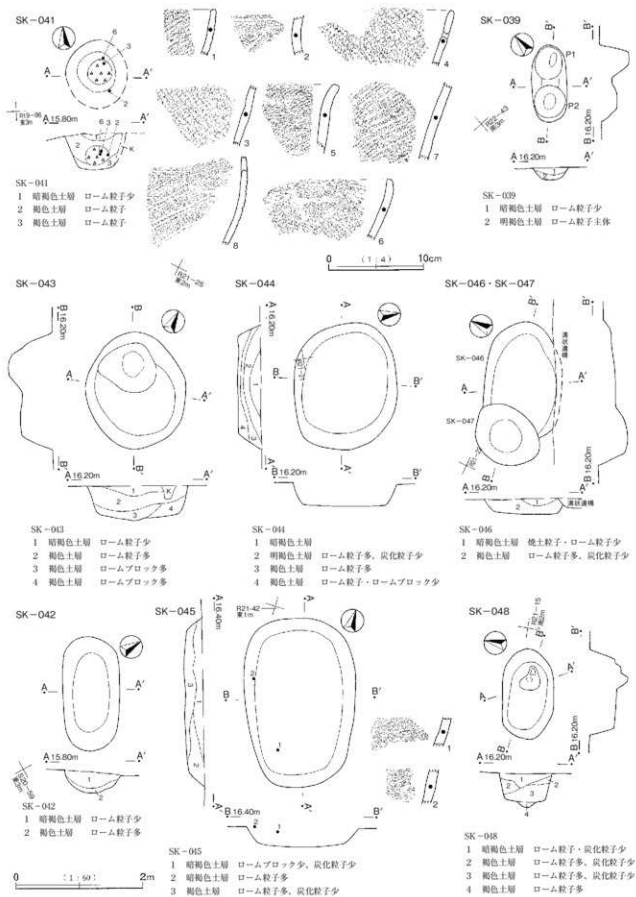
覆土上層から出土した2点の土器片を図示した。ともに胴部破片で、縄文のみが施される。1は附加条2種L+R2本、2は附加条2種R+L2本である。繊維の混入は中程度である。ともに黒浜式に比定できる。土器以外に磨製石斧1点を出土した。

#### SK-046・SK-047 (第57図、図版17)

R21-21付近に位置し、2基の土坑が重複するが、新旧関係は明らかではない。SK-046は南側を近世以降の溝状遺構に破壊され、さらにSK-047との重複部分の壁が検出できていない。平面形は楕円形で、規模は推定1.75m×1.24m、確認面からの深さは0.21mを測る。底面は平坦で、覆土に炭化粒子・焼土粒子を若干含む。覆土中から僅かに土器片が出土しているが、図示できるものはない。SK-047は楕円形を呈し、規模は1.08m×0.84m、確認面からの深さは0.47mを測る。底面は平坦で、SK-046の底面より0.26m深く構築されている。出土遺物はない。

#### SK-048 (第57図、図版17)

R21-14付近に位置する。平面形は楕円形で、長軸東端部にピットがある。規模は1.43m×0.86m、確認面からの深さは0.56mを測り、覆土に炭化粒子を若干含む。底面は平坦である。東端部のピットは0.40m×0.30mで、東側が2段に掘り込まれる。底面からの深さは0.15mを測る。覆土から若干土器片が出土したが、図示できるものはない。



第57図 B地区縄文時代土坑(4)

SK-049 (第58図)

R21-41付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は1.78m×0.95m、確認面からの深さは0.30mを測る。底面は平坦で、覆土にローム粒子を含む。覆土中から土器片が1点出土したが、図示できるものではない。

SK-050 (第58図、図版17・54)

S21-27付近に位置する。平面形は楕円形で、断面形は船底状となる。規模は2.60m×1.90mで、底面中央に直径1.30mの円形のピットがあり、確認面から0.65mの深さを測る。東壁の一部でSI-023と重複するが、新旧関係は不明である。

覆土一括として取り上げた土器片を3点図示した。いずれも胴部破片で縄文のみが施文される。1は無節R、2は単節LR、3は附加条2種R+R1本である。繊維の混入は中程度である。黒浜式に比定できるが、細片であり遺構の時期決定の材料とするのは困難である。

SK-051 (第58図、図版17)

R20-78付近に位置する。平面形は略円形で、規模は1.00m×0.89m、確認面からの深さは0.28mを測る。覆土はローム粒子を少し含み、出土遺物はないが、他の土坑との対比から縄文時代の可能性が高い。

SK-052 (第58図、図版17・54)

R22-58付近に位置する。平面形は円形で、2基のピットが重複する。ピットの前後関係および性格は明らかにできなかった。全体の規模は1.08m×0.98m、P1は直径0.30mで、確認面からの深さは0.50mを測る。P2は0.57m×0.40mの楕円形で、確認面からの深さは0.37mを測る。覆土中から出土した土器片を1点図示した。

1は胴部破片で、単節LRの縄文を一方に施し、施文変換点に細い粘土の盛り上がりが見られる。繊維の混入は多く、黒浜式に比定できる。

SK-053 (第58図、図版18)

R20-78付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は1.25m×0.86m、確認面からの深さは0.16mを測る。覆土には炭化粒子・焼土粒子が多く含まれ、後世の遺構の可能性もあるが、縄文時代に含めた。出土遺物は剥片類2点である。

SK-054 (第58図、図版18・54)

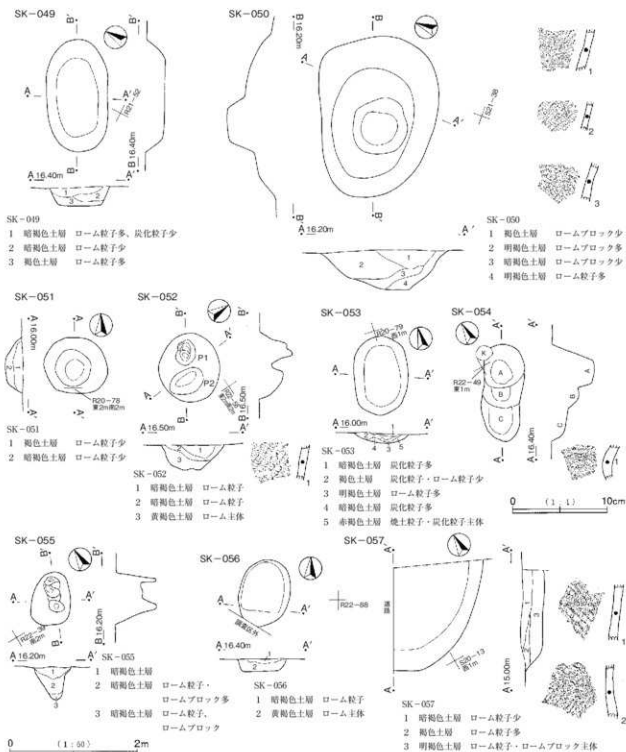
R22-49付近に位置する。3基の土坑が重複したもので新旧関係は不明である。全体は1.54m×0.70mの長楕円形で、底面は北へ向かうほど深くなる。Aは円形で、規模は0.66m×0.60m、確認面からの深さは0.65mを測る。Bは北側がより深いAと重複するため南北方向の規模は不明であるが、東西方向は0.60mで、確認面からの深さは0.40mを測る。Cもより深いBと重複するため、南北方向の規模は不明であるが、東西方向は0.60mで、確認面からの深さは0.27mを測る。位置の記録はないが、覆土中から出土した土器片1点を図示した。

1は口縁部下くびれ部の破片で、ほとんど施文はないが僅かに縄文が認められる。繊維の混入は中程度で、黒浜式に比定できる。

SK-055 (第58図、図版18)

R22-39付近に位置する。2基のピットの重複で、確認面では0.86m×0.63mの不整形となる。ピットはともに直径0.20m程度で、確認面からの深さは0.65mを測る。

覆土中から黒浜式土器の破片が出土しているが、図示できるものはない。



第58図 B地区縄文時代土坑(5)

SK-056 (第58図、図版18)

R22-78付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は1.10m×0.80m、確認面からの深さは0.30mを測る。底面は平坦で南側の立ち上がりは緩やかである。

SK-057 (第58図、図版18・54)

S20-02付近に位置する。遺跡内を通る生活道路に隣接しており、安全確保を行ったうえで、可能な限

りの範囲を調査した。検出できたのは1.40m×1.60mの範囲で、平面形は円形、もしくは楕円形と考えられる。確認面からの深さは0.34mを測り、底面は平坦である。

覆土中から出土した土器片2点を図示した。ともに胴部破片で、縄文のみが施される。1は無節L、2は附加条2種R+L2本/無節Rである。繊維の混入は中程度である。ともに黒浜式に比定できる。

#### 4 遺構外出土縄文土器 (第59～61図、図版26・55～57)

##### 第1群土器

###### 1類 (1・2)

早期燃糸文系の土器で、2点を図示したが、同一個体の可能性が高い。口唇部は僅かに肥厚し、端部を丸く収める。器面は単節LRの縄文が施される。胎土は砂粒が目立つが、焼成は悪くない。なお、2には補修孔が1か所穿たれている。

###### 3類 (3・4)

内外面とも貝殻条痕文が施される。4は外面の凹凸が目立ち、徐々に厚みを増すことから、底部に近い部位とみられる。ともに繊維の混入はあまり多くなく、広義の条痕文系土器としておく。

##### 第2群土器

###### 4類 (5～73)

4類は黒浜式に比定できるものである。

5～20は沈線によりモチーフを描くものである。

5・6は口縁部に刷毛状沈線を施し、5は胴部との境に低い稜を形成する。6は刷毛状沈線を長く引き、半截竹管の平行沈線を巡らせることで刷毛状沈線帯を表現する。胴部は5が附加条2種L+R1本、6は単節LRの縄文を施す。口唇部はともに丸く収め、繊維の混入は少ない。

7・8はコンパス文を施すもので、7は第2群3類関山Ⅱ式とすべきかもしれない。8は口縁部破片で、口唇部を僅かに内傾させ、山形の小突起を2個一対で付す。口縁に沿ってコンパス文を2条巡らせ、条痕様の沈線を挟んでその下位にもコンパス文を巡らす。口唇部および内面は横方向に丁寧に磨かれる。繊維の混入はともに中程度である。

9は口縁部に半截竹管を用いた円形のモチーフを並べ、口縁直下に竹管の刺突文を巡らす。口縁は緩やかな波状となり、口唇部を丸く収める。10は口縁部に沿って半截竹管による沈線を2条巡らす。胴部は縄文を施すようで、無節Rの縄文が僅かに認められる。繊維の混入はともに中程度で、9は砂粒が目立つ。

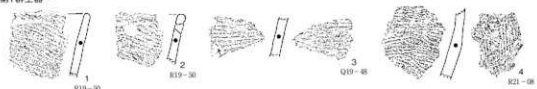
11～17は葉脈文を描くものである。11・12は同一個体とみられ、推定口径21.2cmを測る。口縁部は大きく開き、11の破片下端部付近で屈曲して胴部につながる。口縁上部は内湾し、口唇部に山形の小突起を2個一対で付す。施文は半截竹管を用いるが浅く、片側のみとなる部分もある。内面は縦方向に磨いた後にさらに横方向に磨き、平滑である。繊維の混入は多い。13～15は口縁部破片、16・17は胴部破片で、半截竹管を用いてしっかり施文している。繊維の混入は14・15・17が中程度、13・16は少ない。

18は横方向に密に沈線を施し、葉脈文の変形かと思われる。19は口縁部破片で、口縁に沿って半截竹管を用いた沈線を巡らせ、胴部は縦方向に比較的鋭い単沈線を垂下させる。また、外面に縦方向の調整が観察できるが、器面の凹凸が目立つ。繊維の混入は18が中程度、19は多く、砂粒も目立つ。

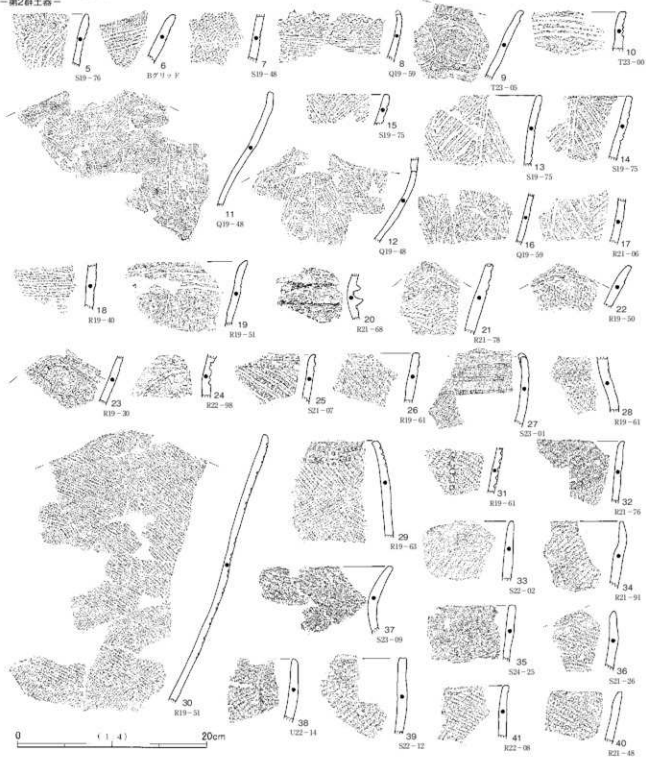
20は沈線で斜格子文を描くもので、口縁部下くびれ部の破片である。くびれ部に2条の鋸状隆帯を巡らせ、隆帯下側に沿って半截竹管を連続刺突する。内面は横方向に磨き、繊維の混入は中程度である。



—第1群土器—



—第2群土器—



第59图 B地区遺構外出土縄文土器(1)

21~31は連続刺突文、結節沈線、円形竹管刺突文などを施すものである。

21~23は大きな山形の波状口縁で、口縁部に沿って21は連続刺突文を3条、22・23は結節沈線を1条巡らす。口唇部は21が頂部を平坦に調整し、22・23は丸く収め、端部を棒状工具で刻む。また21は波頂部端部を窪ませる。3点とも地文に縄文を施し、21・22は連続刺突文または結節沈線より下から、23は口縁端部から施す。施文原体は21が附加条1種R+R2本、22・23は単節RLである。内面は横方向に磨かれ、繊維の混入は中程度である。24は口唇部を欠損するが、口縁部文様部に連続刺突文でモチーフを描く。

25~29は結節沈線または連続爪形文を施すもので、25・26・29は口縁に沿って2条、27は3条、28はくびれ部に2条を巡らす。口縁は27・29が内湾し、27は山形の小突起を付す。また29は波状口縁となり、円形竹管刺突文を加える。地文はいずれも縄文を施し、26だけ口縁端部から施文している。施文原体はいずれも附加条縄文で、25が附加条1種RL+L2本、26・28が附加条1種R+L1本、27は附加条2種L+R2本、29は附加条1種R+R2本/R+L1本で菱形の効果を出している。繊維の混入は中程度で、26・28は少なめ、26・28・29は白色の鉱物粒子を含む。

30は円形竹管刺突文を施すものである。大きく開く深鉢形の土器で、口縁も大きな山形の波状となる。波頂部から円形竹管刺突文を1列垂下させ、14個の刺突があったと推定できる。器面は附加条1種R+R2基を施す。口唇部は丸く収め、内面を磨く。繊維の混入は少ない。31は先端の尖った工具を回転させた円形刺突文を縦に垂下させる。地文に単節RLの縄文を施す。繊維の混入は中程度である。

32~71は縄文のみが施されるものである。

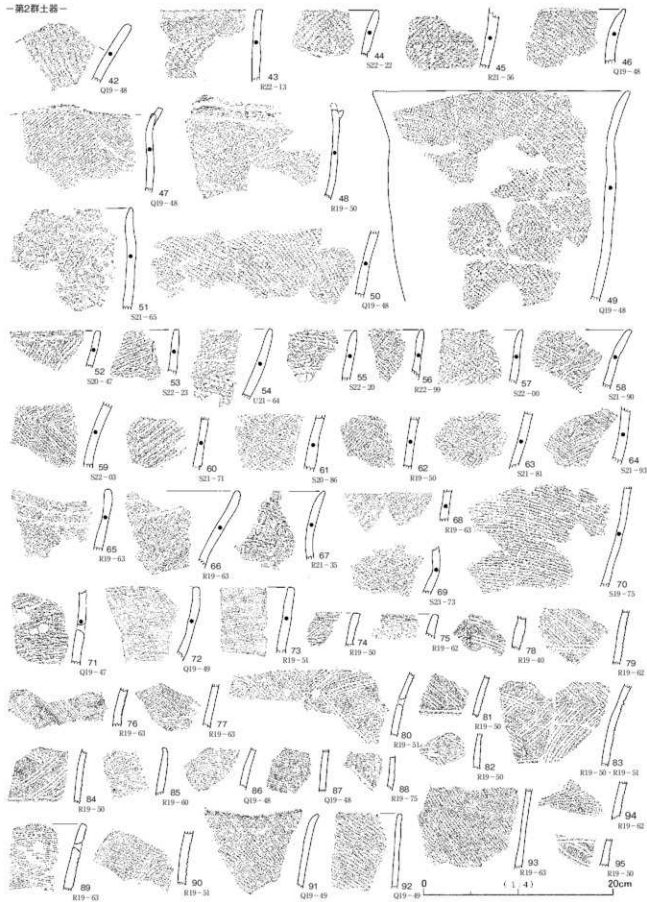
32~39は無節の縄文で、36・37がL、ほかはRである。なお、38は施文変換点に細い紐状の粘土を貼り付ける。また、33・35は口縁部に2.0cm~2.5cmの幅で横方向の調整を行い、意識的に無文帯としている。いずれも口縁部破片で、37は口縁部下でくびれる器形となる。口唇部は35・39が端部を平坦に調整し、ほかは丸く収める。繊維の混入は34・35・37~39が多く、32・36は中程度、33は少ない。

40~45は単節の縄文で、40~42はRL、43はLRで、44はRL/LRで羽状に、45は環付末端LRである。45を除き口縁部破片で、42は緩やかな山形の波状口縁となり、大きく開いている。口唇部は41・43が端部を平坦に調整するが、ほかは丸く収める。なお、43は口縁部に幅3cm程度の無文帯を構成する。繊維の混入は45が多く、ほかは中程度である。

46~69は附加条縄文である。49・50は口縁部下で緩くくびれる形態の深鉢形土器で、同一個体の可能性が高く、推定口径26.5cm、現存高21.9cmを測る。口唇部は丁寧に調整され、丸く収めるが、口縁自体は不規則に上下する。器面は附加条1種L+L1本を全面一方向に施す。内面は口縁部を横方向、胴部を縦方向に粗く磨く。繊維の混入は中程度である。

47は推定口径13.5cm前後の小型の土器で、口縁部が緩やかな山形の波状となる。48は口縁外縁に鈎状隆帯を巡らせ、口唇部に山形の小突起を付す。51は口縁部を僅かに外反させ、整形により口縁部を区分している。また、65は山形の波状口縁となり、口縁に沿って幅1cm程度の横方向の調整で無文帯を構成する。口唇部は46・55~58・67が内側から調整して端部を薄く仕上げ、51は外側から調整して薄く仕上げる。47・52・53は丸く、54・65は端部を平坦に調整する。施文は先に紹介した49・50を含め、46・48・51~53が一方向の施文で、ほかは施文方向の異同あるいは2種類の原体を用いて59にみるように羽状の施文や、62・64のような菱形の効果を表現し、装飾効果を高めている。また、65~69は附加条3種で格子状の描出となる。なお、53・60は施文変換点に細く粘土の盛り上がりがあり、60は施文も深く葉脈文のごとき描出

—第2群土器—



第60图 B地区遺構外出土縄文土器(2)

となる。繊維の混入は51・61・65が多く、ほかは中程度である。64の内面は実に丁寧に磨かれる。

70・71は捻糸文を施し、70がL、71がRで、70は一方に施文している。内面はともに縦方向の調整を施し、71は丁寧に磨かれる。なお、71は補修孔が穿たれるが、右側に隣接して開けかけた補修孔がもう一つある。繊維の混入は70が中程度、71は多い。

72・73は無文の土器で、ともに口縁部の破片である。口唇部は丸く収め、器面は内外面とも横方向に磨いている。繊維の混入は中程度である。

#### 5類 (74~114)

a種 (74~93) 諸磯a式に比定されるものをまとめた。文様モチーフごとに紹介する。

74・75は口縁部に半截竹管による鋸歯状文を巡らす。口唇部は丸く収め、74は鋸歯状文の上下を連続爪形文で、75は沈線で区画する。74の内面は丁寧に磨かれる。

76~84は肋骨文を描くもので、76~78は円形竹管刺突文または円形刺突文を加えた縦の沈線を軸に、直線的な斜線を緻密に描く。また、79~84は縦の沈線よりも斜線を強調するようになり、上下で斜線の向きを変えるなど「米」字文風で全体に崩れた感じとなる。76・77は同一個体とみられ、77では肋骨文の下端を横方向の沈線で区画し、それ以下に単節LRの縄文を施す。79~84の縦沈線は、細く鋭い単沈線となり、斜沈線の端部は竹管を回転させて円形の施文とする。また、肋骨文下端は横方向の沈線で区画し、それ以下に単節RLの縄文を施す。なお、80は割れ口を挟んで補修孔が1対穿たれる。また、83は口縁端部を欠損しているが、破片上端部はかなり摩耗しており、破損後も使用を続けたものとみられる。胎土は白色の鉱物粒子が目立つ。

85~89は肋骨文の斜沈線の代わりに弧線を引くもので、木葉文に近いモチーフである。85~87は円形竹管刺突文を加えた縦沈線を軸に木葉文を配置し、85は口縁に沿って2条の連続爪形文を巡らす。なお、85は高低差のある波状口縁となり、口唇部が内側へ張り出す。88は円形竹管刺突文を伴わず、器面に縦方向の調整痕を明瞭に残す。89は軸となる縦沈線は描かれず、口縁に沿って上下を結節沈線で区画して弧状の沈線を施す。88は胎土に白色の鉱物粒子を多く混入する。89は補修孔が1か所ある。

90は円形竹管刺突文を垂下させ、地文に単節RLの結束縄文を施す。胎土に白色の鉱物粒子を多く含み、焼成は堅緻である。

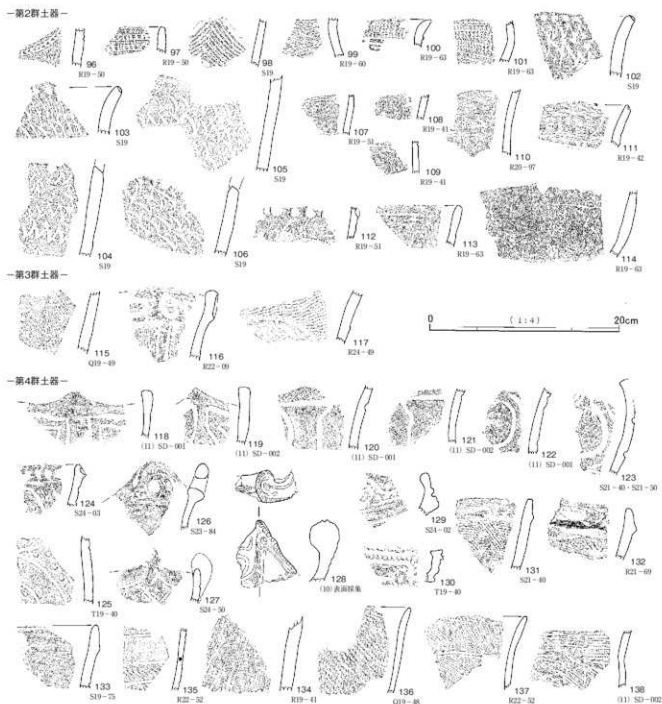
91~93は諸磯a式に伴うと思われる土器で、縄文のみが施文される。91・92は口縁部破片で、口唇部を丸く収める。施文本体は91がRLの合い摺り、92が直前段多条のRL、93は単節RLの結束縄文である。器厚は6mm前後と薄く、胎土に白色の鉱物粒子を含む。

b種 (94~114) 諸磯b式および浮島1式から興津式に比定される土器を一括した。

94~98は半截竹管を用いて沈線、結節沈線、D字爪形文を施し、94~96は弧状のモチーフを描く。地文は94が単節RLの縄文を、95~97はRの捻糸文を施す。98は地文はなく、半截竹管を使用して密に沈線を引く。

100~106は貝殻文を施すものである。100・101は半截竹管を用いて文様を構成し、貝殻縁文を充填する。102~106は放射筋のない二枚貝を用いた連続波状文で、他の施文要素はみられない。口縁部は102・103のように短く外反し、端部を工具で押圧する。器厚は10mm~12mmと厚く、胎土は砂粒が目立つ。104・106はそれぞれ1か所ずつ補修孔がある。

107~110は半截竹管で細い沈線または破線様の沈線を描く。107・109は角度をずらして2方向に施文し



第61図 B地区遺構外出土縄文土器(3)

て、ハの字状の効果を出す。胎土は砂粒が目立つが焼成は良好である。

111~114は目立った施文はないが、111は口唇部および口縁部に刺突文を、112は粘土紐接合部を指頭押圧する。また、114は破片上部に沈線または貝殻腹線文とみられる施文があるが、器面の状況が悪く、判然としない。

### 第3群土器 (115~117)

縄文時代中期の土器をまとめた。B地区では第3群土器は少なく、3点のみ図示した。

115は胴部破片で、無節Rの結節縄文を縦位に施す。五領ヶ台式に比定される。116は渦巻文と窓状区画

を隆帯で表現する口縁部文様帯と、沈線区画の磨消帯を垂下させる懸垂文がみられ、地文は浅い条線となる。口縁は波状となり、口唇部から内面にかけて横方向に磨かれる。117は胴部破片で、微隆起線により区画して充填縄文とする。加曾利EⅡ式～EⅢ式とみられる。

#### 第4群土器 (118～138)

##### 1類 (118～134)

沈線によりJ字文、スベード文などの意匠文を描き、充填縄文を施すもので、称名寺式に比定される。

118・119・123は口縁部破片で、118は小さな山形、119・123は大きな山形の波状口縁となる。口唇部は肥厚し、端部を平坦に調整する。充填される縄文は節の細かい単節RLである。

124・125は118～123と同様に沈線で意匠文を描き、意匠文内に列点文を充填する。124は口縁部破片で、口縁に沿って円形押圧文を巡らす。

126～130は口縁部および把手部分の破片で、126・128は比較的大きな把手が付され、126は孔が貫通し、内側に円形刺突がある。128は刻みを入れた紐状隆帯で飾り、把手部分を波頂部とする大きな波状口縁となる。127は口縁部に小突起が付され、胴部は斜格子文を描く。129・130は口縁部が大きく屈曲し、屈曲部から口縁端部に沈線と円形刺突によりモチーフを描く。

131～133は口縁に沿って低い隆帯を巡らせ、上部を無文帯とする。胴部は131が無節R、132が単節RLの縄文を施し、133は沈線でモチーフを描く。網取I式の影響を強く受けた土器である。134は斜交する条線文が施される。

##### 3類 (135～138)

加曾利B式に含まれるものを一括した。135は横方向に沈線を巡らせ、単節RLの縄文帯と磨消帯を配する。136～138は半粗製の土器で、136は縄文、137・138は沈線を施す。



### 第3節 C地区の遺構と遺物 (第62図)

C地区は、富士見遺跡の南東に位置し、駒形遺跡、大松遺跡と接する。東側の小支谷に面した第3～7・10・12・14・15・17・38・43地点にあたる。大グリッドV20～22、W20～23、X20～23、Y21～23、Z20～23の範囲が該当する。この地区は古常陸川谷から貫入する小支谷の標高15m～17m前後の台地縁辺部にあたる。検出された遺構は、竪穴住居40軒、陥穴7基、土坑30基である。このほかに土器集中地点2か所、地点貝塚1か所を検出した。このうち西端の大グリッドZ21～23に所在する遺構は、駒形遺跡E地区、大松遺跡へも連続すると思われる。

#### 1 竪穴住居

##### SI-041 (第63・64図、図版8・26・58)

Y22-83・93付近に位置する。西側は調査区境界にかかり、また一部を近世以降の溝状遺構で破壊され、全形は確認できていない。平面形は5.83m×5.20mの円形と推定でき、確認面からの深さは北側で0.31mを測る。炉は床面東壁寄りに比較的整った炉A・炉B、北壁寄りに規模の小さい炉Cを検出した。規模は炉Aが0.79m×0.65m、炉Bが0.90m×0.64m、炉Cは0.44m×0.50mを測り、炉A・炉Bが床面から0.10m、炉Cは床面から0.15m窪んでいる。いずれにも被熱痕跡が認められる。柱穴と思われるピットは8基検出された。このうちP1・P2・P4・P7・P8は0.50m～0.70m、残りの3基は0.37m～0.39mの深さである。なお、P1上面の床面レベルに最大0.14mの厚さで遺構内貝層が形成されていた。貝は全量採取し、同定結果を第4表に示した。構成種はマガキが圧倒的に多く、オキシジミが続く。

多くの遺物が出土しており、土器のほか多種類の石器を出土した。土器は炉A・炉Bの周辺に集中し、図示した1・2もこの範囲から出土したものである。これに対して石器類は、比較的壁に近い位置から出た。

1は口縁部および底部を欠損し、胴部全周の70%が遺存する。推定胴部最大径24.0cm、現存高18.6cmを測り、大きくくびれて口縁部と胴部を分ける。胴部現存部位は球形で、現存部下端は被熱のため赤色化している。外面は単節LRの縄文を一方向に施し、くびれ部および胴部下半は施文が不鮮明である。胎土は白色の鉱物粒子が目立ち、繊維の混入も多い。

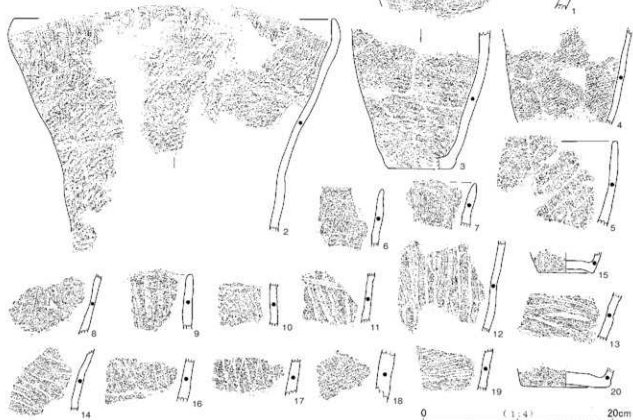
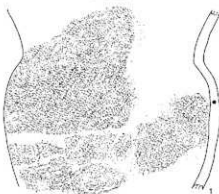
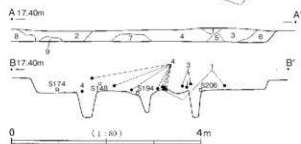
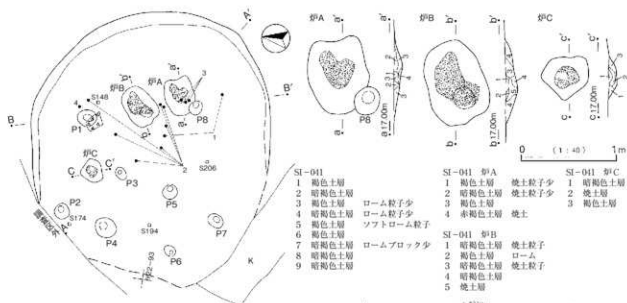
2は推定口径33.9cm、現存高22.5cmを測る深鉢形土器で、口縁部の50%が遺存している。胴部上半から大きく開き、口縁部が僅かに内傾するもので、口縁部は比較的平坦に仕上げられるが、器面の調整は粗く、外面は凹凸が目立つ。口縁部に放射筋のある二枚貝で貝殻腹縁文を無造作に施し、1回の押圧長も10mm～25mmと幅がある。なお、25mmの間に9本の放射筋が確認できる。胴部は無節Rの縄文を一方向に施す。繊維の混入は多い。

3は底径6.2cm、現存高13.4cmを測り、底部から胴部下半にかけて全周の40%が遺存する。器面は無節Rの縄文を底部直近まで施す。被熱して赤色化しており脆弱である。繊維の混入は多い。

4は胴部中位が全周の50%遺存する。現存部推定最大径は15.0cm、現存高9.0cmで、比較的小型の土器である。器面は縄文のみの施文で、上半部は附加条1種R+R1本、下半部は無節Rの縄文である。内面は横方向に磨き平滑だが、外面は凹凸が目立つ。繊維の混入は中程度である。

5～15は沈線で斜格子文等を描くものである。5は整った斜格子文を描くが、6～12・15は粗雑な施文で縦線沈線が主となる。いずれも単沈線で、6・7は細く鋭い沈線であるが、9～12は太く浅い。口縁部は平坦ではなく、5は口唇部を丸く取めるが、9は端部を平坦に調整し、6・7は内側からの調整で薄く





第63図 SI-041 (1)

仕上げる。10にはコンパス文も描かれ、縦方向の沈線が文様区画となっていた可能性もある。また、13・14は横位の太い沈線が主となる。15は上げ底の底部で、底部外面は磨かれる。繊維の混入は10が少ないが、ほかは多い。

16～20は貝殻文が施されるものである。16・17は放射肋のある二枚貝を用いて貝殻縁縁連続波状文を施す。1回の押圧長は3cm程度で、その間に7本の肋が認められる。繊維の混入は多く、同一個体の可能性がある。18は放射肋のある二枚貝を用いた貝殻背圧痕を施す。器厚は16mmと厚手で、質感もほかの土器とは異なり、花積下層式に比定できる。19・20は貝殻条痕文が施され、同じく花積下層式とみられる。繊維の混入は中程度で、19は内面を縦方向に磨いている。

21は口縁部破片で、口唇部から内面にかけて器面の剥落が進み、調整等は不明であるが、口縁に沿って隆帯を巡らせ、その下位に燃糸側面圧痕で渦巻きを表現する。花積下層式に比定できる。22は特徴的な施文はみられないが、無節Lの結束縄文が施される。繊維の混入はともに少ない。

23～38は縄文のみが施されるものである。23～28は無節Rの縄文を一方に施し、このうち23～25は同一個体である。口縁部はほぼ直立し、大きな屈曲もなく胴部へつながる。口唇部は端部を平坦に調整し、調整時に外側へ粘土がはみ出る。内面は横方向に丁寧に磨かれる。26・27も口縁部破片で、口唇部は26が端部、27が内側を調整する。28は胴部下半とみられる。29は無節R/Lを羽状に施す。30は附加条2種L+r1本である。口縁部は平坦ではなく、口唇部は内側から調整する。繊維の混入は29が中程度であるが、ほかはいずれも多い。

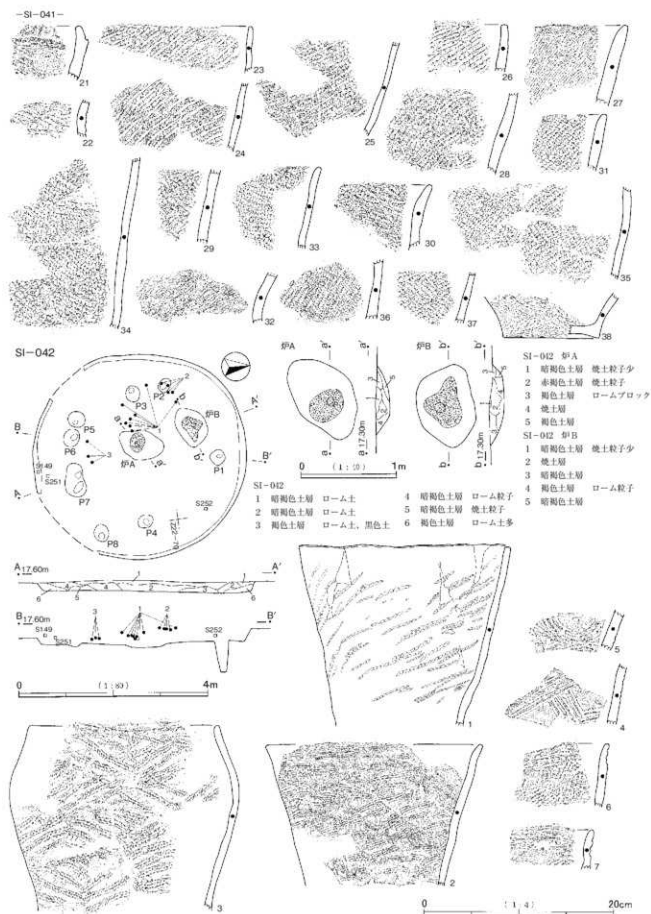
31～38は単節の縄文を施すもので、31・33は口縁部破片、38は底部、ほかは胴部破片である。口縁部は2点とも端部を丸く収める。また、32は口縁部下くびれ部、35は胴部最大径から下の部位である。遺存部をみるかぎり、31・32は単節LR、33は単節RLを一方に施し、32の施文はかなり浅い。34は節が大粒で、条間が広いことから附加条縄文とみられ、一方の施文である。35～37は単節LR/RLを羽状に施す。内面は37が横方向、36が縦方向に磨かれる。繊維の混入は33～35が多く、ほかは中程度で、32・35は白色の鉱物粒子が目立つ。38は底部で、推定口径10.4cmを測る。底部は上げ底となり、内外面ともに丁寧に磨かれる。胴部は大きく開き、無節R/Lを羽状に施す。繊維の混入は中程度である。

18・19の貝殻背圧痕や21の燃糸側面圧痕など、花積下層式に比定できる土器が含まれるが、器形が復元できた1・2をはじめ多くの土器が黒浜式に比定でき、本住居も黒浜式期と考えられる。石器類はすべてを図示した訳ではないが、磨製石斧5点（第112図148）、磨石類1点（第113図174）、敲石1点（第115図194）、石皿1点（第116図206）が出土している。

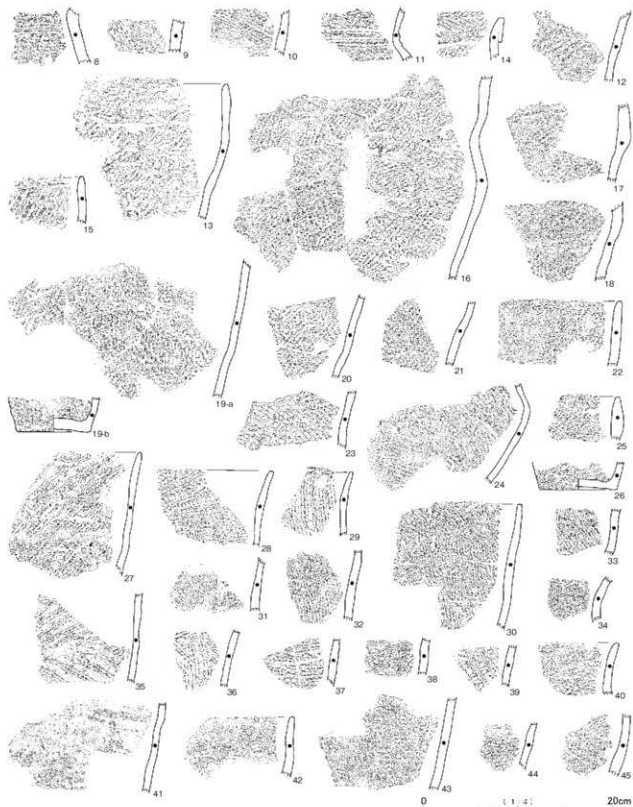
#### SI-042（第64・65図、図版8・26・59）

Y22-79付近に位置する。平面形は4.36m×4.05mの円形で、確認面からの深さは比較的遺存のよい北側で0.22mを測る。南側の遺存は悪く、壁が検出できない部分もあった。床面は平坦であるが、壁際がやや高い。炉は中央の炉A、北寄りに位置する炉Bの2か所が認められた。規模は炉Aが0.95m×0.65m×0.15m、炉Bは0.83m×0.60m×0.10mを測り、どちらも焼土の堆積と被熱痕跡が認められる。柱穴と思われるピットは平面形に沿うように8基検出した。床面からの深さはP6が0.09m、P2が0.16mと浅いが、ほかは0.34m～0.75mである。

遺物は炉AからP2にかけた範囲に集中し、図示した1・2もその範囲から出土している。石器類は壁際を中心に出土している。



第64図 SI-041 (2)、SI-042 (1)



第65図 SI-042 (2)

1は推定口径22.2cm、現存高18.8cmを測り、胴部上半から口縁部は遺存しているが、胴部下半から底部を欠損する。口縁部は平坦ではなく不規則に上下し、口唇部から内縁にかけて調整し、端部を平坦に調整する。外面には全体的に横方向の調整痕が観察できるが、凹凸が残される。口縁部に幅3cm程度の無文帯があり、胴部は熱糸文Rを施す。なお、胴部下半は器面の調整がさらに雑となり、現存部下端には縄文は施されない。内面は口縁から8cm程度を横方向、それ以下を縦方向に調整する。繊維の混入は多い。

2は推定口径24.6cm、現存高14.8cmを測り、口縁部が40%遺存している。大きく歪んでいるため、口径は現存部の平均値で、現状では極端な楕円形を呈している。口縁は比較的平坦で、端部を平坦に調整する。器面は平滑に整えられるが、大きな凹凸が目立ち、口縁直下から附加条縄文を施文している可能性があるが、熱糸文Rを施す。内面は横方向に調整され、口縁の9cmほど下から磨き調整が認められる。繊維の混入は多い。

3は口縁部が全周の20%遺存するもので、胴部上位に最大径を有し、口縁が内傾する深鉢形土器である。推定口径21.0cm、現存高19.5cmを測る。口唇部は内面から頂部にかけて平坦に調整され、断面角頭状となる部分と薄く仕上げられる部分があり、縄文施文の部分もある。外面は附加条2種L+R2本/R+L2本で菱形の効果表現するなど、装飾的效果を出している。内面は横方向に丁寧に磨き、繊維の混入は中程度である。

4～11は半截竹管を用いて平行沈線、刺突文、結節沈線などを施すものである。4・5は平行沈線でモチーフを描くもので、4は斜行する沈線の組み合わせ、5は単沈線で曲線を表現する。ともに地文はなく、繊維の混入も中程度である。6～11は連続刺突、結節沈線を施し、8・9は結節沈線で主幹文様を描き、連続刺突で細部を埋める。やはり地文は施されず、繊維の混入は8が多く、9は中程度である。6・7は口縁部破片で、3条の連続刺突文を巡らす。口唇部の調整は粗雑で、内側からの調整で薄く仕上げる。地文は無節rの縄文を施し、繊維の混入は多い。10は連続爪形文でモチーフを描き、11は口縁部下くびれ部に結節沈線を巡らす。11は地文に縄文を施すようであるが、器面の状態が悪く、詳細は不明である。繊維の混入は10が中程度、11が多い。

12・13は細く鋭い沈線で斜格子文、格子文を描くものである。器面は基本的に無節Rの縄文施文を全面に施し、その一部を再度ナデ消して斜格子文等を描いている。13は口縁部破片であるが、口唇部、器面とも調整は粗雑で、大きな凹凸が目立つ。また、口縁部は3.5cmほどの幅で横方向に調整し、無文帯としている。繊維の混入は12が中程度、13は多い。

14～43は縄文のみが施されるものである。14は口縁部破片で、2.8cmの幅で折り返している。器面は口唇部、口縁部を含め単節LR/RLを羽状に施す。繊維の混入は多く、1点のみであるが、花積下層式に比定できる。

15～23は無節の縄文を施すもので、15・22は口縁部破片、ほかは胴部破片である。15・22は直立する口縁で、口唇部は丸く収め、調整は雑である。16は口縁端部を欠損するが、口縁部下でくびれ、胴部上位が張る。17・18は同一個体で、器面の凹凸がかなり目立ち、器厚も均一ではない。縄文施文後に手でもったことにより、部分的に施文が不鮮明になっている。20・21も同一個体の可能性が高い。19は胴部下半部の破片で、破片上半は暗褐色、下半は被熱のためか橙色となる。繊維の混入はいずれも多い。施文本体は19が無節L、23は無節L/R、ほかは無節Rである。

24～26は単節の縄文を施すもので、24は胴部中位、25は口縁部、26は底部の破片である。24は急角度で

屈曲する器形で、胴部最大径が推定15.2cmと小型の土器である。26の底部は推定底径8cm弱で、上げ底となる。施文原体は24が単節RL、25が単節LR/RL、26は単節LRである。

27～43は附加条縄文もしくは燃糸文を用いる。27～30・40・42は口縁部破片で、30をのぞいて外反気味に開く。口唇部は27・29・40が内側から調整して薄く仕上げ、28・30・42は端部を平坦に調整する。また、31は燃糸文施文の上位に無文帯が巡ることから口縁直下、41は断面形状から底部に近い部位とみられる。施文原体に軸となる縄文が観察できるのは27・28・35・38・39で、27は附加条2種LR+R2本、28が附加条2種L+R2本、35が附加条2種R+L2本/L+R2本、38が附加条1種L+R1本、39が附加条2種R+L2本である。30～34・41は条間が密で、短い範囲での施文を繰り返しており、燃糸文とみられる。原体は30が燃糸文Rで、ほかは燃糸文Lとなる。42・43は同一個体で、まばらに無節Lの縄文がみられる。内面は30・32～34・42が横方向に丁寧に磨かれ、43は縦方向に磨かれる。繊維の混入は28・30・37・38・40が多く、ほかは中程度である。

44・45は胴部破片で、放射肋のある二枚貝の押圧による施文とみられる。繊維の混入は多い。

14が花積下層式であるほかは黒浜式に比定できる。石器類はすべて図示した訳ではないが7点出土し、打製石斧1点、磨製石斧1点(第112図149)、側面調整礫4点(第120図251～253)のほか両極剥片1点であった。

#### SI-043 (第66図、図版8・60)

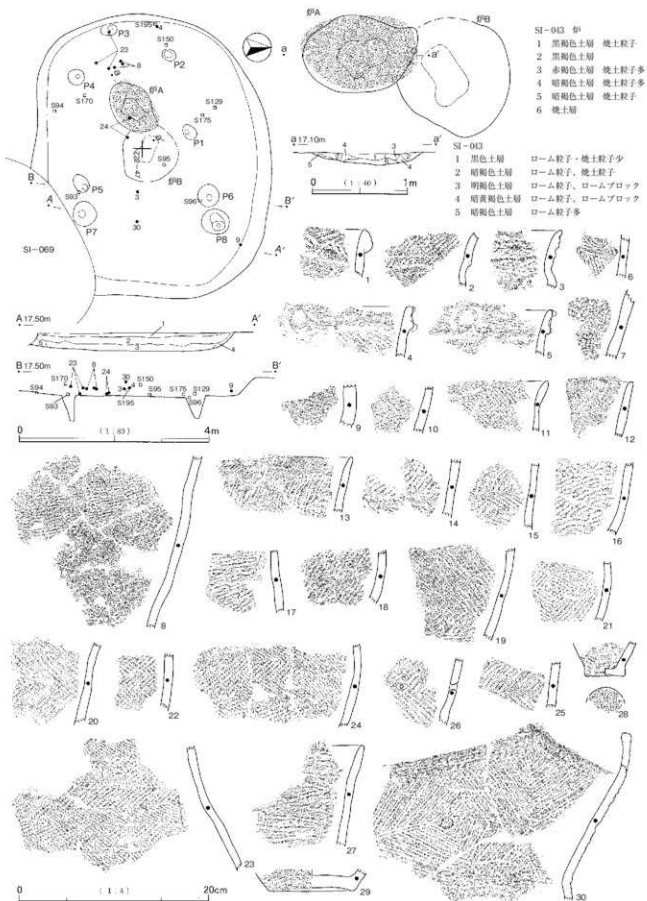
Z22-36・46付近に位置する。第3地点で北西1/4、第14地点で残り調査した。南西隅がSI-069と重複し、土層断面の観察により(旧)SI-043→(新)SI-069の新旧関係が確認できた。平面形は5.94m×5.03mの隅丸長方形で、確認面からの深さは0.28mを測る。炉は床面中央部に2か所検出された。炉Aは規模1.22m×0.78mで、床面から0.14m掘り込まれ、全体に被熱痕跡が認められる。上面に拳大の礫が置かれていたが被熱のため脆くなっており、原形を留めたまま取り上げることはできなかった。炉Bは規模1.21m×1.23mで、底面に薄く焼土が検出されたが、掘り込みは浅い。炉Aが炉Bを切っており、新旧関係は(旧)炉B→(新)炉Aと思われる。柱穴と思われるピットは平面形に沿うように8基検出された。床面からの深さは0.21m～0.64mとばらつきがある。

遺物は全体に広く散在し、特に集中する場所はみられない。また、全形がうかがえる程度に復元できた土器はない。SI-069と重複し、遺物が混在している可能性があるが、当住居の範囲から出土した遺物を掲載する。

1～6は口縁部破片である。1・2は複合口縁で、口縁部を肥厚させる。肥厚部に1は鋸歯状の集合沈線、2は単節LRの縄文、折り返し部以下は無節Rの縄文を施す。ともに繊維の混入は多い。3は現存部下端が内側へ大きく屈曲しており、現存部推定最小径は13cm前後と小さい。器形の推定が難しいが、2条の隆帯とそれに沿った連続刺突文が巡る。4・5は口縁に沿って隆帯を巡らすもので、同一個体である。隆帯と口縁端部とは1.5cm～2.5cmほどの間隔があり、円形の隆帯でつなぐ。口縁部、胴部、隆帯上、口唇端部に貝殻背圧痕を施す。繊維の混入は多く、白色の鉱物粒子を若干含む。6は口縁端部を欠損するが、口縁部文様帯の一部とみられる。渦巻き状の燃糸側面圧痕がみられ、部分的に沈線を充填する。破片下部は単節RLの縄文を施す。繊維の混入は中程度で、白色の鉱物粒子を僅かに含む。

11～29は縄文のみを施すもので、11～13は口縁部破片、これ以外は胴部破片である。

11は僅かに口縁部を肥厚させ、口縁下で緩くくびれる。口縁肥厚部分に単節LRの縄文を一方に、以



下LR/RLを羽状に施す。12は外面に単節LR・RLの縄文を羽状に施して、口唇端部に貝殻背圧痕を施す。13は熱糸文Rを施す。繊維の混入はいずれも中程度である。

14～18は無節の縄文を施すもので、16・18は断面形状が内湾していることから胴部中位とみられる。原体はいずれも無節Rで、15は結束を伴う。また、17は施文変換点の粘土が僅かに盛り上がる。繊維の混入は多く、16は内面を横方向に丁寧に磨く。

19～26は単節の縄文を施すもので、いずれも羽状縄文となる。21・24は断面形状が内湾しており、胴部中位とみられ、23は下に大きく広がることから胴部上位と思われる。22は帯状施文、21は変形の効果を出している。また、23・24は単節LRと無節Lを横帯施文し、色調が大きく異なるが同一個体の可能性が高い。内面は23・24に縦方向の調整痕、21は縦方向の磨きが観察できる。繊維の混入は全体的に多く、20・22は白色の鉱物粒子を若干含む。26は補修孔が1か所穿たれている。27は口縁部破片で、軸は不明であるがR1本を附加する。口縁部は内側から調整し、薄く仕上げる。繊維の混入は多い。

28・29は底部である。28は推定底径5.0cmと小さいもので、若干上げ底となる。胴部および底部外面に貝殻背圧痕を施す。29は底径8.8cmを測る。底面は内外面とも磨き、上げ底となる。胴部には縦位の沈線が施されるようだが、器面の状況が悪く十分観察できない。繊維の混入はともに多く、29は白色の鉱物粒子および微細な雲母粒子を含む。なお、29の破損部は摩耗している。

30は沈線でモチーフを描くものである。口縁部破片で、緩やかな波状となり、口唇部に山形の小突起を付す。口縁部に沿って2条、くびれ部に3条のC字爪形文を巡らす。口縁部は波頂部を軸とする半截竹管による葉脈文である。縦の沈線はなく、口縁部中段に半截竹管の途中からC字爪形文に変わる横位の沈線を巡らす。また、横位の沈線には波頂部とその中間に円形の押圧を加える。内面は横方向に磨かれ、繊維の混入は多い。

本住居から出土した土器は花積下層式と黒浜式に比定でき、SI-069と重複しているため、遺物の混入がみられる。27・30のように明確に黒浜式に比定される土器は覆土上層から出土しており、住居埋没後の混入品とみられるため、本住居は花積下層式期の可能性が高い。出土した石器類のうち図示したのは一部だが多種類が出土しており、出土点数はA～C区の堅穴住居の中でも多い部類にはいる。内訳は石鏃未成品3点、楔形石器11点（第109図93～96）、二次加工ある剥片1点、打製石斧1点（第111図129）、磨製石斧1点（第112図150）、局部磨製石斧1点（第113図170）、磨石類5点（第114図175）、敲石2点（第116図195）、石皿2点のほか両極剥片2点、剥片類21点で楔形石器の点数が多い。

#### SI-044（第67図、図版8・61）

Y22-21付近に位置する。南側を第4地点で、北側を第17地点で調査した。平面形は6.17m×5.45mの隅丸方形で、確認面からの深さは0.19mを測る。覆土中には新期テフラとみられる赤味を帯びた土がブロック状に交じっている。炉は床面中央北寄りに2か所検出した。炉Aは規模0.80m×0.49mで、掘り込みは浅い。焼土粒子を多量に含む黒褐色土が堆積し、被熱痕跡は僅かである。炉Aに接しているP5は、土層断面観察と覆土に焼土粒子を含まないことから、炉Aよりも新しいとみられる。炉Bは規模0.66m×0.50mで、床面からの掘り込みはほとんどないが、全体に被熱痕跡が認められる。炉AとP5の関係を考えると、炉A→炉Bの新旧関係が想定できる。柱穴と思われるビットはP5を含め12基検出した。P1～P4・P6・P7・P12が主柱穴とみられ、P7が0.19mと浅いものの、ほかは0.43m～0.81mの深さがある。南東隅に位置するP8は0.80m×0.74mの方形で、床面からの深さは0.17mを測る。底面は平坦で、貯蔵穴等の施設と



考えられる。

遺物は少なく、全形を推定できるまでに復元できた土器もない。1～6は沈線または刺突文を施すもので、1は口縁部破片、ほかは胴部破片である。1～3は縦位の沈線を主とし、斜行する沈線が僅かに加わる。沈線は幅2mm前後のしっかりした施文で、単沈線である。1は口縁部を内側から調整し、口唇部を薄く仕上げる。4は細く鋭い沈線で描く斜格子文にしっかりした斜行沈線を加え、5は斜行する細い沈線に横に連続する刺突文を加える。6は縦に連続する刺突文を施す。繊維の混入は4が中程度であるほかは多い。

7・8は半截竹管を用いた沈線で区画するもので、7は口縁に沿って1条、8の部位は不明だが、口縁部と胴部を画するものと思われる。また、7は斜位の沈線も施され、口縁部文様帯を構成する。地文は7が単節RL、8は単節LRの縄文で、繊維の混入は中程度である。

9～17は縄文のみが施されるもので、10・15・16は口縁部破片、ほかは胴部破片である。10・16は比較的丁寧に口唇部を整え、丸く収めるが、15は厚さも整っていない。また、10は口縁部に円形の隆帯を貼り付ける。施文原形は9・13が無節L、11は無節Rを一方に、10は無節Rと環付末端無節Lを羽状に、12・14は単節LRで14は縦位施文、15は附加条2種RLR1本、16・17は附加条2種L+R1本/R+L1本である。繊維の混入は15が中程度であるほかは多い。

図示した土器は、沈線、刺突文を施す土器が含まれ、いずれも黒浜式に比定できる。このほか、土製円板2点(第107図11・12)、軽石製品2点(第107図41・43)、図示していないが敲石1点を出土している。軽石製品41は線刻のある特殊な形態で注目される。

#### SI-045 (第67図、図版8・61)

X22-37付近に位置する。平面形は3.76m×3.30mの楕円形で、確認面からの深さは0.06mと浅い。そのためローム層上面では遺構の輪郭が不鮮明で、ローム層を若干掘り下げた段階で住居跡の存在が明らかとなった。炉は床面中央より北に寄った位置にあり、規模は0.52m×0.44mを測る。床面からの掘り込みもほとんどなく、被熱痕跡は弱く狭い範囲に限られる。ピットは検出されなかった。

住居の遺存状況が悪いこともあり、出土遺物は少なく、破片6点を図示した。

1～4は口縁部破片で、1は内側から調整して端部を薄く仕上げ、2・3は口唇部を丸く収める。1は附加条1種L+L1本、2～5は無節Lの縄文を一方に、6は単節LR/RLを羽状に施す。繊維の混入はいずれも多い。

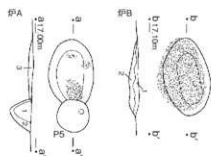
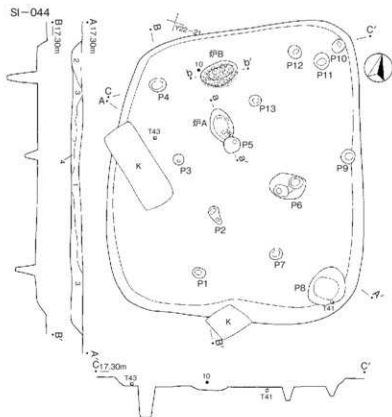
図示した土器はすべて黒浜式に比定できる。図示していないが石皿1点を出土した。

#### SI-046 (第68図、図版8・61・62)

X22-16付近に位置する。平面形は5.06m×4.28mの楕円形で、確認面からの深さは0.20mを測る。新时期テフラをブロック状に含む土層が最上層に堆積しており、ローム層上面より若干上位で住居跡の存在が確認できた。炉は中央に位置し、規模は0.60m×0.44mで住居長軸方向に長い。掘り込みはほとんどないが、被熱痕跡は顕著である。柱穴と思われるピットは南東壁側に偏って3基を検出した。床面からの深さは、P1が0.35m、P2が0.51m、P3が0.25mである。

遺物は炉を挟んだ南北から集中して出土し、炉周辺は希薄である。全体の形をうかがえるまでに復元できた土器はない。

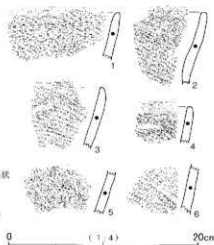
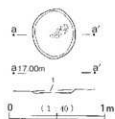
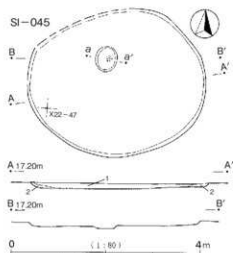
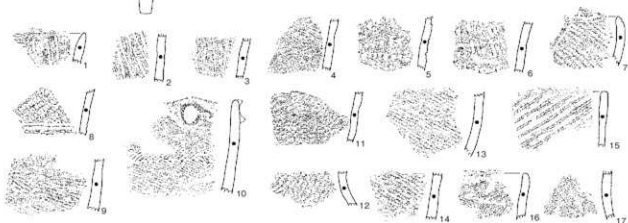
1～4は縄文以外の加飾があるもので、1～3は口縁部破片である。1は大きな波状となる口縁部で、



- SI-044
- 1 黒色土層 焼土粒子・ローム粒子
  - 2 黒褐色土層 新期ナフラ
  - 3 黒褐色土層 ローム
  - 4 黄褐色土層 ローム土主体

- SI-044 9A
- 1 黒褐色土層
  - 2 暗黄褐色土層 ローム粒子
  - 3 黒褐色土層 焼土粒子多

- SI-044 9B
- 1 焼土層
  - 2 暗褐色土層 焼熟ロームブロック多



- SI-045
- 1 褐色土層 ローム粒子、ローム塊状
  - 2 暗黄褐色土層 ローム土主体

- SI-045 9A
- 1 黒褐色土層 ローム粒子・焼土粒子

第67図 SI-044、SI-045

口縁に沿って3条の結節沈線を巡らし、その上位に刷毛状沈線を施す。結節沈線は1条の施文において、押し引きをする区間とそのまま平行沈線とする区間がある。口縁頂部を欠損するが、口唇部の調整も丁寧に行い、断面角頭状とする。なお外面は単節RL/LRの縄文を羽状に施す。2は口縁に沿って2条の細い鈎状隆帯を巡らし、部分的に凹形隆帯を加える。口唇部は剥落する部分が多いが、山形の小突起を付している。胴部は無節Lの縄文を施し、内面は横方向に磨いている。3は口縁に沿って連続刺突文を巡らし、胴部に無節Lの縄文を施す。4は胴部上位の破片で、外面に縦位の沈線を施す。内面は上半に横方向、下半に縦方向の調整が観察できる。繊維の混入は1が中程度であるが、ほかは多い。

5～27は縄文のみが施されるものである。5は胴部中位が全周の30%遺存し、現存部最大径は24cm測る。口縁部の形状は不明だが、胴部上位に最大径がある深鉢形土器とみられる。器面は環付末端単節LRを横帯施文し、胴部下半で施文方向を変えて羽状とする。繊維の混入は中程度である。

6は無節Rの縄文を一方向に施し、胴部中位から下半にかけての部位とみられる。繊維の混入は中程度である。7～17は単節の縄文を施すもので、7・8・12・15・16は口縁部破片である。7・8は口縁のカーブや色調が異なるが、内面の調整や施文原体が酷似し、同一個体の可能性がある。また、16・17も施文原体が酷似し、同一個体とみられる。口唇部は15が端部を調整し、断面角頭状とするが、ほかは丸く収める。施文は7～9・12が単節RL、13・14は単節LR、10・16・17は単節RL/LRを羽状に施す。なお、12・16は施文変換点で粘土が細く盛り上がる。繊維の混入は中程度であるが、12・13は多い。18～26は附加条縄文を施すもので、18～21は口縁部破片である。19は口縁部下で明瞭にくびれ、25もくびれ部の破片である。口唇部は18が端部を調整して角頭状に、21は内外面から調整して薄く仕上げ、19・20は丸く収める。23は胴部下端が張り出す感じの底部で、底径8.5cmを測り、底面はほとんど窪まない。27は胴部下半から底部にかけての破片で、推定底径8.0cmを測る。施文は18・21～24が附加条2種R+L2本/L+R2本を用い、装飾的效果を高め、24は菱形の効果を出している。また、25・26は同一個体で、胴部上位に附加条縄文を、くびれ部および胴部下半に無節Rの縄文を施す。27は附加条縄文ではないが、胴部に無節Lの縄文を施し、胴部下端のみ結束縄文を縦に施す。繊維の混入は中程度であるが、21・23は多い。

図示した土器は縄文のみの施文のものが多く、5のように横帯施文のものが含まれる。いずれも黒浜式に比定できる。このほかに図示していないが敲石2点、石皿1点を出土した。

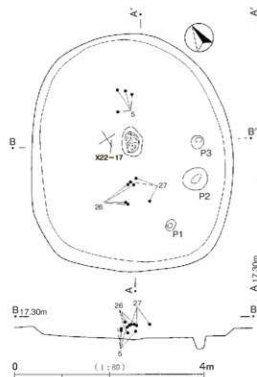
#### SI-047 (第69図、図版8・62)

X23-08付近に位置する。遺存する掘り込みが浅く、北西壁が検出できなかったが、平面形は長軸4.12m×3.80m前後の楕円形と思われる。北東側がSK-060と重複するが新旧関係は不明である。炉は中央北寄りに位置し、規模は0.36m×0.22mと住居長軸方向に長い。床面からの掘り込みはほとんどないが、底面に被熱痕跡が認められる。柱穴等のピットは検出されなかった。

住居の遺存状況が悪く、遺物の量も多くないが、炉南側の覆土中層から1が、炉北側の覆土中から側面調整礫(第120図254)が出土した。

1は推定口径17.6cm、現存高19.0cmを測り、全周の30%が遺存している。器高が25cm以下と推定できる小型の土器で、口縁部に幅約1cmの無文帯を残し、全面環付末端無節Lを横帯施文する。繊維の混入は中程度である。

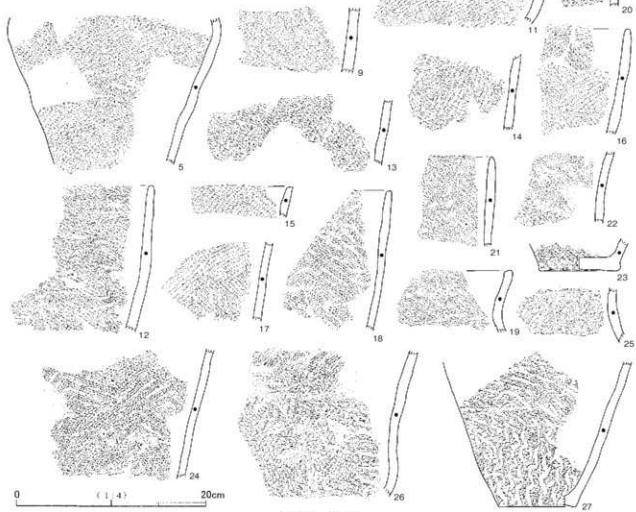
2は口縁部破片で、口唇部を丸く収め、外面は無節Rの縄文を施す。3は胴部中位以下の破片で、外面に単節RLを施す。繊維の混入はともに中程度である。



SI-046

- 1 黒褐色土層
- 2 黒色土層
- 3 暗黄褐色土層
- 4 暗黄褐色土層
- 5 黄褐色土層

- ローム餃子・新開テフラ
- ローム餃子
- ローム餃子
- ローム餃子・ロームブロック
- ローム土主体



第68図 SI-046

2・3は小破片であり、黒浜式に比定できるが、1は環付末端縄文を横帯施文することから関山Ⅱ式とみられ、本住居は関山式期の可能性が高い。

SI-048 (第69図、図版9・26・62・63)

X23-06付近に位置する。平面形は4.70m×4.08mの隅丸方形で、確認面からの深さは0.27mを測る。覆土最上層に新期テフラを含んだ土層が堆積している。炉は2か所に設けられ、規模は北西壁寄りの炉Aの方が大きく0.68m×0.43mを測り、住居軸方向に沿って長い。南西壁寄り炉Bは炉Aの1/2の規模で0.32m×0.29mを測る。炉Aは底面の被熱痕跡が顕著であるが、炉Bはさほどでもなく、季節的に炉の位置を変えた等の理由が推測される。ピットは12基検出され、このうちP1とP2、P4とP5、P7とP8、P10とP11は対となり、支柱穴と考えられる。床面からの深さはP10が0.22m、これ以外は0.41m～0.64mの範囲に収束する。その他のピットは深さ0.14m～0.28mである。また、南西壁を除く各壁中央に壁溝があり、北西壁が長さ1.12m、深さ0.08m、北東壁が長さ1.46m、深さ0.04m、南東壁が長さ2.28m、深さ0.03mで、幅は0.20m～0.26mである。住居廃絶後に遺構内貝層が形成され、現状で床面東側にいくつかのブロックに分かれて広がっている。面積が広い3か所の貝ブロックを全量採取しており、第4表に同定結果を示した。本遺跡のほかの遺構ではあまり主体的でないサルボウガイが多いことが注目できる。

遺構内貝層が形成されているにもかかわらず遺物の出土量は多くはなく、特に集中する様子もみられない。また、全形がうかがえる程度に復元できた土器もなかった。その他、土製門板、石器類を出土している。

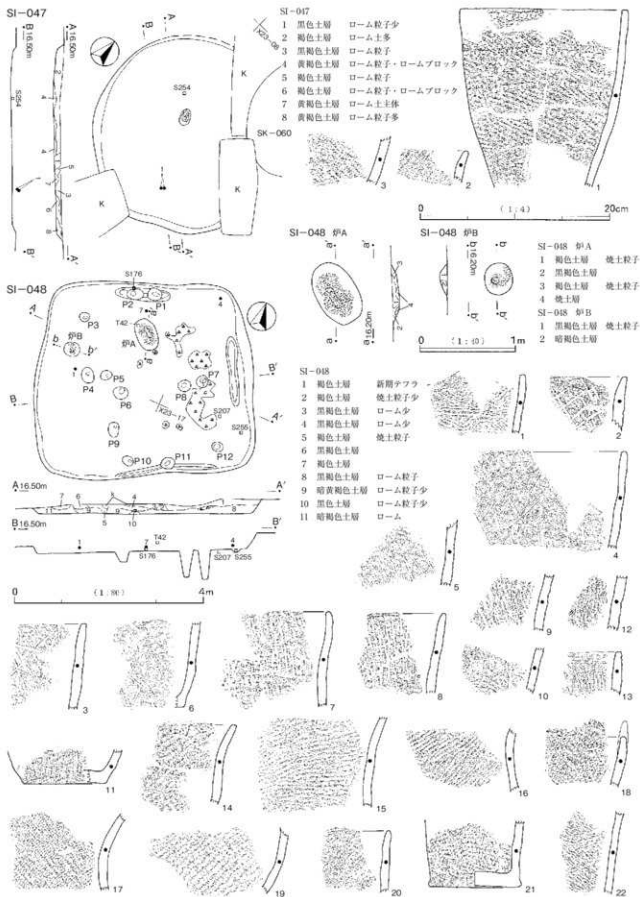
1は半截竹管を用いた沈線で口縁部文様帯にモチーフを描き、口縁部は小さな山形の波状となる。施文は2本単位で波状文を描き、上下を横位の沈線で挟む。内面は横方向に磨き、繊維の混入は中程度である。

2～12は沈線で斜格子文または縦走する沈線を施す。2～4・7・8は口縁部破片で、口唇部はいずれも丸く取めるが、8は内側からの調整が強い。また、4は口縁部から1.5cm程度をあけて施文を開始するが、ほかは口縁直下から、11は底部直上まで施文する。施文は4・6・11・12が半截竹管を用い、比較的浅い施文であるのに対し、2・3・5・7～10は単沈線で、鋭く深いものとなっている。なお、5は斜格子文より上位に縄文、7は縦位沈線施文後に横位になぞり沈線を施し、12は縦位の沈線を波状とする。繊維の混入は中程度から少ない。

13は口縁部破片で、放射筋のある二枚貝を用いた貝殻腹縁文を施し、口縁に沿って半截竹管を用いた平行沈線を巡らす。押圧長は3.5cm前後で、その間に8本の筋が確認できる。口唇部は端部を調整して断面角頭状とする。繊維の混入は多い。

14～22は縄文のみを施すもので、14・18・20は口縁部破片である。14～16は無節の縄文を施し、原体はいずれもRである。15・16とも湾曲しており、くびれ部から下の部位とみられる。繊維の混入は14が多いが、15・16は中程度である。17～21は単節の縄文を施す。施文原体は17・18が単節RL、19～21は単節LRとなる。口縁部は18が内湾気味で、口唇部を丸く取め、端部に半円形の突起を付す。20は口唇部の調整が雑で、内側から調整して薄く仕上げる。その他、17は口縁部下のくびれ部、19は胴部下半の破片である。21は底部で、胴部下端が僅かに張り出す。底径は9.4cmを測り、底部外面を丁寧に磨く。繊維の混入はいずれも多い。22は軸が不明だがR1本を附加した縄文を施し、施文方向を変えて装飾的效果を出している。繊維の混入は多い。

図示した土器は斜格子文を施すものが多く含まれ、黒浜式に比定できる。土器以外に土製門板1点(第



107図13)、土器片錘1点(第107図25)のほか、特殊な軽石製品1点(第107図42)、また図示したのは一部だが、石器類として楔形石器1点、打製石斧1点(第111図130)、磨製石斧6点、磨石類1点(第114図176)、石皿4点(第117図207)、側面調整礫1点(第120図255)、剥片類2点を出土した。軽石製品は線刻のある特殊な形態で、SI-044出土品とともに注目される。

#### SI-049(第70・71図、図版9・27・63・64)

W20-35付近に位置する。平面形は590m×505mの楕円形で、確認面からの深さは0.12mを測る。覆土最上層に新时期テフラを多く混入する土層が堆積するが、確認面では住居全体を覆っていない。炉は床面中央から住居長軸方向の西寄りに設けられている。規模は0.70m×0.50mで、床面から0.20m掘り込んでいる。底面は部分的に被熱痕跡が確認できるが、その度合いは比較的弱い。炉より東側に柱穴と思われるビットを11基検出した。深さはP4・P5・P8・P11が0.11m～0.15mと浅く、P1～P3・P6・P10は0.43m～0.72mと深い。なお、住居長軸方向西端部の床面から壁にかけて非常に堅く締まった部分が認められ、出入り口施設であった可能性が想定できる。

遺物の量は多く、炉の周辺と炉の東側の密度が高い。器形を復元することができた個体は5点を数える。

1は図上復元で推定口径34.0cm、現存高19.0cmを測る。口縁部下がくびれる深鉢形土器で、口縁は4単位の波状となる。波頂部にあわせて直径約1.0cmの孔が貫通する。口縁部は3本1単位の櫛歯状工具を用いて振れ幅がほとんどない波状文を7～8段施す。また、胴部は最大径から上位に附加条2種L+R2本を施している。内面は横方向に丁寧に磨いたようだが、遺存状態はよくない。繊維の混入は多く、白色の鉱物粒子が目立つ。

2は底径6.7cm、現存高20.5cmを測り、口縁部を欠損する。胴部上位から大きく広がる深鉢形土器で、底部は突出した感がある。外面は無節Rの縄文を全面一方向に施し、胴部下端には横方向の調整痕が残される。また、施文変換点で粘土が一部紐状に盛り上がっている。底部外面はほぼ平坦で、摩耗している。繊維の混入は中程度である。

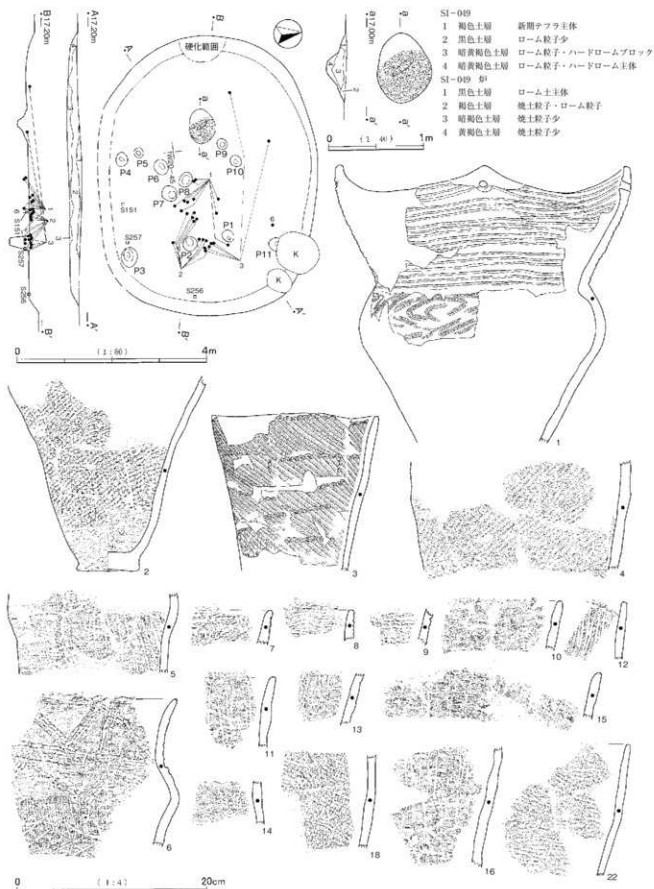
3は口径17.6cm、現存高16.7cmを測り胴部下半から底部を欠損する。直線的に立ち上がる深鉢形土器で、口縁は平坦ではなく不規則に上下し、口唇端部は丸く収める。外面は環付無節Lの縄文を全面一方向に施し、施文変換点で粘土が一部紐状に盛り上がる。内面は上部を横方向、下半を縦方向に調整する。繊維の混入は中程度である。

4は胴部中位が全局の50%遺存し、現存部径は推定23.2cmを測る。外面は凹凸が目立ち、単節LRの縄文を一方向に施す。内面は横方向の調整痕が確認できる。繊維の混入は多い。

5は胴部が全局の40%遺存する。現存部最大径は推定17.6cmの小型深鉢形土器である。外面は縦位ないし斜交する沈線を施す。現存下端部の破断面は磨滅している。繊維の混入は多い。

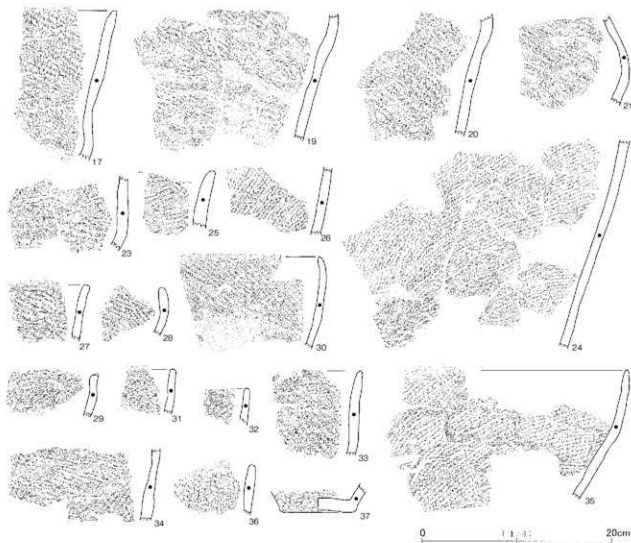
6～9は刺突文・沈線により文様を構成するものである。6は押し引きの連続刺突文を鋸歯状に配する口縁部文様帯を構成する。口縁部は外反し、屈曲して胴部へつながる。口唇部は丸く収め、指頭による押圧がある。胴部は単沈線で斜格子文を描く。7は口縁に沿って2条の連続刺突文を巡らし、地文に単節LRの縄文を施す。8・9は半截竹管を用いた波状文を巡らす。8は口縁部破片で、口唇部を断面角頭状とする。繊維の混入はいずれも多い。

10～16は斜格子文あるいは縦位の沈線を施すものである。10～12・15は口縁部破片で、口唇部は12が端部を調整して断面角頭状とし、ほかは丸く収める。沈線はいずれも単沈線で、13・14は雑な斜格子文とな



第70図 SI-049 (1)





第71図 SI-049 (2)

り、ほかは縦状沈線で、11・12を除いて細く鋭い施文である。繊維の混入は12・14が中程度で、ほかは多い。

17～37は縄文のみが施されるものである。17～27・35は無節の縄文を施し、17～23は無節L、24～26・35は無節R、27は環付末端無節Rとなる。このうち17・22・25・27・35は口縁部破片で、17・25はともに外反させて端部に向けて薄く仕上げるが、口唇部は丸く収める。また、27は端部を断面角頭状にし、35は口唇部の調整が雑で、薄く仕上げるが不規則に上下する。35は内湾する口縁部で、部分的にかぶせた粘土の痕跡を残し、施文変換点の粘土が紐状に盛り上がる。胴部破片では21・23が湾曲しており、胴部中位の破片とみられる。なお、17・19～21は施文原体および内面の調整の特徴から同一個体の可能性があり、仮に同一個体とするならば、17が口縁部から胴部上位、21が胴部中位、20が胴部中位から胴部下半、19が胴部下半から下位の部位となる。縄文の施文はすべて同一方向である。内面は21・25に横方向、19・20は上部が横方向で、以下縦方向、18・24は縦方向の調整が観察できる。繊維の混入は全体に多く、22・23は特に多い。なお、24の下部は被熱のため赤色化している。28～30・33・37は単節の縄文を施し、34は無節Lと単節LRを羽状に施す。28～30・33は口縁部破片で、28～30は内湾している。28は山形の波状口縁となり、口唇部の調整も丁寧で丸く収める。29・30は口唇部を薄く仕上げ、29は端部に棒状工具を押しやる。施文

原体は28・30・33が単節RL、29・37は単節LRである。31・32・36はいずれも口縁部破片で端部は丸く収め、附加条縄文を施す。施文原体は32が附加条2種R+R2本、36が附加条2種L+R2本、31は附加条2種L+R1本である。繊維の混入はいずれも中程度である。

図示した遺物は波状沈線や縦位沈線を施すものが多く含まれる。縄文施文の土器は附加条縄文の使用が少ない感がある。いずれも黒浜式に比定できる。石器類はすべてを図示した訳ではないが石匙1点、磨製石斧1点(第112図151)、石皿1点、側面調整礫3点(第120図256・257)を出土している。

#### SI-050 (第72図、図版9・27・64)

W20-66付近に位置する。平面形は6.10m×5.54mの隅丸方形で、南東壁は直線的であるのに対し、北西壁は弧を描く。確認面からの深さは0.24mを測り、覆土上層に新时期テフラが混入する。炉は住居短軸方向南西端部付近に設けられ、規模は0.60m×0.58mで、床面からの掘り込みはほとんどない。柱穴と思われるピットは11基検出され、中央にまとまっている。床面からの深さはP4・P5が0.16m～0.18mと浅いが、ほかのピットは0.30m～0.70mの深さがある。

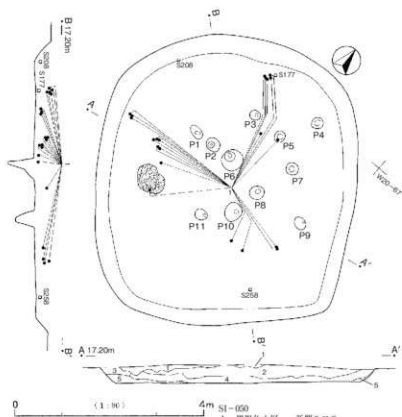
遺物は特に集中することなく住居内に散在している。1は図上復元で器形をうかがうことができ、覆土中層から上層にかけての広い範囲から出土した。

1は推定口径33.6cm、現存高45.0cmを測る大型の深鉢形土器で、接合しないいくつかの部位に分かれている。口唇部は外側を稜をもち、内側を丸く収める。器面は全面に単節RL/LRを不規則に羽状に施し、内面は口縁部に横方向の調整痕が確認できるが凹凸が目立つ。器厚は大型の土器の割に薄く、5mm～7mmに整えられる。胎土に繊維は含まれず、白色の鉱物粒子、雲母粒子を混入する。

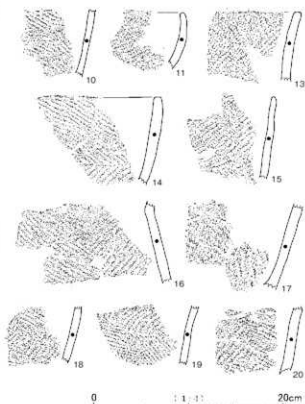
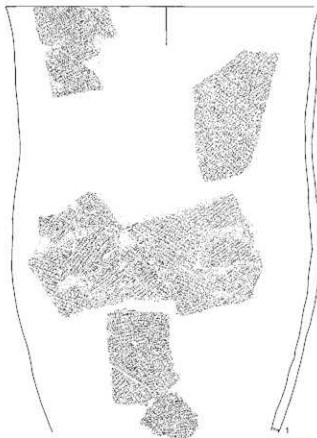
2～7は沈線を施すものである。2は高さのある山形の波状口縁となり、口縁に沿って半截竹管を用いた沈線を3条巡らす。また、波頂部から縦に突起を付す。口唇部は四角く収め、胴部には単節RL・LRの縄文を羽状に施す。3は緩やかな波状口縁となり、3cm前後の無文帯を挟んで半截竹管を用いた波状文を巡らす。4は胴部破片で横位に長さ2cm前後の短沈線を施す。5・6は単沈線で斜格子文を施す。5は口唇部を細かく刻み、6は外側から調整して口唇部を薄く仕上げる。7は口縁部下のくびれ部の破片で、くびれ部に2条以上の結節沈線を巡らす。胴部は単節RL/LRを羽状に施し、内面は横方向に磨いている。繊維の混入は4・6が多く、3・5は中程度、2・7は少ない。

8～20は縄文のみが施されるものである。8は推定口径13.2cmと小型の土器で、口縁部に8mmの無文帯を残し、以下脚短環付末端単節RLを施す。内面は横方向に磨き、繊維の混入は中程度である。9・10は無節Lの縄文を施す。9は口縁部破片で、端部を丸く収める。10は破片上端部に直線的な盛り上がりがあり、あるいは上部に縄文以外の施文があるかもしれない。繊維の混入は9が中程度、10は少ない。11～17は単節の縄文を施す。11は大きく内湾する口縁部であるが、13～15は外方へ開く。口唇部は15が断面角頭状で、11・13・14は丸く収める。16はくびれ部の破片で、内面の稜が明瞭である。施文は15・17が現存部分で一方方向の施文であるが、ほかは単節RL/LRRを羽状に施し、18・20は菱形の効果を出している。内面は13・14が横方向に、16は縦方向に磨く。繊維の混入は18・20が多いが、ほかは少なく、14・16は白色の鉱物粒子が目立つ。

図示した遺物は関山式の範疇に含まれる脚短環付末端縄文を横帯施文する8が含まれるが、1は胎土に繊維を含まない黒浜式であり、黒浜式期でも新しい段階の住居とみてよい。土器のほかに石器類として磨石類1点(第114図177)、石皿1点(第117図208)、側面調整礫1点(第120図258)を出土した。



- SI-050  
 1 黒褐色土層 新期テフラ  
 2 黒色土層 ローム粒子・機土粒子  
 3 黒褐色土層 新期テフラ  
 4 暗黄褐色土層 ローム粒子・ロームブロック  
 5 暗黄褐色土層 ローム土主体



第72図 SI-050

SI-051 (第73・74図、図版9・27・65・66)

W20-84付近に位置する。平面形は6.54m×6.30mの隅丸方形で、確認面からの深さは0.33mを測る。覆土上層に新期テフラを混入する土層が堆積し、住居の全面を覆う。炉は中央と南東壁に近い位置の2か所に設置され、中央の炉Aは1.02m×0.92m、炉Bは0.57m×0.47mである。炉Aは底面全面に被熱硬化面が広がるが、底面の状況から火床部は2か所とみられる。柱穴と思われるピットは26基検出された。平面形に沿って壁近くに分布するものと、炉を囲むように配置されたものに分けられる。床面からの深さは、炉の南側に位置するP9、P13、P14が比較的深く0.63m～0.90mを測り、ほかは0.10m～0.46mの範囲に取束する。なお床面には硬化した面がみられたが、範囲の記録はない。

遺物の出土量は多いが、全形を復元できるものはない。傾向として中央から南東側にかけて集中する。

1は推定口径24.9cm、現存高11.5cmを測り、口縁部が全周の30%遺存している。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部は端部を調整して断面角頭状とする。器面は口縁直下から単節LRの縄文を一方方向に施す。繊維の混入は多く、僅かに白色の鉱物粒子を混入する。

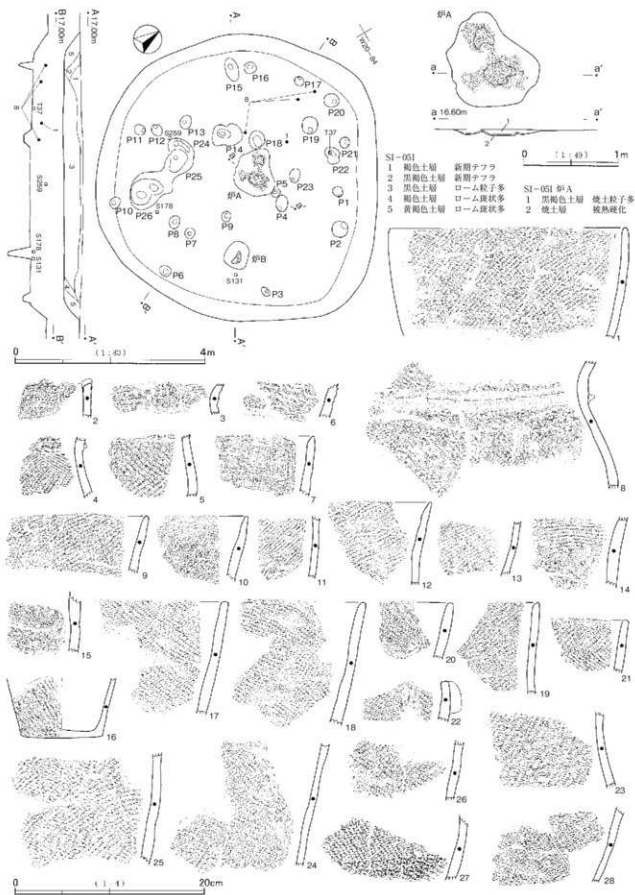
2～7は沈線、刺突文などにより文様を構成するものである。2は口縁部破片で、口唇部は内削ぎ気味の調整で、小さな山形の突起を付す。口縁部は縦位の貝殻腹縁文を連続して巡らせ、2条の連続爪形文で区画する。3～5は胴部上位のくびれ部で、3・5は連続爪形文を、4は両側に結節沈線を伴う隆帯を巡らし、さらに胴部にかけて半載竹管を用いた鋸歯状の沈線を施す。胴部はそれぞれ縄文が施され、3・4は附加条の縄文、5は0段多条の単節RL/LRを横帯施文する。6は半載竹管を用いた波状文、7は縦位の単沈線を施し、口唇部は内外面からの調整で薄く仕上げる。繊維の混入は6が多く、ほかは少ない。2・5は白色の鉱物粒子を多く含む。

8もくびれ部破片であるが、1条の鐮状隆帯を巡らす。口縁部および胴部は単節RLの縄文を一方方向に施す。内面は横方向に磨くが、器面の遺存状況はよくない。繊維の混入は中程度である。

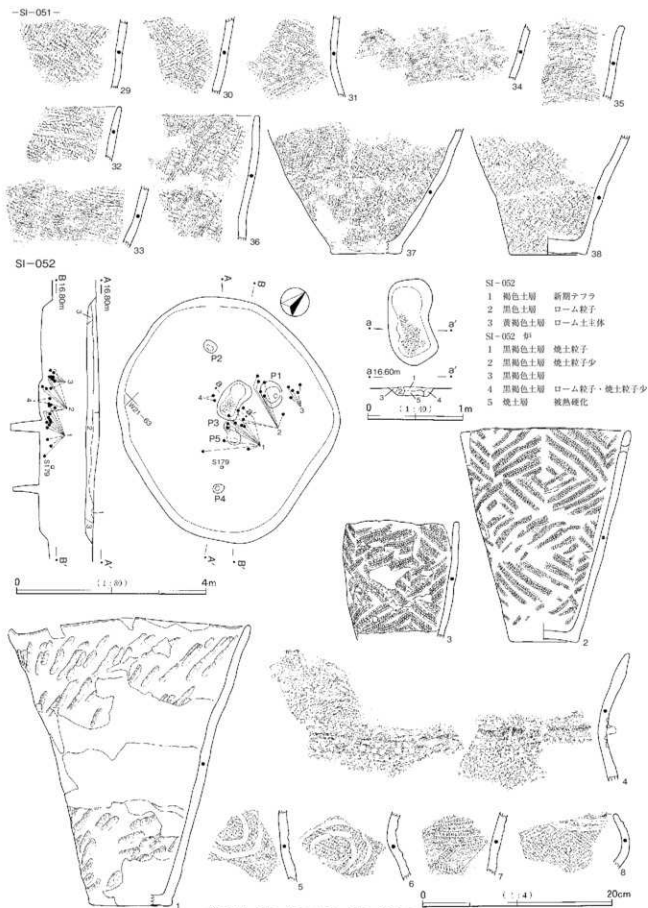
9～33・35・36は縄文のみが施されるものである。このうち9～16は無節の縄文を施すもので、9・10・12は口縁部破片である。端部を薄く仕上げて、頂部を調整する。口縁部はいずれも直線的に立ち上がり、9・12は同一個体の可能性がある。施文は口縁直下からなされるが、10は端部から2cmの施文が浅い。胴部破片も大きな屈曲をもつものはなく、14・15は同一個体で、胴部下端で無節Rの縄文から放射肋を有する二枚貝を用いた貝殻腹縁文に変化する。貝殻の押圧長は1.5cm前後と短く、その間に5条の肋が確認できる。16は平底で、底部内外面とも平滑な調整である。施文原体は16が無節Lであるほかは無節Rとなる。繊維の混入は11・13・16が少なく、これ以外は多い。11・13は白色の微細な鉱物粒子を混入する。

17～27は単節の縄文を施す。17～22は口縁部破片で、20は緩い波状に、22は山形の波状口縁となる。また、22は波頂部から縦位に約3cmの長さの突起を付す。口唇部は17・20・22が端部を調整して平坦とし、ほかは丸く収める。23～27は胴部破片で、23はくびれ部から胴部へ広がる部位、27は丸みをもつ胴部中央とみられる。施文は17～20・23が一方方向で、原体は17・18・20が単節RL、19・23は単節LRである。また、27は環状末端単節RLを横帯施文し、21・24・26は単節RL/LRの羽状となる。内面は17・21が粗く横方向に磨かれる。繊維の混入は中程度ないし多いものがほとんどであるが、24は少ない。

28～33・35・36は附加条縄文を施すもので、32・35・36は口縁部破片である。35は波状口縁で、捺糸文を施している。36は口縁上部で僅かに内湾し、端部を丸く収める。31は胴部上位のくびれ部で、くびれ部から上に軸は不明のR2本/L2本の附加条縄文、くびれ部から下に無節Rの縄文を施し、附加条縄文は



第73図 SI-051 (1)



第74図 SI-051 (2)、SI-052 (1)

菱形の効果を出している。また、30も附加条1種R+R2本とL+L2本で菱形の効果を出す。28は単節RLと附加条2種LR+R2本を横帯施文する。なお、32・33は同一個体の可能性があり、軸不明のL2本を一方に施す。繊維の混入は少ないものから中程度までである。

34は胴部中位以下の破片とみられ、外面に条痕様の貝殻背圧痕を施す。1回の施文幅は1cm前後で、その間に5本の放射筋が確認できる。

37・38は底部で、38は上げ底となる。37は附加条縄文、38は単節RL/LRの羽状縄文を施している。

以上、本住居跡出土の土器は、黒浜式に比定でき、沈線や刺突文を伴う個体が少ない傾向にある。そのほかに土製門板（第107図14）、滑石製玉（第107図37）、石器類は打製石斧1点（第111図131）、磨石類1点（第114図178）、側面調整礫1点（第120図259）、剥片類1点を出土した。

SI-052（第74・75図、図版9・27・66）

W21-53付近に位置する。平面形は5.12m×4.78mの隅丸方形とみられるが、倒木痕や根の痕跡により不整形なプランでしか確認できなかった。確認面からの深さは0.18mを測り、覆土上層に新期テフラ層が堆積する。炉は中央に位置し、規模は0.93m×0.50mと住居長軸方向に長い。底面は凹凸があり、火床部は炉長軸南端にある。炉土層断面の5層は堆積土ではなく、炉底面が被熱硬化した部分である。柱穴と思われるピットは炉周囲に5基検出された。床面からの深さはP5が0.30mと浅いほかは、0.51m～0.67mの範囲に収束する。

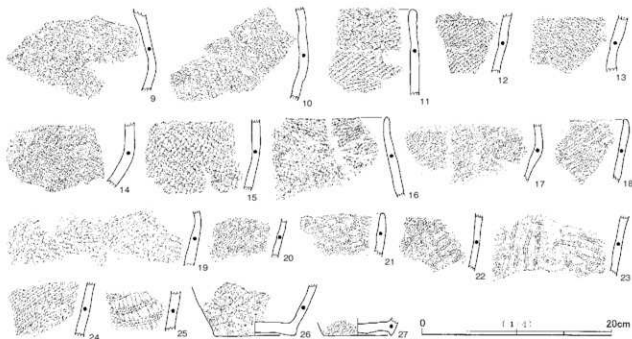
遺物の出土量は多量というほどではないものの、器形が復元できた土器が3個体ある。1・2は炉周辺、3は北東隅近くから出土している。

1は口径25.6cm、底径8.7cm、器高29.7cmを測り、底部から直線的に開く深鉢形土器である。器面の調整は粗雑で、外面はかなり凹凸が目立ち、口縁部も不規則に波打つ。口縁端部の調整も雑で、部分的に平坦に整えるが、多くの部分で目立った調整がなされていない。外面は口縁部から底部に至るまで太い無節Rの縄文を一方にまばらに施す。内面は口縁部に横方向の調整痕が、胴部以下は縦方向の磨きが観察できる。底部は中心を欠損するが、外面に施文はなく僅かに上げ底となる。繊維の混入は多い。

2は口径17.7cm、底径7.0cm、器高22.3cmを測り、底部から直線的に開く深鉢形土器である。器面の調整は比較的丁寧に行うが、それでも凹凸が目立つ。口縁部は不規則に波打つが、端部を調整し丸ないし平坦に収める。外面は附加条2種L+R3本/R+L3本で菱形の効果を出し、胴部上半に4単位の菱形文様を配置する。菱形文様は組み合わせで都合3段の構成となるが、2段目以下は配置がずれている。また、口縁部外面に細く鋭い沈線で2cmほどのマーキングが縦位にあり、縄文施文にあたっての目印かとも考えたが、当該部分の縄文施文後に施されている。内面は口縁部から4cmほどを横方向、以下を縦方向に調整している。底部は平坦で、磨き調整ではないものの、周縁部に光沢がある。繊維の混入は少なく、口縁部に補修孔（現存1か所）がある。

3は口径11.8cm、現存高12.2cmを測り、底部から胴部下半を欠損している。器面は1同様凹凸が目立ち、口縁端部の調整も粗雑である。外面は附加条2種L+R3本/R+L3本で菱形の効果を出す。菱形文様は上段が2単位で中心が対向するが、2段目以下は配置がずれている。また、施文変換点で細く粘土が盛り上がる。内面は口縁端部近くから縦方向に粗く磨いている。繊維の混入は中程度である。

4～8は沈線、連続爪形文などでモチーフを描くものである。4はくびれにより口縁部と胴部を画するもので、くびれ部に鈎状隆帯を巡らせ、上下に2条の連続爪形文を巡らす。口縁部および胴部は軸不明の



第75図 SI-052 (2)

R 2本/L 2本の附加縄文を施す。口縁端部は薄く仕上げ、内面は端部から2cm程度の範囲を丁寧に磨いている。繊維の混入は中程度であるが、焼成温度が低いためか、器表面が溶けそうな質感である。5・6は同一個体で、口縁部下ぐびれ部の破片である。外面は附加条1種LR+11本を施した上に太い沈線で曲線的なモチーフを描く。部分的な破片であり、モチーフ全体の構成はわからないが、現存部分では二重の太い沈線で円文を描く。内面は横方向に丁寧な調整がなされ、繊維の混入は中程度である。7は口縁部文様帯に連続爪形文を用いてモチーフが横位展開するもので、地文はなく、繊維の混入は中程度である。8は大きく内湾する口縁部で、口縁に沿って2条の太い沈線を巡らす。以下には単節RL/LRの結束縄文を横帯施文する。内面は横方向に磨かれ、繊維の混入は少ない。

9～27は縄文のみが施されるものである。9・10はともに無節Rの縄文を施すくびれ部から胴部中位にかけての破片である。現存部分では一方向の施文で、10はまばらとなる。繊維の混入は中程度である。11～15は単節の縄文を施すもので、11は口縁部破片である。口縁端部の調整は粗雑で、端部から約1cmあげて環付末端単節LRを施す。また、12も環付末端0段多条単節LR/RLを横帯施文する。13は外反するが、14・15は内湾しており、胴部中位の破片とみられる。施文原体はいずれも単節LRで、15は太い原体を用いる。繊維の混入は12が少なく、ほかは中程度ないし多い。16～25は附加条の縄文を施すもので、16・18・21は口縁部破片である。16は胴部上半から内傾して立ち上がり、端部が直立する。端部は16・21が丁寧に調整され、21は現存部で緩い波状となる。胴部は17・19が大きく内湾し、胴部中位とみられ、17は現存部最大径が推定13.4cmと小型の土器となる。内面は16・21・23が横方向に磨かれる。施文原体は18が附加条1種R+L 2本、25が附加条2種L+R 2本、16・17・19・24は附加条2種R+L 2本/L+R 2本で、19は菱形の効果を出している。なお、16・19は同一個体の可能性があり、焼成温度が低いためか、器面が溶けた質感となる。23・24は軸の縄が不明で、R 2本を附加し、21は附加条3種である。繊維の混入は中程度ないしは多い。

26・27は底部破片で、26は緩やかに、27は稜をなす上げ底となる。外面は底部直近まで縄文が施され、



26は無節R、27はおそらく附加条縄文で、2方向が確認できる。繊維の混入は中程度である。

図示した遺物は沈線施文の土器が含まれるが、地文のみのものが多く、また附加条縄文で菱形効果を出す土器が特徴的である。いずれも黒浜式に比定できる。このほか磨石類1点(第114図179)と破片のため図示していないが石皿1点を出土した。

#### SI-053 (第76・77図、図版9・27・28・67)

V21-29付近に位置する。平面形は5.92m×4.10mの隅丸長方形で、確認面からの深さは0.20mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、覆土上層に新时期テフラを混入する層が堆積し、住居全面をほぼ覆っている。炉は住居長軸方向に並んで2か所検出された。炉Aは中央に位置し、規模は0.62m×0.42mで床面から0.10m皿状に掘り込む。炉Bは炉Aの北側にあり、やや小さく0.52m×0.34mを測る。両炉とも底面中央を除き、ドーナツ状に被熱痕跡が認められる。柱穴と思われるピットは9基検出された。床面からの深さはP5が0.26mと比較的浅いほかは、0.40m～0.67mの範囲に分布する。また、量は僅かだが貝ブロックを検出した(第4表)。

出土遺物は多く、炉Aから南側にかけて個体ごとに廃棄された状況がうかがえる。器形がうかがえる1～6・14は散乱することなく、それぞれ1か所にまとまっていた。

1はP7上面から出土したもので、推定口径28.9cm、推定底径10.3cm、器高36.9cmを測る。胴部上半が緩く膨らむものの、底部から直線的に開く深鉢形土器で、全体の40%が遺存している。口縁部は僅かに波打ち、端部を丸く収める。器面は凹凸とともに歪みもあり、部位により曲率が大きく異なる。外面は全面に単線LRの縄文を一方向に施し、内面は口縁部を横、以下縦方向に調整する。繊維の混入は中程度である。

2はP2とP5の中間付近から出土したもので、口径27.9cm、現存高21.5cmを測る。胴部下半以下を欠損するが、現存部は直線的に開き口縁部に至る。口縁部は僅かに波打ち、端部を薄く仕上げる。外面は附加条2種L+R1本と附加条2種R+L1本を交互に施し、部分的に菱形の効果を出している。また、縄文施文後に胴部上位に再度粘土をかぶせ、横方向に調整し無文帯を形成する。繊維の混入は中程度である。

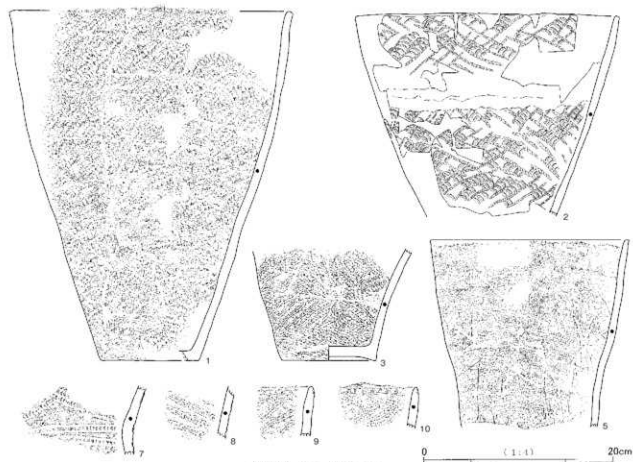
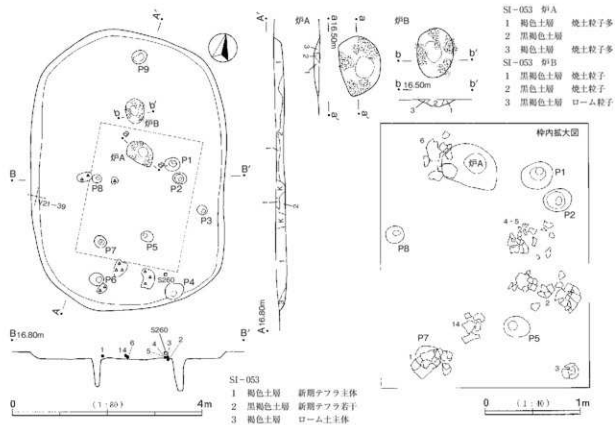
3は底部から胴部下半にかけて遺存し、底径10.0cm、現存高11.8cmを測る。底面は緩やかな上げ底となり、丁寧に磨いている。外面は底部直近まで附加条2種L+R2本の向きを変えて施し、装飾的效果を高めている。繊維の混入は少ない。

4は推定口径36.8cm、現存高18.0cmを測り、口縁部が全周の40%遺存している。口縁部下で緩くくびれる深鉢形土器で、口縁は4単位の緩やかな波状となる。口縁端部は調整し、平坦とする部分と丸く収める部分がある。外面は縄文のみの施文であるが、くびれ部には施文せず、無文帯として口縁部と胴部を画している。施文原体はL+R1本/R+L1本で、あまり規則性は認められないものの装飾的效果を狙っている。内面は横方向に磨き、繊維の混入は中程度である。

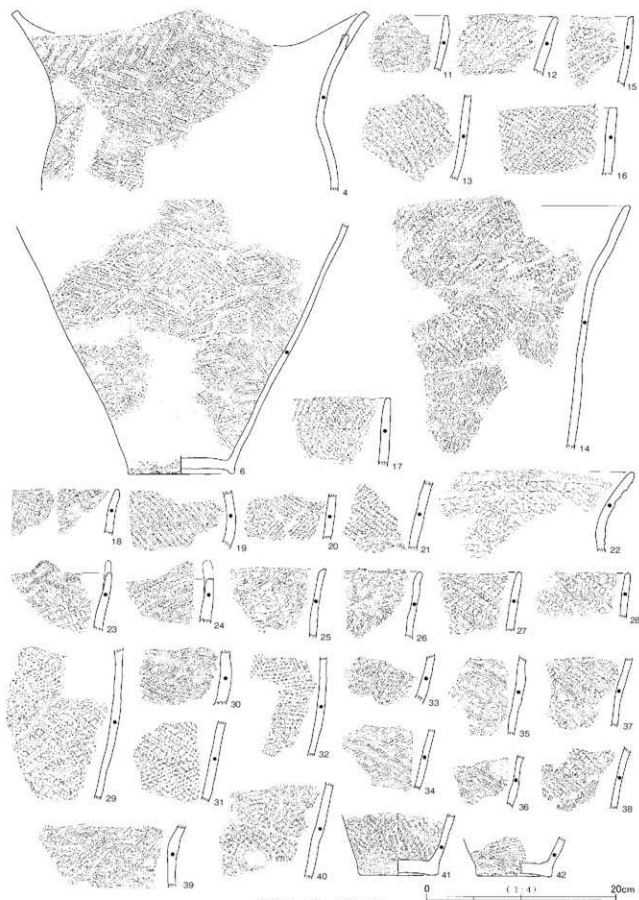
5は推定口径20.2cm、現存高19.8cmを測り、胴部下半から底部を欠損する。胴部上半で僅かに膨れるが、基本的に底部から直線的に開く深鉢形土器である。口縁部は端部を調整して平坦とする。外面は無文で、口縁部を横方向、以下縦方向に磨く。繊維の混入は少ない。

6は底径11.2cm、現存高26.4cmを測り、胴部中位から上を欠損する。底部外面は高台様に調整された上げ底で、外面を丁寧に磨いている。また、高台様の接地部分は磨滅している。外面は附加条1種L+R2本/R+L2本を組み合わせて菱形の効果を出している。繊維の混入は少ない。

7～10は半截竹管を用いた連続爪形文、連続刺突文で加飾するものである。7は連続爪形文で描くモチー



第76図 SI-053 (1)



第77圖 SI-053 (2)

フで口縁部文様帯を構成し、胴部は縄文を施す。9・10は口縁部破片で、口縁に沿って1条の連続刺突文を巡らす。口縁端部は薄く仕上げ、内面は横方向に磨く。胴部は附加条2種L+R2本を施す。いずれも繊維の混入は中程度である。

11~42は縄文のみが施文されるものである。11~14は無節の縄文を施すもので、14は口縁部から胴部下位、11・12は口縁部破片である。ともに口縁端部の調整は粗く、薄く仕上げる。また、13は内面が縦方向の調整で、胴部下位の部位とみられる。14は口縁部下で緩くくびれる器形で、くびれ部には意図的に縄文を施さず無文帯とする。施文は無文帯を挟んで口縁部が無節R、胴部が無節Lと使い分ける。なお、11・13が無節L、12が無節Rでいずれも太い縄を用いる。12・14は同一個体の可能性がある。繊維の混入は中程度から少なめである。15~21は単節の縄文を施すもので、15~18は口縁部破片である。また、19は大きく内湾し、胴部中位の破片である。口縁端部はいずれも調整するが、16~18は丸く取め、小さく波打つ。15は内外縁とも稜をなし、平坦に整える。15は口縁に沿って幅1.2cm程度の無文帯を巡らし、環付末端単節RLの縄文を施す。現存部分では17・18が単節LRを、19は0段多条単節RL、16・20・21が単節RL/LRで、20は結束して横帯施文となる。なお、15・20は施文変換点に細く粘土がはみ出ている。繊維の混入はいずれも中程度である。

22~40・42は附加条の縄文を施すもので、22~28は口縁部破片である。22は口縁部下でくびれ、胴部が膨らむもので、口縁は水平に整えられ、端部を丸く取める。外面は口縁端部から1cm前後の無文帯を残して縄文を施文するが、口縁に沿って3段、くびれ部に2段以上の環付末端縄文のみを施し、これに挟まれた口縁部には附加条2種R+L2本を施す。内面は横方向に磨き、繊維の混入は少ない。23・24は山形の突起もしくは山形の波状となる口縁部で、口縁端部に調整を施すが、丸く取める。27も同様に端部を調整し丸く取めるが、25・26・28の端部の調整は粗く、不規則に波打ち、25は内側から調整する。外面は23~27が附加条2種R+L2本/L+R2本、28はR+r1本である。繊維の混入はいずれも少ない。29~40は胴部破片で、30・39はくびれ部から胴部上位にかけての部位であり、37・38は28と同一個体、31・32も原体が類似する。施文原体は29・30・33・36・39が附加条2種R+L2本/L+R2本で、30は菱形の効果、ほかは羽状または綾杉状の効果を出している。34は附加条1種L+R2本/R+L2本、35は附加条2種R+L3本、37・38は附加条2種R+r1本、40は附加条2種R+R1本である。繊維の混入は全体的に少なく、29・31・32は内面に縦方向の調整が観察できる。

41・42は底部破片で、ともに緩やかなカーブの上げ底となる。外面は41が無節L、42は附加条の縄文を施す。繊維の混入は少なく、底部外面が摩滅する。

図示した遺物は22が脚短環付末端縄文を施し、関山Ⅱ式の様相を残すが、ほかは附加条縄文で菱形の効果を出す個体が多く含まれ、黒浜式に比定できる。このほかに土製円板(第107図15)、側面調整環1点(第120図260)を出土した。

#### SI-054 (第78図、図版9・28・68)

V20-94付近に位置する。この付近はB地区とD地区を分ける浅い支谷へ向けて緩やかに傾斜が始まる位置にあたり、北西方向に向かって低くなる緩斜面となる。そのため住居北西側の壁を検出することはできず、また南側も攪乱を受けて床面・壁ともに検出できなかった。壁の立ち上がり部分を検出できたのは東側のごく一部であるが、ピットの位置などから住居の範囲を想定した。住居長軸は傾斜に直交する方向をとるとみられ、平面形は4m以上の軸長をもつ楕円形と考えられる。炉は2か所で検出された。中心と

なる炉Aは住居長軸北東端部付近に位置し、規模は1.10m×0.38mと細長い。被熱痕跡が2か所に認められ、炉A内で火床部の移設が行われている。炉Bは住居北東隅寄りにあり、0.43m×0.42mの範囲で薄く焼土が堆積し、僅かに被熱痕跡を認める。柱穴と思われるピットは炉周辺に4基検出した。床面からの深さは、P4が0.21mと浅いほかは、0.51m～0.63mの範囲に収束する。

出土遺物の量は少ないが、炉およびP1の南側に集中し、本遺構のほとんどの遺物がその範囲から出土している。

1は推定口径15.2cm、現存高19.2cmを測り、口縁部の50%および底部を欠損する。現存下端部は底部にかなり近い位置とみられ、底径も7.5cm前後と推定される。底部から直線的に開く小型の深鉢形土器で、外面は全面に単節LRの縄文を一方に施す。口縁部は端部を調整し、断面は緩い角頭状とするが、僅かに波打っている。なお、胴部中位にかぶせた粘土の痕跡が残り、その部分は施文されない。繊維の混入は中程度である。

2は口径16.4cm、最大底径7.4cm、器高13.2cmを測る鉢形土器で、全体の80%が遺存している。大きく歪んでいて、底部からの立ち上がりの角度も場所によりかなり異なる。口縁部の高さも大きく上下し、その高低差は1cm強となる。底部も円形でなく最大径7.4cm、最小径6.8cmを測る。口縁端部は肉厚で、端部を丸く収める。外面は附加条2種L+L2本を全面一方に施す。繊維の混入は中程度で、白色の鉱物粒子が目立つ。

3・4は沈線施すもので、3は斜格子文、4は縦位に1条だけ確認できる。ともに口縁部下のくびれ部に、4は地文に無節Rの縄文を施す。繊維の混入は中程度である。

5～20は縄文のみが施されるものである。このうち5～9は無節の縄文を施すもので、5は口縁部、6は口縁部からくびれ部にかけて、7～9は胴部下位の破片である。5は口縁端部の調整が粗雑で、器面の凹凸が目立つ。外面はいずれも無節Rの縄文を施し、8は縦方向の調整痕の合間にまばらに施す。内面は底部に近い7・8に縦方向の調整が観察できる。繊維の混入は5・6が中程度、ほかは少なく、9は外面のみに白色の鉱物粒子が目立つ。10・11は単節の縄文を施すもので、10は口縁部破片である。口縁端部の調整は粗雑で、不規則に波打つ。外面は施文の浅い単節RL、11は0段多条単節RLで、繊維の混入はともに中程度である。12～20は附加条の縄文を施すもので、13～15は口縁部、12・16は底部である。13・14の端部の調整は粗く不規則に波打ち、14には補修孔が1か所ある。内面はいずれにも横方向の調整痕が認められ、15は平滑に仕上げられる。19はくびれ部の破片で、縄文施文と前後してくびれ部に横方向の調整を施す。12は緩やかな上げ底となるが、16は凹凸があり磨いている。施文原体は18～20が附加条2種L+R2本/R+L2本で、19は菱形の効果を出すなど装飾的である。13・15は附加条2種R+L2本、14・16は軸不明でR2本を附加、12は軸不明でL2本を附加している。繊維の混入は13～15・19・20が中程度で、ほかは少ない。

図示した遺物は縄文のみの施文のものが多く、黒浜式に比定できる。

#### SI-055 (第78図、図版9・68)

V21-36付近に位置する。平面形は3.60m×3.28mの円形で、確認面からの深さは0.04mと遺存状況の悪い住居である。確認面からの深さが浅いこともあり、床面には凹凸がみられる。炉は、南東隅寄りの炉Aと中央の炉Bが長軸線上に並ぶように検出された。炉Aは0.50m×0.34mの規模で、長軸は住居長軸線と直交する。底面は床面から0.10m低く、全体に被熱して硬化している。炉Bは0.22m×0.22mで、掘り

込みはほとんどないが、住居床面が被熱して硬化する。柱穴と思われるピットは6基検出された。住居の平面形に沿っているが、P1は本跡に属すると断定できない。床面からの深さは、P1が0.53m、そのほかは0.16m～0.41mの範囲に分布する。

遺物はほとんど出土しておらず、破片1点が図示できた。1は胴部破片で、内湾することから胴部上位とみられる。外面は附加条2種R+L1本を施す。繊維の混入は中程度で、黒浜式に比定できる。

#### SI-056 (第78・79図、図版10・28・29・68)

X22-00付近に位置する。平面形は4.38m×3.16mの隅丸長方形で、東西方向に長軸をとる。付近はA地区とC地区を分ける小支谷に面し、南に向かって緩やかに傾斜する。確認面からの深さは最も深い東側で0.29m、住居南西隅では0.10mとなる。炉は中央より西寄りに位置する。規模は0.80m×0.58mで、住居長軸方向に長い。掘り込みはほとんどないが被熱痕跡が認められた。柱穴と思われるピットは、東壁に接して2基、床面中央より東寄りに1基が検出された。床面からの深さはP1から順に0.38m、0.29m、0.41mである。なお、住居中央の覆土下層に0.60m×0.20mの範囲で貝層が検出された。住居廃絶後に形成されたと考えられる。ハマグリを主体としていた。貝は全量採取し、同定結果は第4表に示した。

遺物は比較的多く、床面からまともに出てくる。1は炉西側、2はP3周辺からの出土である。

1は口径19.0cm、現存高20.3cmを測り、口縁部から胴部の一部と底部を欠損する。現存部分の最小径は10cm程度、底径は9cm前後であったと推定できる。底部から口縁部まで直線的に開く深鉢形土器で、器面および口縁端部に僅かに凹凸がみられるが、整った形状といえる。口縁端部は内側から調整して薄く仕上げ、内面は横方向に調整する。外面は全面に単節RLの縄文を一方向に施す。胴部下位は被熱して赤色化する。繊維の混入は中程度である。

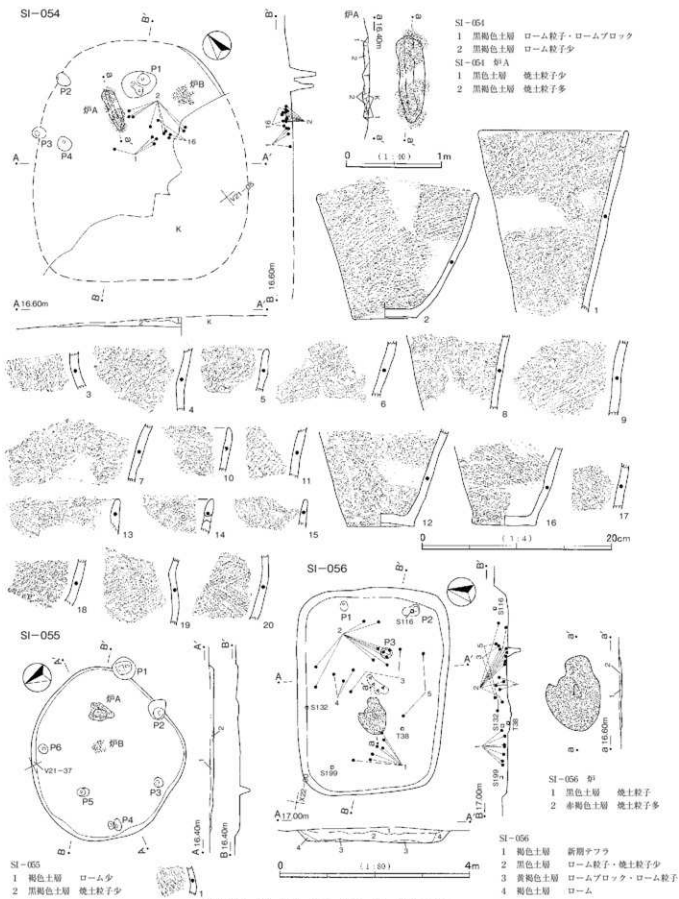
2は現存高30.2cm、現存推定最大径32.2cmを測り、胴部の40%が遺存している。くびれ部から上あまり広がらないことから、最大径は胴部中位にあると思われる。最大径となる部分は、それ以下の縄文を施した後に粘土をかぶせ、横方向にナデている。外面は縄文のみが施されるが、大きく口縁部、胴肩部、胴下半部の3帯構成とする。口縁部は附加条2種L+R2本を2段に、胴肩部と胴下半部は附加条1種RL+L1本と附加条2種L+R2本を交互に施す。内面は平滑に調整するが、器面の遺存状況はよくない。繊維の混入は中程度である。

3は推定口径38.4cm、現存高15.4cmを測り、口縁部が全周の30%遺存している。くびれ部から口縁部が大きく開く朝顔形の深鉢形土器で、最大径は口縁部にある。口縁端部は緩く波打ち、端部は尖頭状に収める。口縁に沿って両側に円形竹管刺突文を伴う半截竹管の平行沈線を1条巡らし、それ以下は縄文のみの施文である。施文原体は附加条1種L+L1本で、施文変換点で僅かに粘土が盛り上がる。内面は横方向に調整され、口縁部は粗く磨く。繊維の混入は中程度である。7は同一個体である。

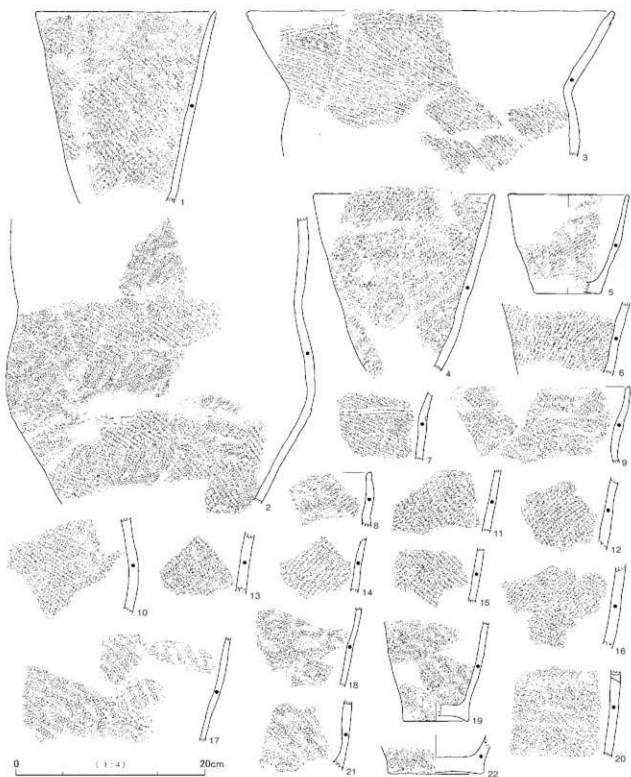
4は推定口径19.0cm、現存高18.0cmを測り、口縁部から胴部が全周の40%遺存している。底部は欠損しているが、現状下端部の直径は8.5cm前後で、底部に近いものとみられる。口縁端部は波打ち、尖頭状ない丸く収める。外面は附加条2種L+R2本を全面一方向に施す。繊維の混入は中程度である。

5は推定口径12.8cm、推定底径7.2cm、器高10.5cmを測る小型の鉢形土器で、全体の70%程度が遺存している。外面は無節Rの縄文を全面一方向に施し、底部外面は僅かに上げ底となる。繊維の混入は中程度である。

6は胴部下端部のみが全周の60%遺存する。現存高は6.5cm、現存部最大径は13.8cmを測る。外面は縄文



第78図 SI-054、SI-055、SI-056 (1)



第79図 SI-056 (2)

のみの施文で、附加条2種L+R 2本/R+L 2本である。繊維の混入は少ない。

8～22は縄文のみを施すものである。8は無節L/Rを施す口縁部破片で、口縁端部は丸く収める。繊維の混入は中程度で、雲母微細粒を含む。9～15は単節の縄文を施すものである。9は口縁部破片で、比較的直立する口縁部で胴部が膨らむ。また、10は大きく内湾し、胴部中位とみられる。9の口縁部は端部を



内側から調整して薄く仕上げ、内面を横方向に調整する。施文は単節RL/LRで不規則な羽状縄文とする。10・11は単節LR、12・13は単節RL、14は0段多条単節RLの結束、15も0段多条単節LRの結束を施す。繊維の混入は10~12が多く、ほかは中程度である。16~19は附加条の縄文を施すものである。17~19は同一個体で、器厚は5mm前後と薄く仕上げである。推定底径7.6cmを測り、上げ底となり外面を丁寧に磨く。外面は附加条2種R+L2本を一方に施すが、18にみるように施文方向を変えている部分がある。焼成もよく堅緻な土器で、繊維の混入は中程度である。16・20は質感が異なるがよく似た原体を用いて施文しており、曲率もともにかなり小さい。現存部分の曲率から直径は35cm~40cmとなり、大型の土器が想定できる。施文はともに附加条2種R+L2本/L+R2本で、20は破片上端に補修孔がある。繊維の混入は多い。21は底部直近の破片、22はほぼ平坦な底部で外面を磨く。施文は21が附加条2種L+R2本、22が附加条2種L+R2本・R+L2本である。繊維の混入は中程度である。

図示した土器は、3が竹管により口縁部に加飾する以外は、地文のみの土器がほとんどで、比較的大型の2・3、小型の1・5が含まれている。いずれも黒浜式に比定できる。このほか炉西側から滑石製玉(第107図38)が出土した。石器類は石匙1点(第110図116)、打製石斧1点(第111図132)、手持ち砥石1点(第116図199)が出土している。

#### SI-057 (第80図、図版10・29・68)

W22-50付近に位置する。A地区とC地区を分ける浅い小支谷の谷頭にあたり、地形は南東に向かって緩やかに傾斜している。また、本住居の上を近世以降の溝状遺構が走り、壁の一部が破壊されている。平面形は5.06m×3.95mの隅丸長方形で、東西方向に長軸をとる。確認面からの深さは0.24mを測り、覆土に焼土粒子・ローム粒子・炭化粒子を多く含んでいる。覆土の2層は溝状遺構の影響を受けて硬質化しているが、本来は1層または3層と同一層になるものである。炉は南東寄りに位置し、規模は0.60m×0.54mの方形となる。焼土粒子や焼土ブロックを多く含んだ土層が堆積しているが、炉底面の被熱の度合いは弱い。柱穴と考えられるピットは床面北寄りから3基検出された。P1・P2は近接しており、床面からの深さは0.31m~0.36m、北東隅に近いP3が最も深く0.52mを測る。

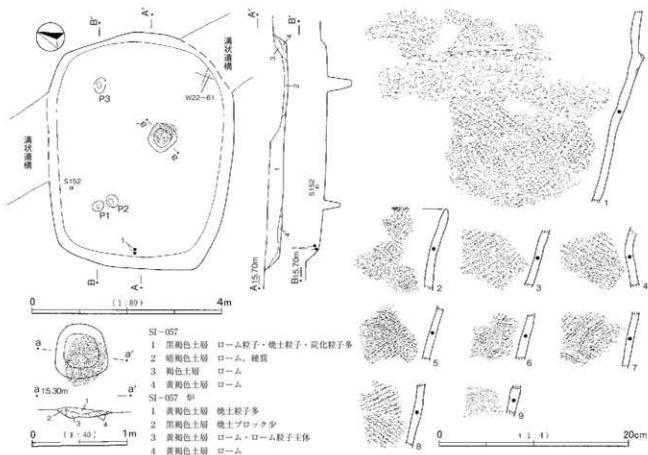
遺物の量は少なく、1が西壁近くから出土した。

1は隆帯により口縁部と胴部を画するもので、2は同一個体の口縁部破片である。1と2は接合しないが、それぞれの傾きから口縁部から隆帯までは12cm前後と推定できる。口縁部は緩く外反し、端部を丸く収める。隆帯は低平なもので、頂部および下側に半截竹管の背を用いた連続刺突文を巡らす。胴部は器面の凹凸が目立ち、口縁部、胴部ともに単節RLの縄文を施す。なお、縄文施文後に細い斜沈線が1本入るが、1本だけであり、施文として意図したものかどうかは不明である。繊維の混入は多い。

3~8は縄文のみが施されるもので、4はくびれ部、5・7は胴部下位の破片とみられる。施文は3が附加条1種LR+R1本、4は口縁部に無節L、胴部に附加条2種L+R2本/R+L2本、5~7は附加条2種L+R2本/R+L2本、8は無節R/Lである。内面は5・7に縦方向の調整が観察でき、4・8は磨いている。繊維の混入は中程度である。

9は半截竹管により斜格子文を描くもので、地文は施されない。沈線の施文は浅い。繊維の混入は中程度である。

遺物の量は少ないが、附加条の縄文を用いる土器が多く、いずれも黒浜式に比定できる。このほかに磨製石斧1点(第112図152)、磨石類1点(第114図180)を出土した。



第80図 SI-057

SI-058 (第81図、図版10・69)

W20-11付近に位置する。平面形は不整形な方形系で、規模は8.00m×7.00m、確認面からの深さは0.26mを測る。覆土の堆積は北側の3・5層を2・4層が切っているように見え、平面形が不整形なことも併せて別の遺構が重複している可能性を考えたが、床の硬化面の範囲と一致せず、推定の域を出ない。炉は3か所検出された。規模は北西寄りの炉Aが1.09m×0.48m、南西寄りの炉Bが0.60m×0.42m、東寄りの炉Cは1.93m×0.76mである。南壁際から3か所の炉を取り囲むように床の硬化面が認められる。ピットは合計14基が検出され、P10・P11はほかのピットと比較して大きいため、調査時の所見では貯蔵穴の可能性を指摘している。P10は径0.66m、深さ0.27m、P11は径0.69m、深さ0.15mを測る。そのほかのピットは柱穴と考えられる。炉Bと炉Cの間に位置するP7～P9については床面からの深さが0.77m～0.91mと深い、その他のピットは0.13m～0.34mの範囲に取束する。

出土遺物はあまり多くなく、特に集中することもない。また、全形をうかがえる程度に復元できる個体はなく破片を図示した。

1～5は沈線により斜格子文を描くもので、3・4は格子状とならず縦位沈線である。1～3は口縁部破片で、1は端部を調整して断面角頭状に、2・3は工具の押圧による刻みを施す。沈線はいずれも単沈線で、1・4は細く鋭く、2は浅い。繊維の混入は中程度である。

6・7も沈線を施すもので、6は半截竹管を用いた波状文、7は半截竹管を用いて直線的なモチーフを描く。6は口縁部破片で、口縁端部の調整は粗雑なものの平坦面を作り出す。施文は深い。7は地文に0段多条単節RL/LRを施し、平行沈線は半截竹管内側を強く引いたもので、鋸歯状文等の直線的なモチー

フが想定できる。部分的な破片であるが、関山Ⅱ式に比定できる。繊維の混入はともに中程度である。

8～10は刺突文を施すものである。8は口縁部下のくびれ部、9は口縁部破片である。8はくびれ部に半載竹管による連続刺突文を2条以上巡らせ、9は口縁に沿って円形竹管刺突文を巡らす。9は口縁端部を調整するが、調整は粗雑で大きく緩やかにうねる。地文に単節LRの縄文を施す。10は半載竹管による平行沈線で文様帯を区画し、内部に半載竹管による連続刺突文と捻糸側面圧痕を施す。施文は直線的で、山形ないし鋸歯状のモチーフが横位展開すると思われる。繊維の混入は中程度で、8・10は白色の鉱物粒子を多く含む。

11～17は結節沈線を施すものである。11～14は口縁部破片で、12～14は端部が内湾する。11は地文を施さず、破損部に沿って鋸歯状に結節沈線を施す。13と15、14と16はそれぞれ同一個体である。13・15は口縁に沿って3条、くびれ部に3条の結節沈線を巡らし、竹管の1/4程度を割いた施文具を用いている。また、13は口縁端部に山形の小突起を付し、端部を丸く収める。12・17を含め地文は単節LR/RLで、結節沈線施文部分は器面を磨き、縄文を消している。14・16は14が口縁部、16がくびれ部の破片で、口縁に沿って2条、くびれ部に2条以上の結節沈線を巡らす。結節沈線施文部分にも地文の縄文が施され、原体は附加条2種L+r・R/R+l・Lである。繊維の混入は中程度から少なく、14・16は白色の鉱物粒子も含む。

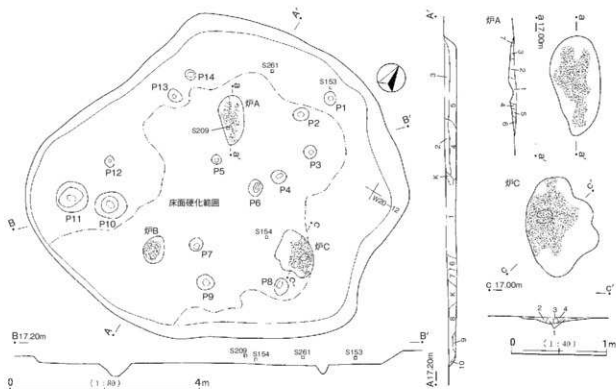
18～32は縄文のみが施されるものである。18～22は無節の縄文を施すもので、18・19は口縁部、21・22は胴部中位、20は胴部下半の破片である。18は口縁端部に小さな山形の突起を付し、端部は丸く収める。19は口縁端部を調整し、断面角頭状とする。施文原体は18が無節R、19～21は無節Lで20は施文方向を変えた羽状縄文となる。22は無節R/Lとなる。繊維の混入はいずれも多い。

23～31は単節の縄文を施すもので、23・24・26・28・31は口縁部、29・30は胴部上半の破片である。口縁部はいずれも端部を調整して平坦にし、26は緩やかな波状となる。内面は平滑で、23・31は横方向に丁寧に磨いている。施文は23・24が口縁に沿って脚短な環付末端縄文を施し、23は多段となる。それ以下は単節RL/LRの縄文を施し、24は施文変換点に細く粘土が盛り上がる。25は胴部破片であるが、環付末端単節RLを横帯施文する。26は0段多条単節RL/LRを横帯施文し、施文変換点が明瞭に浮き出る。27・28も0段多条で、27がRL、28はLRである。29・30・31は単節LRを一方に施し、29は長さ2.5cmの粘土紐を縦位に貼り付けることから、口縁部に近い部位とみられる。繊維の混入は25・29・30が中程度で、ほかは少なく、27は白色の鉱物粒子も目立つ。

32は附加条の縄文を施すもので、胴部中位以下の破片である。施文は附加条2種L+L2本/R+R2本で、繊維の混入は少ない。33は底部で、現存部分に施文はみられない。底部外面は緩く窪み、丁寧に磨いている。繊維の混入は中程度である。

図示した遺物には斜格子文や結節沈線を施すものが多く含まれるが、環付末端縄文や横帯施文など関山式から引き継ぐ施文もみられる。7を除き黒浜式に比定できる。石器類は、すべてを図示した訳ではないが、楔形石器1点、石匙1点、磨製石斧6点(第112図153・154)、磨石類1点、敲石1点、石皿1点(第117図209)、側面調整礫1点(第120図261)と多種類が出土し、特に磨製石斧がまとまって出土している。SI-059(第82図、図版10・69)

Z23-63付近に位置する。東側は調査区外にあたるため、安全対策を行ったうえ、可能な範囲での調査となった。確認できたのは西壁部分の3.79m×0.50mの範囲で、平面形は隅丸方形と思われる。確認面か



SI-058

- 1 暗褐色土層 ローム粒子
- 2 暗褐色土層
- 3 暗褐色土層 ローム粒子多
- 4 灰色土層 焼土粒子・焼土ブロック
- 5 暗褐色土層

- 6 暗褐色土層 ローム粒子多
- 7 暗褐色土層
- 8 暗褐色土層
- 9 暗褐色土層 ローム粒子多
- 10 暗褐色土層

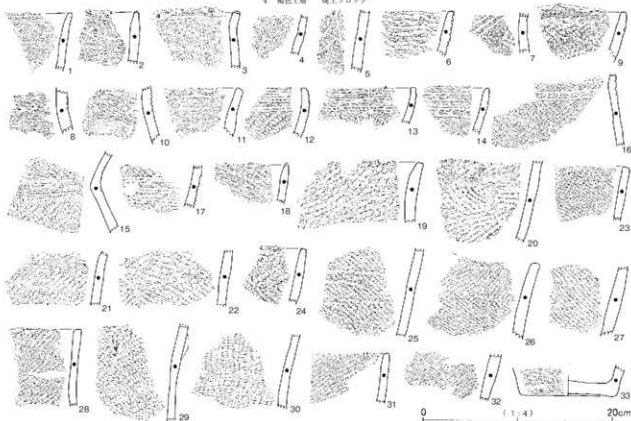
SI-058 9/A

- 1 暗褐色土層 ローム粒子・焼土粒子少
- 2 暗褐色土層 ローム粒子・焼土粒子
- 3 未燃色土層 焼土ブロック
- 4 暗褐色土層 焼土ブロック

- 5 焼土層 焼土ブロック
- 6 焼土層
- 7 暗褐色土層 ローム粒子・焼土粒子

SI-058 9/C

- 1 暗褐色土層 ローム粒子少
- 2 焼土層
- 3 暗褐色土層 焼土粒子多
- 4 暗褐色土層 ローム粒子主体



第81図 SI-058

らの深さは遺存のよい北側で0.30mを測る。調査した範囲内では炉、ピットは検出されなかった。

住居の一部分の調査のため出土遺物が少ない。破片4点を図示した。

1は口縁部下のくびれ部破片で、くびれ部に半截竹管を用いた結節沈線を巡らす。地文に無節Lの縄文を施す。2は無節Lの縄文を地文として細く鋭い沈線で斜格子文を描く。3は口縁部破片で、口縁端部を薄く仕上げる。内外面とも器面の凹凸が目立ち、外面は単節LRの縄文を施す。4は胴部破片で附加条1種L+R2本/R+L2本を施す。いずれも繊維の混入は中程度である。黒浜式に比定できる。

#### SI-060 (第82図、図版10・69)

Z23-52・62付近に位置する。SI-059からSI-064はA地区とC地区の境界となる浅い小支谷に面し、南へ向かって緩やかに下がる地形に位置する。そのため本住居も南側は北側と比較して壁高が低い。平面形は4.70m×3.47mの隅丸長方形で、確認面からの深さは遺存状況のよい北側で0.26mを測る。炉は検出されず、柱穴と考えられるピットが平面形に沿って6基検出された。四隅所在の4基は床面からの深さが0.23m～0.44m、中間に位置するP3・P4は0.13mを測る。

出土遺物は少なく、土器の破片1点を図示した。口縁部破片で、口縁の曲率からみて比較的小型の土器とみられる。口縁端部は丸く取め、外面は軸が不明のR1本の附加条縄文を施す。繊維の混入は中程度である。黒浜式に比定できる。

#### SI-061 (第82図、図版10・69)

Z23-40付近に位置する。平面形は4.60m×2.80mの隅丸方形で、壁の立ち上がりは緩やかである。確認面からの深さは0.11mを測る。炉は検出されず、柱穴と考えられるピットは北壁に沿って3基検出された。うちP1は壁にかかり、北西方向に向かって斜めに掘り込まれている。床面からの深さは0.33mを測る。P2・P3はそれぞれ0.23m、0.18mの深さを測る。

出土遺物は少なく、土器破片2点と石鏃1点(第108図11)を図示した。土器はともに縄文のみが施されるもので、1は口縁部下のくびれ部破片である。施文は1が無節L、2は軸不明でR2本の附加条縄文である。繊維の混入は少ない。黒浜式に比定できる。

#### SI-062 (第83図、図版10・29・70)

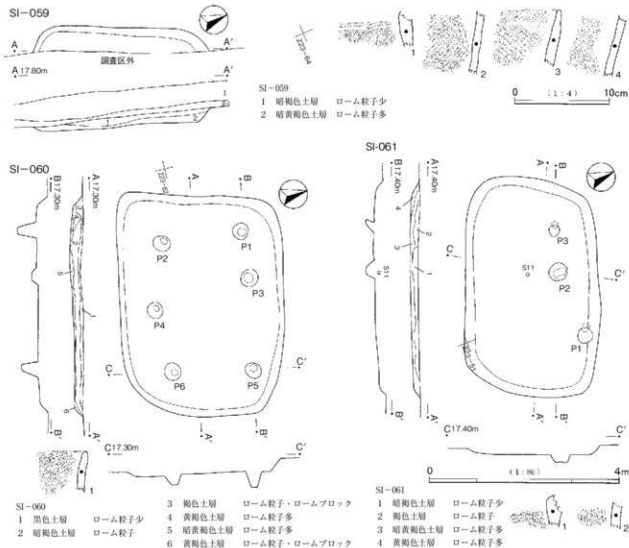
Z23-30付近に位置する。同規模の2軒の住居が重複しており、土層断面の観察から(旧)A→(新)Bの新旧関係が明らかである。AはBの構築によりほとんどの部分が遺存しないが、Bから検出された柱穴の配置を考えると同じ位置での改築の可能性が高くひとつの遺構番号とした。

Aは東壁のみを検出し、北東隅と南東隅間は4.80mである。床面はBの床面より0.12m高く、確認面からの深さは0.22mを測る。ピットが1基検出され、床面から0.10mの深さがある。

Bは5.42m×4.40mの隅丸方形で、長軸両端部の南北の壁はAと同じ位置である。炉は検出されず、柱穴と考えられるピットを6基検出した。平面形に沿った配置で、床面からの深さはP1が0.10m、P4が0.44m、P6が0.52mで、それ以外は0.20m台である。

Aでは出土位置の記録のある遺物はない。Bでは南西隅のP3から床面中央にかけた範囲から集中して出土しており、図示したほとんどの遺物はこの範囲から出土している。

1は推定口径19.0cm、現存高19.6cmを測る深鉢形土器で、底部および口縁部の50%を欠損している。胴部中位から上が内湾気味に開く器形で、器面の凹凸が目立ち施文は不鮮明である。口縁部は水平に整えられ、端部を丸く取める。外面は縄文のみの施文で、附加条2種L+11本を同一方向に施す。繊維の混入



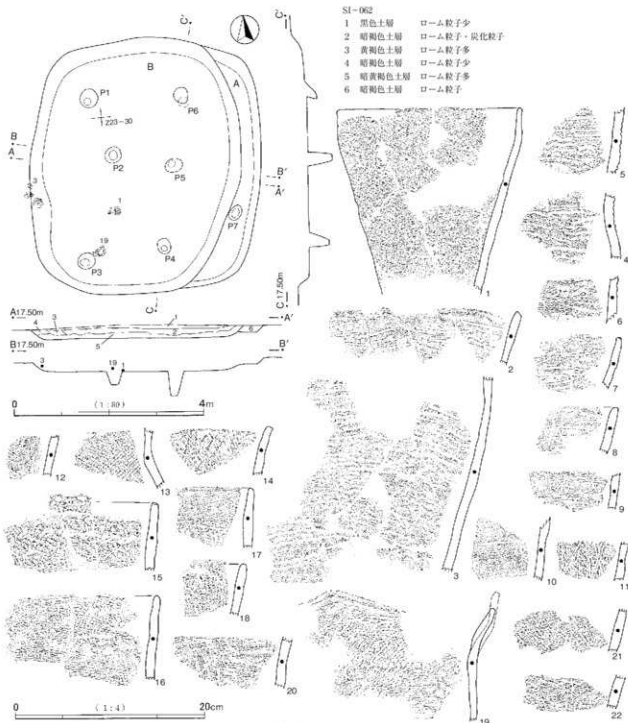
第82図 SI-059、SI-060、SI-061

は中程度で、白色の鉱物粒子も多く含まれる。なお、内面に縦方向のヒビが多く認められる。

2~10は半截竹管を用いた波状文もしくは横位に沈線を描くもので、3・4と2・7はそれぞれ同一個体である。施文は3~6が太くしっかりしたものであるのに対し、2・7~10は細く浅い沈線である。また、2・7は緩い波状口縁となり、不規則ながら山形文に近いモチーフとなる。7の波頂部は細い沈線で刻みを入れ、2も含め口縁端部を外縁に向けて調整する。3・4は小刻みな波状文で、口縁部下で緩くくびれる。5はコンパス文に近い描き方で、波状線もしくは横位沈線と組み合わせる。波状線もしくは横位沈線は軽い押し引きで、沈線内に縦方向の節が残る。6は波状文と附加条縄文もしくは摺糸側面疋痕を組み合わせる。8~10は横位沈線を浅く施す。繊維の混入はいずれも多く、4は内面を横方向に磨くが、ほかは内面の剥落が著しい。

11・12は斜格子文を描くもので、11は半截竹管、12は単沈線である。繊維の混入は中程度で、内面はともに縦方向の調整が観察できる。

13~22は縄文のみを施すもので、16・17は同一個体である。14・15は無節の縄文を施すもので、14は緩い波状となる口縁部破片である。14は口縁端部を平坦に整え、外縁に粘土がはみ出ている。口縁端部および内面は横方向に磨き、外面は無節Lの太い縄文を施す。15も口縁部破片で、口縁端部を押圧して小波状



とする。外面はかぶせた粘土の痕跡が段として残り、無節Rの縄文を施す。繊維の混入はともに中程度である。

13・16・17は単節の縄文を施すもので、13は口縁部下のくびれ部、16・17は口縁部破片である。16・17は同一個体であるが、口縁部の曲率は大きく異なり、かなり歪んだ土器であったとみられる。口縁部は外向きに整えるが、大きく波打つ。外面は単節RLを縦位に施す。13は単節RL/LRで、施文変換点に薄く沈線が入る。繊維の混入はともに中程度である。

18～22は附加条の縄文を施すものである。18・19は口縁部破片で、18は口縁部を丸く収め、外面は軸

が不明のR 2本の附加条縄文を縦位に施す。19は大きな山形の波状となる口縁部で、口縁部下で緩くくびれる。口縁端部は平坦に整えられ内面を横方向に磨く。外面は附加条2種L+L 1本を施すが、口縁部とそれ以下は附加されている縄の太さおよび施文方向が異なり、施文により口縁部と胴部を画している。20は軸不明でR 2本を附加した縄文を裝飾的に施す。21は附加条2種L+L 1本、22は附加条3種で網目の効果を出している。繊維の混入はいずれも中程度である。

図示した遺物には半截竹管を用いた波状文あるいは横位沈線を施すものが多く含まれ、黒浜式に比定できる。遺存状態が悪く図示していないが土器のほかに磨製石斧1点と剥片類2点を出土した。

#### SI-063 (第84図、図版10・69)

Z23-21付近に位置する。平面形は4.60m×3.74mの隅丸方形で、確認面からの深さは0.30mを測る。炉は検出されず、柱穴と考えられるピットは平面形に沿って4基検出した。床面からの深さは、西側のP1・P2が0.13m・0.12m、東側のP3・P4が0.25m・0.31mと東側の2基が西側より深い。

出土遺物は少なく、胴部破片3点を図示した。1は傾きから胴部上位とみられる。縦位になぞり沈線での連続刺突文を施す。2・3は器面の遺存状態が悪く、施文の詳細が明らかではないが、ともに放射肋を有する二枚貝による貝殻背圧痕が施されているようである。繊維の混入は多い。

1は黒浜式に比定できるが、2・3は胎土・焼成などから花積下層式の可能性が高い。

#### SI-064 (第84図、図版11・70)

Z23-33・34付近に位置する。北東隅がSI-065と重複し、土層断面の観察から(旧)SI-065→(新)SI-064の新旧関係が確認できる。平面形は6.82m×4.46mの隅丸長方形で、確認面からの深さは0.25mを測る。炉は確認できなかったが、床面にまで届く攪乱を受けており、この範囲にあった可能性も残る。柱穴と考えられるピットは平面形に沿って4基検出した。床面からの深さは0.17m~0.26mで、住居の規模を考えると浅いものである。

遺物は少なく、住居内に散在している。また、P4と東隅の間に遺構内貝層が形成されていたが、貝の混入が希薄でサンプル採取は行っていない。石器類は西壁近くから出土している。

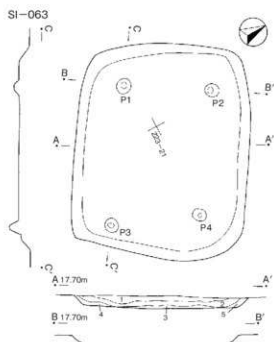
1~4は口縁部を肥厚させる複合口縁で、1は肥厚部に鋸歯状の集合沈線、2~4は縄文を施す。また、2は肥厚部下端を半截竹管の背で刻んでいる。2は器面の遺存がよくないため、縄文本体は不明だが、単節RLの縄文が僅かに観察できる。3は無節RL、4は無節R・Lを施し、口縁端部にも同一原体で施文する。繊維の混入はいずれも多く、2は白色の鉱物粒子を混入する。

5・6は横位に連続刺突文を施すもので、5は僅かに屈曲する部位に2条の隆帯を巡らせ、その間隙に連続刺突文を2条巡らす。刺突文は5・6とも円形竹管を用いて刺突後に引きずり、1単位が1cm前後の長さとなる。5は隆帯から上方が口縁部となろう。口縁部側に無節Rの縄文、胴部側に無節Lの縄文を施し、隆帯上にも同一原体を斜めに押圧して刻んでいる。6は0段多条単節LR/RLの縄文を施し、刺突文を挟んで羽状となる。繊維の混入は少なく比較的堅靱な仕上がりである。

9~11はハイガイを用いた貝殻背圧痕文を疑似縄文的に施す。いずれも胴部破片で、貝殻の押圧長は10が最も短く10mm前後、11が最も長く20mmを超える。繊維の混入は多い。

12~18は縄文のみが施されるものである。14・15は口縁部破片で同一個体の可能性がある。口縁部下で緩くくびれる器形で、口縁端部は平坦に整えられ、内面を横方向に磨いている。外面は附加条2種R+R 1本を施す。12・13・16~18は胴部破片で、12・13は胴部中位から下半、18は胴部上位とみられる。12・

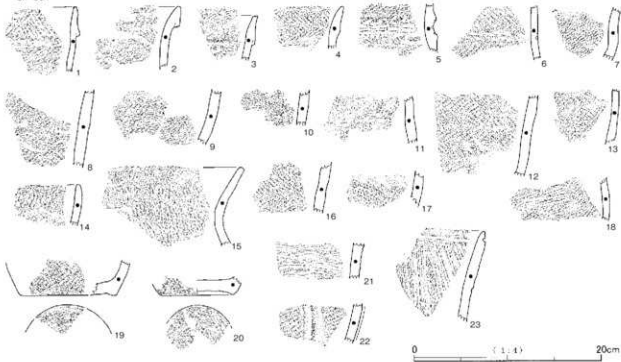




- SI-063
- |         |        |          |        |
|---------|--------|----------|--------|
| 1 黒色土層  | ローム粒子少 | 4 暗褐色土層  | ローム粒子多 |
| 2 黒褐色土層 | ローム粒子  | 5 暗黄褐色土層 | ローム粒子  |
| 3 暗褐色土層 | ローム粒子多 |          |        |
- 0 (1:50) 4m



SI-064



- SI-064
- |         |        |         |               |
|---------|--------|---------|---------------|
| 1 黒褐色土層 | ローム粒子少 | 4 暗褐色土層 | ローム粒子・ロームブロック |
| 2 暗褐色土層 | ローム粒子  | 5 褐色土層  | ローム粒子多        |
| 3 褐色土層  | ローム粒子多 | 6 褐色土層  | ローム粒子多        |
- 0 (1:4) 20cm

第84図 SI-063、SI-064

13は単節RL/LRを横帯施文し、13は縦方向でも施文を揃えて菱形の効果を出している。16は無節R/L、17・18は附加条2種R+L2本/L+R2本を施す。繊維の混入は中程度もしくは多い。

19・20は底部でともに上げ底である。胴部には0段多条単節RL/LRを施し、底部外面にも縄文を施文する。繊維の混入は多い。

21～23は後世の攪乱などにより混入したものである。21は諸磯a式に比定でき、半載竹管を用いた波状文を施す。22は加曽利EⅢ式で、なぞり沈線を伴う微隆帯による懸垂文を配し、地文に単節RLの縄文を施す。23は堀之内I式で、単節RLの縄文を地文に半載竹管を用いて沈線を垂下させる。

21～23は混入品であるが、そのほかの土器はハイガイを用いた貝殻背圧痕を施すなど花積下層式に比定できる土器が多い。一方14・15などのように附加条縄文を施す黒浜式も含まれており、一部重複していたSI-065が花積下層式期の住居であることを考えると、本住居から出土した花積下層式土器は住居埋没過程での混入品の可能性がある。石器類はすべて図示した訳ではないが、石鏃1点（第108図12）、楔形石器8点、石匙1点（第110図117）、石鏃未成品3点（第110図119～121）、二次加工ある剥片1点、磨製石斧2点、敲石2点、石核1点、両極剥片2点、剥片類12点が出土している。石器類の出土点数が多く、なかでもA～C地区で出土した石鏃未成品の全点にあたる3点が本跡から出土している。剥片類も出土していることから製作跡であった可能性がある。

SI-065（第85・86図、図版11・29・71）

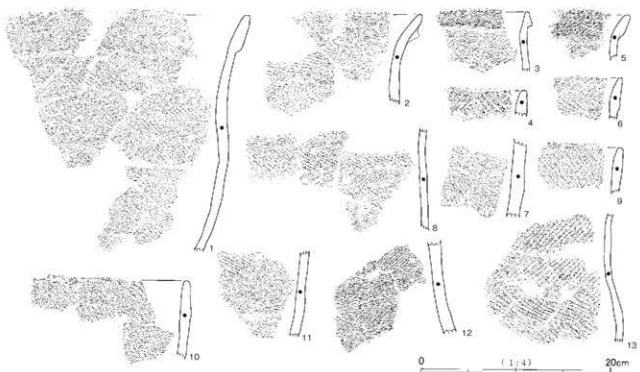
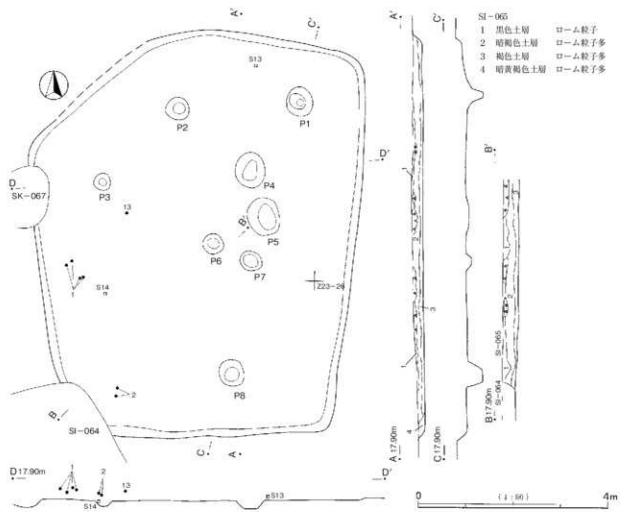
Z23-15・25付近に位置する。南西隅部分をSI-064に壊され、(旧)SI-065→(新)SI-064の新旧関係が確認されている。また、北西隅付近はSK-067と重複するほか、攪乱により一部の壁が検出できなかった。平面形は8.60m×7.12mの不整な隅丸長方形で、確認面からの深さは0.25mを測る。炬は検出されず、柱穴と考えられるピットは8基確認されて、このうち6基が長軸中心線より東側に偏在していた。床面からの深さはP1、P9がそれぞれ0.43m、0.32mと比較的深いが、これ以外は0.08m～0.21mの範囲に収束し、浅いものである。住居廃絶後に遺構内貝層が形成され、現状では複雑に入り組んだブロック状となっている。廃棄層位は覆土層で広い範囲にわたっている。検出された状況が廃棄単位を示しているのかわからない。0.5m四方をコラムサンプルとして取り上げており、同定結果は第4表に示した。構成貝種は多い順にマガキ、ハマグリ、ハイガイで、この3種で重量比90%近くを占める。また、魚類の遺存体を分離し第5表に示した。

出土遺物は少なく、住居長軸中心線より西側に散在している。

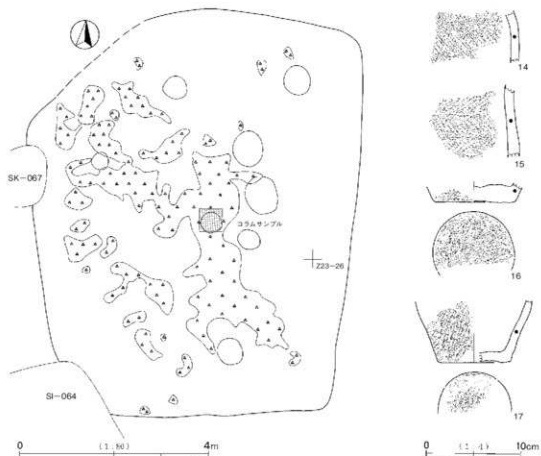
1～6は口縁部が折り返しにより肥厚するものである。1は口径30cm程度と推定される深鉢形土器で、口縁部が3.5cm～3.9cmの幅で肥厚する。肥厚部および胴部は単節RL/LRの縄文を施し、口縁端部にも施文する。3・5・6も肥厚部分に縄文を施し、3・5は口縁端部にも施文する。肥厚部分は3が断面三角形に張り出すが、5・6は薄く貼り付く感じとなる。施文は3が無節R・L、5は単節RL、6は単節RL/LRである。2は肥厚部および口縁部内面に燃糸文Rの側面圧痕を波状に施す。胴部は無節R/Lである。4は肥厚部分のみであるが鋸歯状の集合沈線を描き、口縁端部の施文はない。繊維の混入は多く、2は白色の鉱物粒子も多く含む。なお、8は3と同一個体とみられ、施文原体・質感等酷似している。

7は1点だけ外面に貝殻条痕文を施すもので、外面は凹凸があるものの内面は平滑に整える。繊維の混入は中程度である。

9～17は縄文のみの施文、または胴部等で縄文のみしか残されていないものである。9・10は口縁部破



第85圖 SI-065 (1)



第86図 SI-065 (2)

片で、ともに直立気味の口縁である。口縁端部は調整するが不規則に波打ち、口縁直下から単節LRの縄文を一方に施す。11～15は羽状縄文となり、11・12・15は器厚が1.1cm～1.3cmと厚手である。12・13は緩いくびれ部から胴部中位に向けて広がる部位で、14は胴部中位とみられる。施文は11・13・15が単節LR/RLで、11・15は原体末端を折り曲げた痕跡が結束縄文のように残る。12は無節L/Rの結束縄文、14は単節LRと附加条1種R+L1本を用いる。16・17は底部で、16はハイガイを用いた貝殻背圧痕、17は単節LR/RLを胴部および底部外面に施文する。繊維の混入は中程度から多く、13は白色の鉱物粒子も多く含む。

図示した土器は口縁部を折り返して肥厚させる点が特徴的で、いずれも花積下層式に比定できる。石器類は石鏃2点(第108図13・14)のほか、図示していないが二次加工ある剥片1点、手持ち砥石1点、両極剥片2点、剥片類4点が出土している。

#### SI-066 (第87図、図版11・71)

Z23-07付近に位置する。東側が調査区外に接することから、安全対策を行ったうえでの可能な範囲での調査となった。確認できたのは北西隅とこれに続く北壁と西壁の一部で、確認できた北壁長は3.80m、西壁長は3.80mである。平面形は方形形で、検出した隅はしっかりしている。確認面からの深さは0.15mを測り、土層断面図で1層とした土層は住居外側へと広がり、この層まで耕作等の影響を受けたとみられる。なお、現状の床面で炉、ピットは検出されなかった。

一部だけの調査で遺物はほとんど出土しなかった。このうち土器片2点、石器2点を図示した。

1・2とも胴部破片で、現存部分は縄文のみの施文である。1は無節RLと無節Lを羽状に、2は無節Rを施す。繊維の混入は多い。石器類は二次加工ある剥片1点(第110図124)、磨石類1点(第114図181)、剥片類1点を出土した。

SI-067・SI-070(第87～89図、図版11・29・71・72)

Z22-78・87・88付近に位置し、SI-067とSI-070が重複する。土層断面の観察からSI-067が新しいことが確認でき、SI-070の北東隅を破壊している。

SI-067は平面形5.20m×4.74mの円形に近い隅丸方形で、確認面からの深さは0.28mを測る。北隅を中心として大きく攪乱を受け、炉の一部が破壊されている。炉は長軸長1.33mを測り、短軸長は推定で0.60m以上となろう。炉にはローム粒子・焼土粒子を多量に含む土層が堆積しているが、火床部の範囲は不明瞭で、被熱痕跡は弱い。柱穴と考えられるピットは4基検出し、P4はどちらの住居に属するものかわからない。床面からの深さは、P1・P2が0.10m以下と浅く、P3・P4はそれぞれ0.53m・0.45mである。床面はSI-070より0.08m深く掘り下げられ、P1とP4を結ぶ線上に硬化面が認められた。

SI-070は北東隅を中心に1/4がSI-067により失われている。重複部分の床面はSI-067に破壊されており検出できなかった。平面形は5.20m×4.74mの方形で、確認面からの深さは0.12mを測る。現状で炉は検出されず、柱穴と考えられるピットは5基検出した。床面からの深さは、P3・P5が0.60m弱と比較的深い以外は0.16m～0.30mである。

遺物は広い範囲に分布しており、量が多いが全形をうかがえるものはない。出土位置から帰属を判断したが、番号は通し番号とした。

SI-067出土遺物 1～12は口縁部を複合口縁で肥厚させるものである。1～3は口縁部が大きく外反し、肥厚部に半截竹管の背を用いた鋸歯状の集合沈線を描く。肥厚部下端は同一工具で刻み、1・2は口縁端部も刻んでいる。1は肥厚部下から捻糸側面圧痕を渦巻き状に描き、その間に竹管の背を用いた集合沈線を充填する。4は捻糸側面圧痕により口縁部に鋸歯状文を描き、現存部分に縦位の隆帯を付す。1～3の内面は横方向に磨かれ、繊維の混入は中程度、4は多量の繊維を混入する。5は波状となる口縁部で、肥厚した口縁部に波頂部から隆帯を付す。肥厚部下端は竹管の背を用いて刻み、肥厚部には捻糸側面圧痕を施す。繊維の混入は多い。6～10は肥厚部に縄文を施すもので、肥厚部は薄く貼り付くような感じである。6は肥厚部下に1条隆帯を巡らし、その間に竹管の背を用いて矢羽状に刺突を施す。また、9は複合口縁での肥厚ではなく、隆帯の貼り付けにより区画している。6は口縁部に単節LR、胴部に単節RL、7は無節R/Lを口縁部および口縁端部に施し、肥厚部上部にハイガイを用いた貝殻背圧痕文を施し、貝殻の押圧長は1.0cm～1.5cmとなる。8は口縁部、胴部とも単節LR、9は単節RL/LRを施す。繊維の混入はいずれも多い。10は口縁端部を断面三角形に仕上げ、単節RL・LRの縄文を口縁部、口縁端部および口縁部内面に施す。口縁部は緩い波状となり、波頂部2個一対の突起を付す。繊維の混入は少ない。11は口縁端部を欠損するが、口縁肥厚部下に2条の幅広の隆帯を巡らし、その間を矢羽状に刻む。器面の遺存状態が悪く、施文は不鮮明だが、下段の隆帯上は貝殻背圧痕を連続して施し、胴部は斜位の沈線様の窪みが見てとれる。繊維の混入は多い。12は口縁端部を平坦に整えることにより、外縁が張り出す。器面の遺存状況が悪いが、外面は貝殻背圧痕とみられる。繊維の混入は多い。

13～34は縄文のみが施されるものである。このうち13～19は口縁部破片で、14・19は端部が内湾気味となる。口縁端部は丸く収めるが、16は内削ぎ状となる。外面は13～18が無節L・Rの縄文を施し、15は口

縁部内面にも幅約2cmで縄文を施す。また、13・14は内面に僅かだが貝殻条痕文がみられる。19は口縁部および口縁端部に単節LR/RLの縄文を施し、胴部はハイガイを用いた貝殻背圧痕文を横向きに施す。いずれも繊維の混入が多く、19を除いて砂粒も目立つ。20～31は胴部破片で大きな屈曲などはない。このうち25～27は竹管の背を用いた連続刺突文が巡らされ、25・26は間隔をあけて2条確認できる。縄文は基本的に横帯施文となり、20～24が無節L/R、25～27は0段多条単節RL/LR、28～30は単節RL/LR、31は0段多条単節LRに網目状撚糸文を加える。繊維の混入は全体に多く、20・21は器面の凹凸が目立ち、31の内面は平滑に調整される。32～34は底部である。33が上げ底となるが、32・34は平坦で、底径は32が6.0cm、33が8.8cm、34が8.6cmを測る。胴部は32が無節R、33が無節L、34が単節RLの縄文を施し、33は底部外面にも同一原体で施文する。また、34は底部外面の一部にハイガイを用いた貝殻背圧痕文を施す。繊維の混入は多い。

35～43はハイガイを用いた貝殻背圧痕文を施すものである。35～38は口縁部で、37は口縁端部にも貝殻背圧痕を施す。また、41は胴部下端で、底板が抜けた状態である。貝殻背圧痕は基本的に器面に対して横向きに施されるが、41・42は部分的に縦方向の施文が混じる。施文は42が最も細かく、5mm幅に6本の放射筋が確認できるが、現存部分だけでも4種類以上の幅が認められ、同一個体の殻頂部側と腹縁側の違いなのか、別個体を用いたものかは判断できない。35・36・40は押圧幅が3cmを超え、ハイガイとしてはかなり大型の殻を用いたものである。繊維の混入は全体的に多い。

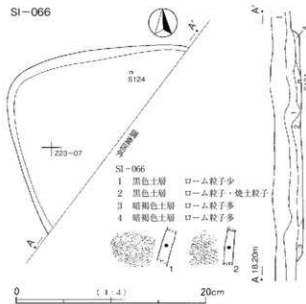
SI-067の範囲から出土した土器は口縁部に山形の集合沈線を施すなど花積下層式に比定できる。土器以外に土製球状耳飾（第107図29）を出土した。また石器類も多く出土しており、229点を数える。すべて図示したわけではないが内訳は、石鏃4点（第108図15～17）、石鏃未成品4点（第108・109図68～70）、楔形石器11点（第109図97～102）、石錐1点、二次加工ある剥片3点、磨製石斧1点、磨石類4点（第114図182・183）、敲石1点（第116図196）、側面調整礫2点（第120図262）、石核1点、削片1点、両極剥片1点、剥片類190点、A～C地区の竪穴住居の中でもっともまとまって出土している。石鏃・石鏃未成品の出土のほか剥片類が多量に出土していることから石鏃製作跡であった可能性が考えられる。本跡の位置するZ22からは石鏃・石鏃未成品・楔形石器のほか多数の剥片類を出土しており、これらは本跡に帰属する可能性が高い。

SI-070出土遺物 SI-070の範囲でもSI-067同様住居内の広い範囲に遺物が散在するが、全形をうかがえる程度に復元できたものはない。

44～46は複合口縁で、口縁部を肥厚させるものである。いずれも緩く外反する口縁部で、肥厚部は薄く貼り付くようなものである。縄文のみの施文で、44は0段多条単節LRの縄文を肥厚部、胴部ともに施し、口縁部内面にも0.8cmの幅で施す。45は単節RLの縄文を肥厚部に施し、胴部にも施されるようである。46は波状となる口縁部で、波頂部に突起を付す。外面および口縁端部に単節RL/LRの縄文を施す。44の内面は縄文施文以下を横方向に磨き、平滑に仕上げる。繊維の混入はいずれも多い。

47～57は縄文のみが施されるものである。47・48は口縁部破片で、47は内湾して立ち上がる。また、50は内傾することから、口縁部下で緩やかにくびれるとみられ、51は粘土紐接合による段差を内面に残す。施文は小型の破片である49・54が一方向の縄文しか観察できないが、ほかは単節RL/LRを横帯施文し、52・53は0段多条の縄文である。繊維の混入は全体的に多いが、49は器厚が5mmと当該時期の土器としては薄手である。56・57は底部である。57は明確に底部を上げるが、56は僅かに窪む程度で、底径は56が9.1

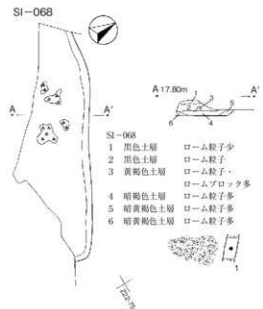
SI-066



- SI-066
- 1 黑色土層 ローム粒子少
  - 2 黑色土層 ローム粒子・焼土粒子
  - 3 暗褐色土層 ローム粒子多
  - 4 暗褐色土層 ローム粒子多

0 (1:4) 20cm

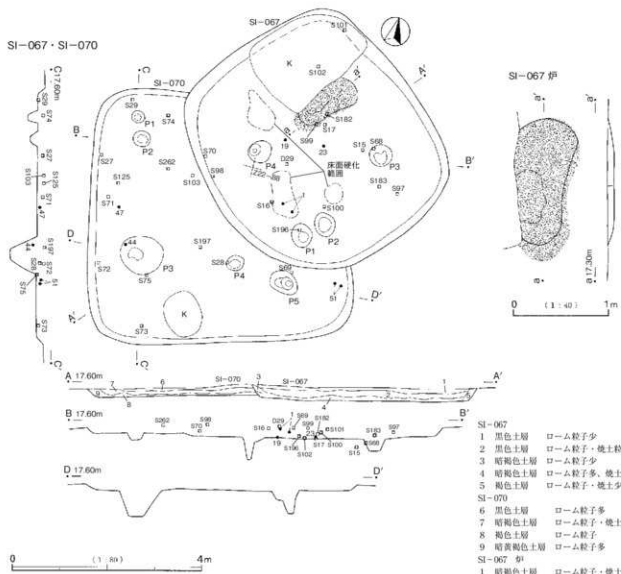
SI-068



- SI-068
- 1 黑色土層 ローム粒子少
  - 2 黑色土層 ローム粒子
  - 3 黄褐色土層 ローム粒子・ロームブロック多
  - 4 暗褐色土層 ローム粒子多
  - 5 暗黄褐色土層 ローム粒子多
  - 6 暗黄褐色土層 ローム粒子多

0 (1:25)

SI-067・SI-070

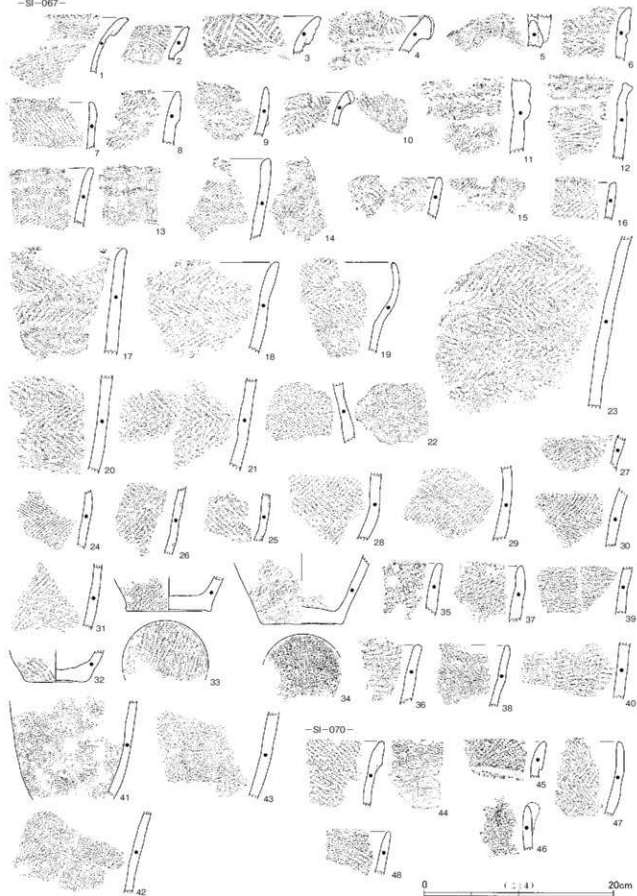


- SI-067
- 1 黑色土層 ローム粒子少
  - 2 黑色土層 ローム粒子・焼土粒子
  - 3 暗褐色土層 ローム粒子少
  - 4 暗褐色土層 ローム粒子多・焼土粒子少
  - 5 褐色土層 ローム粒子・焼土少
- SI-070
- 6 黑色土層 ローム粒子多
  - 7 暗褐色土層 ローム粒子・焼土粒子
  - 8 褐色土層 ローム粒子
  - 9 暗黄褐色土層 ローム粒子多
- SI-067 炉
- 1 暗褐色土層 ローム粒子・焼土粒子多

0 (1:80) 4m

第87図 SI-066、SI-067 (1)、SI-068、SI-070 (1)

-SI-067-



第88图 SI-067 (2)、SI-070 (2)



cm、57が7.9cmを測る。胴部はともに下端まで単節LRの縄文を施し、57は底部外面にも同一原体で施文する。繊維の混入は多い。

58・59はハイガイを用いて貝殻背圧痕文を施すものである。58は口縁部破片で、端部が僅かに外方へ張り出し、外面および口縁端部に貝殻背圧痕文を施す。59は胴部破片で、器面に凹凸が目立つ。ともに放射肋が横位になるよう施文し、施文具にはほぼ同じ大きさの貝殻を使用している。繊維の混入は中程度である。

60は無文の口縁部破片である。口縁端部を丸く収め、外面をナデている。破片下端部に僅かに貝殻背圧痕が認められ、ナデ部分も貝殻背圧痕風の凹凸が僅かに残ることから、口縁部のみにナデを施したものとみられる。繊維の混入は中程度である。

SI-067に先行する住居で、口縁部に山形の集合沈線や捻糸側面圧痕はみられないが、44~46の複合口縁の土器が含まれ、花積下層式に比定できる。SI-067と同様に石器類も多く出土しており、石鏃3点(第108図27~29)、石鏃未成品7点(第109図71~75)、楔形石器13点(第109図103)、二次加工ある剥片(第110図125)、敲石1点(第116図197)などがあるが、本来の帰属はSI-067であった可能性が考えられる。

#### SI-068 (第87図、図版11・71)

Z22-64付近に位置する。ほとんどの部分に攪乱を受け、かろうじて北東壁の一部を検出した。確認した北東壁長は住居東隅から4.80mで、方形系の住居とみられる。炬およびピットは検出できず、住居廃絶後に遺構内貝層が形成されている。貝層のサンプリングは行っておらず、調査時の所見ではマガキが主体となり、サルボウガイ・オキシジミが僅かに混入する程度であった。

遺物はほとんど出土せず、土器片1点を図示したほか、図示していないが剥片類1点を出土している。土器は胴部下半の破片とみられ、施文はない。繊維の混入は多く、黒浜式に比定できる。

#### SI-069 (第89図、図版11・72)

Z22-47・57付近に位置する。北西隅がSI-043の南東隅を切って構築され、(旧)SI-043→(新)SI-069の新田関係が確認されている。重複部分に貼り床はなく、SI-069の壁も検出できなかった。そのため、平面図にはSI-043の土層断面で確認できた範囲を破線で示してある。平面形は6.42m×4.26mの隅丸長方形で、土層断面で壁の立ち上がりをとらえた。床面中央に倒木痕があり、炬は検出できなかった。倒木痕によって土層が逆転している可能性もあるが、現状では倒木痕を覆う形で覆土1層が堆積している。床面はSI-043より僅かに高く、確認面からの深さは0.19mを測る。柱穴と考えられるピットは長軸方向南端に4基、北東隅近くに1基検出した。床面からの深さはP4・P5が0.20mと浅く、ほかは0.36m~0.48mである。

遺物は住居内に散在する小さな破片が多く、8点を図示した。

1は複合口縁で口縁部を肥厚させるものである。肥厚部、口縁端部、胴部に単節RLの縄文を施す。繊維の混入は中程度で、白色で微細な鉱物粒子も含む。2は口縁端部を欠損するが、口縁部文様帯とみられ、半截竹管を用いて横位に沈線を巡らせた後、山形の集合沈線を施す。繊維の混入は多い。

3~5は縄文のみを施すもので、3・4は同一個体とみられる。3は口縁部破片で、口縁端部を丸く収める。外面は単節LRの縄文を施し薄手である。5は胴部中位以下の部位とみられ、外面は無節R/Lの縄文を施す。繊維の混入は中程度である。

6はハイガイを用いた貝殻背圧痕文を施す。放射肋は横位となり、中型から大型のハイガイを用いたようである。7は半截竹管を用いた波状文を描くが、器厚は5mm前後と薄く、繊維をほとんど含まない。8

は単沈線により葉脈文を描く。繊維の混入は中程度である。

7は覆土上層からの出土であるが、内容的に花積下層式と黒浜式が含まれる。

石器類の出土も多く、石鏃9点(第108図18~26)のほか石鏃未成品1点、楔形石器1点、剥片類50点がある。また、破損した蛇紋岩製球状耳飾を再利用した垂飾品(第107図33)が出土している。

#### SI-071(第89図、図版11・73)

X20-89、99付近に位置する。長軸北東端部に倒木痕があるが、平面形は方形で短軸長は4.04m、長軸長は5.80m前後と推定できる。確認面からの深さが0.13mと浅く、土層断面の観察から住居と倒木痕の新旧関係を明らかにすることはできなかった。ただし、倒木痕上に貼り床は施されていない。床面は平坦で、壁の立ち上がりも明瞭であるが、炉、柱穴は検出できなかった。

遺物は少なく、土器片4点を図示した。

4点とも縄文のみが施される胴部破片で、1は単節RL、2が0段多条環付末端単節RL、3が単節RL/LR、4は単節LRを施す。繊維の混入は少ない。

#### SI-072(第90図、図版11・29・73)

X21-49・59付近に位置する。西壁の大部分が検出できなかったが、平面形は方形系で、長軸長4.60m、短軸長は3.60m前後とみられる。確認面からの深さは遺存のよい東側で0.30mを測る。炉は床面中央に2基検出された。規模は西側の炉Aが0.54m×0.34m、東側の炉Bが0.45m×0.34mで、どちらも被熱痕跡はあまり顕著ではない。炉AはP3の上に設けられているため、炉B→炉Aの新旧関係が考えられる。柱穴と考えられるピットは炉周辺に7基検出した。床面からの深さはP2が0.15mと浅く、これ以外は0.29m~0.63mである。

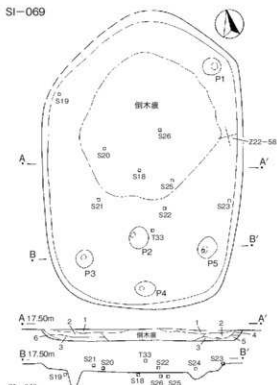
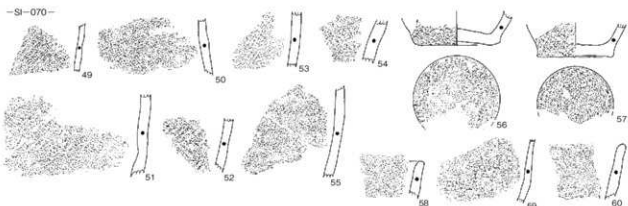
住居廃絶後に遺構内貝層が形成されている。床面に接し、現状では0.34m×0.20mの小ブロックとして残る。同定結果は第4表に示した。

遺物は住居の広い範囲に散在しているが、炉AからP6にかけては集中し、図示した1・2・5もこの範囲から出土している。

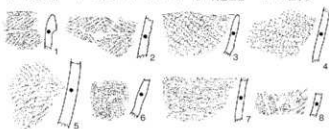
1は底径8.0cm、現存高14.8cmを測り、胴部上半から口縁部を欠損する。底部は突出する形で、上げ底とし、底部外面を調整するが凹凸が目立つ。胴部は粗い無節Rを一方方向に施す。底部から10cm強の部分が粘土継接合部とみられ、下位の縄文施文後に幅4cmの粘土をかぶせ、その上にも同一原体で縄文を浅く施文する。繊維の混入は中程度である。

2は舟形の小型土器である。最大口径13.9cm、推定最小口径8.3cm、最大底径7.0cm、最小底径6.3cmを測り、口縁部までの高さも図左側で5.7cm、右側で3.7cmを測る。底部は平坦ではなく、短軸方向が浮くことから、現状よりも円形に近い状態のものを左右から挟み込んで舟形にしたものとみられる。施文はなく、底部を含めた内外面に明瞭な調整痕が残される。繊維の混入は中程度である。

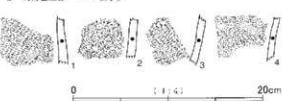
3~6は地文がなく、沈線でモチーフを描くものである。3は口縁部の破片で、口縁端部を欠損するが、半截竹管を用いて弧線文を描く。4は波状文を密に施し、5・6は半截竹管を用いて縦位沈線を施す。5は胴部下半とみられ、破片上端に附加条2種R+R1本の縄文が僅かに認められ、胴部上半は縄文施文であったとみられる。また、7は口縁部破片で現存部分は縄文を施すが、破片下端部に僅かに沈線が認められ、胴部中位以下に縦位の沈線を施したとみられる。7の口縁部は内面から調整し尖頭状となる。縄文は口縁部に4cmほどの幅で無節Rを縦位に施し、その下位に軸は不明であるが太いR1本を附加した縄文を



SI-069	1 黒色土層	ローム粒子・焼土粒子少	4 暗褐色土層	ローム粒子少
	2 暗褐色土層	ローム粒子・焼土粒子	5 褐色土層	ローム粒子多
	3 褐色土層	ローム粒子・ロームブロック	6 褐色土層	ローム粒子多



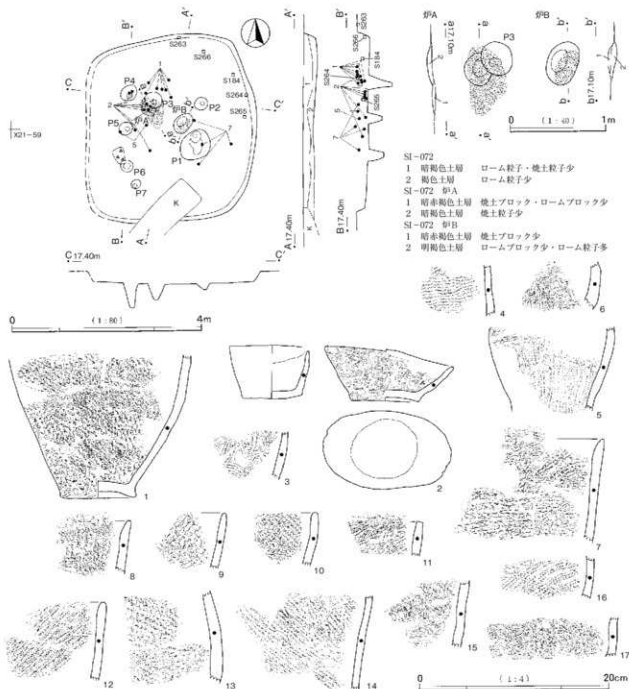
SI-071	1 暗褐色土層	ローム粒子少
	2 明褐色土層	ローム粒子多



第89図 SI-070 (3)、SI-069、SI-071

施す。繊維の混入は7が多く、ほかは中程度である。

8~17は縄文のみが施されるものである。このうち8~12は口縁部破片で、8は内側から調整し端部を尖頭状に、11は端部を平坦に、9・10・12は丸く収める。外面は口縁端部直下から縄文を施し、8・9は無節L、10は単節LR/RL、11・12は附加条縄文で、11が附加条2種R+R2本、12は附加条2種R+R1本である。13~17は胴部破片で、13・16は胴部中位、17は胴部下端である。縄文は13~15が無節R、17



第90図 SI-072

が無筋L、16は軸不明であるがR 2本/L 2本を附加する。繊維の混入は中程度ないし少なめである。

図示した遺物には縦位の沈線を施すものが含まれ、縄文施文のものとあわせて黒浜式に比定できる。また、2の小型土器は出土例があまり多くないものである。石器類には磨石類1点(第115図184)、側面調整礫4点(第120図263~266)、剥片類1点がある。

#### SI-073 (第91図、図版12・29・73)

Y21-52付近に位置する。北東隅を攪乱により失うが、平面形は5.56m×4.38mの隅丸方形で、確認面からの深さは0.30mを測る。床面は全体に硬く踏みしめられ、住居長軸線上の北寄りに炉を検出した。炉は周囲の床面より僅かに高く、さらにローム土をドーナツ状に積み、中央が窪んだ形状となる。規模は0.52

m×0.39mで、土手状部分を含めると0.62m×0.57mで長軸方向に長い。底面中央は被熱痕跡が顕著である。柱穴と考えられるピットは14基検出した。このうちP8は床面硬化部を除去した後に検出され、除去後の床面からの深さは0.28mを測る。これ以外のピットの深さは、P5・P7・P11が0.49m～0.59mと深いほかは、0.07m～0.23mと比較的浅い。

遺物は住居内に散在し、P3・P4付近にまとまりがある。図示した1は主にこの範囲から出土し、P10・P11付近からも破片が出土した。

1は推定口径23.8cm、現存高26.4cmを測り、底部を欠損し、胴部は全周の70%程度が遺存する。口縁部下で緩くくびれ、胴部中位が張るものの最大径は口縁部にある。口縁部は比較的水平和で、端部を丸く取める。外面は口縁部に1cm前後の無文帯を巡らせ、以下全面縄文を施文する。縄文は環付末端無節Rを横帯施文し、下位にいくほど水平を保っていない。内面は横方向に磨き、繊維の混入は中程度である。

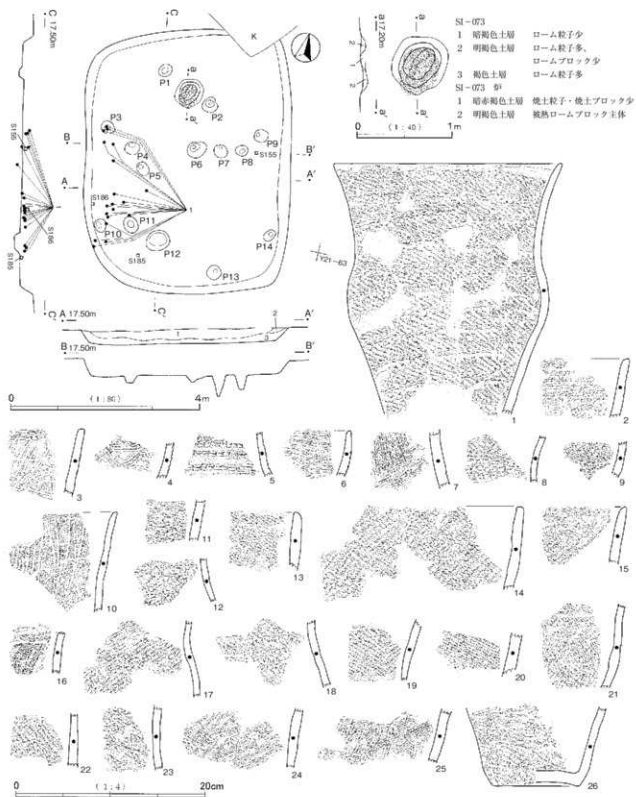
2～12は刺突文、沈線などで加飾するものである。2は器面が荒れて不鮮明であるが、連続爪形文でモチーフを描き横位に展開する。口縁部破片で、口縁端部を丸く取め、内面は横方向に粗く磨いている。3は波状となる口縁で、口縁に沿って半截竹管を用いた連続刺突文を1条巡らし、口縁部に単沈線で木葉文もしくは菱形文を描く。口縁端部は平坦に整え、内面は縦方向に丁寧に磨いている。4も口縁部破片とみられ、3本単位の沈線で鋸歯状文もしくは波状文を描く。5は胴部上半のくびれ部にかかる部位とみられ、くびれ部に結節沈線を巡らせている。口縁部の文様構成は不明であるが、破片最上段の結節沈線に接して斜位の結節沈線が僅かに確認できる。繊維の混入は2が多いがほかは少ない。

6～9は刺突文を施すものである。6は内湾する口縁部破片で、口縁端部を丸く取める。6・7は半截竹管を用いた連続刺突文を施し、7は地文に燃糸文Lを施す。8は口縁部下のくびれ部破片で、くびれ部に竹管の背を用いた連続刺突文を巡らせ、地文に単節RL/LRの縄文を施す。9は半截竹管を用いてC字状の刺突を不規則に施す。繊維の混入は7が多く、ほかは中程度である。

10～12は沈線を施すもので、10は縦位に、11は波状文を描く。11は地文に無節Rの縄文を施す。12は単節RLの縄文を地文とし、不連続だがコンパス文を描く。繊維の混入は多い。

13～26は縄文のみが施されるものである。13～16は口縁部破片で、口縁端部は13が尖頭状の部分と平坦な部分が混在し、15は内側から調整して尖頭状に、16は平坦に調整した上を連続的に押圧する。14は丸く取めるが小刻みに波打つ。縄文は13が単節LR、14・15が単節RL、16は燃糸文Rである。繊維の混入は13が多いがほかは中程度である。17～25は胴部破片で、17・18は口縁部下のくびれ部から胴部中位にかけての部位である。また、21・24はかぶせた粘土の痕跡が残る。縄文は17が無節L、18が無節R、19・21・22は単節RL/LRで、19は横帯施文、20は単節LRをそれぞれ施す。また、23・24は附加条縄文で、23が附加条1種R+L1本、24が附加条2種R+R2本/L+L2本、25は2種類の燃糸文Rを施す。繊維の混入は中程度である。26は底部で、底径9.2cmを測る。底面は緩やかな上げ底となり、外面を丁寧に磨く。胴部下端は無節Rの縄文を一方に施しているが、破片上端には異なる原体が認められ、無節Rの縄文は胴部下端に限られるようである。繊維の混入は多い。

1は環付末端縄文を横帯施文するなど、古い様相を残しているが、これ以外は縦位沈線文や口縁部に横位展開するモチーフが描かれる土器が含まれ、黒浜式に比定できる。土器のほかには磨製石斧1点(第112図155)、磨石類3点(第115図185・186)が出土している。



第91図 SI-073

SI-074 (第92図、図版12・74)

Y21-89付近に位置する。平面形は3.24m×3.16mの方形で、確認面からの深さは0.21mを測る。床面は硬化面は認められないが、平坦である。炉は検出されず、柱穴と思われるピットは住居西隣近くに1基検出しただけである。床面からの深さ0.32mを測る。

遺物は少なく、破片4点を図示した。

1・2は複合口縁で口縁部を肥厚させるものである。1は端部を屈曲させ、口縁端部、屈曲部、胴部それぞれに擦糸側面圧痕を施す。2には施文がなく、内面を横方向に磨く。繊維の混入は少ない。3・4は縄文のみの施文で、4はくびれ部から胴部にかかる部位とみられ、内面を縦方向に磨く。縄文は3が無節L、4は単節LRを縦位に施す。繊維の混入は少ない。

出土遺物は少なく、図示できたものも細片のため住居の時期を決定する資料としては弱い、1・2は花積下層系に比定できる。また3・4は縄文のみの施文であり黒浜式の可能性がある。

SI-075 (第92図、図版12・74)

X21-29付近に位置する。当初2軒の住居が重複したのとして調査を開始したが、調査の結果、一部は攪乱で1軒と判断した。現道下から検出されたこともあり、埋設管等による攪乱も多く平面形は確定できていない。検出できた範囲は軸長3.45mで、長軸長も最大で3.80m前後であったと推定できる。確認面からの深さは0.18mで、炉は認められず、北隣付近にピット2基を検出した。床面からの深さはP1が0.15m、P2が0.14mを測る。

遺物はほとんど出土せず、1・2は本住居内から出土した土器であるが、3・4は本住居北側の攪乱から出土したものである。

図示したものはいずれも胴部破片で、2以外は縄文のみの施文である。2は縦位沈線を施す。器面の凹凸が目立ち、沈線は細く鋭い。胎土がやわらかい段階で沈線を引いたとみられ、胎土中の繊維が引きずられている様子が観察できる。1・4は無節L、3は無節Rの縄文を施す。繊維の混入は中程度である。

SI-076 (第92図、図版12・74)

X21-48付近に位置する。第17地点と第15地点の調査区境界にかかり、現道の切り直しなどの安全対策を行ったため、南東部の調査ができなかった。平面形は4.58m×3.60mの隅丸方形で、確認面からの深さは0.20mを測る。床面は平坦であるが、硬化面は認められず、炉、柱穴も検出されなかった。なお、覆土下層に部分的に焼土が堆積し、調査時の所見では住居廃絶後に火を焚いた可能性を指摘している。

遺物はほとんど出土せず、破片1点を図示した。1は縄文のみが施される胴部破片で、胴部上位とみられる。外面は単節LR/RLの縄文を施す。繊維の混入は中程度である。黒浜式に比定できる。

SI-077 (第92図、図版12)

Z22-27付近に位置する。第17地点と第14地点の調査区境界にかかり、現道の切り直しなどの安全対策を行ったため、南西部は調査できなかった。また、現道下にあたることから、埋設管等により中央部に攪乱が及んでいる。平面形は確定しがたいが方形系の住居で、現状で東西長3.50m、南北長2.80mを測る。確認面からの深さは0.20mで、褐色土層が主体である。床面は平坦で、僅かながら硬化面が認められる。遺存部分では炉は検出されず、柱穴と思われるピット2基を検出した。床面からの深さはP1が0.25m、P2が0.16mである。

遺物はほとんど出土せず、図示できるものはない。

SI-078 (第92図、図版12・74)

Z22-17付近に位置する。調査区境界に接し、北側は駒形遺跡の範囲となるが、境界部分に安全対策を施したため、北東側が調査できなかった。平面形は隅丸方形で、南側の2か所の隅が検出されていることから、東西長は3.40mとなる。南北長は不明で、現状で2.50mまで確認できているが、住居全体の1/2以下であろう。確認面からの深さは0.08mと浅く、炉は検出されなかったが、柱穴と思われるピットを4基検出した。床面からの深さはP4が0.14mと浅いが、ほかは0.26m～0.42mの範囲に収束する。

遺物は少なく、破片1点を図示した。縄文のみが施される胴部破片で、外面は単節LR/RLの縄文を施す。内面は縦方向の調整が確認でき、繊維の混入は中程度である。黒浜式に比定できる。遺存状態が悪いため図示していないが石鏃未成品1点を出土した。

SI-079 (第92図、図版12・74)

Z22-16・17付近に位置する。攪乱および調査区境界の安全対策のため、隅の一部が未検出である。平面形は4.28m×3.25mの隅丸方形で、確認面からの深さは0.09mを測る。炉は床面中央に位置し、規模は0.75m×0.70mを測る。底面は床面から0.10m窪み、被熱痕跡は顕著である。柱穴と思われるピットは対角線上に4基を検出した。床面からの深さは0.34m～0.48mの範囲に収束する。

SI-079に隣接して第17地点でSI-012とした竪穴住居がある。この住居は富士見遺跡と駒形遺跡にまたがって位置し、駒形遺跡でSI-036として報告している。

遺物は少なく、5点を図示した。

1～3は縄文が施されるもので、1・2は口縁部破片である。1は口縁に沿って隆帯を巡らせ、隆帯以下および口縁端部に単節RLの縄文を施す。2は口縁端部を薄く仕上げ、外面は無節R/Lの縄文を施す。3は胴部破片で単節LR/RLの縄文を施す。繊維の混入は2が多く、1・3は少ない。

4・5はハイガイを用いて貝殻背圧痕文を施す胴部破片である。貝殻の押圧長は4が縦横1cm程度で、その間に3本の放射筋が確認できる。繊維の混入はともに多い。

少ない資料であるが、ハイガイを用いる点や口縁部の隆帯区画から花積下層式とみられる。土器以外には破損した塊状耳飾を再利用した滑石製垂飾品(第107図34)、石鏃1点(第108図30)、石鏃未成品1点(第109図76)、楔形石器1点(第110図104)、剥片類7点が出土している。

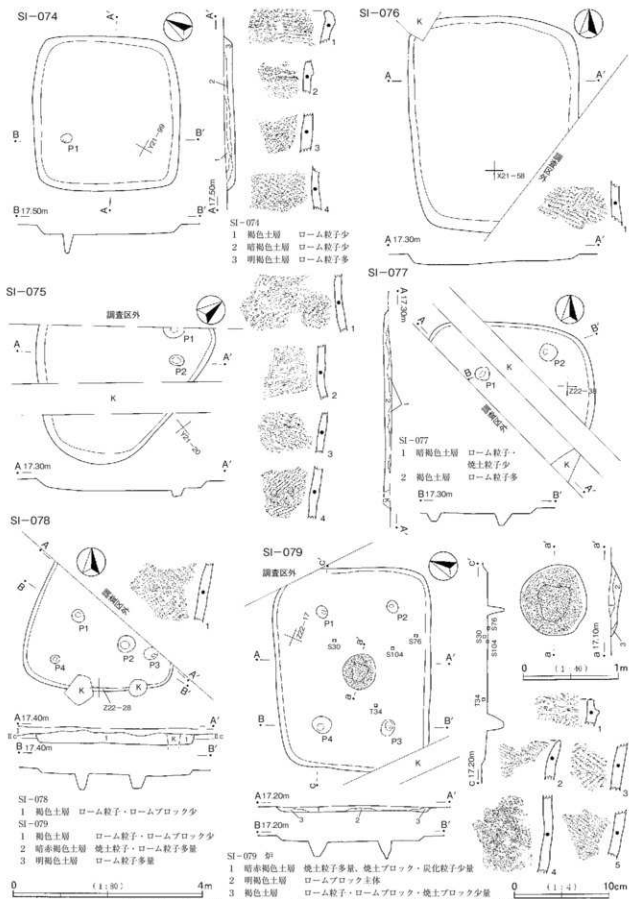
SI-080 (第93・94図、図版12・29・30・74)

W22-12付近に位置する。平面形は6.62m×5.30mの不整形な隅丸長方形で、確認面からの深さは0.08mと浅い。炉は長軸方向北端部近くに設置され、規模は1.46m×1.07mとやはり長軸方向に長い。底面には直径0.20m～0.30mのピット状の窪みが2か所あり、床面からの深さは0.40m～0.58mを測る。ただし、火床部は床面から0.20m程度のところにあり、火床部以下に焼土粒子を含む単一の土層が堆積している。火床部の被熱痕跡は顕著で、堅く焼き締まった焼土ブロックが認められた。柱穴と思われるピットを14基検出した。床面からの深さが0.10m～0.30mと、0.50m～0.70mの2グループに分けられ、浅いものは南側、深いものは北側に位置する。なお、炉の北側に接して直径0.15mの貝ブロックが床面上から検出された。規模が小さく、分離できた貝は僅かである。同定結果を第4表に示した。

遺物は炉周辺とP10周辺に集中し、図示した1・2・9は炉周辺から、3はP10周辺から出土した。

1は推定口径34.6cm、現存高36.2cmを測り、底部を完全に欠損するが胴部は全周の70%が遺存している。口縁部は4単位の波状となり、口縁部下で緩くくびれる。最大径は口縁部にあるが、胴部も大きく膨らみ





第92図 SI-074、SI-075、SI-076、SI-077、SI-078、SI-079

推定径32cmを測る。現存部下端の径は16.8cmで、現状の傾きからみると器高は45cm前後であったとみられる。口縁端部は薄く仕上げられるが、端部は丸く取め、内面を横方向に磨いている。外面は附加条2種L+L3本/R+R3本の縄文を交互に施し、装飾的效果を高めている。繊維の混入は少ない。

2は歪みが大きく正円にはならず、推定口径最大20.6cm、最小18.6cm、現存高23.9cmを測る。底部を完全に欠損し、口縁部も40%程度の遺存だが、胴部下半は全周している。図には口縁部から17cmの位置での横断面を示したが、その部分での径は14.7cm×12.9cmとなる。口縁部は不規則に波打ち、器面も凹凸が目立つ。外面は附加条2種R+R1本の縄文を雑に施す。繊維の混入は中程度である。

3は推定口径32.8cm、現存高28.0cmを測り、口縁部下でくびれる深鉢形土器である。口縁部は大きく外反し、最大径を有する。外面は附加条2種R+L1本の縄文を全面一方向に施す。現存部の内面は横方向に磨かれ平滑であるが、外面は胴部最大径部分と、その下7cmほどの部分にかぶせた粘土の痕跡が観察できる。繊維の混入は多い。

4は推定口径19.5cm、現存高12.7cmを測り、口縁部が全周の30%遺存する。口縁端部は丸く取め、外面に附加条2種L+R2本の縄文を一方向に施す。繊維の混入は中程度である。

5～8は刺突文・沈線を施すものである。5・6は口縁部破片で、口縁上部が屈曲して直立する。直立する部分は幅約1.8cmで、櫛歯状工具を用いた刺突文を巡らす。口縁端部は平坦に調整し、内面とともに磨いている。屈曲部から下は単節LRの縄文が僅かに観察できる。繊維の混入は少ない。7は口縁部下のくびれ部破片で、くびれ部に結節沈線を巡らす。破片最上段の結節沈線は口縁部に横位展開するモチーフの一部とみられる。胴部は附加条縄文を施すようであるが、破片のため詳細は不明である。内面は横方向に調整し、繊維の混入は中程度である。8は単沈線で斜格子文を描く。地文はなく、繊維の混入は多い。

9～20は縄文のみが施されるものである。9・10は口縁部破片で、9は口縁端部を平坦に、10は尖頭状に調整する。9は無節R/L、10は附加条2種R+R1本の縄文を施す。繊維の混入は中程度である。11～17は胴部破片で、15は大きく張り出す胴部中位とみられる。また、16も緩くカーブをすることから、胴部上位、14は曲率が小さく胴部下端とみられる。縄文は11・13が無節Rで、13はまばらな施文で器面の凹凸が目立つ。12は無節Lを一方向に施す。14～18は附加条縄文で、18は附加条1種L+R2本/R+L2本、14・16・17は附加条2種L+L2本/R+R2本、15は軸が不明であるが、R2本・L2本を附加する。なお、15は破片下部に粘土をかぶせた痕跡があり、それ以下は単節RLの縄文となる。繊維の混入はいずれも中程度である。

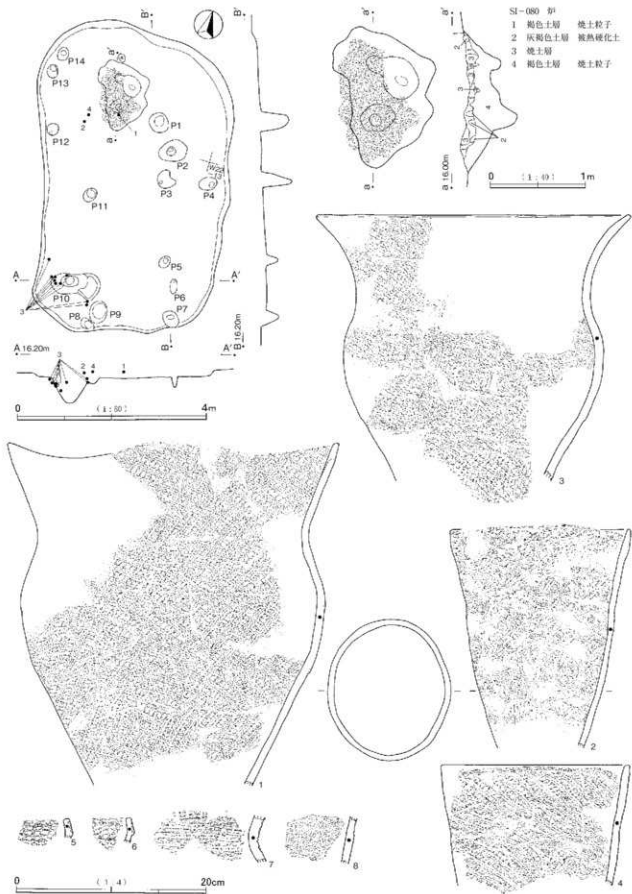
19・20は底部で、19は底径7.4cm、20は推定底径6.9cmを測る。底部外面はともに緩やかな上げ底となり、20の外縁は摩擦した感がある。胴部は縄文を施すが、19は遺存部分の左側が無文で、右側に無節Rの縄文がみられる。20は附加条2種L+L2本の縄文を一方向に施す。繊維の混入は中程度である。

縄文のみの施文のものが多く、さらに附加条縄文を多用している。基本的に黒浜式に比定できるが、5・6は屈曲した口縁部に刺突文を巡らすなど、大木2a式の影響がうかがえる。

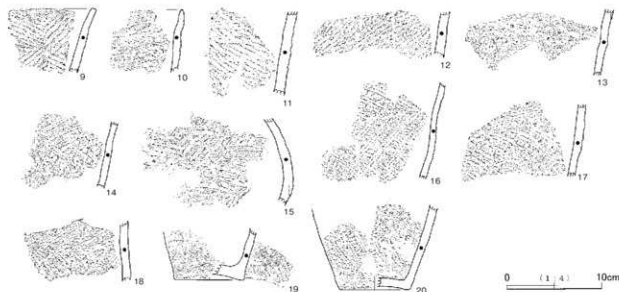
## 2 陥穴

### SK-094 (第95図、図版13)

C地区の陥穴はA地区とC地区を分ける浅い谷の谷頭周辺に分布し、本道構はW21-25付近に位置する。平面形は2.12m×1.25mの楕円形で、長軸方向は谷の向きに直交する。確認面からの深さは最深部で2.45mを測り、底面の幅は0.40mと広く平坦である。底面から0.30mの高さまで黄褐色土が堅く締まった状態



第93圖 SI-080 (1)



第94図 SI-080 (2)

で堆積している。断面形は縦横ともあまり開かず立ち上がる形態で、北東側の底部近くでは一部内側に張り出している。

図示できる遺物はない。

SK-095 (第95図、図版13)

W21-45付近に位置する。平面形は2.86m×0.68mの溝状で、長軸方向は谷の向きに平行する。確認面からの深さは最深部で1.70mを測り、底面の幅は0.40mである。底面は平坦で、長軸方向東端部がオーバーハングする。中央に黒褐色土、壁際に褐色土が堆積している。

図示できる遺物はない。

SK-096 (第95図、図版13)

W22-48付近に位置する。平面形は2.79m×0.64mの溝状で、長軸方向は谷の向きに直交する。確認面からの深さは最深部で0.85mを測り、底面の幅は0.20mである。長軸断面は船底状となる。

図示できる遺物はない。

SK-097 (第95図、図版13)

W22-47付近に位置する。平面形は2.84m×0.72mの溝状で、長軸方向は谷の向きに近い。確認面からの深さは最深部で0.80m、底面の幅は0.24mである。底面は凹凸があり、長軸方向南端部が僅かにオーバーハングする。

図示できる遺物はない。

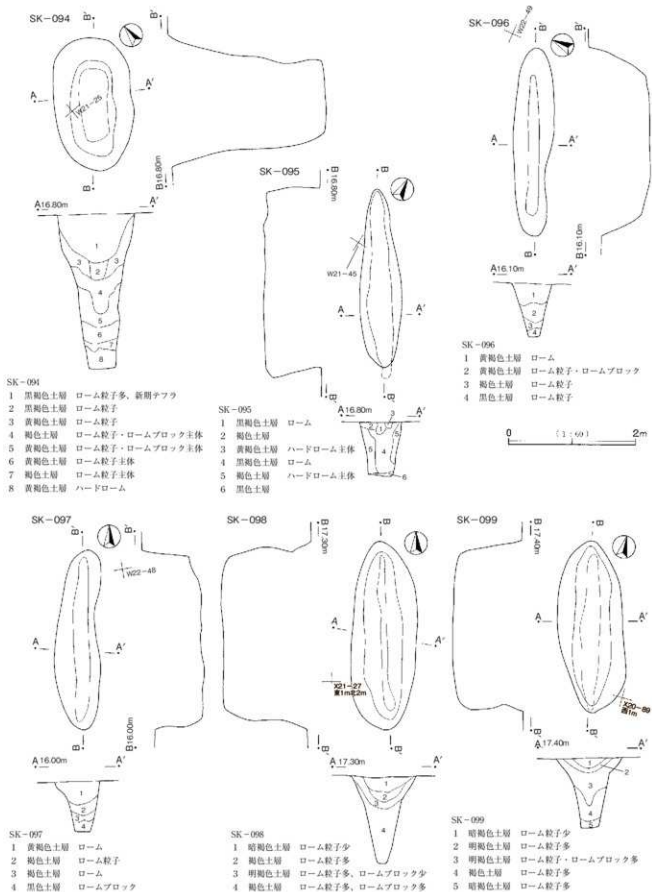
SK-098 (第95図、図版13)

X21-17付近に位置する。本遺構とSK-099はC地区のほかの陥穴と離れ、浅い谷からも距離を置く。平面形は2.95m×1.20mの溝状で、確認面からの深さは最深部で1.32mを測る。底面の幅は0.10m程度と狭く、長軸方向は両端がオーバーハングする。覆土は底面から60%の高さまで一度に埋め戻されている。

図示できる遺物はない。

SK-099 (第95図、図版13)

X20-78付近に、SK-098とともにC地区のほかの陥穴から離れて位置する。平面形は2.74m×1.02m



第95図 C地区縄文時代土坑(1)

の楕円形で、確認面からの深さは最深部で1.13mを測る。

図示できる遺物はない。

#### SK-100 (第96図、図版14)

V21-86付近に位置する。近世以降の溝状遺構に上面を破壊され、平面形が崩れているが楕円形であったと推定でき、確認面で2.16m×1.86mを測る。確認面からの深さは2.20mで、底面は0.93m×0.43mの長方形となる。

図示できる遺物はない。

### 3 土坑

#### SK-058 (第96図、図版18・74)

Z22-43付近に位置する。平面形は長楕円形で、規模は4.68m×1.72m、確認面からの深さは0.30mを測る。底面より僅かに浮いた状態で遺構内貝層が形成されている。現状では長軸方向に0.80m×0.25mと1.30m×0.20mの2か所のブロックに分かれている。土層断面では貝層が垂直に堆積しており、2か所のブロックに分かれていること合わせて周辺部分が土壌化した可能性も考えられる。しかし、貝層の純度は高く、隣接する2層に貝層の痕跡が認められないことから、特殊な堆積状況といえる。貝層は全量採取しており、その量は4.5ℓ、重量3,410gであった。同定結果は第4表に示した。貝層中から2mm以下の魚類の遺存体、ツノガイ、ウネナシトマヤガイ、マテガイ、フジツボが分離できた。

貝類以外の出土遺物は少なく、土器片6点を図示した。

1・2は複合口縁で口縁部を肥厚させるものである。1は口縁端部を欠損するが、肥厚部に撚糸側面圧痕を曲線的に施し、刺突文を充填する。2は肥厚部に施文はなく、胴部はハイガイを用いた貝殻背圧痕を施す。ともに繊維の混入は多い。

3～6は貝殻背圧痕文を施すものである。3・4は口縁部破片で、口縁端部は3が丸く、4が平坦に調整する。外面はハイガイを用いた貝殻背圧痕文で、同一原体で口縁端部にも施文する。押圧幅は3が1.5cmで、その間に5本の放射肋が確認でき、4は3より小型の原体を用いる。5・6は胴部破片で、同じくハイガイを用いた貝殻背圧痕文を施す。5は横位に押し、同一原体のものともみられる貝殻腹縁文も施す。貝殻腹縁文は押圧長1.3cmで、その間に3本の放射肋が確認できる。貝殻背圧痕は殻頂部に近い部分から腹縁部に近い部分を使い分けている。6は一度に押しされる放射肋が1～2条で、さらに湾曲していることから、貝殻の口縁部のみを使用したものとみられる。繊維の混入は中程度から多い。

図示した土器はいずれも花積下層式に比定でき、遺構内貝層もハイガイが主となることから、花積下層式期の土坑とすることができる。

#### SK-059 (第96図、図版18・74)

Z22-41付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は1.94m×1.41m、確認面からの深さは0.24mを測る。覆土上層に遺構内貝層が形成され、2か所のブロックに分かれている。土層断面では貝層に隣接する1層に僅かに貝が混じることから、本来はもう少し大きなブロックであったものが土壌化した可能性が高い。貝層は全量採取しており、その量は4.5ℓ、重量2,510gであった。同定結果は第4表に示したが、マガキが主体となり、ハイガイが含まれる。その他2mm以下の魚類の遺存体、ウネナシトマヤガイが分離できた。

遺物は少なく破片4点を図示した。また図示していないが剥片類2点を出土している。

1～3は縄文のみが施される胴部破片で、3は湾曲しており胴部上半部とみられる。縄文は1・2が単

節RL/LRを、3は単節LRを施す。繊維の混入は中程度である。

4は胴部下半の破片で、外面にハイガイを用いた貝殻背圧痕文を施す。押圧長は1.1cm、押圧幅0.8cmで、その間に4本の放射肋が確認できる。繊維の混入は少ない。

図示した遺物はハイガイを用いた貝殻背圧痕が施される土器が含まれ、遺構内貝層にもハイガイが含まれることから花積下層式期に伴うものと考えられる。

#### SK-060 (第96図、図版18・74)

X23-08付近に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は3.28m×2.45mの大型の土坑である。確認面では把握できなかったが、下層確認調査中に検出し、壁の一部を失っている。確認面からの深さは0.90mで、覆土の締まりは弱い。底面にビットが1基あり、直径0.15m、深さ0.65mを測る。

土器片2点を図示した。1・2とも縄文のみが施される胴部破片で、ともに無節Rの縄文を一方に施す。繊維の混入は多く、どちらも黒浜式に比定できる。

#### SK-061 (第96図、図版18)

W22-39付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は1.36m×0.88m、確認面からの深さは0.14mを測る。底面は平坦である。

出土遺物はない。

#### SK-062 (第96図、図版18)

W22-37付近に位置する。平面形は円形で、規模は0.52m×0.48m、確認面からの深さは0.19mを測る。W22-28から5m程度の範囲にSK-063・SK-064と類似した遺構が位置する。底面は不整形である。

出土遺物はない。

#### SK-063 (第96図、図版19)

W22-28付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は0.67m×0.56m、確認面からの深さは0.28mを測る。底面に0.10m前後の不整形の窪みを有する。

僅かに土器片が出土したが、図示できるものはない。

#### SK-064 (第96図、図版18)

W22-37付近に位置する。平面形は円形で、直径0.45m、確認面からの深さは0.36mを測る。

出土遺物はない。

#### SK-065 (第97図、図版19)

W21-66付近に位置する。平面形は円形で、規模は1.00m×0.87m、確認面からの深さは0.23mを測る。覆土は縦方向に分層でき、中心部の1層には新期テフラが混入している。

出土遺物はない。

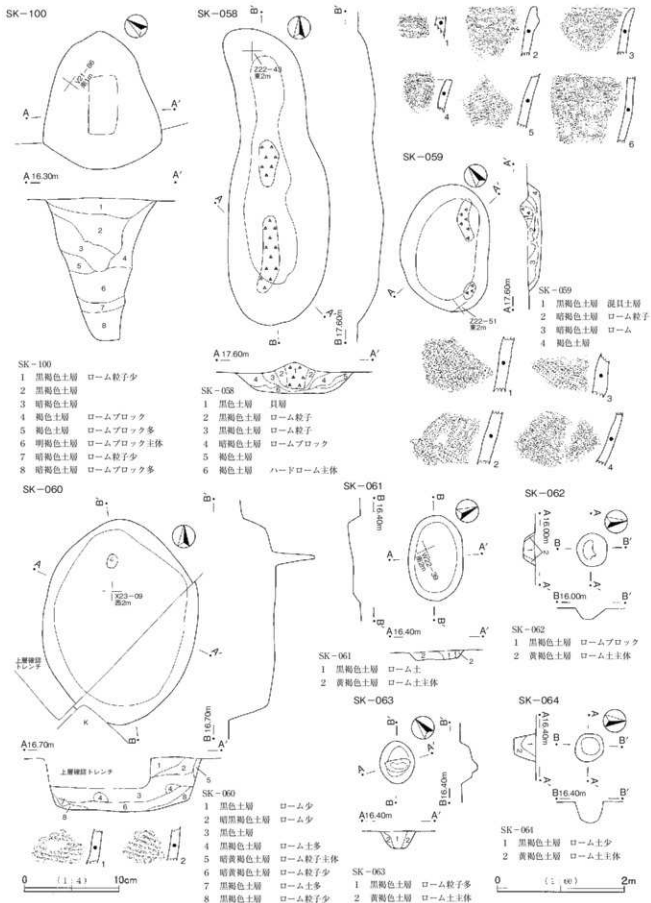
#### SK-066 (第97図、図版19)

Z23-31付近に位置する。平面形は円形で、直径2.60m、確認面からの深さは0.41mを測る。断面形は皿状である。

覆土中から僅かに土器片が出土したが、図示できるものはない。

#### SK-067 (第97図)

Z23-14付近に位置し、SI-065の西壁と一部重複するが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、規模は1.20m×1.00m、確認面からの深さは0.38mを測る。



第96図 C地区縄文時代土坑(2)



出土遺物はない。

SK-068 (第97図、図版19・74)

X20-95付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は1.35m×0.90m、確認面からの深さは0.24mを測る。底面は平坦である。

覆土中から出土した土器片2点を図示した。1・2とも縄文のみが施される胴部破片で、1は軸が不明でR2本を附加した縄文、2は単節LR/RLの縄文を施す。繊維の混入は少なく、黒浜式に比定できる。

SK-069 (第97図、図版19)

X21-19付近に位置する。南東側が調査区境界にかかるため、安全対策を行ったうえで調査したが、東側半分は調査できていない。平面形は円形を呈すと思われ、直径は3.20m、確認面からの深さは0.20mを測る。底面は平坦だが軟質で、壁は比較的しっかりと立ち上がる。

剥片1点が出土したが、図示できる遺物はない。

SK-070 (第97図、図版19・74)

X21-79付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は2.90m×2.33m、確認面からの深さは0.22mを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

覆土中から出土した土器片3点を図示した。1・2は胴部破片、3は底部破片である。

1は半截竹管を用いて葉脈文を描くが、縦位の軸となる沈線は単沈線で描く。2・3は同一個体とみられる。推定底径7.8cmを測り、底部は緩やかに上げ底となる。外面は軸が不明であるがR2本/L2本を附加する縄文を施す。繊維の混入はいずれも少ない。黒浜式に比定できる。また図示していないが剥片類1点を出土した。

SK-071 (第97図、図版19・74)

Y21-60付近に位置し、形状が類似するSK-070に近い。平面形は楕円形で、規模は2.50m×2.24m、確認面からの深さは0.21mを測る。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。

覆土中から出土した土器片2点、石器1点を図示した。1・2は同一個体とみられ、附加条2種R+R2本の縄文を施す。繊維の混入は中程度で、黒浜式に比定できる。

SK-072 (第97図、図版19・75)

Y21-43付近に位置し、東側にSK-073が隣接する。平面形は楕円形で、規模は1.19m×1.37m、確認面からの深さは0.14mを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

覆土中から出土した土器片4点を図示した。

1・2は沈線文、刺突文を施すものである。1は単沈線の区画内に刺突文を充填する。刺突は先端の尖った円形工具で斜めに行っている。2は単沈線で斜格子文を描く。繊維の混入はともに中程度である。

3・4は縄文のみを施すものである。3は口縁部破片で、口縁部を丸く収める。外面は3が単節LR、4は単節LR/RLの縄文を施す。繊維の混入は中程度で、白色の鉱物粒子も含む。

1は刺突に円形工具を用い、黒浜式に比定するには疑問があるが、これ以外は黒浜式に比定できる。

SK-073 (第97図、図版19)

Y21-43付近に位置し、SK-072に接する。平面形は楕円形で、規模は1.44m×1.13m、確認面からの深さは0.09mでSK-072より僅かに浅い。底面は平坦であるが、壁の立ち上がりは緩やかである。

図示できる遺物はない。

SK-074 (第97図、図版19)

Y21-23付近に位置する。一部攪乱を受けるが、平面形は円形を呈する。規模は1.55m×1.43m、確認面からの深さは0.19mで、底面は皿状である。

図示できる遺物はない。

SK-075 (第97図、図版19)

X21-79付近に位置する。平面形は不整な楕円形で、規模は0.83m×0.53m、確認面からの深さは0.18mを測る。

黒浜式の細片が出土したが、図示できる遺物はない。

SK-076 (第98図、図版19・75)

Y21-70付近に位置する。平面形は円形で、規模は0.81m×0.74m、確認面からの深さは0.14mを測る。

覆土中から出土した土器3点を図示した。

いずれも縄文のみを施すものである。1は口縁部破片で、口縁端部を内面から調整して尖頭状とする。外面は10・11が附加条2種R+R2本/L+L2本、12が附加条1種L+R2本/R+L2本の縄文を施文する。繊維の混入は中程度である。

SK-077 (第98図、図版20)

Y21-82付近に位置する。平面形は1.36m×1.12mの楕円形で、確認面からの深さは0.28mを測る。

図示できる遺物はない。

SK-078 (第98図、図版20)

Y21-94付近に位置する。平面形は1.78m×1.04mの楕円形で、確認面からの深さは0.14mを測る。

出土遺物はない。

SK-079 (第98図、図版20)

Y21-86付近に位置する。平面形は0.79m×0.72mの円形で、確認面からの深さは0.10mを測る。

出土遺物はない。

SK-080 (第98図、図版20)

Y22-02・12付近に位置する。2基の土坑が重複しており、A・Bとした。土層断面の観察からB→Aの新旧関係が確認できる。

Aは楕円形で、規模は1.64m×1.32m、確認面からの深さ0.21m、Bは方形で、規模は推定1.70m×1.68m、確認面からの深さ0.23mを測る。底面は平坦で深さはほぼ同じであるが、Bの南東壁は段を有する。

遺物は黒浜式の土器細片が僅かに出土したが、図示できるものはない。

SK-081 (第98図、図版20)

Y22-02付近に位置する。0.94m×0.91mの円形を呈し、確認面からの深さは0.17mを測る。

覆土中から僅かに土器細片が出土したが、図示できるものはない。

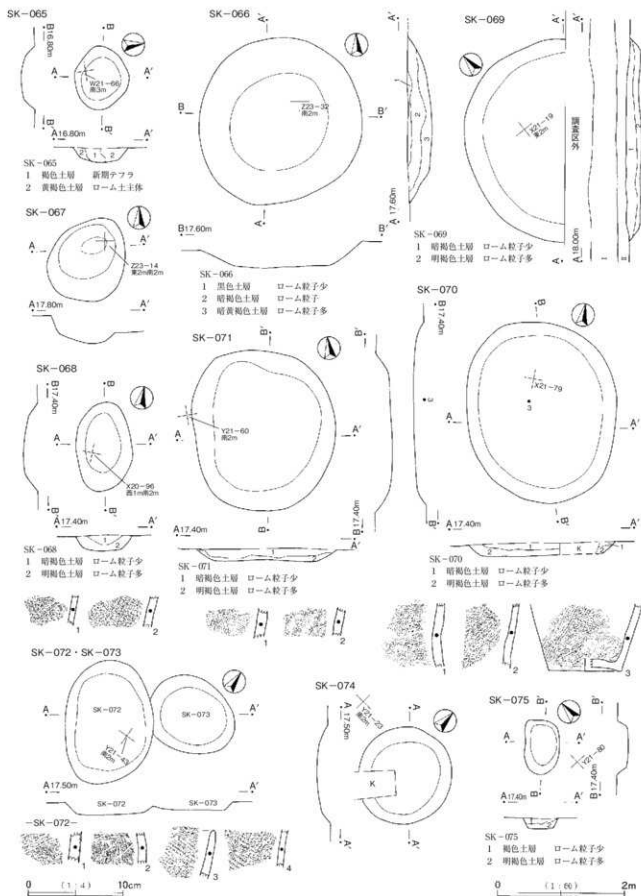
SK-082 (第98図、図版20)

Y22-63付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は1.18m×0.93m、確認面からの深さは0.18mを測る。

出土遺物はない。

SK-083 (第98図、図版20・30・75)

Y21-79付近に位置する。平面形は円形で、規模は0.67m×0.64m、確認面からの深さは0.09mを測る。



第97図 C地区縄文時代土坑(3)

覆土中から図示した土器が潰れた状態で出土した。

3点を図示したが、接合しなかった破片も含め同一個体とみられる。1は口縁部から胴部中位、2は胴部中位、3は胴部中位から下半の部位である。口縁部は僅かに内湾し、端部を調整し、より強い稜が内縁にできる部分と外縁にできる部分がある。外面は無節R/Lの結束縄文を横帯施文する。繊維の混入は多く、白色の微細な鉱物粒子も多く含む。

#### SK-084 (第98図、図版75)

Z22-29付近に位置する。北東が調査区境界にかかり、安全対策のため一部調査することができなかつた。北東側に隣接する胸形遺跡では残りの部分が検出されていないため、調査できたのは遺構全体の50%程度とみられる。現状から直径2.60mの円形の平面形が想定でき、確認面からの深さは0.20mを測る。底面は凹凸があるが堅緻である。底面北西寄りにピットが1基あり、直径0.22m、床面からの深さ0.59mを測る。

覆土中から僅かに土器片が出土しており1点を図示した。口縁部下のくびれ部から胴部にかかる部位の破片で、くびれ部に半截竹管を用いた平行沈線を複数段巡らす。胴部は単節RL/LRの縄文を施し、現存部で菱形の効果を出している。また、施文変換点で僅かに粘土が盛り上がる。繊維の混入は少ない。

#### SK-085・SK-086 (第99図、図版20・75)

Z22-28付近に位置する。遺構確認時には判然としなかったが、2基の土坑が重複していた。底面の高さはほとんど変わらないが、SK-086の底面にある火床部が壊されずに残っていることから、(旧)SK-085→(新)SK-086という新旧関係が確認できる。

SK-085は楕円形で、規模は2.60m×1.95mである。底面中央と北西寄りに2基のピットがある。P1は直径0.26m、床面からの深さ0.10m、P2は直径0.20m、床面からの深さ0.17mを測る。

SK-086は円形で、規模は1.64m×1.32mである。底面の0.50m×0.40mの範囲に焼土の堆積を伴う被熱痕跡がある。遺構の形状から早期条痕文期に伴う炉穴とは異なるとみられ、周辺も含めて条痕文系土器は出土していない。

出土遺物は少ないが、位置の記録はなく一括で取り上げたものである。当初1基の遺構として調査を開始したため、遺物の帰属は不明である。

1は細く鋭い沈線で斜格子文を描く。2は単節LRの縄文を施す。ともに繊維の混入は中程度である。

図示しなかった細片も含め、黒浜式に比定できる。

#### SK-087 (第99図、図版20・75)

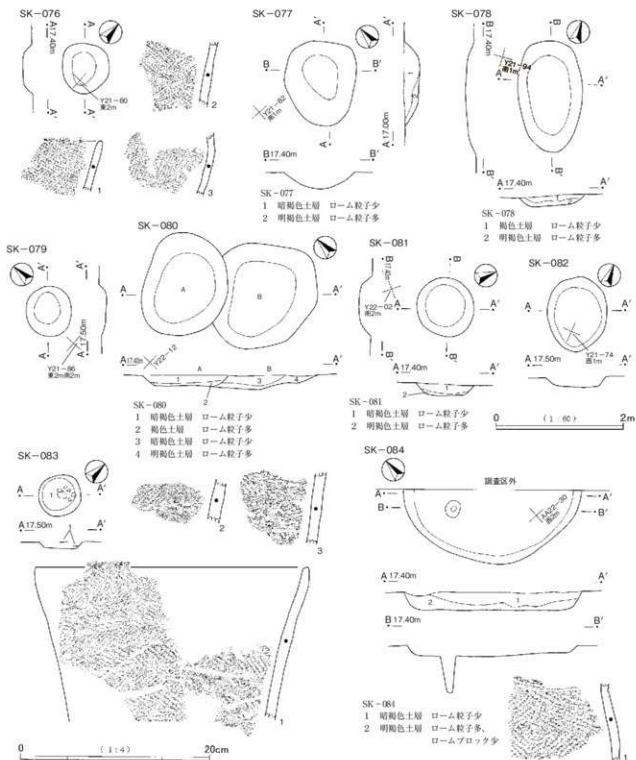
Z21-95付近に位置する。平面形は2.71m×1.62mの楕円形で、確認面からの深さは0.43mを測る。覆土中から僅かに土器および石器類が出土している。

1は複合口縁で口縁部を肥厚させ、断面は三角形となる。肥厚部から胴部にかけて無節R/Lの結束縄文を施し、口縁端部にも同一原体で施文する。繊維の混入は多い。2・3は胴部破片で、2は単節RLの縄文、3はハイガイを用いた貝殻背圧痕文を施す。繊維の混入は少ない。いずれも花積下層式に比定できる。石鏃1点(第108図31)と剥片類5点を出土した。

#### 4 その他の遺構

##### SX-001 (第100図、図版20・30・75)

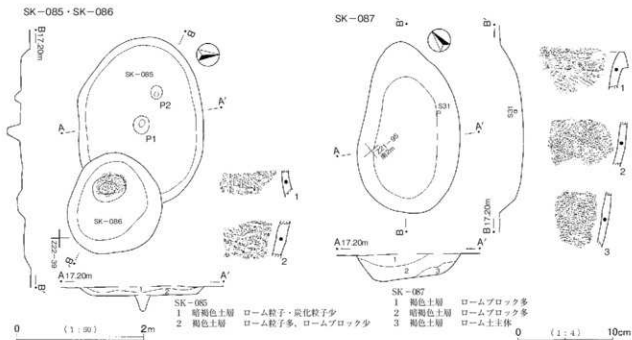
X22-59付近に位置する。明確な掘り込みを伴わず、60点ほどの土器片が0.44m×0.40mの範囲に集中



第98図 C地区縄文時代土坑(4)

して出土した。ほとんどの土器片は外面または内面を上に向けた状態で、特に並べられたような痕跡は確認できなかった。2個体が確認でき、混在するが、1はどちらかという集中域内の北寄りに多い。層厚は0.06mほどしかなく、個体ごとの上下分離はできず、重なる順番にも規則性はない。

1は推定口径28.8cm、現存高17.5cmを測る深鉢形土器である。口縁端部は内面から調整して尖頭状とし、内面端部から5cmほどを横方向に調整する。外面は無節しの縄文を全面に施すが、胴部は条を縦方向に走



第99図 C地区縄文時代土坑（5）

らせる。繊維の混入は中程度である。

2は底径8.80cm、現存高20.0cmを測り、図上復元である。器面は凹凸が目立ち、粗い無節Lの縄文を一方方向に施す。底部外面にも同一原体で施文し、縄文は僅かに窪む中心部分にのみ残っている。繊維の混入は多い。

3・4は胴部破片で、上部に無節Lの縄文、下部に附加条2種R+R2本の縄文を施す。1と同一個体の可能性が高く、胴部の多くを無節Lの縄文で覆い、下半部に附加条縄文を施すものとみられる。繊維の混入は中程度である。

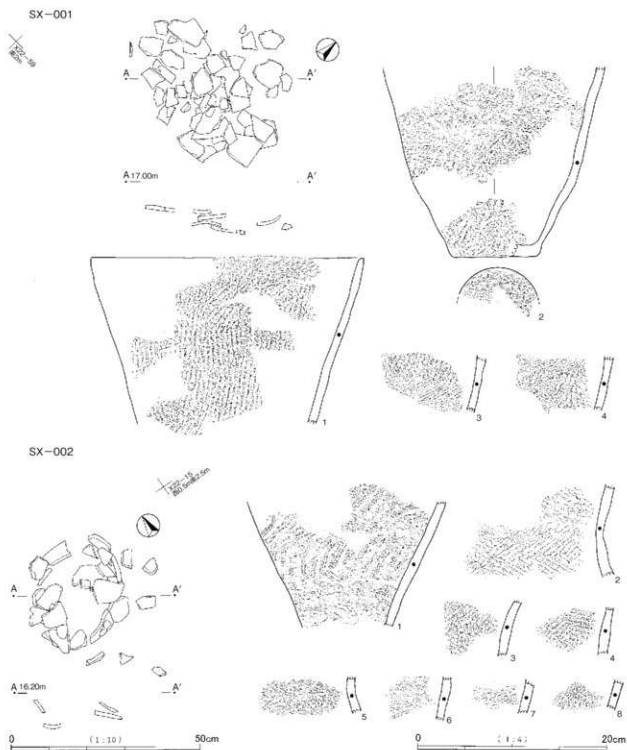
出土した土器は最低2個体で、1と3・4が別個体であったとしても3個体である。1と2は施文原体も異なるが、胎土および内面の調整は酷似しており、同時に製作した可能性がある。黒浜式期に比定できる。

SX-002（第100図、図版20・30・75）

X22-14付近に位置する。SX-001同様に明確な掘り込みを伴わず、40点ほどの土器片が0.36m×0.32mの範囲に集中して出土した。土器片四角のように楕円形に配置され、周辺部の土器片は外面を外に向けて地面に差し込んだ状態である。1・6～8と2～5の2個体とみられるが、両者の胎土・内面の調整は酷似しており、出土位置は混在している。同一個体である可能性も皆無ではないが、別個体として報告する。

1・6～8は胴部下半を中心とした破片である。1はかなり底部に近いもので全周する。外面は凹凸が目立ち、軸は不明だがR2本を附加した縄文を施す。胴部下端にはR/Rの結束縄文を施す。現存部分の内面は胴部下端に至るまで横方向に粗く磨いている。繊維の混入は中程度である。

2～5は口縁部下のくびれ部を中心とした破片で、2・5に緩やかな屈曲がみられる。外面は無節RLの縄文を施し、くびれ部は意図的ではないが施文されない。また、4は菱形の効果を出している。内面は横方向に調整し、繊維の混入は多い。



第100図 SX-001、SX-002

SX-003 (第101・102図)

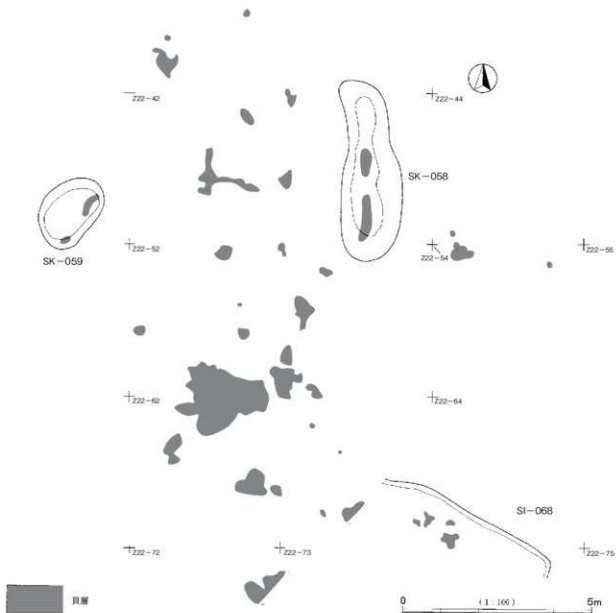
C地区ではSI-065・SI-068・SI-072・SK-058・SK-059で遺構内貝層が検出された。富士見遺跡C地区東端は駒形遺跡E区と合わせて縄文時代前期初頭および中葉の環状集落の一部で、駒形遺跡E区においてもSI-051・SK-069・S-K078で遺構内貝層が検出されている。

SX-003としたのはZ22で検出された貝層で、環状集落の弧上にある。大小32のブロックに分かれてお



第101図 C地区貝層分布





第102図 SX-003

り、一部土壌化した部分もあると思われる。この中から比較的状态のよい地点3か所でサンプル採取をした。サンプル1・3はブロックの全量採取である。貝類の同定結果は第4表に示した。マガキが主体となりハイガイを含む点は同じ地区に位置するSI-065・SK-059と類似した傾向を示す。

なお、出土遺物については、C地区遺構外出土の土器と合わせて報告する。

#### 第4表 貝類同定結果

SI-001 貝層コラムサンプル  
9.52mm&40mmメッシュ分選標本

種名	サンプル番号								合計							
	A		B		C		D		MNI <sup>1)</sup>	重量 (g)						
	MNI <sup>1)</sup>	重量 (g)	MNI <sup>1)</sup>	重量 (g)	MNI <sup>1)</sup>	重量 (g)	MNI <sup>1)</sup>	重量 (g)								
ウミナシ					12	6.6	0.3%	8	1.4	0.1%	8.0	0.1%				
ウミナシ科								1	0.3	0.0%	1	0.3	0.0%			
ヘナタリガイ					1	0.4	0.0%	2	0.9	0.1%	3	1.3	0.0%			
フトヘナタリガイ			1	0.4	0.0%	1	0.6	0.0%	1	0.6	0.1%	3	1.6	0.0%		
アカニシ								1	11.0	1.0%	1	11.0	0.2%			
アラムシロガイ			1	0.3	0.0%	1	0.1	0.0%			2	0.4	0.0%			
サルボウ	0	1.0	0.1%	2	11.4	0.6%	10	39.8	1.8%	1	8.3	0.7%	13	60.5	1.0%	
マガキ	1	2.5	0.2%	5	61.9	3.4%	38	463.4	20.9%	4	43.0	3.8%	48	570.8	9.3%	
シオフキ	1	3.2	0.3%	2	4.3	0.2%	10	20.4	0.9%	7	17.3	1.5%	20	45.2	0.7%	
マテガイ					0	0.1	0.0%				0	0.1	0.0%			
アサリ	1	0.6	0.1%	11	32.5	1.8%	74	291.4	13.2%	109	419.9	37.3%	195	744.4	12.1%	
オキシジミ				1	4.2	0.2%	3	15.9	0.7%	15	78.9	7.0%	19	99.0	1.6%	
ハマグリ	274	960.9	96.1%	379	1644.6	91.5%	377	1328.3	60.0%	146	515.5	45.8%	1176	4449.3	72.5%	
オオノガイ					0	3.3	0.1%	1	23.0	2.0%	1	26.3	0.4%	1	26.3	0.4%
貝殻破片 種不明	/	31.9	3.2%	/	37.6	2.1%	/	43.2	2.0%	/	4.7	0.4%	/	117.4	1.9%	
合計	27	1000.1	100%	402	1797.2	100%	527	2213.5	100%	296	1124.8	100%	1482	6135.6	100.0%	
微小貝類 <sup>2)</sup>		*		**		**		**								

SI-018 貝層一括サンプル  
9.52mm&40mmメッシュ分選標本

種名	MNI <sup>1)</sup>	重量 (g)	
ウミナシ	3	1.9	0.2%
アカニシ	0	0.9	0.1%
アラムシロガイ	2	0.2	0.0%
サルボウ	5	11.3	1.4%
ナミマガシロガイ	2	12.0	1.5%
シオフキ	3	7.3	0.9%
アサリ	3	4.2	0.5%
オキシジミ	45	201.8	24.4%
ハマグリ	191	545.3	66.0%
貝殻破片 種不明	/	41.3	5.0%
合計	254	826.2	100.0%
微小貝類 <sup>2)</sup>		*	

SI-065 コラムサンプル  
9.52mm&40mmメッシュ分選標本

種名	サンプル深度				合計				
	0-5cm		5-10cm		MNI <sup>1)</sup>	重量 (g)			
	MNI <sup>1)</sup>	重量 (g)	MNI <sup>1)</sup>	重量 (g)					
ウミナシ	8	4.1	0.1%	0	2.2	0.1%	8	6.3	0.1%
アカニシ	2	172.6	5.4%	1	7.3	0.3%	3	179.9	3.4%
ハイガイ	70	600.9	18.7%	28	308.3	14.7%	98	909.2	17.1%
マガキ	223	1430.7	44.5%	43	951.1	45.2%	266	2381.8	44.8%
シオフキ	1	7.6	0.2%	—	—	—	1	7.6	0.1%
マテガイ	23	29.4	0.9%	8	0.8	0.0%	31	30.2	0.6%
ウネナシトマヤガイ	7	0.6	0.0%	1	0.8	0.0%	8	1.4	0.0%
アサリ	0	0.5	0.0%	6	0.8	0.0%	6	1.3	0.0%
オキシジミ	23	152.4	4.7%	6	67.4	3.2%	29	219.8	4.1%
ハマグリ	76	792.7	24.7%	22	686.6	32.6%	98	1479.3	27.8%
貝殻破片 種不明	/	22.1	0.7%	/	78.8	3.7%	/	100.9	1.9%
合計	433	3213.6	100%	115	2104.1	100%	548	5317.7	100.0%
微小貝類 <sup>2)</sup>		***		***		***			

1) MNI (最小個体数) : 二枚貝類は左殻-右殻の順度の多い方を表記

2) \* 1-5点, \*\* 6-10点, \*\*\* 11点以上

## 9.52mm&amp;40mmメッシュ分選標準

## SI-008 目録1一括サンプル

	ウレニナ型		マガギ型		サルボウガイ型		シオフネガイ型		アサリ型	
	最高	左	右	左	右	左	右	左	右	
試料数	1	1	1	2	1	2	1	5	0	
平均	1426	46	3963	2676	304	2625	3869	22336	24111	
標準偏差				399		1484		777	598	
最小	1426	46	3963	2594	304	1776	3869	1717	2014	
最大	1426	46	3963	3158	304	3074	3869	3598	3589	

	ハマグリ型		オキシジミ型	
	左	右	左	右
試料数	30	30	1	0
平均	3373	3298	3185	
標準偏差	484	531		
最小	2095	2165	3185	0
最大	4927	4959	3185	0

## SI-041 目録一括サンプル

	ウレニナ型		ツメタガイ		ナミマガシワ型		マガギ型		アサリ型		ハマグリ型	
	最高	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	
試料数	3	1	1	2		48	47	3	1	2	3	
平均	1882	3224	3193			3163	2819	2315	291	3858	4013	
標準偏差	470		915			776	653	075		687	278	
最小	1344	3224	4348			1836	1626	223	291	3372	3692	
最大	2219	3224	3842			3077	3031	237	291	4343	4177	

	オキシジミ型		オキシジミ型	
	左	右	左	右
試料数	10	8	1	0
平均	3452	3456	3185	
標準偏差	267	405		
最小	2811	28	3185	0
最大	3818	4119	3185	0

## SI-048 目録一括サンプル

	ウレニナ型		サルボウガイ型		ナミマガシワ型		マガギ型		シオフネガイ型		アサリ型	
	最高	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	
試料数	1	96	76	1		33	29	1	1	15	7	
平均	1542	3545	3669	2992		3411	2819	4181		2234	2108	
標準偏差		496	517			1528	1309			567	954	
最小	1542	24	254	2992		1738	159	4181		1346	771	
最大	1542	5218	4983	2992		8248	7295	4181		3299	3751	

	ハマグリ型		オキシジミ型	
	左	右	左	右
試料数	16	11	11	0
平均	2892	2766	3646	3495
標準偏差	536	707	3	142
最小	2078	1584	3085	3101
最大	4366	411	4102	3631

## SI-053 目録一括サンプル

	ウレニナ型		サルボウガイ型		シオフネガイ型		アサリ型		ハマグリ型	
	最高	左	右	左	右	左	右	左	右	
試料数	1	4	3		1	2	1	2	3	
平均	1707	2795	2487		4292	2948	1511	3077	2562	
標準偏差		566	641			3048		529	390	
最小	1707	2237	3079		4292	15	1511	2703	2109	
最大	1707	3313	3225		4292	4396	1511	3451	3188	

## SI-056 目録一括サンプル

	サルボウガイ型		ハマグリ型	
	左	右	左	右
試料数	1	1	15	21
平均	3659	3617	3558	3436
標準偏差			669	54
最小	3659	3617	2495	252
最大	3659	3617	4663	4629

## SI-072 目録一括サンプル

	アサリ型		ハマグリ型	
	左	右	左	右
試料数	6	6	12	7
平均	1921	1969	3067	3596
標準偏差	197	276	1152	1083
最小	1653	165	1792	2313
最大	2234	2274	3074	5139

## SI-080 目録一括サンプル

	アサリ型		ハマグリ型	
	左	右	左	右
試料数	1			1
平均	2033			3042
標準偏差				
最小	2033			3042
最大	2033			3042

SK-058 目録一括サンプル

	アホニシ 殻高	ハイザイ殻長		マガキ殻長		ハマグリ殻長		オキシジミ殻長	
		左	右	左	右	左	右	左	右
試料数	3	53	68	19	13	2	1	1	1
平均	49.75	31.99	31.77	49.17	38.33	43.74	55.81	38.86	37.39
標準偏差	0.07	5.94	5.93	17.16	17.31	11.89			
最小	49.70	23.17	18.97	12.69	12.6	35.33	55.81	38.86	37.39
最大	49.80	47.15	44.7	83.83	66.92	52.15	55.81	38.86	37.39

SK-059 目録一括サンプル

	ハイザイ殻長		マガキ殻長		ハマグリ殻長	
	左	右	左	右	左	右
試料数	8	9	89	62	2	2
平均	35.05	32.96	36.29	32.28	29.81	28.63
標準偏差	5.85	5.42	7.41	8.6	2.09	0.46
最小	29.84	27.36	21.57	19.06	28.33	28.3
最大	43.36	44.95	62.32	69.27	31.28	28.95

SK-003 目録一括サンプル

No.1	ウミエナ 殻高	アホニシ 殻高	ハイザイ殻長		マガキ殻長		ハマグリ殻長		オキシジミ殻長		ウネナシトマガキ	
			左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
試料数				3	3	1	1	1				
平均				35.64	64.62	30.03	39.91	47.67				38.21
標準偏差				4.21	9.12							
最小				32.84	54.71	30.03	39.91	47.67				38.21
最大				40.48	72.66	30.03	39.91	47.67				38.21

No.2	ウミエナ 殻高	アホニシ 殻高	ハイザイ殻長		マガキ殻長		ハマグリ殻長		オキシジミ殻長		ウネナシトマガキ	
			左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
試料数	3	13	6	21	21	3	1	3	3			
平均	77.01	32.48	30.8	45.3	43.72	32.28	61.63	39.56	37.62			
標準偏差	9.06	4.44	7.33	19.28	14.53	18.21		2.1	8.81			
最小	66.56	21.6	19.95	24.29	21.28	28.11	61.63	37.67	28.82			
最大	82.7	39.9	39.07	82.7	83.34	60.29	61.63	41.91	46.43			

No.3	ウミエナ 殻高	アホニシ 殻高	ハイザイ殻長		マガキ殻長		ハマグリ殻長		オキシジミ殻長		ウネナシトマガキ	
			左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
試料数	1	1	28	14	29	38	7	2			1	
平均	18.38	51.92	37.33	33.26	44.84	36.68	50.78	56.36			14.43	
標準偏差			6.21	4.92	13.81	11.41	4.14	5.9				
最小	18.38	51.92	29.7	25.73	29.12	15.51	43.36	52.18			14.43	
最大	18.38	51.92	37.39	44.17	75.09	72.83	55.15	60.53			14.43	

## 第5表 魚類遺存体同定結果

SI-065 コラムサンプル

種名	特定部位	サンプル種類							
		メッシュ寸法 (mm)							
		0-5cm		5-10cm					
タイ科	臼歯状歯	9/32	4.0	2.0	1.0	9/32	4.0	2.0	1.0
				6	7			6	8

## 5 遺構外出土縄文土器 (第103~106図、図版30・75~79)

### 第1群土器

#### 3類 (1~7)

早期条痕文系土器を一括してある。

1は鶴ガ島台式に比定できるもので、微隆起線文で区画文を描き、要所に円形竹管刺突文を施す。区画内はナデの部分と竹管刺突を充填する区画に分けられる。口縁端部は平坦で幅広く調整され、内外縁それぞれに刻みを施す。内面は横方向の擦痕である。

2~7は広義の条痕文系土器である。2は口縁部破片で、口縁端部を押圧により刻んでいる。2・3は内外面とも貝殻条痕が施される。4~7は底部で、7は上げ底気味の平底となる。4は内外面に、7は内面に貝殻条痕を施す。また、6は貝殻背圧痕が施される。繊維の混入は2・6・7が多く、ほかは少なめである。

### 第2群土器

#### 1類 (8~119)

前期初頭の花積下層式を一括してある。口縁部の施文、特徴的な施文のある部位を先に、続けて縄文のみの施文の破片を報告する。図示したほとんどのものがZ22から出土しており、貝層の分布範囲(第101図)と重なるものである。

8~15は複合口縁で口縁部を肥厚させ、肥厚部に集合沈線を施すものである。基本的には8~12に示した鋸歯状の集合沈線となるが、13・15は矢羽根状に、14は斜位に施し、さらに14は同一工具による刺突文を充填する部分がある。また、12は燃糸側面圧痕で鋸歯状文を区画している。口縁は8が大きな波状となり、波頂部に合わせて肥厚部に縦位の稜を形成する。9は緩やかな波状となり、円形文を配置する。8~11は肥厚部下にさらに1条の隆帯を巡らす。肥厚部と隆帯の間は集合沈線または同一工具による刺突文を充填する。胴部は8・9・11・14に縄文施文がみられ、8・11が0段多条単節LR、9・14は0段多条単節RLである。また、12・13・15は燃糸側面圧痕がみられ、15は渦巻き状のモチーフを描く。繊維の混入は中程度から多く、9・11・12は脆弱である。

16~35は複合口縁で口縁部を肥厚させ、肥厚部に縄文系の施文を行うものである。16は波状となる口縁で、波頂部から縦位に隆帯を垂下させる。隆帯両側に集合沈線と、左側のみ刺突文を加える。肥厚部はかなり細い網目状燃糸文を施し、部分的に刺突文を追加する。17の口縁部はあまり厚みをもたないが、燃糸側面圧痕で区画し、円形竹管刺突文を充填する。胴部は単節RLの縄文を施す。繊維の混入は16が少なく、17は多い。

18・19は大きな波状となる口縁で、波頂部にルーローの三角形のような粘土板を乗せる。また、波頂部から縦位の隆帯を垂下させる。肥厚部と粘土板上部は同一原体による縄文を施し、18は無節L、19は単節RLを用いる。胴部の文様は不明であるが、18には僅かに燃糸側面圧痕が観察できる。繊維の混入は多い。

20・21は肥厚部に縦位の隆帯を付するもので、21は緩い波頂部から垂下する。20は3本以上の隆帯が付され、隆帯に挟まれた部分に隆帯に沿って刺突を施す。肥厚部は20が無節R、21は無節Lの縄文を施す。繊維の混入は多い。

22~27・29~32は21までのものと比較して、肥厚部が器面に貼り付くように薄いものである。口縁部は大きく外反し、端部は尖頭状に取める。また、23・26は口縁端部を刻む。25は肥厚部下にもう1条隆帯を

巡らし、32は連続刺突文を巡らすが、肥厚部に集合沈線を施すものと比較して、肥厚部とそれ以下の施文区分が薄れている。施文は22・23・25～27が単節RL/LRの縄文を横帯施文し、29は単節RL、24・32は無節R/Lの縄文を施す。30・31は肥厚部にも燃糸側面圧痕を施し、31は波状口縁となる。30は肥厚部に刺突文がみられないが、胴部上半を含め基本的に燃糸側面圧痕でモチーフを描き、刺突文を充填する。32は縦位に円形竹管刺突文を連続して施す。内面はいずれも横方向に調整され、25は磨かれて平滑である。繊維の混入は多い。

34・35も肥厚部が器面に貼り付くように薄いものであるが、肥厚部には縄文に代わりハイガイを用いた貝殻腹縁文を施す。胴部は34が同じく貝殻腹縁文であるが、35は0段多条単節RLの縄文を施す。口縁部はともに尖頭状に仕上げ、内面は横方向に調整する。繊維の混入は多い。

28・33は口縁端部のみを肥厚させる。同一個体の可能性が高く、単位は不明であるが口縁端部に四字形となる貼り付けがある。口縁端部は1.7cm程度の幅に広がり、中央が窪む。外面は無節R/Lの縄文を施し、口縁端部および内面に約3cm幅で同一原体による縄文を施す。繊維の混入は中程度であるが、脆弱である。

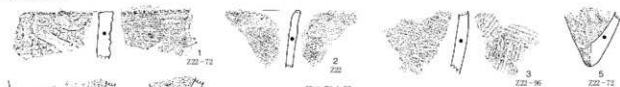
36～42は複合口縁ではなく、隆帯を巡らすことにより口縁部を区画するものである。36～38は口縁部先端を内傾させ、隆帯を貼りつけることにより肥厚感を出す。口縁端部は丸く収め、外面は胴部も含め単節LR/RLの縄文を施すが、隆帯上には施文されない。39・40は外反する口縁に隆帯を付し、肥厚感はない。口縁端部は39が尖頭状に収め、40も欠損するが同様の形状と思われる。隆帯上に施文はなく、口縁部および隆帯下に向きを開くC字状の刺突文を施す。現存部分だけでは明言できないが、刺突文は菌歯状もしくは波状に並ぶようである。なお、39は胴部に無節Lの縄文を施す。41・42は口縁部の形状が不明であるが、41は外反しており肥厚感はない。41は2条の隆帯を巡らせ、隆帯間および口縁部に刺突文を施す。また、口縁部には燃糸側面圧痕で渦巻き状のモチーフを描き、隆帯頂部および胴部は単節LRの縄文を施す。42は隆帯上に施文はなく、胴部に無節R/Lの縄文を施す。繊維の混入はいずれも中程度で、36～38は脆弱である。

43～53は口縁部の形状は不明だが、燃糸側面圧痕でモチーフを描くものである。43～45・47・48・50にみられるように、頂部を刻んだ細い隆帯の区画内に燃糸側面圧痕でモチーフを描き、その間に刺突文を充填する。また、49は円形竹管刺突文を加える。50～53は文様帯以下に縄文が施される例である。胴部上半から口縁部にかけての文様帯と胴部中位以下の縄文施文部は一応区画されるといった程度で、51・52は刺突列を巡らすのが、53には特にない。胴部の縄文は50が0段多条単節RL、51が0段多条単節RL/LR、52は無節R/Lで、52はRとLの太さが極端に異なる。繊維の混入は少なく、43～48は白色の鉱物粒子および雲母粒子も含んでいる。

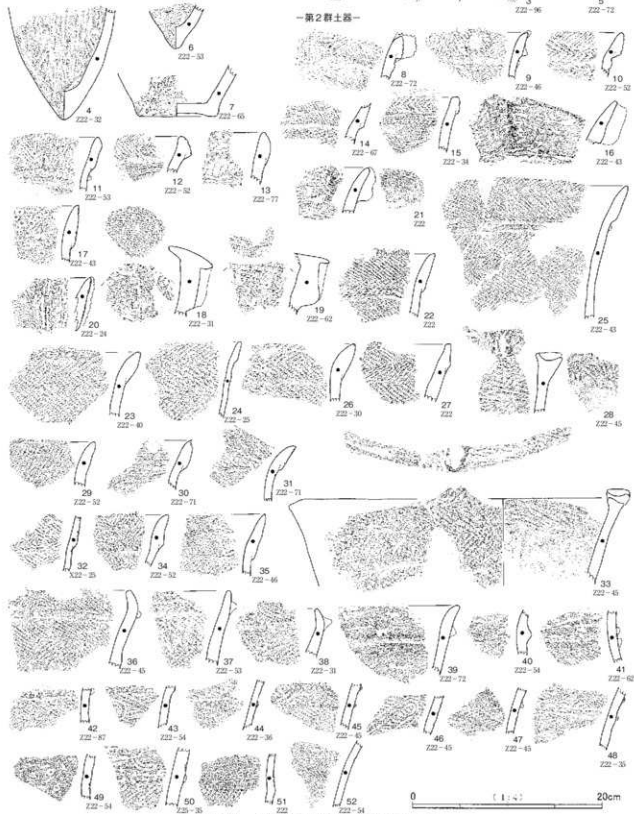
54・55は文様帯に網目状燃糸文を用いるもので、胴部は54が0段多条単節LR、55は単節LR/RLの縄文を施す。繊維の混入は少ない。

56～93は縄文のみの施文のものである。個体によっては関山式・黒浜式と分離が難しいものもある。56は胴部の30%が遺存しており、現存部推定最大径32.0cm、現存高19.4cmを測る。口縁部は外反し、胴部上部が膨らむ。口縁部と胴部は隆帯により区分し、口縁部・胴部とも原体端部を縛りとめた原体末端線が付く無節LRの結束縄文を横帯施文する。隆帯は上向きに貼り付け、隆帯頂部と口縁部器面の間にハイガイを用いて貝殻腹縁文を施す。部分的に口縁部側に背が当たり、貝殻圧痕がみられるが、腹縁文も含めて装飾的效果を狙ったものではなく、隆帯貼り付け後の調整としての意味合いが強いものとみられる。繊維

—第1群土器—



—第2群土器—



第103图 C地区遺構外出土縄文土器(1)

0 1:4 20cm

の混入は多く、内面は凹凸が目立つ。

57・58は口縁部破片である。57は口縁端部を調整するが不規則に波打ち、端部を丸く収める。58は内面から調整し、口縁端部を尖頭状とする。外面は57が無節R/Rの結束縄文で、原体端部を縛りとめた原体末端線も残る。58は単節RL/LRの縄文で、口縁端部内面にも施文する。繊維の混入は多い。

59～87は胴部破片である。大きな屈曲のある破片はなく、62・68・71・73は内湾することから胴部中位、67は胴部下半とみられる。外面は59～77が単節もしくは0段多条単節RL/LRの縄文を横帯施文する。59～61・68・69・77は原体端部を縛りとめた原体末端線も残る。なお、65の破片上半は縄文施文であるが、下半はハイガイを用いた貝殻背圧痕文となる。また、78は単節RL/無節Rの結束縄文、79～87は無節Lの縄文を横帯施文する。82は環付末端無節L/Rの結束縄文を用い、80・81・83・85は原体端部を縛りとめた原体末端線が残る。繊維の混入は全体に多く、また厚手である。

88～93は底部破片である。胴部破片と同様に単節RL/LR、もしくは無節R/Lを横帯施文するようで、88～90・92は底部外面にも同一原体で施文する。91も縄文施文であるが、胴部下端に僅かにハイガイを用いた貝殻背圧痕文を施し、底部外面は貝殻背圧痕のみの施文である。底部外面は僅かに窪むものが多く、底部に施文のない93は平坦である。繊維の混入は多い。

94～118は器面全面にハイガイを用いた貝殻背圧痕文を施すものである。

94は口径14.1cm、現存高13.2cmを測る小型の深鉢形土器である。口縁部は端部を丸く収めるが、小さく波打つ。外面は斜位に連続して貝殻背圧痕を施し、胴部下位は縦方向に向きを変えている。押圧幅は1cm前後で、その間に5本の放射筋が確認できる。繊維の混入は中程度である。

95～105は口縁部破片で、105を除き直立ないし僅かに外傾する。口縁端部は不規則に波打つが、基本的に丸く収め、98が平坦に調整する。また、99・101・102は端部が僅かに外方へ反る。なお、99は口縁端部に貝殻条痕文を施す。外面はいずれも凹凸が目立ち、ハイガイを用いた貝殻背圧痕文で覆われ、104は内面にも施文する。施文は殻頂部を左に向けるものがほとんどで、右利きの人物による施文であることがわかる。しかし、104・105・116など例外的に殻頂部を右に向けるものがあり、左利きの可能性を示唆する。施文方向は96・112のように縦方向に連続して押圧することが基本で、横方向に連続して押圧するのは105の口縁部など限られた部位となる。なお、底部に近い107・117は殻頂部を下に向け、縦方向に連続して押圧している。繊維の混入は中程度から多い。

118は底部破片で、推定底径9.0cmを測る。底部は僅かに窪み、胴部・底部外面とも貝殻背圧痕文を施す。繊維の混入は多い。

119は無文の口縁部破片である。口縁端部は丸く収め、外面は横方向の調整痕が確認できる。繊維の混入は多い。

### 3類 (120～124)

岡山式土器を一括した。出土点数は少なく、5点を図示した。

120・121は半截竹管を用いた平行沈線で曲線文を描く。121は口縁部にコンパス文を巡らし、地文は120が単節LR、121は異節LRの縄文である。内面は平滑で、繊維の混入は中程度である。122～124は縄文のみが施されるもので、口縁に沿って地文とは区別して縄文帯を巡らす。122・123は脚短の環付末端縄文を122が3段、123は2段施す。地文は122が0段多条単節LR、123が異条L・Lの縄文を施す。124は異節LRの縄文を巡らし、地文は異条RL・Rを施す。なお、124は波状口縁となり、波頂部下に推定直径4cm





程度の円形の窓が開く。繊維の混入は中程度から少なめである。岡山Ⅱ式に比定できる。

#### 4類 (125～186)

黒浜式土器を一括した。

125～127は口縁部に刷毛状沈線を施すものである。125は刷毛状沈線の下に脚部の環付末端縄文を4段施し、古い様相を残している。126は緩やかな波状口縁となり、刷毛状沈線の下に4条の結節沈線を巡らし、地文に附加条2種R+L2本/L+R2本の縄文を施す。127は刷毛状沈線の下に単節RLの縄文のみを施文する。繊維の混入は中程度で、125・126の内面は平滑に調整される。

128～130は同一個体で、口縁部に半截竹管を用いた平行沈線で、鋸歯状文を描く。口縁端部は外方へ開き、端部を丸く収める。繊維の混入は少なく、大粒の白色鉱物を含む。下吉井式あるいは花積下層式の可能性も考えられる。

131～133は連続爪形文で曲線的なモチーフを描く。131は口縁部破片で、口縁端部は平坦に整える。また、132には隆帯様の貼り付けと円形竹管刺突文を配する。いずれも地文はなく、内面は平滑に調整される。繊維の混入は中程度である。

134・135は刺突文が施されるもので、134は縦方向の調整の上に不規則な刺突を、135は0段多条単節RL/単節LRの地文に円形竹管刺突文を横に並べる。ともに繊維の混入は中程度である。

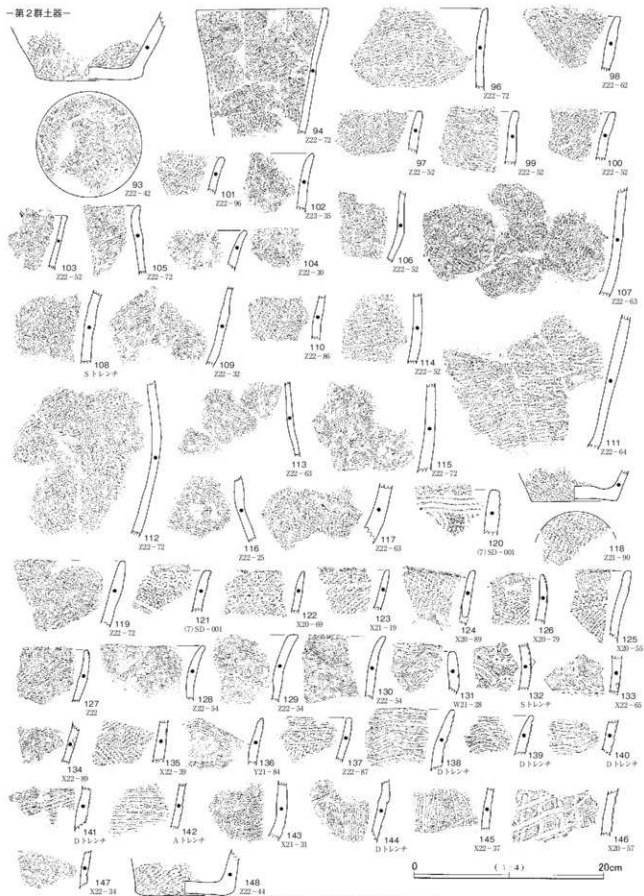
136・137は口縁部に半截竹管を用いた平行沈線を巡らせる。136は山形の波状口縁となり、無文帯を挟んで附加条2種R+R2本の縄文を、137は地文に単節LRの縄文を施す。口縁端部は136が丸く、137は平坦に調整する。繊維の混入は少ない。

138～143は半截竹管を用いた平行沈線で波状文を描く。138・139は口縁部破片で、口縁端部を平坦に整える。143を除き地文はなく、繊維の混入は中程度である。143は波状文というよりはコンパス文とした方が適当で、施文は浅いが現存部分に3条のコンパス文が認められる。地文は摺糸文Rで、繊維の混入は中程度である。

144～148は斜格子文または縦位沈線が施される。146は半截竹管を用いるが、ほかは単沈線で、144・147は細く鋭い。また、144はかぶせた粘土の痕跡が明瞭で、斜格子文を後から施文する。148は底部で、底径10.4cmを測る。花積下層式かとも考えたが、幅8cmの範囲だけに縦位沈線を施すことから、黒浜式に含めた。胴部は下端まで無節Lの縄文を施す。繊維の混入は148が多いが、ほかは中程度である。

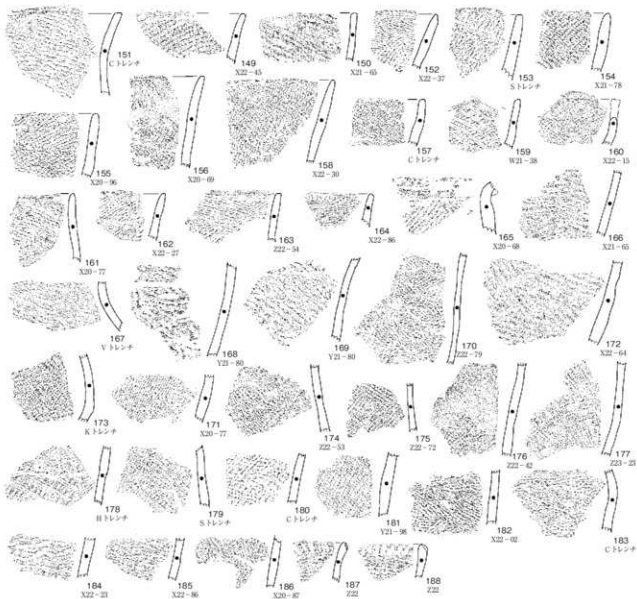
149～186は縄文のみの施文のものである。このうち149～164は口縁部破片で、159・160は緩やかな山形の波状口縁となる。口縁端部は149・152～154・156～160・164が丸く収め、150・151・155・161～163は平坦に整える。151は口縁部下で緩くくびれる。外面は149・153が無節L、150・151が無節R、152は無節R/Lの縄文で、施文変換点に粘土が細くはみ出る。また、156・157は単節LR、154は単節RL/LRを横帯施文、155は単節RLを横帯施文する。158は附加条2種R+R2本/附加条1種R+L1本、159は附加条2種L+R2本/R+L2本、160は附加条2種R+R2本/L+L2本、161～164は軸が不明であるが、161がL2本、162がR2本、163がR2本/L2本を附加する。164は附加条3種である。繊維の混入はいずれも中程度である。165～186は胴部破片である。165は口縁部下のくびれ部で、くびれ部に隆帯を巡らす。胴部は0段多条単節RLの縄文を施す。167・174・175・179は内傾していることからくびれ部下の胴部上位、173・183は湾曲しており、胴部中位とみられる。また、169・173・176・178はかぶせた粘土の痕跡が明瞭に残る。施文は166～172が無節の縄文で、166～169・172が無節R、170は無節R/L、171は無節Lで、

—第2群土器—



第105図 C地区遺構外出土縄文土器(3)

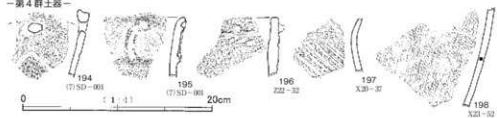
—第2群土器—



—第3群土器—



—第4群土器—



—第5群土器—



0 20cm (1:4)

第106図 C地区遺構外出土縄文土器(4)

168は施文変換点に細く粘土がはみ出る。173～177は単節の縄文で、いずれも単節RL/LRを施す。178～185は附加条の縄文で、178・180が附加条2種L+L2本/R+R2本、179が附加条2種RL+R2本、181はR+R3本、182・183は軸が不明であるがR2本/L2本を附加する。また、184・185は附加条3種、186はLRLの束の回転である。内面は171・173・174・177・183・186が平滑に調整され、171・174は縦方向の調整、177は縦方向の磨きである。繊維の混入は168・169が多いが、ほかは中程度である。

#### 5類 (187・188)

前期後半の土器を一括した。

図示したのは2点で、ともに口縁部破片である。口縁部を深く刻み、以下に貝殻腹縁押引文を施す。

#### 第3群土器 (189～193)

縄文時代中期の土器を一括してある。189・190は阿玉台式で、細いキャタピラ文を付す。189には雲母粒子、長石粒子を多く含む。

191～193は加曾利E式で、胴部に隆起線文により曲線的モチーフを描き、地文に単節RLの縄文を施す。

#### 第4群土器 (194～196)

縄文時代後期の土器を一括してある。194・195は後期初頭の土器で、ともに口縁部の破片である。194は孔が貫通する把手を付し、胴部には沈線による意匠文を描き、単節RLの縄文を充填する。195は隆帯で区画して口縁部に無文帯を巡らし、C字状の隆帯を貼りつける。胴部は単節RLの縄文を施す。194は称名寺式に比定でき、195も同時期の網取I式の影響を受けたものである。

196～198は加曾利B式土器である。196は口縁部に紐状隆帯を巡らし、内面に2条の凹線をもつ。197は胴部中位に沈線区画の無文帯を巡らし、縄文地文の上に浅い斜位の沈線を、198は単節RLの縄文を施す。内面はいずれも平滑に調整され、196は丁寧に磨かれている。

#### 第5群土器 (197)

I点だけであるが、縄文時代晩期の土器を図示した。197は口縁部が内傾し、端部が肥厚するもので安行Ⅲ式に伴う粗製土器である。

#### 第4節 その他の遺物

ここでは、土製品・石製品類、貝刃、石器類などの土器以外の出土遺物についてまとめて報告する。遺構内出土のものについては、それぞれの項において出土した旨を記している。

##### 1 土製品・石製品類（第107図、図版80、第6表）

###### 土製円板（1～24）

1～23は土器片の周囲を打ち欠いて円形にしたものである。一部破損品もあるが打ち欠いたままで周囲をほとんど調整していないものが多い。13・15～17・22は周囲を擦って形を整えている。摩耗して施文が明らかでないものもあるが、いずれも黒浜式に比定できる土器片を素材としていると思われる。SI-026からは5点出土し、もっともまとまっていた。1は単節RLの縄文を施し、繊維を混入する土器片を利用する。7は連続爪形文、2～4には附加条縄文が観察できる。20は図示した左側が口縁部で、口縁に刷毛目状沈線が施されている。23は長石粒子・雲母粒子を多く含んだ土器片である。

24は土器片の利用ではなく、粘土を円板状に成形したものである。

###### 土器片鉢（25～28）

土器片鉢は4点出土した。

25は黒浜式の土器片を素材としている。26は溝状遺構出土で、長石粒子・雲母粒子を多く含む阿玉台式の土器片を利用したものである。27・28は遺構外出土でともに方形の土器片鉢である。27は加曾利E式の土器片、28は単節RLの縄文を施し、白色の鉱物粒子及び微細な雲母粒を多く含んだ土器片を利用し、27と同様中期の土器片鉢とみられる。

###### 珧状耳飾・垂飾品（29～35）

珧状耳飾には土製と石製のものがある。垂飾品はいずれも破損した石製珧状耳飾の再加工品である。

29～31は土製珧状耳飾である。29はSI-067から出土し、半分近くを欠損している。欠損部に摩耗がみられ、欠損後も廃棄されずにいたと思われる。全面に赤彩が施されていたようで、すべての面に僅かな痕跡が残っている。胎土に繊維は含まれない。30は溝状遺構の覆土に含まれていた。表面は丁寧なナデしており、縦長の形状と推察できる。胎土に繊維は含まれない。31は遺構外出土品でやはり欠損している。側面に焼成前に加工された円錐形の孔がある。貫通していない。

32～35は石製品である。

32・35は石製珧状耳飾である。32はSI-010の覆土中から出土した完形品である。滑石製で39mm×30mmの横長の楕円形である。切れ目の両脇をはじめところどころに細かい傷がある。35は遺構外出土の珧状耳飾である。50%を欠損するが、断面形は半月状の厚みのある製品で、材質はやはり滑石である。

33・34はSI-069、SI-079から出土した垂飾品で、破損した厚みのある珧状耳飾を再加工したものである。

###### 玉類（36～40）

36～40は玉類である。

36はSI-009の床面直上から出土したもので、半分を欠損するが、外形は円形になるとみられる。幅・厚さ・高さが均一ではなく、一部が細く薄くなる。37・38はともに滑石製でSI-051、SI-056から出土した。37は片面が平坦で、孔の浅い部分に同心円状の僅かな凹凸がみられる。38は片側が極端に薄く、孔も偏っている。39はSK-016から出土した。黒色の蛇紋岩製で50%を欠損する。全体形が不明だが、現状で

は真円に近く、孔も同様である。両端は平坦で、全体によく磨かれている。40は滑石製で遺構外出土品である。形状は正円ではなく、孔も外形に合わせて僅かに縦長となる。

#### 軽石製品 (41~43)

41はSI-044の南東隅P8付近から出土した軽石製品である。平坦な面に把手様の突起が付いた形状で、把手様の部分に線刻文様がある。平坦な部分は長軸方向に対して緩やかな湾曲があり、対象物を擦った結果とみられる。把手様の部分の側面は断面図にみるように中央が窪み、その形状は左右で異なる。断面からもわかるように、図左側がより大きくくびれており、把手様の頂部に人差し指をのせ、左側の窪みに親指を、右側の窪みに中指をあてがうとフィット感がある。中央部が窪み、浮子としての用途が想定できる製品は、同じ縄文時代前期の柏市鴻ノ巣遺跡、我孫子市柴崎遺跡から出土しているが、本例はヤスリとしての用途をもった製品と考えられる。同様の製品はSI-048でも出土している。

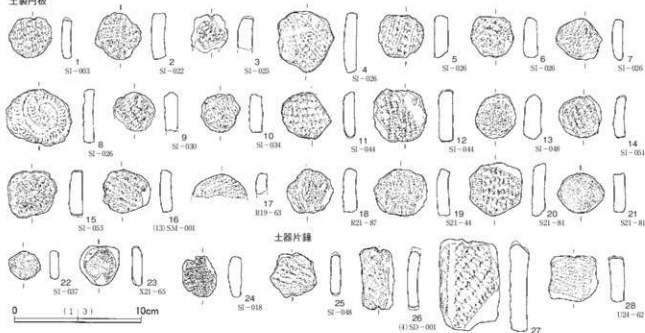
42は41と同様の軽石製品である。平坦面の上に把手様の突起が付く形状で、把手様の部分は両面に山形入組文のような線刻文様がある。平坦部と把手様部分の間は緩くくびれ、断面図からわかるように左右でくびれ方が異なっている。図の左側面はくびれ部上方が2.5cm×1.4cmの楕円形の範囲で緩く窪み、右側面は長さ2.4cm程度のゆるい窪みが上下2か所に分かれている。把手様の部分を親指と人差し指の間に挟み、左側面上方に親指を、右側面上方に人差し指を、下方に中指を当てることによりフィット感が得られる。平坦な部分は長軸方向に対して緩く湾曲し、対象物を擦ったかのようなものである。平坦な部分は現状が本来の形を残しているとは考えにくい、その幅は4cmでSI-044の出土品と同一であるばかりでなく、形状もほとんど一致する。本品は平坦部分の欠失が多いが、長さもほぼ同じであったと推定できる。

43も軽石製で、断面図右面が平坦である。図右下に孔があるが、貫通していない。

#### 2 貝刃 (44)

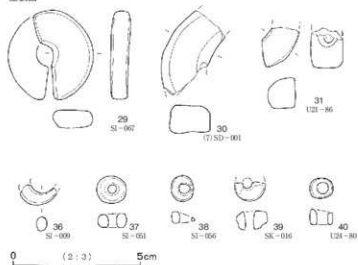
貝刃が1点出土している。44はSI-001の貝層サンプル中から出土したチョウセンハマグリの左殻を用いた貝刃で、現存最大長5.50cm、現存最大幅6.05cmを測る。

土製円板

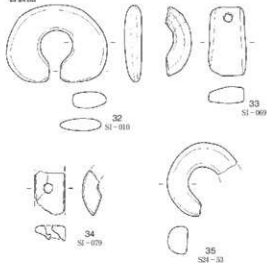


土器片鏢

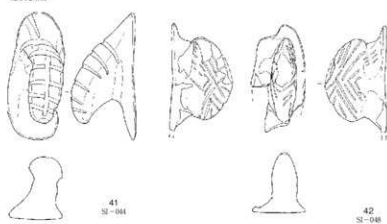
土製品



石製品



軽石製品



貝刃



第107図 土製品・石製品類、貝刃



第6表 土製品・石製品類計測表 (第107図, 図版80)

破損部分は遺存値

番号	遺構番号	種類	材質	長径cm	短径cm	厚cm	孔径mm	重量g	備考
1	SI-003	円板	土製	3.40	3.20	0.80		7.90	前期
2	SI-022	円板	土製	3.75	3.60	1.10		9.03	前期
3	SI-025	円板	土製	3.00	2.90	1.15		10.03	前期
4	SI-026	円板	土製	4.40	4.30	0.95		20.46	前期
5	SI-026	円板	土製	3.60	3.35	1.10		13.79	前期
6	SI-026	円板	土製	3.35	3.30	1.10		12.17	前期
7	SI-026	円板	土製	3.65	3.25	0.85		10.13	前期
8	SI-026	円板	土製	5.20	4.50	0.85		18.11	前期
9	SI-030	円板	土製	3.30	3.05	1.05		9.85	前期
10	SI-034	円板	土製	3.00	3.00	1.05		10.02	前期
11	SI-044	円板	土製	3.90	3.70	0.90		10.97	前期
12	SI-044	円板	土製	4.20	4.20	1.10		19.85	前期
13	SI-048	円板	土製	3.50	3.15	1.40		18.11	前期
14	SI-051	円板	土製	3.30	3.40	1.00		9.20	前期
15	SI-053	円板	土製	3.85	3.70	1.10		15.82	前期
16	(13)SM-001	円板	土製	3.70	3.45	0.85		12.26	前期
17	R19-63	円板	土製	4.30	1.90	0.90		6.19	前期
18	R21-87	円板	土製	3.65	3.35	1.05		12.87	前期
19	S21-44	円板	土製	4.20	3.70	0.05		14.68	前期
20	S21-81	円板	土製	4.25	4.05	1.00		20.91	前期
21	S21-81	円板	土製	3.70	3.15	0.90		10.35	前期
22	SI-037	円板	土製	2.45	2.30	0.70		4.43	前期
23	X21-65	円板	土製	3.10	3.10	0.80		8.30	中期
24	SI-018	円板	土製	2.45	2.30	0.80		13.52	前期
25	SI-048	土器片錘	土製	3.70	3.50	0.75		9.74	前期
26	(4)SD-001	土器片錘	土製	4.90	2.70	0.80		14.43	中期 (阿玉台)
27	U23-92	土器片錘	土製	7.20	4.78	1.50		67.55	中期
28	U24-62	土器片錘	土製	3.60	3.90	1.20		21.07	中期
29	SI-067	珠状耳飾	土製	3.50	1.20	0.70		6.06	
30	(7)SD-001	珠状耳飾	土製	3.40	1.80	1.10		7.75	
31	U21-86	垂飾品	土製	1.79	1.20	1.10		2.55	
32	SI-010	珠状耳飾	滑石	3.09	4.03	7.20		12.03	
33	SI-069	垂飾品	蛇紋岩	2.70	1.50	7.00	3.5×4.5	5.21	
34	SI-079	垂飾品	不明	1.79	1.23	6.40	1.8×3.8	1.92	
35	S24-53	珠状耳飾	滑石	2.90	2.80	11.10		8.75	
36	SI-009	玉	滑石	1.45	0.81	0.53		0.53	
37	SI-051	玉	滑石	1.12	1.70	0.58	3.5	1.15	
38	SI-056	玉	滑石	1.00	0.91	0.49	4.5×4.0	0.48	
39	SK-016	玉	蛇紋岩	1.20	0.45	0.69	4.0	0.73	
40	U24-80	玉	滑石	0.91	0.83	0.61	4.8	0.61	
41	SI-044	軽石製品	軽石	10.00	4.45	5.10		20.13	線刻
42	SI-048	軽石製品	軽石	8.40	4.90	4.40		14.17	線刻
43	SI-044	軽石製品	軽石	7.20	6.40	5.50		30.31	

### 3 石器 (第108~121図、図版81~89、第7~9表)

縄文時代の石器は合計1,352点 (遺構内792点、遺構外560点) 出土した。このうち礫や剥片に二次加工が施された狭義の石器 (利器) は574点で、残りの778点は、剥片類 (剥片・砕片・削片)・石核、軽石類である。

以上の石器の出土数量と内訳については、遺構と器種の関係を第7表に、石材と器種の対応関係を第8表にそれぞれ示したので、適宜、参照されたい。

#### (1) 石鏃 (1~90)

遺構内から33点、遺構外から27点、合計60点出土した。基部の袈りに深浅の差はあるものの、すべて凹基無茎鏃である。有茎鏃等の特殊な形態はない。

大きさは完形品で、長さ1.2cm~2.9cm、幅0.5cm~2.0cm、厚さ0.2cm~0.6cm、重量0.1g~1.7gの範囲にあり、平均値は長さ1.9cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重量は0.7gとなっている。

ちなみに鈴木道之助によれば、縄文時代前期には、基部の袈りの深い凹基無茎鏃が主体を占め、長さは1cm~3cm、重量は0.5g~2.0gに集中するというが、この見解とよく調和する (鈴木1983)。なお、14・17・27・34・47については加工が粗雑であり未成品の可能性を秘めている。

遺存状況については、完形品が36点、欠損品24点となり欠損率は約40%である。通常に比べ欠損率が低い。欠損部位は先端2点、片脚12点、先端+片脚8点、両脚1点、先端+基部1点となっている。石鏃などの刺突具特有の衝撃剥離 (先端部の使用痕) については縦溝状剥離が2例 (29・36) みられた。

石材はチャート48点、黒曜石7点、ガラス質黒色安山岩3点、頁岩1点、メノウ1点で構成される。主要な石材であるチャートは小円礫であり、後述するように両極打法によって素材が生産されている。北関東系の石材を主体としており、これに良質半透明な信州系黒曜石が加わる。

調整技術については周辺加工 (45) もみられるが、他はいずれも両面加工を基本としており、押圧剥離により平坦な器面と直線的な二側縁が作出されている。

一方、石鏃の未成品が遺構内から26点、遺構外から24点出土した。中には楔形石器を素材とした例が9点 (62・65・68~72・76・89) ある。素材生産のあり方を探る上で特筆される。

大きさの平均は長さ2.5cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm、重量3.1gであり、いずれの値も石鏃を上回っている。石材の内訳は、チャート39点、ホルンフェルス4点、黒色頁岩2点、流紋岩2点、黒曜石・珪質頁岩・頁岩各1点となり、チャート主体の構成は、石鏃等の剥片石器や楔形石器の石材傾向によく合致する。

#### (2) 楔形石器 (91~114)・両極剥片・削片

楔形石器はピエス・エスキューとも呼ばれる。遺構内から68点、遺構外から47点出土した。

扁平な小礫を素材としており、上下両端に打撃による潰れが生じている。107・108及び113は極めて薄手であり、石鏃の未成品とみなすことも可能である。両面ないしは片面に礫面をとどめ、かつ薄手であることから、大半が扁平な小円礫を素材としていたことがわかる。

石材はチャート91点、ガラス質黒色安山岩6点、珪質頁岩5点、頁岩4点、黒色頁岩2点、砂岩2点、石英・粘板岩・流紋岩・ホルンフェルス・メノウ各1点で構成される。チャート偏重の傾向は石鏃と同様である。

長さは1.0cm~5.8cm、幅0.9cm~5.0cm、厚さ0.3cm~2.2cm、重量は0.4g~77.9gの範囲にあり、平均値はそれぞれ2.6cm、2.2cm、0.9cm、7.7gとなっている。

第7表 縄文時代石器遺構別器種組成表

器種 遺構	石 鏃	石 槌 土 成 品	磨 石 器	石 匙	石 鏃	石 槌 土 成 品	一 次 加 工 未 心 削 片	他 種 加 工 未 心 削 片	打 磨 石 片	磨 石 片	局 部 加 工 未 心 削 片	磨 石 類	磨 石	手 持 心 砥 石	石 鏃	磨 石 遺 構 總 數	石 槌	削 片	河 曲 削 片	削 片 類	磨 石 類	合 計	原 石
SI-001	1															2						3	
SI-002	1															5						6	
SI-003									1							2						3	
SI-004															1							1	
SI-006													1			2						4	
SI-007	1												1							1		2	
SI-008													1			1						2	
SI-009													1									1	
SI-010	1				1				3		1	1				4	6				3	20	
SI-011																1						1	
SI-012	1												1			1	1					4	
SI-014										1												1	
SI-015																2						2	
SI-017	1																					1	
SI-018																6						6	
SI-019									2							1						3	
SI-020																1						1	
SI-021	1	1	3						1		1				1	1			4			13	
SI-022	1	1	3										1					4	4			14	
SI-023		1																				1	
SI-024	2	3	6						1		1				1			6				22	
SI-025	1	1	3						15		3	1	1	1	1	5		3	9			43	
SI-026				1				1								2				1		5	
SI-027								1														1	
SI-030			3							2						6			1	1		13	
SI-031			1							1										1		3	
SI-033										1						1						2	
SI-036															1						2	3	
SI-037			1										1			3						5	
SI-038													1						3	1		5	
SI-041										5		1	1			1						8	
SI-042									1	1						4			1			7	
SI-043		3	11				1		1	1	1	1	5	2		2			2	21		36	
SI-044													1									2	3
SI-045																1						1	
SI-046													2		1							3	
SI-047																1						1	
SI-048			1							1	6		1			4	1			2	1	17	
SI-049				1							1					1	3					6	
SI-050													1		1	1						3	
SI-051									1				1			1				1		4	
SI-052													1			1						2	
SI-053																1						1	
SI-056				1										1								3	
SI-057										1		1										2	
SI-058			1	1						6		1	1			1	1			2		14	1
SI-061	1																					1	
SI-062										1											2	3	
SI-064	1		8	1		3	1			2			2				1		2	12		33	
SI-065	2		1				1						1						2	4		11	
SI-066													1								1	3	
SI-067	4	4	11		1	3				1		4	1			2	1	1	6	190		229	2
SI-068																						1	
SI-069	9	1	1				2														50	63	
SI-070	3	7	13				2						1						3	65		94	
SI-072													1			4					1	6	
SI-073										1		3										4	
SI-078		1																				1	
SI-079	1	1	1																		7	10	
SI-080															1							2	
遺構内の土小計	32	26	68	5	2	3	13	0	5	56	1	29	18	3	23	68	2	1	37	379	6	777	3

器種・ 器種	石 器	石 器 未 成 品	磨 形 石 器	石 器	石 器	石 器 未 成 品	一 二 次 加工 品 の 片 断	使 用 痕 跡 の 片 断	打 削 石 片	磨 削 石 片	屈 曲 磨 削 石 片	磨 削 石 片	敲 石	手 持 石 器	石 器	掘 削 遺 物	石 珠	削 片	圓 形 削 片	削 片 類	群 石 類	合 計	原 石	
SK-001																1						1		
SK-012												1											1	
SK-013																				1			1	
SK-040																				1			1	
SK-043									1														1	
SK-059																				2			2	
SK-069																						1	1	
SK-070																						1	1	
SK-087	1																					5	6	
遺構内出土小計	1								1		1					1					11	15		
I13/SI-001	33	26	68	5	2	3	13	0	5	57	1	30	18	3	23	69	2	1	37	390	6	792		
I13/SX-002	1																				1	1		
O1/SK-001										2						2				1		5		
I5/SD-001	1									1	1								1			3		
I6/SD-002																					2	3		
I7/SD-001			1																		2	3		
I14/SD-001																					2	2		
I30/SD-001				1																		1		
I38/SD-001															1							1		
I4/SE-001											1											1		
Q19		1	3						1												3	8		
R19	1	4					1		2	1		1	2		1				1	13		27		
R21										1	2				1	1						1	6	
R22	1		1							1											8	11		
S19																1						1		
S20	2										1										1	4		
S21												2	1		1	3		1		2		10		
S22	1		2													1						4		
S23		1	1													1				6		11		
S24	1									2										3	1	5		
S25																					1	1		
T21																					1	1		
T22			1																			2		
T23			3							1											2	6		
T24				1						1	3				1						1	7		
T25	1								2		1	1		2	2							9		
U21										1												1		
U23			1																1			2		
U24	2										2					4					2	10		
U25									2													2		
V23																					1	1		
V24																						0		
V25																1						1		
W20	1									1												2		
W21										1								1	2			4		
W22	1															1					1	3		
X20																1				1	1	3		
X21										1	1				1							3		
X22										1					1							2		
X23																						0		
Y21		1																				3	4	
Y22			1																	1	3	5		
Y23										1												1		
Z21	3		3			1					1					1					7	16		
Z22	11	14	27			9	1	4	1		2	5		4	9	5		7	247			346		
Z23		2	1			2						2		1	1				1	5		15		
Z25			1																			1		
部A-6-10トレ										1	1					2						4		
表前採取		1																				1	2	
遺構内出土合計	27	24	47	1	0	13	1	11	18	0	21	9	0	10	36	7	1	14	319	1	560	0		
総計	60	50	115	6	2	3	26	1	16	75	1	51	27	3	33	105	9	2	51	709	7	1352	3	

第8表 縄文時代石器石材別器種組成表

器種 石材	石 礫	石 塊 未 成 品	楔 形 石 器	石 匙	石 鏃	石 鏃 未 成 品	二 次 加 工 あ る 剥 片	他 出 所 あ る 剥 片	打 石 片	磨 石 片	局 部 削 削 石 片	磨 石 類	磨 石	手 持 石 片	石 環	側 面 磨 理	石 核	削 片	両 面 削 片	剥 片 類	磨 石 類	合 計	原 石
チャート	48	39	91	2	1	2	15	1								2	5	2	43	522	773	1	
黒曜石	7	1	1	1	1	6											1				83	100	
頁岩	1	1	4			1	1									1			1	23	33		
ゴウス質黒色安山岩	3		6																		5	14	
成紋頁岩		2	1					1					5			38				4	20	57	
ホルンフェルス		4	1	1			1		9	1				1	1	1				1	7	28	
黒色頁岩		2	2																		1	6	
珪質頁岩		1	5	1			1													2	15	25	
石膏			1										1	1							1	4	
粘板岩			1													1						2	
花崗岩								1					1	1								3	
緑色岩								1	71				2	1							4	79	
砂岩			2					3					10	5	1		30			1		72	
緑色片岩									1													1	
安山岩									1				30	3		13	7				2	56	
玄武岩									1													1	
成紋頁岩凝灰岩													1	2	1	1	5	1				11	
多孔質安山岩													1			17						18	
珪質頁岩							1														2	3	
磨結凝灰岩													1									1	
閃緑岩													1	1								2	
砂質頁岩																	1					1	
アイサイト																	1					1	
石英質岩													6	4		1	12					23	
メノウ		1		1	1		1													1	20	25	
メジュール									1													1	
トトロ石																					2	2	
輝石																						7	
輝石													1								2	3	
合 計	60	50	115	6	2	3	26	1	16	75	1	51	27	3	33	106	9	2	51	709	7	1352	3

平面形は四辺形を基本とし、全長が幅の2倍を超えるものはない。分厚いものは少なく、扁平なものが多い。上下両端ないしは左右両端は階段状の小剥離痕が対をなし、側面は紡錘形を呈する。

以上の技術形態学的特徴から、楔形石器は両極打法の所産であることは確かであるが、機能については石核とする説、それ自体を利器とする説に二分されている。

これに対して、本遺跡の場合には、未成品のあり方から扁平なチャートの小円礫をもとに石礫の素材生産が行われたことは明白である。これらの小円礫は通常の方法では剥片生産が困難なため、両極打法が用いられたようである。そして、剥離の途上で生じた両極剥片・削片と最終的に残された扁平な石核（楔形石器）の双方が使われている。このように本遺跡に限っては石核か利器かという二者択一の問題ではない。

なお、関連資料として、楔形石器から剥離された両極剥片（51点）と削片（2点）が出土した。石材はチャートが約90%に達しており、これに流紋岩、頁岩、ホルンフェルス、砂岩及びメノウが加わる。

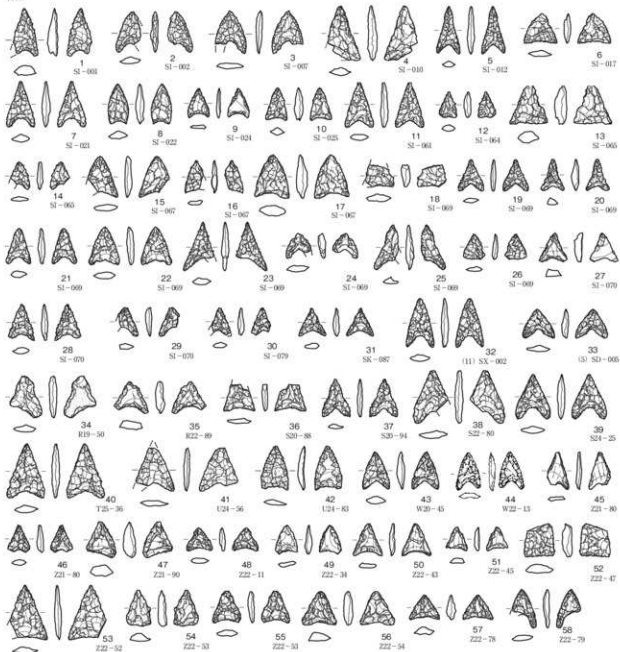
### （3）石匙（115～117）

遺構内から5点、遺構外から1点出土した。石匙は縄文時代草創期後半（爪形文期）に登場した後、早期末葉に一般化し前期に盛行するようであるが、本遺跡では少数にとどまる。

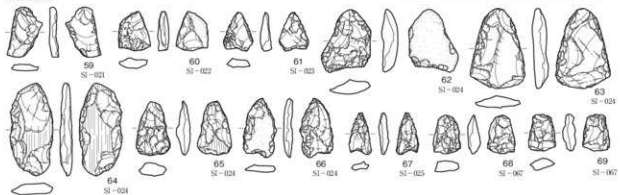
形態は縦型5点と横型1点となっている。いずれもつまみ状の小突起をもち、先端部は素材剥片の鋭利な縁辺をそのまま残している。石材はチャート2点、珪質頁岩・メノウ・ホルンフェルス・神津島産黒曜石各1点である。

115は唯一の横型である。珪質頁岩製の横長剥片を素材としている。二次加工により、つまみ部を作出

石鏃



石鏃未成品



第108図 縄文時代石器(1)



しているが、そのほかは第一次剥離面をとどめている。作業縁には使用痕とおぼしき微細で連続的な刃こぼれ、裏面（主要剥離面側）の上部には研磨面がみられる。116は、主要剥離面側にむかってやや内湾した横長剥片を素材としており左右の二側縁を加工している。ともに打角が90度に近く急角度である。下端部に鋭利な第一次剥離面を無加工のまま残し刃部としている。石材は神津島産の黒曜石である。117は、あたかも石刃のような細長い縦長剥片を素材としている。二次加工は部分的であり、上半部（つまみ部）の作出にとどまる。鋭利な刃部には連続的な刃こぼれが観察される。石材は良質な青灰色チャートである。

#### （4）石錐（118～121）

遺構内から完成品2点（SI-010、SI-067）と未成品3点（SI-064）が出土した。いずれも剥片素材でつまみ部を有している。未成品がSI-064に偏在しており、ここが製作跡であった可能性が高い。

完成品のうち118は先端部が欠損しており、石材は高原山産黒曜石を使用している。石錐の未成品（119～121）は先端部が作出途上である。119・120はチャート製、121は頁岩製である。

石錐は縄文時代前期に急増し、形態も出揃いひとつのピークをなすというが、本遺跡では、他の器種に比べ一段と零細である（矢島・前山1983）。

#### （5）二次加工ある剥片（122～128）・使用痕ある剥片

二次加工ある剥片とは二次加工が部分的であるため定形的な石器から除外されたものをいう。この中には何らかの器種の未成品が含まれている可能性が高い。

遺構の内外から各13点、計26点出土した。石材はチャート15点、黒曜石6点、頁岩・ホルンフェルス・珪質頁岩・硬質頁岩・メノウ各1点である。このうち124は、横長剥片を素材としており左側縁に部分的な加工がみられる。何らかの未成品の可能性もあるが定かではない。石材は白色の珪晶が特徴の神津島産黒曜石である。125は石鎌の一部の可能性のある信州系黒曜石製である。126は分厚い小型の横長剥片を素材として側縁部に二次加工が施されている。石材は珪質頁岩である。127は薄手の剥片の周縁に細かな二次加工が連続的にみられる。石材はチャートである。これらは、石鎌の未成品の可能性もある。128の素材は黒曜石製の厚手の剥片であり、その縁辺に急角度の二次加工が施されている。ガジリ（発掘用具による新たな損傷）により、器種の同定が不可能であったため便宜的に二次加工ある剥片とした。

使用痕ある剥片が遺構外から1点出土した。縁辺に連続的な刃こぼれが観察される。石材はチャートである。

#### （6）打製石斧（129～141）

遺構内から5点、遺構外から11点出土した。石材はホルンフェルス9点、砂岩3点、流紋岩・花崗岩・緑色岩・ノジュール（団塊）各1点であり、ホルンフェルスの多用が特徴的である。

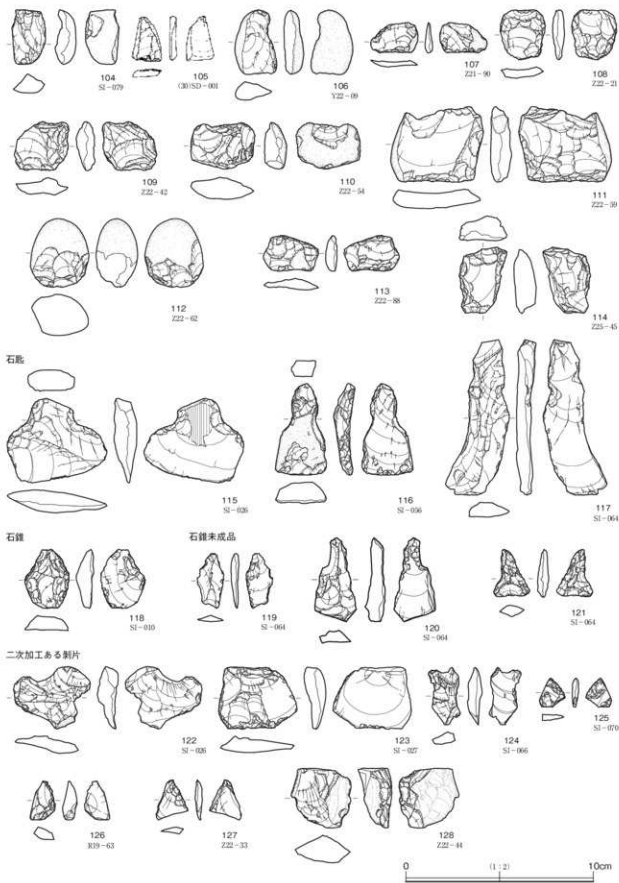
完形品の大きさの平均値は長さ7.2cm、幅5.4cm、厚さ2.1cm、重量125.1gとなっている。

剥片の中に石斧の調整段階を示すものがなく、未成品もないことから、基本的に完成品として遺跡内に搬入された模様である。

縄文時代の打製石斧の形態には、a 短冊形（長方形）、b 撥形（三味線の撥に似た形態のもの）、c 分銅形（上下両端が張り出し、中央部両側縁に挟りがあるもの）の三つの形態があり、短冊形は中期を中心に、撥形は前期に、分銅形は中期末から後期にかけて盛行する。

本遺跡では、短冊形（141）と撥形（132・135）のほか、扁平礫の一端に刃部を作出した礫石斧（131・134・137・138）、大型剥片素材の不定形石斧（129・136・140）、破片のため形態が不明なもの（130・





第110図 縄文時代石器 (3)

133・139)がある。

全体的に定形化しておらず、分銅形の欠落を含め、縄文時代前期の一般的な特徴を備えているものといえる。また、二次加工の範囲は二個縁と刃部に集中しており、素材の礫面や主要剥離面を大きく残している。

転用例は4例みられた。132は片面に研磨面が残されており、磨製石斧の転用例であることがわかる。寸詰まりの撥形を呈し、石材はホルンフェルスである。136と140は磨石類の断片を再利用しており、片面に礫面を大きく残している。140の刃部には全体にわたって顕著な損耗がみられる。141は両面加工で短冊形を呈する。石材が磨製石斧に多用される緑色岩であることから転用の可能性がある。

#### (7) 磨製石斧 (142~169)・局部磨製石斧 (170)

磨製石斧は、遺構内から57点、遺構外からは18点出土した。他の礫石器に比して遺構内出土の比率が高い。出土量は総計75点を数えるが、再加工に伴う調整剥片22点をはじめ、基部片、刃部片などの断片的な資料が多数みられた。

一般に縄文時代の磨製石斧は、形態から定角式磨製石斧、乳棒状磨製石斧及びその他の石斧に区分される。定角式磨製石斧は二個縁及び頭部が研磨されたもので断面は隅丸長方形である。これに対して乳棒状磨製石斧は、身が円筒状、頭部は細い棒状で断面が楕円形を呈する。

本遺跡でもこの分類基準を踏襲するが、形状の復元が可能な資料は、後述するように30個体程度にすぎない。このうち乳棒状磨製石斧は16点 (142~144・147・148・151・152・154~157・161・164~167)、定角式磨製石斧が2点 (163・168)、その他が9点 (145・146・149・150・153・158~160・162) となっている。また石材は乳棒状磨製石斧が緑色岩15点、緑色片岩1点、定角式磨製石斧がホルンフェルスと玄武岩各1点、その他が緑色岩8点・安山岩1点となっている。磨製石斧はホルンフェルスを主体とする打製石斧とは異なり比重が大きく、より丈夫な緑色岩を多用しているが、このことは両者の機能的差異をよくあらわしている。その一方で使用頻度の高さによりその多くは欠損しており、完形品は、わずか6点 (143・149・151・152・156・160) にすぎない。この中の143と151は寸詰まりの形状から再加工品の可能性が高い。

このほか再加工品としては148・164、打製石斧への転用例として先に記した141がある。

いずれの資料も刃部には、刃こぼれ、敲打痕、欠損などの損傷が認められるが、その中で152には刃部の表裏に線状痕がみられる。線状痕は刃部に対してやや斜めに交差しており、しかも両面にみられる。縦斧の機能を明確に示しており特筆される。

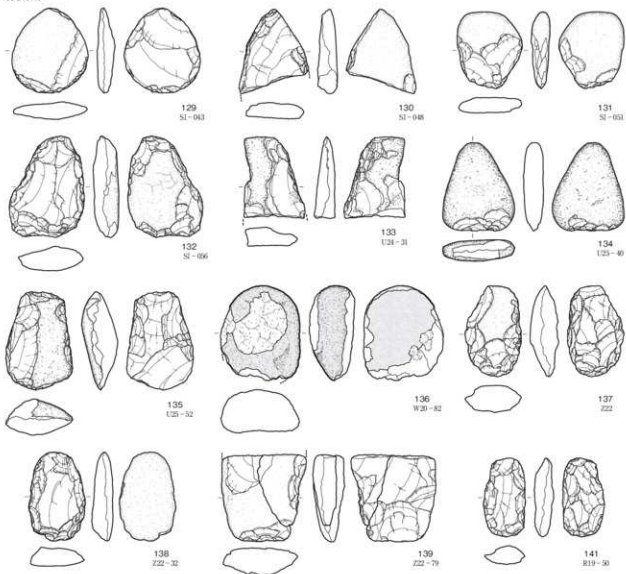
関東地方では、定角式石斧が後期、乳棒状磨製石斧は前期(黒浜期)から一般化するといわれているが、本遺跡でも磨製石斧の用材に乳棒状に関連の深い緑色岩が多用されておりこの趨勢によく適合する。

このほか関連資料として、局部磨製石斧が1点 (170) 出土した。平面形は撥形を呈する。大型剥片を素材とした二個縁加工で片面に礫面を大きく残している。刃部は鋭利な第一次剥離面であり、片面に研磨が施されている。石材には群馬県利根川方面の黒色頁岩が使われている。

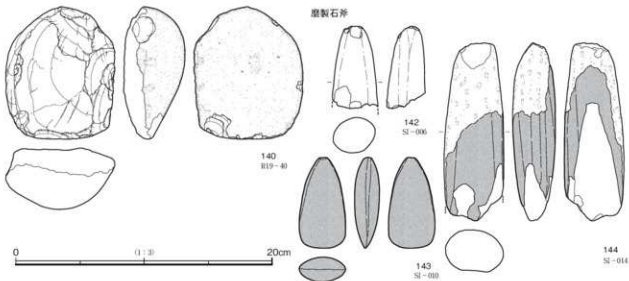
#### (8) 磨石類 (171~189)

磨耗痕のほか、敲打痕や凹み痕が認められるものを抽出した。遺構内から30点、遺構外から21点出土した。完形品の平均的な大きさは長さ9.2cm、幅7.1cm、厚さ4.6cm、重量は501.5gである。素材は拳大の円礫であり、形態は隅丸方形 (171・177・182・187)、楕円形 (172・173・175・176・178・180・181・183・185・186・188)、円形 (174・179・184) の3種に区分される。

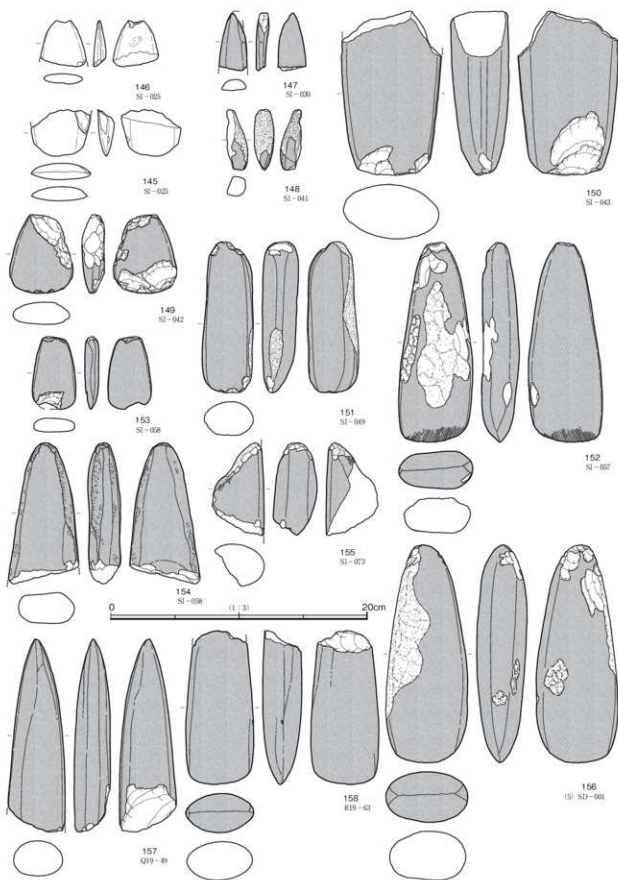
打製石斧



磨製石斧



第111图 縄文時代石器(4)



第112図 縄文時代石器（5）

石材は安山岩類（多孔質安山岩1点を含む）が60%（30点）を占め、セット関係にある石皿のそれに符合する。

さて磨石とされるものの多くは磨耗痕の他に敲石あるいは凹石とも捉えられる縁辺の敲打痕や敲打による凹み痕が存在する。また逆に敲打による凹み痕を目安にすると、本遺跡の凹石は全点磨耗痕を伴うため単一の器種と考えることはできない。したがって、ここでは磨石類として統合し、単に敲打痕のみ存在する器種を敲石として記述したい。以上のような器種分類がむしろ実情に即していると考えられる。

本遺跡の磨石類は、欠損資料を除けば、磨耗痕、敲打痕及び凹み痕の共存関係から以下のように分類される。

I類	器面に磨耗痕を残すもの（狭義の磨石）	6点
II類	器面に磨耗痕と凹み痕を残すもの	12点
III類	器面に磨耗痕と敲打痕を残すもの	12点
IV類	器面に磨耗痕、敲打痕、凹み痕を残すもの	2点

図示した中で、I類は174・176・181・182・184、II類は177・179・183・185・187・188、III類は171・186が相当する<sup>1)</sup>。

これらの数量比からもわかるように、狭義の磨石（I類）は僅少である。このことは取りも直さず、磨く、敲くという行為が連続的な作業として成立していたことを物語っている。

#### (9) 敲石（190～198）

磨耗痕や凹み痕がなく礫の一端ないしは両端に敲打痕が残存するものである。遺構内から18点、遺構外から9点出土した。うち乳棒状磨製石斧の欠損品の転用例1点（194）を含む。石材は流紋岩5点、砂岩5点、石英斑岩4点、安山岩3点、緑色岩2点、流紋岩質凝灰岩2点、溶結凝灰岩・閃緑斑岩・石英・ホルンフェルス・花崗岩・凝灰岩各1点となっている。特定の岩種にあまり偏らず、礫石器のなかでは比較的多様である。

#### (10) 手持ち砥石（199）

遺構内から計3点出土した。平面形はいずれも楕円形を呈しており、形態と大きさから手持ちの砥石と考えられる。石材は砂岩、流紋岩質凝灰岩、及びホルンフェルスが用いられている。

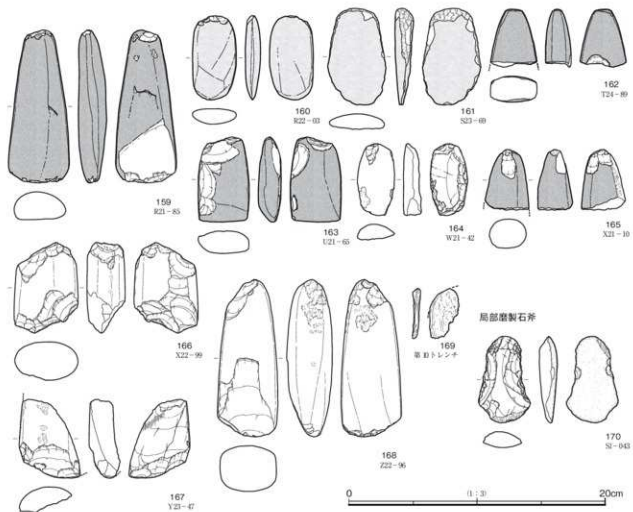
199は、小型扁平な礫を素材として、研磨により小判形に整形されている。石材はホルンフェルスである。全体的に赤く変色した被熱資料であり、部分的に黒色付着物もみられる。片面は大半が被熱後に表面が剥落している。側面に顕著な磨耗痕がみられ、表裏面とは稜をなして接している。

なお、本遺跡では置き砥石の存在がみとめられないため、石皿片の砥石への転用も検討したが、石皿片には明確な線状痕はみられず、その可能性は低いと言わざるを得ない。

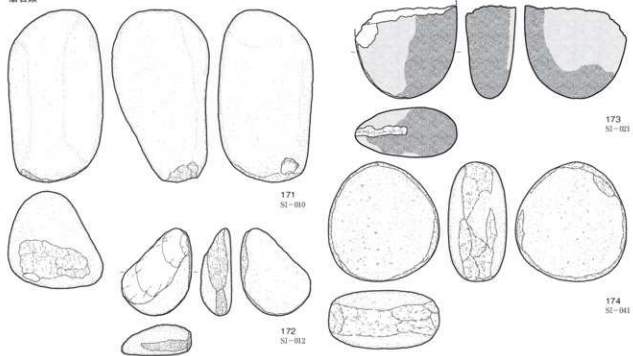
#### (11) 石皿（200～210）

石皿は、前期以降に一般化し、早期以前の石皿が「扁平な河原石を使用し、縁をもたず、磨面から縁辺まで変化に乏しい」のに対して、「前期中葉以後は円形・楕円形で三方に縁をもつ磨面の明瞭なものとなる。」という（鈴木1991）。

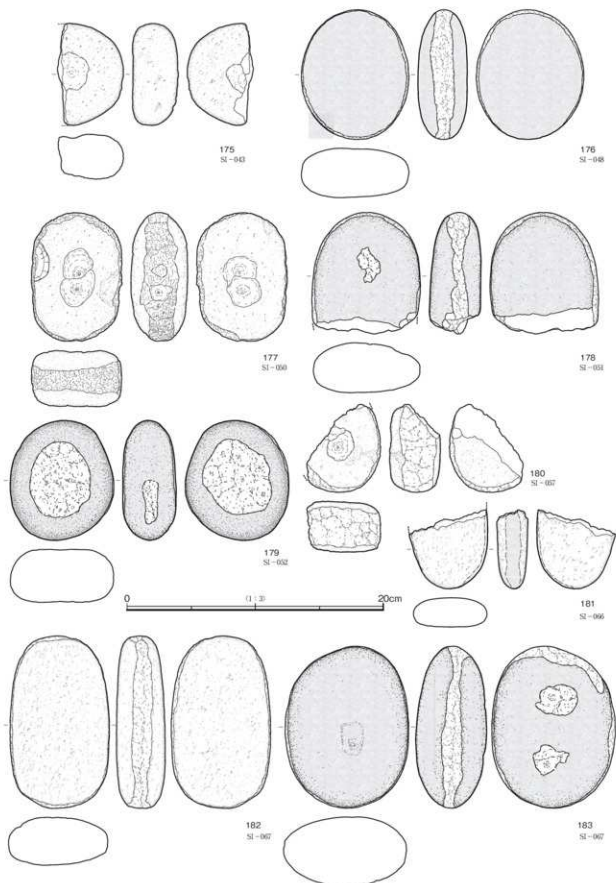
遺構内から23点、遺構外から10点出土した。互いに接合せず、残余の個体は搬出されたものと考えられる。いずれも原型をとどめておらず、全体の形状は明確ではないが、楕円形又は隅丸方形に近い形態が想



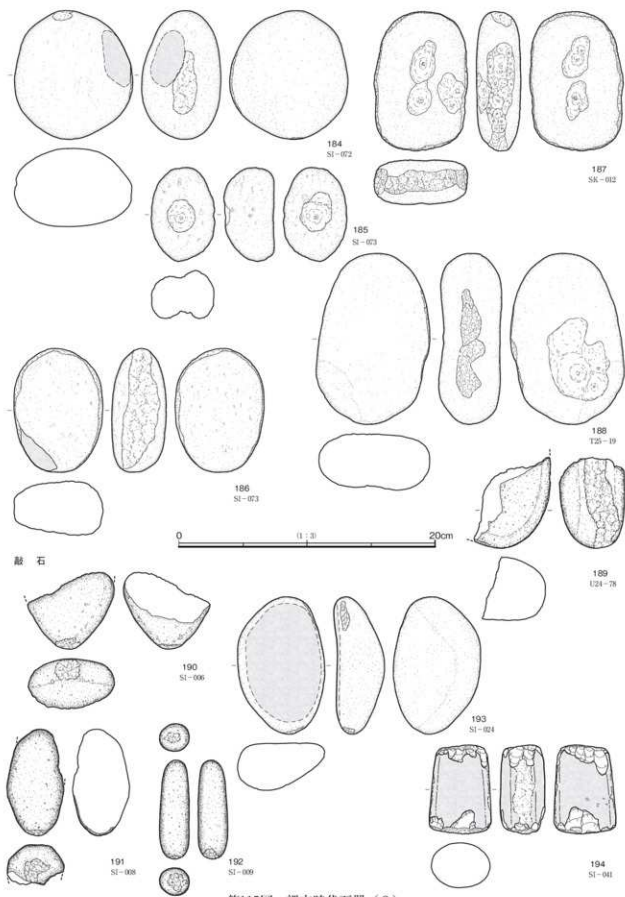
磨石類



第113図 縄文時代石器(6)

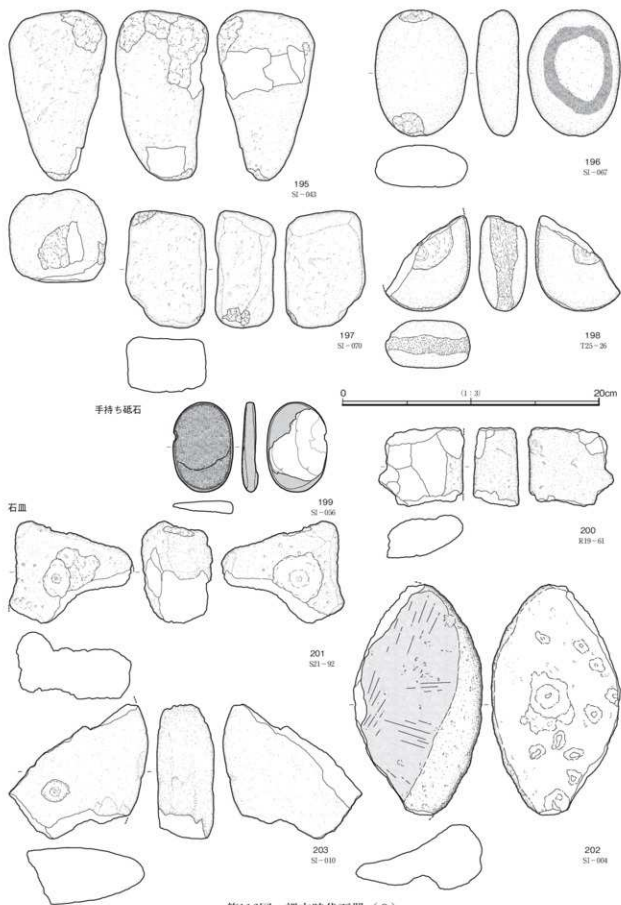


第114図 縄文時代石器（7）

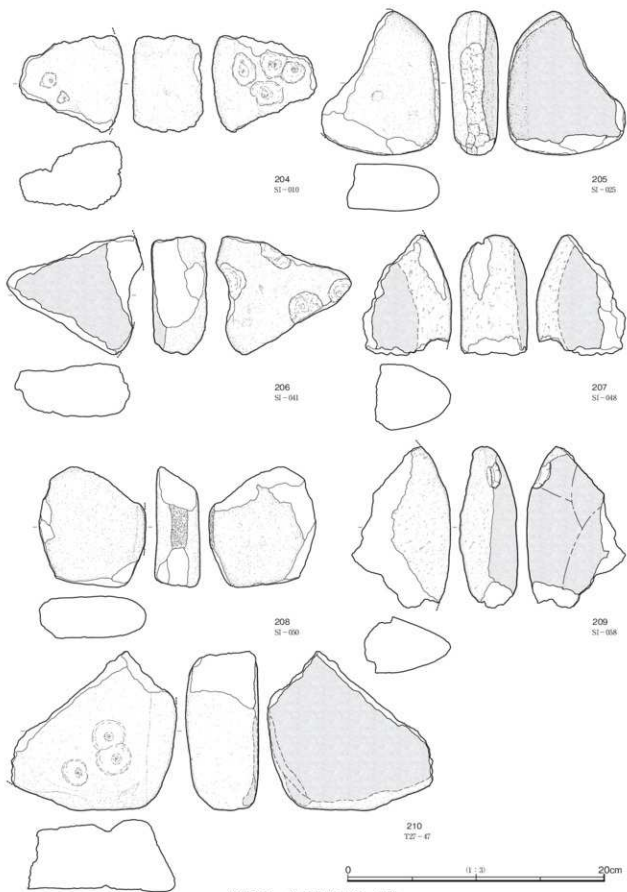


第115図 縄文時代石器 (8)





第116図 縄文時代石器(9)



第117図 縄文時代石器 (10)

定される。

両面に磨面があり、両面とも凹んだもの(201・204)、片面のみ凹んだもの(200・202・206)、両面とも平坦なもの(203・205・207~210)の三種があり、凹み痕(201~204・207・210)や破損後の再加工の痕跡をとどめる例(205・208)もみられる。

小林康男は、楕円形の凹みを有する石皿が磨石類を石皿の磨面上で楕円あるいは円を描くように使用したのに対して、磨面が平坦な石皿は磨石類を敲石のように使用したものと推定している(小林1978)。

ただし、本遺跡の石皿はすべて破損品であり全体の形状が推定できる例は皆無であった。したがって、小林の見解を追認するには至らなかった。

石材は安山岩類(多孔質安山岩17点を含む)30点、流紋岩質凝灰岩1点、緑色岩1点、石英斑岩1点となっている。特に安山岩類に対する高い嗜好性が指摘される。石皿は対象物を磨り潰し、粉化する機能から比較的粗粒の石材が採用されている。特に多孔質安山岩は孔隙率が大きいため加工しやすく、しかも体積に比して軽量であるため重用されている。

#### (12) 側面調整礫(211~275)

齊一性があり量的保証もあるため、ひとつの器種としてとりまとめたが、初出であるため便宜的にこの名称を付した。扁平な小円礫の側縁に敲打痕や磨耗痕がみられる。ただし、ここで言う敲打痕は敲石のように対象物を敲打したのではなくあくまでも器面の整形を目的とした調整であり、また磨耗痕も研磨というよりも擦痕に近い。

遺構内から69点、遺構外から36点出土した。形態は長方形や円形もあるが楕円形を基本としている。大きさは、長さ1.8cm~15.4cm、幅2.0cm~7.2cm、厚さ0.6cm~4.7cm、重量33.5g~392.5gの範囲にあり、平均値は、それぞれ6.9cm、5.1cm、2.1cm、106.8gとなっている。

いずれも表面が赤く変色(赤化)するまで焼成されており、なかには黒色付着物もみられる。石材は砂岩を主体としており流紋岩や石英斑岩がこれに次ぐ。

敲打痕等は赤化した面を切っており焼成後に使用に供されたことは明らかである。調整の部位には、ほぼ全周にわたる例(212・216・219・227・229~234・236・239・245・248・251~253・258・259・261・268・269・271)、二側縁(211・214・215・217・218・220~223・226・228・237・241~244・246・247・256・257・264・266・270・272・275)、及び一側縁(213・224・225・240・249・250・260・263・267・273・274)という3つのタイプがある<sup>2)</sup>。欠損率は約15%(15/105)であり比較的低い。なお、238は赤化した小型扁平な流紋岩の被熱礫である。調整痕はないが、形態の類似性と被熱の痕跡から関連資料(未成品)と考えた。

#### (13) その他

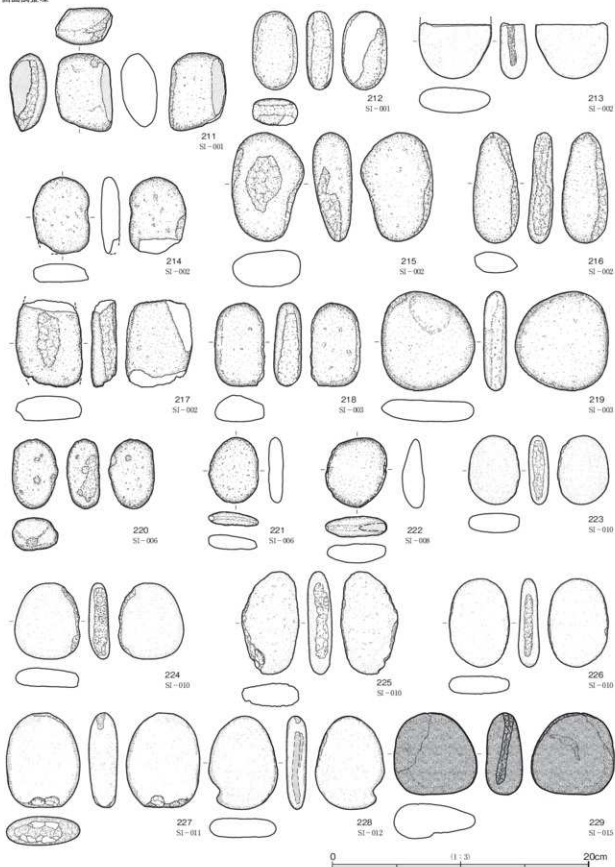
##### ① 石核

計9点出土した。剥離面の状況から横長剥片が生産された模様である。石材はチャートを主としている。数量が楔形石器(計115点)に比して極端に少ないが、このことは本遺跡における剥片生産技術の主体が両極打法にあったことを如実に物語っている。

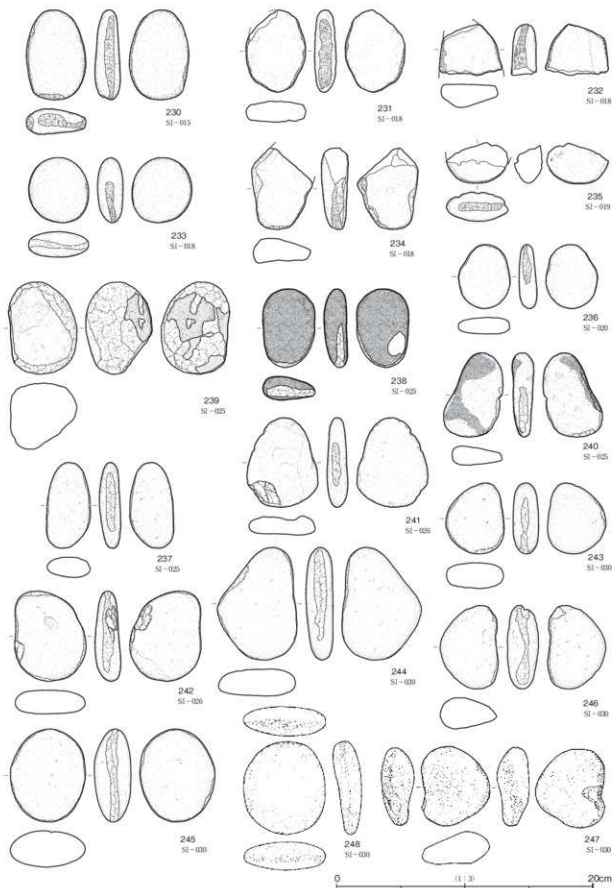
##### ② 剥片類

素材剥片と二次加工の際に生じる碎片(調整剥片)が都合709点出土した。石材はチャートが70%を超える。剥片の大きさや形状に統一性がなく横長剥片が大半である。横長剥片の背面の剥離面は複数の方向

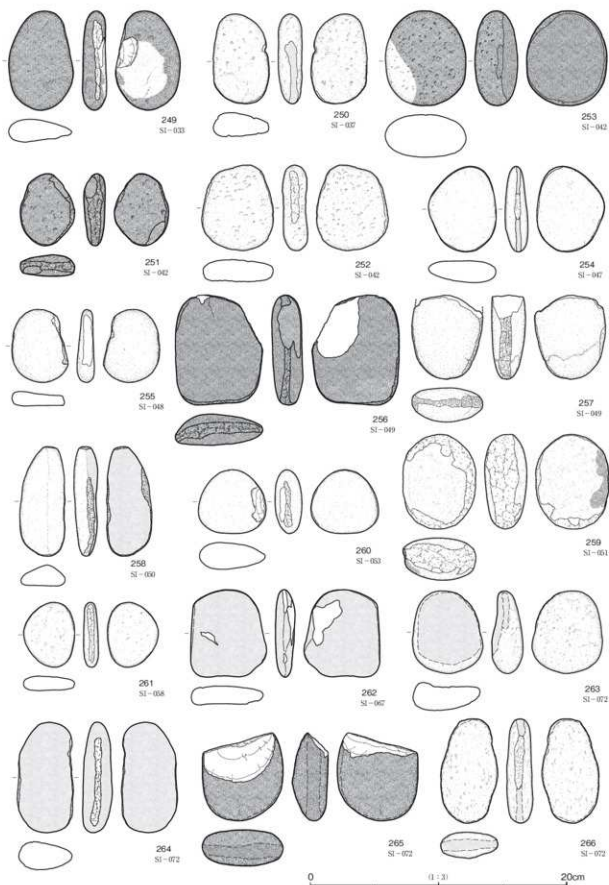
側面調整標



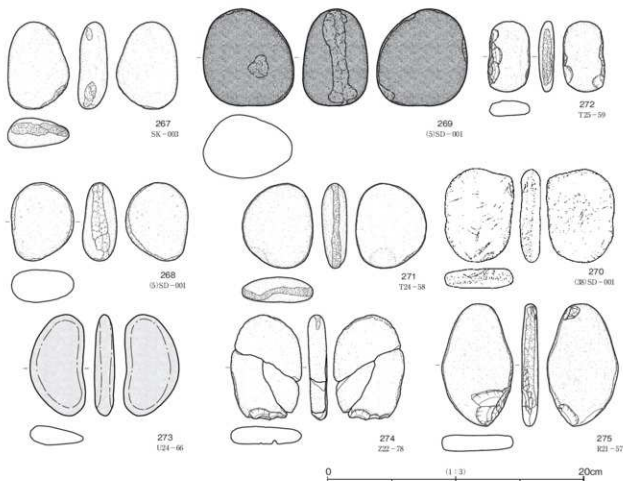
第118圖 縄文時代石器 (11)



第119図 縄文時代石器 (12)



第120図 縄文時代石器 (13)



第121図 縄文時代石器 (14)

から打撃された痕跡をとどめ、先端は主要剥離面に向かって湾曲している。

注

- 1) このほか欠損により形状が不明な資料がある (172・173・175・178・180)。
- 2) このほか欠損により形状が不明な資料がある (235・255・262・265)。

引用参考文献

- 諏訪兼位 1959「濃飛山地に出土する石皿の岩石学的研究」『名古屋大学文学部十周年記念論集』 名古屋大学文学部
- 小田静夫 1976「縄文中期の打製石斧」『季刊どるめん』10号 pp.44-57 JICC出版局
- 鈴木次郎ほか 1977「尾崎遺跡 酒匂川総合開発計画に伴う調査」 神奈川県教育委員会
- 佐原 真 1977「石斧論-横斧から縦斧へ-」『考古論集-慶祝 松崎寿和先生六十三歳記念論文集-』pp.45-86 松崎寿和先生退官記念事業会
- 小林康男 1978「縄文時代の磨石」『中部高地の考古学』pp.136-158 長野県考古学会
- 佐原 真 1982「石斧再論」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』pp.161-186 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
- 鈴木次郎 1983「打製石斧」『縄文文化の研究7 道具と技術』pp.48-59 雄山閣出版株式会社
- 鈴木道之助 1983「石鏃」『縄文文化の研究7 道具と技術』pp.88-95 雄山閣出版株式会社

- 岡村道雄 1983「ビエスエスキュー、楔形石器」『縄文文化の研究7 道具と技術』pp.106-116 雄山閣出版株式会社
- 矢島國雄・前山精明 1983「石錐」『縄文文化の研究7 道具と技術』pp.117-128 雄山閣出版株式会社
- 安達厚三 1983「石皿」『縄文文化の研究7 道具と技術』pp.129-139 雄山閣出版株式会社
- 財団法人千葉県文化財センター 1986「千原台ニュータウンⅢ（草刈道跡B区）」
- 鈴木道之助 1991『図録・石器入門事典（縄文）』 柏書房株式会社
- 鈴木徳雄 1997「縄紋前期の石製研磨具－側面に擦痕のある扁平礫を巡って－」『群馬考古学手帳』7 pp.27-34 群馬土器観会
- 秋田県教育委員会 2012「白館跡」



第9表 縄文時代石器属性表

採回	図録	番号	遺物番号	遺物番号	器種	石材	重量g	Hcm	Wcm	厚cm	備考
106	81	1	SI-001	0282	石鏃	チャート	14	2.6	1.4	0.5	片斷欠損
106	81	2	SI-002	0257	石鏃	チャート	08	2.1	1.3	0.4	片斷欠損
106	81	3	SI-007	0089	石鏃	チャート	09	2.3	1.7	0.3	片斷欠損
106	81	4	SI-010	0062	石鏃	チャート	17	2.9	1.8	0.5	片斷欠損
106	81	5	SI-012	0111	石鏃	チャート	06	2.5	1.1	0.4	
106	81	6	SI-017	0028	石鏃	チャート	07	1.6	1.7	0.3	
106	81	7	SI-021	0029	石鏃	チャート	09	2.4	1.5	0.4	
106	81	8	SI-022	0014	石鏃	チャート	09	2.1	1.1	0.4	
106	81	9	SI-024	0006	石鏃	チャート	03	1.5	1.1	0.2	
106	81	10	SI-024	0003	石鏃	メノウ	07	2.0	1.2	0.3	
106	81	10	SI-025	0002	石鏃	チャート	07	1.8	1.1	0.5	
106	81	11	SI-061	0002	石鏃	チャート	10	2.4	1.5	0.4	
106	81	12	SI-064	0054	石鏃	チャート	04	1.4	0.9	0.3	
106	81	13	SI-065	0069	石鏃	チャート	19	1.5	1.0	0.3	片斷欠損
106	81	14	SI-065	0093	石鏃	チャート	03	2.1	2.0	0.6	未成品?
106	81	15	SI-067	0059	石鏃	チャート	10	2.2	1.7	0.4	片斷欠損
106	81	16	SI-067	0488	石鏃	チャート	04	1.5	0.9	0.3	片斷欠損
106	81	17	SI-067	0535	石鏃	チャート	21	2.3	1.8	0.6	未成品?
			SI-067	0274	石鏃	チャート	01	1.0	0.5	0.2	超小型
106	81	18	SI-069	0013	石鏃	チャート	08	1.2	1.5	0.4	先端、片斷欠損
106	81	19	SI-069	0021	石鏃	頁岩	03	1.7	1.3	0.3	
106	81	20	SI-069	0071	石鏃	チャート	04	1.7	1.2	0.4	
106	81	21	SI-069	0082	石鏃	チャート	06	1.9	1.3	0.4	
106	81	22	SI-069	0067	石鏃	チャート	10	2.0	1.6	0.4	
106	81	23	SI-069	0113	石鏃	チャート	08	2.6	1.6	0.4	片斷欠損
106	81	24	SI-069	0121	石鏃	黒曜石	04	1.3	1.5	0.4	信州系黒曜石、先端、片斷欠損
106	81	25	SI-069	0162	石鏃	チャート	07	2.3	1.5	0.4	片斷欠損
106	81	26	SI-069	0173	石鏃	チャート	03	1.3	1.1	0.2	片斷欠損
106	81	27	SI-070	0032	石鏃	チャート	06	1.5	1.5	0.4	未成品?
106	81	28	SI-070	0114	石鏃	チャート	05	1.9	1.4	0.3	
106	81	29	SI-070	0203	石鏃	チャート	04	1.4	1.2	0.3	先端、基部欠損、曲撃調整(縦溝状調整)
106	81	30	SI-079	0002	石鏃	黒曜石	03	1.4	1.0	0.3	信州系黒曜石、両脚欠損
106	81	31	SK-087	0004	石鏃	チャート	03	1.5	1.4	0.3	
106	81	32	(11)SK-002	0002	石鏃	黒曜石	08	2.6	1.4	0.4	信州系黒曜石
106	81	33	(5)SD-001	0001	石鏃	チャート	05	1.5	1.7	0.3	
106	81	34	R19-50	0001	石鏃	チャート	13	2.2	1.7	0.4	黒曜石器素材、未成品?
106	81	35	R22-49	0001	石鏃	チャート	09	1.6	1.8	0.4	先端、片斷欠損
106	81	36	S20-88	0002	石鏃	ダウマ質黒色安山岩	06	1.4	1.6	0.3	先端欠損、曲撃調整(折石・縦溝状調整)
106	81	37	S20-94	0002	石鏃	チャート	05	2.0	1.5	0.3	
106	81	38	S22-80	0001	石鏃	チャート	15	2.6	1.9	0.4	先端、片斷欠損
106	81	39	S24-25	0001	石鏃	チャート	11	2.4	1.8	0.4	
106	81	40	T25-36	0001	石鏃	チャート	15	2.9	2.0	0.4	
106	81	41	U24-56	0001	石鏃	チャート	11	2.3	2.0	0.3	先端、片斷欠損、頭部加工
106	81	42	U24-83	0001	石鏃	黒曜石	08	2.3	1.5	0.4	四角無縁端、産地不明
106	81	43	W20-45	0001	石鏃	黒曜石	07	2.0	1.4	0.4	信州系黒曜石
106	81	44	W22-13	0001	石鏃	チャート	06	1.8	1.2	0.3	
106	81	45	Z21-80	0001	石鏃	ダウマ質黒色安山岩	05	1.9	1.2	0.2	先端、片斷欠損、頭部加工
106	81	46	Z21-80	0002	石鏃	チャート	04	1.4	1.2	0.3	先端、片斷欠損
106	81	47	Z21-90	0002	石鏃	チャート	17	1.9	1.5	0.6	未成品?
106	81	48	Z22-11	0002	石鏃	チャート	03	1.3	1.4	0.3	
106	81	49	Z22-34	0004	石鏃	チャート	05	1.5	1.2	0.3	
106	81	50	Z22-43	0004	石鏃	ダウマ質黒色安山岩	05	1.8	1.5	0.2	
106	81	51	Z22-45	0004	石鏃	チャート	03	1.2	1.1	0.3	
106	81	52	Z22-47	0001	石鏃	チャート	05	1.7	1.4	0.5	先端欠損
106	81	53	Z22-52	0009	石鏃	チャート	15	2.8	2.1	0.4	片斷欠損
106	81	54	Z22-53	0002	石鏃	チャート	10	1.9	1.5	0.4	
106	81	55	Z22-53	0008	石鏃	黒曜石	06	1.7	1.5	0.3	信州系黒曜石、先端、片斷欠損
106	81	56	Z22-54	0006	石鏃	チャート	14	1.8	1.8	0.5	
106	81	57	Z22-78	0001	石鏃	チャート	06	1.3	1.6	0.5	
106	81	58	Z22-79	0001	石鏃	黒曜石	05	1.9	1.5	0.3	信州系黒曜石
106	81	59	SI-021	0039	石鏃未成品	炭酸鈣岩	19	2.7	1.5	0.4	
106	81	60	SI-022	0026	石鏃未成品	チャート	22	2.0	1.6	0.5	
106	81	61	SI-023	0030	石鏃未成品	チャート	15	2.0	1.6	0.5	
106	81	62	SI-024	0004	石鏃未成品	黒色頁岩	96	4.2	2.9	0.7	
106	81	63	SI-024	0013	石鏃未成品	炭酸鈣岩	65	3.2	2.6	0.8	黒曜石器素材
106	81	64	SI-024	0028	石鏃未成品	オキナワ玄武岩	22	2.9	1.8	0.7	
106	81	65	SI-024	0030	石鏃未成品	オキナワ玄武岩	91	4.9	2.3	0.8	
106	81	66	SI-024	0040	石鏃未成品	チャート	28	3.1	1.7	0.5	
106	81	67	SI-025	0148	石鏃未成品	チャート	11	2.2	1.1	0.4	
			SI-043	0091	石鏃未成品	チャート	09	1.1	0.9	0.5	
			SI-043	0133	石鏃未成品	チャート	31	2.4	1.5	0.7	
			SI-043	0158	石鏃未成品	チャート	16	1.3	2.0	0.6	
106	81	68	SI-067	0058	石鏃未成品	チャート	20	2.0	1.4	0.6	黒曜石器素材
106	81	69	SI-067	0252	石鏃未成品	チャート	17	1.9	1.4	0.6	黒曜石器素材
106	81	70	SI-067	0655	石鏃未成品	チャート	31	2.4	2.0	0.8	黒曜石器素材
			SI-067	0544	石鏃未成品	チャート	09	1.8	1.1	0.4	
			SI-069	0017	石鏃未成品	チャート	18	1.9	1.6	0.5	

種別	国産	番号	選別番号	産物番号	品 種	石 材	重量	R(cm)	幅(m)	厚cm	備 考
100	81	71	SI-070	0069	石籾未成品	チャート	55	3.2	2.1	08	楕形石器具素材
100	81	72	SI-070	0080	石籾未成品	チャート	39	2.4	2.2	08	楕形石器具素材
100	81	73	SI-070	0125	石籾未成品	チャート	23	2.4	2.0	06	
100	81	74	SI-070	0000	石籾未成品	チャート	26	3.8	1.6	07	
100	81	75	SI-070	0129	石籾未成品	ホルツェルス	24	2.5	1.6	07	
			SI-070	0115	石籾未成品	チャート	03	0.7	1.1	03	
			SI-070	0182	石籾未成品	チャート	09	1.2	1.5	07	
			SI-078	0001	石籾未成品	チャート	08	1.6	1.3	04	
100	81	76	SI-079	0043	石籾未成品	チャート	14	2.2	1.7	04	楕形石器具素材
100	81	77	Q19-48	0001	石籾未成品	チャート	16	2.2	1.2	06	
100	81	78	R19-40	0001	石籾未成品	チャート	30	2.4	2.0	08	
100	81	79	R19-50	0001	石籾未成品	チャート	25	2.5	2.7	07	丸端欠損
100	81	80	R19-50	0001	石籾未成品	チャート	50	2.6	1.9	07	
100	81	81	R19-51	0001	石籾未成品	チャート	29	2.7	1.8	07	楕形石器具素材
100	81	82	N23-07	0001	石籾未成品	チャート	09	1.8	1.3	04	
			Y21-58	0001	石籾未成品	チャート	15	1.9	1.4	05	
			Z22	0001	石籾未成品	チャート	74	3.4	2.8	08	
100	81	83	Z22-35	0003	石籾未成品	チャート	58	3.3	2.4	07	
100	81	84	Z22-42	0002	石籾未成品	チャート	29	2.4	2.3	05	
			Z22-42	0008	石籾未成品	チャート	28	2.3	1.7	07	
100	81	85	Z22-44	0002	石籾未成品	ホルツェルス	46	2.7	2.2	08	
			Z22-45	0002	石籾未成品	チャート	64	3.0	2.1	10	
100	81	86	Z22-47	0001	石籾未成品	チャート	16	2.7	2.2	06	
			Z22-47	0001	石籾未成品	黒曜石	28	2.9	1.4	07	
			Z22-52	0007	石籾未成品	チャート	23	2.6	1.7	06	
			Z22-53	0008	石籾未成品	チャート	42	2.7	2.1	07	
			Z22-62	0004	石籾未成品	チャート	06	1.8	1.2	02	
100	81	87	Z22-69	0001	石籾未成品	柱貫百石	56	2.8	2.4	09	
			Z22-72	0004	石籾未成品	百石	39	3.0	2.3	07	
			Z22-87	0001	石籾未成品	チャート	32	2.8	1.8	07	
100	81	88	Z23-24	0001	石籾未成品	黒色百石	17	2.1	1.6	05	
100	81	89	Z23-33	0001	石籾未成品	チャート	68	2.8	2.7	09	
100	81	90	武田長巻		石籾未成品	チャート	15	2.4	1.7	04	楕形石器具素材
			SI-021	0041	楕形石器	チャート	31	2.1	1.9	09	
			SI-021	0048	楕形石器	チャート	13	1.0	1.8	07	
			SI-021	0001-3	楕形石器	百石	10	2.0	1.5	03	
			SI-022	0001-2	楕形石器	チャート	24	2.0	1.6	07	
			SI-022	0001-3	楕形石器	黒色百石	79	3.1	1.8	12	
			SI-022	0001-3	楕形石器	チャート	43	2.6	1.5	10	
			SI-024	0004	楕形石器	チャート	59	2.7	1.7	11	
			SI-024	0004	楕形石器	チャート	24	2.3	1.9	06	
			SI-024	0008	楕形石器	チャート	14	2.0	1.5	04	
			SI-024	0009	楕形石器	チャート	18	1.3	1.7	06	
			SI-024	0027	楕形石器	チャート	35	1.8	1.9	09	
			SI-024	0041	楕形石器	チャート	33	1.8	1.6	10	
100	82	91	SI-025	0002	楕形石器	石英	114	3.4	2.7	09	
			SI-025	0076	楕形石器	チャート	15	1.8	2.0	04	
			SI-025	0077	楕形石器	チャート	04	1.1	1.1	12	
100	82	92	SI-030	0091	楕形石器	チャート	38	3.1	2.4	06	
			SI-030	0066	楕形石器	チャート	29	2.0	1.7	07	
			SI-030	0001	楕形石器	チャート	13	1.3	1.8	06	
			SI-031	0015	楕形石器	チャート	16	1.8	1.5	05	(29)SI-001
			SI-037	0015	楕形石器	チャート	34	2.1	2.9	06	
100	82	93	SI-043	0075	楕形石器	鉄板百石	397	7.4	3.4	13	
100	82	94	SI-043	0005	楕形石器	オラヌ質黒色安山岩	258	4.3	4.1	11	
			SI-043	0070	楕形石器	チャート	106	3.1	2.4	14	
			SI-043	0073	楕形石器	チャート	112	3.3	2.8	17	
			SI-043	0076	楕形石器	輝石	18	1.9	1.5	05	
			SI-043	0079	楕形石器	チャート	21	1.5	2.1	07	
			SI-043	0086	楕形石器	チャート	61	3.1	2.7	08	
			SI-043	0092	楕形石器	チャート	77	2.9	1.6	12	
100	82	95	SI-043	0130	楕形石器	チャート	125	2.6	3.2	09	
100	82	96	SI-043	0145	楕形石器	オラヌ質黒色安山岩	105	3.1	3.6	09	
			SI-043	0152	楕形石器	オラヌ質黒色安山岩	41	2.3	3.5	04	
			SI-048	0036	楕形石器	百石	122	2.6	3.9	11	
			SI-058	0071	楕形石器	チャート	779	3.8	4.6	22	
			SI-064	0012	楕形石器	チャート	17	2.5	1.3	07	
			SI-064	0040	楕形石器	チャート	23	1.5	2.1	09	
			SI-064	0058	楕形石器	チャート	13	2.0	1.4	06	
			SI-064	0063	楕形石器	チャート	13	1.5	1.2	05	
			SI-064	0070	楕形石器	チャート	05	1.7	0.9	04	
			SI-064	0071	楕形石器	チャート	20	1.4	2.1	05	
			SI-064	0085	楕形石器	チャート	11	1.8	1.6	04	
			SI-064	0118	楕形石器	Aゾウ	23	2.6	2.2	05	
			SI-065	0001	楕形石器	チャート	31	1.9	1.5	09	
100	82	97	SI-067	0047	楕形石器	チャート	50	2.3	2.5	11	
100	82	98	SI-067	0284	楕形石器	凝灰岩	453	5.2	3.5	27	
100	82	99	SI-067	0016	楕形石器	チャート	70	2.4	2.7	11	
100	82	100	SI-067	0319	楕形石器	チャート	42	1.9	2.5	08	

緯度	国名	番号	遺跡番号	遺物番号	品名	石 材	重量g	長cm	幅cm	厚cm	備 考
109	82	101	SI-067	0338	楕形石器	チャート	451	5.2	4.6	19	
109	82	102	SI-067	0611	楕形石器	チャート	46	2.4	2.9	08	
			SI-067	0623	楕形石器	チャート	48	2.4	1.7	12	
			SI-067	0166	楕形石器	チャート	20	3.4	1.2	06	
			SI-067	0206	楕形石器	チャート	21	1.8	1.9	10	
			SI-067	0416	楕形石器	黒色頁岩	43	2.4	2.4	09	
			SI-067	0508	楕形石器	チャート	17	2.0	1.9	08	
			SI-069	0147	楕形石器	チャート	27	2.8	1.5	07	
109	82	103	SI-070	0043	楕形石器	チャート	85	3.1	2.0	11	
			SI-070	0053	楕形石器	チャート	36	2.1	2.3	06	
			SI-070	0054	楕形石器	チャート	19	1.9	1.5	05	
			SI-070	0079	楕形石器	チャート	105	3.0	2.7	12	
			SI-070	0107	楕形石器	ホルンフェルス	108	3.4	2.1	10	
			SI-070	0117	楕形石器	チャート	51	2.5	2.5	08	
			SI-070	0118	楕形石器	チャート	15	1.4	1.6	06	
			SI-070	0163	楕形石器	チャート	68	2.8	1.9	10	
			SI-070	0166	楕形石器	チャート	36	2.0	1.5	09	
			SI-070	0195	楕形石器	チャート	11	1.8	1.3	05	
			SI-070	0202	楕形石器	チャート	41	2.7	1.9	07	
			SI-070	0206	楕形石器	チャート	146	1.9	3.3	18	
			SI-070	0207	楕形石器	チャート	28	2.8	1.2	07	
110	82	104	SI-079	0044	楕形石器	チャート	55	2.9	1.8	11	
			(7)SD-001	0005	楕形石器	チャート	26	2.4	1.7	07	
110		105	(30)SD-001	0001	楕形石器	柱状頁岩	15	2.4	1.5	04	
			Q19-48	0001	楕形石器	チャート	79	2.9	2.5	11	
			Q19-49	0001	楕形石器	頁岩	16	1.7	2.0	04	
			Q19-49	0001	楕形石器	頁岩	18	2.4	1.4	05	
			S22-70	0001	楕形石器	柱状頁岩	25	2.0	2.0	06	
			S22	0001	楕形石器	チャート	31	2.3	1.8	07	
			S23-08	0002	楕形石器	チャート	42	2.4	2.2	06	
			T22-60	0001	楕形石器	チャート	22	1.7	1.8	06	
			T23-10	0001	楕形石器	チャート	24	1.8	1.4	07	
			T22-10	0002	楕形石器	チャート	32	2.2	1.9	07	
			T23-10	0001	楕形石器	チャート	22	2.0	1.8	05	
			U23-57	0002	楕形石器	チャート	50	2.4	1.9	12	
			R22-78	0001	楕形石器	チャート	25	2.9	1.2	08	
110	82	106	Y22-09	0002	楕形石器	チャート	85	3.4	2.2	10	
			Z21-71	0001	楕形石器	チャート	23	1.9	2.1	07	
			Z21-80	0001	楕形石器	柱状頁岩	10	1.6	1.6	05	
110	82	107	Z21-90	0002	楕形石器	チャート	34	3.4	2.1	05	
			Z22	0001	楕形石器	チャート	240	3.3	3.2	17	
			Z22	0001	楕形石器	砂岩	488	4.7	5.0	16	鉄分付着
			Z22-00	0001	楕形石器	チャート	34	2.6	1.7	07	
			Z22-15	0001	楕形石器	チャート	57	1.6	3.1	13	薄片
110	82	108	Z22-21	0002	楕形石器	ガラス質黒色安山岩	44	2.7	2.4	05	
			Z22-42	0005	楕形石器	チャート	46	2.8	2.7	10	薄片
110	82	109	Z22-42	0005	楕形石器	チャート	69	2.6	2.8	10	
			Z22-44	0003	楕形石器	チャート	47	3.0	1.2	09	
			Z22-45	0006	楕形石器	チャート	77	3.2	1.6	13	
			Z22-47	0001	楕形石器	チャート	30	2.1	2.0	05	
			Z22-47	0001	楕形石器	柱状頁岩	07	1.3	1.9	03	半欠
			Z22-47	0001	楕形石器	チャート	133	4.1	2.1	16	
			Z22-47	0001	楕形石器	チャート	65	2.9	1.9	13	
			Z22-47	0001	楕形石器	チャート	34	2.4	1.5	07	
			Z22-47	0001	楕形石器	チャート	21	2.2	1.6	06	
			Z22-47	0001	楕形石器	チャート	14	1.9	1.7	04	半欠
			Z22-54	0006	楕形石器	チャート	72	1.9	3.0	12	
110	82	110	Z22-54	0006	楕形石器	チャート	113	2.4	3.4	12	
110	82	111	Z22-59	0001	楕形石器	ガラス質黒色安山岩	270	3.9	4.9	09	
110	82	112	Z22-62	0005	楕形石器	チャート	302	3.6	3.0	22	
			Z22-62	0004	楕形石器	柱状頁岩	71	2.3	2.9	11	
			Z22-62	0004	楕形石器	チャート	88	3.0	3.1	09	
			Z22-62	0004	楕形石器	チャート	85	3.7	1.5	11	
			Z22-62	0004	楕形石器	チャート	28	2.2	2.1	07	
			Z22-76	0001	楕形石器	チャート	133	2.8	2.4	16	
110	82	113	Z22-88	0001	楕形石器	チャート	34	1.9	2.7	05	
			Z22-96	0001	楕形石器	ガラス質黒色安山岩	96	3.0	3.0	07	
			Z23-24	0001	楕形石器	チャート	28	2.4	2.0	08	
110	82	114	Z25-45	0004	楕形石器	チャート	104	3.5	2.4	12	横型
110	82	115	SI-026	0021	石瓦	柱状頁岩	241	4.4	5.3	11	横型
			SI-049	0089	石瓦	メノウ	19	1.8	1.9	07	縦型、つまみ部
110	82	116	SI-056	0022	石瓦	黒曜石	103	4.8	2.7	09	海岸島産黒曜石、縦型
			SI-058	0008	石瓦	チャート	07	1.8	1.4	02	ミニチュア(縦型)
110	82	117	SI-064	0053	石瓦	チャート	183	4.3	3.1	08	縦型
			T24-S1	0002	石瓦	ホルンフェルス	150	4.8	4.3	06	縦型
110	82	118	SI-010	0241	石鏝	黒曜石	51	3.1	2.3	08	高塚山産黒曜石、先端部欠損
			SI-067	0017	石鏝	チャート	11	1.6	1.3	05	
110	82	119	SI-064	0036	石鏝未成品	チャート	12	2.9	1.4	04	
110	82	120	SI-064	0052	石鏝未成品	チャート	46	3.6	1.8	08	

種類	国産	番号	選別番号	産物番号	品 種	石 材	重量	R(m)	幅(m)	厚(m)	備 考
110	82	121	SI-064	0043	石露未成品	頁岩	17	2.5	1.9	0.6	
110	82	122	SI-026	0230	二次加工ある調片	黒曜石	75	3.3	3.7	0.9	神津島産黒曜石
110	82	123	SI-027	0134	二次加工ある調片	硬質頁岩	108	3.3	4.1	0.8	
			SI-043	0054	二次加工ある調片	チャート	15	1.1	2.3	0.6	
			SI-064	0098	二次加工ある調片	チャート	12	2.2	1.0	0.4	
			SI-065	0067	二次加工ある調片	チャート	15	2.2	1.2	0.7	
110	82	124	SI-066	0003	二次加工ある調片	黒曜石	25	3.0	1.6	0.7	神津島産黒曜石
			SI-067	0088	二次加工ある調片	チャート	21	2.7	1.1	0.6	
			SI-067	0113	二次加工ある調片	チャート	08	2.1	0.8	0.5	
			SI-067	0116	二次加工ある調片	チャート	13	1.7	1.3	0.7	
			SI-069	0074	二次加工ある調片	チャート	70	3.1	2.0	1.1	石露未成品?
			SI-069	0106	二次加工ある調片	チャート	161	6.1	2.5	1.6	
110	82	125	SI-070	0034	二次加工ある調片	黒曜石	05	1.2	1.4	0.3	信州系黒曜石、調片
			SI-070	0081	二次加工ある調片	ホルンフェルス	79	1.9	3.8	1.1	
110	82	126	R19-63	0001	二次加工ある調片	柱頁岩	16	2.1	1.2	0.6	石露未成品?
			Z21-80	0002	二次加工ある調片	チャート	37	3.1	1.6	0.9	石露未成品?
			Z22	0001	二次加工ある調片	黒曜石	09	2.1	0.8	0.5	
			Z22	0001	二次加工ある調片	黒曜石	09	2.4	0.9	0.7	調片
110	82	127	Z22-33	0004	二次加工ある調片	チャート	09	1.9	1.7	0.3	石露未成品?
			Z22-35	0004	二次加工ある調片	チャート	45	2.4	2.0	1.0	
			Z22-35	0004	二次加工ある調片	チャート	13	2.2	1.2	0.5	石露未成品?
			Z22-42	0005	二次加工ある調片	頁岩	89	3.9	1.9	1.5	産地不明
110	82	128	Z22-44	0006	二次加工ある調片	黒曜石	140	3.0	3.2	1.7	
			Z22-47	0001	二次加工ある調片	チャート	146	4.0	1.8	1.3	
			Z22-54	0004	二次加工ある調片	チャート	99	2.4	3.2	1.3	
			Z23-23	0001	二次加工ある調片	メノウ	75	2.7	2.5	0.9	
			Z23-24	0001	二次加工ある調片	チャート	25	1.9	2.7	0.6	
			Z22-43	0002	使用後ある調片	チャート	64	4.5	2.0	0.7	
			SI-042	0192	打撃石斧	砂岩	1967	9.1	7.1	2.7	礫石斧
111	83	129	SI-043	0003	打撃石斧	ホルンフェルス	585	6.7	5.9	1.3	
111	83	130	SI-048	0001	打撃石斧	ホルンフェルス	596	6.0	5.2	1.6	基部断片
111	83	131	SI-051	0079	打撃石斧	ホルンフェルス	378	6.2	5.1	1.3	基部断片
111	83	132	SI-056	0051	打撃石斧	ホルンフェルス	1062	8.2	5.7	1.8	断片
			T25-19	0001	打撃石斧	ホルンフェルス	424	6.0	4.3	1.3	礫石斧、刃部のみ加工、磨削
111	83	133	T24-31	0001	打撃石斧	ノジュール	491	6.5	4.9	1.5	基部断片、形態不明
111	83	134	U25-40	0001	打撃石斧	成紋岩	882	7.2	5.8	1.7	礫石斧、刃部のみ加工
111	83	135	U25-52	0001	打撃石斧	ホルンフェルス	1138	7.8	5.3	2.9	片向に自然面、磨削
111	83	136	W20-82	0001	打撃石斧	花崗岩	2182	7.5	6.3	3.4	
111	83	137	Z22	0001	打撃石斧	ホルンフェルス	752	7.1	4.5	2.1	礫石斧
			Z22-14	0002	打撃石斧	ホルンフェルス	168	3.8	3.4	1.4	
111	83	138	Z22-32	0002	打撃石斧	ホルンフェルス	705	7.1	4.5	1.7	礫石斧
111	83	139	Z22-79	0001	打撃石斧	砂岩	1230	6.9	6.7	2.1	産地不明
111	83	140	R19-40	0001	打撃石斧	砂岩	5412	10.5	8.2	4.6	
111	83	141	R19-50	0001	打撃石斧	緑色岩	397	6.2	3.2	1.5	短冊形
			SI-003	0003	磨製石斧	緑色岩	65	3.6	2.6	0.7	
111	83	142	SI-006	0040	磨製石斧	緑色岩	955	6.5	3.7	3.1	基部断片、乳棒状磨製石斧
			SI-010	0002	磨製石斧	緑色岩	16	1.7	1.8	0.4	
			SI-010	0242	磨製石斧	緑色岩	58	3.5	2.5	0.4	調片
111	83	143	SI-010	0380	磨製石斧	緑色岩	756	7.2	3.7	2.9	基部断片
111	83	144	SI-014	0001	磨製石斧	緑色岩	3622	14.1	4.7	3.4	乳棒状磨製石斧、両端欠損
			SI-019	0002	磨製石斧	緑色岩	84	2.7	3.7	0.6	調片
			SI-019	0002	磨製石斧	緑色岩	100	2.7	2.9	1.2	調片
			SI-021	0084	磨製石斧	緑色岩	263	5.3	2.9	1.6	
			SI-024	0037	磨製石斧	緑色岩	165	4.4	3.1	1.0	基部断片
112	83	145	SI-025	0002	磨製石斧	緑色岩	79	2.4	3.0	0.7	刃部断片(同一個体)、扁平
112	83	146	SI-025	0044	磨製石斧	緑色岩	49	2.5	2.5	0.7	基部断片(同一個体)、扁平
			SI-025	0021	磨製石斧	緑色岩	01	0.6	1.2	0.2	刃部
			SI-025	0031	磨製石斧	緑色岩	06	1.6	1.3	0.3	調片、同一個体
			SI-025	0032	磨製石斧	緑色岩	09	1.6	1.2	0.4	調片、同一個体
			SI-025	0067	磨製石斧	緑色岩	36	1.9	3.2	0.7	調片、同一個体
			SI-025	0090	磨製石斧	緑色岩	25	2.5	1.8	0.6	調片、SI-025-0129と接合・同一個体
			SI-025	0091	磨製石斧	緑色岩	14	2.1	1.3	0.4	調片、同一個体
			SI-025	0096	磨製石斧	緑色岩	41	1.9	3.5	0.5	調片、同一個体
			SI-025	0097	磨製石斧	緑色岩	15	2.0	1.8	0.5	調片、同一個体
			SI-025	0129	磨製石斧	緑色岩	26	1.8	2.0	0.6	調片、SI-025-0090と接合・同一個体
			SI-025	0130	磨製石斧	緑色岩	19	1.8	2.3	0.5	調片、同一個体
			SI-025	0141	磨製石斧	緑色岩	10	1.9	1.3	0.5	調片、同一個体
			SI-025	0144	磨製石斧	緑色岩	07	1.4	1.4	0.3	調片、同一個体
			SI-025	0145	磨製石斧	緑色岩	03	1.2	0.7	0.3	調片、同一個体
112	83	147	SI-030	0041	磨製石斧	緑色岩	175	4.8	2.2	1.1	基部断片、乳棒状磨製石斧
			SI-030	0039	磨製石斧	緑色岩	429	6.6	3.4	1.5	調片
			SI-031	0001	磨製石斧	緑色岩	246	5.1	4.3	0.9	刃部断片
			SI-033	0090	磨製石斧	緑色岩	78	2.4	3.9	0.7	刃部断片
112	83	148	SI-041	0101	磨製石斧	緑色岩	159	4.8	1.4	1.6	乳棒状磨製石斧、両加工品
			SI-041	0025	磨製石斧	緑色岩	09	1.8	1.7	0.3	調片
			SI-041	0028	磨製石斧	緑色岩	101	2.0	3.3	1.1	調片
			SI-041	0030	磨製石斧	緑色岩	10	1.2	1.9	0.5	調片
			SI-041	0064	磨製石斧	緑色岩	04	1.0	1.2	0.3	調片
112	83	149	SI-042	0061	磨製石斧	緑色岩	801	6.2	5.0	1.7	扁平磨製石斧

種別	国産	番号	選礦番号	産物番号	品 種	石 材	重量g	長cm	幅cm	厚cm	備 考
112	83	150	SI-043	0000	磨製石片	安山岩	7200	12.8	8.0	4.8	刃部・基部欠損、被熱
			SI-048	0033	磨製石片	緑色岩	25	2.0	2.2	0.5	基部片
			SI-048	0052	磨製石片	緑色岩	4.4	2.9	2.3	0.5	刃部片
			SI-048	0057	磨製石片	緑色岩	20	1.3	2.9	0.4	側片
			SI-048	0074	磨製石片	緑色岩	22	2.1	2.7	0.4	
			SI-048	0075	磨製石片	緑色岩	439	3.1	3.5	1.7	側片
			SI-048	0097	磨製石片	緑色岩	11.8	2.9	3.0	1.1	側片
112	83	151	SI-049	0062	磨製石片	緑色岩	2357	11.9	4.1	2.7	孔棒状磨製石片
112	84	152	SI-057	0007	磨製石片	緑色岩	4548	16.0	5.7	2.9	孔棒状磨製石片、扁平(表裏に斜めの線状痕)
112	84	153	SI-058	0072	磨製石片	緑色岩	538	5.7	3.5	1.1	刃部一部欠損、扁平
112	84	154	SI-058	0183	磨製石片	緑色岩	2400	11.1	5.5	2.5	刃部欠損、表面磨耗(凹面)、孔棒状磨製石片
			SI-058	0035	磨製石片	緑色岩	302	8.8	1.9	1.5	SI-058-0133とSI-058-0157と接合、側片
			SI-058	0090	磨製石片	緑色岩	94	4.1	2.9	0.5	側片
			SI-058	0133	磨製石片	緑色岩	08	1.8	1.2	0.4	SI-058-0035とSI-058-0157と接合、側片
			SI-058	0157	磨製石片	緑色岩	37	3.4	2.1	0.5	SI-058-0035とSI-058-0133と接合、側片
			SI-062	0073	磨製石片	緑色岩	83	2.3	3.8	0.8	側片
			SI-064	0045	磨製石片	緑色岩	49	4.5	2.9	0.2	SI-064-0120と接合、側片
			SI-064	0120	磨製石片	緑色岩	22	3.8	2.4	0.2	SI-064-0045と接合、側片
			SI-067	0085	磨製石片	緑色岩	42	2.2	2.4	0.9	側片
112	84	155	SI-073	0116	磨製石片	緑色岩	1130	6.9	4.6	3.2	基部破片、孔棒状磨製石片
			SI-080	0061	磨製石片	緑色岩	172	5.2	3.1	1.7	刃部片
			SK-045	0002	磨製石片	緑色岩	1.1	1.7	1.3	0.6	刃部片
			(6)SD-002	0001	磨製石片	緑色岩	47	3.1	3.0	0.6	側片
			(5)SD-001	0002	磨製石片	緑色岩	1236	6.5	6.1	2.4	側片
112	84	156	(5)SD-001	0002	磨製石片	緑色岩	6587	17.4	6.4	3.8	孔棒状磨製石片
113	84	157	Q19-49	0001	磨製石片	緑色岩	2928	15.3	4.5	2.7	刃部欠損、孔棒状磨製石片
113	84	158	R19-63	0001	磨製石片	緑色岩	3321	12.1	5.3	2.9	基部欠損
113	84	159	R21-85	0002	磨製石片	緑色岩	1892	12.1	4.9	2.2	刃部・基部欠損
113	84	160	R22-03	0001	磨製石片	緑色岩	426	6.7	3.5	1.2	扁平
			S23-18	0002	磨製石片	緑色岩	110	2.8	3.4	0.9	側片
113	84	161	S23-69	0001	磨製石片	緑色岩	665	7.7	4.6	1.5	孔棒状磨製石片の再加工品
			T23-00	0002	磨製石片	緑色岩	3.8	1.9	3.3	0.4	刃部片
113	84	162	T24-89	0001	磨製石片	緑色岩	507	4.7	3.7	2.0	基部破片
113	84	163	U21-65	0001	磨製石片	小シラネモリス	738	6.7	4.1	1.8	被熱、定角式石片(片刃)、基部欠損
113	84	164	W22-42	0001	磨製石片	緑色岩	343	5.7	2.9	1.3	孔棒状磨製石片側片
113	84	165	X21-10	0001	磨製石片	緑色岩	643	4.8	3.4	2.7	基部破片、孔棒状磨製石片
113	84	166	X22-99	0001	磨製石片	緑色岩	1590	6.9	5.1	2.9	孔棒状磨製石片側片
113	84	167	Y23-47	0001	磨製石片	緑色岩	700	3.6	4.5	2.0	孔棒状磨製石片側片
113	84	168	Z22-96	0001	磨製石片	玄武岩	3189	12.4	4.7	3.5	被熱、定角式石片、上下文面
113	84	169	第10トロンキ	0001	磨製石片	緑色岩	60	4.0	2.3	0.6	刃部片
113	84	170	SI-043	0002	局部磨製石片	黒色頁岩	374	6.8	4.1	1.4	
113	85	171	SI-010	0383	磨石型	安山岩	11133	13.7	8.2	6.7	隅丸方形(断面三角形)、一端に線打痕
113	85	172	SI-012	0201	磨石型	砂岩	898	4.2	6.4	2.4	楕円形、側片
113	85	173	SI-021	0002	磨石型	閃緑斑岩	3009	7.7	8.1	3.8	楕円形、約50%欠損
			SI-024	0051	磨石型	砂岩	2727	9.9	6.6	2.9	側片、線打痕+凹面、楕円形
			SI-025	0003	磨石型	砂岩	1620	7.5	4.7	4.0	被熱、側片、凹状小窪、一端に線打痕
			SI-025	0003	磨石型	安山岩	477	3.6	5.8	3.0	SI-025-0004と接合、被熱
			SI-025	0004	磨石型	安山岩	368	5.6	5.8	2.0	SI-025-0003と接合、被熱
			SI-038	0001	磨石型	安山岩	3130	8.5	5.8	5.2	石籠片の転用、凹面に有、楕円形
113	85	174	SI-041	0066	磨石型	多孔質安山岩	5164	9.4	8.7	4.5	円形
114	85	175	SI-043	0005	磨石型	安山岩	3009	4.8	8.0	3.5	楕円形(凹面に表裏各1)、側片
			SI-043	0011	磨石型	安山岩	4901	6.9	9.0	4.9	凹面・線打痕、半欠、隅丸方形
			SI-043	0020	磨石型	石英	816	5.3	4.1	4.1	側片、磨耗面・線打痕、被熱
			SI-043	0022	磨石型	安山岩	3219	5.6	8.1	5.1	約30%欠、隅丸方形
			SI-043	0146	磨石型	安山岩	2965	6.0	7.5	5.1	側片
114	85	176	SI-048	0009	磨石型	安山岩	3393	10.2	8.5	3.8	楕円形
114	85	177	SI-050	0166	磨石型	安山岩	8883	10.0	8.6	4.5	隅丸方形(凹面に表裏各2)
114	85	178	SI-051	0081	磨石型	安山岩	5084	9.5	8.6	4.0	楕円形(表裏に線打痕各1)、一部欠損
114	85	179	SI-052	0030	磨石型	安山岩	5445	9.3	8.3	4.3	円形、表裏に凹面各1
114	85	180	SI-056	0001	磨石型	安山岩	1820	4.5	7.4	3.9	被熱、側片、凹状小窪、一端に線打痕
			SI-058	0040	磨石型	砂岩	1613	7.7	3.2	3.2	被熱、側片
114	85	181	SI-066	0001	磨石型	石英緑泥岩	1239	5.5	6.3	2.5	被熱、楕円形
114	85	182	SI-067	0142	磨石型	安山岩	7167	13.8	8.0	4.0	隅丸方形
			SI-067	0189	磨石型	石英緑泥岩	449	4.4	3.2	5.5	被熱、側片
			SI-067	0230	磨石型	安山岩	603	3.2	5.5	2.8	側片、凹面
114	86	183	SI-067	0293	磨石型	安山岩	9298	12.7	9.7	5.5	楕円形、片面に凹面各2
115	86	184	SI-072	0145	磨石型	砂岩	8126	9.7	9.4	6.1	被熱、円形
			SI-073	0001	磨石型	石英緑泥岩	859	5.6	5.0	2.7	側片
115	86	185	SI-073	0117	磨石型	安山岩	1337	7.4	5.0	3.9	楕円形(凹面に表裏各1)、表面凹面各1
115	86	186	SI-073	0119	磨石型	安山岩	4327	9.8	7.0	4.2	楕円形、表面の中央部に線打痕
115	86	187	SK-012	0019	磨石型	流紋岩質凝灰岩	4567	11.0	7.0	3.5	隅丸方形、表面に凹面各2
			(6)SD-002	0001	磨石型	砂岩	3647	7.9	7.7	5.0	被熱、線打痕、球状
			(4)SD-002	0001	磨石型	安山岩	2236	4.9	8.7	4.0	側片、線打痕
			R19-51	0001	磨石型	安山岩	2074	6.6	6.5	4.5	被熱、部分的に線打痕、円形
			R21-18	0001	磨石型	安山岩	5417	9.2	7.0	3.9	楕円形、一端に線打痕
			R21-58	0002	磨石型	安山岩	1286	6.4	4.2	4.5	側片
			S20-36	0001	磨石型	砂岩	1981	5.5	7.4	3.7	半欠、全周に線打痕、楕円形
			S21-04	0002	磨石型	砂岩	2478	7.6	8.7	4.2	側片、表面の凹面各1、楕円形
			S21-33	0001	磨石型	砂岩	2496	8.0	6.2	3.0	表裏に線打痕各1、楕円形

種類	国産	番号	通称番号	産物番号	品 種	石 材	重量g	長cm	幅cm	厚cm	備 考
			T24-23	0001	磨石型	安山岩	230	3.5	3.7	3.3	断片
			T24-48	0001	磨石型	花崗岩	1833	4.9	6.7	4.3	焼熟、半欠、磨削面、表面に凹み痕
			T24-88	0001	磨石型	安山岩	1154	3.3	7.9	3.5	断片、磨削面
115	86	188	T23-19	0001	磨石型	砂岩	8867	6.6	6.6	3.8	磨削面、表面に凹み痕各1
			U34-12	0001	磨石型	安山岩	2928	7.7	7.9	4.8	断片、磨削面、磨粒痕
115	86	189	U24-78	0001	磨石型	石英斑岩	2472	7.2	6.1	5.2	焼熟、断片、磨削面に磨粒痕
			X21-21	0001	磨石型	石英斑岩	989	4.0	4.8	4.0	焼熟、断片
			Z21-90	0002	磨石型	安山岩	2048	5.6	4.6	5.2	綠岩
			Z22-34	0002	磨石型	安山岩	686	3.6	5.2	4.3	断片、形状不明
			Z22-35	0004	磨石型	安山岩	2246	6.2	9.5	2.9	断片、磨削面、凹み痕
			Z23-23	0001	磨石型	安山岩	3423	7.4	7.6	3.9	磨削面、半欠、緑岩
			Z23-23	0001	磨石型	安山岩	2146	8.1	6.0	3.4	磨削面、断片、両面に凹み痕
			第0トレンチ	0001	磨石型	石英斑岩	3654	10.0	6.1	4.3	磨削面
			R19-41	0001	緑石	安山岩	2483	7.7	8.6	2.6	焼熟、半欠、一端に緑打痕
			R19-51	0001	緑石	流紋岩	2580	9.4	5.9	3.8	焼熟、一端に緑打痕
			S21-55	0002	緑石	安山岩	4341	8.6	7.3	4.7	焼熟、一端に緑打痕
115	86	190	SI-006	0004	緑石	閃緑岩	1178	5.6	6.6	3.8	焼熟、断片
115	86	191	SI-008	0287	緑石	石英斑岩	1143	8.5	4.3	3.2	焼熟、断片
115	86	192	SI-009	0021	緑石	砂岩	403	7.9	2.4	2.2	上下両面に緑打痕
			SI-010	0347	緑石	ホルンフェルス	2698	7.7	6.8	4.2	四隅に緑打痕
			SI-022	0000	緑石	流紋岩	3719	10.5	6.6	4.4	焼熟、一端に緑打痕
115	86	193	SI-024	0045	緑石	石英斑岩	3671	10.9	8.8	3.7	両面に緑打痕
			SI-037	0076	緑石	緑色岩	3449	9.2	6.6	3.7	磨削石片の転用
115	86	194	SI-041	0024	緑石	緑色岩	2298	6.8	4.9	3.6	孔状状磨削石片の転用
116	86	195	SI-043	0028	緑石	流紋岩質緑斑岩	9549	13.4	7.5	7.0	
			SI-043	0010	緑石	石英	428	5.2	4.0	2.3	焼熟、断片
			SI-044	0030	緑石	流紋岩	1055	5.0	4.1	3.3	一端に緑打痕
			SI-046	0039	緑石	流紋岩	3480	11.7	5.5	3.3	一端に緑打痕
			SI-046	0077	緑石	輝石岩	2097	9.3	7.9	2.5	半欠、焼熟、一側縁に緑打痕
			SI-058	0144	緑石	砂岩	2968	9.7	6.6	3.5	両縁に緑打痕
			SI-064	0047	緑石	流紋岩	707	5.6	4.1	2.4	焼熟、半欠、一端に緑打痕
			SI-064	0081	緑石	流紋岩質緑斑岩	476	3.7	3.9	1.3	焼熟、半欠、一端に緑打痕
116	86	196	SI-067	0432	緑石	石英斑岩	2631	10.0	7.2	2.2	両面に緑打痕
116	86	197	SI-070	0101	緑石	磨砕緑斑岩	4716	8.8	6.1	4.8	焼熟
116	86	198	T25-26	0001	緑石	花崗岩	2188	13.4	8.7	4.7	焼熟
			Z22-43	0011	緑石	安山岩	1426	8.6	4.5	2.4	両端と表面に緑打痕
			Z22-45	0004	緑石	砂岩	856	8.1	3.8	2.1	半欠、一端に緑打痕
			Z22-45	0004	緑石	砂岩	957	3.4	5.4	2.8	焼熟、半欠、一端に緑打痕
			Z22-47	0001	緑石	砂岩	2636	12.0	5.6	3.9	焼熟、上下両面に緑打痕
			Z22-53	0004	緑石	石英斑岩	1015	6.9	4.4	2.7	焼熟、一端に緑打痕、微面調整済
			SI-025	0066	手持ち砥石	砂岩	329	5.8	4.5	1.0	
116	87	199	SI-056	0046	手持ち砥石	ホルンフェルス	518	7.1	4.8	1.2	焼熟、磨削面(板状)
			SI-065	0066	手持ち砥石	流紋岩質緑斑岩	810	5.2	4.0	2.8	焼熟
116	87	200	R19-61	0001	石皿	多孔質安山岩	1363	7.0	5.9	3.2	断片、裏面凹み
			R21-39	0002	石皿	多孔質安山岩	541	5.6	3.5	3.7	断片
116	87	201	SI-092	0002	石皿	多孔質安山岩	1865	9.6	7.8	5.1	断片、表面凹面、表面に凹み痕
116	87	202	SI-094	0066	石皿	安山岩	9853	18.4	10.3	5.8	断片、裏面に磨粒痕、裏面凹み、裏面凹み各1
117	87	203	SI-010	0245	石皿	流紋岩質緑斑岩	5600	10.0	11.2	4.4	断片、両面平削、片面に凹み痕1
117	87	204	SI-010	0290	石皿	多孔質安山岩	2312	8.3	7.4	5.1	断片、両面凹削、片面に凹み痕4
			SI-010	0091	石皿	多孔質安山岩	822	5.6	2.9	4.2	断片、凹み痕
			SI-010	0244	石皿	石英斑岩	1392	7.4	5.0	4.0	SI-010-0245と同一個体
			SI-012	0141	石皿	多孔質安山岩	2662	9.0	11.0	7.0	断片
			SI-021	0050	石皿	安山岩	6666	9.2	7.6	5.7	
117	87	205	SI-025	0057	石皿	安山岩	5062	11.2	9.1	3.9	断片、焼熟、両面平削
			SI-036	0047	石皿	多孔質安山岩	446	6.7	5.2	2.0	断片
117	87	206	SI-041	0032	石皿	安山岩	3840	10.6	9.2	4.3	断片、表や凹面・裏や凸凹面
			SI-043	0004	石皿	多孔質安山岩	1680	7.3	6.7	5.7	断片
			SI-043	0142	石皿	多孔質安山岩	1846	5.5	6.4	5.3	断片、形状不詳
			SI-045	0025	石皿	多孔質安山岩	926	6.6	5.8	3.2	断片
			SI-046	0002	石皿	多孔質安山岩	1624	6.7	7.2	4.4	断片
			SI-048	0028	石皿	多孔質安山岩	205	6.3	4.9	2.4	断片
			SI-048	0042	石皿	安山岩	3336	7.6	4.9	5.8	断片、両面平削
117	87	207	SI-048	0073	石皿	安山岩	4542	9.2	7.1	5.3	断片、表面凸削、微面に凹み痕1
			SI-048	0100	石皿	安山岩	891	6.2	4.4	3.9	断片
			SI-049	0155	石皿	多孔質安山岩	640	6.2	4.4	4.8	断片、凹み痕
117	87	208	SI-050	0104	石皿	安山岩	4183	8.4	9.0	3.5	断片、両面平削、微面再加工(磨削、打撃)
			SI-052	0029	石皿	多孔質安山岩	888	4.5	7.2	3.7	焼熟、断片
117	87	209	SI-058	0155	石皿	安山岩	4315	7.5	12.4	4.8	断片、表平削・裏面凹削、焼熟
			SI-080	0006	石皿	多孔質安山岩	1429	9.1	6.6	5.2	
117	87	210	T25-47	0001	石皿	緑色岩	12787	12.4	12.2	5.6	断片、両面平削、表面に凹み痕3
			T25-69	0001	石皿	安山岩	2192	8.5	6.1	5.0	断片
			Z22-35	0002	石皿	多孔質安山岩	1673	5.5	5.3	6.0	
			Z22-35	0006	石皿	安山岩	1042	6.1	4.1	3.5	両面平削
			Z22-43	0005	石皿	多孔質安山岩	1198	8.1	4.8	4.3	断片、焼熟、両面凹削
			Z22-48	0001	石皿	安山岩	1273	6.3	1.7	5.7	断片、表面凹削、片面凹削
			Z23-24	0001	石皿	安山岩	2967	6.9	5.5	4.3	焼熟、片面凹削
118	88	211	SI-001	0003	微面調整済	砂岩	1089	6.2	4.7	2.9	焼熟、一端縁に緑打痕
118	88	212	SI-001	0028	微面調整済	砂岩	706	6.3	3.7	2.1	焼熟、全周に緑打痕
118	88	213	SI-002	0091	微面調整済	砂岩	778	4.2	5.7	2.1	焼熟、半欠

採種	国産	番号	選種番号	遺物番号	器 種	石 材	重量g	径cm	軸cm	厚cm	備 考
118	88	214	SI-002	0003	横山調整埴	安山岩	595	6.1	4.5	15	焼熟、二條線に線打痕
118	88	215	SI-002	0035	横山調整埴	砂岩	2037	8.7	5.8	22	焼熟、二條線に線打痕
118	88	216	SI-002	0256	横山調整埴	砂岩	825	8.8	3.7	20	二條線に線打痕
118	88	217	SI-002	0331	横山調整埴	流紋岩	1069	7.0	3.3	20	焼熟、上下両端欠損、二條線に線打痕
118	88	218	SI-003	0296	横山調整埴	石炭炭岩	920	6.7	4.0	22	二條線に線打痕
118	88	219	SI-003	0325	横山調整埴	砂岩	1536	7.9	7.5	18	焼熟、全周に線打痕
118	88	220	SI-006	0021	横山調整埴	流紋岩	711	5.6	3.7	26	焼熟、一條線に線打痕
118	88	221	SI-006	0110	横山調整埴	砂岩	339	5.2	4.9	11	焼熟、一條線に線打痕
118	88	222	SI-008	0196	横山調整埴	流紋岩	544	5.5	4.9	17	焼熟、二條線に線打痕
118	88	223	SI-010	0008	横山調整埴	砂岩	484	5.4	4.0	15	焼熟
118	88	224	SI-010	0052	横山調整埴	砂岩	702	6.0	5.2	15	焼熟
			SI-010	0018	横山調整埴	砂岩	614	5.5	4.6	18	焼熟、一條線に線打痕
			SI-010	0279	横山調整埴	石炭炭岩	393	3.4	4.4	14	焼熟、一條線に部分のな線打痕
118	88	225	SI-010	0381	横山調整埴	石炭炭岩	998	8.2	4.5	19	焼熟
118	88	226	SI-010	0382	横山調整埴	砂岩	770	7.0	4.8	16	焼熟
118	88	227	SI-011	0030	横山調整埴	砂岩	1515	7.5	6.0	20	焼熟
118	88	228	SI-012	0132	横山調整埴	流紋岩	938	7.4	5.3	15	焼熟、灰色付着物
118	88	229	SI-013	0068	横山調整埴	砂岩	1648	7.0	6.6	28	焼熟
119	88	230	SI-015	0112	横山調整埴	砂岩	913	7.1	4.7	20	焼熟
119	88	231	SI-018	0001-1	横山調整埴	流紋岩質凝灰岩	715	6.5	4.7	18	焼熟
119	88	232	SI-018	0011	横山調整埴	砂岩	479	4.0	4.7	20	焼熟、断片
119	88	233	SI-018	0025	横山調整埴	砂岩	700	5.2	4.7	20	焼熟
119	88	234	SI-018	0090	横山調整埴	砂岩	696	6.4	4.9	22	焼熟、約30%欠
			SI-018	0104	横山調整埴	流紋岩	588	5.3	4.2	19	焼熟、半欠、二條線に線打痕
			SI-018	0001-4 主	横山調整埴	流紋岩	871	7.2	4.5	22	焼熟、二條線に線打痕
119	88	235	SI-019	0002	横山調整埴	流紋岩	335	3.2	4.9	24	焼熟、断片
119	88	236	SI-020	0002	横山調整埴	砂岩	403	5.1	4.1	14	焼熟
			SI-021	0047	横山調整埴	流紋岩	608	2.6	3.4	16	焼熟、一端に線打痕
			SI-024	0053	横山調整埴	チャート	1409	6.5	5.6	31	断面に線入(約60%)
119	88	237	SI-025	0103	横山調整埴	砂岩	535	1.8	2.0	06	焼熟
119	88	238	SI-025	0118	横山調整埴	流紋岩	611	6.2	4.2	18	焼熟
119	88	239	SI-025	0123	横山調整埴	石炭炭岩	2657	7.2	5.2	47	焼熟、前門形(球状)
119	88	240	SI-025	0140	横山調整埴	流紋岩質凝灰岩	604	6.8	4.1	17	焼熟、灰色付着物
			SI-025	0079	横山調整埴	砂岩	388	4.3	3.6	21	半欠
119	88	241	SI-026	0038	横山調整埴	流紋岩質凝灰岩	873	7.1	5.6	16	焼熟
119	88	242	SI-026	0054	横山調整埴	流紋岩	1147	7.3	5.7	20	焼熟
119	88	243	SI-030	0068	横山調整埴	流紋岩	744	5.6	4.7	20	焼熟、灰色付着物
119	88	244	SI-030	0076	横山調整埴	砂岩	1591	9.0	6.3	20	焼熟
119	88	245	SI-030	0081	横山調整埴	砂岩	1743	7.3	5.9	29	焼熟
119	88	246	SI-030	0086	横山調整埴	流紋岩	892	6.6	4.7	24	焼熟
119	247	SI-030	0130	横山調整埴	流紋岩	898	5.9	5.6	23	焼熟、二條線	
119	248	SI-030	0225	横山調整埴	砂岩	1200	7.0	6.1	19	線打痕(ほぼ全周)、中央部に彫形石部による凹痕	
120	89	249	SI-033	0001	横山調整埴	砂岩	1962	7.8	5.1	19	焼熟
120	89	250	SI-037	0063	横山調整埴	ダイヤモンド	824	7.1	4.4	17	焼熟
			SI-037	0062	横山調整埴	砂岩	774	7.1	5.0	19	焼熟、全周に線打痕
			SI-037	0077	横山調整埴	砂岩	604	5.5	3.7	21	焼熟、一條線に線打痕
120	89	251	SI-042	0150	横山調整埴	流紋岩	537	5.7	4.3	17	焼熟
120	89	252	SI-042	0181	横山調整埴	石炭炭岩	630	3.7	4.8	16	焼熟
120	89	253	SI-042	0002	横山調整埴	石炭炭岩	2315	7.5	6.4	32	焼熟、円形
			SI-042	0162	横山調整埴	流紋岩	509	5.2	3.8	19	焼熟断片、一條線に線打痕
120	89	254	SI-047	0004	横山調整埴	頁岩	827	6.7	5.5	17	焼熟
120	89	255	SI-048	0079	横山調整埴	流紋岩	1942	8.8	7.0	23	焼熟
120	89	256	SI-049	0152	横山調整埴	砂岩	449	5.7	4.4	13	焼熟
120	89	257	SI-049	0185	横山調整埴	砂岩	1449	6.6	5.6	26	焼熟、一部欠
			SI-049	0018	横山調整埴	石炭炭岩	838	6.2	5.5	29	焼熟、半欠
120	89	258	SI-050	0014	横山調整埴	砂岩	725	8.7	3.7	18	焼熟
120	89	259	SI-051	0096	横山調整埴	砂岩	2061	7.5	5.7	33	焼熟、灰色付着物
120	89	260	SI-053	0026	横山調整埴	砂岩	761	5.3	5.2	20	焼熟
120	89	261	SI-058	0074	横山調整埴	砂岩	359	3.1	4.0	11	焼熟
120	89	262	SI-067	0349	横山調整埴	安山岩	973	7.0	6.0	15	焼熟、四辺形(扁平)、灰色付着物
			SI-067	0492	横山調整埴	安山岩	425	4.5	4.6	17	断面に二條線に線打痕
120	89	263	SI-072	0016	横山調整埴	石炭炭岩	1090	6.6	5.5	23	焼熟
120	89	264	SI-072	0144	横山調整埴	流紋岩質凝灰岩	1279	8.7	4.4	23	焼熟
120	89	265	SI-072	0221	横山調整埴	流紋岩	1738	6.9	6.4	28	焼熟、約50%欠、灰色付着物
120	89	266	SI-072	0223	横山調整埴	石炭炭岩	1069	8.3	4.5	20	焼熟
121	89	267	SK-003	0015	横山調整埴	砂岩	1003	6.8	4.8	23	焼熟
121	89	268	(S)SD-001	0002-2	横山調整埴	砂岩	1135	6.3	5.1	26	焼熟
121	89	269	(S)SD-001	0002-3	横山調整埴	砂岩	3025	8.1	7.2	51	焼熟、円形(球状)、灰色付着物
121	89	270	(S)SD-001	0004	横山調整埴	砂岩	821	6.9	5.1	14	焼熟、線打痕(二條線)、表面中央に損傷
			S19	0001	横山調整埴	安山岩	2835	9.6	7.0	30	焼熟、一端に線打痕
			S21-33	0001	横山調整埴	石炭炭岩	1474	6.6	5.5	27	焼熟、二條線に線打痕
			S21-50	0001	横山調整埴	流紋岩	1530	7.9	5.9	21	焼熟、二條線に線打痕
			S21-54	0002	横山調整埴	流紋岩質凝灰岩	934	6.4	4.5	23	焼熟、一條線に線打痕
			S22	0001	横山調整埴	砂岩	868	6.8	4.6	18	焼熟、二條線に線打痕
			S24-07	0001	横山調整埴	砂岩	947	8.3	8.6	14	焼熟、二條線に線打痕
			S24-33	0001	横山調整埴	流紋岩	567	6.0	4.3	16	焼熟、二條線に線打痕、断片状
			S24-55	0001	横山調整埴	チャート	2104	6.9	4.8	17	焼熟、断面のほぼ全周に線打痕
121	89	271	T24-58	0001	横山調整埴	砂岩	1089	5.7	5.6	19	焼熟

棟目	区画	番号	遺構番号	遺物番号	器 種	石 材	重量g	長cm	幅cm	厚cm	備 考
			T25-38	0001	備前調整埴	埴石	939	6.2	4.8	22	焼熟、二條線跡あり
121	89	272	T25-59	0001	備前調整埴	埴貫片石	335	5.8	8.2	12	焼熟
			U24-22	0001	備前調整埴	埴石	313	3.8	4.5	16	焼熟、新片、二條線に最打痕
			U31-66	0001	備前調整埴	成杖石	1282	7.4	5.9	29	北面に最打痕
121	89	273	U24-66	0001.2	備前調整埴	埴石	825	8.5	4.5	16	一側線跡あり
			U24-85	0001.1	備前調整埴	成杖石	355	5.8	4.2	11	焼熟、一側線に最打痕
121	89	274	Z22-78	0001	備前調整埴	埴石	993	8.3	5.5	13	焼熟
121	89	275	R21-97	0002	備前調整埴	埴石	989	9.7	5.6	12	焼熟
			V25-35	0001	備前調整埴	成杖石	696	6.1	4.7	17	焼熟、二條線
			W22-21	0001	備前調整埴	埴石	1575	7.8	6.6	22	焼熟、一側線加工
			X20-89	0001	備前調整埴	埴石	1821	7.8	5.6	29	焼熟、表面に凹み痕、全周に最打痕
			X21-60	0001	備前調整埴	石夷段石	924	5.7	5.2	21	焼熟、二條線に最打痕
			X22-05	0004	備前調整埴	石夷段石	1662	6.6	5.9	31	全周に最打痕
			Z22-31	0004	備前調整埴	枳板石	918	11.5	4.8	14	焼熟、一部二次加工
			Z22-43	0011	備前調整埴	埴石	960	6.6	5.3	14	焼熟、一端に最打痕
			Z22-47	0001	備前調整埴	埴石	1499	9.5	5.5	20	上下両面に最打痕
			Z22-53	0002	備前調整埴	安山石	1104	5.4	5.7	21	焼熟、平欠、一側線に最打痕
			Z22-53	0006	備前調整埴	安山石	1250	6.8	5.3	24	焼熟、前面に部分的に最打痕
			Z22-77	0001	備前調整埴	埴石	1899	13.4	4.1	24	焼熟、前面に最打痕等
			Z22-87	0001	備前調整埴	ホルンフェルス	2906	13.5	5.9	26	焼熟、三面に最打痕等
			Z22-98	0001	備前調整埴	安山石	1494	7.5	5.6	21	平欠、一側線に最打痕
			Z23-53	0001	備前調整埴	埴石	513	6.6	2.9	26	
			第4トレンチ	0001	備前調整埴	成杖石	672	4.5	5.5	17	焼熟、平欠品、二條線に最打痕
			第6トレンチ	0001	備前調整埴	埴石	1122	3.8	6.8	29	焼熟、新片、前面に最打痕



## 第3章 まとめ

### 第1節 富士見遺跡の縄文時代前期の集落について (第122・123図)

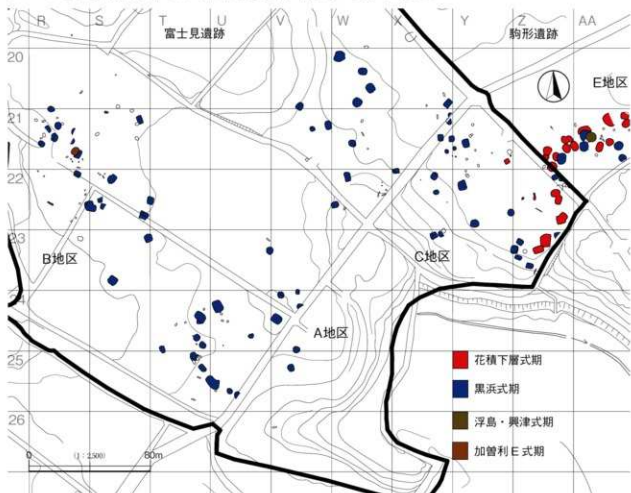
#### 1 集落の概観

今回の報告は、富士見遺跡の南側半分にあたるA～C地区を対象とし、各遺構について出土遺物を含めて述べてきたが、最後に全体を通して集落を概観しておきたい。

A～C地区で検出した竪穴住居は80軒で、A地区20軒、B地区20軒、C地区40軒となる。このうちB地区検出の1軒(SI-027)が縄文時代中期加曾利E式期であるほかは、すべて縄文時代前期に属するものであった。

富士見遺跡は、駒形遺跡、大松遺跡と同じ台地上にあり、この台地は小支谷の進入により大きく3つのエリアに分けられる。小支谷は台地上の微地形へとつながっており、富士見遺跡・駒形遺跡・大松遺跡というくりも、その微地形に基づいたものである。富士見遺跡A地区・B地区がこの台地の基部となる。

今回報告した縄文時代前期の集落も便宜的にA～C地区に区分したが、それは同時期の遺構が視覚的にグループとして捉えられ、それぞれ異なる支谷に面しているからである。



第122図 富士見遺跡時期別遺構分布 (縄文時代)



第123図 富士見遺跡周辺の縄文時代前期遺構分布

第122図に時期別遺構分布を示したが、A・C地区は南東側へ谷を臨み、大松遺跡の縁辺から駒形遺跡の東縁を経て古常陸川へ注ぐ支谷の谷頭部に、B地区は北西側へ支谷を臨み、富士見遺跡西縁から花前遺跡南縁を経て古常陸川へ注ぐ支谷の谷頭部に、C地区北側は富士見遺跡と駒形遺跡の間を経て古常陸川へ注ぐ支谷の谷頭部にそれぞれあたる。

## 2 花積下層式期の集落

花積下層式期は駒形遺跡でⅡ a 期とした時期で、富士見遺跡C地区東側から駒形遺跡E地区へと環状につながる集落がみとれる。隣接部分の大松遺跡は未整理であるが、駒形・富士見遺跡からつながるように堅穴住居が検出されている。大松遺跡が位置する台地基部において、南側へ支谷を臨む位置に形成され

た環状の集落とみられる。また、遺構内貝層や富士見遺跡C地区で検出した貝層(SX-003)を伴うことが明らかである。

### 3 黒浜式期の集落

隣接する駒形遺跡では二ツ木式期の遺構が1か所、関山式期の遺構が3か所で検出されているが、富士見遺跡A～C地区ではこの時期の遺構がみられない。かわって黒浜式期の遺構は、各地区で主体的に検出されている。富士見遺跡南半分をみると台地中央部は集落域として利用されず、南・西・北から進入する小支谷に沿って遺構が分布する。A地区は堅穴住居が環状に分布しているとみられることもできるが、全体に散漫な状況である。C地区はまとまりがなく、南側に進入する谷に面してやや密度が高いが、粗密はあるものの北側から進入する支谷に面する駒形遺跡H地区まで断続的に遺構が検出されている。第123図には富士見・駒形両遺跡の縄文時代前期の遺構を示したが、台地縁辺の遺構密度が高いものの、谷頭部を結ぶ線上にも遺構が散在する様子がみられる。富士見遺跡北側部分、大松遺跡北側部分など現状で未整理の調査地点も多くあり、これらの整理作業の成果によって詳細な状況が明らかになり、言及できる部分も出てくると思えるが、南北約800m、東西約600mというエリアの中での集落の動向として興味もたれる。

## 第2節 軽石製品について(第124～126図)

### 1 概要

C地区に位置するSI-044とSI-048の2軒の縄文時代前期の堅穴住居から出土した2点の軽石製品について記載する。擦り面があることと、把手様突起の付け根に指が当たったと思われる窪みがあることからヤスリの用途を想定した。ここでは「摩擦具」としたが、これは使用方法を意味するだけで、製品本来の目的を示していない。この製品は摺動による摩擦で対象物に何らかの変化をもたらすものと考えられ、細部を詳細に観察してその用途の可能性を探ってみたい。

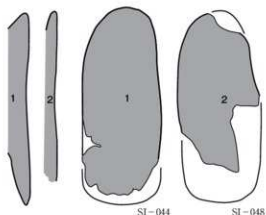
### 2 特徴

この2点の形状で、異なる部分は把手様の突起部だけで、基本的な構成は同じものといえる。以下に共通点をあげる。

- ・軽石製である。
- ・擦り面と把手からなり、擦り面は僅かに湾曲する。
- ・擦り面に対して同じ長軸方向の把手様突起がある。
- ・擦り面の湾曲度合いはほぼ一致する。
- ・擦り面の形状、寸法もほぼ一致するとみられる。
- ・把手様突起に線刻文様がある。
- ・把手様突起の付け根部分に僅かな窪みがある。

線刻文様は用途と直接結びつくものではないが、同じ部位に文様を施すことから一つの用途として完成された製品であるといえる。

擦り面の現在の形状は、使用により磨滅した結果であり、使用面の形状が対象物の形状をある程度反映しているといえる。擦り面の長さは現状10cm程度、横幅は4cm程度で、長軸方向の擦り面は凹面となり、そのカーブは曲率から半径20cm前後と推定できる。擦り面は全体が一様の磨滅度合いであり、部分的な偏摩耗はみられない。擦り面は長軸方向の前後運動であったことは疑う余地がなく、対象物は半径20cm以下



第124図 軽石製品の擦り面 (S=1/2)



把手付け根 SI-048



擦り面 SI-044



擦り面 SI-048

第125図 軽石製品

の球体に近い形状のものが考えられる。また、短軸方向がかまぼこ形の摩耗となることから、短軸幅より大きいものと考えてよい。

### 3 類例

これまであまり気にすることがなかった軽石製品であるが、擦り面が認められる軽石製品は他の縄文時代前期の遺跡からも出土している。悉皆的調査を行ったわけではないが、類例を上げておく（第10表）。

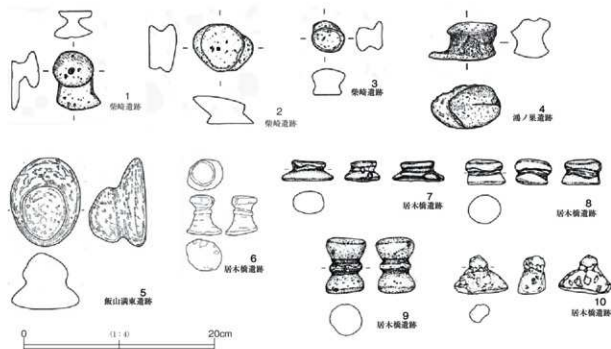
この他にも多くの出土例があると思われるが、本例のように線刻文様を施したものの類例は見つけられなかった。いずれも軽石製であり、擦り面と把手の間が細くなっていることから浮子として報告されていることも少なくない。しかし、我孫子市柴崎遺跡の報告では、その形状から「スタンプ状」と表現し、その特徴として「紐とくびれをもち、底面が平坦に磨滅されている」ことを挙げている。ここではすでに浮子以外の使用目的をもって製作されたものとしている。

### 4 用途について

類例を含めここで取り上げたのはすべて軽石製である。他の石材を用いた例は認められないことも大きな特徴といえる。素材となった軽石も、指の跡が残るように軟質なものであり、周縁部がかなり薄くなるまで使われている。

擦り面と把手をつなぐ細い部分も折れずに残っており、それほど硬質ではない球体に近い対象物に、あまり力を加えずに使用したものと考えられる。

ここからは想像の域を出ないものとなるが、本遺跡出土の2点の摩擦具を、把手の窪みに合わせて手に



第126図 軽石製摩擦具の類例

第10表 軽石製摩擦具出土例

番号	遺跡名	所在地	時期	出土構	文献
1	柴崎遺跡	千葉県我孫子市	黒浜	29号住居址	3
2	柴崎遺跡	千葉県我孫子市	黒浜	20号住居址	3
3	柴崎遺跡	千葉県我孫子市	黒浜	27号住居址	3
4	鴻ノ巣遺跡	千葉県柏市	黒浜	第3号住居址	1
5	飯山満東遺跡	千葉県船橋市	黒浜	第13号住居址	2
6	居木橋遺跡A地区	東京都品川区	諸磯	遺構外	5
7	居木橋遺跡D地区	東京都品川区	諸磯 a	6号住居跡	5
8	居木橋遺跡D地区	東京都品川区		遺構外	5
9	居木橋遺跡D地区	東京都品川区	関山	8号住居跡	5
10	居木橋遺跡D地区	東京都品川区	関山	8号住居跡	5

取ったところ、よく手になじむことがわかった。

現在、軽石といえばかかとの角質除去がもっぱらの用途であるが、最近まで体毛の除去にも使われていたものである。そこで遊び心を出して、手に握った本製品を顔に当ててみたところ、気持ちいいほどの密着感があることがわかった。

人体頭部は本製品の磨滅形状とも合致し、さらに軽く擦るという使用は顔面を含む頭部を考えた場合、実に自然な動作といえる。なんら積極的な論拠はないが、遺物に残された状況から、一つの可能性として髭剃り、頭髮の除去等に使用したのではないかということ提起したい。

#### 引用参考文献

- 1 財団法人千葉県都市公社 1974「柏市鴻ノ巣遺跡」
- 2 財団法人千葉県都市公社 1975「飯山満東遺跡」
- 3 我孫子市教育委員会 1976「我孫子市柴崎遺跡調査報告書（第3次・第4次）」
- 4 品川区遺跡調査会 1991「居木橋遺跡3（B・D地区）」
- 5 加藤建設株式会社 2012「東京都品川区居木橋遺跡（A地区）-居木橋遺跡第11次発掘調査報告書-」

### 第3節 縄文時代の石器

縄文時代の石器は合計1,352点出土した。そのうち利器は大別14種、計574点を数える。

内訳は、石鏃（石鏃未成品含む）110点、楔形石器115点、石匙6点、石錐（石錐未成品含む）5点、二次加工ある剥片26点、使用痕ある剥片1点、打製石斧16点、磨製石斧75点、局部磨製石斧1点、磨石類51点、敲石27点、手持ち砥石3点、石皿33点、及び側面調整礫105点である。

これらの利器のうち石鏃、石錐、及び楔形石器等については、遺跡内で製作された痕跡をとどめるが、他の石器群、特に礫石器は搬入品である。さらに礫石器のうち磨製石斧や石皿は破損後、しばしば再加工され、他の器種に転用されている。

微視的には、剥片石器は遺構の内外を問わないが、磨製石斧、石皿、側面調整礫等の礫石器は遺構内出土が多く、全体の約70%に達している。このことは場の機能（作業及び保管）を反映している。

さて、今回これらの石器群のなかで新たに「側面調整礫」を見出した。その特徴は以下のとおりである。

- ・遺構内出土が多く全体の約70%を占める。この数値は磨製石斧や石皿に近い。
- ・数量的には出土石器の約20%（105/574）を占め、比重が大きいことから日常的な使用が想定される。
- ・石材は他の礫石器と異なり砂岩が多用され砥石の用材に近い。
- ・素材が小型で扁平な円礫であり手持ちの使用が想定される。
- ・例外なく被熱資料である。熱により赤く変色し、時として黒色タール状の付着物や表面の剥落がみられる。また赤化の程度に差があることから複数回の焼き直しの可能性が高い。
- ・側面に調整痕（敲打痕・磨耗痕）が連続する。ただし、敲打痕は当該器種の整形を目的としており、敲石のような対象物への敲打によって生じた痕跡ではない。また磨耗痕も磨石とは異なり擦れ（擦痕）に近い。これらのことから通常の敲石や磨石類からは除外される。敲石あるいは磨石類ではなく、「側面調整礫」とした所以である。
- ・完形率が高率なこと（約85%）から破損が生じにくい間接的な生産用具の可能性が考えられる。

残念ながら今のところ側面調整礫の機能については直接的な証拠に欠ける。しかしながら、以上の特徴、特に日常的な使用、遺構出土、用材（砂岩主体）と置き砥石の欠落の兼ね合いを考え合わせ、ここでは乳棒状磨製石斧の研磨具の可能性を指摘しておきたい。

翻って、縄文時代石器研究のスペシャリストの小林康男によれば、当該期は縄文海進による地域間の違いが際立っており、太平洋岸の那珂川・利根川下流域や東京湾西岸では釣針や石錘等の漁撈具や礫器の出土が顕著であるのに対して、本遺跡の位置する東京湾東岸や奥東京湾岸では、漁撈具はほとんどなく、石鏃、石匙、石皿、凹石、磨製石斧などの狩猟採集関連の組成を示しているという。また、この時期の当該地域を特徴づけるものとして磨製石斧の一般化と乳棒状磨製石斧の定形化が指摘されている（小林1983）。

以上の小林の見解に照らし合わせると、本遺跡の石器組成は房総における前期前半（花積下層～黒浜期）のまさに典型例である。今回、これを遺構単位で提示ができたのは大きな収穫であった。

ところで遺跡内で製作された石器は石鏃をはじめとした剥片石器であり、未成品もみとめられる。これに対して礫石器は、いずれも搬入品であり、破損後は再加工され、中には他の器種に転用されているものもある。特に磨製石斧や石皿については徹底的に使い尽くされており、下総という石材消費地の特性がよくあらわれている。

石鏃等の剥片石器はチャートと黒曜石（信州・神津島）が二大石材であるが、礫石器は個性的であり、打製石斧にはホルンフェルス、磨製石斧には緑色岩、磨石類・石皿には安山岩、側面調整礫には砂岩がそれぞれ多用されている。このことはそれぞれの機能に応じた石材の使い分けがあったことを物語っている。

これらの石器石材の産地は基本的に鬼怒川系を主体とした北関東方面であるが、磨製石斧に使われている緑色岩に限っては、埼玉県北西部方面であり、利根川支流の神流川中流などに分布する秩父帯北帯の万場サブユニットのもとと推定されている（中村2013）。

ちなみに旧石器時代の石器石材は、東北、中部・東海などから搬入され、比較的広範囲であるが、縄文時代は現地調達の基本であり、石材産地はほぼ関東一円に限られる。

#### 引用参考文献

小林康男 1983「組成論」『縄文文化の研究7 道具と技術』pp.16-27 雄山閣出版株式会社

中村由克 2013「後期旧石器時代前半期における石斧石材の特質と意義」『考古学ジャーナル』No.640 pp.27-31

ニューサイエンス社

# 写 真 图 版





花前II遺跡

花前I遺跡

花前III遺跡

矢船I遺跡

駒形遺跡

矢船II遺跡

富士見遺跡

大松遺跡

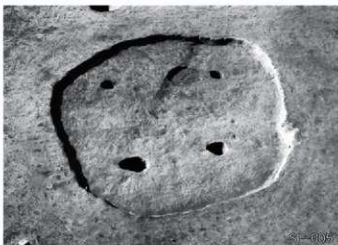
原畑遺跡

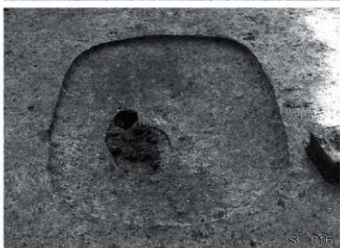
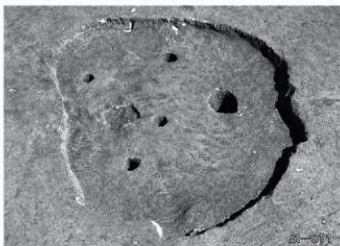
小山台遺跡

寺下前遺跡

宮前遺跡

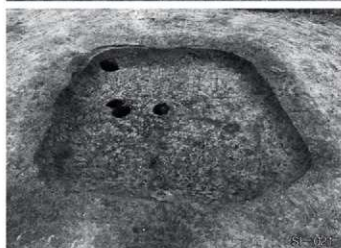
八反目台遺跡

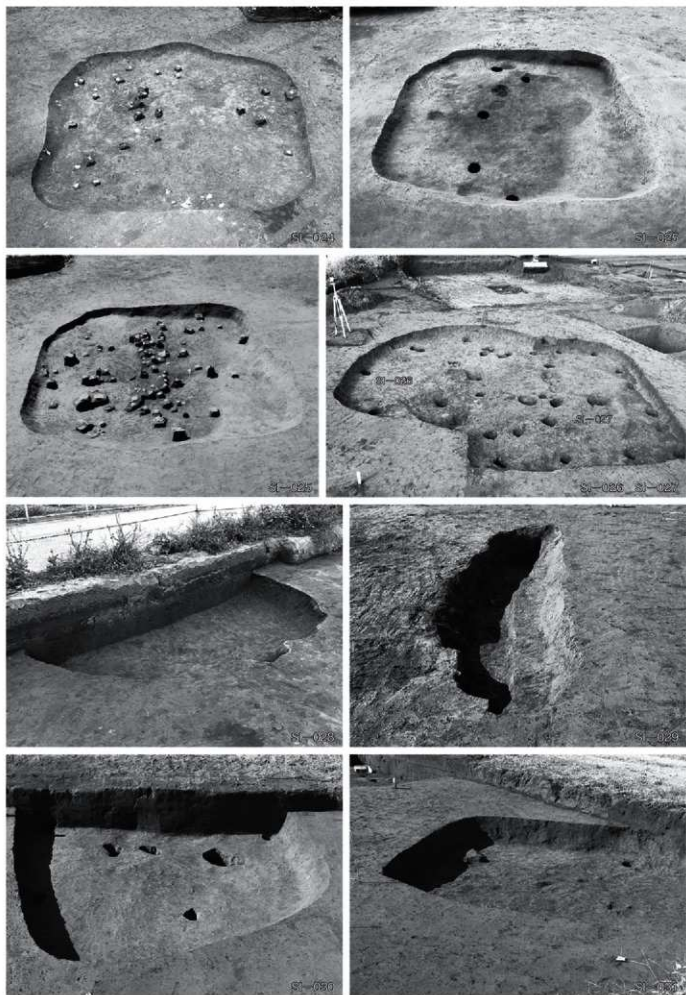




鑿穴住居 (2)

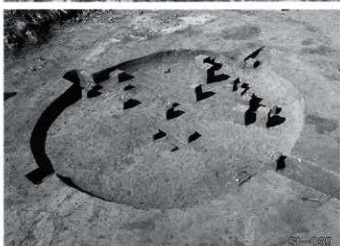
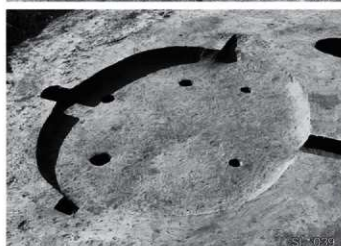






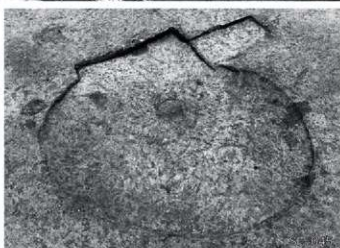
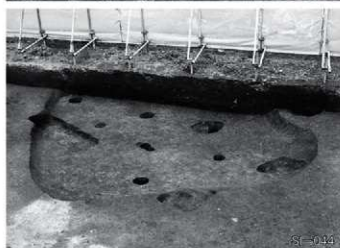
竖穴住居 (4)





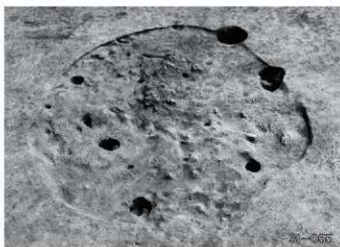
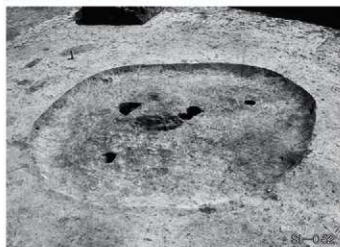
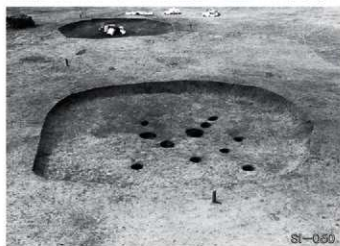
竪穴住居 (6)





鑿穴住居 (7)





鑿穴住居 (8)

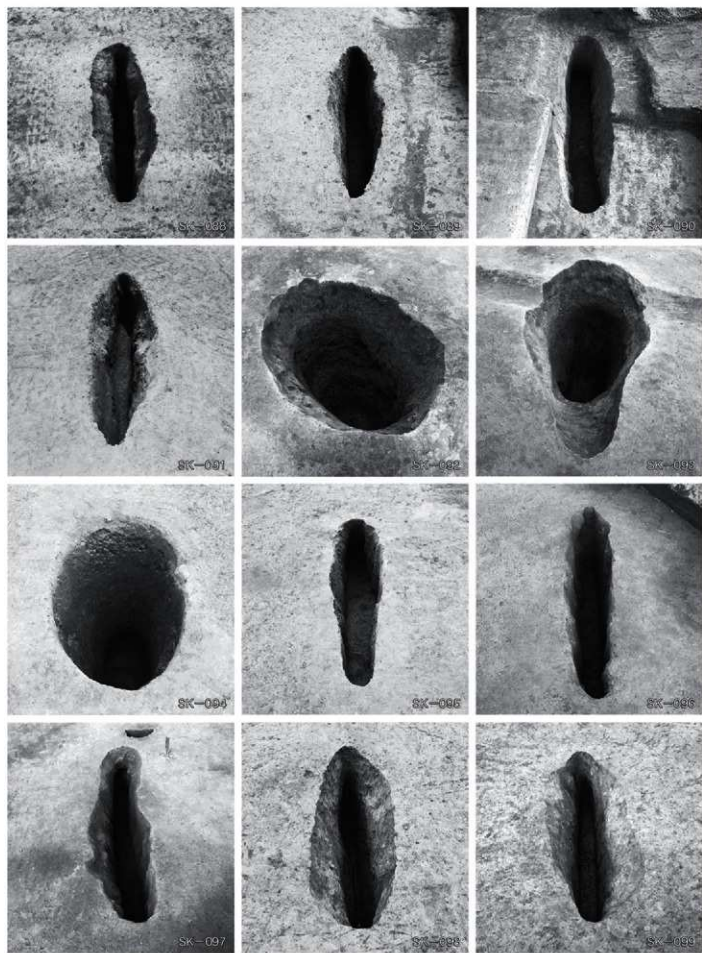




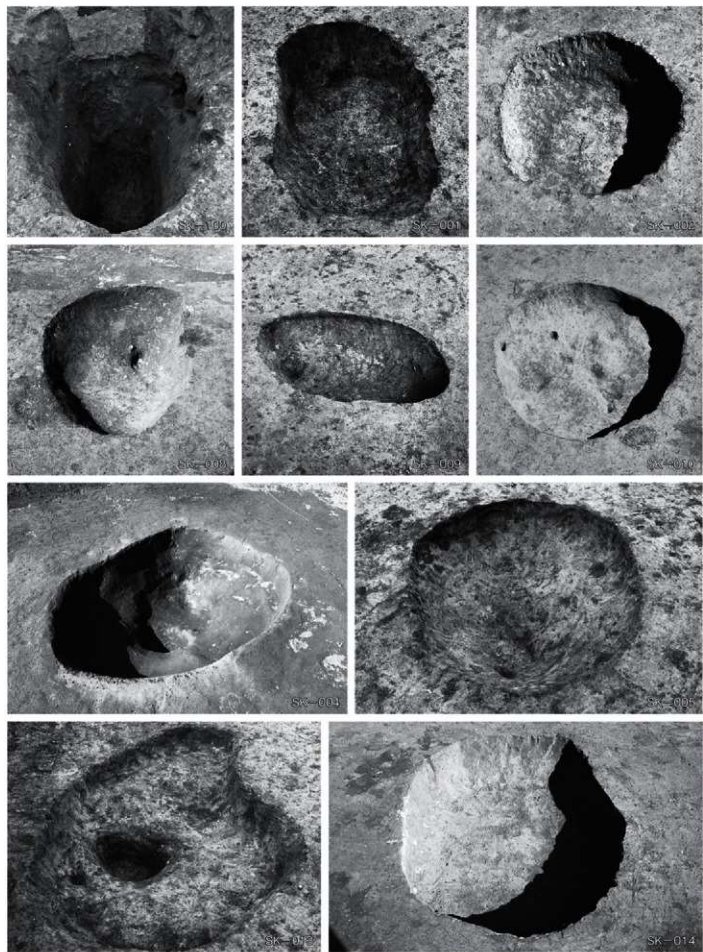
鑿穴住居 (10)

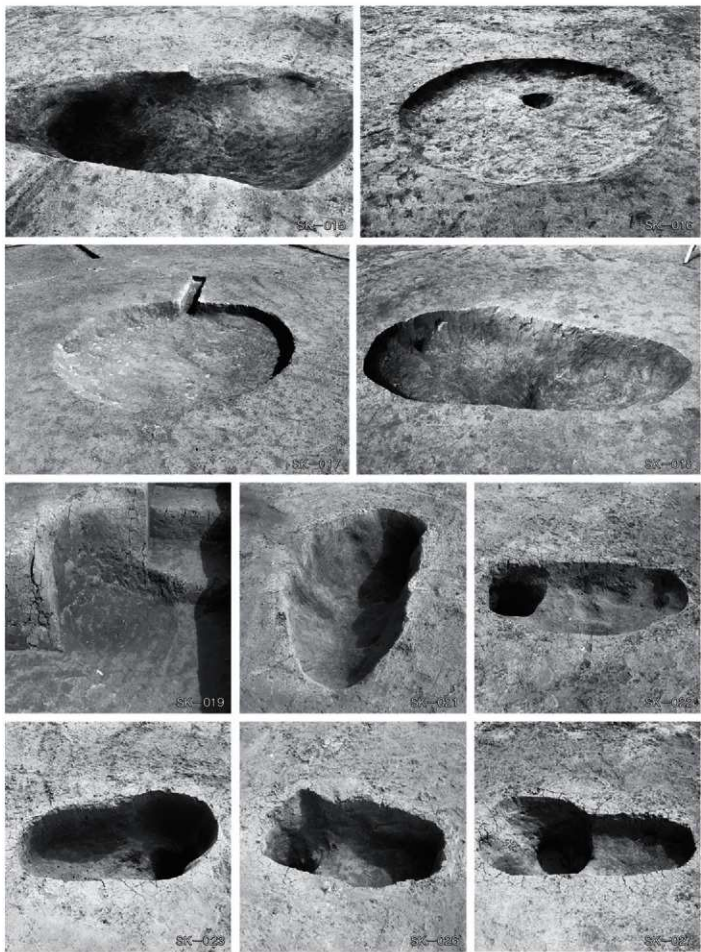






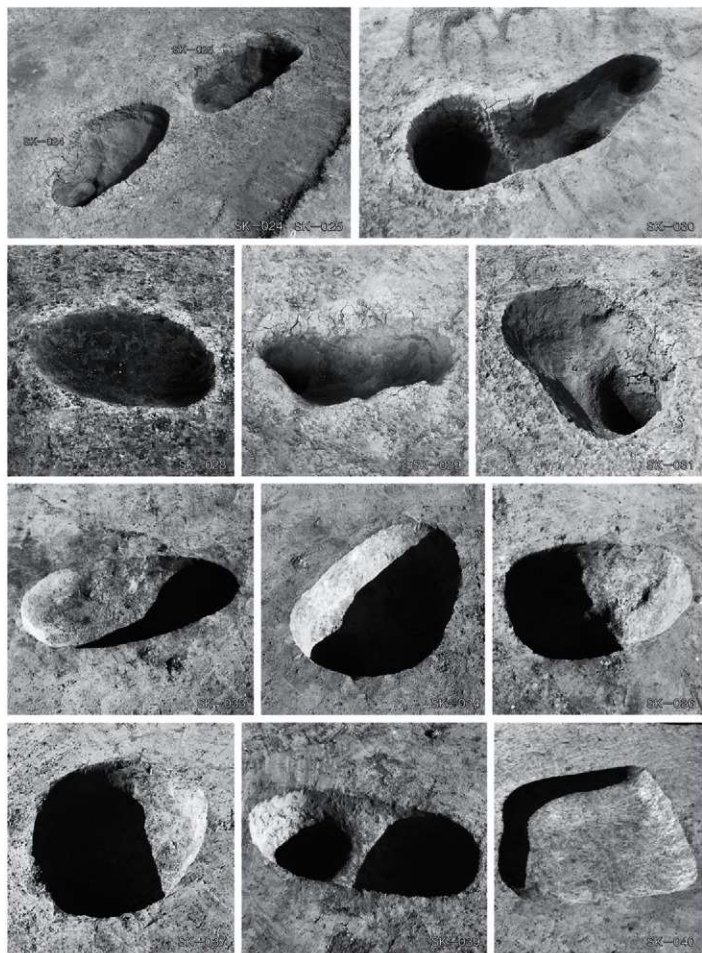
土坑 (1)



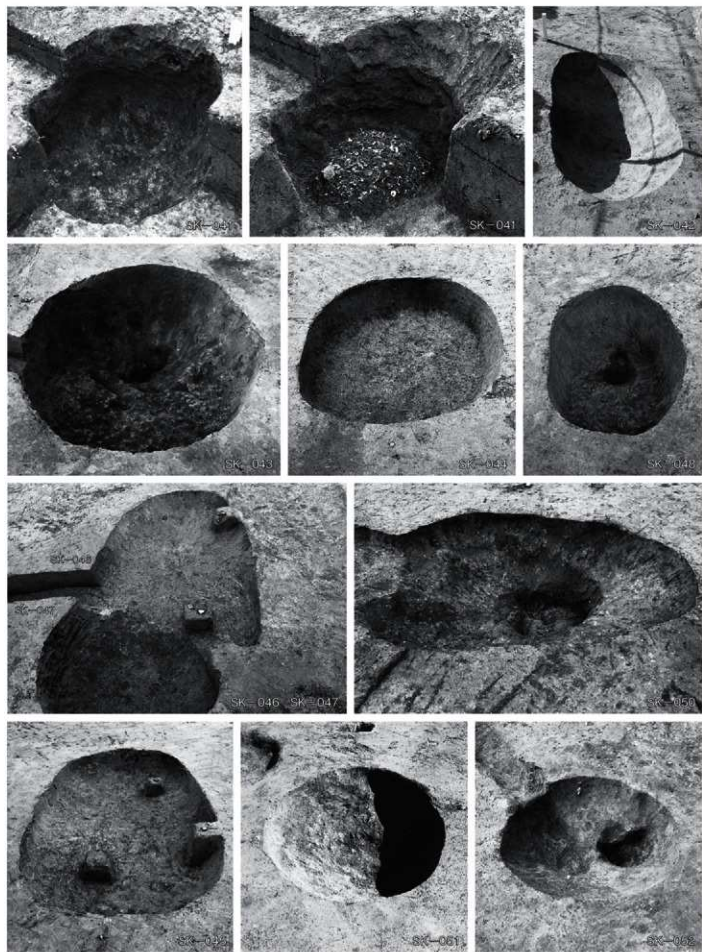


土坑 (3)

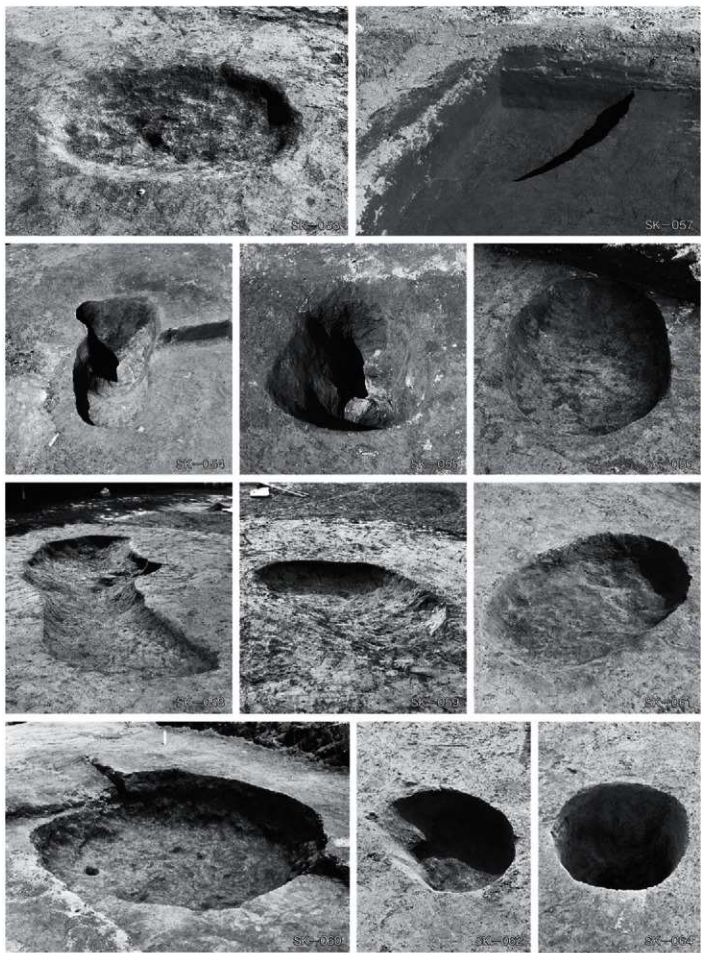


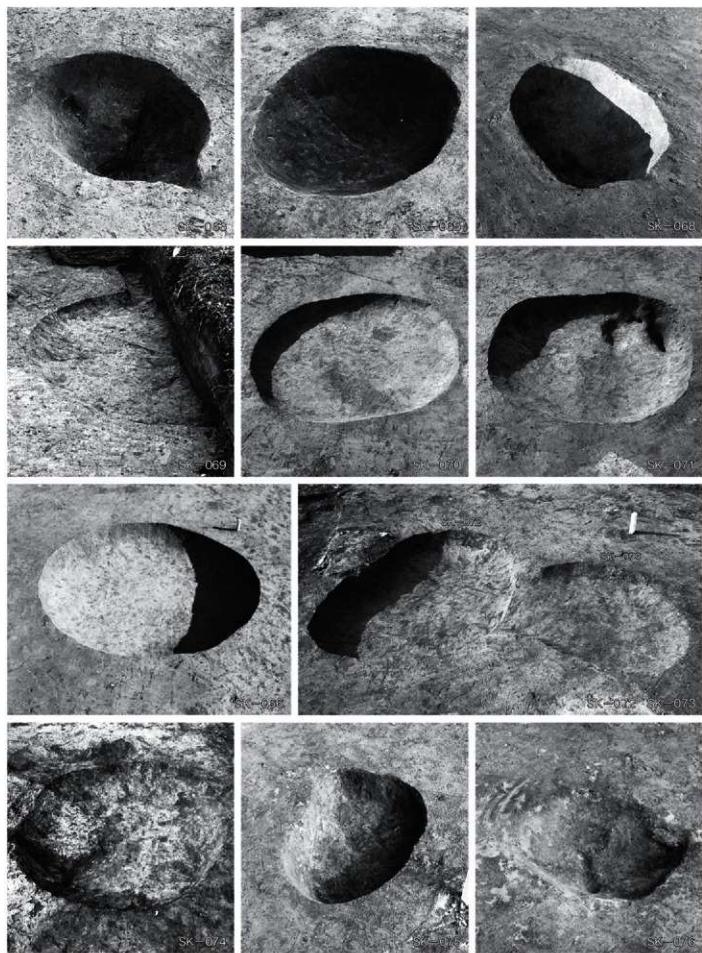




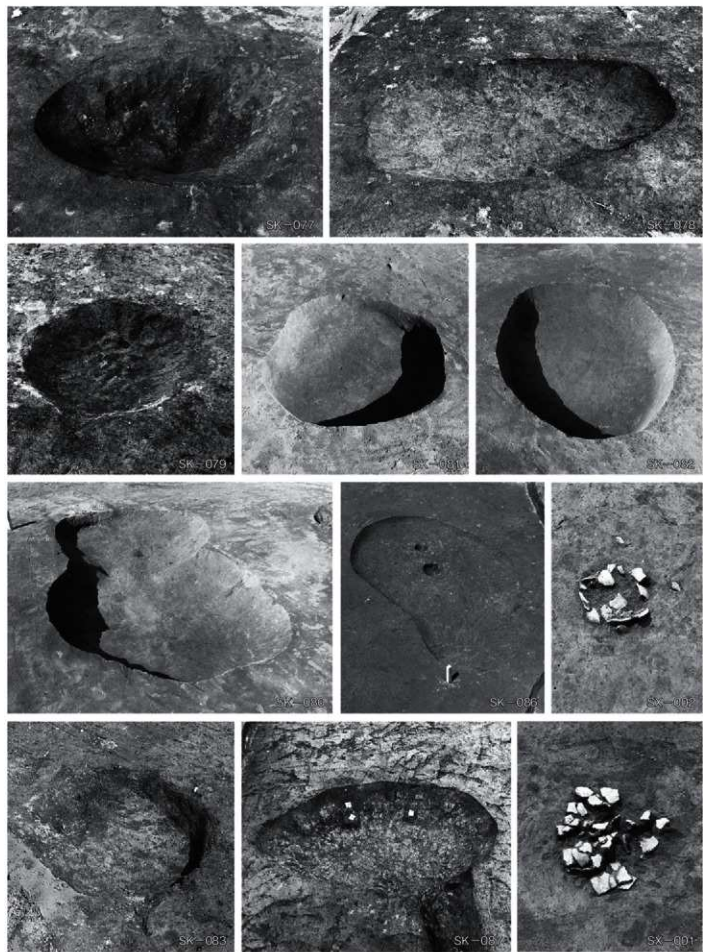


土坑 (5)



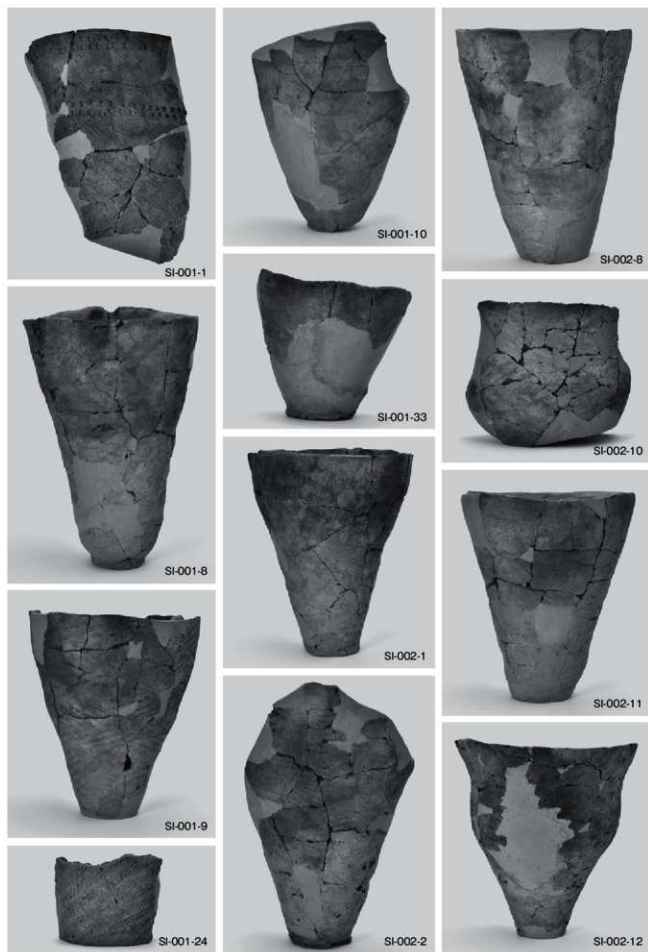


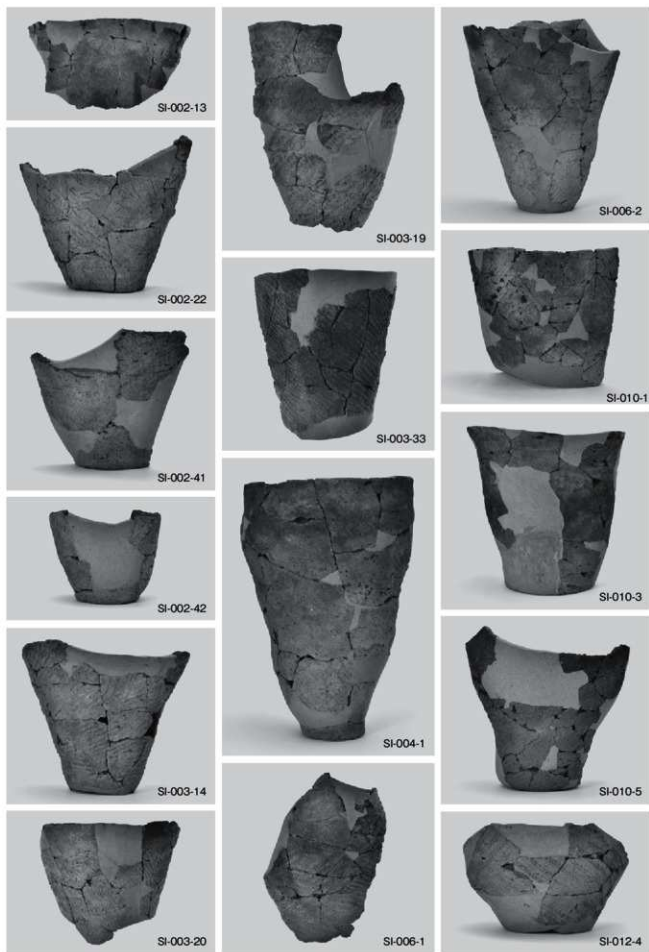
土坑 (7)

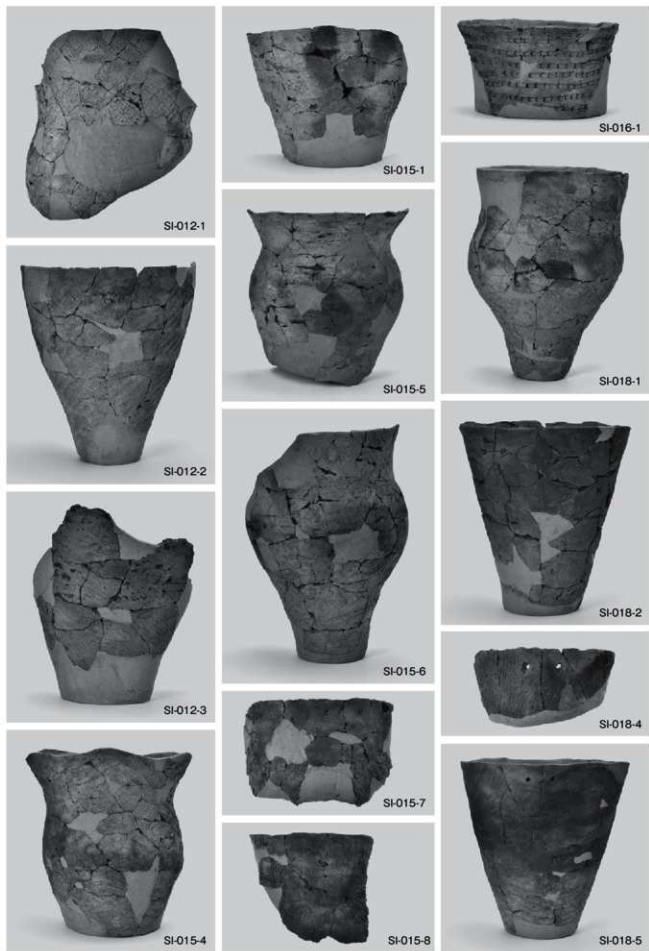


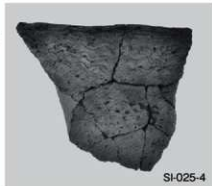
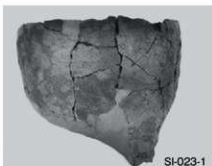
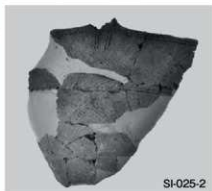
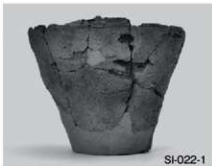
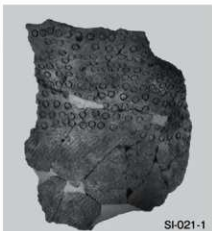
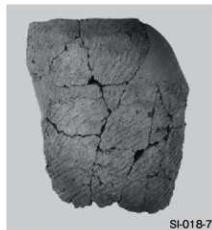
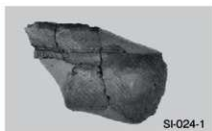
土坑(8)















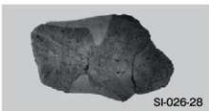
SI-025-5



SI-026-1



SI-026-6



SI-026-28



SI-027-29



SI-025-7



SI-026-2



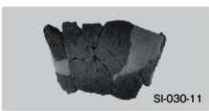
SI-030-1



SI-025-8



SI-026-3



SI-030-11



SI-025-68



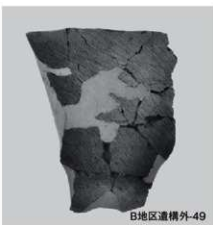
SI-026-4



SI-033-1



SI-037-1



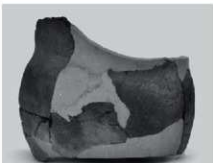
B地区遺構外-49



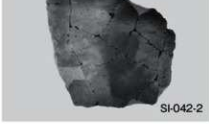
SI-042-1



SI-038-1



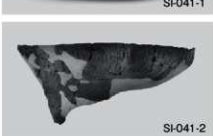
SI-041-1



SI-042-2



SI-038-10



SI-041-2



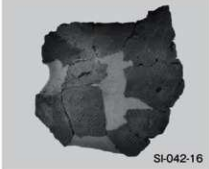
SI-042-3



SI-040-6



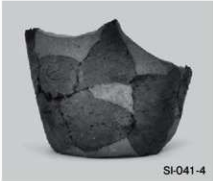
SI-041-3



SI-042-16



B地区遺構外-30



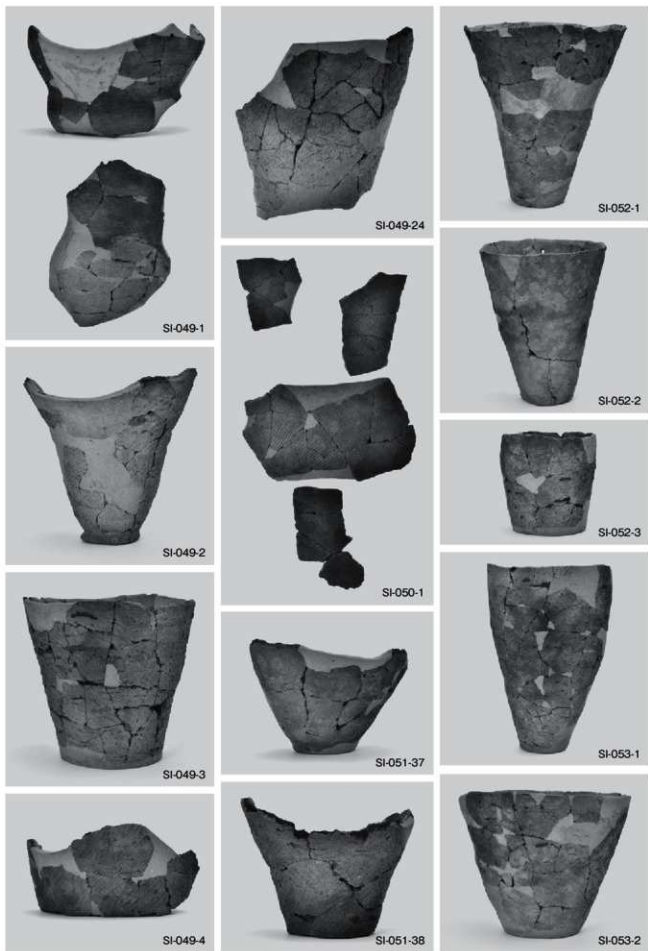
SI-041-4

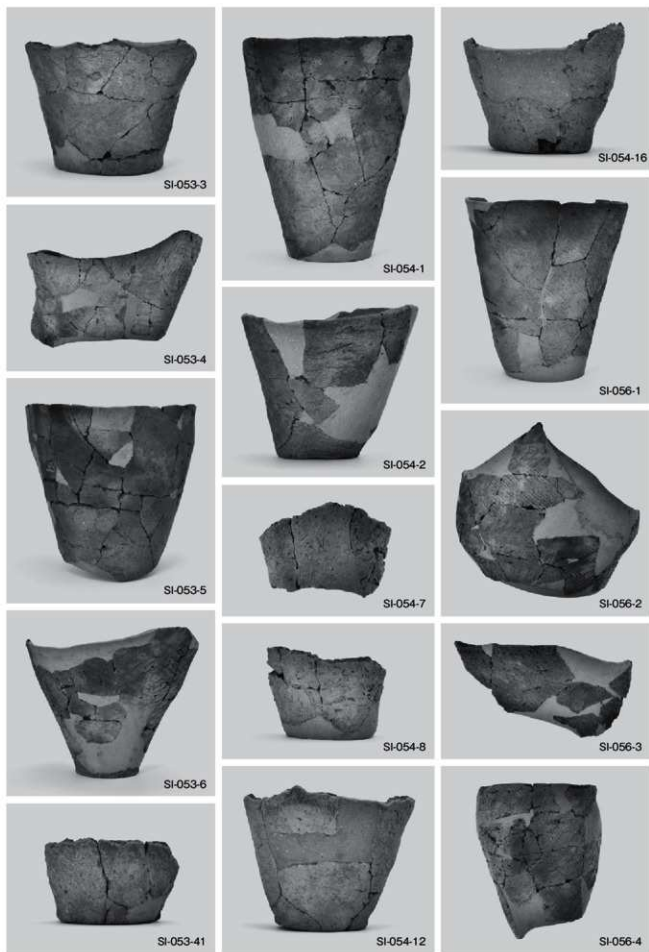


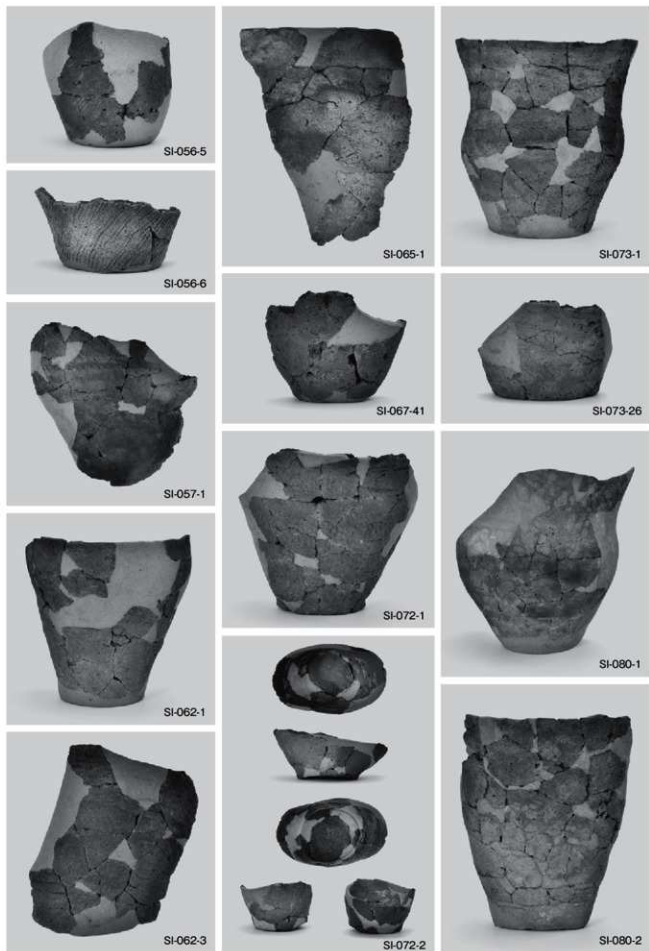
SI-042-19

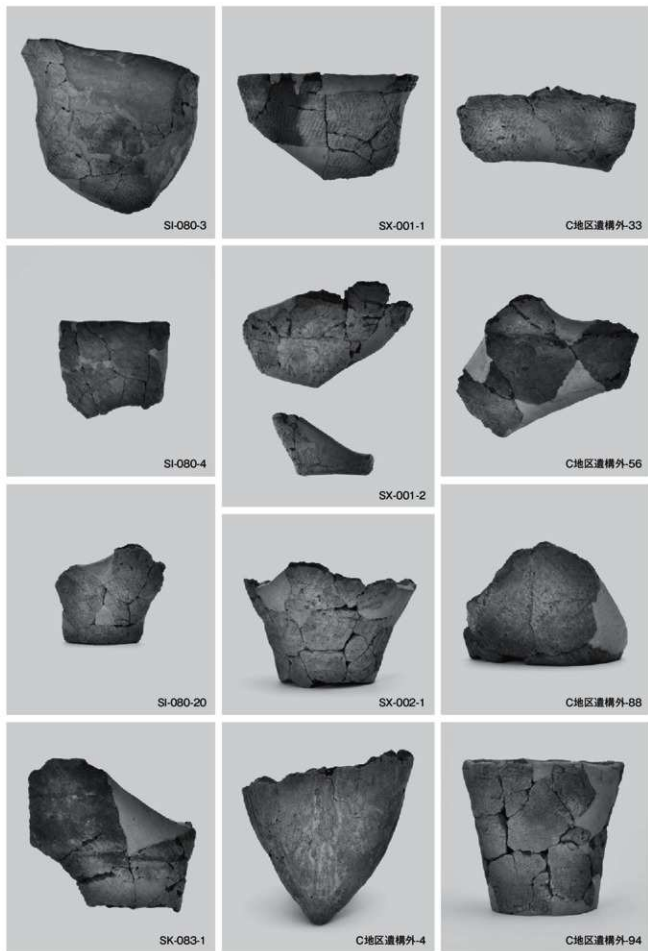


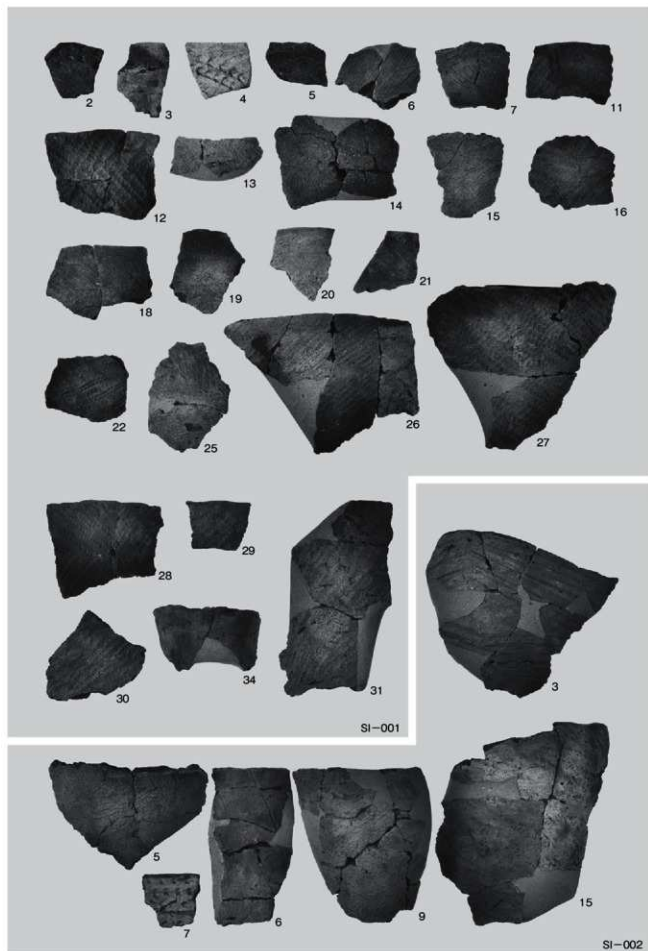
SI-048-21







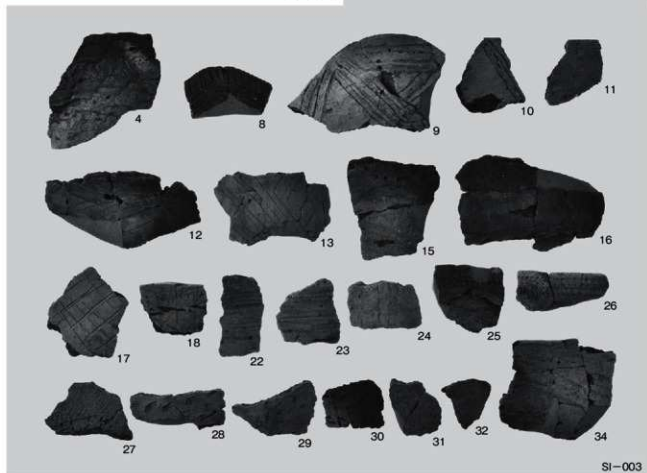
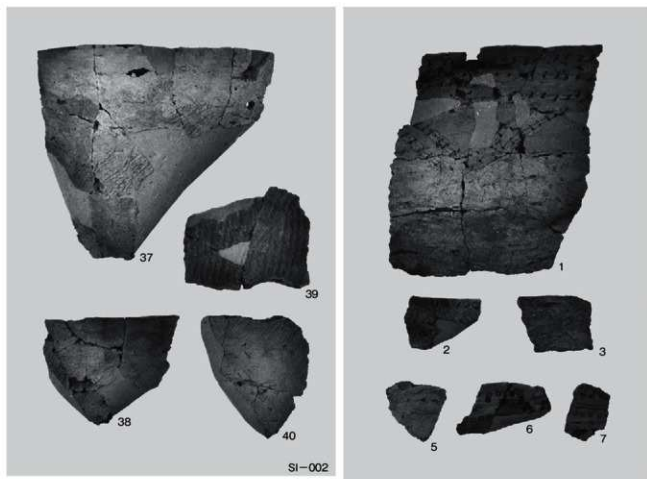


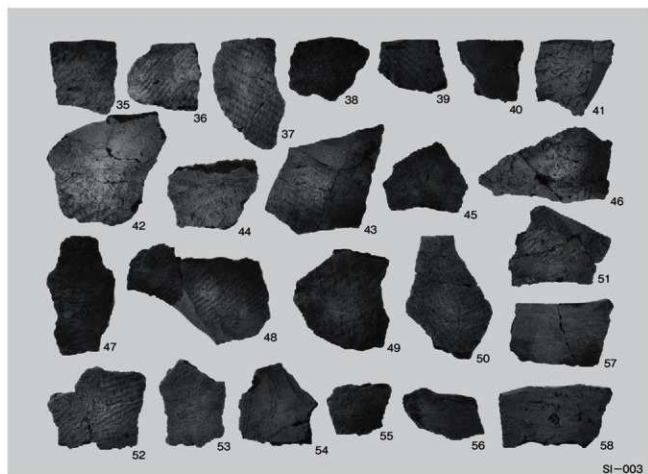




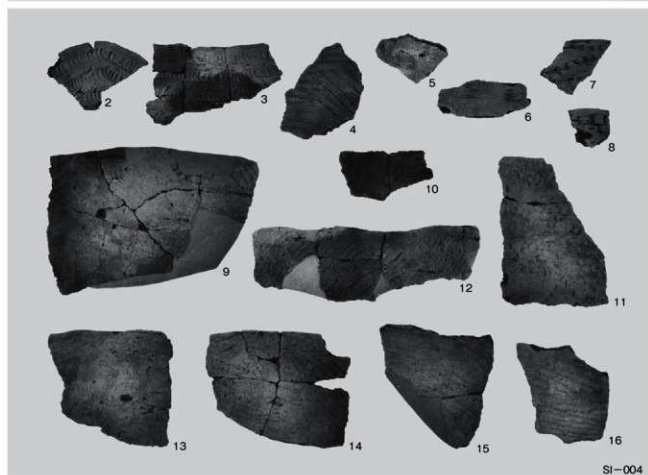
SI-002



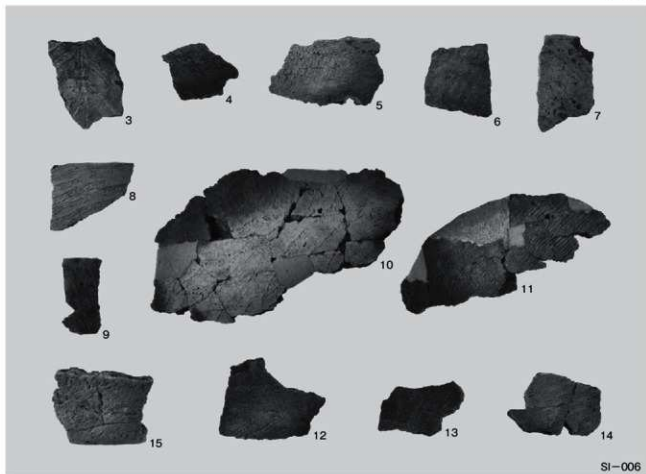
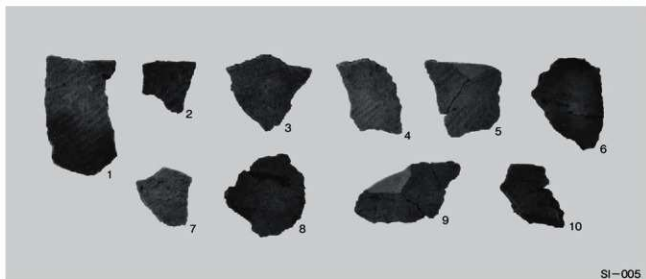
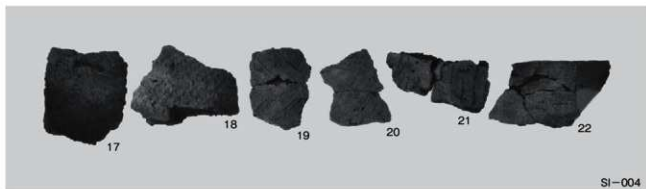


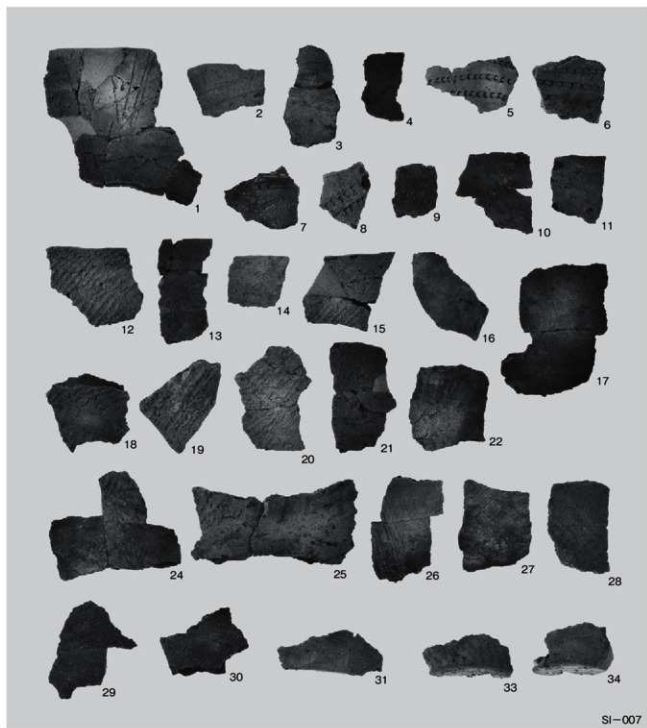


SI-003

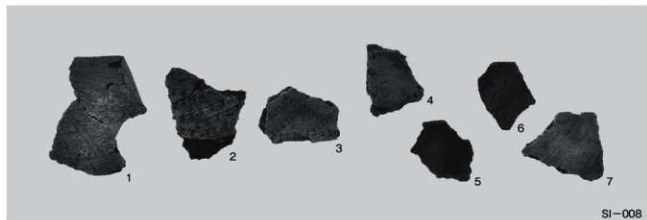


SI-004

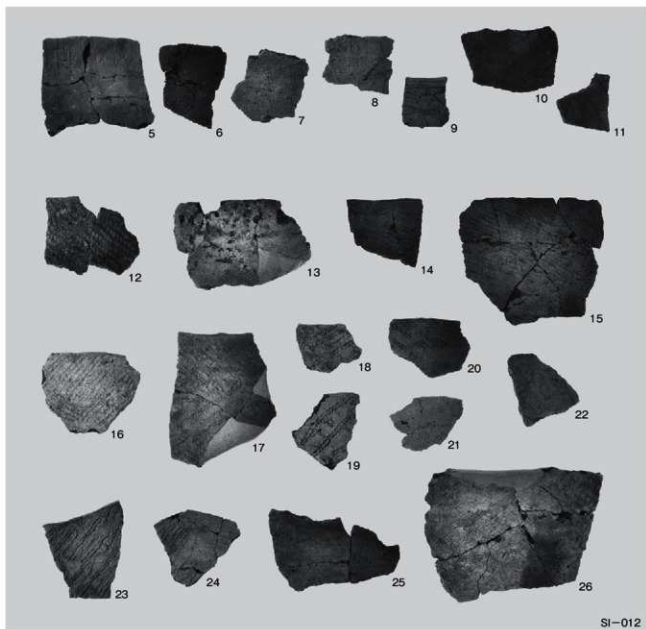
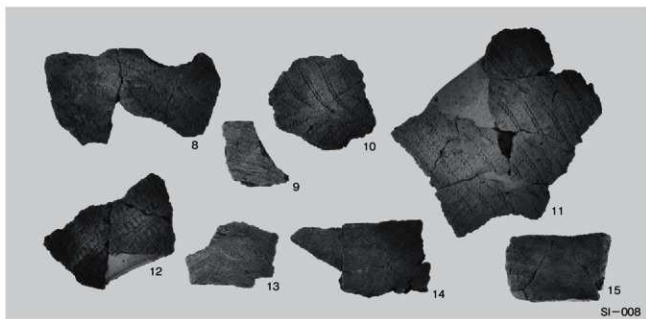


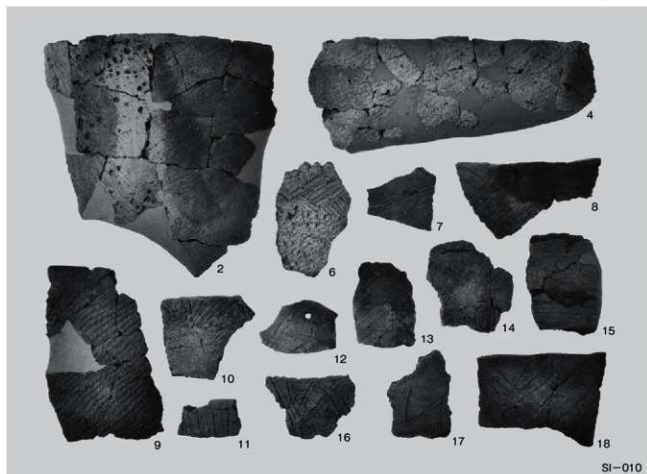
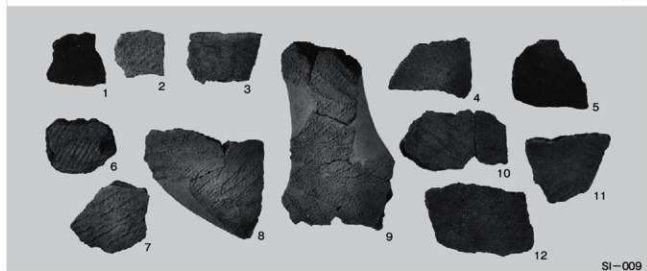
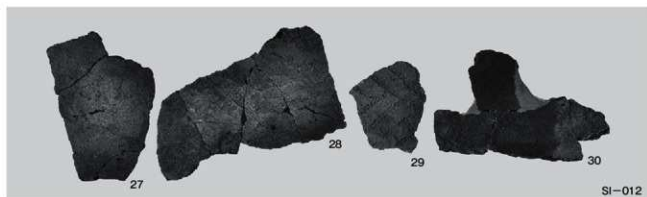


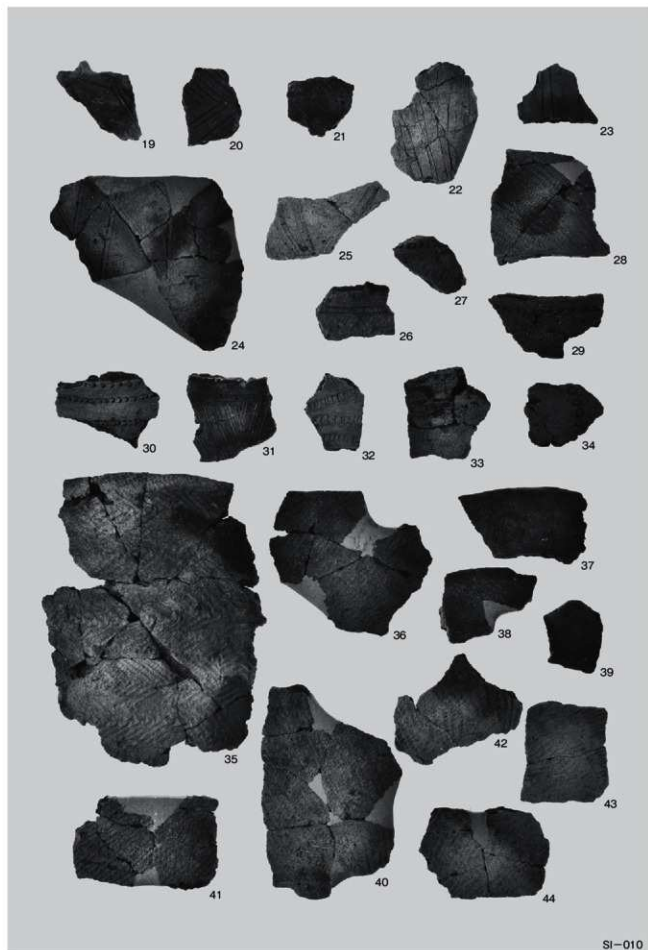
SI-007



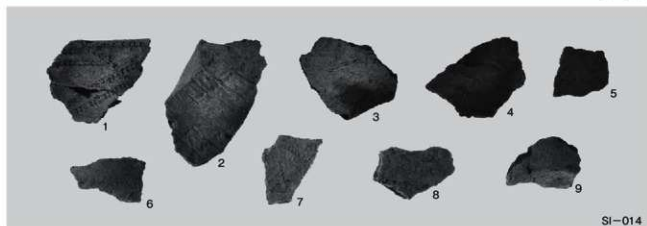
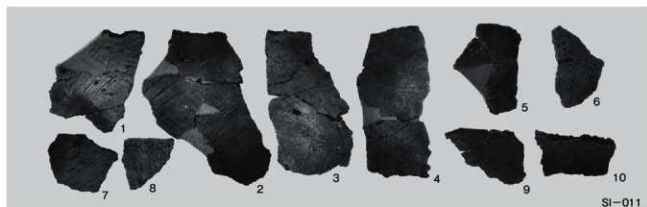
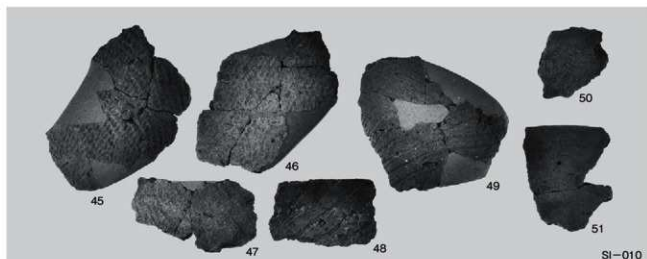
SI-008



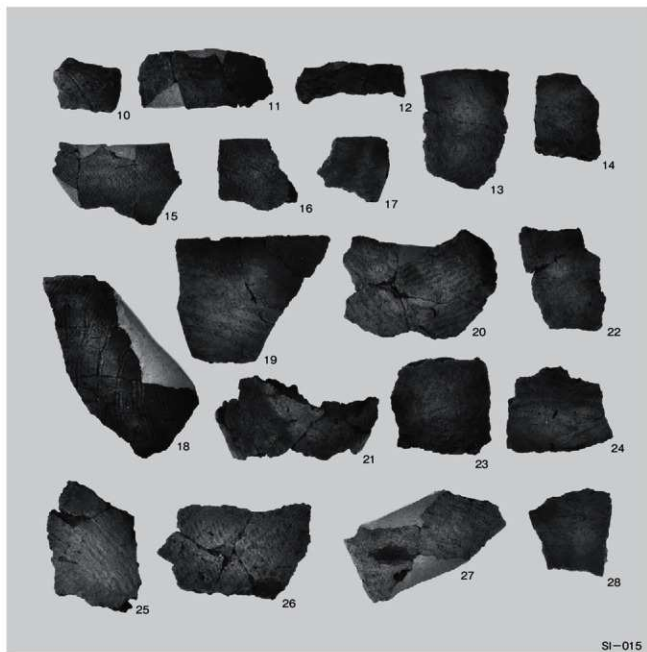




SI-010







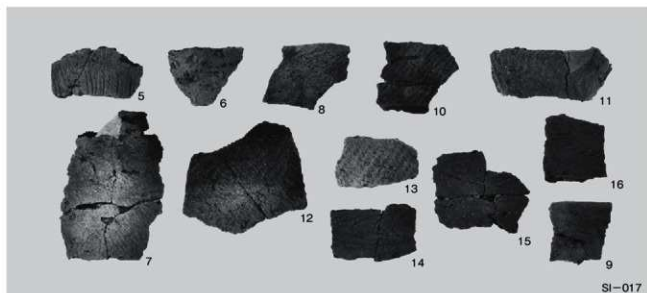
SI-015

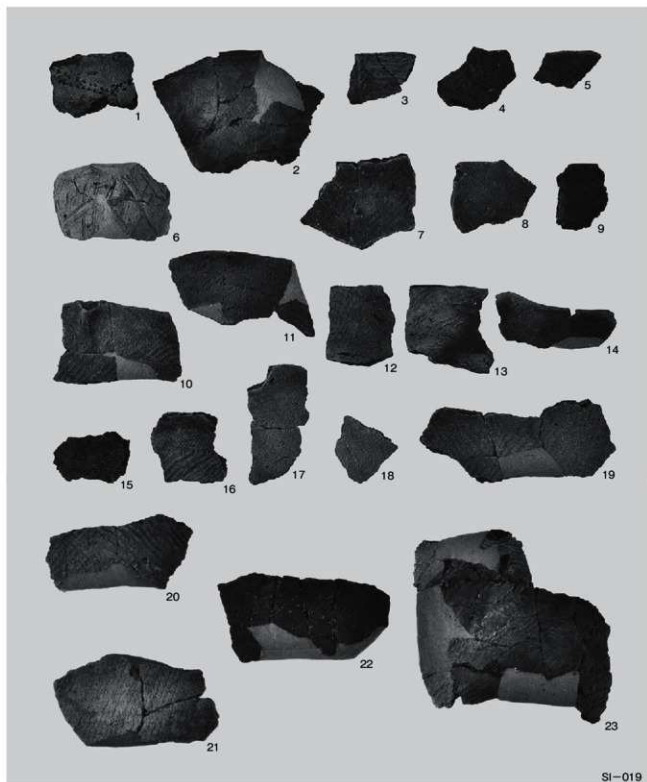


SI-016

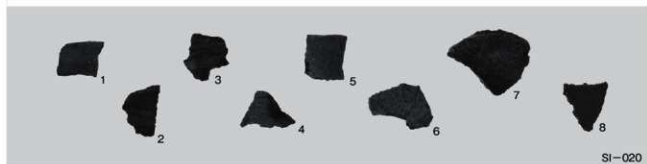


SI-017

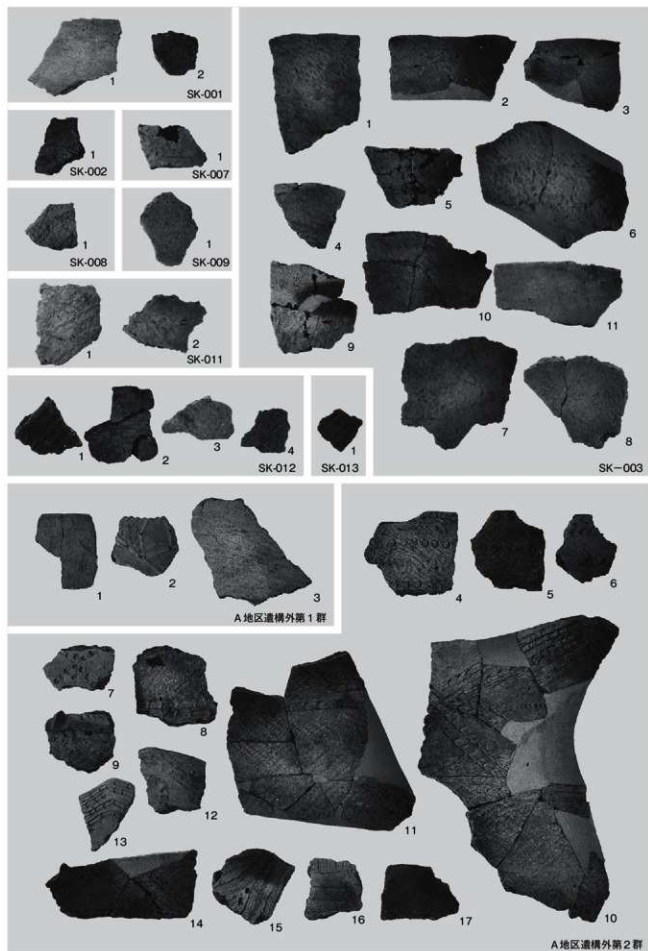


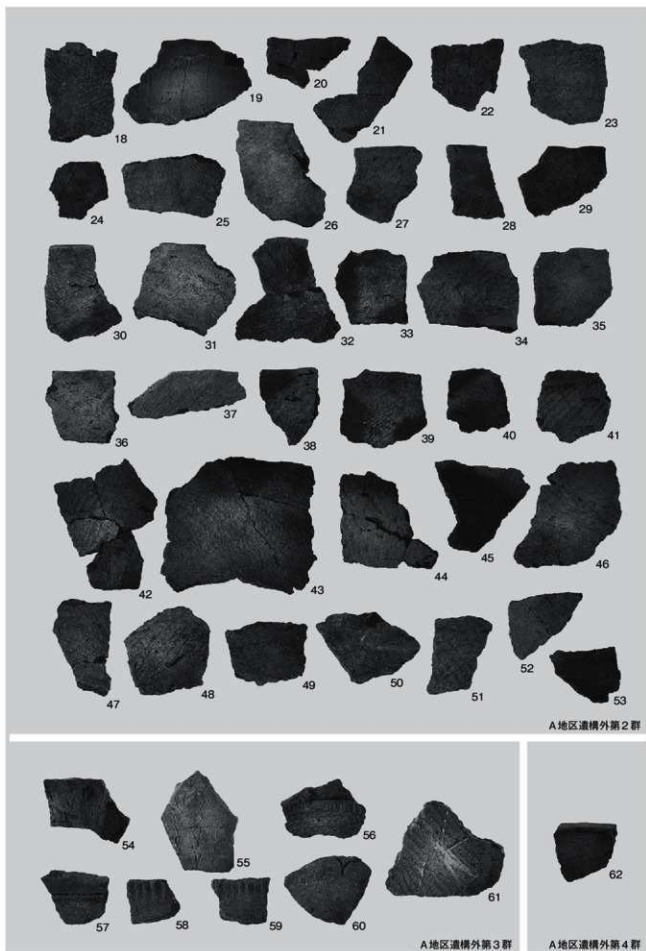


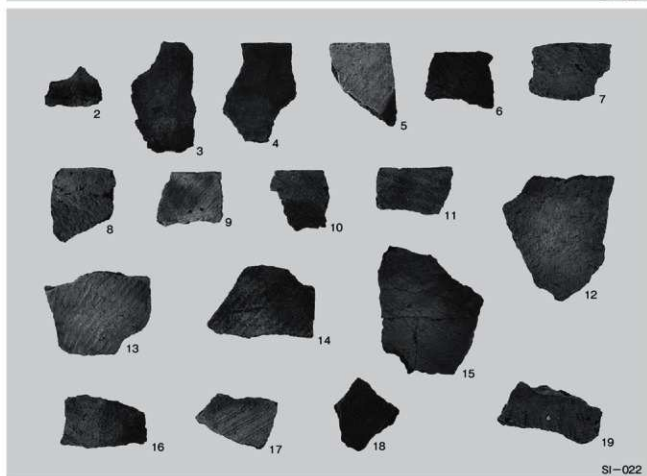
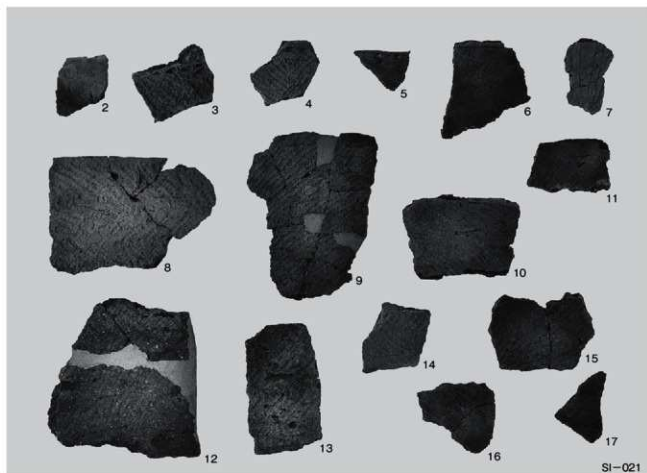
SI-019

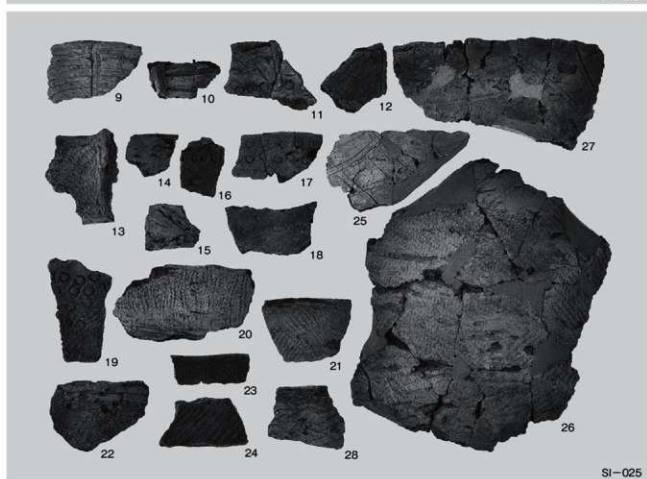
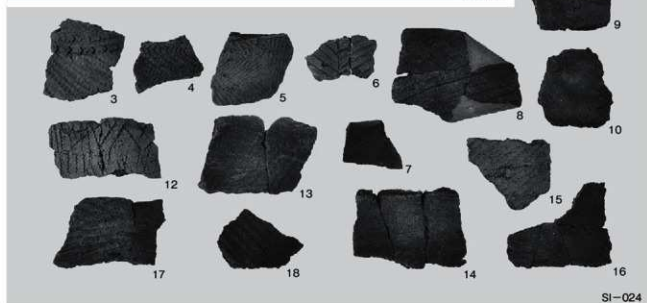
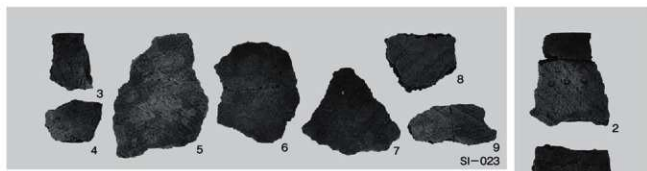


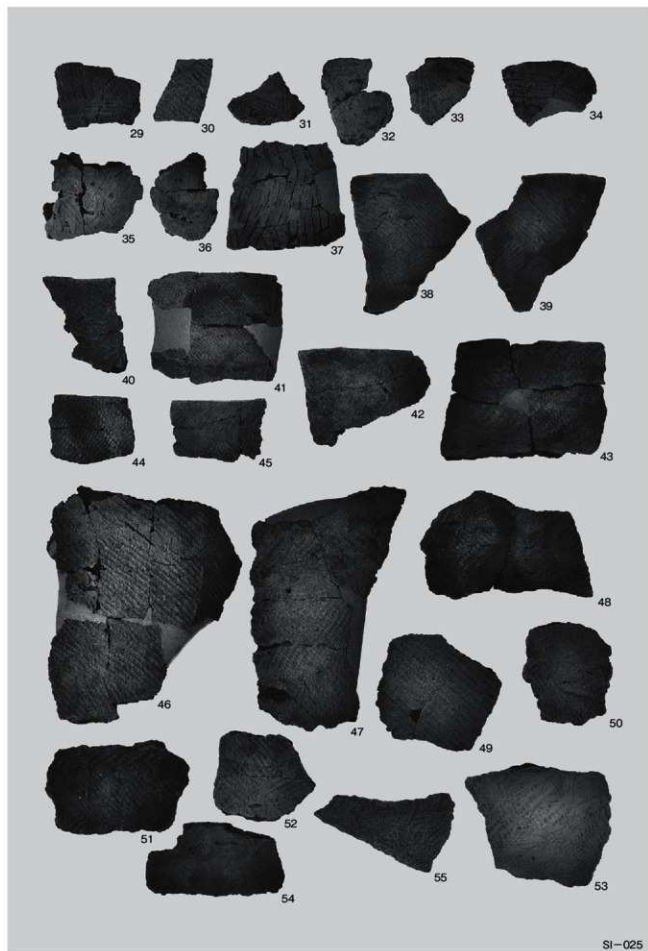
SI-020





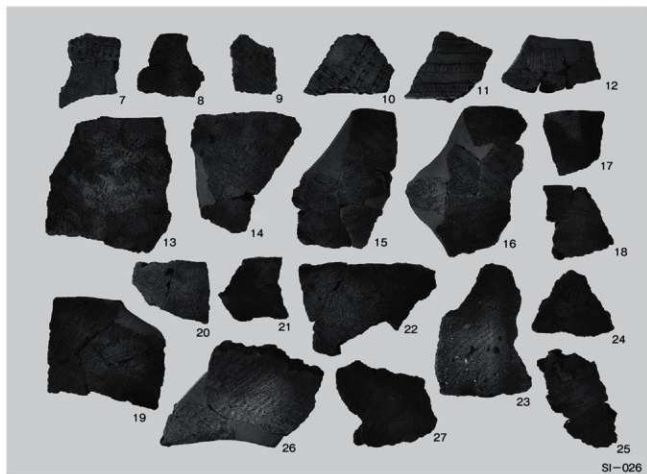
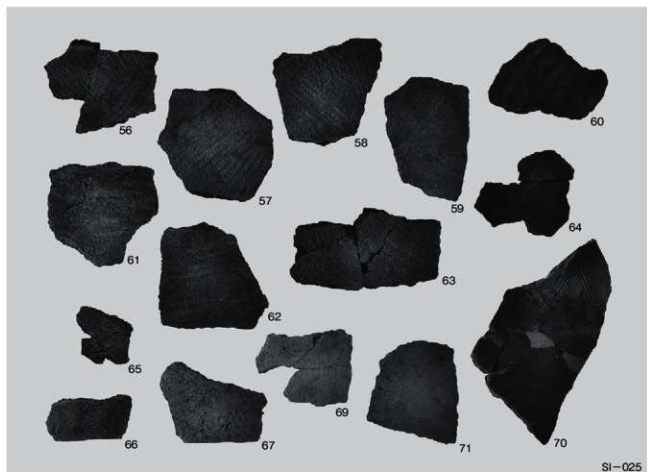


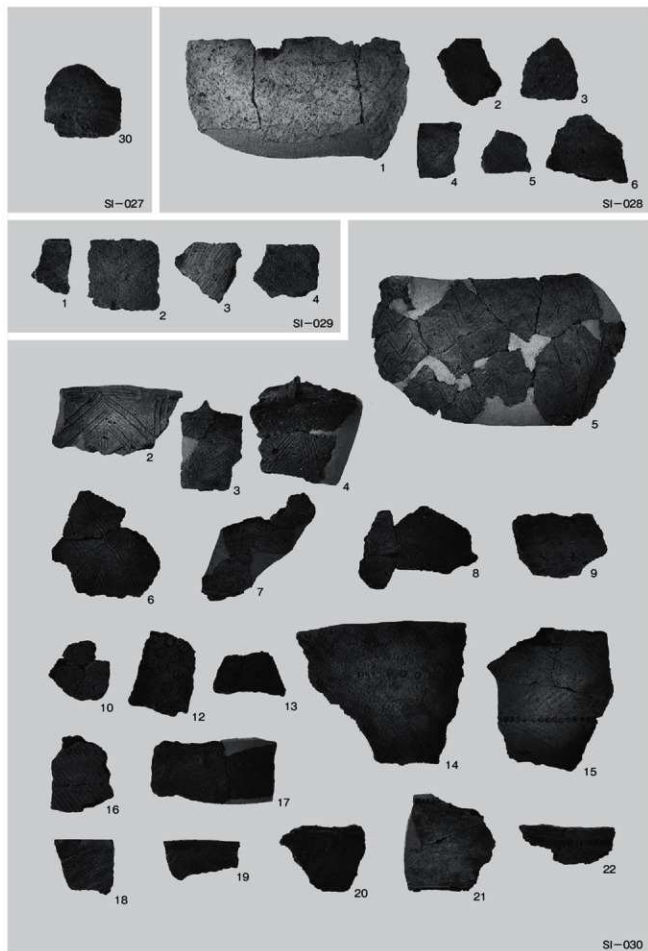


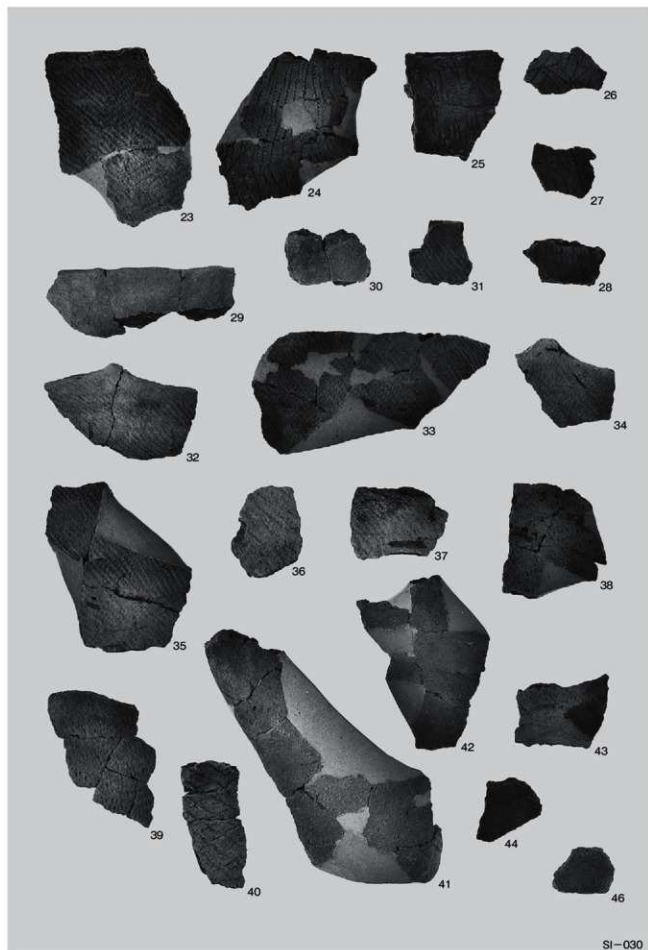


SI-025

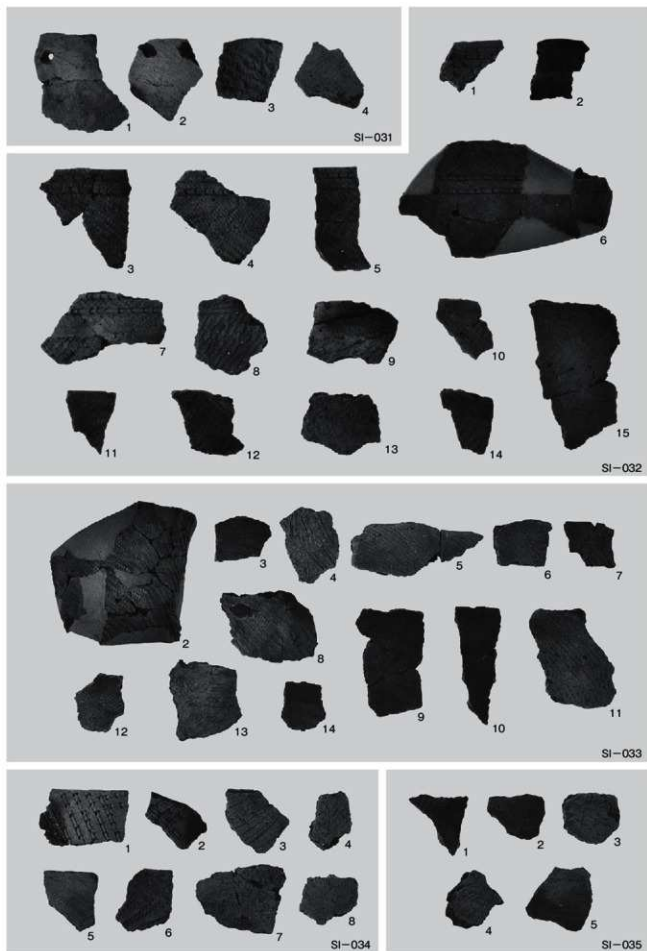


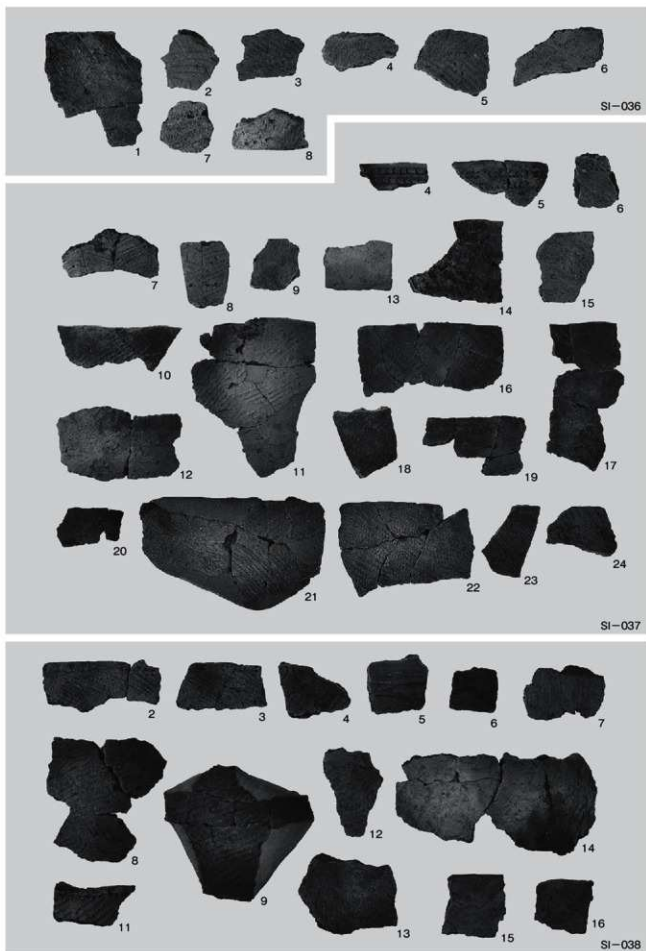


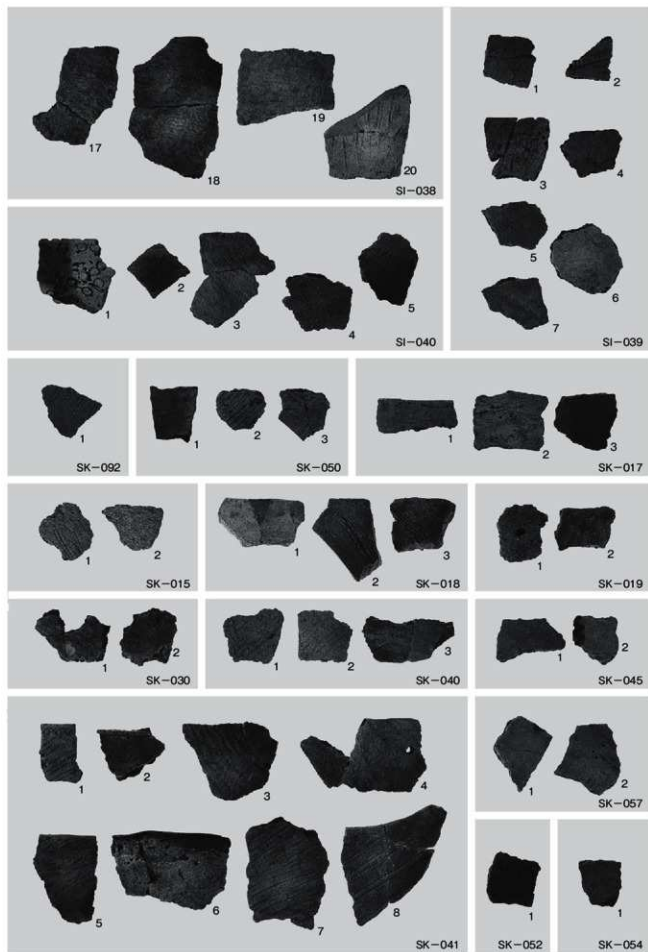


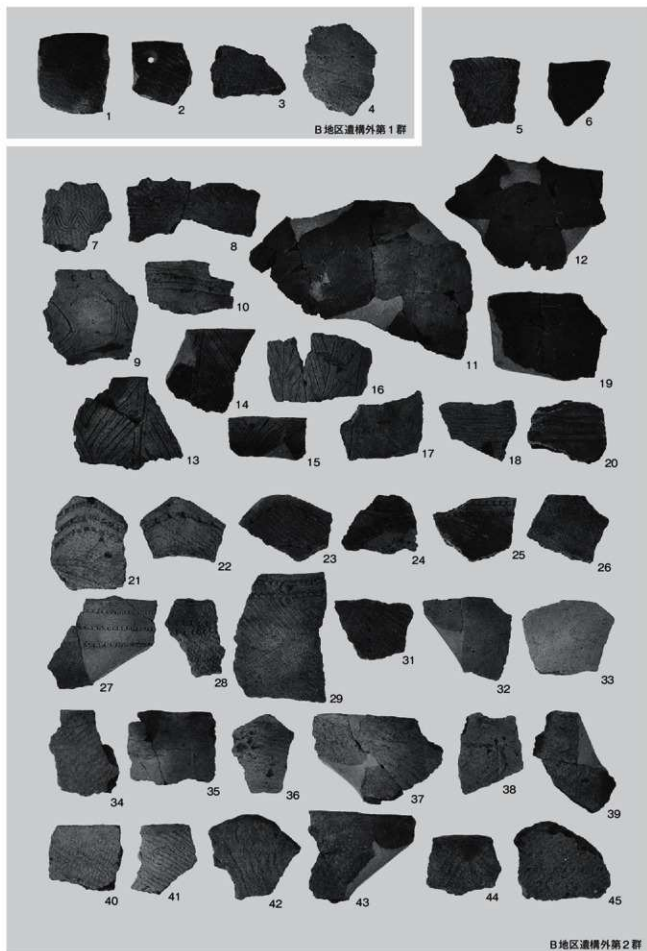


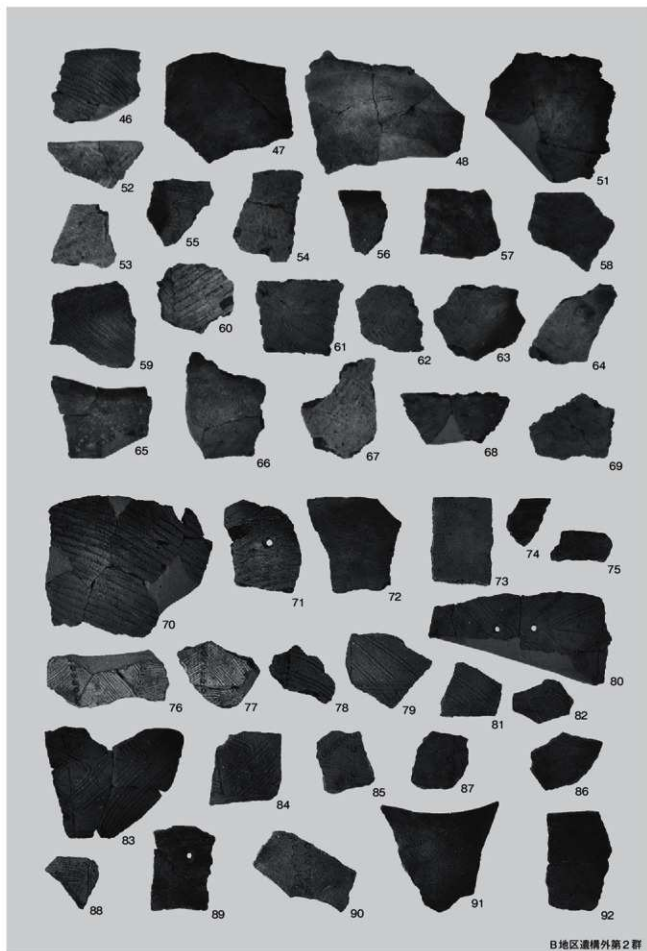
SI-030





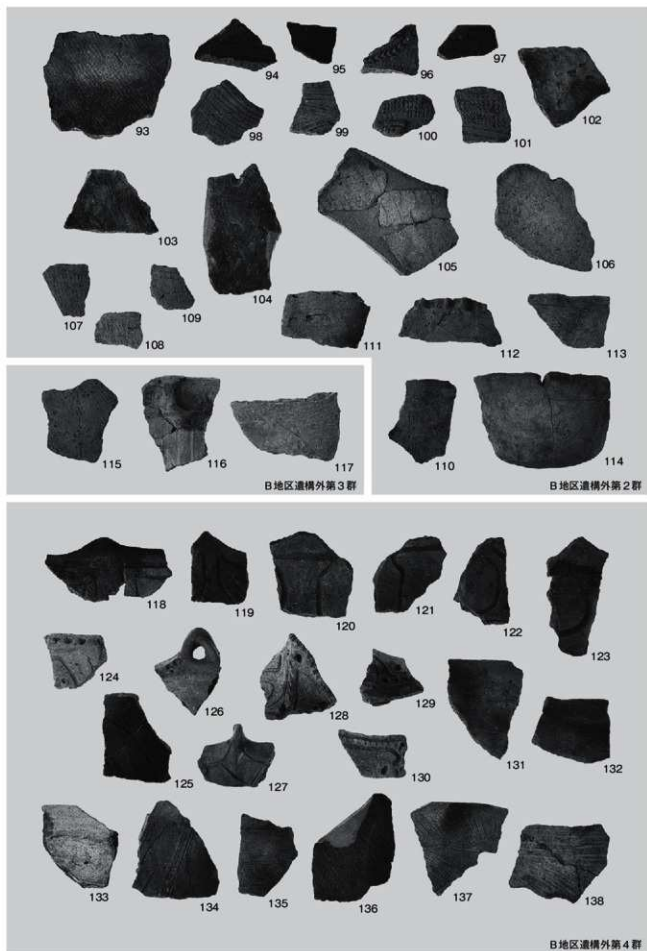


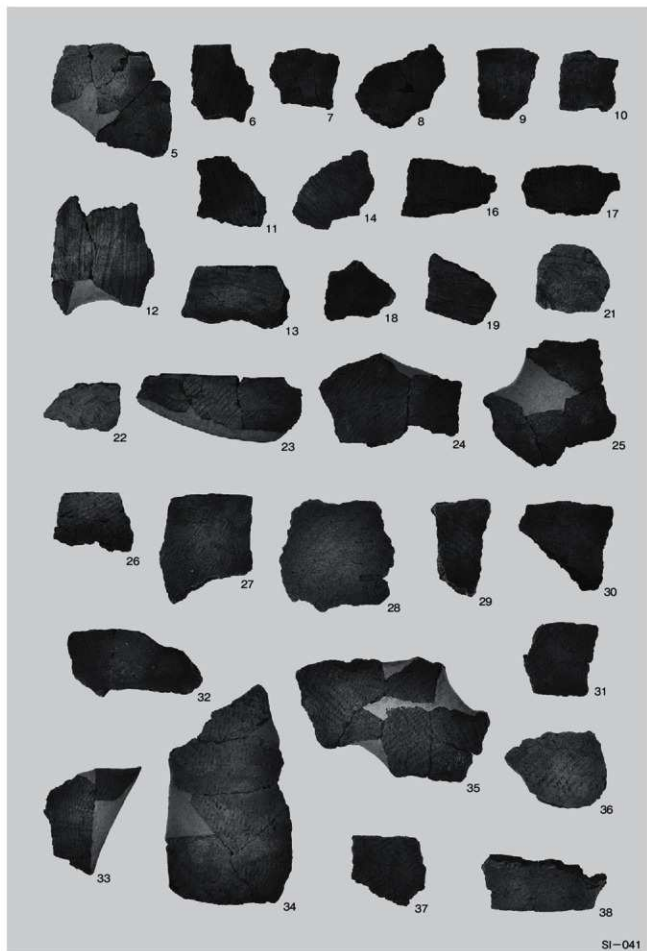




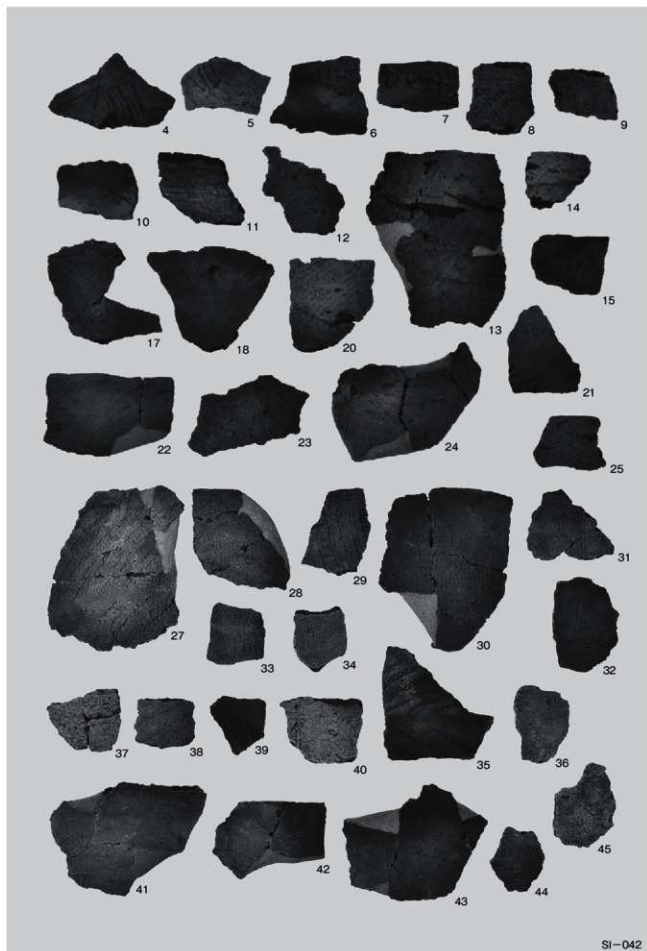
B地区遺構外第2群



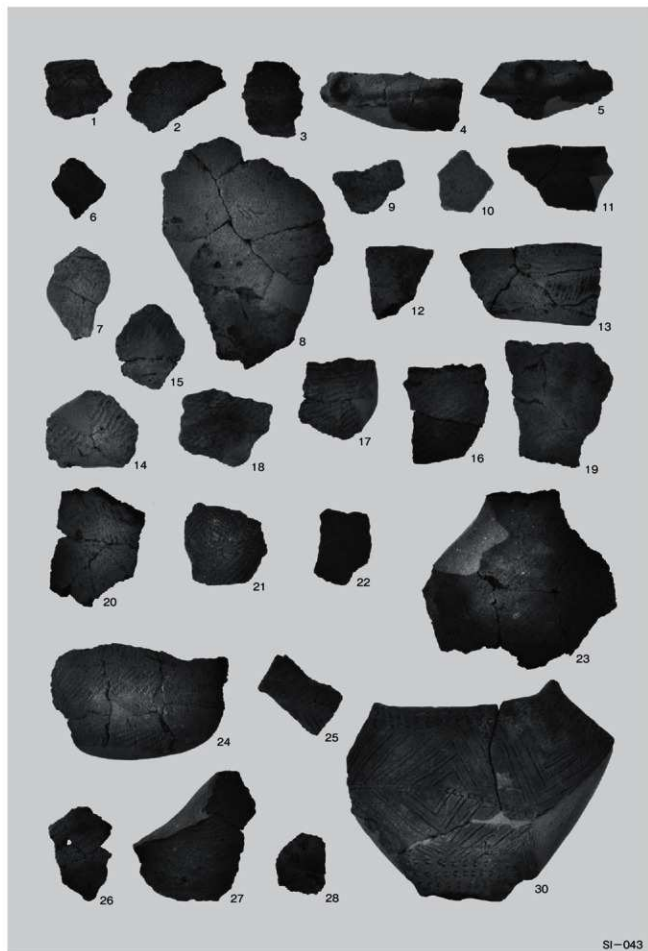




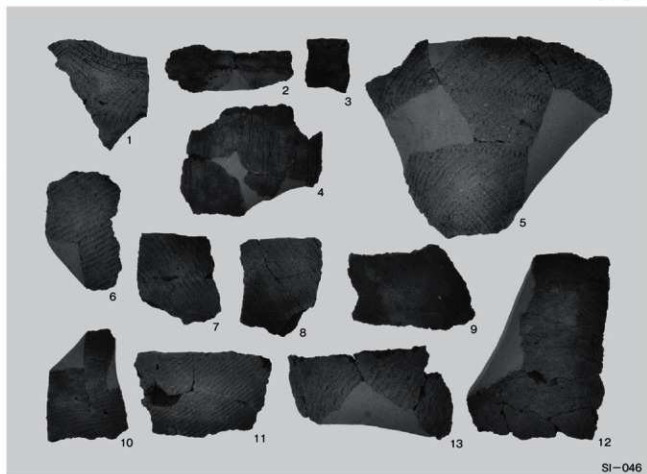
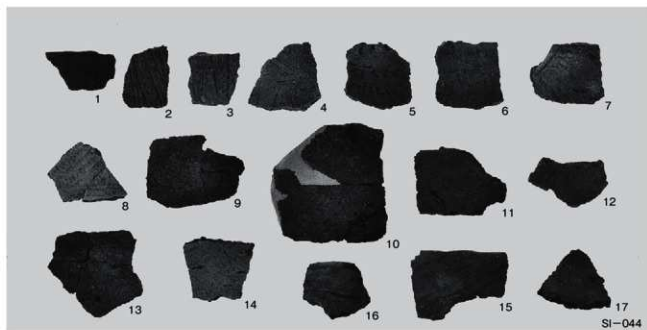
SI-041

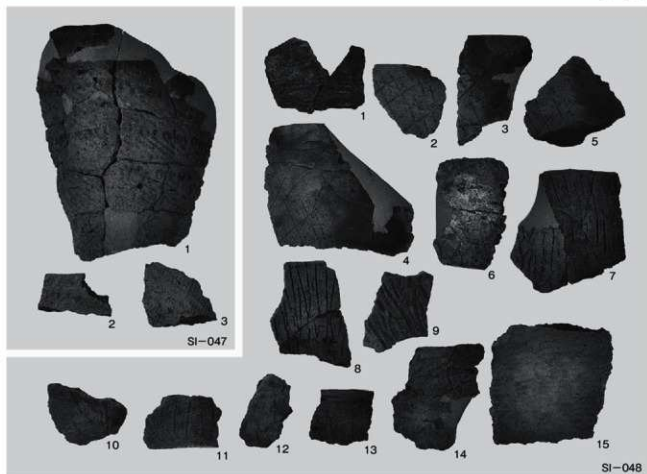
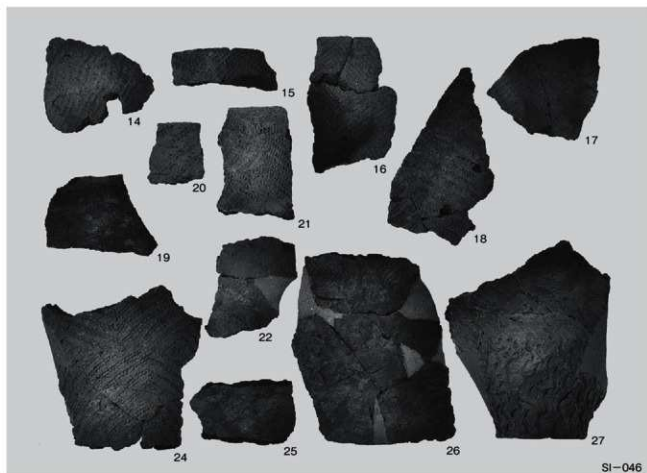


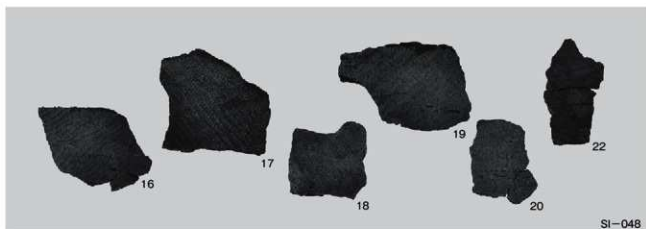
SI-042

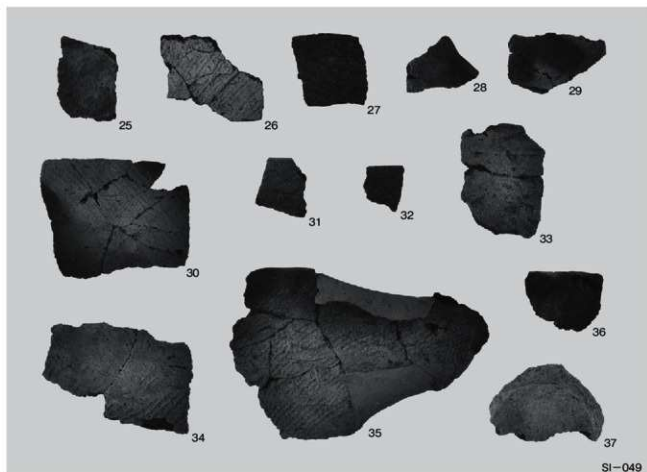


SI-043

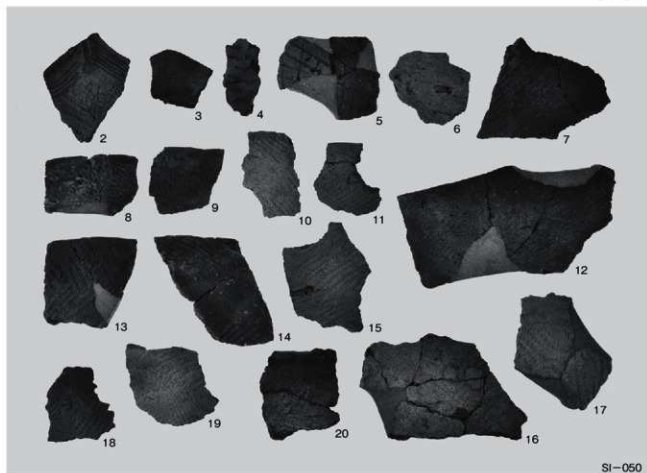






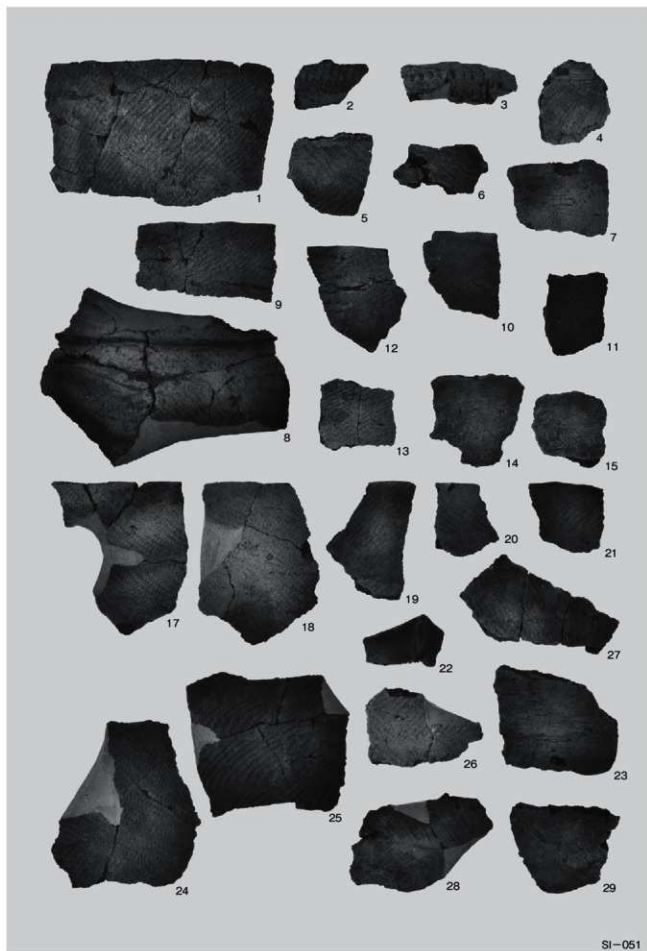


SI-049

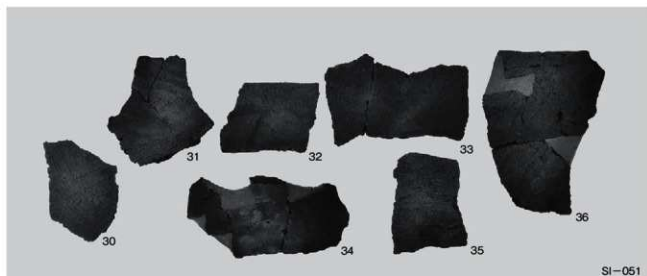


SI-050

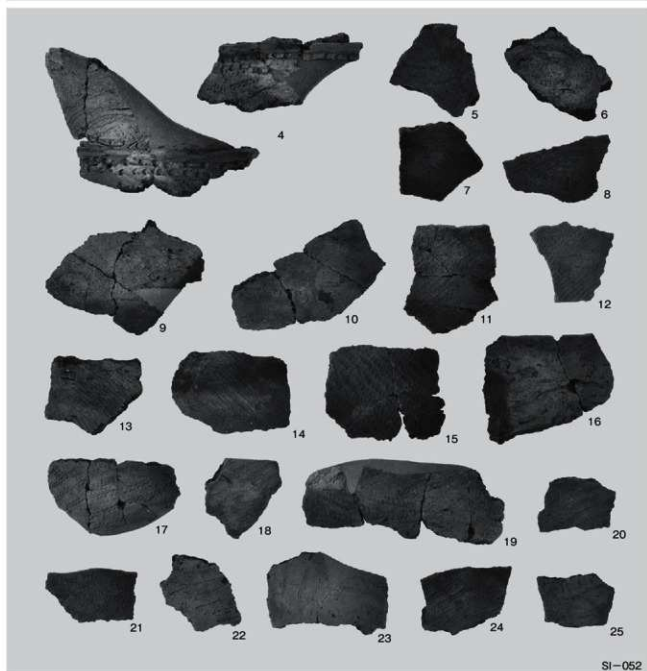




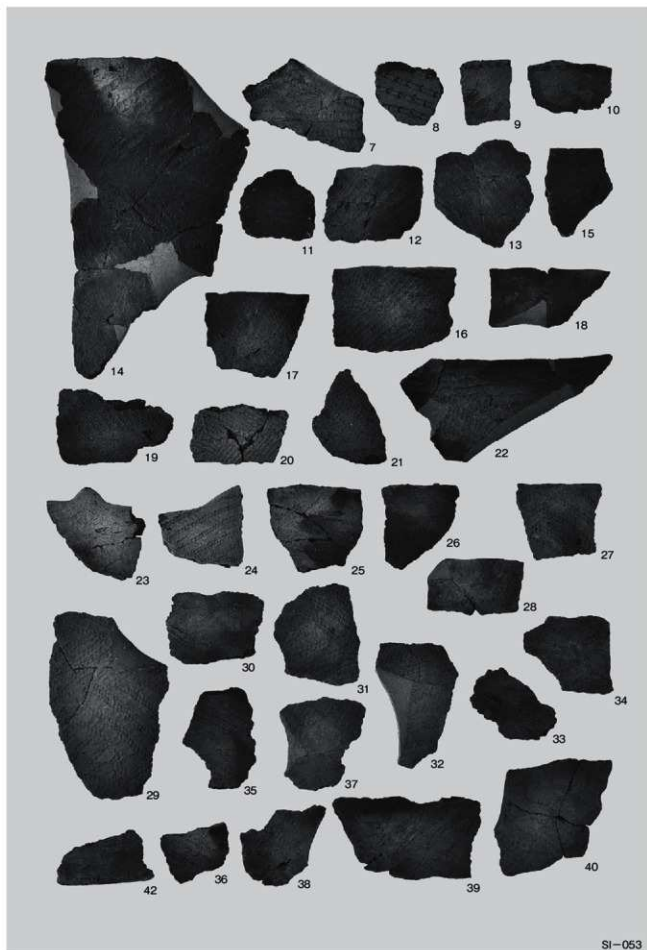
SI-051

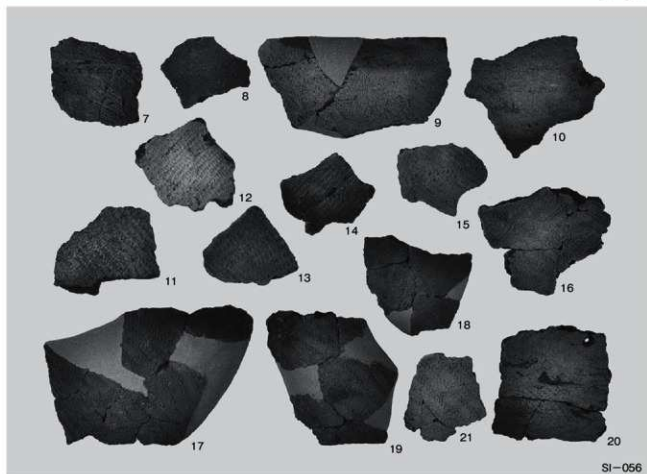
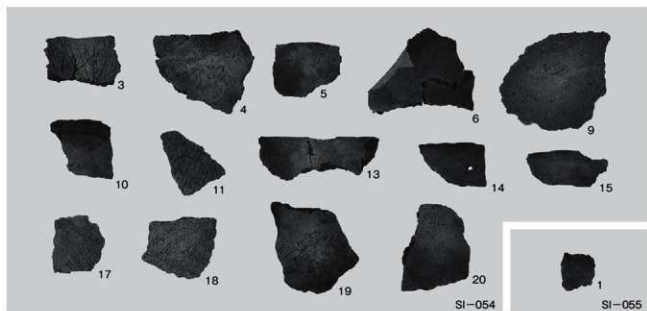


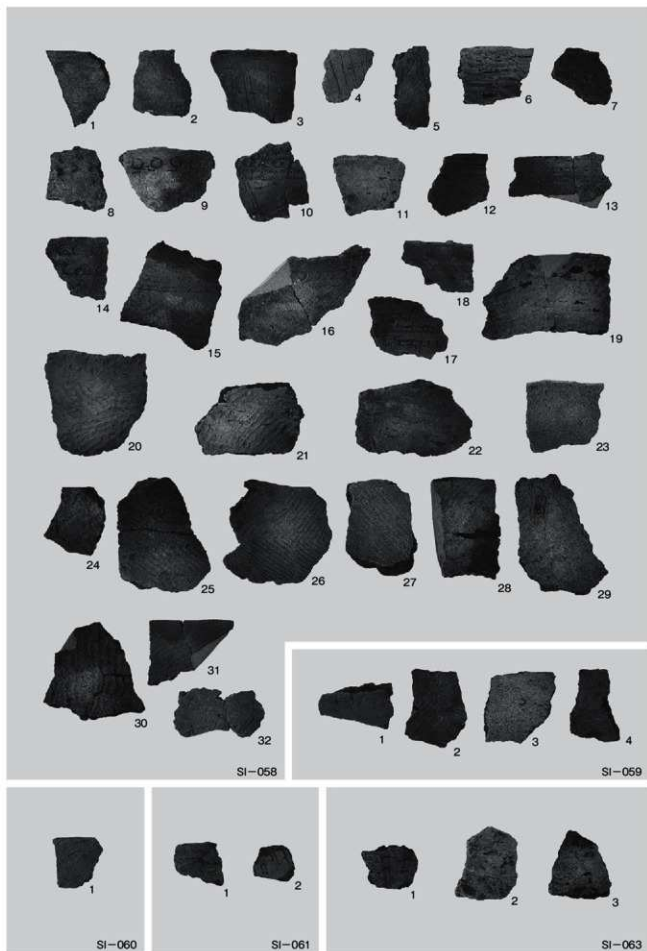
SI-051

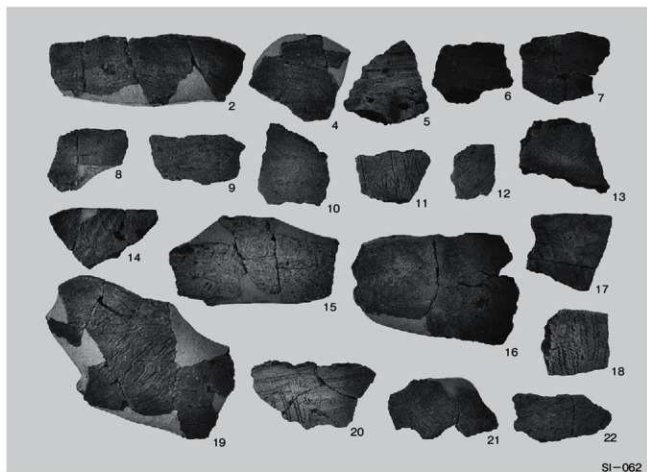


SI-052

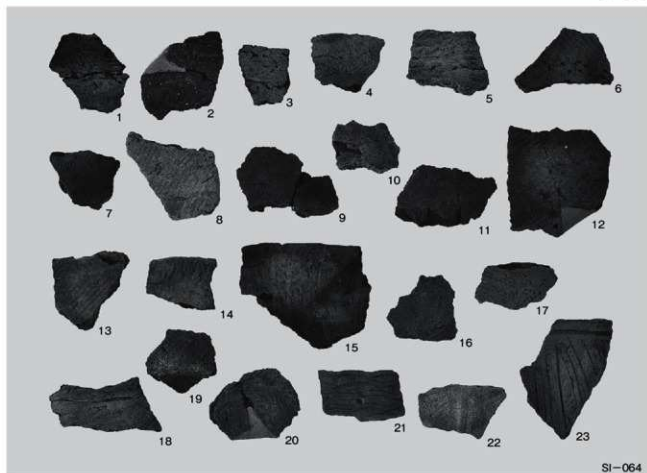




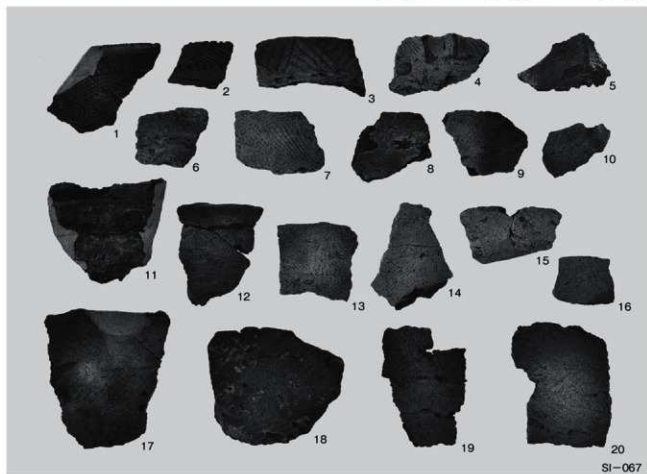
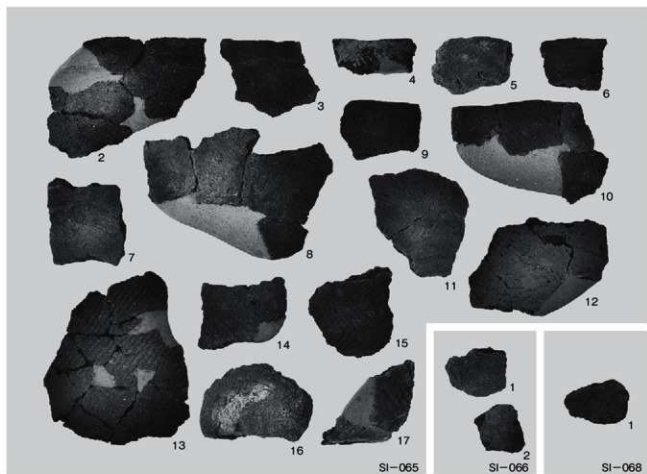


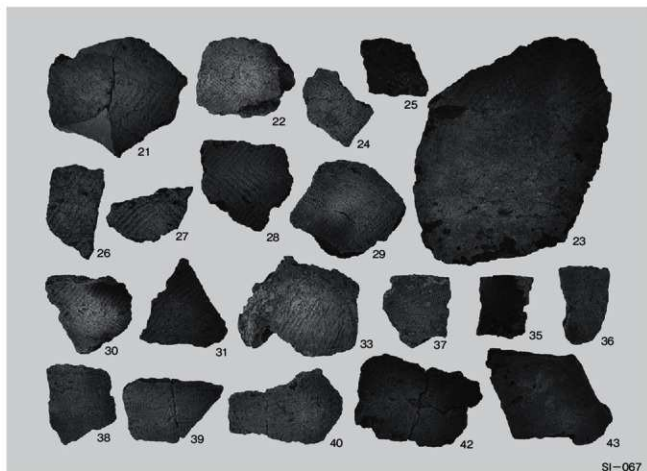


SI-062



SI-064

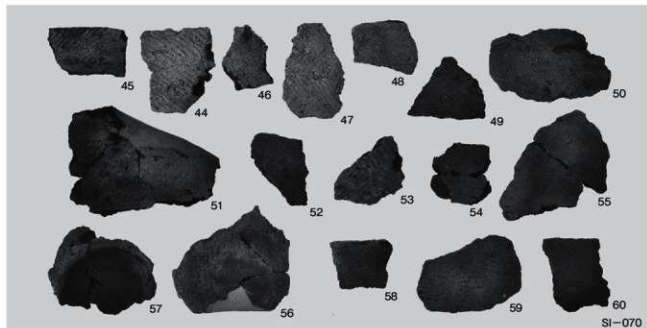




SI-067

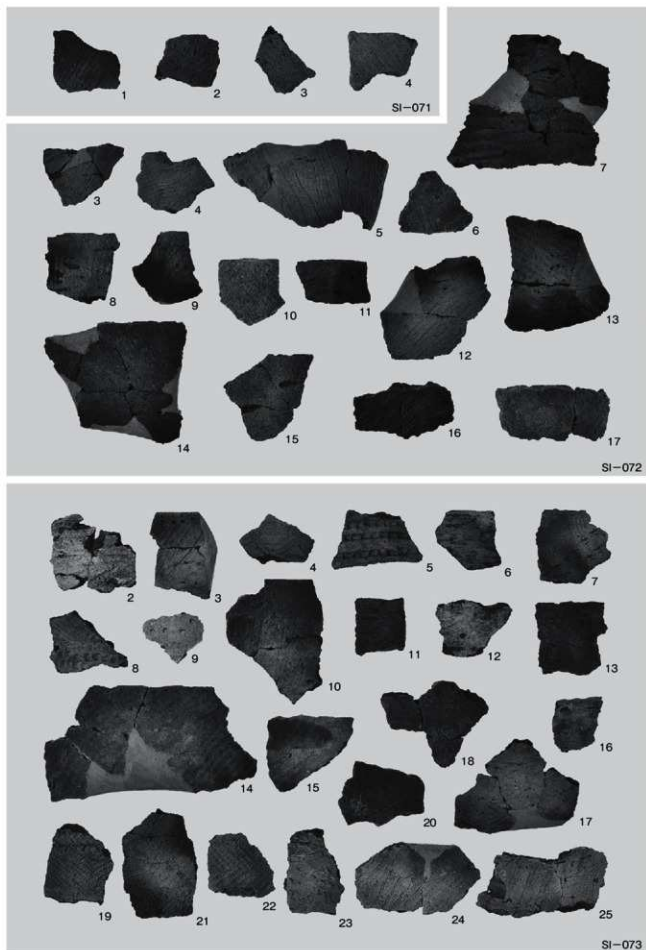


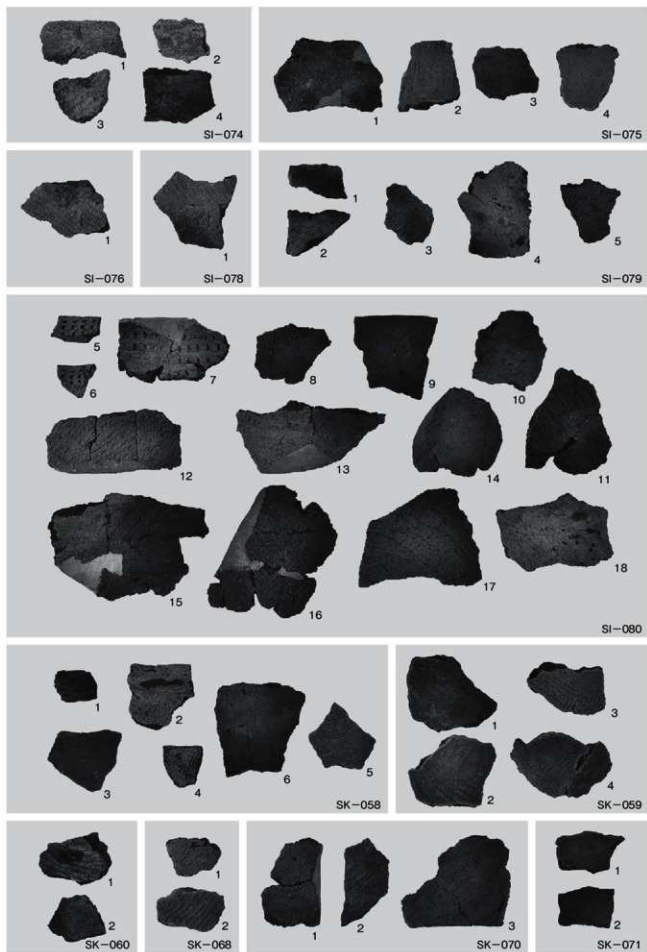
SI-069

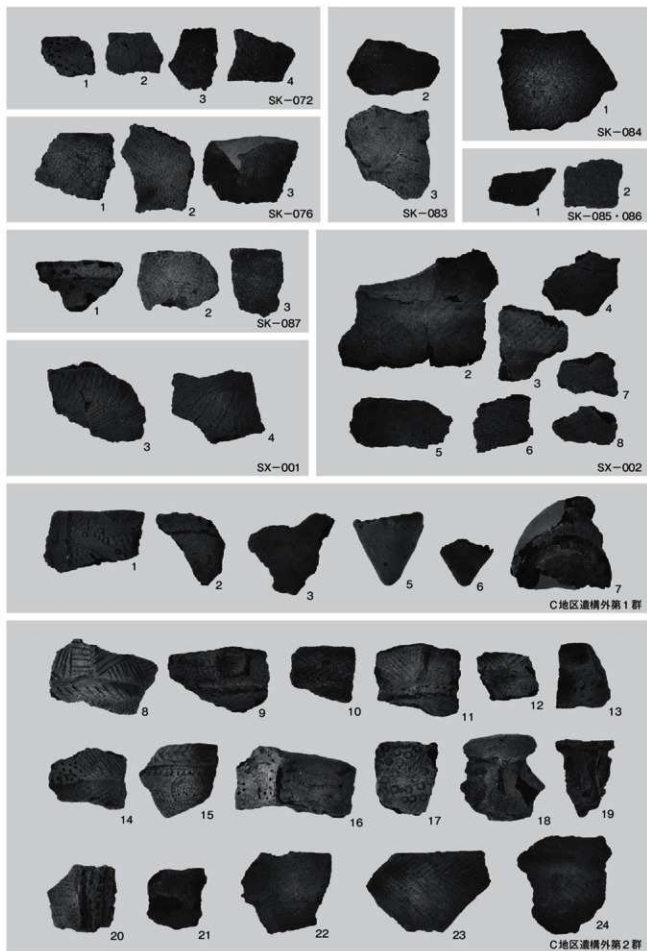


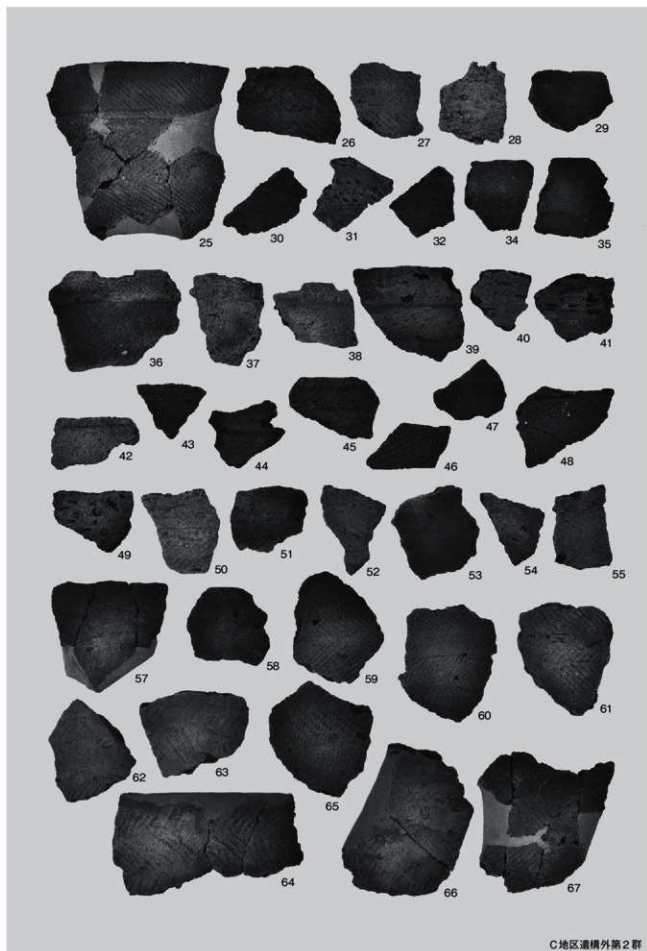
SI-070



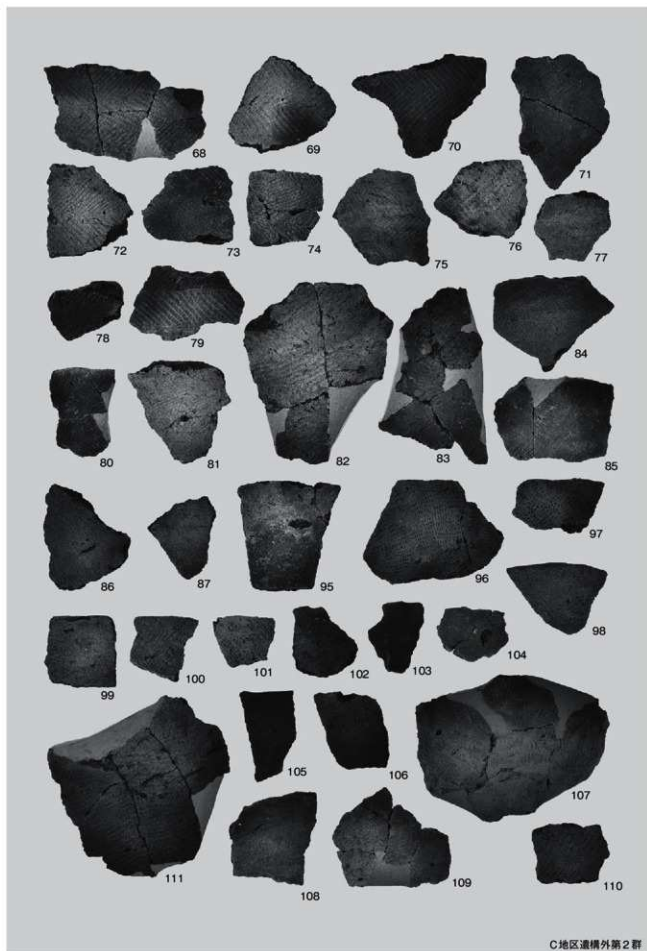


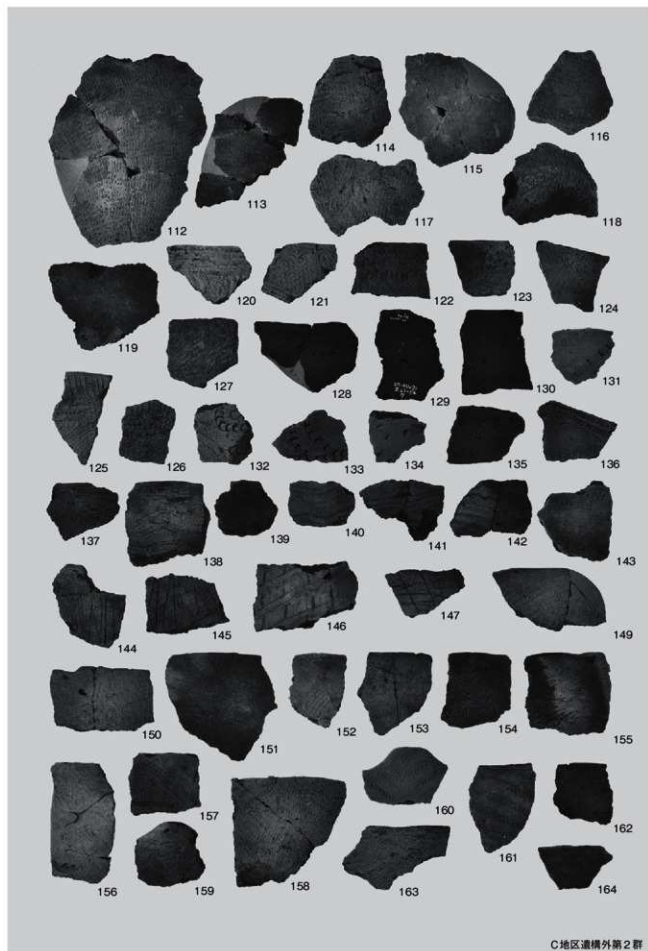


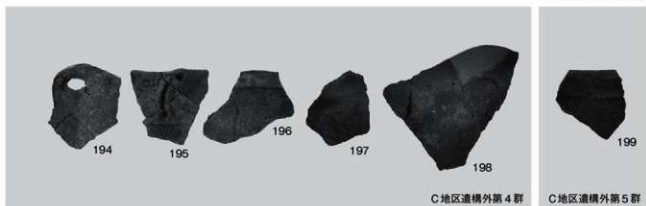
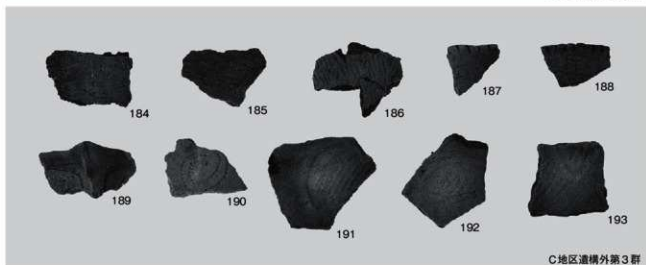
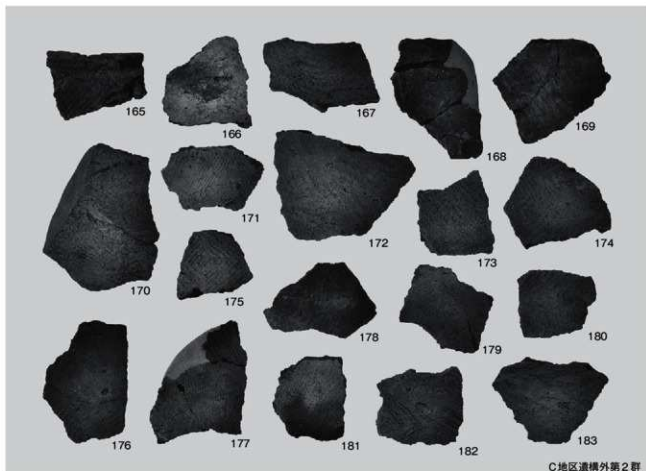




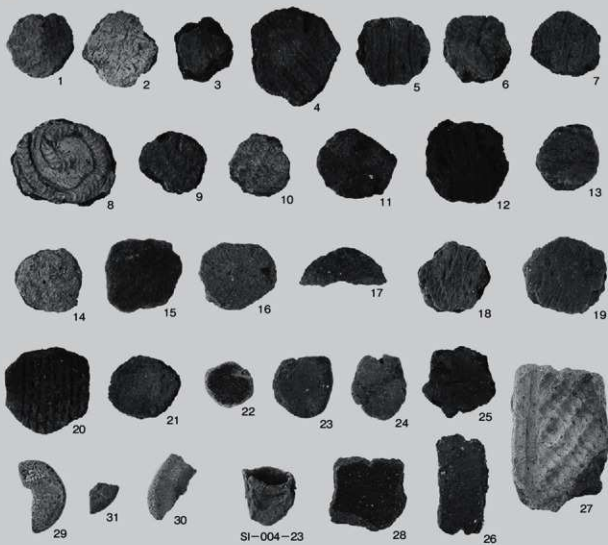
C地区遺構外第2群







土製品



石製品類



軽石製品

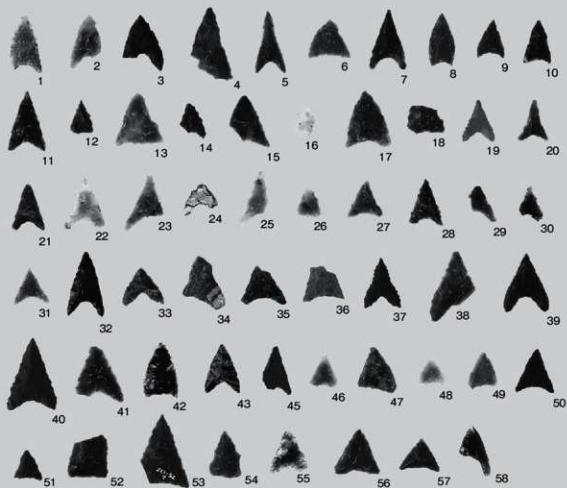


貝刃

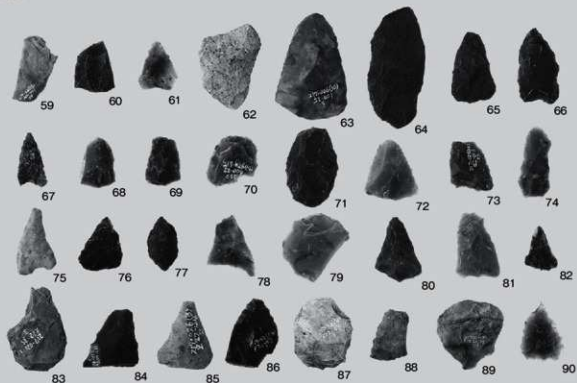




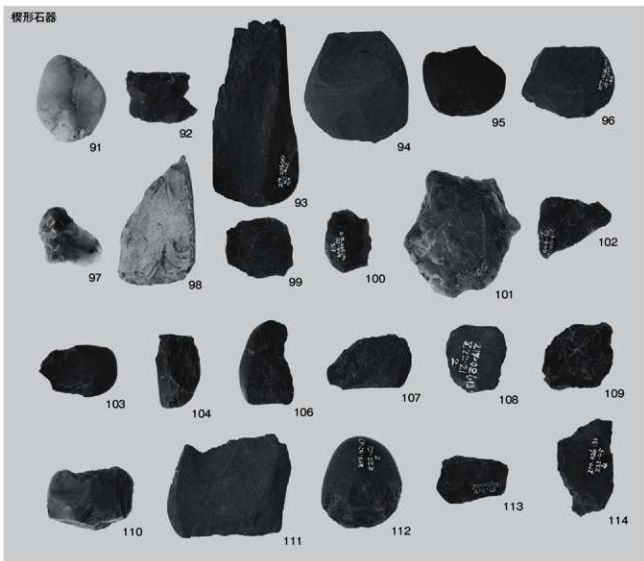
石鏃



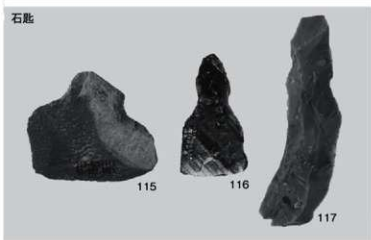
石鏃未成品



楔形石器



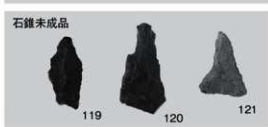
石匙



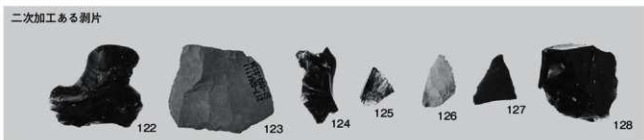
石錐



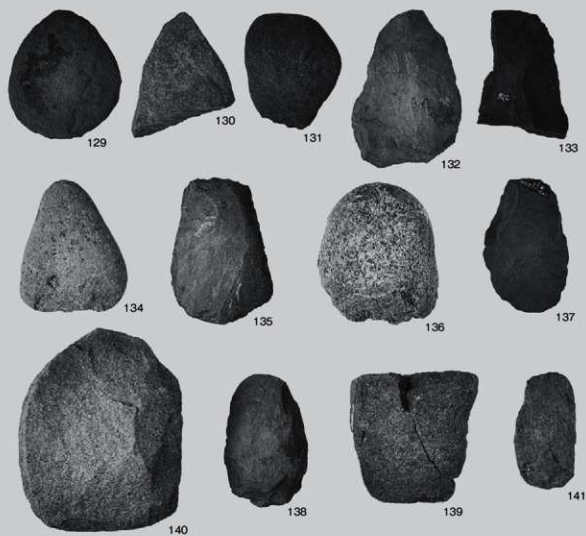
石錐未成品



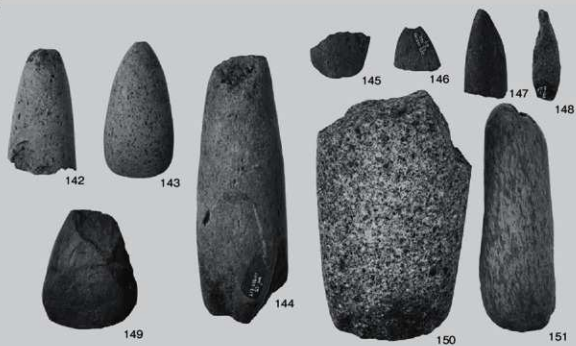
二次加工ある剥片



打製石斧



磨製石斧



磨製石斧



152



153



154



155



156



157



158



159



160



161



162



163



164



166



165



167



168



169

局部磨製石斧



170

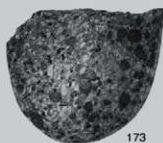
磨石類



171



172



173



174



175



176



177



178



179



180

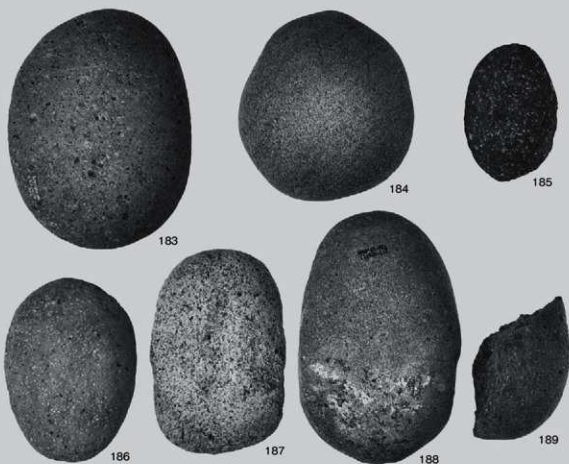


181

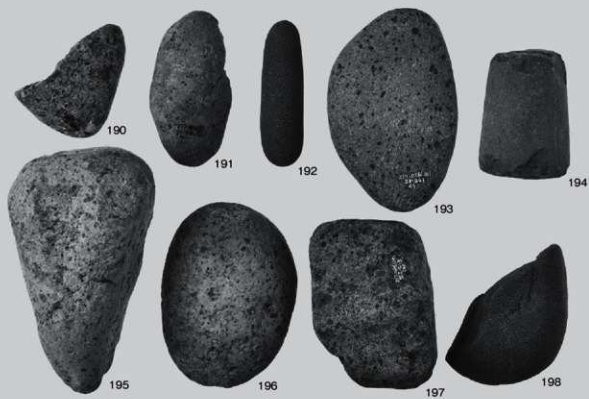


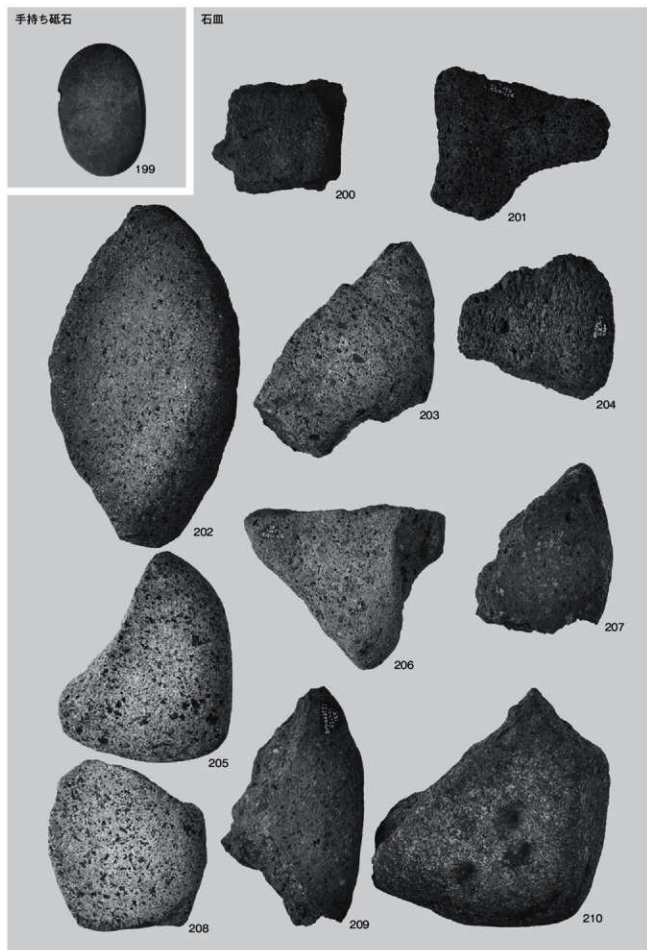
182

磨石類

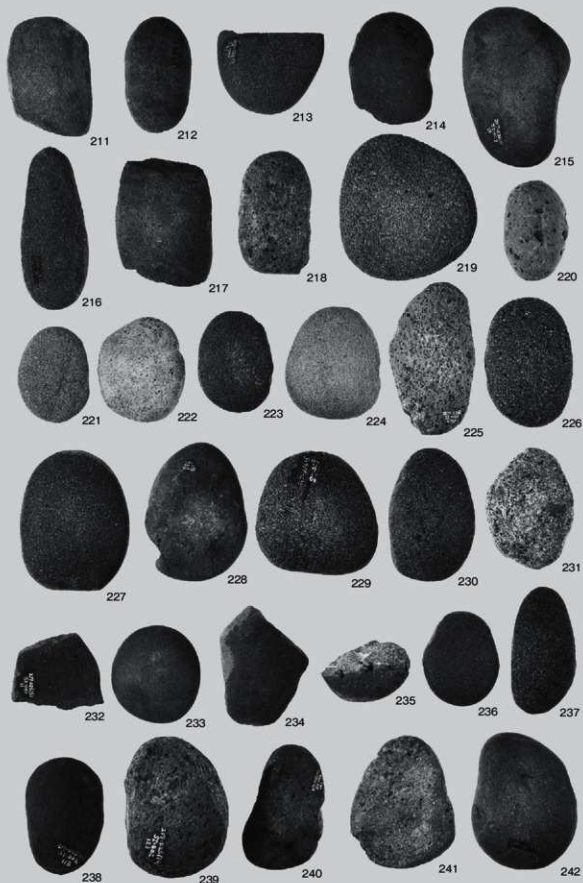


敲石



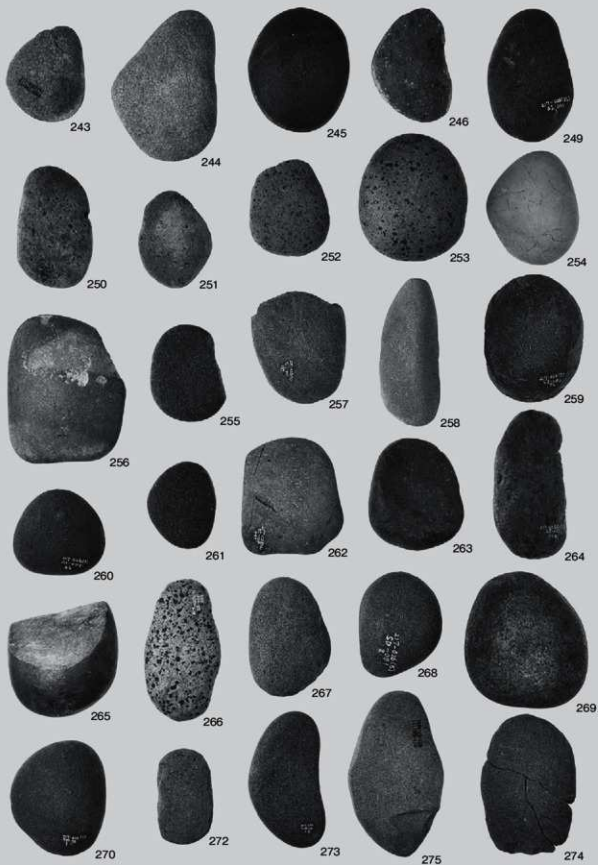


側面調整礫





側面調整礫



## 報 告 書 抄 録

ふりがな	かしわはくぶひがしちくまいぞうぶんかざいはくつちようさほうこくしょ							
書 名	柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書							
副 書 名	柏市富士見遺跡 縄文時代以降編1							
巻 次	6							
シ リ ーズ 名	千葉県教育振興財団調査報告							
シ リ ーズ 番 号	第728集							
編 著 者 名	大野康男・倉内郁子・橋本勝雄・山口典子							
編 集 機 関	公益財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター							
所 在 地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL.043-424-4848							
発 行 年 月 日	西暦2014年3月25日							
ふりがな 所 収 遺 跡 名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
富士見遺跡 A～C地区	千葉県柏市船戸字 富士見、小若田字立 山ほか	12217	026	35度 54分 50秒 (世界測地系)	139度 57分 12秒	20000401 ～ 20110204	28,045㎡ (上層)	柏北部東地区土地区画 整理事業に伴う埋蔵文 化財調査
所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
富士見遺跡 A～C地区	集落跡 包蔵地	縄文時代	堅穴住居 80軒 陥穴 13基 土坑 87基 土器集中地点 2か所 地点貝塚 1か所	縄文土器、土製品（土製円板・ 土器片鏢・珧状耳飾）、石製品 （珧状耳飾・垂飾品・玉・軽石 製品）、貝刃、石器（石鏢・石 鏃未成品・楔形石器・石匙・石 鏟・石鏟未成品・打製石斧・磨 製石斧・磨石類・敲石・石皿・ 側面調整礫など）	線刻のある特殊な軽石 製品を出土した。 また、側面調整礫とし た砥石様の石器がまと まって出土し、その用途 が注目される。			
要 約	<p>富士見遺跡は、古常陸川湾奥部の柏・我孫子低地に半島状に突き出した標高13m～18m台地上に立地する。縄文時代前期を主体とする集落を検出した胸形遺跡が同じ台地に隣接している。</p> <p>富士見遺跡からも縄文時代前期を主体とする集落が検出され、A～Eの5つのままとりに分けることができる。今回報告したA～C地区は遺跡の南半部にあたり、遺構数のもっとも多かったC地区は東側の胸形遺跡の集落とながっている。C地区では遺構内貝層のほか地点貝塚も検出し、胸形遺跡でもやはり同時期の遺構内貝層を検出している。</p> <p>このほか、当該期の土器とともに石器類が多数出土し、石鏢や石鏃などの未成品や割片などを出土した石器製作を行っていたと考えられる遺構も検出されて、この時期のまとまった資料として貴重な成果である。</p>							

千葉県教育振興財団調査報告第728集

柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書 6

－ 柏市富士見遺跡 －  
縄文時代以降編 1

---

平成26年 3月25日発行

編 集	公益財団法人	千葉県教育振興財団 文化財センター
発 行	独立行政法人	都市再生機構 首都圏ニュータウン本部 東京都新宿区西新宿6-5-1
	公益財団法人	千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡809番地の2
印 刷	株式会社	弘 文 社 市川市市川南2-7-2

---